公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（18）

東九州自動車道建設（鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

天神段遺跡3

（曽於郡大崎町）

縄文時代早期編

第１分冊

2018年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



天神段遺跡遠景（平成 25 年　撮影）



縄文時代早期土器

序　文

この報告書は，東九州自動車道（鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間）の建設に伴って平成 19 年度から平成 25 年度にかけて実施した大崎町に所在する天神段遺跡の発掘調査の記録です。

天神段遺跡では，旧石器時代，縄文時代早期・前期・晩期，弥生時代，古代，中世の遺構・遺物が大量に発見され，縄文時代前期以降についてはすでに報告書として刊行したところです。中でも，中世の土坑墓から出土した陶磁器や滑石製石鍋などの資料は，平成 28 年に県の有形文化財＜考古資料＞に指定されるなど，その成果が注目されています。

本報告書では，縄文時代早期の調査成果を掲載しています。特に，この時期の集石遺構が 313 基検出されたことは特筆されます。その他にも竪穴住居状遺構，連穴土坑，落とし穴，土坑といった数多くの遺構が発見され，遺構に伴う遺物も良好な状態で出土しました。また，現在南九州で認識されている縄文時代早期の土器型式の多くが本遺跡で確認されました。縄文時代早期の長い期間（約 5,500 年間），天神段遺跡に住み続けた人々の生活の一端を解明する上で注目されます。

本報告書が，県民の皆さまをはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にあたり御協力いただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，大崎町教育委員会，各関係機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 30 年３月

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　　前迫亮一

報 告 書 抄 録

ふりがな	てんじんだんいせき　さん　じょうもんじだいそうきへん
書名	天神段遺跡３　縄文時代早期編
副書名	東九州自動車道建設（鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第18集
編集者名	立神倫史　眞邉彩　倉元良文　大坪啓子　森えりこ　岩澤和徳
編集機関	公益財団法人 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576
発行年月日	西暦2018年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
天神段遺跡	鹿児島県 曽於郡 大崎町	46468	468-62	31° 30' 18"	130° 55' 48"	2007.05.16 ～2008.03.19 2008.05.22 ～2009.03.19 2009.05.08 ～2010.03.19 2010.05.10 ～2011.03.11 2011.05.09 ～2012.03.09 2012.05.08 ～2013.03.08 2013.04.22 ～2013.10.25	19,042	東九州自動車道建設（鹿屋串良ＪＣＴ間～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天神段遺跡	集落	縄文時代早期前半（Ⅶ層） 縄文時代早期後半（Ⅵ層）	竪穴住居状遺構９基 落とし穴５基 連穴土坑32基 集石遺構313基 土坑123基 土器埋設遺構２基 石器埋設遺構１基	岩本式土器，前平式土器 志風頭式土器，加栗山式土器 吉田式土器，石坂式土器 石鏃，石斧，礫器，磨石 石皿，軽石製品，炭化種子 炭化鱗茎 下剥峯式土器，辻タイプ 桑ノ丸式土器，押型文土器 中原式土器 手向山式土器，妙見・天道ヶ尾式土器，平栫式土器 塞ノ神式土器，苦浜式土器 条痕文系土器 耳栓状土製品，円盤状土製品，石鏃，石匙，楔形石器 石斧，磨石，石皿，礫器，異形石器，軽石製品	本書掲載分のみ記載

遺跡の概要	本遺跡は旧石器時代～近世（古墳時代を除く）の複合遺跡で，各時代とも貴重な遺構や遺物が確認されている。 縄文時代早期の遺構及び遺物が確認された。特に，313基検出された集石遺構は，１遺跡としては県内最大数である。また，竪穴住居状遺構や土坑等の遺構も多く検出され，当時の集落の様相を解明する良好な資料となった。さらに，土器に関しては南九州における早期の型式の多くが確認されており注目される。中でも平栫式土器及び塞ノ神式土器が多量に出土した。



天神段遺跡位置図（S＝1/25,000）

例　言

1　本編は，東九州自動車道建設（鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う天神段遺跡発掘調査報告書「天神段遺跡３　縄文時代早期編」である。

2　本遺跡は鹿児島県曽於郡大崎町野方と一部，志布志市有明町に所在する。

3　発掘調査事業は平成 19 年度から平成 24 年度までは，国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という。）が実施した。

平成 25 年度からは，国土交通省九州地方整備局から鹿児島県が受託し，県教委の監理のもと，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）が実施した。

⑴　発掘調査事業のうち，本調査は平成 24 年度までは県埋文センターが，平成 25 年度は埋文調査センターが実施し，全ての本調査を終了した。

⑵　発掘調査事業のうち，整理・報告書作成作業は平成 22 年度から平成 24 年度までは県埋文センターが，平成 25 年度からは埋文調査センターが県教委の監理のもとに実施した。平成 26 年度に「天神段遺跡１　弥生時代～近世編」を，平成 27 年度に「天神段遺跡２　縄文時代前期～晩期編」を刊行した。

本編に係る整理・報告書作成作業は，平成 27 年度から平成 29 年度まで埋文調査センターが実施した。平成 28 年度には，埋文調査センターの整理作業担当者の管理・監督のもと株式会社九州文化財研究所に整理作業の一部の業務を委託した。

4　掲載遺構及び遺物番号は通し番号であり，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

5　遺物注記等で用いた遺跡記号は，「ＴＪ」である。

6　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

7　本編で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

8　本編で使用した方位は，すべて磁北である。

9　本調査における実測図作成及び写真撮影は主として調査担当者が行った。

10　本調査における実測図作成の一部については有限会社ジパング・サーベイ，株式会社埋蔵文化財サポートシステム，新和技術コンサルタント株式会社に委託した。

11　本調査における空中写真の撮影は，ふじた航空写真，有限会社スカイサーベイ九州，九州航空株式会社に委託した。

12　本編に係る掲載遺構図の作成及びレイアウトは，眞邉彩・倉元良文・森えりこが整理作業員の支援を得て行った。

13　本編に係る出土遺物の実測及びトレース・レイアウトは，立神倫史・眞邉彩・大坪啓子が整理作業員の支援を得て行った。

14　出土遺物の写真撮影は，県埋文センター写場にて，埋文調査センターの吉岡康弘が行った。また，遺構写真の選別には埋文調査センターの辻明啓の協力を得た。

15　本編に係る自然科学分析の黒曜石産地推定は有限会社遺物材料研究所，年代測定は株式会社加速器分析研究所及び株式会社パレオ・ラボに，テフラ分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

16　本編の執筆等は次のように分担し，編集は平成 29 年度の担当者全員で行った。

第Ⅰ章　発掘調査の経過	倉元
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境	倉元
第Ⅲ章　調査の方法と層序	倉元
第Ⅳ章　発掘調査の成果	
第１節　縄文時代早期の概要	眞邉
第２節　遺　構	眞邉　倉元　森
第３節　遺　物	立神　森
第Ⅴ章　自然科学分析	倉元　大坪
第Ⅵ章　総　括	立神　倉元　森

17　写真図版のレイアウト・編集は，次のように分担した。

遺構	眞邉　倉元
遺物	立神　大坪　森

18　遺構内出土の遺物と接合した包含層出土の遺物については，「第Ⅳ章　第２節　遺構」の出土遺物として掲載した。

19　本編に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は県埋文センターで保管し，展示・活用を図ることにしている。

凡　例

1　本報告書掲載の遺構位置図・遺物出土状況図は，1グリッド（1マス）が10ｍ四方であり，各図に縮尺を提示してある。

2　本報告書掲載の遺構・遺物の縮尺は基本的には以下のとおりである。ただし，大型の石器についてはレイアウト用紙に合わせて縮尺が異なる場合もあるので，各図に提示してある縮尺を参照していただきたい。

遺構（集石遺構・埋設遺構）	：1/20
遺構（集石遺構・埋設遺構以外）	：1/40
土器・礫石器	：1/3
剥片石器	：原寸

3　遺物観察表の器高が括弧書きのものは，残長である。また，土器の色調は，日本標準土色帖に基づく。

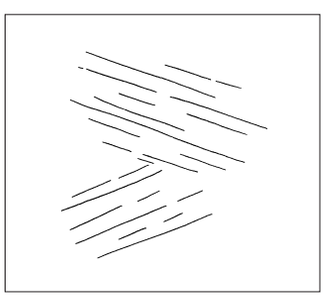
4　遺構の実測図で用いた線種の表現は下記の通りである。

観察できる線	――――
推定線	・・・・・・・・・・
直上の観察では隠れる線	― ― ― ―
区域外を示す線	- - - - - - - -

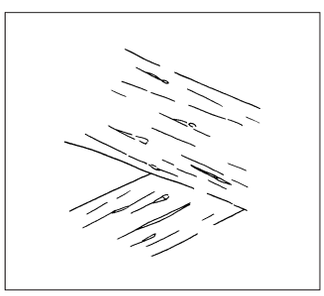
5　遺物の実測図で用いた表現は下記の通りである。

【　土器　】

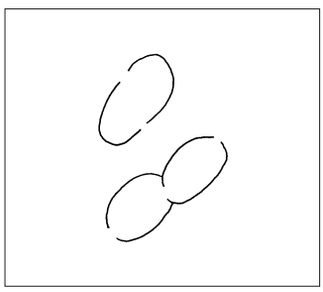
ナ　デ



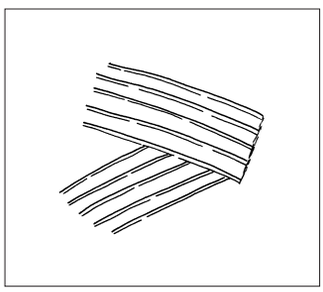
ケズリ



指おさえ

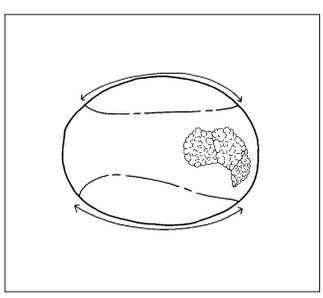


貝殻条痕



【　石器　】

磨面



6　石器等の石材は，「宮ノ上遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター」の分類を依拠とし，略記号で記載した。

7　遺構断面図中の「S」は，薩摩火山灰のブロックを示す。

総目次

【第１分冊】
巻頭図版１
巻頭図版２
序　文
報告書抄録
天神段遺跡位置図
例言・凡例
目　次

第Ⅰ章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯
　第２節　整理・報告書作成作業
　　１　作業内容
　　２　作業体制
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
第Ⅲ章　調査の方法と層序
　第１節　調査の方法
　　１　発掘調査の方法
　　２　遺構の認定と検出方法
　　３　整理・報告書作成作業の方法
　第２節　層序
第Ⅳ章　発掘調査の成果
　第１節　縄文時代早期の概要
　第２節　遺構
【第２分冊】
　第３節　遺物
　　１　土器（Ⅰ類土器～XV類土器）
【第３分冊】
　第３節　遺物
　　１　土器（XVI類土器～XX類土器）
　　２　土製品
　　３　石器
第Ⅴ章　自然科学分析
　第１節　概要
　第２節　テフラ分析
　第３節　放射性炭素年代測定
第Ⅵ章　総括
【第４分冊】
写真図版

第１分冊目次

巻頭図版１
巻頭図版２
序文
報告書抄録
天神段遺跡位置図
例言
凡例
目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……1
　第１節　調査に至るまでの経緯……1
　第２節　整理・報告書作成作業……1
　　１　作業内容……1
　　２　作業体制……2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……4
　第１節　地理的環境……4
　第２節　歴史的環境……4
第Ⅲ章　調査の方法と層序……10
　第１節　調査の方法……10
　　１　発掘調査の方法……10
　　２　遺構の認定と検出方法……10
　　３　整理・報告書作成作業の方法……12
　第２節　層序……12
第Ⅳ章　発掘調査の成果……36
　第１節　縄文時代早期の概要……36
　第２節　遺構……36
　　１　竪穴住居状遺構……36
　　２　連穴土坑……51
　　３　落とし穴……66
　　４　土坑……69
　　５　集石遺構……93
　　６　埋設遺構……267
　　７　遺構内出土土器接合状況……268

挿図目次

第１図　年度別調査範囲図……3
第２図　遺跡周辺地形図……6
第３図　周辺遺跡位置図……7
第４図　遺跡周辺の地質……9
第５図　グリッド配置図……11
第６図　土層断面図１……14
第７図　土層断面図２……15
第８図　土層断面図３……16
第９図　土層断面図４……17
第10図　土層断面図５……18
第11図　土層断面図６……19
第12図　土層断面図７……20
第13図　土層断面図８……21
第14図　土層断面図９……22
第15図　土層断面図10……23
第16図　土層断面図11……24
第17図　土層断面図12……25
第18図　土層断面図13……26
第19図　土層断面図14……27
第20図　土層断面図15……28
第21図　土層断面図16……29
第22図　土層断面図17……30
第23図　土層断面図18……31
第24図　土層断面図19……32
第25図　土層断面図20……33
第26図　土層断面図21……34
第27図　土層断面図22……35
第28図　全遺構配置図……37
第29図　竪穴住居状遺構配置図……38
第30図　１号竪穴住居状遺構，１～２号連穴土坑，１号土坑…39

第 31 図　１号竪穴住居状遺構・出土遺物（１）……40
第 32 図　１号竪穴住居状遺構出土遺物（２）……41
第 33 図　１号竪穴住居状遺構出土遺物（３）……42
第 34 図　１号竪穴住居状遺構出土遺物（４）……43
第 35 図　１号竪穴住居状遺構出土遺物（５）……44
第 36 図　２号竪穴住居状遺構……45
第 37 図　３号竪穴住居状遺構・出土遺物……46
第 38 図　４号竪穴住居状遺構・出土遺物……47
第 39 図　5～7 号竪穴住居状遺構・5 号竪穴住居状遺構出土遺物……48
第 40 図　8 号竪穴住居状遺構，3 号連穴土坑，2～3 号土坑…49
第 41 図　９号竪穴住居状遺構……50
第 42 図　連穴土坑配置図……52
第 43 図　３号連穴土坑・出土遺物……53
第 44 図　４～５号連穴土坑・出土遺物，４～５号土坑….54
第 45 図　6～13 号連穴土坑，8・10 号連穴土坑出土遺物 ……56
第 46 図　14～17 号連穴土坑……58
第 47 図　18～19 号連穴土坑，19 号連穴土坑出土遺物（1）….59
第 48 図　19 号連穴土坑出土遺物（２）……60
第 49 図　20 号連穴土坑・出土遺物……61
第 50 図　21～26 号連穴土坑……64
第 51 図　27～32 号連穴土坑，32 号連穴土坑出土遺物 …..65
第 52 図　落とし穴配置図……67
第 53 図　１～５号落とし穴，１号落とし穴出土遺物……68
第 54 図　土坑配置図……70
第 55 図　２～３号土坑，１～３号土坑出土遺物……72
第 56 図　８～18 号土坑，８号土坑出土遺物 ……74
第 57 図　19～38 号土坑……77
第 58 図　42～61 号土坑……79
第 59 図　62～79 号土坑……82
第 60 図　80～87 号土坑……83
第 61 図　87 号土坑出土遺物（１）……84
第 62 図　87 号土坑出土遺物（２）……85
第 63 図　88～92 号土坑，92 号土坑出土遺物……86
第 64 図　93～104 号土坑……88
第 65 図　39・105～119 号土坑……90
第 66 図　120～124 号土坑，120～121 号土坑出土遺物 …..91
第 67 図　集石遺構配置図（Ⅶ・Ⅷ層）……94
第 68 図　１号集石遺構……95
第 69 図　２号集石遺構……96
第 70 図　２号集石遺構出土遺物……97
第 71 図　３号集石遺構・出土遺物……98
第 72 図　４号集石遺構……99
第 73 図　５号集石遺構……100
第 74 図　６～７号集石遺構……101
第 75 図　８～９号集石遺構……102
第 76 図　10～11 号集石遺構……103
第 77 図　12～13 号集石遺構……104
第 78 図　14～16 号集石遺構……105
第 79 図　17 号集石遺構・出土遺物……106
第 80 図　18～21 号集石遺構，18 号集石遺構出土遺物 …108
第 81 図　22～23 号集石遺構・出土遺物，24 号集石遺構….109
第 82 図　25～30 号集石遺構……110
第 83 図　31～36 号集石遺構……112
第 84 図　37～40 号集石遺構……113
第 85 図　41 号集石遺構・出土遺物……114
第 86 図　42 号集石遺構……115
第 87 図　43 号集石遺構・出土遺物……116
第 88 図　44～49 号集石遺構……117
第 89 図　50～51 号集石遺構・出土遺物……119
第 90 図　52～54 号集石遺構……120
第 91 図　55～57 号集石遺構……121
第 92 図　58～59 号集石遺構・出土遺物……122
第 93 図　60 号集石遺構・出土遺物……123
第 94 図　61～62 号集石遺構……124
第 95 図　61～62 号集石遺構出土遺物……125
第 96 図　63～64 号集石遺構・出土遺物，65 号集石遺構 …126
第 97 図　65 号集石遺構出土遺物……127
第 98 図　66～71 号集石遺構……129
第 99 図　72～77 号集石遺構……130
第 100 図　78～80 号集石遺構・出土遺物……132
第 101 図　81～86 号集石遺構……133
第 102 図　87～92 号集石遺構……134
第 103 図　93～95 号集石遺構……136
第 104 図　96～99 号集石遺構，96 号集石遺構出土遺物 …..137
第 105 図　97～99 号集石遺構出土遺物……138
第 106 図　100～102 号集石遺構……139
第 107 図　103～104 号集石遺構……140
第 108 図　105～106 号集石遺構・出土遺物……141
第 109 図　107 号集石遺構・出土遺物 ……142
第 110 図　108 号集石遺構 ……143
第 111 図　109 号集石遺構 ……144
第 112 図　110～111 号集石遺構……145
第 113 図　112～115 号集石遺構……146
第 114 図　116～121 号集石遺構……148
第 115 図　122～124 号集石遺構……149
第 116 図　125 号集石遺構・出土遺物 ……150
第 117 図　126 号集石遺構・出土遺物 ……151
第 118 図　127～130 号集石遺構……153
第 119 図　131 号集石遺構 ……154
第 120 図　131 号集石遺構出土遺物 ……155
第 121 図　132～133 号集石遺構……156
第 122 図　132 号集石遺構出土遺物 ……157
第 123 図　134 号集石遺構・出土遺物 ……158
第 124 図　135 号集石遺構・出土遺物 ……159
第 125 図　136～137 号集石遺構……160
第 126 図　136～137 号集石遺構出土遺物……161
第 127 図　138～139 号集石遺構……162
第 128 図　140～141 号集石遺構……163
第 129 図　138・141 号集石遺構出土遺物……164
第 130 図　142～143 号集石遺構……165
第 131 図　142 号集石遺構出土遺物 ……166
第 132 図　144 号集石遺構 ……167
第 133 図　集石遺構配置図（Ⅵ層）……168
第 134 図　145 号集石遺構 ……169
第 135 図　145 号集石遺構出土遺物 ……170
第 136 図　146 号集石遺構 ……171
第 137 図　147 号集石遺構，40 号土坑・出土遺物….172
第 138 図　148 号集石遺構，41 号土坑……173
第 139 図　149 号集石遺構・出土遺物 ……174
第 140 図　150 号集石遺構・出土遺物 ……175
第 141 図　151～152 号集石遺構……176
第 142 図　153～154 号集石遺構……177
第 143 図　153 号集石遺構出土遺物 ……178
第 144 図　154 号集石遺構出土遺物 ……179
第 145 図　155 号集石遺構，156 号集石遺構・出土遺物 …..180
第 146 図　157 号集石遺構・出土遺物 ……181
第 147 図　158 号集石遺構・出土遺物 ……182
第 148 図　159～160 号集石遺構……183
第 149 図　159～160 号集石遺構出土遺物……184
第 150 図　161～162 号集石遺構……185
第 151 図　161～162 号集石遺構出土遺物……186
第 152 図　163 号集石遺構・出土遺物 ……187
第 153 図　164 号集石遺構 ……188
第 154 図　164 号集石遺構出土遺物 ……189

第 155 図　165～166 号集石遺構……191
第 156 図　165～166 号集石遺構出土遺物……192
第 157 図　167～168 号集石遺構……193
第 158 図　169 号集石遺構・出土遺物 ……194
第 159 図　170 号集石遺構，171 号集石遺構・出土遺物……195
第 160 図　172 号集石遺構・出土遺物，173 号集石遺構……196
第 161 図　174～177 号集石遺構……197
第 162 図　178～180 号集石遺構……199
第 163 図　181～184 号集石遺構……200
第 164 図　185～190 号集石遺構……201
第 165 図　187 号集石遺構出土遺物，191～192 号集石遺構・出土遺物……203
第 166 図　193 号集石遺構・出土遺物 ……204
第 167 図　193 号集石遺構出土遺物（１） ……205
第 168 図　193 号集石遺構出土遺物（２） ……206
第 169 図　194～197 号集石遺構……207
第 170 図　194～197 号集石遺構出土遺物……208
第 171 図　198 号集石遺構・出土遺物，199～201 号集石遺構……210
第 172 図　202～207 号集石遺構……211
第 173 図　208～209 号集石遺構……212
第 174 図　209 号集石遺構出土遺物（１） ……213
第 175 図　209 号集石遺構出土遺物（２） ……214
第 176 図　210 号集石遺構・出土遺物 ……215
第 177 図　211～212 号集石遺構……216
第 178 図　213～215 号集石遺構……217
第 179 図　216～217 号集石遺構……218
第 180 図　218 号集石遺構・出土遺物，219～220 号集石遺構……219
第 181 図　221 号集石遺構・出土遺物 ……221
第 182 図　222～225 号集石遺構……222
第 183 図　226～228 号集石遺構……223
第 184 図　229～231 号集石遺構……224
第 185 図　229～231 号集石遺構出土遺物……225
第 186 図　232～236 号集石遺構……226
第 187 図　237～241 号集石遺構……228
第 188 図　237～240 号集石遺構出土遺物……229
第 189 図　242～247 号集石遺構……230
第 190 図　248～253 号集石遺構……232
第 191 図　254 号集石遺構・出土遺物 ……233
第 192 図　255～257 号集石遺構……234
第 193 図　258～259 号集石遺構，260 号集石遺構・出土遺物……236
第 194 図　261～263 号集石遺構……237
第 195 図　264～267 号集石遺構……238
第 196 図　268～269 号集石遺構・出土遺物……239
第 197 図　270～271 号集石遺構・出土遺物……241
第 198 図　272 号集石遺構・出土遺物 ……242
第 199 図　273～274 号集石遺構・出土遺物……243
第 200 図　274 号集石遺構出土遺物 ……244
第 201 図　275～277 号集石遺構……245
第 202 図　278～282 号集石遺構……246
第 203 図　283～284 号集石遺構・出土遺物，285～286 号集石遺構 …248
第 204 図　285～286 号集石遺構出土遺物，287 号集石遺構 ….249
第 205 図　288～289 号集石遺構……250
第 206 図　290～291 号集石遺構……251
第 207 図　292 号集石遺構・出土遺物，293 号集石遺構……252
第 208 図　293 号集石遺構出土遺物 ……253
第 209 図　294 号集石遺構・出土遺物 ……254
第 210 図　295～297 号集石遺構……256
第 211 図　298～299 号集石遺構・出土遺物……257
第 212 図　300～303 号集石遺構……258
第 213 図　304～307 号集石遺構……259
第 214 図　308 号集石遺構 ……260
第 215 図　309 号集石遺構 ……261
第 216 図　309 号集石遺構出土遺物 ……262
第 217 図　310 号集石遺構・出土遺物 ……263
第 218 図　311 号集石遺構 ……264
第 219 図　312 号集石遺構 ……265
第 220 図　313 号集石遺構 ……266
第 221 図　埋設遺構配置図……269
第 222 図　１号土器埋設遺構・出土遺物……270
第 223 図　２号土器埋設遺構・出土遺物……271
第 224 図　２号土器埋設遺構出土遺物……272
第 225 図　石器埋設遺構・出土遺物……273
第 226 図　遺構内出土土器接合状況（１）……274
第 227 図　遺構内出土土器接合状況（２）……275
第 228 図　遺構内出土土器接合状況（３）……276
第 229 図　遺構内出土土器接合状況（４）……277
第 230 図　遺構内出土土器接合状況（５）……278
第 231 図　遺構内出土土器接合状況（６）……279
第 232 図　遺構内出土土器接合状況（７）……280
第 233 図　遺構内出土土器接合状況（８）……281
第 234 図　遺構内出土土器接合状況（９）……282
第 235 図　遺構内出土土器接合状況（10）……283
第 236 図　遺構内出土土器接合状況（11）……284
第 237 図　遺構内出土土器接合状況（12）……285
第 238 図　遺構内出土土器接合状況（13）……286
第 239 図　遺構内出土土器接合状況（14）……287
第 240 図　遺構内出土土器接合状況（15）……288
第 241 図　遺構内出土土器接合状況（16）……289
第 242 図　遺構内出土土器接合状況（17）……290
第 243 図　遺構内出土土器接合状況（18）……291
第 244 図　遺構内出土土器接合状況（19）……292
第 245 図　遺構内出土土器接合状況（20）……293

表目次

第 １ 表　周辺遺跡一覧表……８
第 ２ 表　天神段遺跡の基本層序……13
第 ３ 表　竪穴住居状遺構一覧表……294
第 ４ 表　連穴土坑一覧表……294
第 ５ 表　落とし穴一覧表……294
第 ６ 表　土坑一覧表（１） ……295
第 ７ 表　土坑一覧表（２） ……296
第 ８ 表　土坑一覧表（３） ……297
第 ９ 表　集石遺構一覧表（１） ……297
第 10 表　集石遺構一覧表（２） ……298
第 11 表　集石遺構一覧表（３） ……299
第 12 表　集石遺構一覧表（４） ……300
第 13 表　集石遺構一覧表（５） ……301
第 14 表　集石遺構一覧表（６） ……302
第 15 表　集石遺構一覧表（７） ……303
第 16 表　集石遺構一覧表（８） ……304
第 17 表　遺構内出土土器観察表（１） ……304
第 18 表　遺構内出土土器観察表（２） ……305
第 19 表　遺構内出土土器観察表（３） ……306
第 20 表　遺構内出土土器観察表（４） ……307
第 21 表　遺構内出土石器観察表（１） ……307
第 22 表　遺構内出土石器観察表（２） ……308

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

県教委は文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は東九州自動車道の建設を計画し，志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ区間の事業に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）に照会した。

東九州自動車道建設計画に伴い文化財課は平成 11 年１月に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間を，平成 12 年２月に志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50 か所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区画内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，県埋文センターの４者で協議を重ね対応を検討している最中に日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減が検討されることとなった。これに伴い，遺跡の緻密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査，試掘調査，確認調査を実施した。

その後，日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設に係る確認書・協定書が締結された。ただし，曽於弥五郎ＩＣまでは日本道路公団からの受託事業，曽於弥五郎ＩＣからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。さらに，国土交通省は，平成 25 年度から東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）の建設工事をさらに推進する意向を示し，発掘調査期間の短縮を要請してきた。この状況に対応するため，県は関係機関と協議を重ね，職員確保や予算運用が柔軟にでき，発掘調査を効率かつ効果的に実施できる財団の設置を決定し，平成 25 年４月に公益財団法人鹿児島県文化振興財団に埋蔵文化財調査センターが設置された。そして，文化財課は国事業に関する業務を埋文調査センターに委託し，埋文調査センターが県埋文センターから業務を引継ぎ，実施することとなった。

天神段遺跡の主な発掘調査の経過は，以下のとおりである。

１　分布調査：平成 11 年１月
２　詳細分布調査：平成 13 年７月
３　試掘調査：平成 13 年 12 月
４　確認調査：平成 19 年５月～７月
５　本　調　査：平成 19 年 12 月～平成 20 年３月
　　平成 20 年５月～平成 21 年３月
　　平成 21 年５月～平成 22 年３月
　　平成 22 年５月～平成 23 年３月
　　平成 23 年５月～平成 24 年３月
　　平成 24 年５月～平成 25 年３月
　　平成 25 年４月～平成 25 年 10 月

本調査は平成 19 年度から平成 24 年度までは県埋文センターが実施し，平成 25 年度は埋文調査センターが実施した。平成 19 年度から平成 25 年度まで実施してきた年度毎の調査範囲については，第１図に示した。
なお，事前調査（試掘調査・確認調査），本調査の詳細及びその調査体制については，平成 27 年２月に刊行した「天神段遺跡１　弥生時代～近世編」を参照していただきたい。

第２節　整理・報告書作成作業

報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成 22 年度から平成 24 年度までは県埋文センター東九州整理作業所で実施した。そして，平成 25 年度から平成 27 年度は埋文調査センター第一整理作業所で，平成 28 年度は埋文調査センター第一整理作業所及び第二整理作業所で，平成 29 年度は埋文調査センター第二整理作業所で実施した。

これまでに平成 27 年２月に「天神段遺跡１　弥生時代～近世編」，平成 28 年３月に「天神段遺跡２　縄文時代前期～晩期編」を刊行してきた。これらの整理・報告書作成に係る作業体制や作業内容は，それぞれの報告書を確認していただきたい。本報告書の刊行に係る整理・報告書作成作業については「天神段遺跡１」及び「天神段遺跡２」の報告書を作成する時点から遺物の分類等を実施してきたが，本格的に体制を整え実施したのは平成 28 年度からである。従って，本報告書では平成 28 年度からの作業内容及び体制について記述する。

本年度は縄文時代早期編を「天神段遺跡３」として，また，旧石器時代～縄文時代草創期編を「天神段遺跡４」として刊行することとなった。

１　作業内容

遺構については，発掘調査時に作成した実測図と台帳との照合や遺構・時代ごとに実測図の仕分けを行った。その後，遺構配置図の作成，各遺構図のトレース・レイ

アウトを行い，報告書掲載用の写真を選別した。併せて遺構計測表と遺構内出土遺物の観察表を作成した。

土器については遺物台帳との照合･接合･実測･トレース・拓本等の各作業のあとに挿図作成，報告書掲載用の写真撮影及び図版作成を行った。併せて，分類ごとの土器観察表を作成した。

石器については仕分け･分類を行った後に実測･トレース・観察表作成を行い，報告書に掲載する挿図を作成した。また，報告書掲載用写真撮影後に図版を作成した。

原稿執筆については，遺構・遺物の整理作業と併行して随時行った。

なお，平成 28 年度に土器と石器の整理作業の一部を（株）九州文化財研究所に委託した。

２　作業体制

平成 28 年度以降の体制は，以下のとおりである。

【平成 28 年度】

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター	
	センター長	堂込　秀人
作成企画	〃 総務課長兼総務係長	有村　　貢
	〃 調査課長	八木澤一郎
	〃 調査第三係長	岩澤　和徳
作成担当	〃 文化財専門員	松下　健生
	〃 〃	眞邉　　彩
	〃 文化財調査員	福地　祥平
事務担当	〃 総務課長兼総務係長	有村　　貢
	〃 主査	荒瀬　勝己

整理作業の方法や遺物について，熊本大学文学部教授小畑弘己及び岡山大学名誉教授稲田孝治の両氏に指導を賜った。

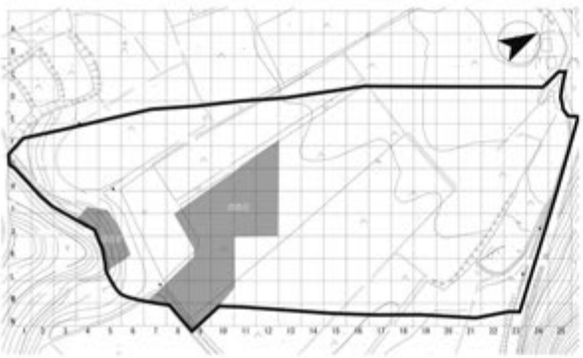
【平成 29 年度】

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター	
	センター長	前迫　亮一
作成企画	〃 総務課長兼総務係長	中村伸一郎
	〃 調査課長	中原　一成
	〃 調査第二係長	岩澤　和徳
作成担当	〃 文化財専門員	立神　倫史
	〃 〃	眞邉　　彩
	〃 〃	倉元　良文
	〃 文化財調査員	大坪　啓子
	〃 〃	森　えりこ
事務担当	〃 総務課長兼総務係長	中村伸一郎
	〃 主査	荒瀬　勝巳

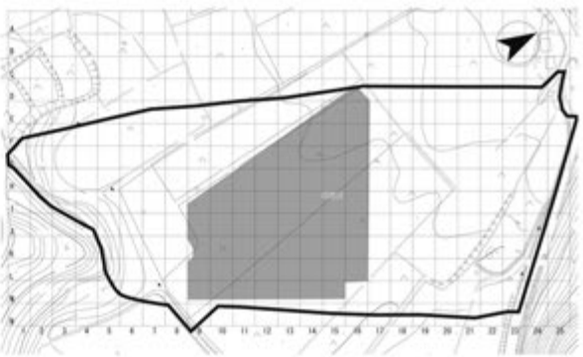
整理作業の方法や遺物について，関西大学博物館学芸員山下大輔氏に指導を賜った。

なお，報告書作成指導委員会等は下記のとおりに実施した

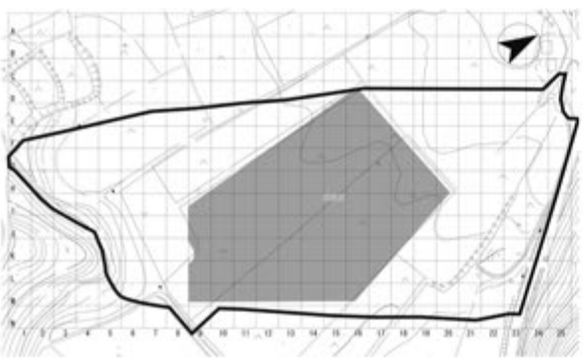
報告書作成指導委員会	平成 29 年 11 月 15 日実施 中原一成調査課長ほか 4 名
報告書作成検討委員会	平成 29 年 11 月 21 日実施 前迫亮一センター長ほか 7 名



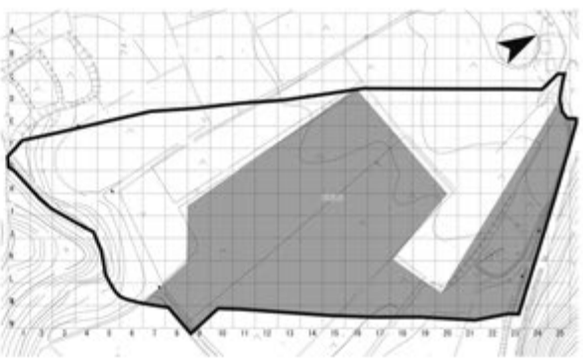
平成19年度調査範囲



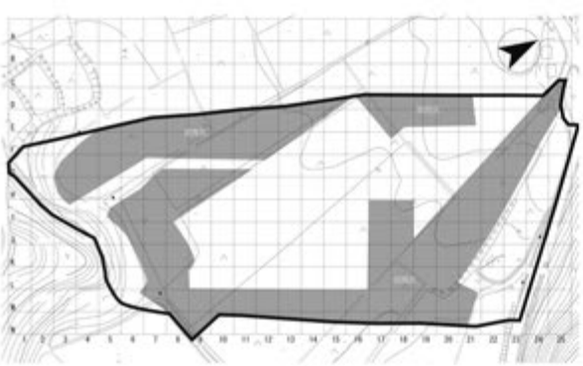
平成20年度調査範囲



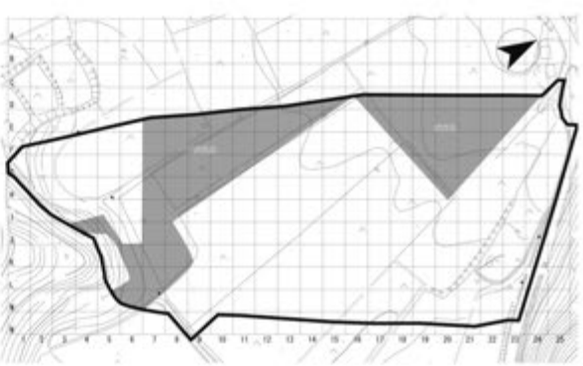
平成21年度調査範囲



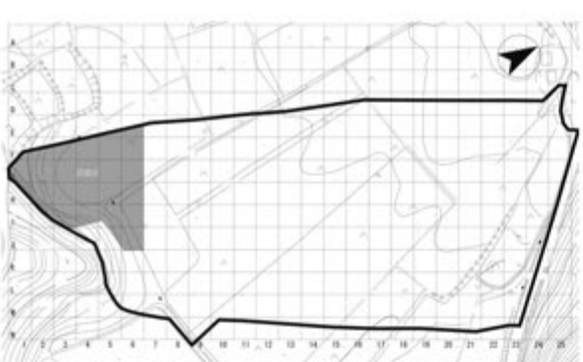
平成22年度調査範囲



平成23年度調査範囲



平成24年度調査範囲



平成25年度調査範囲

第１図　年度別調査範囲図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

天神段遺跡の大半は曽於郡大崎町野方に所在する。大崎町は鹿児島県の東部を形成する大隅半島の中央部東側に位置し，東西に約８㎞，南北に約 18㎞，総面積 100.82㎢である。東側に志布志市，西側に鹿屋市，南側に肝属郡東串良町，北側は曽於市と接し，南部では黒潮の流れる志布志湾に面している。

大隅半島の地形は九州山地の延長をなす東西の山地と，その間の丘陵，台地及び低地などの低地帯から形成されている。東側の山地は志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地であり，西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は北部の白鹿岳・荒磯岳など 500～600 ｍ級の山々と南部の大篦柄岳（1,236.8 ｍ）を主峰に横岳・御岳など 1,000 ｍ級の山からなる山地で，山容は急峻で深い森林に覆われている。

地質は高隈山周辺に分布している新生代古第３紀の日南層群が大隅半島の基盤をなしており，山間地を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布した典型的シラス地形となっている。一方低地は，高隈山地や鰐塚山地などに水源をもつ大小の河川が走り志布志湾や鹿児島湾に注いでいる。この河川は上・中流域で狭い谷底平野を形成し，何段かの河岸段丘も認められる。

大崎町は，志布志湾に面した大崎地区と内陸部に位置する野方地区が南北に連結する瓢箪状を呈する。南部は海岸線に向かい緩やかな傾斜をなす起伏の少ない平坦な地形であり，北部は標高 150 ｍから 200 ｍの丘陵地帯で，北端部では谷間の多い起伏の激しい地形である。高隈山系などに端を発する菱田川，田原川，持留川が南流して志布志湾に注ぎ，南部はこれら３河川によってシラス台地を開析された水田地帯が開けている。北部は，台地上に畑地が形成されている。地質はシラス台地上に形成された黒色火山灰土壌が多く，低地部に位置する水田の一部では泥炭層をなしている。

第２節　歴史的環境

天神段遺跡の所在する大崎町では，主に田原川，持留川，菱田川，大鳥川を臨む台地の縁辺部にそって遺跡の分布がみられる。本遺跡の周辺は，東九州自動車道建設に伴い発掘調査が行なわれた遺跡などから，様相が明らかになりつつある。以下では，天神段遺跡の所在する大崎町内の各時代の遺跡を概説する。

旧石器時代

大崎町において確認されている旧石器時代の遺跡は少ないが，近年東九州自動車道に関連した発掘調査で旧石器時代の様相が明らかになりつつある。大崎地区の荒園遺跡では，細石刃文化期の石器類が発見されており，川を挟んだ永吉字天神に位置する永吉天神段遺跡では三稜尖頭器やナイフ形石器など，ナイフ形石器文化期の遺物や石器製作跡が，同じくナイフ形石器文化期と思われる石核・フレーク・チップ等が宮脇遺跡で確認されている。

野方地区では大崎地区との境にある二子塚Ａ遺跡において薩摩火山灰の下層から黒曜石等のフレークが確認されている。本遺跡では，ナイフ形石器文化と細石刃文化の石器製作跡及び石器類が検出・出土している。

縄文時代

本編では縄文時代早期の遺構・遺物を報告することから，縄文時代早期の遺跡を中心に記載する。

大崎地区では井俣の金丸城跡で石坂式・石鏃・凹石が出土し，岡別府の下堀遺跡では 13 基の集石，土坑と前平式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・撚糸文・山形押型文・平栫式・塞ノ神式土器，石錐等の遺物が確認されている。持留の細山田段遺跡では，縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期の遺構・遺物が確認されている。早期は集石 18 基と埋設土器が２か所で確認され，吉田式・石坂式・中原式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・平栫式・塞ノ神式等の土器が出土した。また，前期末から中期前半の土坑 150 基以上と深浦式土器が大量に出土している。永吉天神段遺跡では，晩期の突帯文土器を伴う竪穴住居跡や黒川式新様式の鉢，茶家型（東 2009）とされる壺などが出土している。

天神段遺跡の所在する野方地区の立山Ｂ遺跡は，早期・前期・中期・晩期の遺物が確認されている。早期では，前平式土器が出土している。本遺跡の南に位置する野方前段遺跡は早期から晩期にかけての遺跡であるが，早期では集石 16 基と石坂式・下剥峯式・塞ノ神式・苦浜式等の土器が出土している。大崎地区との境に位置する二子塚Ａ遺跡では早期の集石と晩期の土坑を検出している。早期の遺物としては，吉田式・石坂式・桑ノ丸式・塞ノ神式等の土器を確認している。

弥生時代

白砂青松で著名な「くにの松原」の砂丘後背地に立地する沢目遺跡は，砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡であり，竪穴住居跡・土坑・柱穴が発見され，入来Ⅰ・Ⅱ式，山ノ口Ⅰ・Ⅱ式，須玖式・鉄製品・軽石加工品が出土している。下堀遺跡では，山ノ口式の他，

須玖式を伴う直径８ｍの円形大型住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。桜迫遺跡では，山ノ口式が出土している。田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地としての遺跡が多く点在し，特に河口付近にあたる横瀬地域では甕棺破片が採集されている。

古墳時代

大崎町とその周辺の志布志湾沿いは，高塚古墳の南限域にあたり，南九州では数少ない前方後円墳をはじめとした古墳群を有し，畿内との関連を窺わせる。町内の古墳はそのほとんどが大崎地区に集中し，野方地区には数基しか存在しない。

大崎地区の横瀬古墳は古墳時代中期（５世紀後半頃）の大型前方後円墳で，隣接する東串良町唐仁大塚古墳に次いで県内第２の規模を誇り，墳丘からは円筒埴輪片・形象埴輪片が出土している。範囲確認調査で確認された周濠跡からは伽耶系陶質土器及び大阪府陶邑産の須恵器も出土している。神領古墳群は，前方後円墳４基・円墳９基で構成され，加えて地下式横穴墓７基の存在が知られている。６号墳（天子近古墳）では日光鏡・変形獣帯鏡各１面が採集され，石室は花崗岩質粘板岩６枚を使用した組合式石棺が埋設されている。地下式横穴墓（竜相地下式横穴墓）では，鉄剣・鉄刀・イモガイ製貝釧・内向花文鏡などの副葬品が確認された。

町内では他に飯隈遺跡群，田中古墳群，後迫古墳群等が知られ，地下式横穴墓としては飯隈地下式横穴墓群，鷲塚地下式横穴墓群が知られている。

その他，二子塚Ａ遺跡で住居跡・土師器・成川式，沢目遺跡では古墳時代初頭の住居跡や布留式をまねて作られた土師器が，下堀遺跡で住居跡・溝状遺構・地下式横穴墓・鉄剣・鉄鏃が確認されている。

古代，中世

古代の遺跡としては，下堀遺跡で土師器と土坑が確認されている。柿木段遺跡ではカマド跡・溝状遺構・古道跡が検出され，土師器や須恵器が出土している。天神段遺跡では，古代の掘立柱建物跡が確認されている。さらに，加治木堀遺跡，椿山遺跡，野方前段遺跡からは，古代から中世の溝状遺構・古道跡が検出されている。

中世の遺跡はほとんどが山城であり，大崎城跡，胡摩ヶ崎城跡，野卸城跡，竜相城跡，金丸城跡，榕谷城，遠見ヶ丘があげられる。金丸城跡では，溝状遺構・土坑・龍泉窯系の青磁・東播系須恵器・白磁・青花・瓦質土器・備前系擂鉢・天目碗などが確認されている。

また，近年の発掘調査では，下堀遺跡で，溝状遺構・畝跡・青磁・青花・中国陶器などが確認されている。天神段遺跡では掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓・土坑・土師器・須恵器・青磁・白磁・天目碗・鉄製品・青銅製品・鉄滓・砥石・滑石製石鍋片などが確認されており，中でも土坑墓１号からは同安窯系青磁・青白磁・銅鏡・滑石製石鍋・鉄製品・木製品・土師器などの副葬品が確認されている。

近世

大崎地区では金丸城跡で掘立柱建物跡・焼土を伴う土坑・軽石集積区・肥前系染付・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓などが確認されている。

近世の野方地区は，寛永年間（1624～1643）に薩摩藩の私領主（一門家）である加治木島津家の領地（持切在）として開墾された。一方，荒佐野の照日神社には，元禄２年（1689）に摂津・河内・和泉から薩摩藩へ移住し，荒佐野を開拓した人々の記念碑がある。荒佐野の氏神として移住の際に勧進された伊勢神社は，明治期に旧野方村の村社であった照日神社に合祀され，現在の照日神社となった。字名の加治木堀の由来については，荒佐衆と加治木衆の領地境界を示す堀があったことから，名付けられたと言われている。

（参考・引用文献）

救仁郷断仁　1951 『大崎町史』

大崎町　1975 『大崎町史（明治百年）』

大崎町教育委員会　2001 『立山Ｂ遺跡」 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

大崎町教育委員会　2005 『金丸城跡』 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

大崎町教育委員会　2005 『下堀遺跡，大崎細山田段遺跡』 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（５）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2010 『加治木堀遺跡，宮ノ本遺跡，椿山遺跡，柿木段遺跡，野方前段遺跡Ａ地点』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（154）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2012 『宮ヶ原遺跡，野方前段遺跡Ｂ地点，柿木段遺跡２』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（173）

鹿児島県教育委員会，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2015 『天神段遺跡１』 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（３）

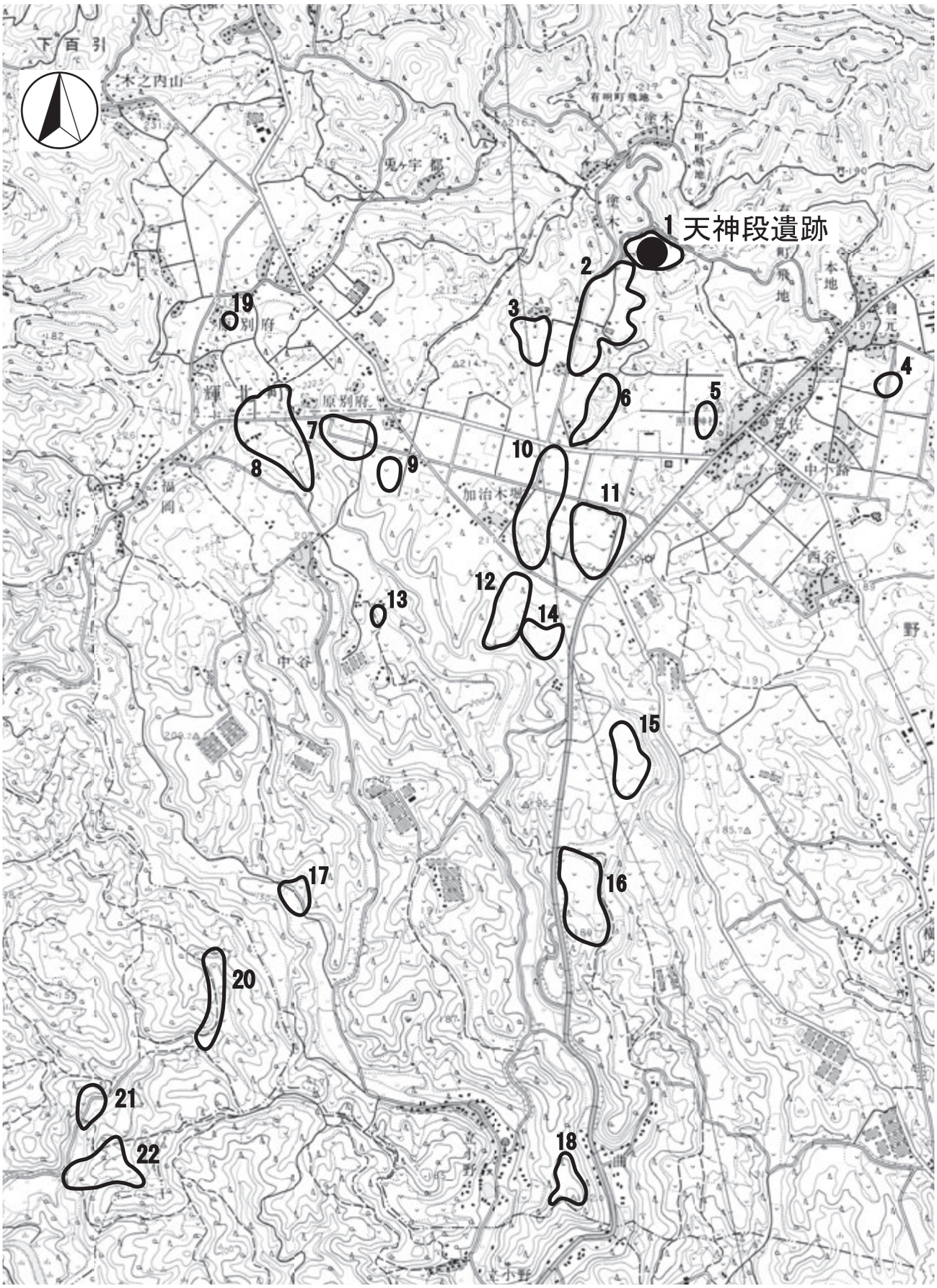
鹿児島県教育委員会，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2016 『天神段遺跡２』 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（６）

鹿児島県教育委員会，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2016 『永吉天神段遺跡第１地点』 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（８）

東和幸　2009 「千河原段階の土器」『南九州縄文通信No.20 南の縄文・地域文化論考』新東晃一代表還暦記念論文集上巻　南九州縄文研究会



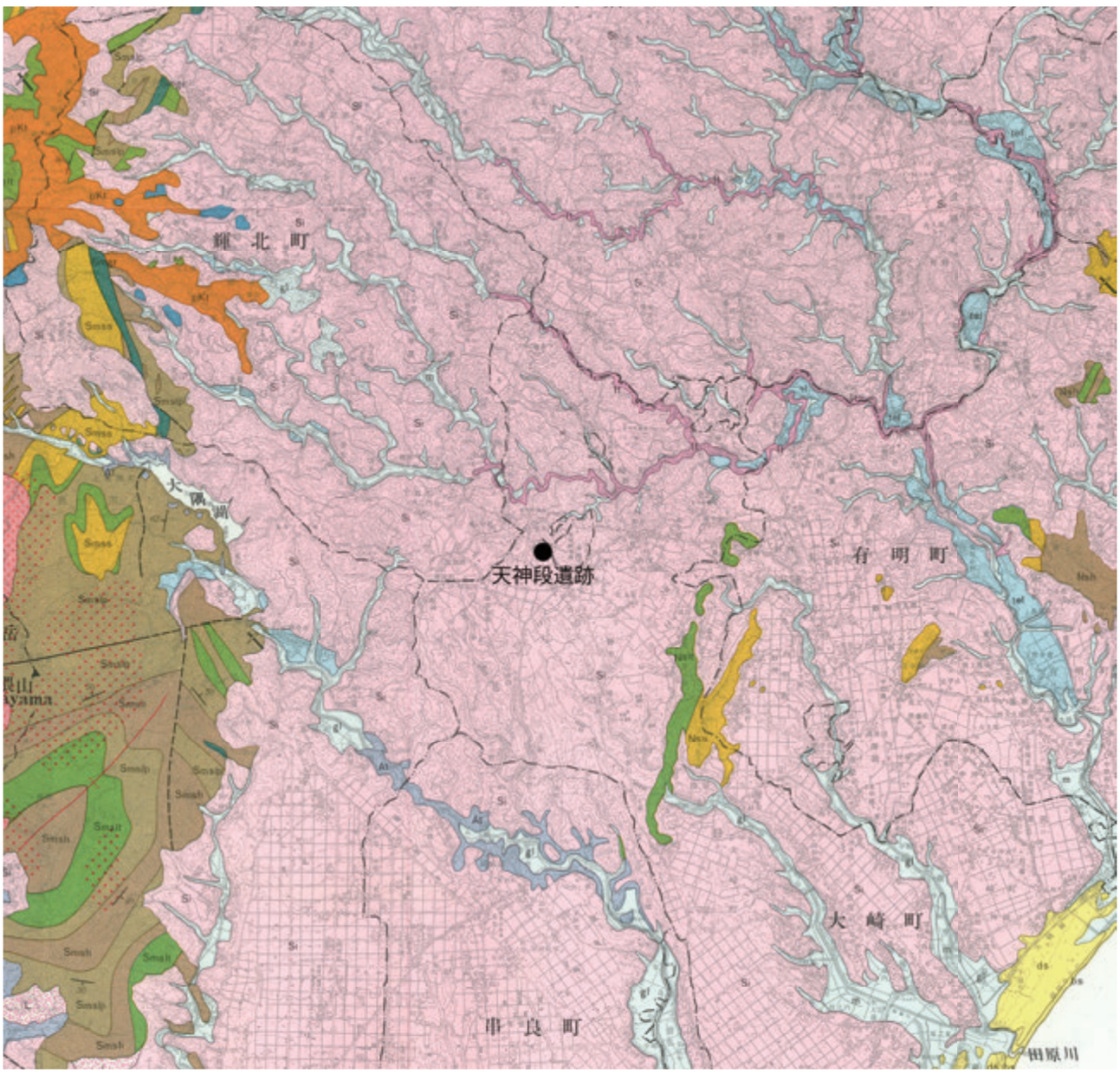
第２図　遺跡周辺地形図



第３図　周辺遺跡位置図（１：25,000）

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所　在　地	種類	時　代	地形	遺 物 等	備 考
1	**468**	**62**	**天神段**	**鹿児島県曽於郡大崎町野方天神段**	**散布地**	**縄文**	**台地**	**本編関係遺物 岩本式，前平式，加栗山式，志風頭式，吉田式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，押型文，中原式，手向山式，妙見・天道ヶ尾式，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文等の土器，石鏃，石匙，楔形石器，石斧，磨石，礫器，石皿，異形石器，軽石製品等の石器**	**本報告書（縄文時代早期編） ※弥生時代～近世編はＨ 27 年２月報告書刊行 ※縄文時代前期～晩期編はＨ 28 年３月報告書刊行 ※旧石器時代～縄文時代草創期編はＨ 30 年３月報告書刊行**
2	468	63	野方前段	鹿児島県曽於郡大崎町野方前段	散布地	縄文，古墳	台地	塞ノ神式，黒川式，吉ヶ崎式，土師器	Ａ地点はＨ 22， Ｂ地点はＨ 24 年３月報告書刊行
3	468	64	内ヶ迫	鹿児島県曽於郡大崎町野方内ヶ迫	散布地	古墳	台地	成川式	Ｈ９年農政分布
4	468	45	倉元	鹿児島県曽於郡大崎町野方倉元	散布地		台地	土器片	Ｈ３年農政分布
5	468	14	荒佐野	鹿児島県曽於郡大崎町野方荒佐野	散布地	弥生（中）	台地	土器片，磨製石斧	
6	468	91	宮ノ本	鹿児島県曽於郡大崎町野方	散布地	弥生	台地		Ｈ 22 年報告書刊行
7	468	108	亀形	鹿児島県曽於郡大崎町野方 2622-1 外	散布地	弥生	台地	土器	Ｈ 12 年農政分布
8	468	107	岩井場	鹿児島県曽於郡大崎町野方 2572-2 外	散布地	古墳	台地	土器	Ｈ 12 年農政分布
9	468	10	原別府	鹿児島県曽於郡大崎町野方	散布地	縄文（後）	台地	土器片，打製石斧	
10	468	7	加治木堀	鹿児島県曽於郡大崎町野方加治木堀	散布地	縄文，弥生，中世	台地	土器片，山ノ口式，鉄鏃	Ｈ 22 年３月報告書刊行
11	468	109	椿山	鹿児島県曽於郡大崎町野方 3179-5	散布地	弥生	台地	岩崎式，吉ヶ崎式	Ｈ 22 年報告書刊行
12	468	118	椿山	鹿児島県曽於郡大崎町野方椿山	散布地	古墳	台地		
13	468	54	岩井場段	鹿児島県曽於郡大崎町野方中段	散布地	縄文，弥生	台地		Ｈ８年農政分布
14	468	65	瀬ノ堀Ａ	鹿児島県曽於郡大崎町野方瀬ノ堀・椿山・又合流	散布地	縄文，古墳	台地	敲石，土器片，成川式	Ｈ９年農政分布
15	468	66	瀬ノ堀Ｂ	鹿児島県曽於郡大崎町野方瀬ノ堀	散布地		台地		Ｈ９年農政分布
16	468	39	二松	鹿児島県曽於郡大崎町野方瀬ノ堀	散布地	弥生，歴史	台地		
17	468	139	柿木段	鹿児島県曽於郡大崎町立小野柿木段	散布地	縄文，古代，中世	低地	入佐式，石斧，土師器，須恵器，鉄族	Ｈ 22 年３月，Ｈ 24 年３月報告書刊行
18	468	43	遠見ヶ丘	鹿児島県曽於郡大崎町野方立小野	散布地	中世	台地		
19	203	247	徳光ヶ丘	鹿児島県鹿屋市輝北町下百引東原別府	散布地	縄文時代前期・後期・晩期	台地	春日式，岩崎式，草野式，敲石，夜臼式	Ｓ 56 年分布調査
20	203	151	大牧	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地	古代			Ｈ 19 年分布調査
21	203	152	樋ノ口Ⅰ	鹿児島県鹿屋市高隅町	散布地	古墳，古代	台地		Ｈ 19 年分布調査
22	203	153	樋ノ口Ⅱ	鹿児島県鹿屋市高隅町	散布地	古墳，古代	台地		Ｈ 19 年分布調査



地質図凡例

m	シルト質 Muddy	Si	シラス…流紋岩質角礫含有軽石凝灰岩(非溶結部) Shirasu…Rhyolitic pumice tuff (non-welded)	Smsh	頁岩および同優勢互層 Shale and shale rich alternation
gl	礫　質 Gravelly	pKt	流紋岩質～デイサイト質軽石凝灰岩 Rhyolitic～dacitic pumice tuff	Sv-gr	緑色岩類 Green rocks
bs	砂 Sand	Nss	砂岩および同優勢互層 Sandstone and sandstone rich alternation	Smslp	スランプ礫岩 Slumped conglomerate
ds	砂 Sand	Nsh	頁岩および同優勢互層 Shale and shale rich alternation	L	ローム層 Loam
bel	砂，礫，シルト Sand, gravel, silt	Nalt	砂岩・頁岩互層 Alternation of sandstone and shale		
lt	流紋岩質角礫含有軽石凝灰岩(溶結凝灰岩) Rhyolitic pumice tuff (welded tuff)	Smss	砂岩および同優勢互層 Sandstone and sandstone rich alternation		
At	デイサイト質軽石凝灰岩(溶結凝灰岩) Dacitic pumice tuff (welded tuff)	Smalt	砂岩・頁岩互層 Alternation of sandstone and shale		

第４図　遺跡周辺の地質

第Ⅲ章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

ここでは，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法等，整理・報告書作成作業の方法について簡潔に述べる。

１　発掘調査の方法

発掘調査の方法は，すでに刊行されている『天神段遺跡１　弥生時代～近世編』，『天神段遺跡２　縄文時代前期～晩期編』において示されている。詳細はそちらを参照していただきたい。

天神段遺跡の発掘調査は，平成 19 年度から平成 25 年度まで７年にわたり実施した。調査対象表面積は 19,042㎡，調査対象延面積は 97,240㎡であった。

調査はグリッドを設定して実施した。また，掘り下げに関しては基本的に人力で行い，無遺物層，火山灰の硬化層については，重機を併用して掘り下げた。遺構については，移植ごて等の遺構調査に適した道具を用いて慎重に調査し，実測，写真撮影等を行った。遺物については，平板実測やトータルステーションを用いて取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法等は，以下のとおりである。

平成 19 年度

確認調査と本調査を隣接する野方前段遺跡と並行して実施し，調査延面積は 5,400㎡であった。

確認調査は平成 19 年５月から約２か月間，調査区全体の包含層の確認を目的としてトレンチによる調査を行い，いくつかの下層確認トレンチを設定した。

本調査は平成 19 年 12 月３日から平成 20 年３月 19 日まで行った。調査は縄文時代早期から近世の包含層を対象として実施した。傾斜面は安全対策上Ⅴ層上面までとし，当該年度の調査を終了した。

平成 20 年度

隣接する野方前段遺跡と並行して調査を実施した。調査期間は平成 20 年５月 22 日から平成 21 年３月 19 日で，調査延面積は 10,800㎡であった。調査は，縄文時代早期から近世の包含層を対象とし，Ⅷ層上面までの調査を終了した部分にはトレンチを設定し，旧石器時代相当層の確認調査を行った。

平成 21 年度

調査期間は平成 21 年５月８日～平成 22 年３月 19 日，調査延面積は 14,800㎡であった。調査は，旧石器時代から近世の包含層を対象とした。

平成 22 年度

調査期間は平成 22 年５月 10 日～平成 23 年３月 11 日，調査延面積は 13,720㎡であった。調査は，旧石器時代から近世の包含層全時代を対象とした。一部は調査終了後，部分的に引き渡しを行い，Ｄ～Ｌ－ 15～20 区は，一部を除き調査を終了した。

平成 23 年度

調査期間は平成 23 年５月９日～平成 24 年３月９日，調査延面積は 27,000㎡であった。調査は，前年度からの引き続き旧石器時代から近世の包含層を対象に行った。東側側道予定地は 10 月に，林道迂回路用地は３月に，それ以外の調査終了箇所は次年度以降の調査に支障がない範囲で引き渡しを行った。

平成 24 年度

調査期間は平成 24 年５月８日～平成 25 年３月８日，調査延面積は 17,520㎡であった。調査は，旧石器時代から近世の包含層を対象に行った。工事の関係上，14～25 区の調査を先行し，11 月末に引き渡しを行った。その後，残りの箇所の調査を行い，３月に次年度の調査に支障のない範囲で引き渡しを行った。

平成 25 年度

調査期間は平成 25 年４月 22 日～平成 25 年 10 月 25 日，調査延面積は 8,000㎡であった。概ね全時代の包含層を対象として調査を行った。調査終了後に引き渡しを行い，７年に及ぶ本遺跡の本調査の全てを終了した。

２　遺構の認定と検出方法

本遺跡で検出された遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

（１）遺構の認定・分類・時期判断

本編掲載の遺構は検出面・埋土状況や色調・規模等を基に発掘調査担当者間で検討し，認定及び時期判断を行ったものである。主な遺構の認定及び時期判断については，以下のとおりである。

竪穴住居状遺構・落とし穴・土坑・連穴土坑については，埋土や形状，遺物の出土など総合的に検討し，分類・認定・時期判断を行った。ただし，落とし穴・土坑の中には，検出面が該当時期の地層よりもかなり下位層で検出されたものもあるが，埋土の堆積状況や色調・遺構内（埋土中のものも含む）遺物等から総合的に検討し，時期判断を行った。

集石遺構については，時期を問わず概ね５個以上の礫が集中したものを集石遺構と認定した。時期については検出面や集石遺構内外の出土遺物の種類等で総合的に検討し，判断した。

（２）遺構の検出方法

本編掲載の竪穴住居状遺構・落とし穴・土坑・連穴土


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26
（1グリッド　10m X 10m）

第５図　グリッド配置図

坑・集石遺構等の検出については，各年度とも共通の調査方法として，当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが，判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。

また，畑地や雑木林があった箇所の調査では，撹乱を受けている箇所があり，遺構の検出をはじめとする調査に支障があった。この場合，ミニトレンチの設定，撹乱部分の埋土除去等，最善の調査法を調査担当職員で検討し，遺構の推定ラインも含め残存部の記録保持に努めた。

３　整理・報告書作成作業の方法

平成 22 年度から平成 25 年度までは発掘調査作業と並行して整理作業を実施した。各年度とも前年度までの発掘調査成果品の整理作業を中心に，平成 23 年度以降は前年度の整理作業の成果を引き継ぎ実施した。そのため，基本的な整理作業の方法は同じである。

平成 22 年度

平成 19～21 年度までの発掘調査成果品の図面整理，水洗い，注記等を行った。遺跡名を表す記号は「ＴＪ」とした。

分類・接合は遺構内遺物と包含層遺物に分けた後，土器の胎土や文様等で分類し，さらにグリッドごとに分けて接合を行い，その後エリアを広げて接合する方法をとった。石器については，剥片石器と礫石器に分けた後，器種及び石材別に分類した。出土石器の一部については，作業の効率化を図るため，民間調査組織への委託を行った。

遺物出土分布図は平板実測で取り上げた情報については，デジタイザーを用いてデータ化し，トータルステーションで取り上げたデータと統合し，図化ソフトを使用して作成した。

土層断面や遺構のトレースは，鉛筆トレースで下図を作り，点検・修正後，ペントレース及びデジタルトレースを行った。

平成 23 年度～平成 25 年度

平成 23 年度は注記作業の効率化を図るためジェットマーカーを使用し，原稿執筆も開始した。平成 24･25 年度は刊行計画に基づき弥生時代～近世編の報告書作成作業を行った。

平成 26 年度

刊行計画に基づき弥生時代～近世編の報告書作成作業及び旧石器時代，縄文時代前期～晩期の整理作業を実施した。平成 27 年２月に『天神段遺跡１　弥生時代～近世編』を刊行した。

平成 27 年度

刊行計画に基づき縄文時代前期～晩期編の報告書作成作業及び旧石器時代，縄文時代早期の遺構・遺物の分類・数量把握を実施した。平成 28 年３月に『天神段遺跡２　縄文時代前期～晩期編』を刊行した。

平成 28 年度

前年度に引き続いて旧石器時代～縄文時代草創期編，縄文時代早期編の報告書作成作業を実施した。作業にあたって，報告書に掲載する旧石器時代，縄文時代早期の遺構・遺物の分類・数量把握を行った。さらに，縄文時代早期の遺構については挿図作成・原稿執筆を行った。

なお，旧石器時代の遺物の整理作業と縄文時代早期の遺物の実測・拓本・トレース等の整理作業の一部を民間調査組織である(株)九州文化財研究所へ委託した。

平成 29 年度

『天神段遺跡３　縄文時代早期編』及び『天神段遺跡４　旧石器時代～縄文時代草創期編』の刊行へ向けて，報告書作成作業を実施した。

『天神段遺跡３　縄文時代早期編』に関しては，遺構分類の再検討や原稿の校正を行った。さらに，包含層出土遺物の実測・拓本・トレース・写真撮影・レイアウトを行った。遺構はその形態的な特徴等を基に，土器はその器形や施文等の特徴を基に分類掲載した。

第２節　層序

天神段遺跡の基本層序は隣接する野方前段遺跡Ｂ地点（2012 年３月報告書刊行済）と同じで，包含層や遺構・遺物の年代を把握する手がかりの１つとなる火山灰等の詳細については，以下のとおりである。

Ⅰ層：表土（旧耕作土）である。

Ⅱ層：明黄色パミスで，Ｐ２（安永ボラ，1779 年の桜島起源の噴出物）が点在する層である。

Ⅲ層：黒色系の色調を持つ層である。色調の違いで３層に分層した。

Ⅲａ層：黒色土で，中世～近世の遺物包含層である。

Ⅲｂ層：暗茶褐色土で，弥生時代～古代の遺物包含層である。

Ⅲｃ層：オリーブ褐色土で，Ⅲｂ層と同じく，弥生～古代の遺物包含層である。

Ⅳ層：黄褐色パミス（Ｐ７，約 5,000 年？前の桜島起源の噴出物）を含む層で，色調の違いで２層に分層した。

Ⅳａ層：茶褐色土で，Ｐ７をベースとした腐植土層である。縄文時代晩期～弥生時代の遺物包含層である。

Ⅳｂ層：黄褐色土で，Ｐ７を含む層である。縄文時代前期～晩期の遺物包含層である。

Ⅴ層：アカホヤ火山灰関連の層である。色調の違いで３層に分層した。

Ⅴａ層：褐色を呈するアカホヤ火山灰をベースとした腐植土層で，縄文時代前期～中期の遺物包含

層である。

Ｖｂ層：赤褐色土で，アカホヤ火山灰一次の軽石が点在するアカホヤ二次堆積層である。縄文時代前期・中期の遺物包含層である。

Ｖｃ層：アカホヤ火山灰一次の軽石（約 7,300 年前，鬼界カルデラ起源の噴出物）層である。無遺物層である。

Ⅵ層：明黄褐色土で，縄文時代早期後葉を主体とする遺物包含層である。

Ⅶ層：黒褐色土で，縄文時代早期前葉～中葉の遺物包含層である。Ｐ 12 やＰ 13（いずれも桜島起源の噴出物）を含む層である。

Ⅷ層：黄白色火山灰で，薩摩火山灰層（Ｐ 14，約 12,800 年前の桜島起源の噴出物）である。無遺物層である。

Ⅸ層：黒褐色粘質土である。縄文時代草創期及び細石刃文化期の遺物包含層である。

Ｘ層：茶褐色弱粘質土である。Ⅸ層と同じく細石刃文化期の遺物包含層である。

Ⅺ層：黒褐色粘質土で，Ⅸ層よりも粘質が弱い。ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。

Ⅻ層：茶褐色硬質土で，Ｐ 16（桜島起源の噴出物で，詳細な年代は不詳）と呼ばれるパミスを含む層である。ナイフ形石器文化期の包含層である。

ⅩⅢ層：暗茶褐色硬質土で，Ｐ 16 を含む層である。

ⅩⅣ層：黄茶褐色硬質土で，Ｐ 17（約 26,000 年前の桜島起源の噴出物）呼ばれるパミスを含む層である。

ⅩⅤ層：暗黄褐色土で，礫群が検出した。遺物は少量の剥片等が出土し，ナイフ形石器文化期の包含層と考えられる。

ⅩⅥ層：明黄白色砂質土である。

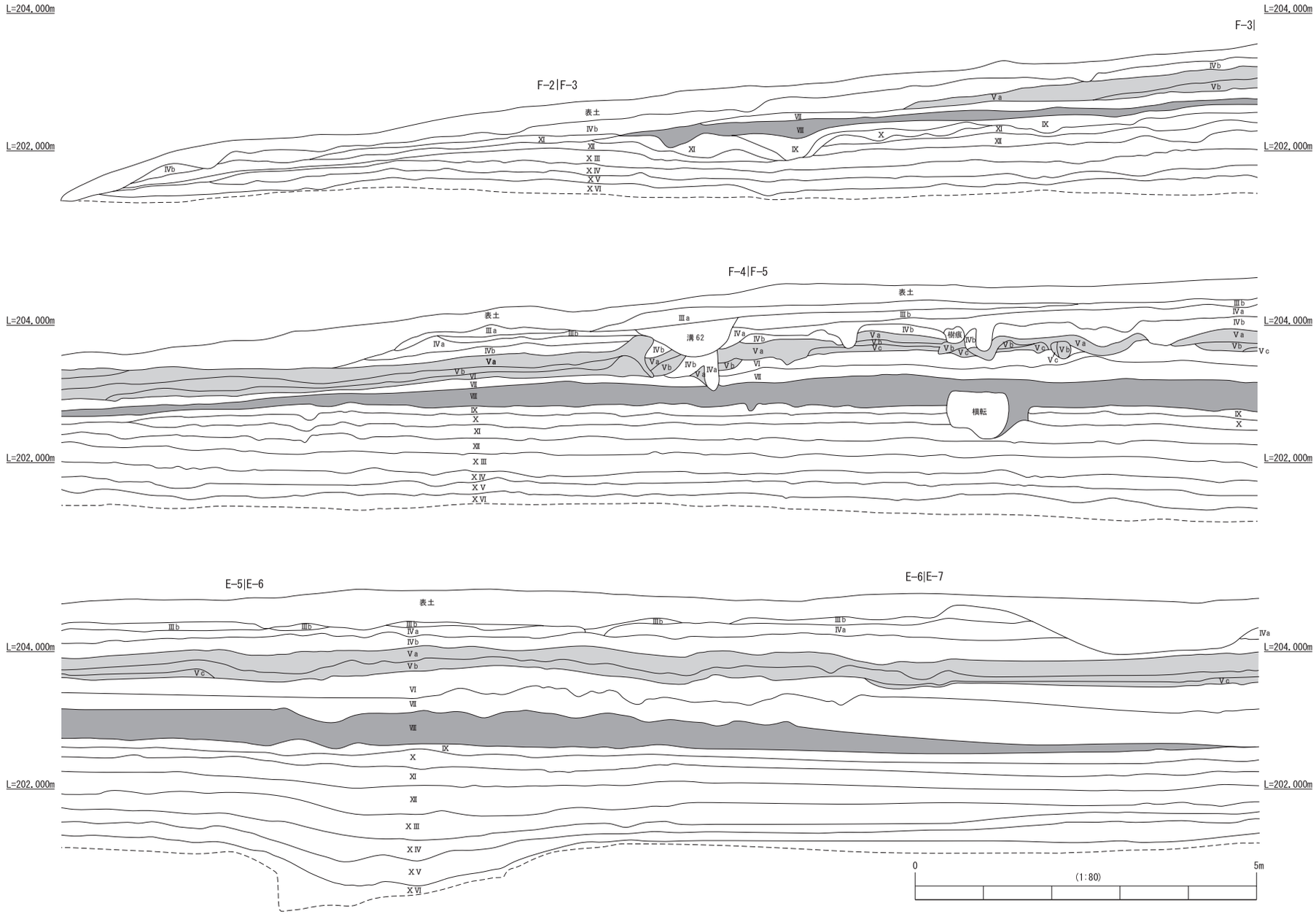
ⅩⅦ層：黄白色砂質土で，この層からＡＴ（シラス）と呼ばれる約 29,000 年前の姶良カルデラ起源の火山灰層となる。

ⅩⅦ層は無遺物層で，南九州本土では厚く堆積していることがこれまでの調査や火山の研究等で周知されている。そのため，必然的に掘削深度が深くなる，安全面や調査の効率化を図るという観点から，このシラス上面で調査を終了した。

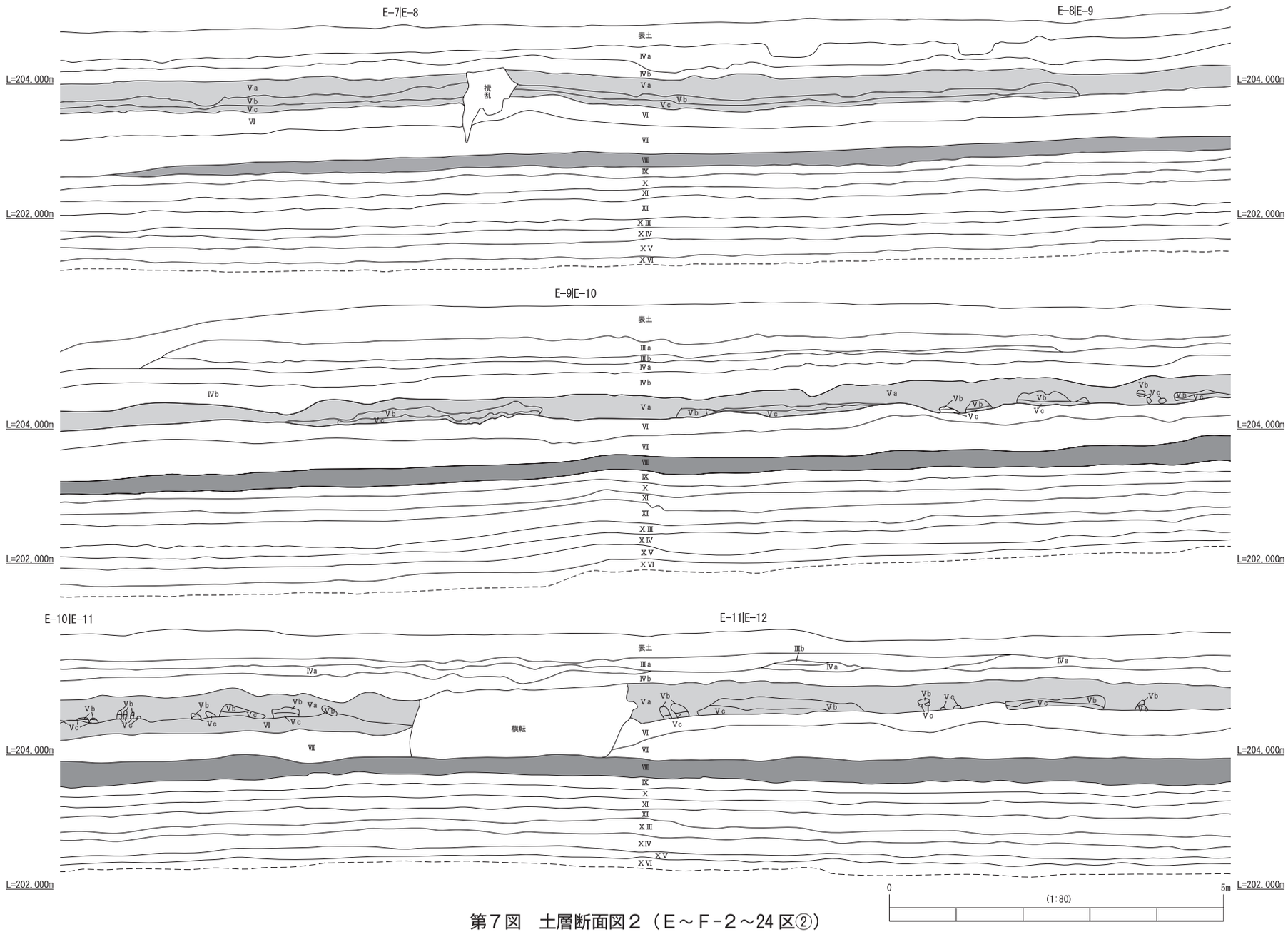
第２表　天神段遺跡の基本層序

層　位	色　調　等	平均厚 cm
Ⅰ層	表土	20
Ⅱ層	明黄色パミス（Ｐ２）	3
Ⅲａ層	黒色土	5
Ⅲｂ層	暗茶褐色土	5
Ⅲｃ層	オリーブ褐色土	5
Ⅳａ層	茶褐色土	10
Ⅳｂ層	黄褐色土（Ｐ７混）	20
Ⅴａ層	褐色土	20
Ⅴｂ層	赤褐色土	30
Ⅴｃ層	明赤褐色パミス（アカホヤ一次）	10
Ⅵ層	明黄褐色土	20
Ⅶ層	黒褐色土（Ｐ 12・Ｐ 13 混）	50
Ⅷ層	黄白色火山灰（Ｐ 14）	25
Ⅸ層	黒褐色粘質土	10
Ⅹ層	茶褐色弱粘質土	20
Ⅺ層	黒褐色粘質土	5
Ⅻ層	茶褐色硬質土（Ｐ 16 混）	20
ⅩⅢ層	暗茶褐色硬質土（Ｐ 16 混）	40
ⅩⅣ層	黄茶褐色硬質土（Ｐ 17 混）	20
ⅩⅤ層	暗黄褐色土	5
ⅩⅥ層	明黄白色砂質土	20
ⅩⅦ層	黄白色砂質土（ＡＴ）	－

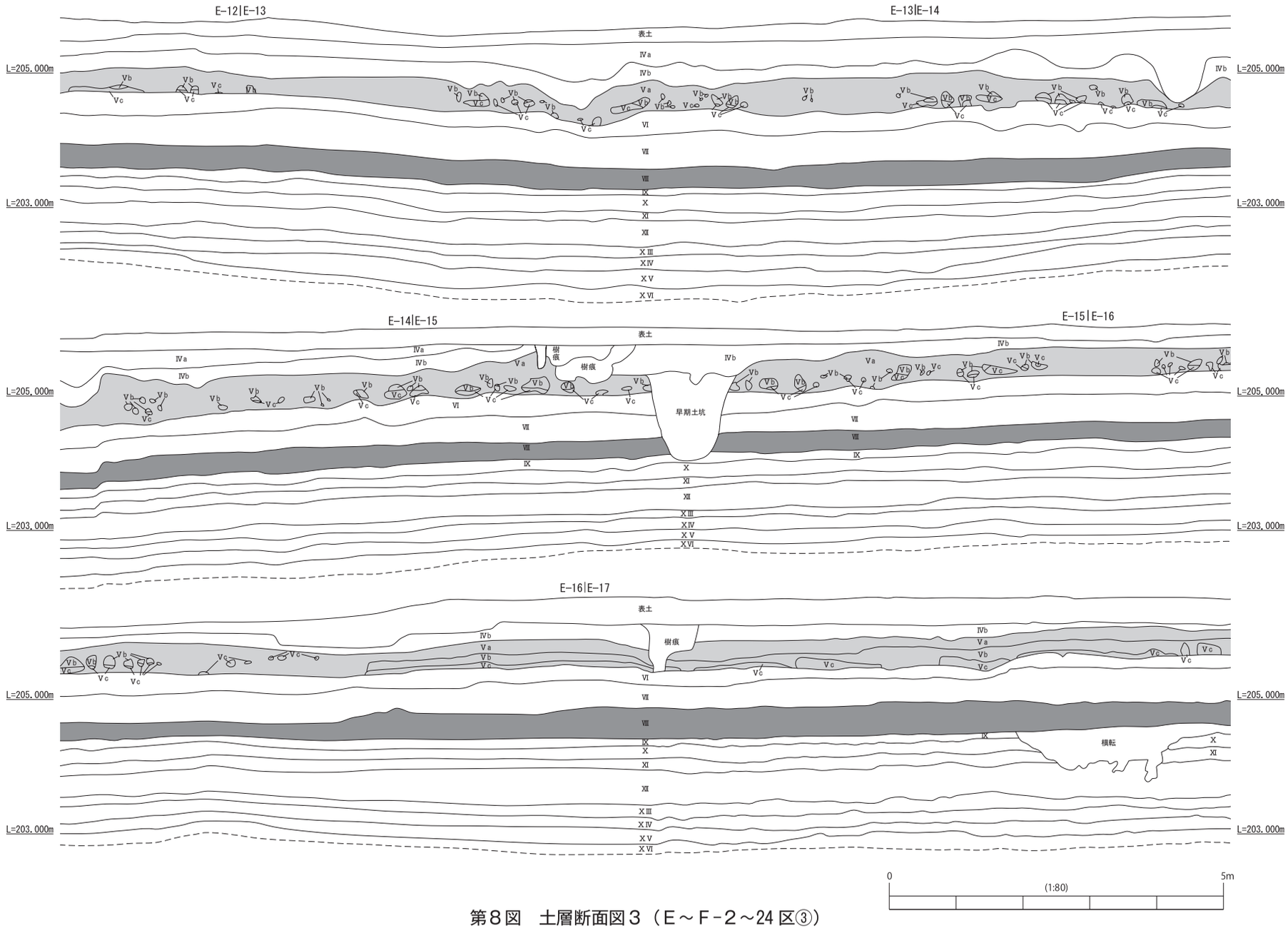
※火山灰の年代については，町田洋　新井房夫著 2003『新編火山灰アトラス―日本列島とその周辺―』東京大学出版会（pp. 108～110）から引用した。なお，年代は放射性炭素年代測定法で算出され，暦年較正した年代である。



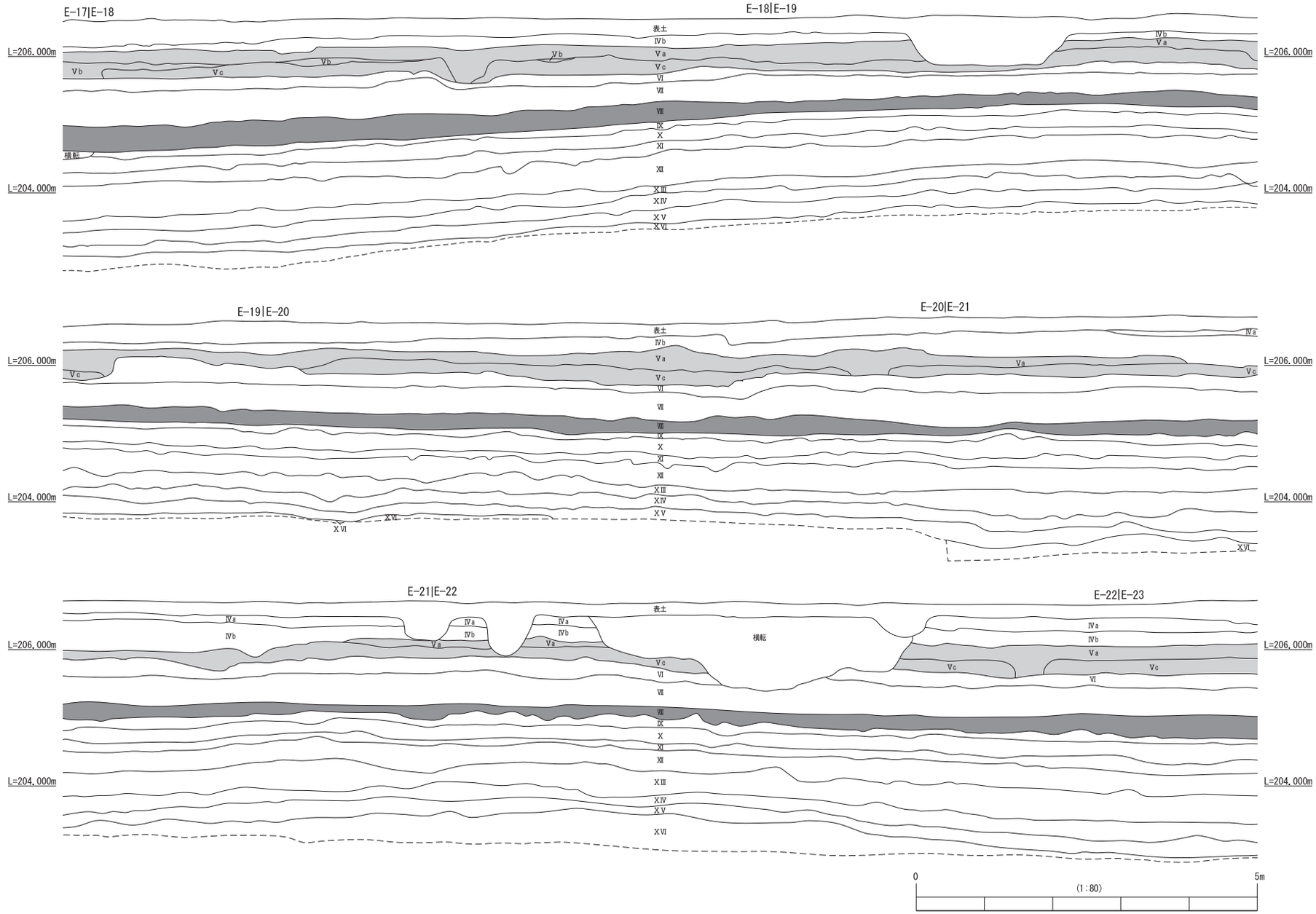
第６図　土層断面図１（Ｅ～Ｆ－２～24 区①）



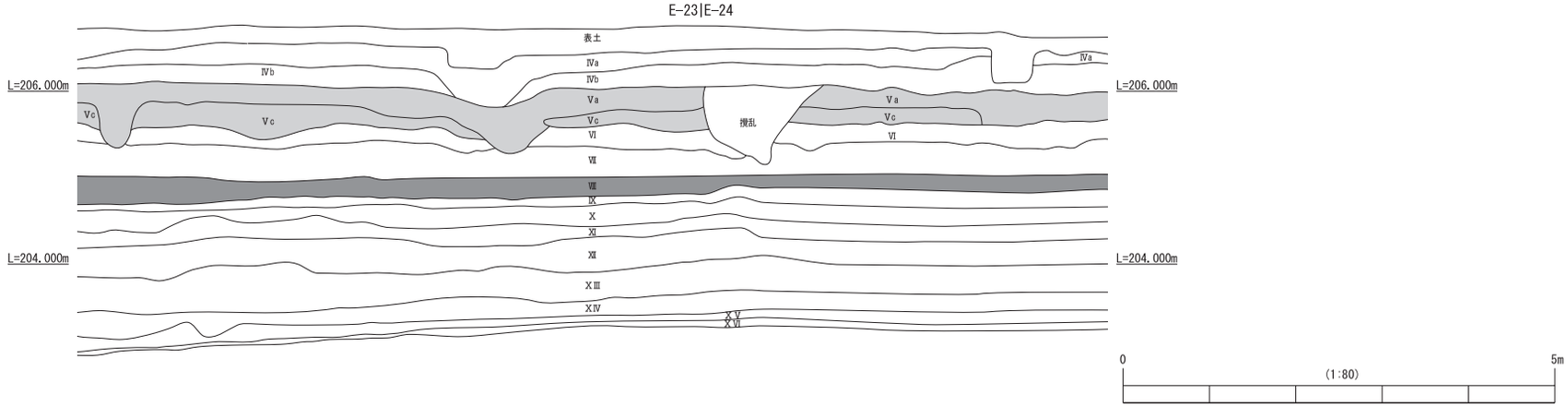
第７図　土層断面図２（Ｅ～Ｆ-２～24 区②）

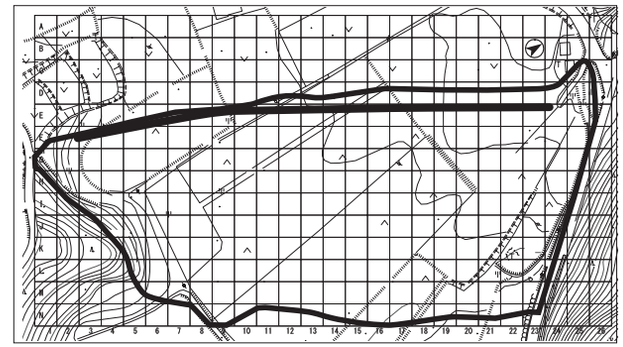


第８図　土層断面図３（Ｅ～Ｆ-２～24 区③）

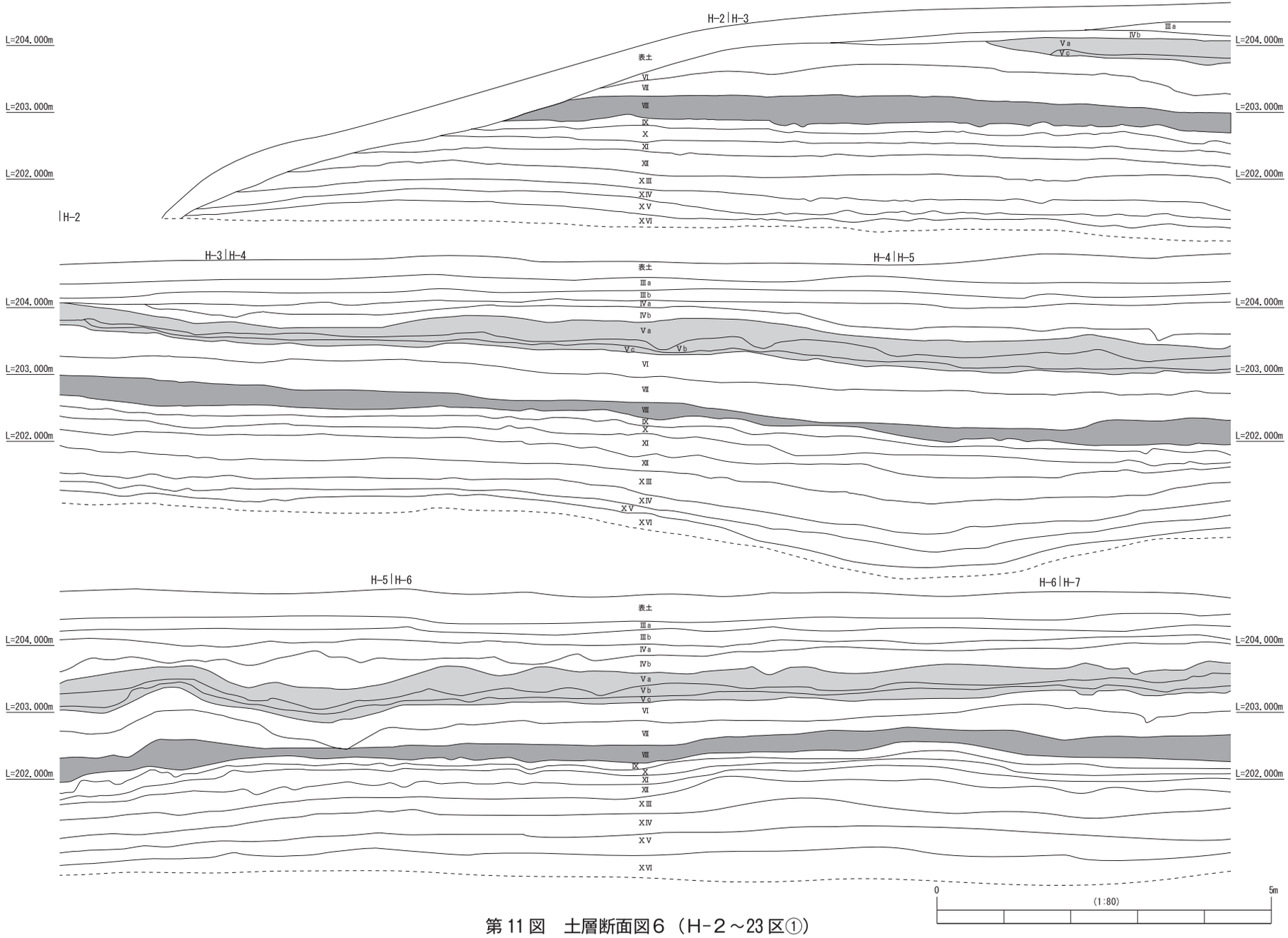


第９図　土層断面図４（Ｅ～Ｆ-２～24 区④）

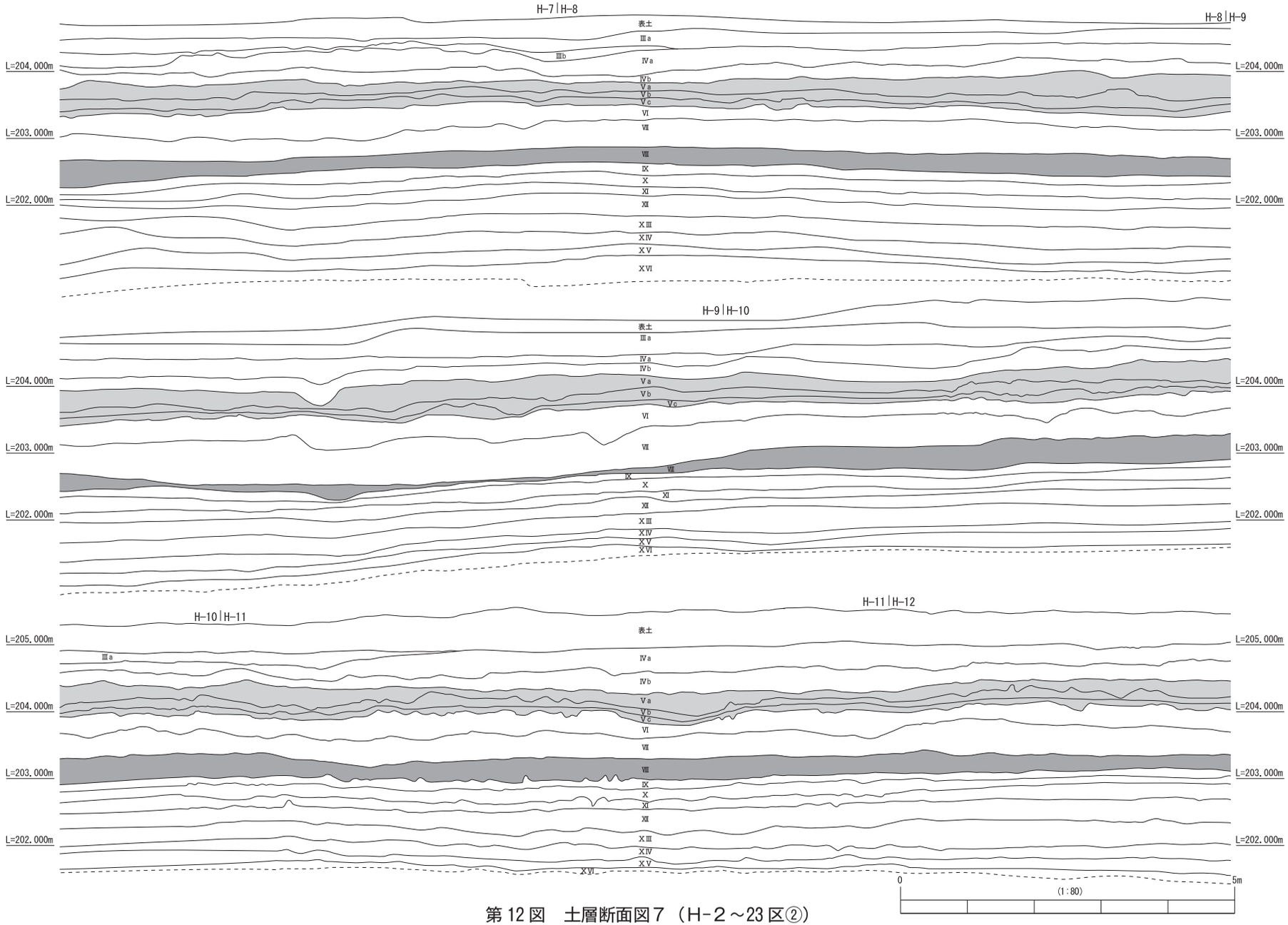




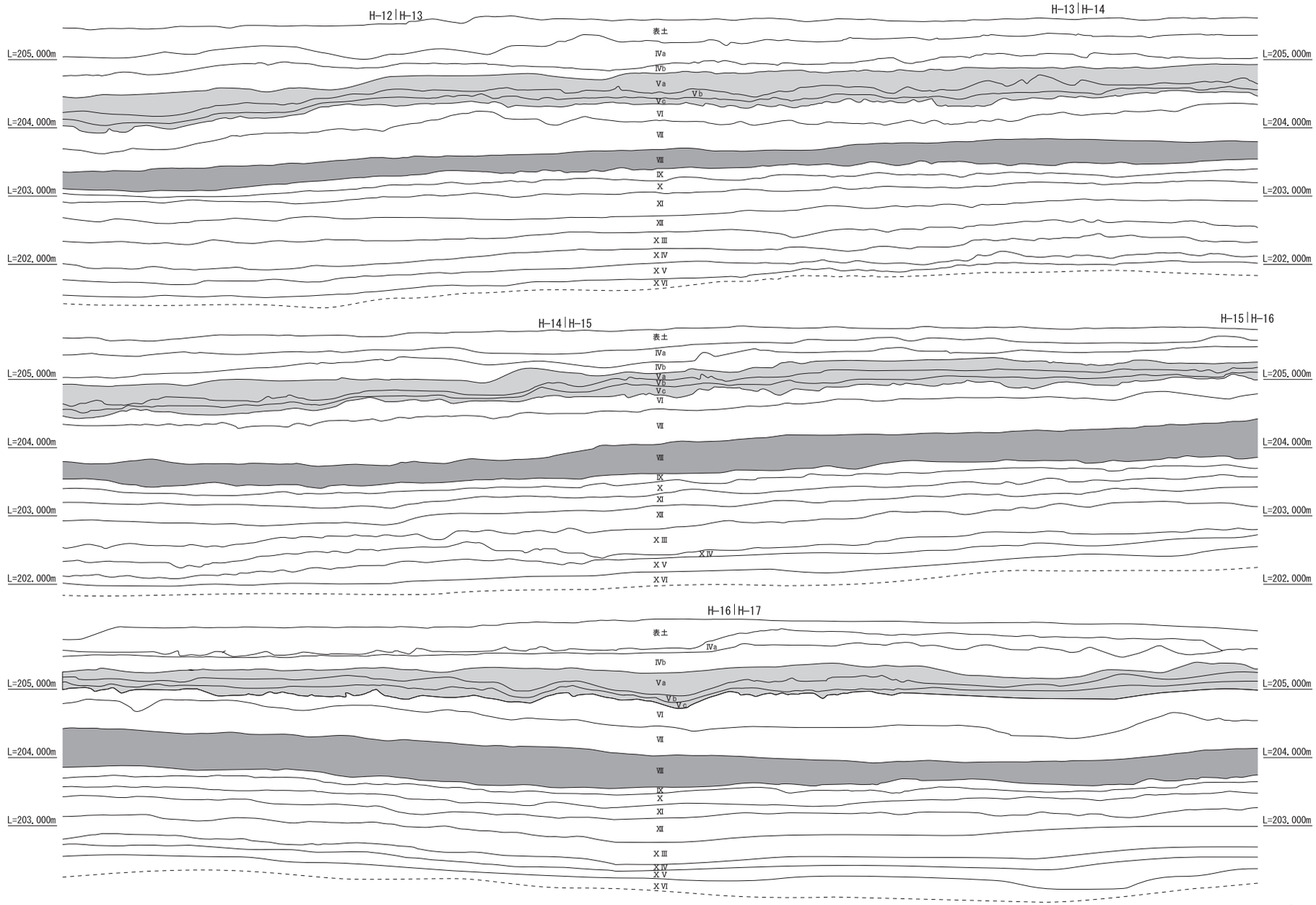
第10図　土層断面図５（Ｅ～Ｆ－２～24区⑤）



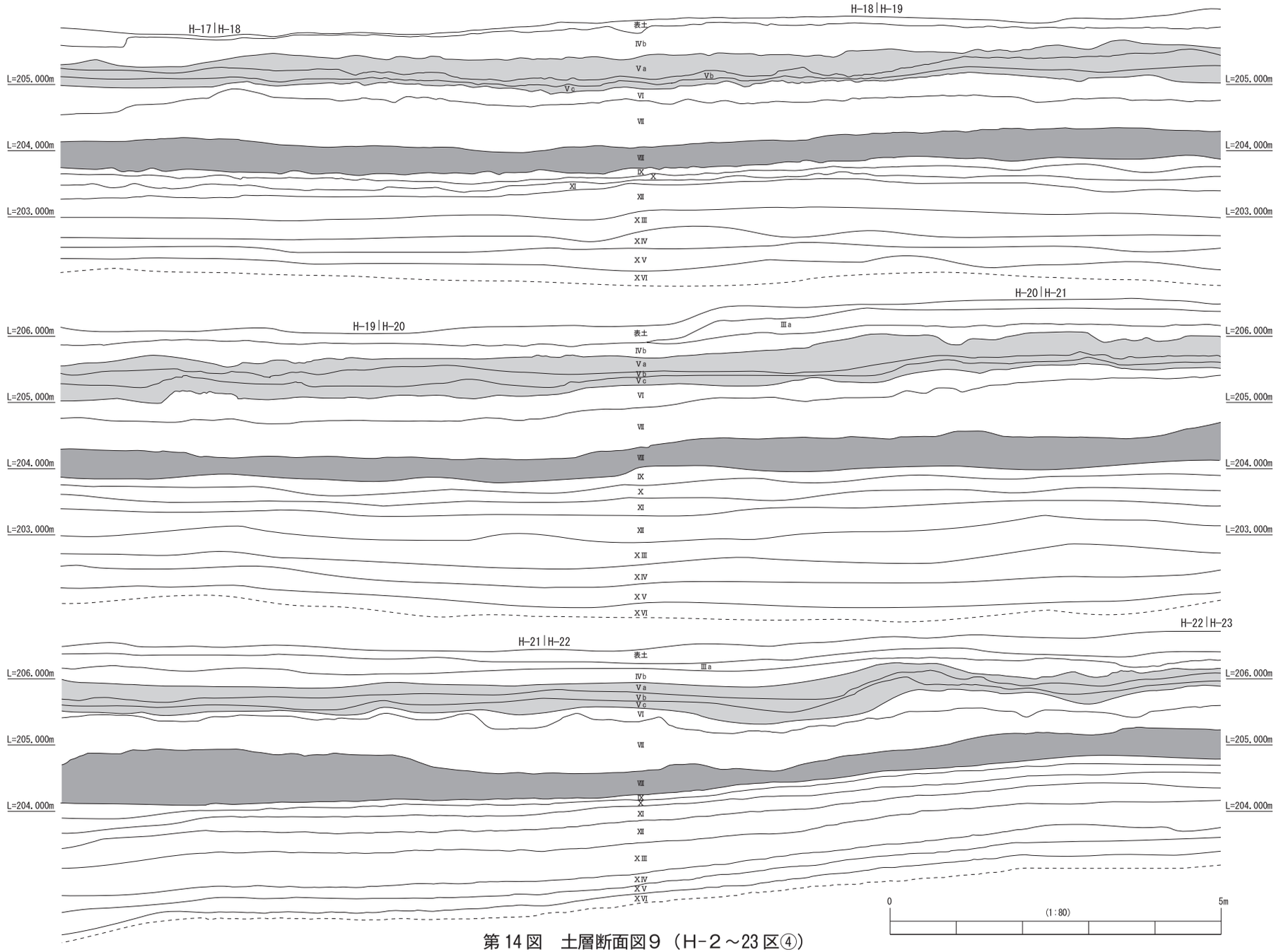
第 11 図　土層断面図６（H-２～23 区①）



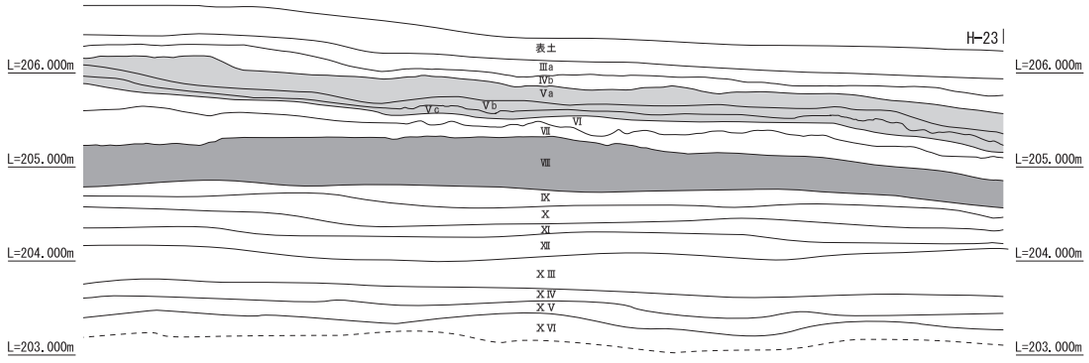
第 12 図　土層断面図７（H-２～23 区②）

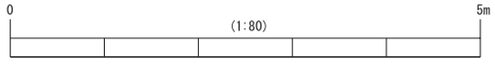


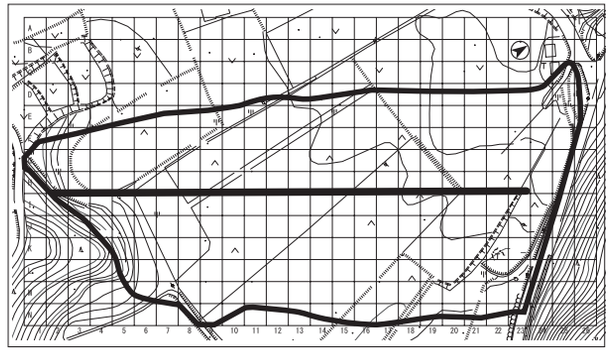
第13図　土層断面図8（H-2～23区③）



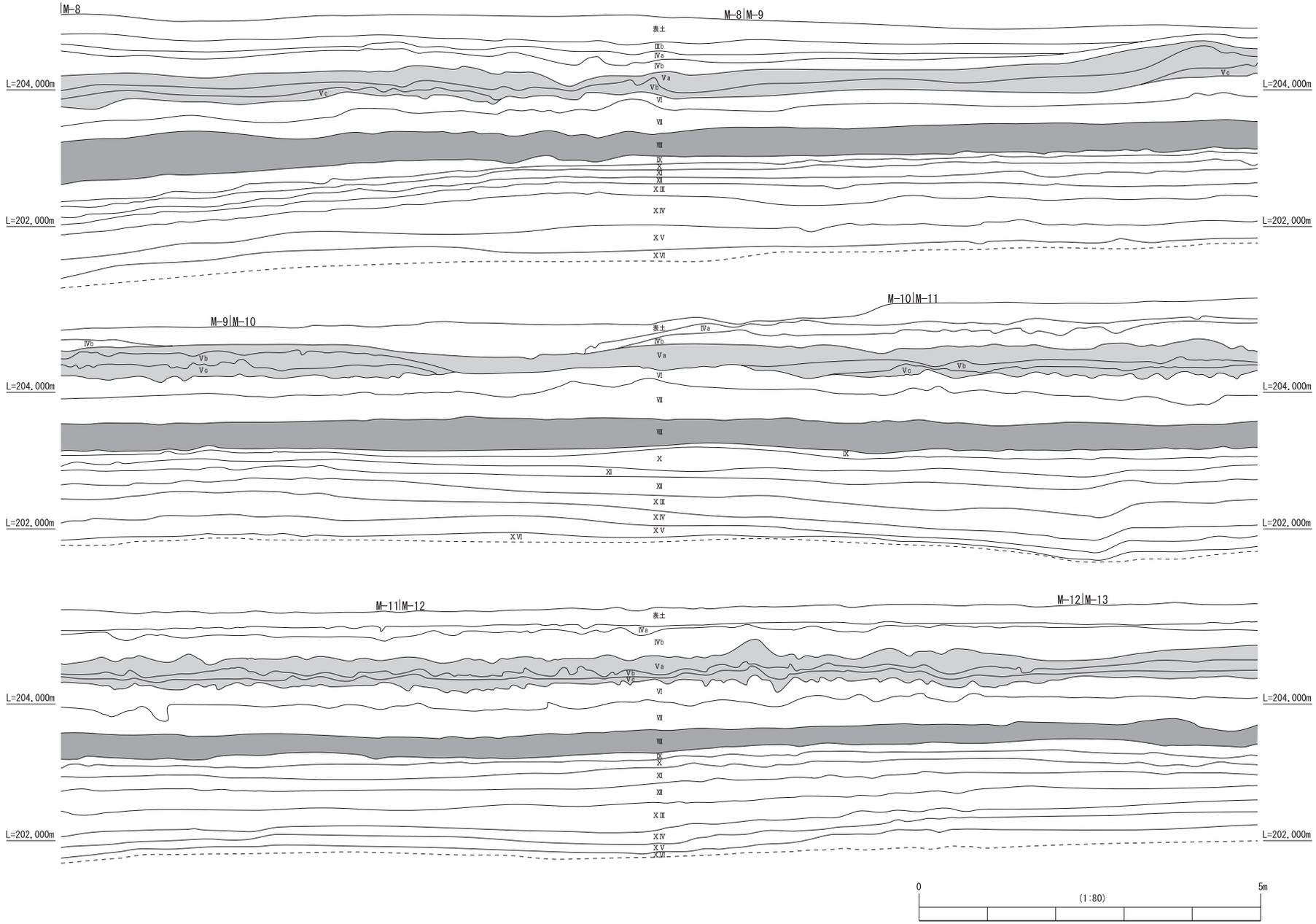
第 14 図　土層断面図９（H-２～23 区④）



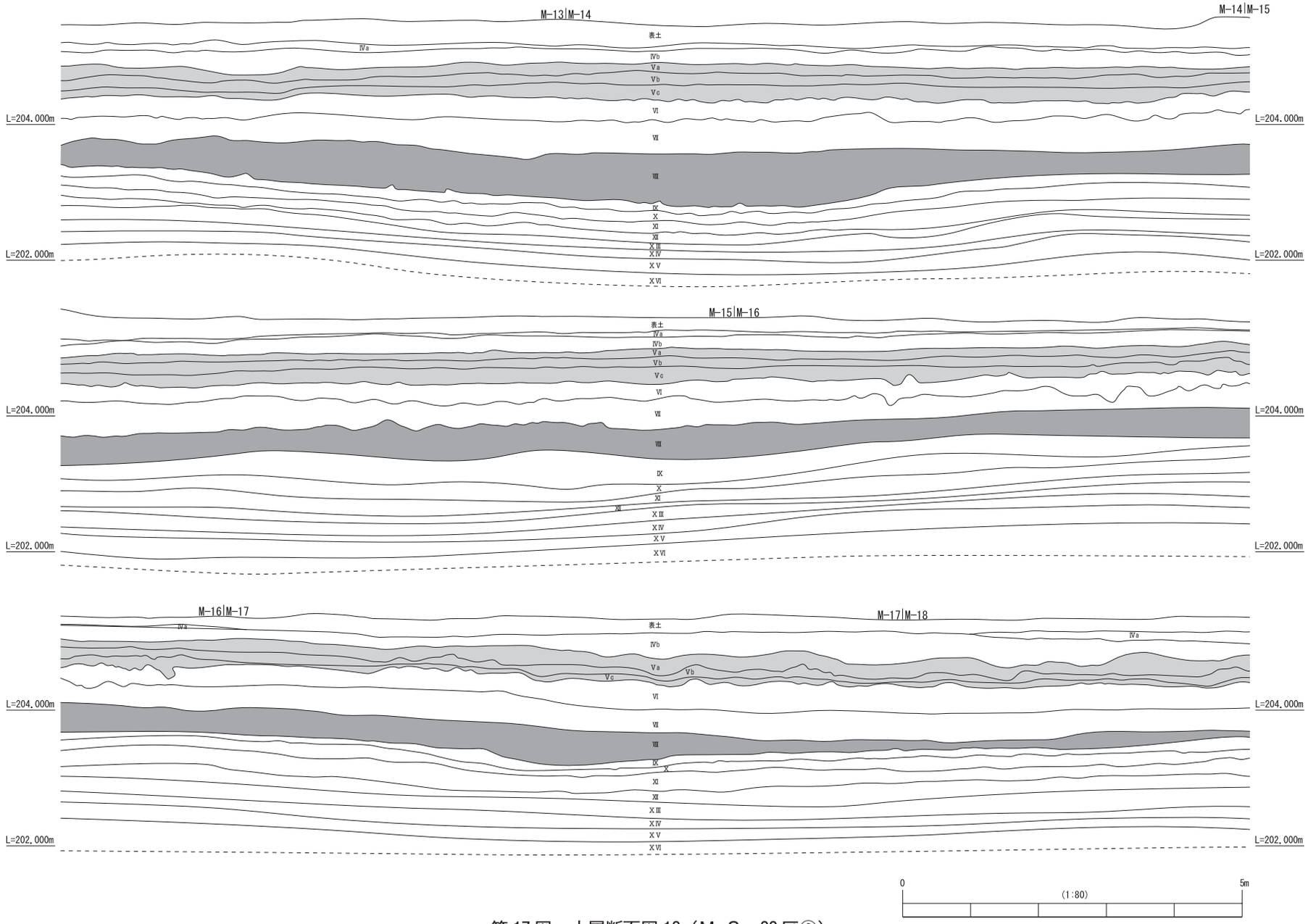




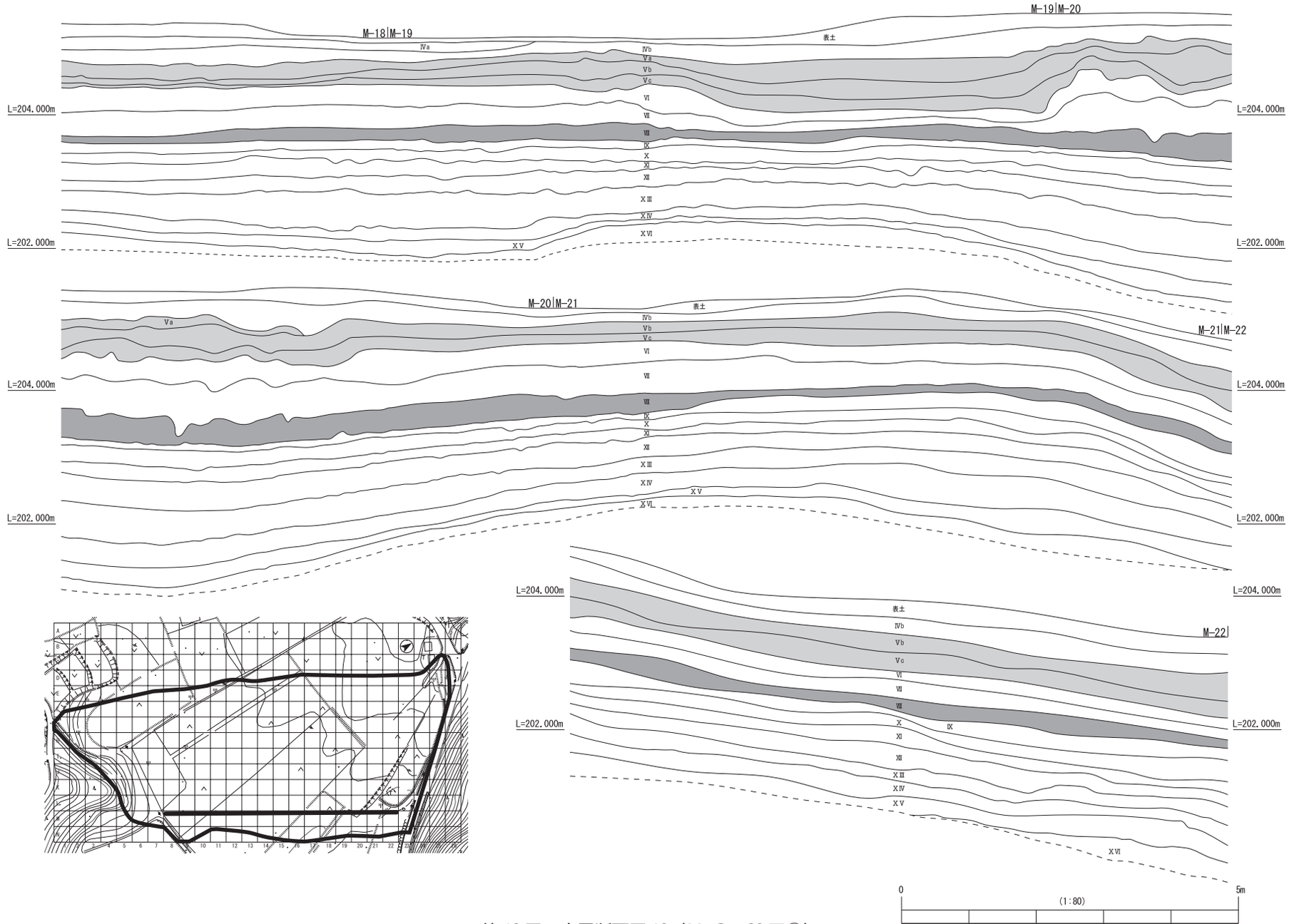
第 15 図　土層断面図 10（H-２～23 区⑤）



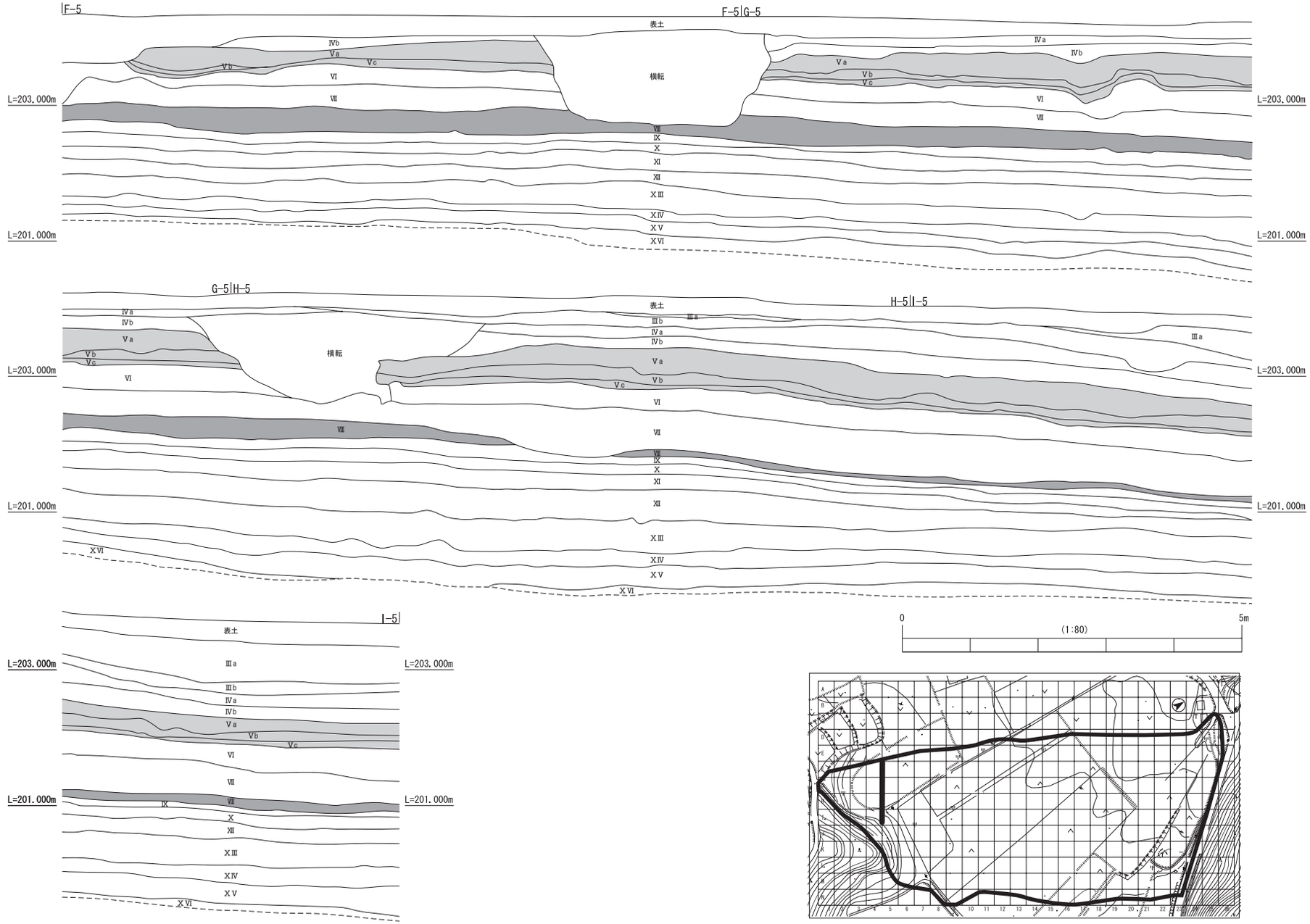
第 16 図　土層断面図 11（M-８～22 区①）



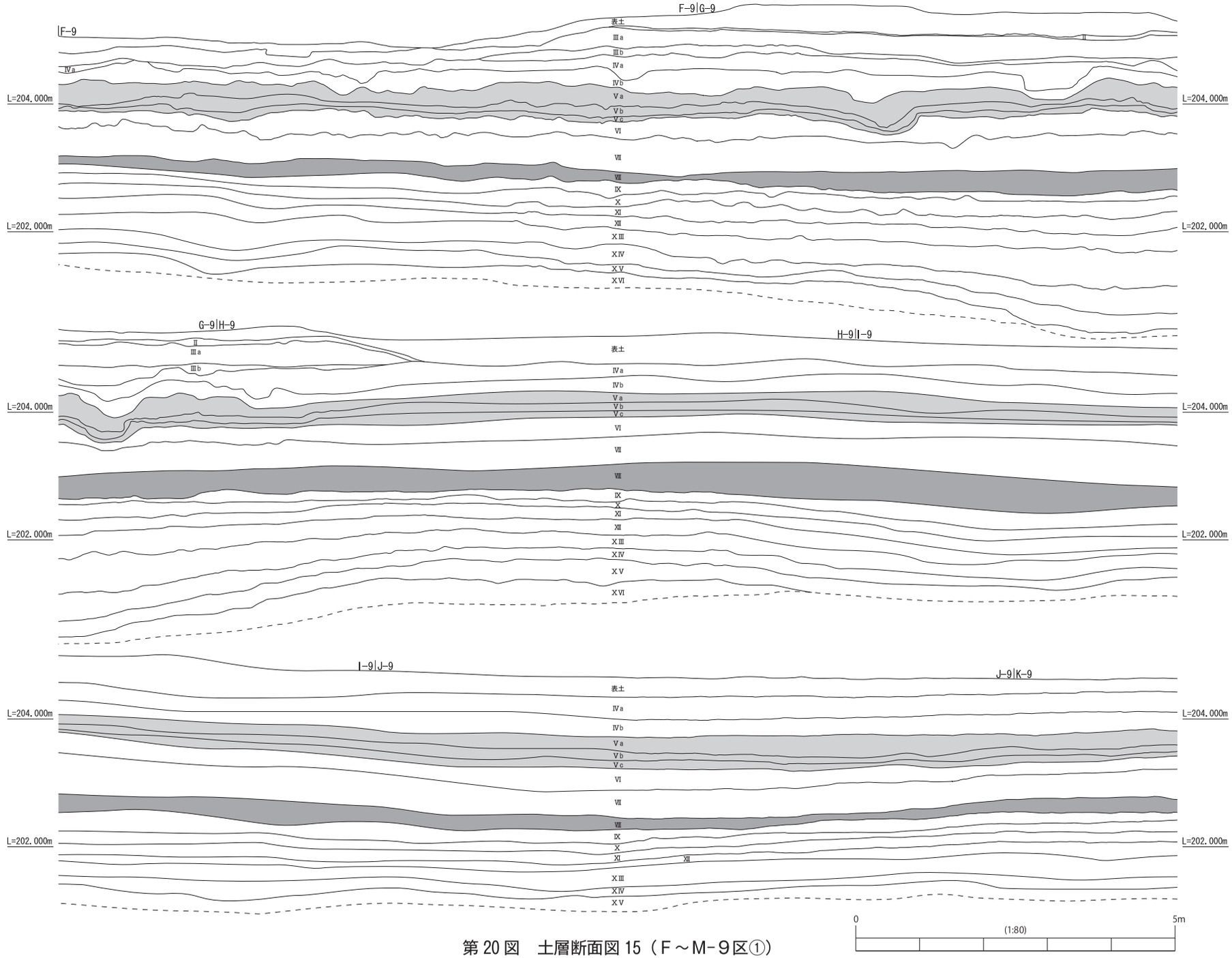
第17図　土層断面図12（M-８～22区②）



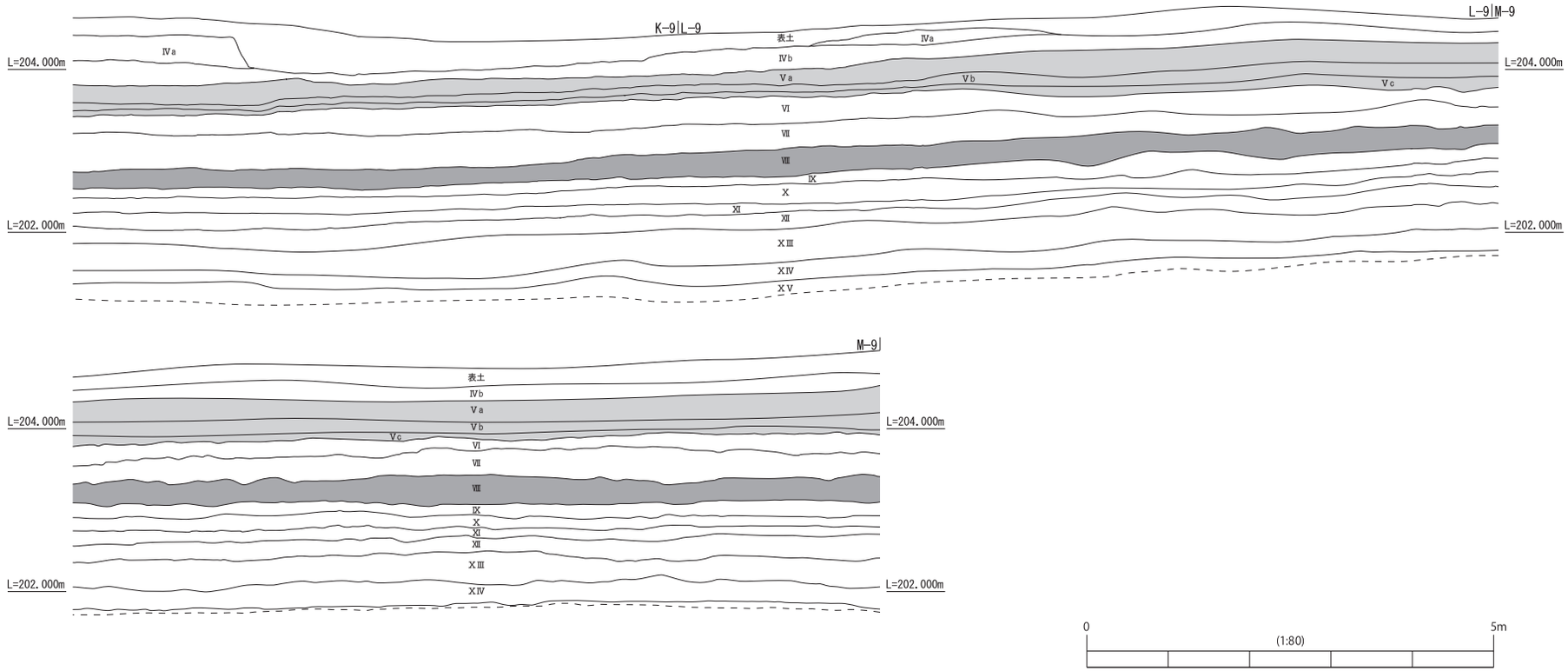
第 18 図　土層断面図 13（M-８～22 区③）

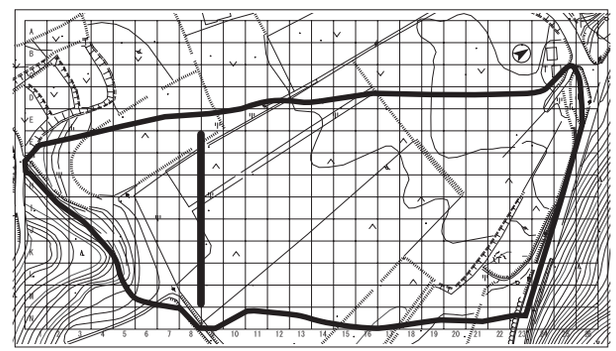


第19図　土層断面図14（F～I-5区）

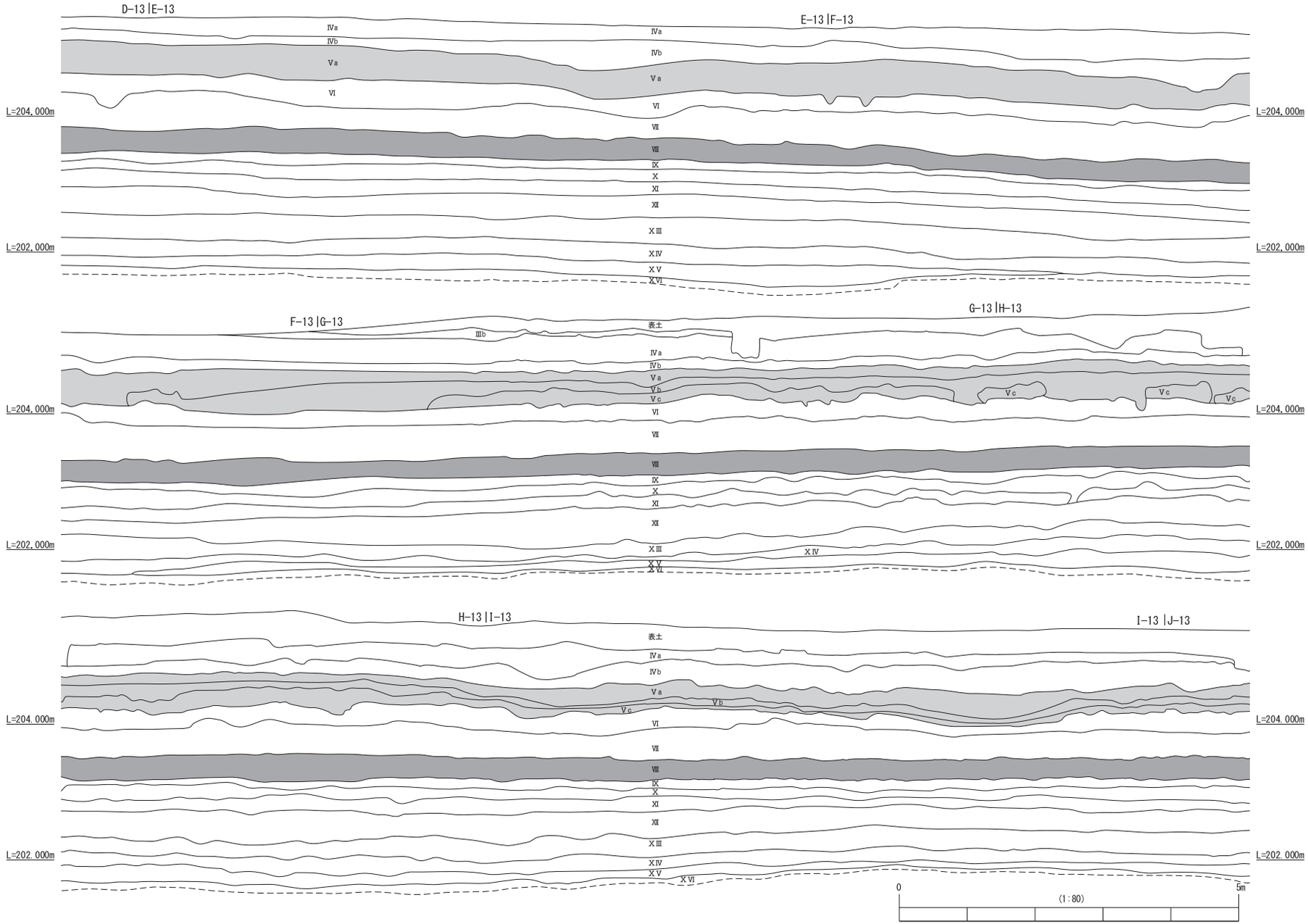


第 20 図　土層断面図 15（F～M-9区①）

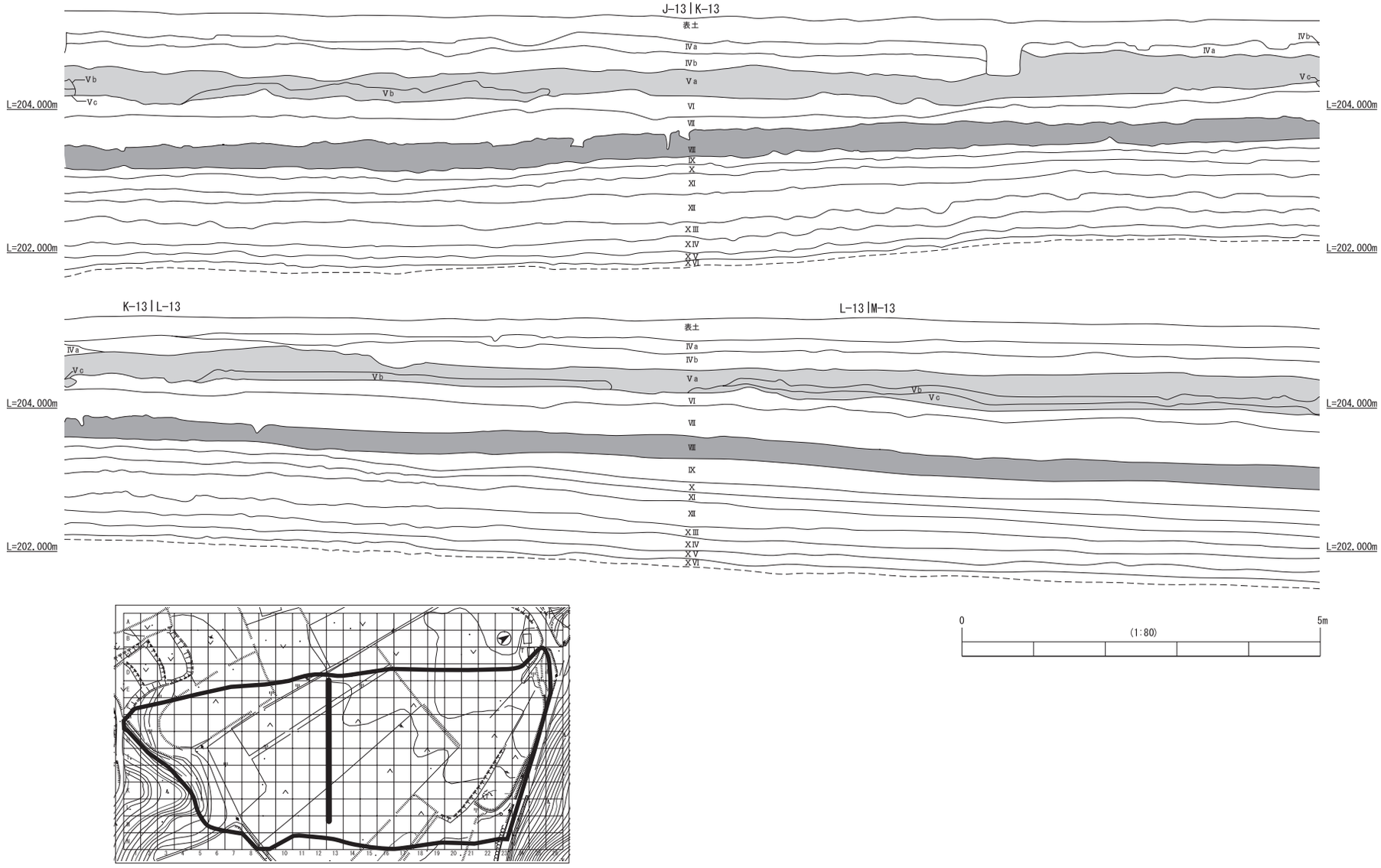




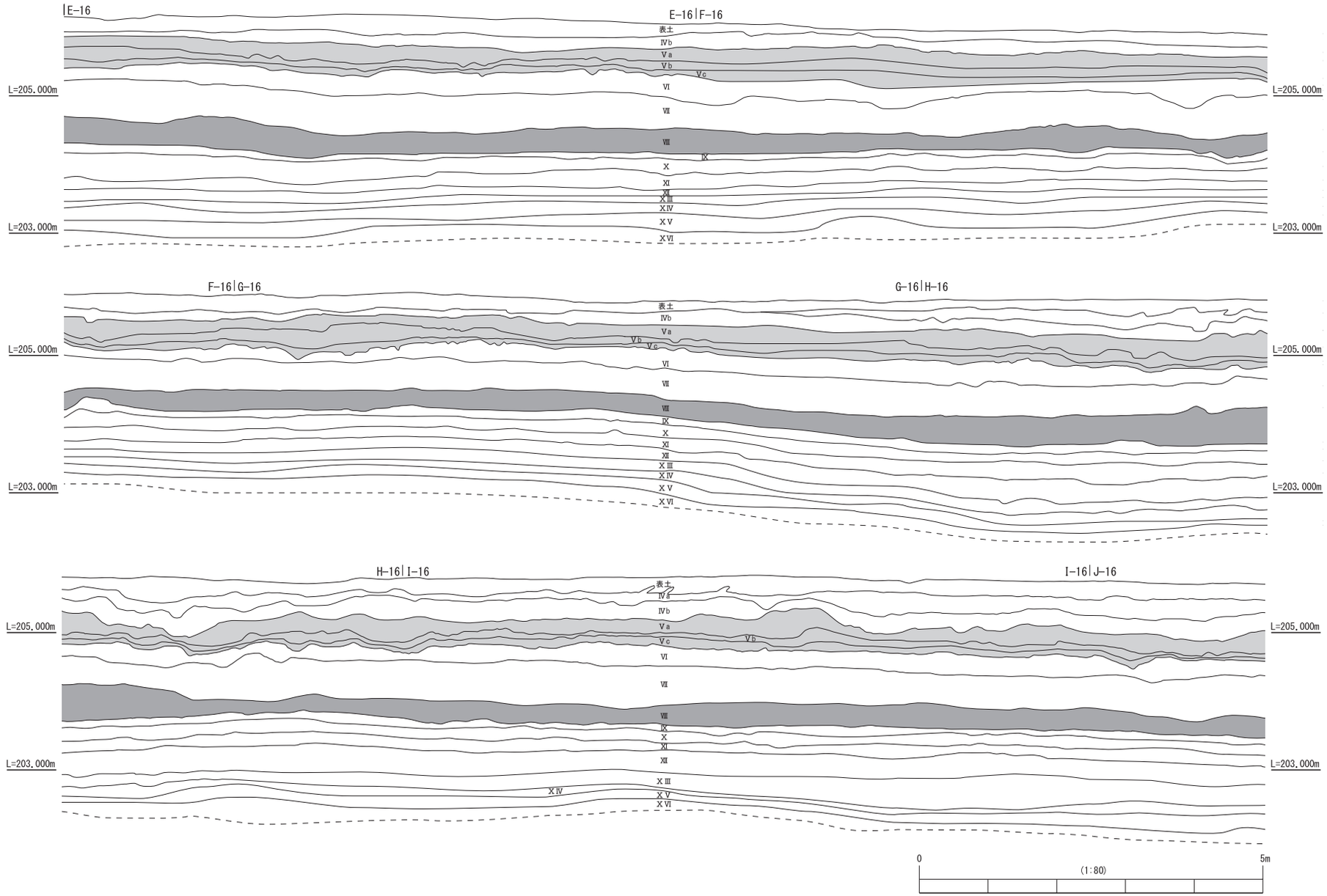
第 21 図　土層断面図 16（Ｆ～Ｍ-９区②）



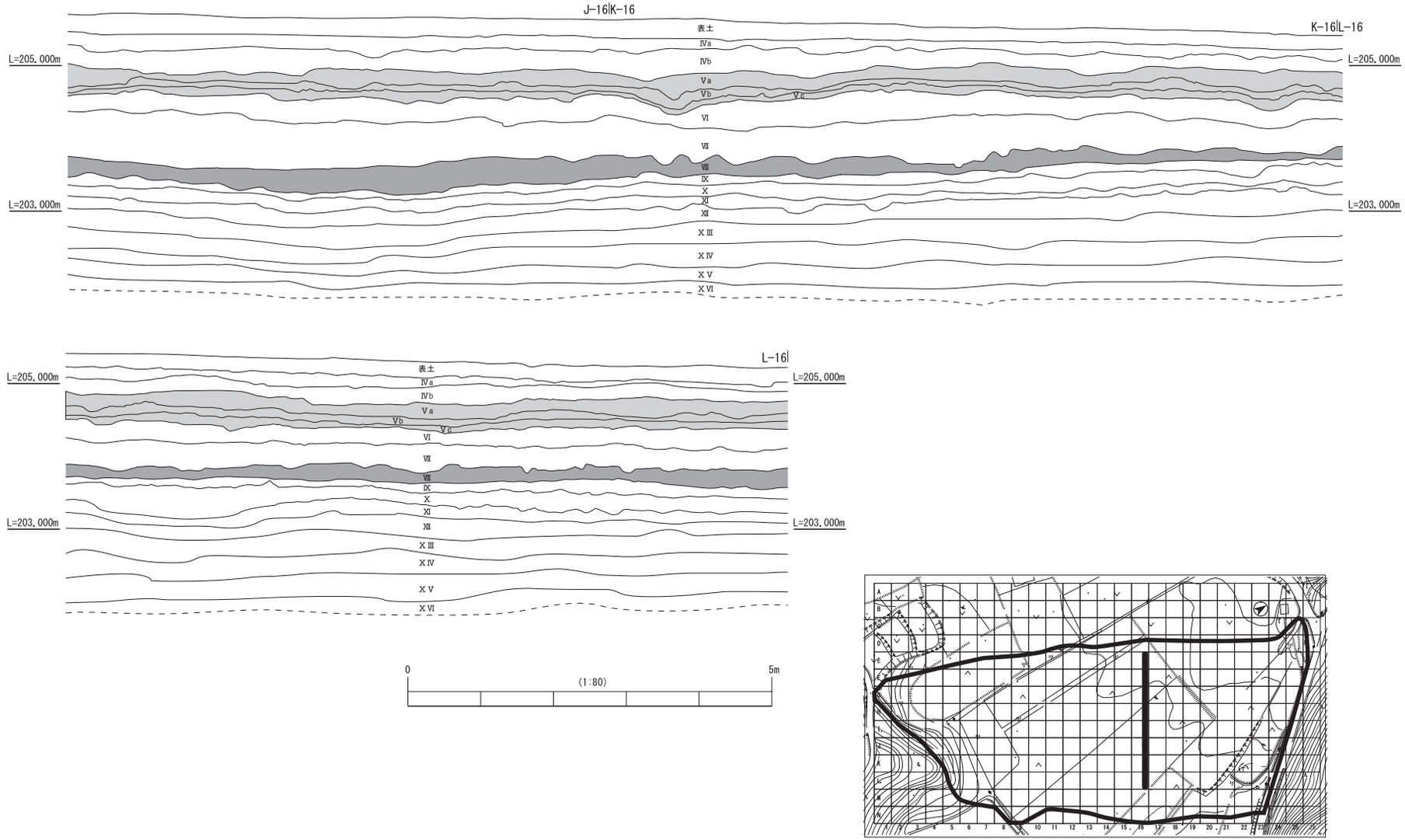
第 22 図　土層断面図 17（D～M-13 区①）



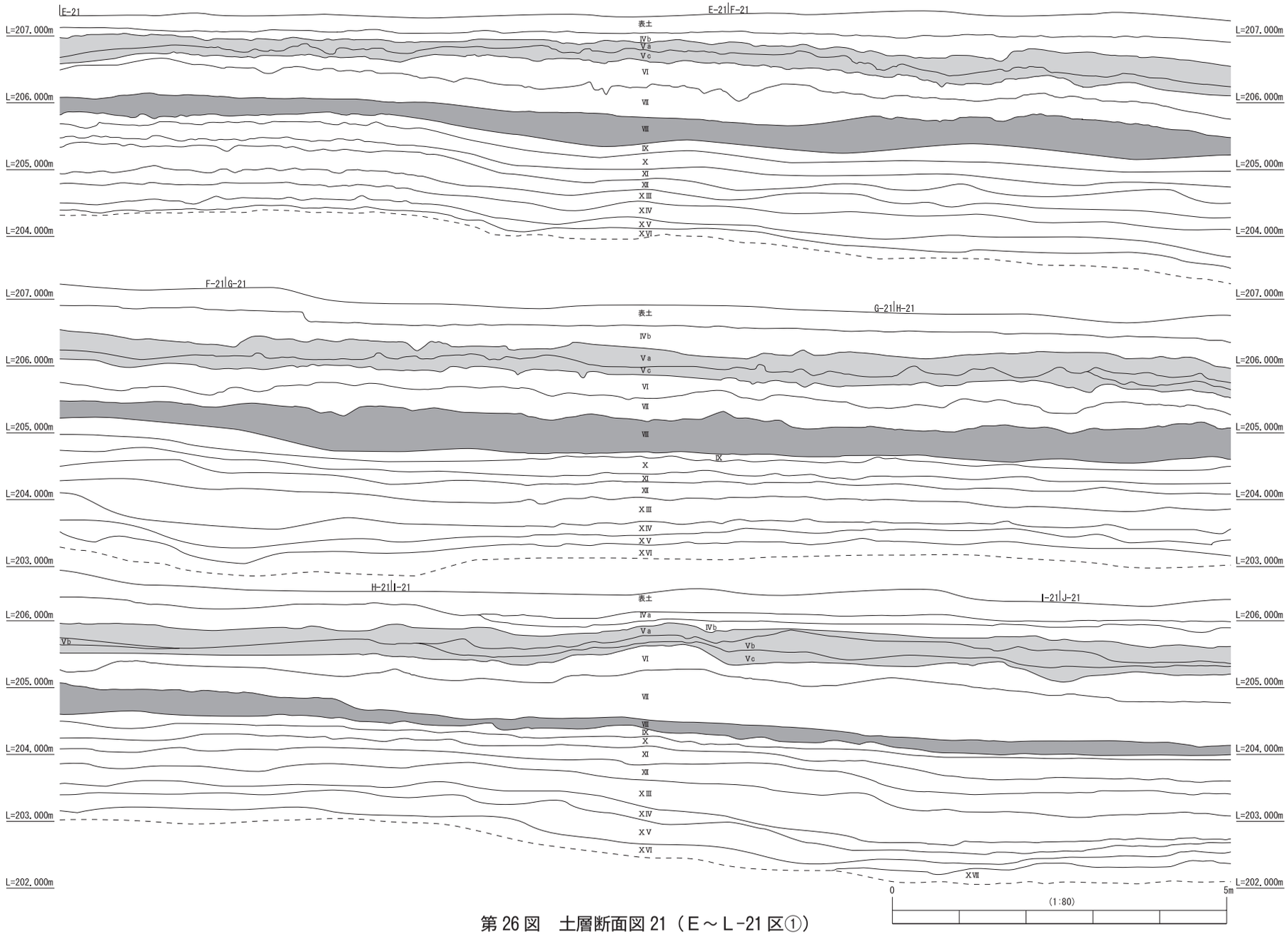
第 23 図　土層断面図 18（D～M-13 区②）



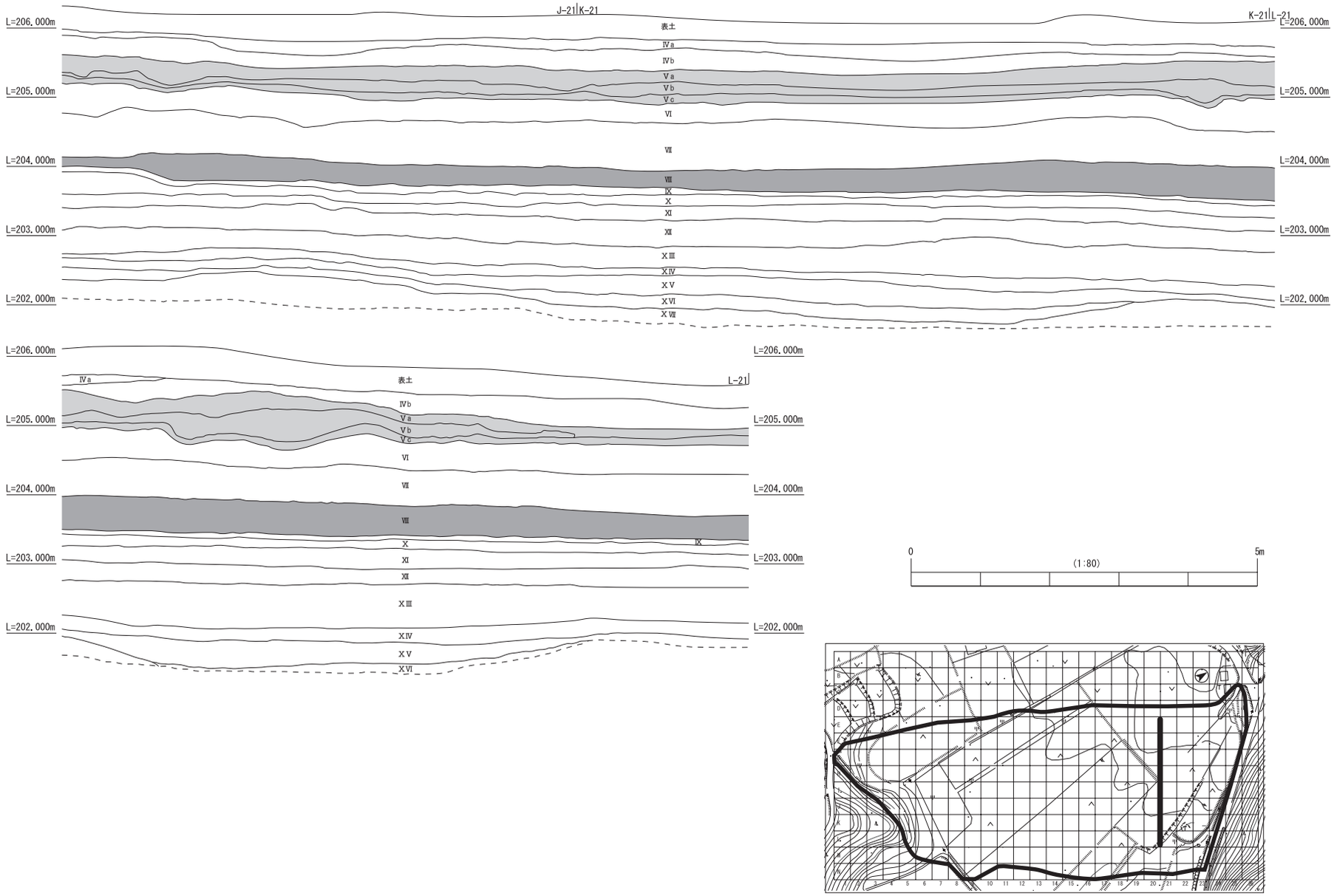
第 24 図　土層断面図 19（E～L-16 区①）



第 25 図　土層断面図 20（E～L-16 区②）



第 26 図　土層断面図 21（E～L-21 区①）



第 27 図　土層断面図 22（E～L-21 区②）

第Ⅳ章　発掘調査の成果

第１節　縄文時代早期の概要（第 28 図）

天神段遺跡の縄文時代早期の包含層は，Ｖｃ層のアカホヤ火山灰層，Ⅷ層の薩摩火山灰層の間に位置するⅥ層及びⅦ層である。アカホヤ火山灰層より上位の近世，中世，古代，弥生時代，縄文時代晩期・中期・前期の調査記録については，すでに報告済みである。

縄文時代早期該当層のⅥ層・Ⅶ層は，旧地形の傾斜によって層厚は異なるものの，平坦地形でおおよそ水平堆積する地点ではⅥ層が約 20cm，Ⅶ層が約 50cm堆積する。調査区内で最も標高が高いＦ-23 区周辺が，Ⅵ層・Ⅶ層共に遺構や遺物の密度が高い。遺物の浮き沈みがあるため明確ではないが，おおよその傾向としてはⅥ層が縄文時代早期中葉～後葉，Ⅶ層が縄文時代早期前葉にあたる。

縄文時代早期の遺構は，竪穴住居状遺構，集石遺構，連穴土坑，落とし穴，土坑，埋設遺構が検出され，合計で 485 基を数える。遺構については，検出面および埋土，遺物の出土状況から時期を判断した。

遺物の分類は包含層内出土遺物を基に，縄文時代早期土器をⅠ～XX類までの 20 分類に区分した。詳細については第３節を参照していただきたい。石器については剥片石器と礫石器に大別し，それぞれを器種・形態ごとに細別した。なお，磨りと敲打の両機能を兼ね備えた石器については，「磨・敲石」と表記した。

第２節　遺構

１　竪穴住居状遺構（第 29～41 図）

天神段遺跡では，９基の竪穴住居状遺構が検出された。竪穴住居状遺構と呼称した理由は，柱穴とされるピットが明瞭ではないが，おおよそ形状から竪穴住居の可能性が高いと判断したためである。これらは後述する土坑とは明確に形状が異なっており，一定の面積を有している。

竪穴住居状遺構は単独で検出したもの，他の遺構と重複するものがあり，全形をとらえられたのは７基であった。鹿児島県内において縄文時代早期の竪穴住居状遺構が多く検出された遺跡に，定塚遺跡がある。本遺跡では形状をみる一つの目安として，定塚遺跡で用いられた「長短値」を参考とした（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010『定塚遺跡・稲村遺跡』第２分冊）。長短値は「短軸」÷「長軸」＝「長短値」で求め，数値が１に近いほど正方形，正円に近い。

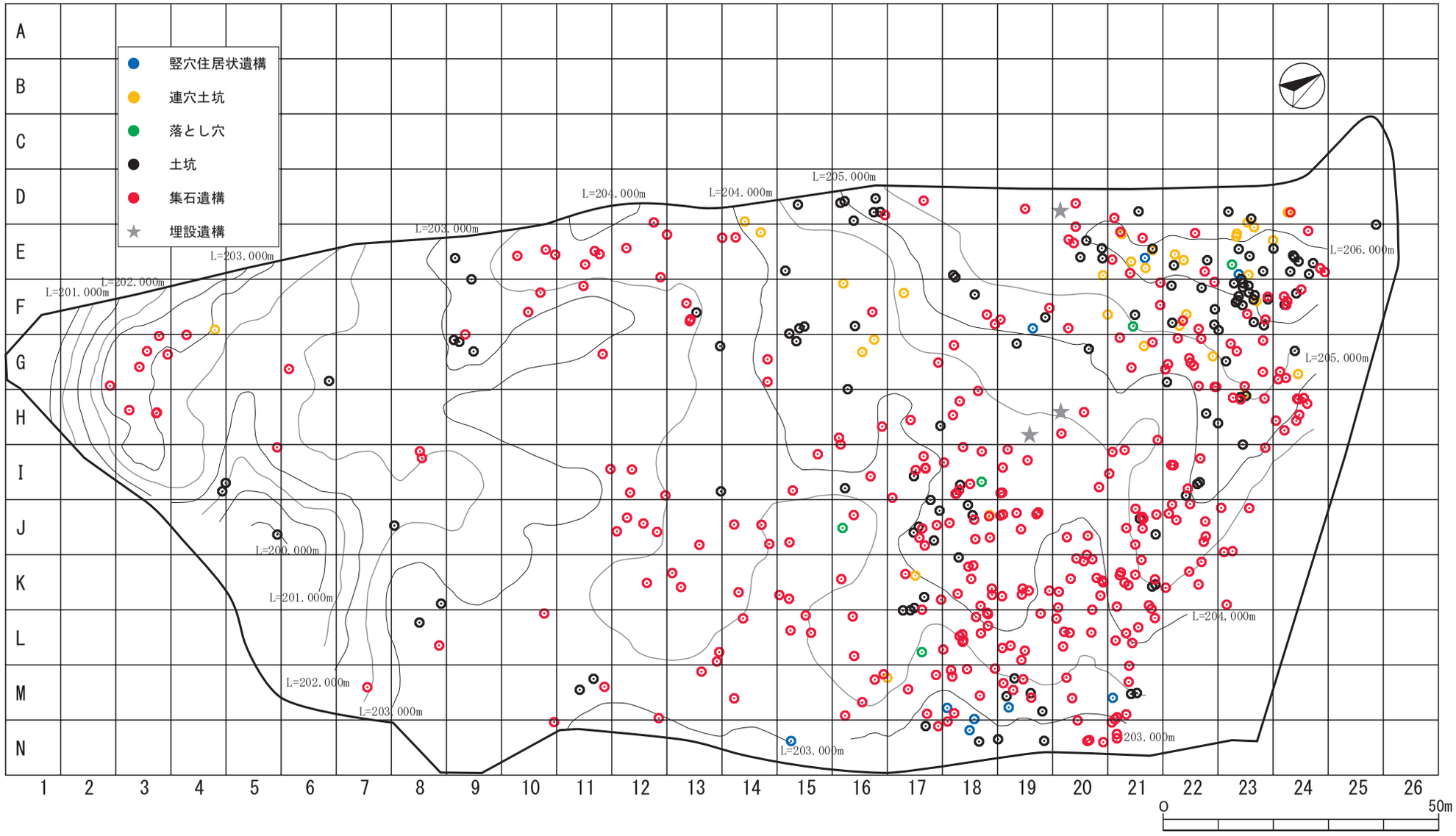
１号竪穴住居状遺構（第 30～35 図）

Ｅ－ 21 区，Ⅶ層で１号・２号連穴土坑及び１号土坑の３基と切り合って検出した。土坑と切り合い関係にあるため，長軸幅は推定であるが，平面形は長軸 390cm，短軸 260cmの隅丸長方形で，深さは 22cmである。長短値は 0.66 である。遺構壁面の傾斜の度合いは，土坑との関係で一概には言えないが，概ねなだらかである。床面の精査及び床面や遺構周辺の掘り下げを行ったが，ピット及び炉跡は検出されていない。

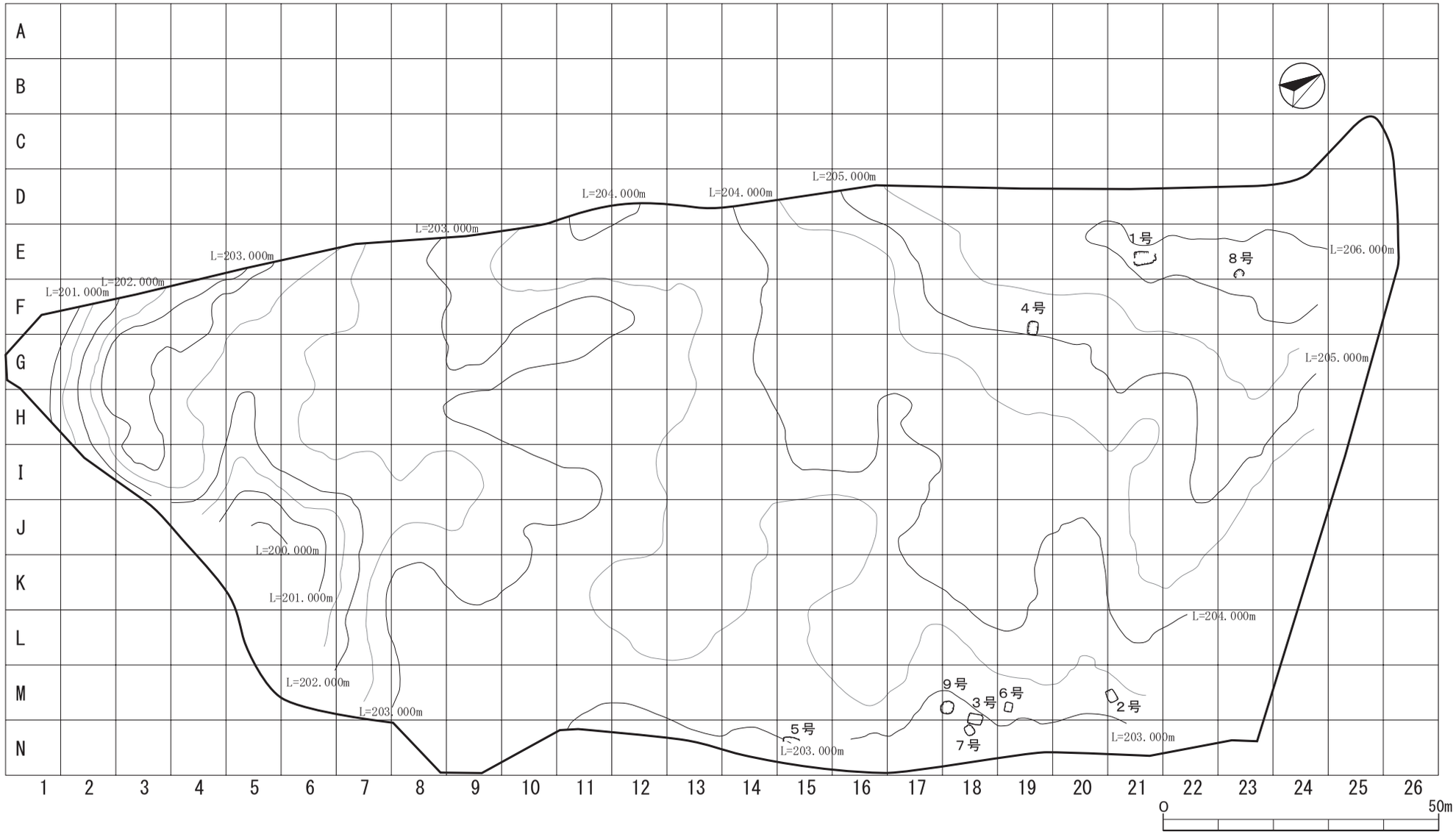
埋土は全体的に黄色や白色のパミスを含み粘性がある。埋土①は黄色と白色パミスを密に含み，埋土の主体となす黒褐色土である。埋土②は黄色と白色パミスをまばらに含む黒褐色土である。埋土③は黄色パミスを含む暗褐色土で部分的に堆積する。床面には粘性のある黒色土の埋土④と暗褐色土の埋土⑤が観察される。

関連する遺物は土器 26 点，石器４点，礫 29 点の計 59 点出土し，その内 15 点を掲載した。土器はⅢ類土器を中心に，他にもⅡ類土器やⅥ類土器やⅫ類土器も小片だが出土している。

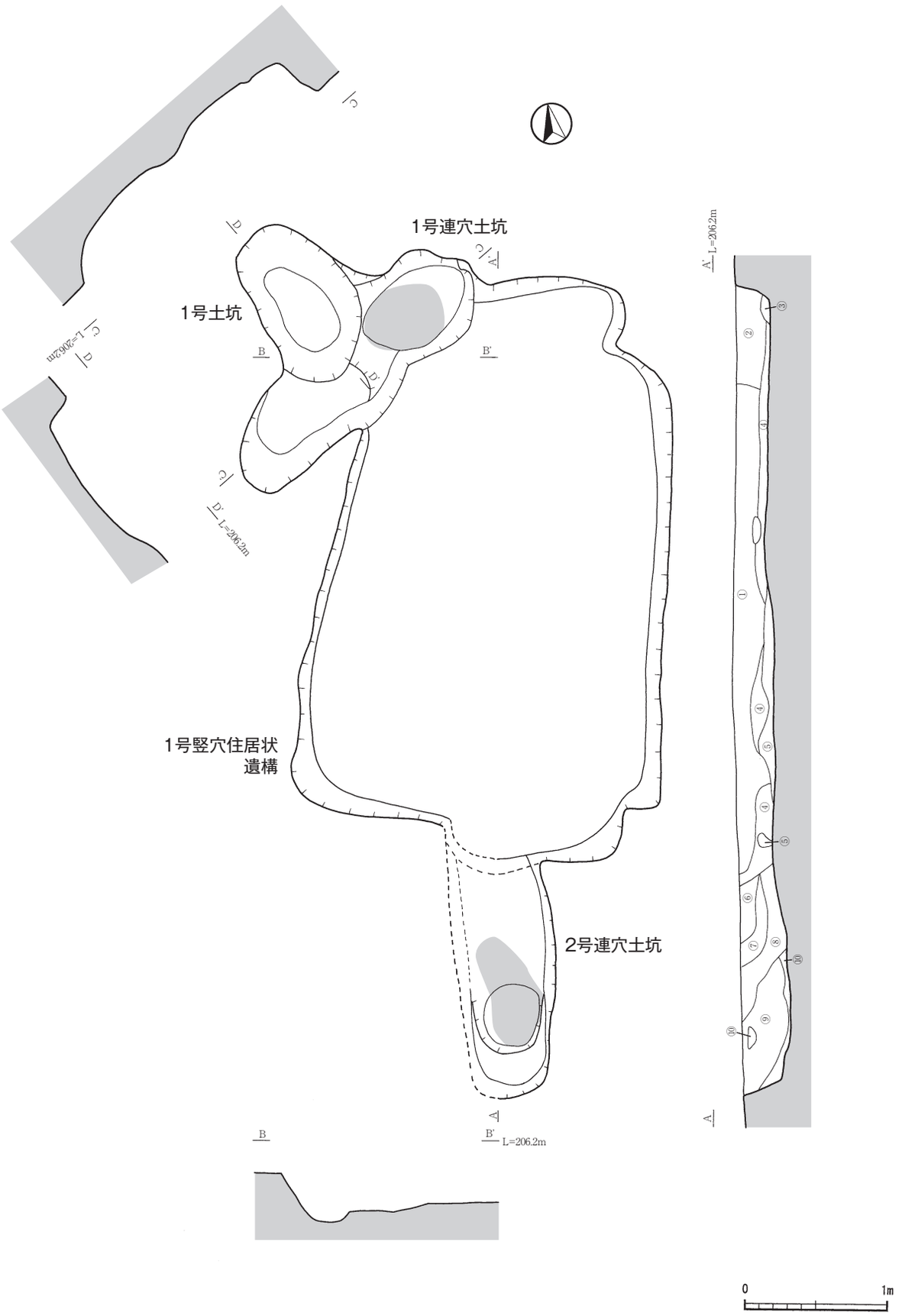
１は口縁部から胴部上半までが残存する。口縁端部は方形を呈し，ケズリ調整により薄く成形されている。口縁部直下には横位の貝殻刺突文が３条施され，胴部は横位の貝殻条痕である。特徴から，Ⅲ類土器に比定される。２は稜を有する胴部片であり，胴部の屈曲度から角筒形と推定される。胴部は横位の貝殻条痕文であり，稜上には貝殻背面による押引状の刺突文が施される。やや焼成が不良のため，ざらついている。内面の稜はゆるく，下部ほど厚みが増し稜もさらに緩くなるため，３号土坑出土の 48 と同様，上角下円に近い形状と考えられる。特徴からⅢ類土器に比定される。３・４は口縁部から底部もしくは底部付近まで残存する角筒形土器である。底部からほぼ真っ直ぐ立ち上がり，明瞭な稜を持つ。焼成が非常に良く，全体的に調整も丁寧で精緻である。口唇部には刻み，口縁部には３条の貝殻刺突文，胴部は斜位の貝殻条痕文を密に施している。胴部は貝殻条痕の上から縦位・斜位の貝殻刺突文を施し，連続した菱形文状になる。また，稜の上にも貝殻刺突文が施される。底部からの立ち上がり部分は，縦位の貝殻条痕文である。内面にもケズリによって稜が作出されている。４は包含層出土であるが，３と同一個体で，ともにⅢ類土器に比定される。５は底部からの立ち上がり部分である。胴部には地文として細かい斜位の貝殻条痕を施し，その上から縦位・斜位の貝殻腹縁刺突文を施す二重施文である。貝殻条痕は切り合いがほとんどなく，浅く肋幅が狭い貝により施文されている。稜には貝殻腹縁刺突が施される。貝殻刺突文は連続した菱形状である。底部との境界部分には，縦位の短沈線文がみられる。以上の特徴から，Ⅲ類土器に比定される。この土器は胎土が特徴的であり，や


竪穴住居状遺構
連穴土坑
落とし穴
土坑
集石遺構
埋設遺構
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
L=201.000m
L=202.000m
L=203.000m
L=203.000m
L=204.000m
L=204.000m
L=205.000m
L=206.000m
L=205.000m
L=204.000m
L=203.000m
L=203.000m
L=202.000m
L=201.000m
L=200.000m
0
50m

第 28 図　全遺構配置図

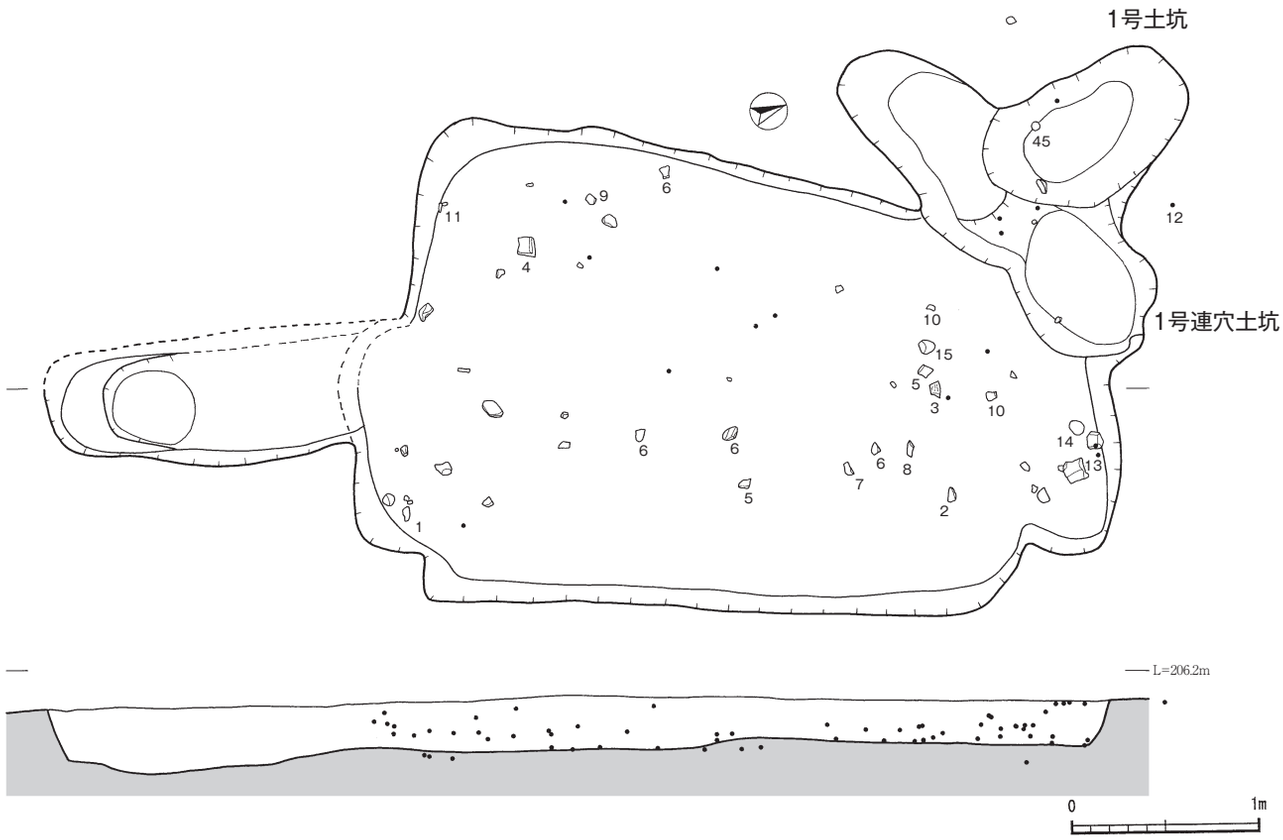


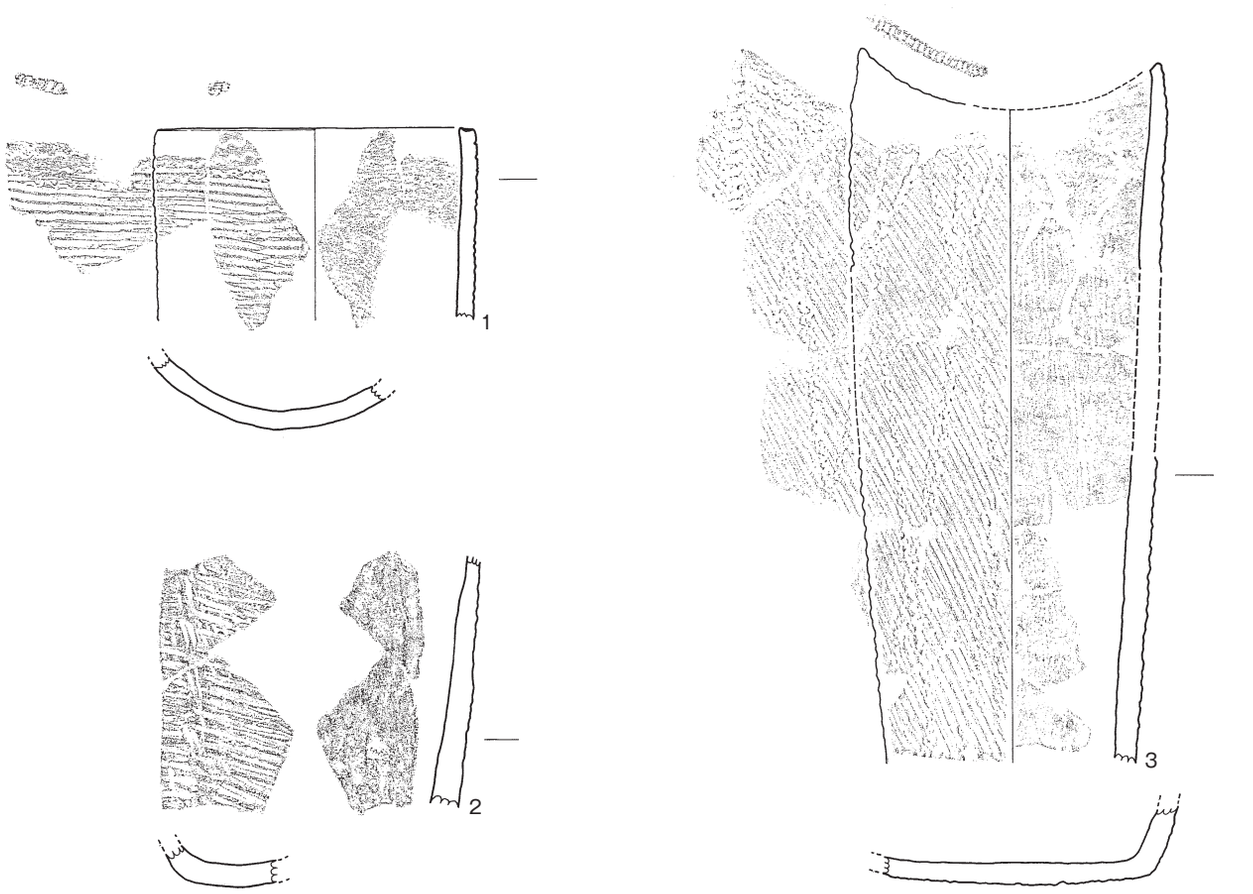
第 29 図　竪穴住居状遺構配置図



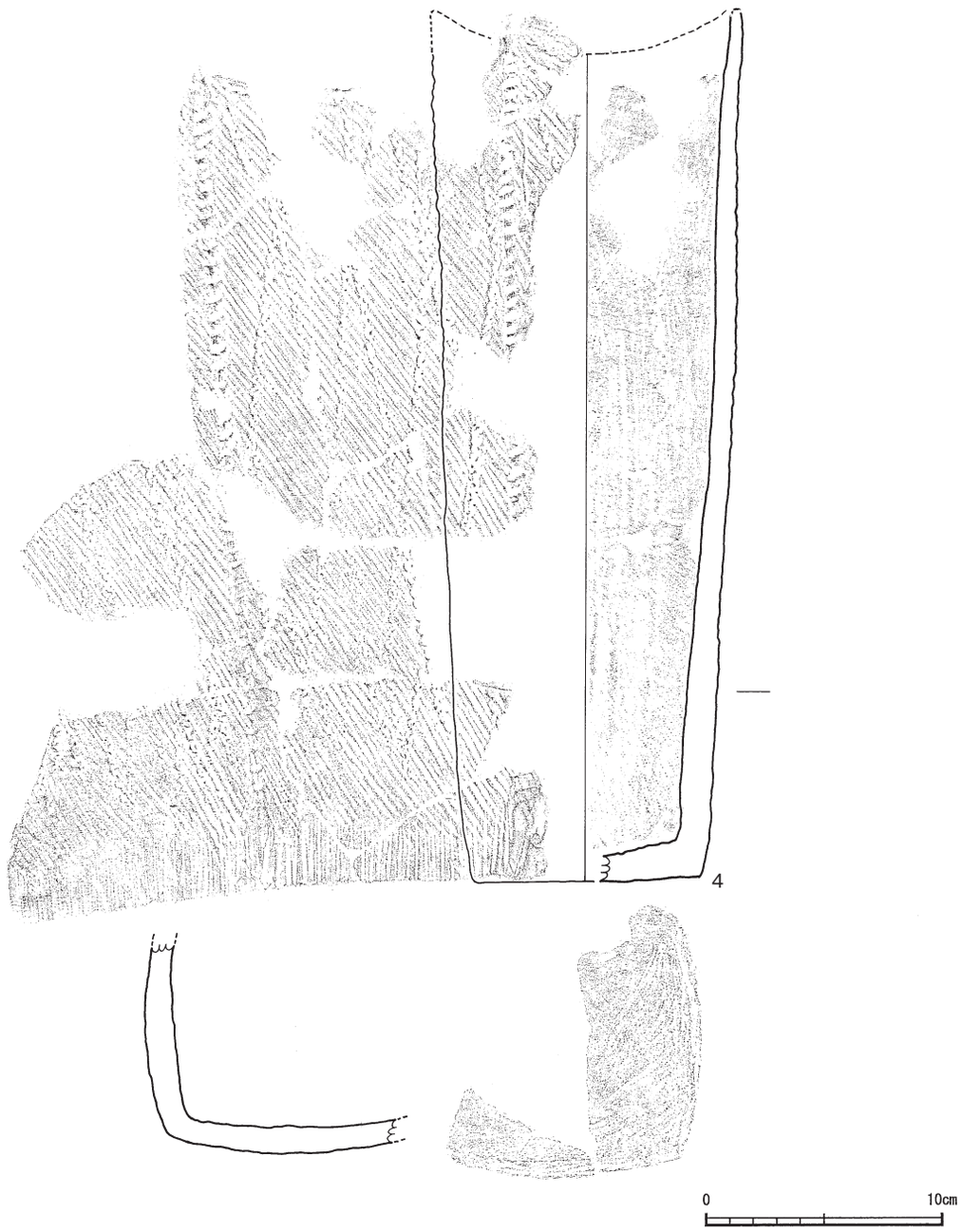
第 30 図　1 号竪穴住居状遺構，1 ～ 2 号連穴土坑，1 号土坑

（遺物出土状況）





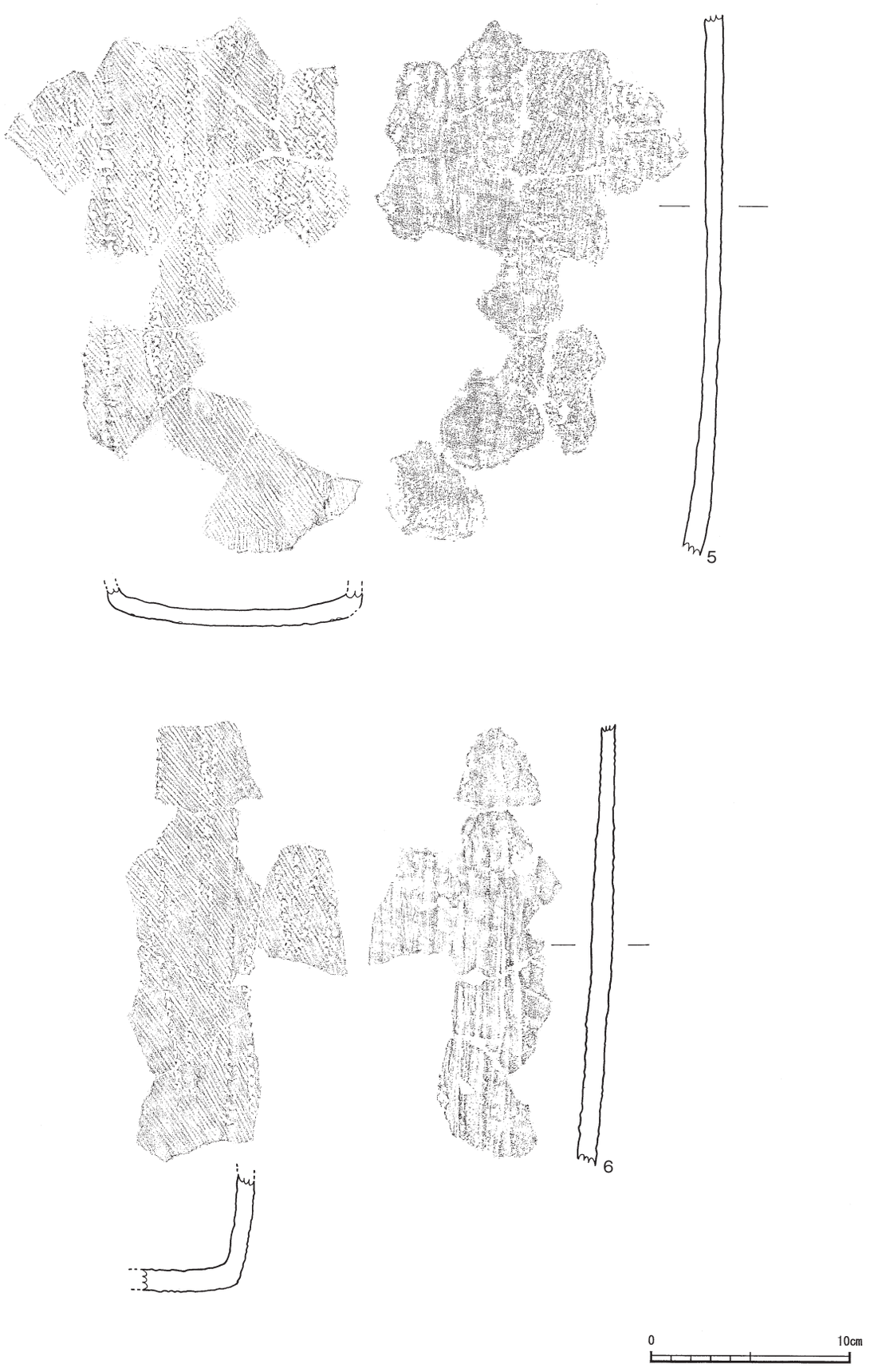
第 31 図　1 号竪穴住居状遺構・出土遺物（1）



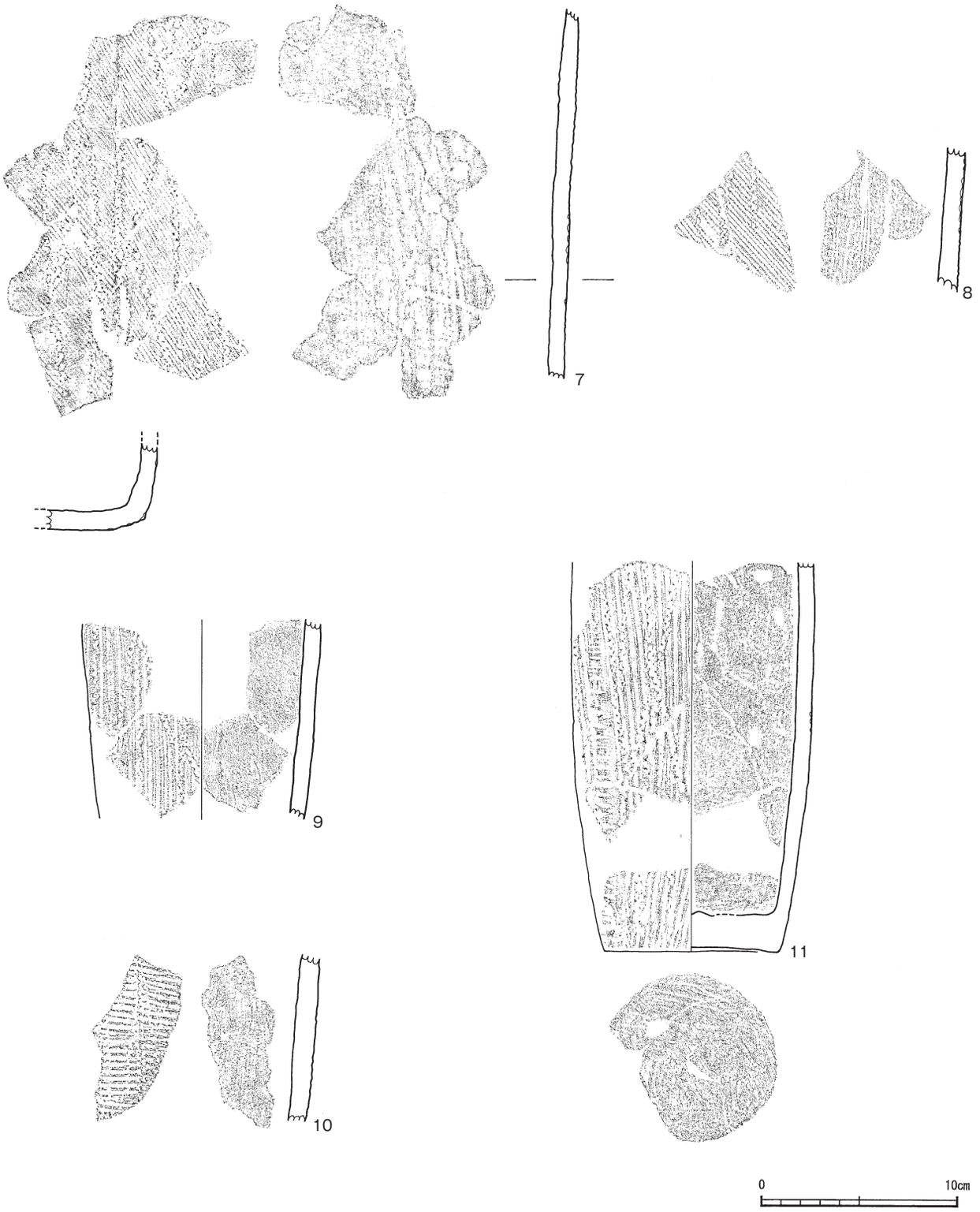
第 32 図　１号竪穴住居状遺構出土遺物（２）

や赤みの強い褐色に白い胎土が筋状に混ざるマーブル状の胎土である。また，５㎜～１㎝大の赤褐色の粒を多く含む。６・７と同一個体と考えられる。８は板状の胴部で，斜位の貝殻条痕文の上から縦位の貝殻刺突文を施す。９は縦位の貝殻条痕文に縦位の貝殻刺突文が施される。10 は横位の条痕文の上から貝殻腹縁による斜位の刺突文を施す。円筒形土器と推定される。特徴からⅢ類土器に比定される。11 は胴部から底部までが残存し，やや胴がふくらむ。胴部には緩い稜があり，その上に貝殻やヘラによる刺突文が施される。縦位の貝殻条痕に斜位・縦位の貝殻刺突文を施す。貝殻刺突文は連続する菱形状を呈する。底部からの立ち上がり部分は，縦位の貝殻条痕が施される。底面の形状は２か所の稜部分がやや張り出すことから，レモン形に近い器形であると推定される。底部内面は凹凸が激しく，成形時の指押さえの痕跡が明瞭に確認できる。Ⅲ類土器に比定される。

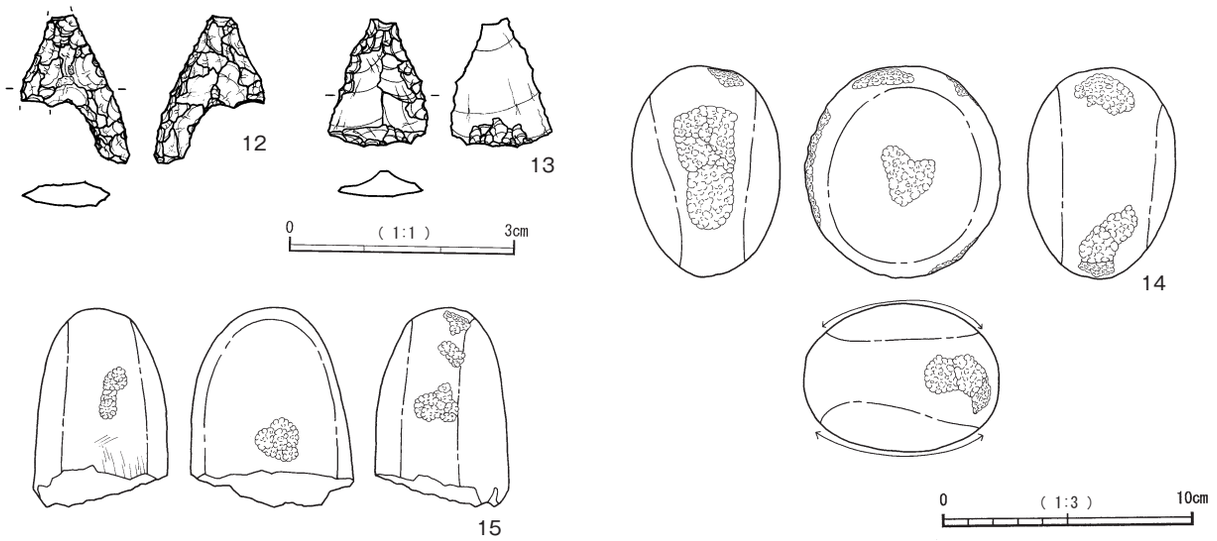
石器は石鏃と磨石を図化した。12 は安山岩製の打製石鏃である。先端部および左側の脚部は欠損している。



第 33 図　1 号竪穴住居状遺構出土遺物（３）



第 34 図　1 号竪穴住居状遺構出土遺物（4）



第 35 図　１号竪穴住居状遺構出土遺物（５）

側縁が直線状になり，深い「U」字形の抉りをもつものと考えられる。脚部は幅が細く，側縁調整も密に行われている。なお，12 は１号竪穴住居状遺構の北側の遺構外から出土した。13 はチャート製の打製石鏃である。裏面は素材剥片の剥離面を残しており，基部の中央付近に調整剝離が認められる。長身形を呈し，平基である。石鏃の形状に成形した後，側縁調整を細かく行っている。14 は凝灰岩製の磨・敲石である。厚みもあり，円礫状の石材を利用している。上・左側面および右側面下部と表面に敲打痕が確認できる。また，上下面は磨面であり，表面が平滑である。15 は凝灰岩製の磨・敲石である。下半は欠損しているが，本来は縦長の形状であったと考えられる。左右側面および上面に敲打痕が確認できる。左側面には擦痕があり，一部面をなす。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,836 － 8,630cal ＢＣの値が得られた。

１号竪穴住居状遺構は３基の遺構と切り合い関係にある。１号連穴土坑は１号竪穴住居状遺構の北側を切っている。また，１号連穴土坑の北側は１号土坑に切られている。２号連穴土坑は１号竪穴住居状遺構の南側に位置している。慎重に調査したが，２号連穴土坑の西側に地層横転があり，２号連穴土坑の西側の平面プランは明確でなかった。切り合い関係については埋土でははっきりしなかったものの，１号竪穴住居状遺構の埋土堆積状況や床面の状況から，２号連穴土坑が古く，１号竪穴住居状遺構が新しいと判断した。

出土遺物はⅢ類土器が多く，また，炭素年代測定の結果を踏まえると，本遺構は早期早葉に属すると思われる。

２号竪穴住居状遺構（第 36 図）

M-20・21 区，Ⅷ層上面で検出した。平成 22・23 年度の調査区に重なる位置で検出されたため，検出当初は土坑とされていたが，全容が明らかになった時点で竪穴住居状遺構と判断した。平面形は短軸 168㎝，長軸 231㎝の隅丸長方形で，深さは 11㎝である。長短値は 0.72 であった。遺構壁面の傾斜の度合いは，極めて高く垂直に近い。床面はほぼ水平であった。床面の精査及び周辺の掘り下げを行ったが，ピットや炉跡は検出されていない。

埋土は黒褐色土を基本として，白色及び黄色のパミスを含んでいる。

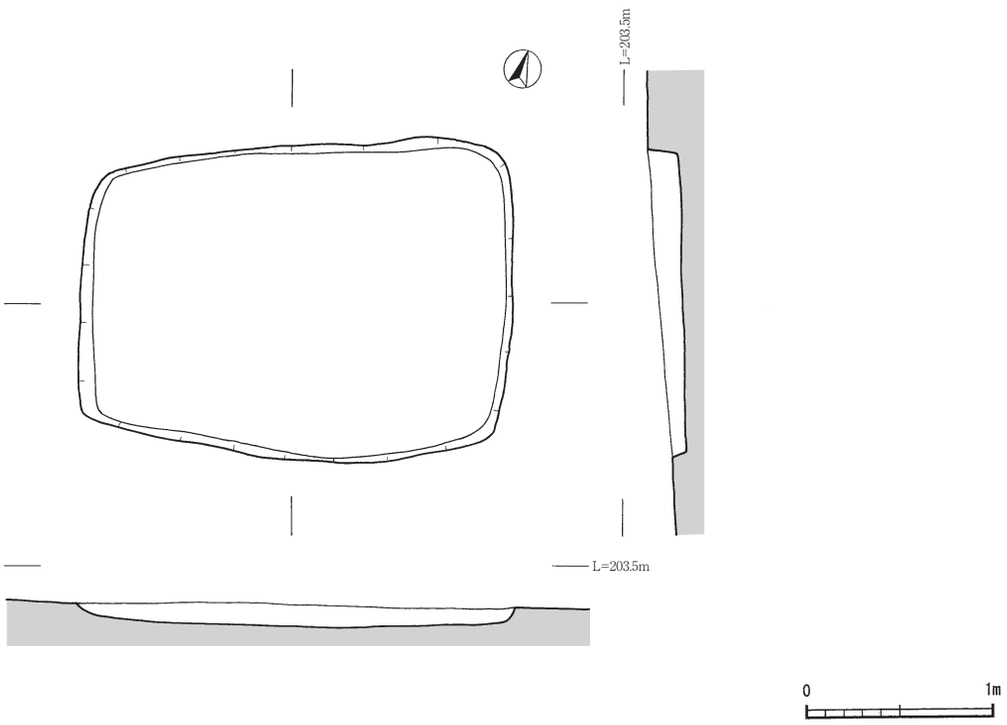
関連する遺物は土器片が出土したが，いずれも小片のため掲載には至らなかった。本遺構の時期については，出土遺物も少なく不明である。

３号竪穴住居状遺構（第 37 図）

M・N-18 区，Ⅷ層で検出した。平面形は長軸 264㎝，短軸 193㎝の隅丸長方形で，深さは 26㎝である。長短値は 0.73 であった。遺構壁面の傾斜の度合いは，極めて高く垂直に近い。床面はほぼ水平であった。また，遺構の南東側の壁面近くから，石皿片と磨・敲石が重なって出土した。床面の精査及び床面や遺構周辺の掘り下げを行ったが，ピットや炉跡は検出されていない。

埋土は全体的に混入している黄色パミスの入り具合から３つに分層できた。いずれもしまりは良いが，粘性はない。埋土①・②は黒色土で，埋土②は黄色パミスを多量に含む。埋土③は黒褐色土で黄色パミスと１～２㎝大の暗褐色土のブロックを少量含む。

関連する遺物は土器３点，石器２点の計５点出土し，その内３点を掲載した。16 は底部片である。底面は平坦であり，ゆるやかに立ち上がる。外面は横位の貝殻条痕とその上に重ねて施文された縦位の貝殻条痕がみられる。詳細な型式は不明である。17 は凝灰岩製の石皿片



第 36 図　２号竪穴住居状遺構

である。半分は欠損している。裏面は平坦で安定しており，中央部に作業面が認められる。磨耗度は低く，わずかに凹む程度である。表面は中央部が凹み，磨耗により平滑になっている。18 は凝灰岩製の磨･敲石である。４分の１程が欠損している。残存部の側面には帯状に弱い敲打痕が観察できる。上下面および側面の一部は磨面であり，表面が平滑である。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,325 － 8,210cal ＢＣの値が得られた。

本遺構の時期については不明である。

４号竪穴住居状遺構（第 38 図）

Ｆ・Ｇ-19 区でⅦ層掘り下げ中，パミスの集中する箇所を手がかりに検出した。平面形は長軸 258cm，短軸 196cmの楕円形で，深さは 46cmであった。長短値は 0.76 である。住居の床からの立ち上がりは垂直に近いが，掘り込み面上位はなだらかで，床面は平坦である。ピットは床面から２基検出され，径約 10cmの円形の掘り込みで，長軸上に位置するＰ１は深さ 34cm，北側に位置するＰ２は深さ 28cmを測る。上屋構造を支える柱穴としての機能を考えるには情報不足である。

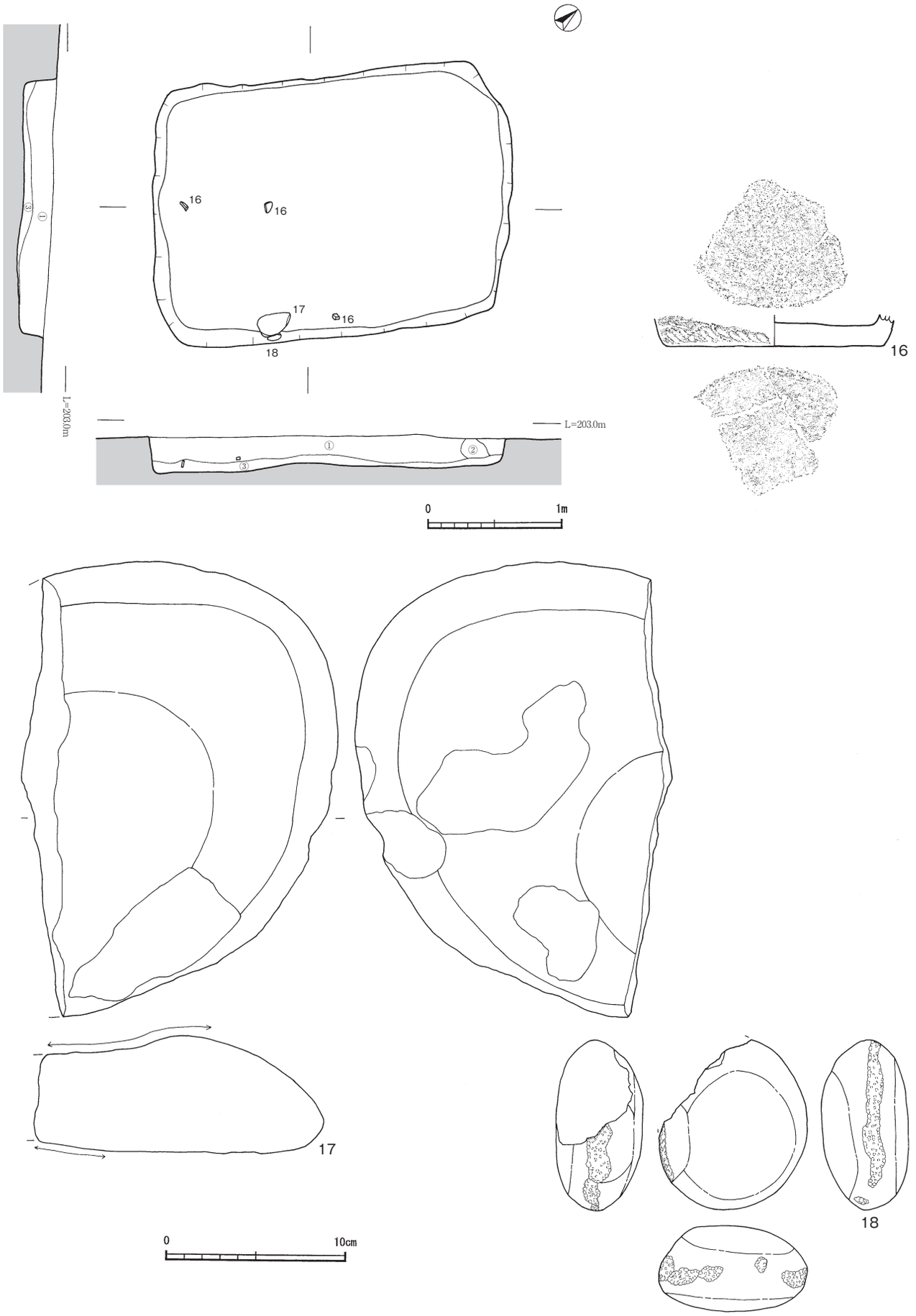
埋土は７つに分層できたが，ほとんど色調に差のない埋土であり，短時間に埋まったと考えられる。埋土中には薩摩火山灰のブロックを含む。埋土上位は黒色が強いが，下位はやや明るくなる。全体的に混入している黄色パミスの入り具合から分層でき，埋土①・②は黒褐色土で１～２㎝大の黄色パミスを密に含み，埋土①は白色パミスも含む。埋土③は暗褐色土で黄色・白色パミスを含む。埋土④は暗褐色土で１㎝大の黄色パミスを密に含む。埋土⑤は暗オリーブ褐色土で５㎜～１㎝の黄色パミスを密に含む。埋土⑥は黒褐色土，埋土⑦は褐色土で白色パミスを含む。

柱穴の埋土はＰ１が暗灰黄色，Ｐ２が黒褐色と若干色には違いがあるが，黄色及び白色パミスが含むことや，粘質が弱いことは共通している。

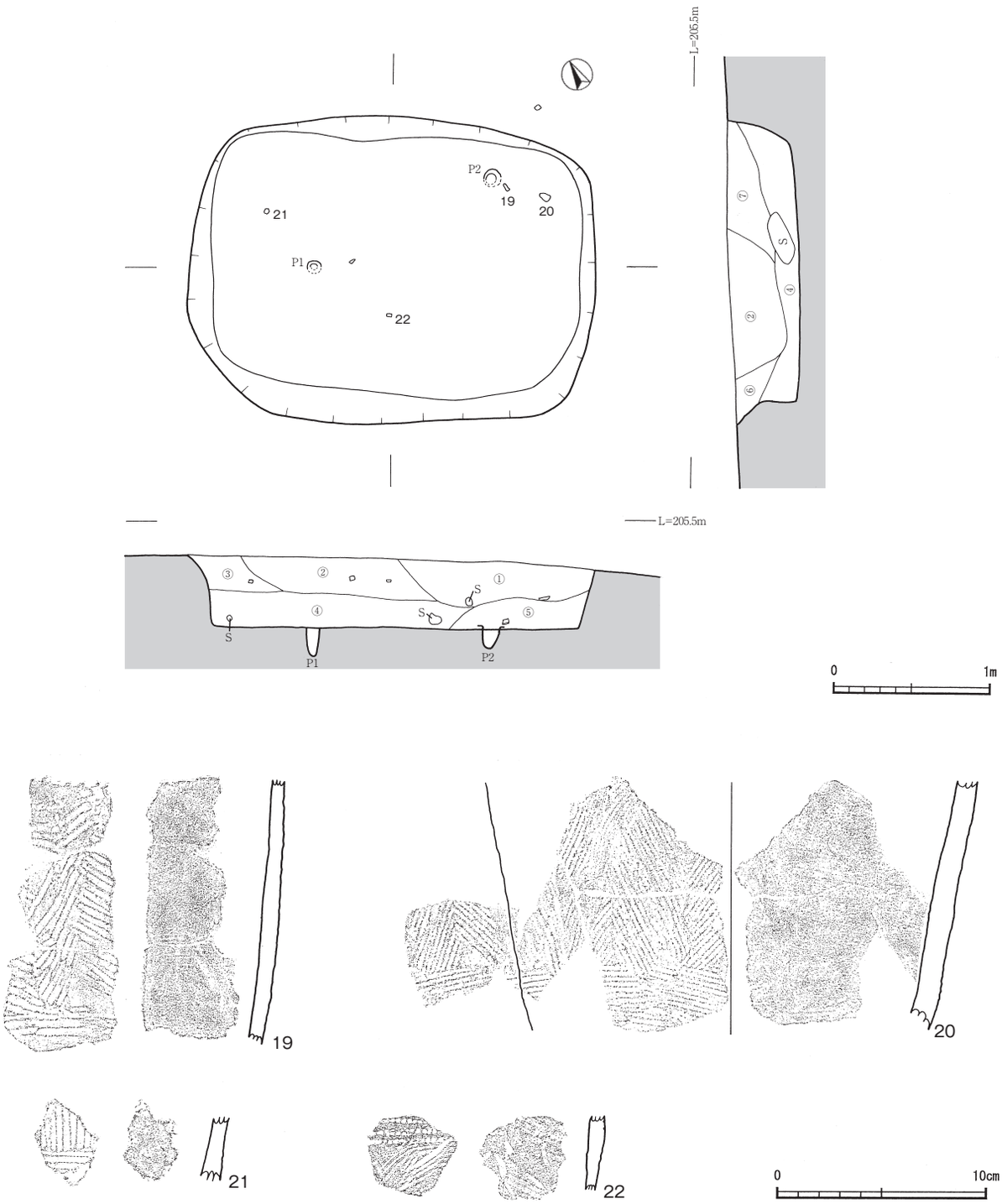
関連する遺物は土器６点が出土し，その内４点を掲載した。19 は胴部のみ残存しており，ほぼ真っ直ぐ立ち上がる土器片の上端にわずかに刺突文が確認できる。胴部には綾杉状の貝殻条痕が施される。20 は上部に横位の貝殻条痕文，下部に綾杉状の貝殻条痕文が施される。条痕の幅は狭く，浅い。また，綾杉状の条痕は横位の条痕を切っている。21 は胴部小片である。縦位と横位の貝殻条痕で文様を構成する。22 は胴部小片である。上半に横位の貝殻刺突文，下半は横位と斜位の粗い貝殻条痕が施される。19～22 はいずれもＶ類土器に比定できる。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，7,967 － 7,677cal ＢＣの値が得られた。

出土土器や炭素年代測定結果から，本遺構は早期中葉に属すると思われる。



第 37 図　３号竪穴住居状遺構・出土遺物



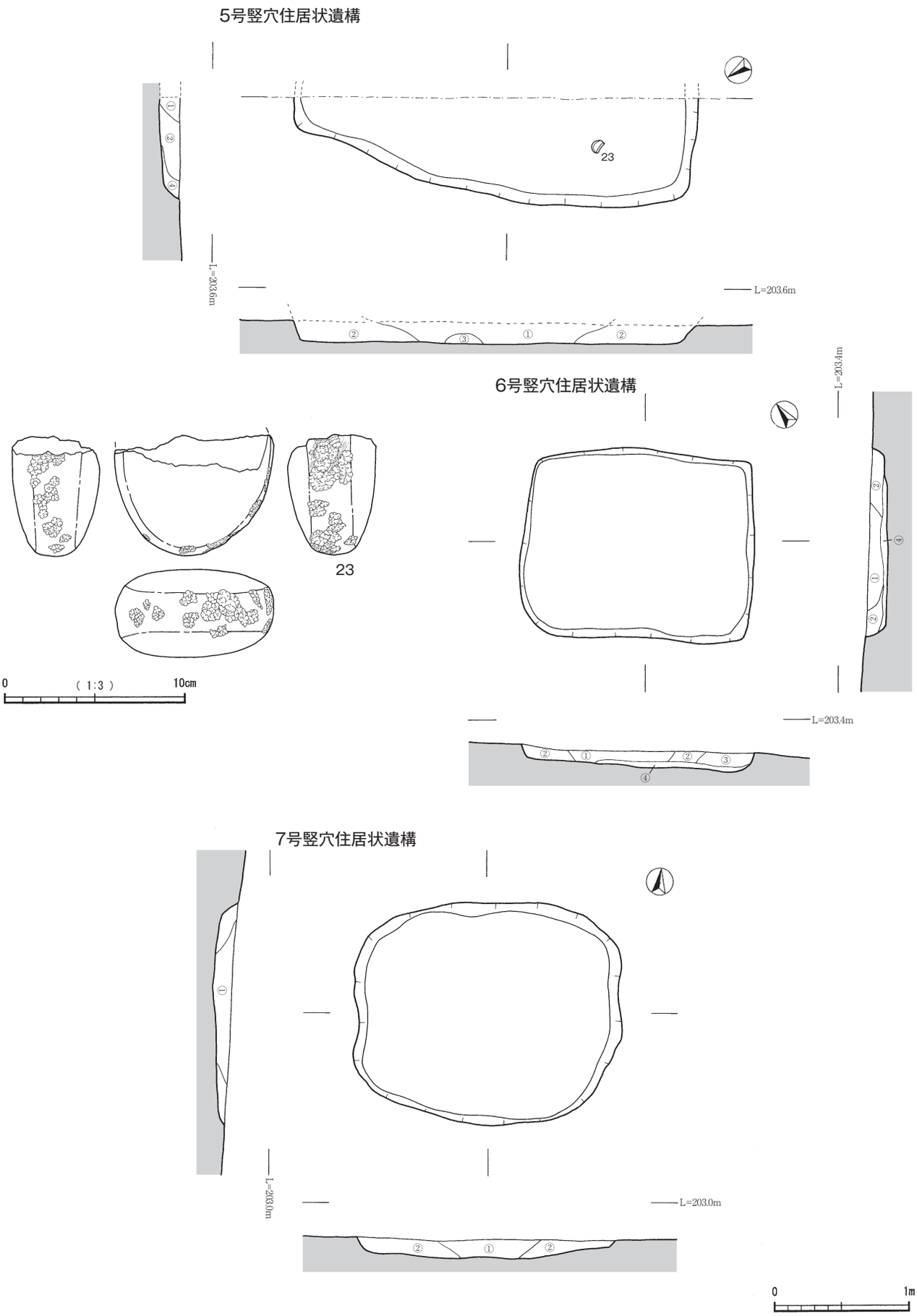
第 38 図　４号竪穴住居状遺構・出土遺物

５号竪穴住居状遺構（第 39 図）

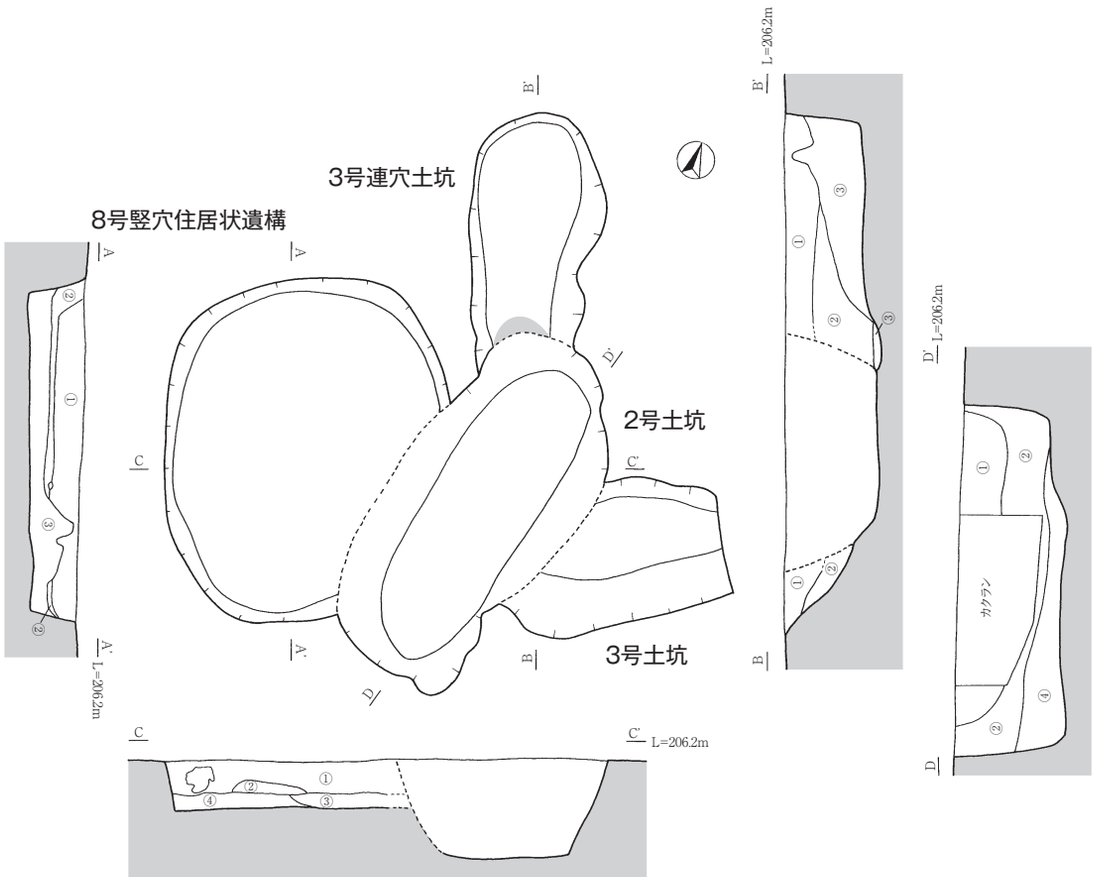
N-15 区，Ⅷ上層で検出した。調査区境での検出のため，概ね４分の１程度の検出しかできなかった。平面形の全容は明らかではないが，隅丸方形が予想される。推定される一つの軸が 192㎝，深さは，15㎝であった。床面の精査及び床面や遺構周辺の掘り下げを行ったが，ピットや炉跡は検出されていない。

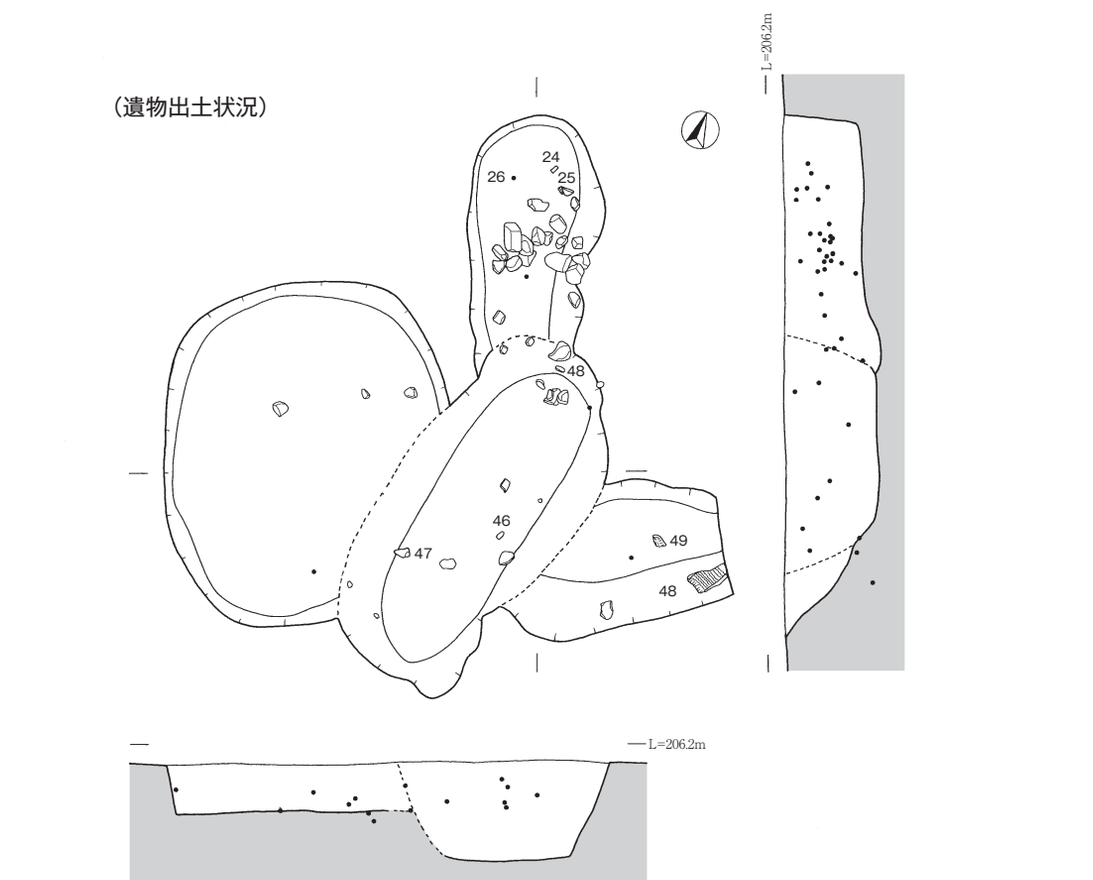
埋土は全体的に混入している黄色パミスの入り具合から４つに分層できた。いずれもしまりは良いが，粘性はない。埋土①・②・④は黒色土，埋土③は黒褐色土である。埋土②・④は黄色パミスを多量に含み，埋土①・③は少ない。埋土④は硬質である。

関連する遺物として磨石が１点出土した。23 は凝灰岩製の磨・敲石である。上半は欠損している。残存する



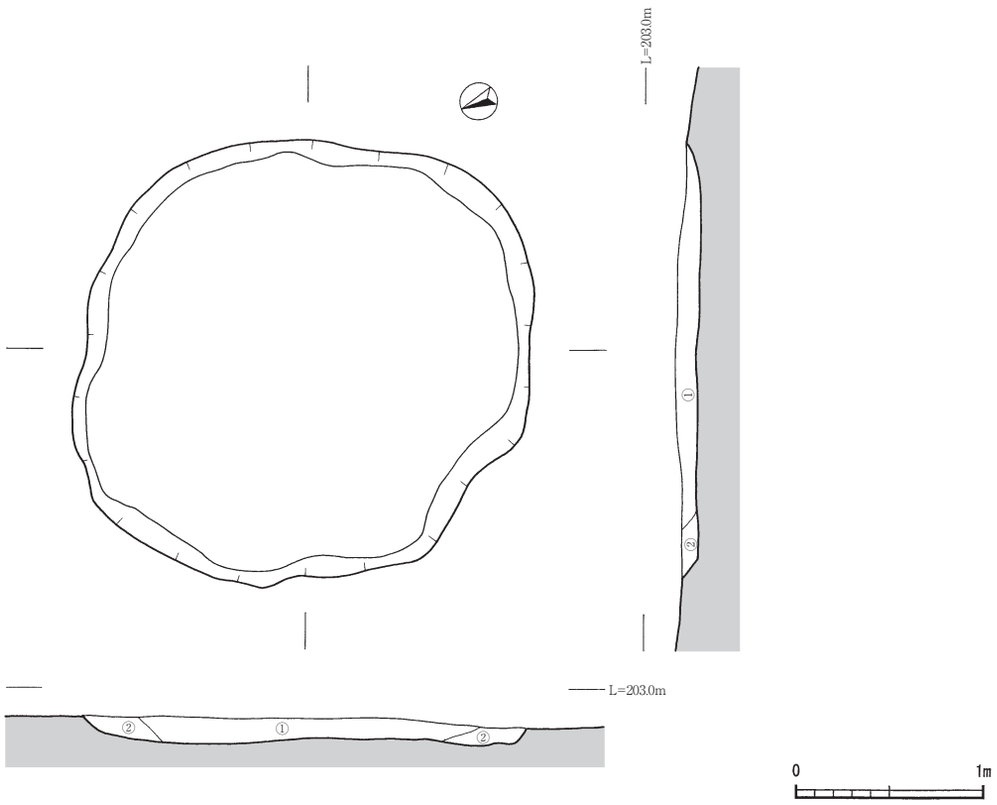
第 39 図　５～７号竪穴住居状遺構・５号竪穴住居状遺構出土遺物





0 1m

第 40 図　８号竪穴住居状遺構，３号連穴土坑，２～３号土坑



第 41 図　９号竪穴住居状遺構

側面に帯状に敲打痕が確認できる。また，左側面下部は一部擦痕もあり，磨りと敲打の両方の機能を備えていたことが分かる。上・下面は磨面であり，表面が平滑である。下面にススが沈着している。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,609 － 8,340cal ＢＣの値が得られた。

出土資料が少なく，時期についての詳細は不明である。

６号竪穴住居状遺構（第 39 図）

M-19 区，Ⅷ上層で検出した。平面形は長軸 170cm，短軸 140cmの隅丸長方形であるが，隅丸は１か所で残りは方形を呈している。深さは 14cmであった。長短値は 0.82 と高い。床面は平坦で，遺構壁面の傾斜の度合いは，極めて高く垂直に近い。床面の精査及び床面や遺構周辺の掘り下げを行ったが，ピットや炉跡は検出されていない。

埋土はいずれもしまりは良い。全体に混入している黄色パミスの入り具合から４つに分層できた。埋土①・③は黄色パミスを多く含んでいる。埋土①・②は黒色土，埋土③は黒褐色土である。埋土④は黒色土で粘性がややあり，暗褐色粘質土ブロックを少量含む。また，壁際に近い埋土③では，炭化物を多く含む箇所もみられた。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,322 － 8,240cal ＢＣの値が得られた。

関連する遺物は確認されなかったことから時期についての詳細は不明である。

７号竪穴住居状遺構（第 39 図）

N-18 区，Ⅷ上層で検出した。平面形は長軸 194cm，短軸 163cmの楕円形で，深さは 14cmであった。長短値は 0.84 と高い。ピットや炉跡は検出されていない。３号竪穴住居状遺構と近接するが，間隔がほとんどないため，時期が異なると思われる。

埋土は２つに分層でき，埋土①は黒褐色土，埋土②は黒色土である。いずれも粘性のないものの良くしまった土である。いずれも黄色パミスを含んでいるが，埋土②の方が多量に含んでいる。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,298 － 8,183cal ＢＣの値が得られた。

関連する遺物は確認されなかったことから時期についての詳細は不明である。

８号竪穴住居状遺構（第 40 図）

E-23 区でⅦ層掘り下げ中，パミスの集中する箇所を手がかりに検出された。８号竪穴住居状遺構の東側は２号土坑と切り合い関係にあり，３号連穴土坑及び３号土坑と近接する。平面形は長軸 183cm，短軸 155cmの隅丸長方形で，深さは 30cmであった。長短値は 0.85 と正方形に近い形状である。住居の床からの立ち上がりはゆる

やかで，床面は平坦である。床面の精査及び床面や遺構周辺の掘り下げでも，ピットや炉跡は検出されていない。竪穴住居状遺構としてはやや小さめであるが，平面形・断面形・床面の安定性などから竪穴住居状遺構の可能性が高いと判断した。

２号土坑に切られている南西側の埋土は不明瞭であるが，埋土は４つに分層できた。いずれも黄色パミスと白色パミスを含む。埋土①・②は黒褐色土で粘性は弱く，埋土②の方がパミスの量が少ない。床面近くには粘性の強い暗褐色土の埋土③が約 10cm幅で広がる。この層の上部がやや硬いため，この面を生活面としていた可能性もある。埋土④は極暗褐色土で粘性があるが，埋土③よりパミスの量が少ない。また，埋土中に薩摩火山灰のブロックが含まれていた。

関連する遺物は土器１点，礫５点が出土した。土器は胴部片で，横位の条線が施されていることからⅨ類土器と考えられるが，小片のため掲載には至らなかった。

遺構の時期については不明である。

９号竪穴住居状遺構（第 41 図）

M-17・18 区，Ⅷ層で検出した。基本とする平面形は長軸 270cm，短軸 245cmの楕円形で，深さは 19cmであった。長短値は 0.90 と非常に高いので，正円にかなり近いと言える。住居の立ち上がりは，なだらかで床面は平坦である。ピットや炉跡は検出されていない。

埋土は２つに分層でき，いずれも黒褐色土で粘性はないものの，しまりが良く，黄色パミスを含んでいる。埋土①の方が黄色パミスを多量に含んでいる。

関連する遺物は確認されなかった。検出面より 30cm～50cm上位からⅥ類土器の小片が出土したが，遺構との関連性については不明である。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,352 － 8,254cal ＢＣの値が得られた。

時期についての詳細は出土資料が確認されていないことから不明である。

２　連穴土坑（第 42～51 図）

連穴土坑は 32 基検出した。その規模にはさほど差異はないが，ブリッジが明瞭に残存し大小２つの穴が確認できるものと，形態や埋土から連穴土坑と判断したものがある。全体の特徴が捉えられるものは，竪穴住居状遺構と同様に長短値を算出した。

ほとんどの連穴土坑が単独あるいは連穴土坑同士の切り合い関係であったが，１号・２号連穴土坑は竪穴住居状遺構と，３号連穴土坑は土坑と切り合って検出された。また，14 号・15 号・21 号連穴土坑については，床面からさらに下層まで掘り下げて確認した。土壌がシミ状に変色した部分については図化した。

１号連穴土坑（第 30 図）

Ｅ-21 区，Ⅶ層で１号竪穴住居状遺構と切り合って検出した。また，一部は１号土坑に切られている。長軸 218cm，短軸推定で 60cm，深さ 40cmを測る。

埋土は粘性があり，埋土の大半は１cm大の黄色パミスと５㎜大の白色パミスを含む黒褐色土が主体を占めている。床面付近には１cm大の黄色パミスを少量含む黒褐色土や，黒色土が堆積する。また，薩摩火山灰層のブロックも堆積しており，連穴土坑のブリッジ部分が残存したものと考えられる。さらに，遺構の東側に炭化物の集中域を確認した。

関連する遺物は確認されなかった。

２号連穴土坑（第 30 図）

Ｅ-21 区，Ⅶ層で１号竪穴住居状遺構の南側に切り合って検出した。短軸推定 70cm程度，深さは 34cmを測る。遺構の南側に炭化物の集中域があり，その両端に薩摩火山灰がみられたため連穴土坑と判断した。また，２号連穴土坑の西側は地層が横転しており，西側の平面プランははっきりしなかった。１号竪穴住居状遺構との切り合い関係については，土層断面から２号連穴土坑が古く，１号竪穴住居状遺構が新しいと判断した。

埋土はおおよそ遺構の立ち上がりに沿って流れ込むように堆積する。埋土⑥は５㎜～１cm大の黄色パミスを含む暗褐色の粘質土である。埋土⑦は埋土⑥に比べ，パミスの粒径が大きい。埋土⑧はパミスをほとんど含まない黒褐色粘質土であり，埋土⑨も同様にパミスをほとんど含まない暗褐色粘質土である。埋土⑨の中には５㎜大の黄色パミスを含む埋土⑪が見られる。埋土⑩は１cm大の黄色パミスを含む暗褐色土である。

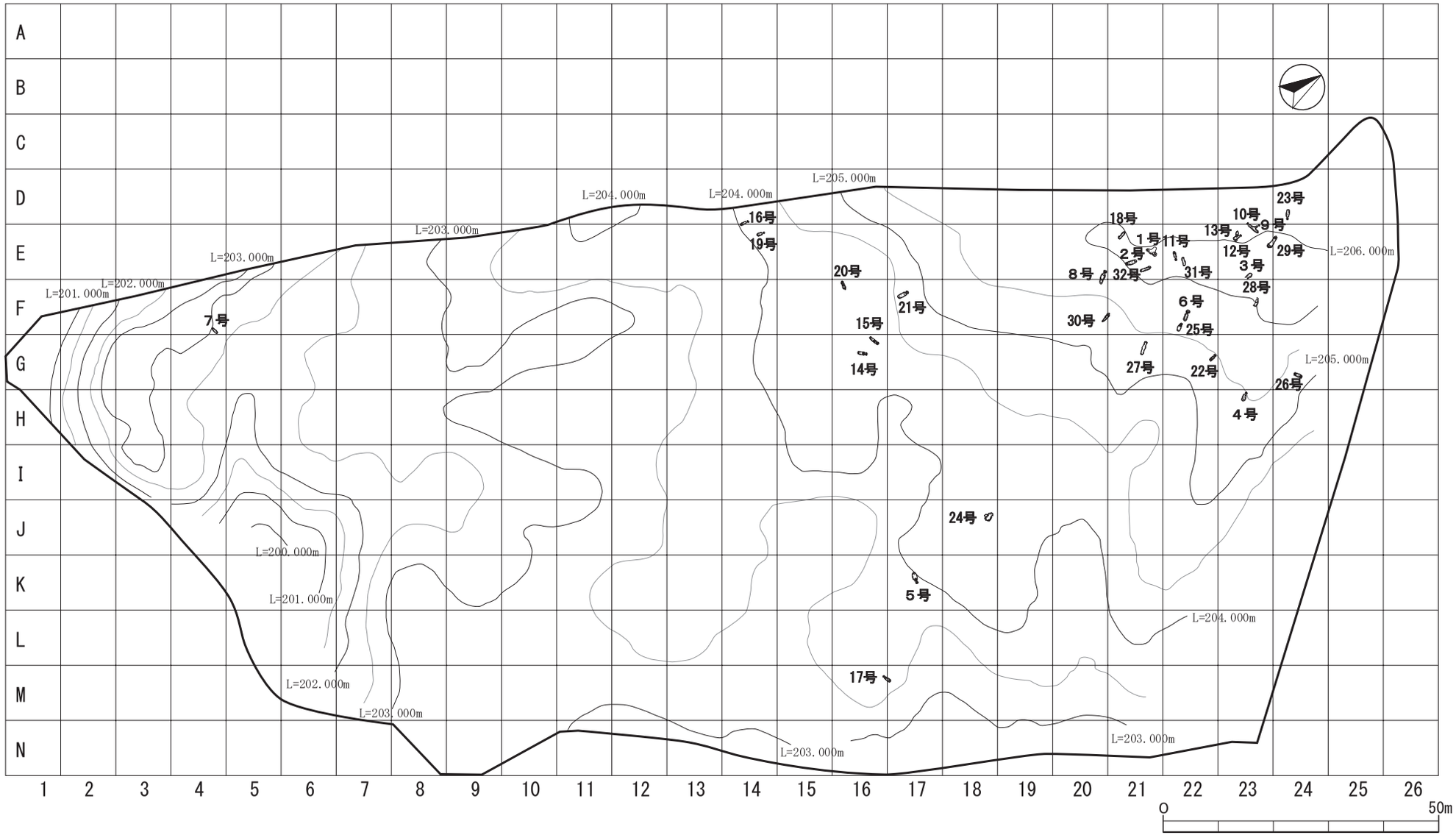
関連する遺物は確認されなかった。

３号連穴土坑（第 40・43 図）

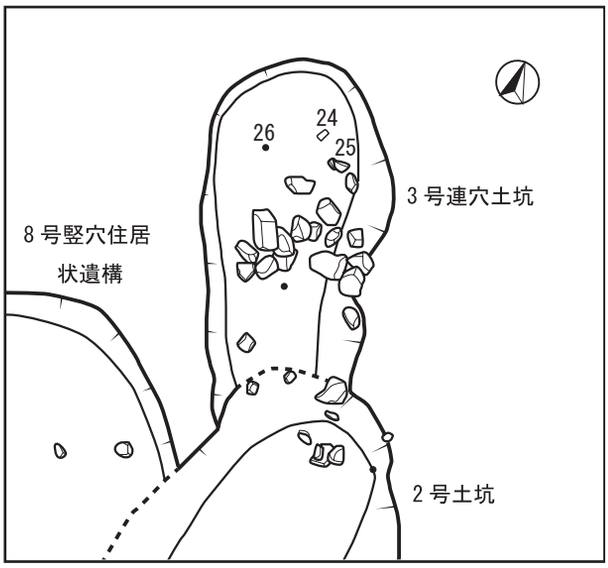
Ｅ-23 区，Ⅶ層で８号竪穴住居状遺構に隣接して検出された。３号連穴土坑の南側は２号土坑と切り合っている。短軸 74cm，深さ 41cmを測る。

２号土坑と切り合っている関係で，南側の埋土は不明瞭である。埋土①は黒褐色の砂質土で，１～３㎜大の黄色パミスを含み，１㎜以下の白色パミスも多く含む。埋土②は埋土①と色調は同じであるが，パミスをほとんど含まない。埋土①・②は２号土坑と共通する。埋土③はⅦ層とⅨ・Ⅹ層が混ざった土であり，１㎜大の黄色パミスと白色パミスが混ざる暗褐色の粘質土である。部分的に薩摩火山灰が含まれる。２号土坑との境界付近は焼土が確認されており，連穴土坑の火所であった可能性がある。

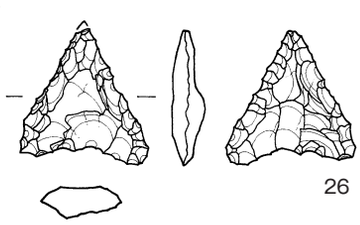
関連する遺物は土器４点，石器１点，礫 29 点が出土した。24 は口縁部から胴部上半までが残存する。口縁部には貝殻腹縁で刺突文を２段施し，胴部は斜位と縦位の条痕で文様を構成する。ケズリ調整により器壁は薄い。

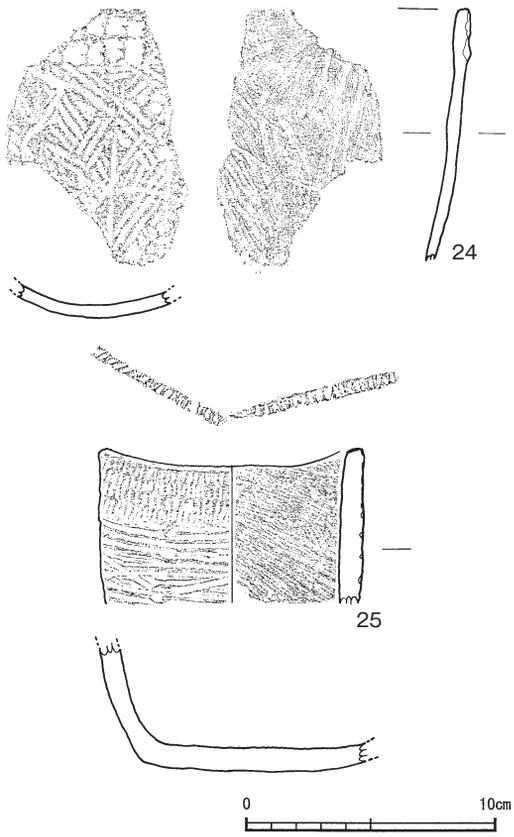


第 42 図　連穴土坑配置図



（3号連穴土坑遺物出土状況）





0 (1:1) 3cm

第 43 図　３号連穴土坑・出土遺物

全体像は不明瞭ではあるが，胴部の屈曲度から円筒と考えられる。25 は口縁部から胴部上位まで残存する。口縁部には３段の刺突を施し，貝殻刺突線文を１条施す。胴部には横位の貝殻条痕文に「X」字状の条痕文を上書きする。文様や色調から，３号土坑から出土した 48 と同一個体と考えられる。24・25 はⅢ類土器に比定される。26 は頁岩製の打製石鏃である。正三角形状を呈し，基部の抉りは浅い。

４号連穴土坑（第 44 図）

H-23 区，Ⅷ層上面で検出された。ブリッジは良好に残存していた。焚き口と考えられる土坑は 120cm × 68cm，小穴は 30cm× 35cmの上面プランである。全体形状としては，長軸 175cm，短軸 68cm，深さ 45cmを測る。長短値は 0.38 であった。４号・５号土坑と重複しており，これらの土坑は連穴土坑に比べると深さが 15cm ～20cmと浅めである。

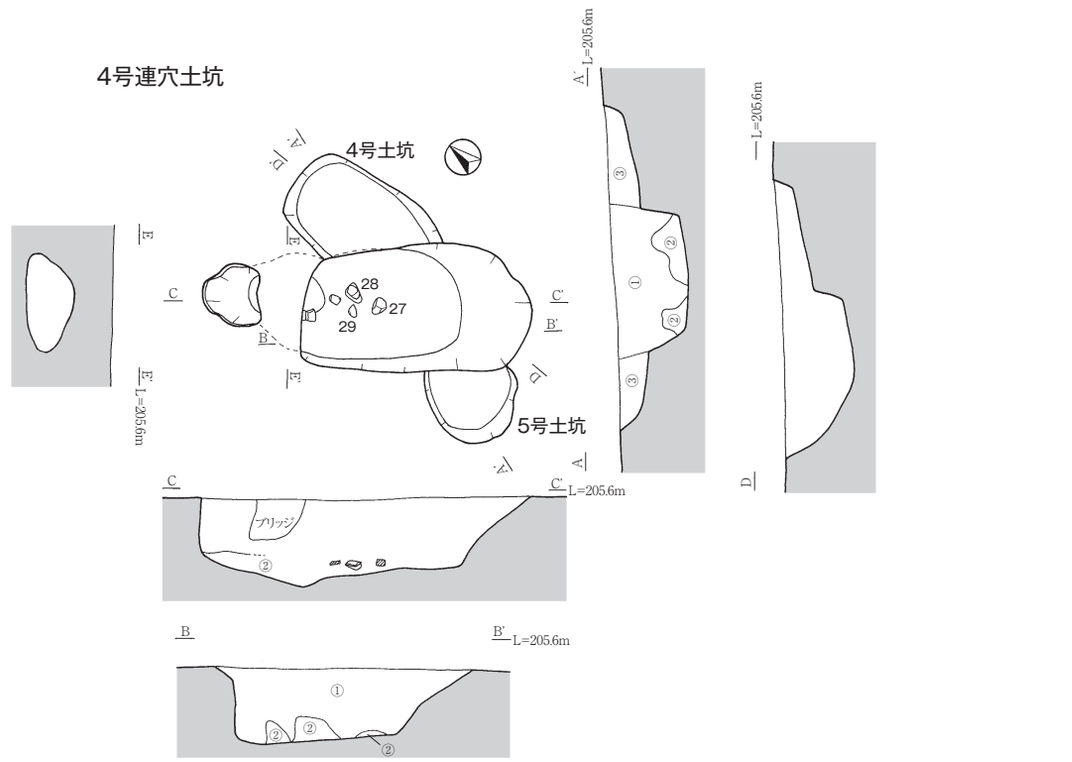
当初，土坑として調査していたが，完掘後に連穴土坑であると判明したため，一部の埋土の分層が行えなかった。埋土は概ね黒色土で，黄色パミスが多く混在する硬めの埋土①で占められる。床面付近には茶褐色の粘質土である埋土②が堆積し，炭化物も多く検出された。

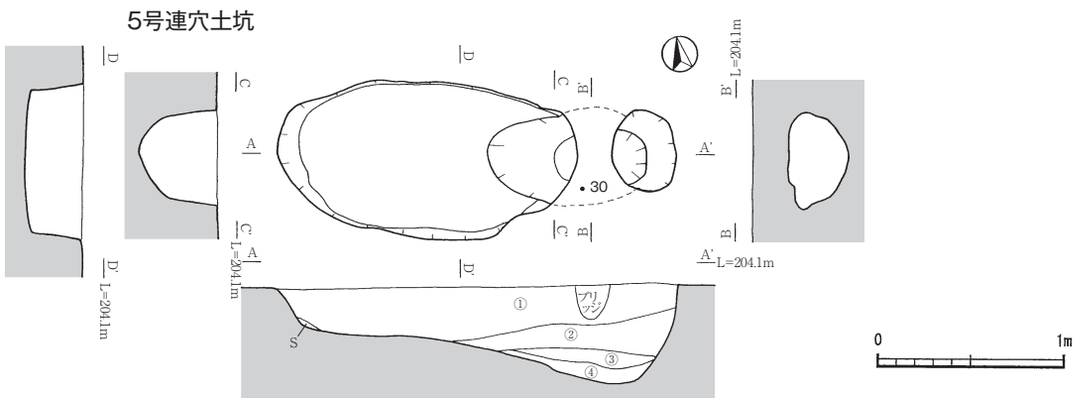
関連する遺物は土器８点が出土した。27 は包含層出土の土器と接合した胴部片である。器壁が比較的厚く，胎土も白色粒が目立つなど粗い。外面には横位の貝殻刺突文を数条施し，下位に４～５条の貝殻刺突が鋸歯状になる。なお，鋸歯文の下位にもわずかに横位の貝殻刺突文が確認できるため，鋸歯文と交互に組み合わされる可能性もある。28 は 27 と同様に貝殻刺突で鋸歯文が施される。いずれもⅥ類土器に比定される。29 は包含層出土の土器片と接合したもので，底面部分のみが残存する。外面はケズリ調整により平坦面が作出されているが，内面は指頭押圧が目立ち，凹凸が激しい。詳細な時期は不明である。

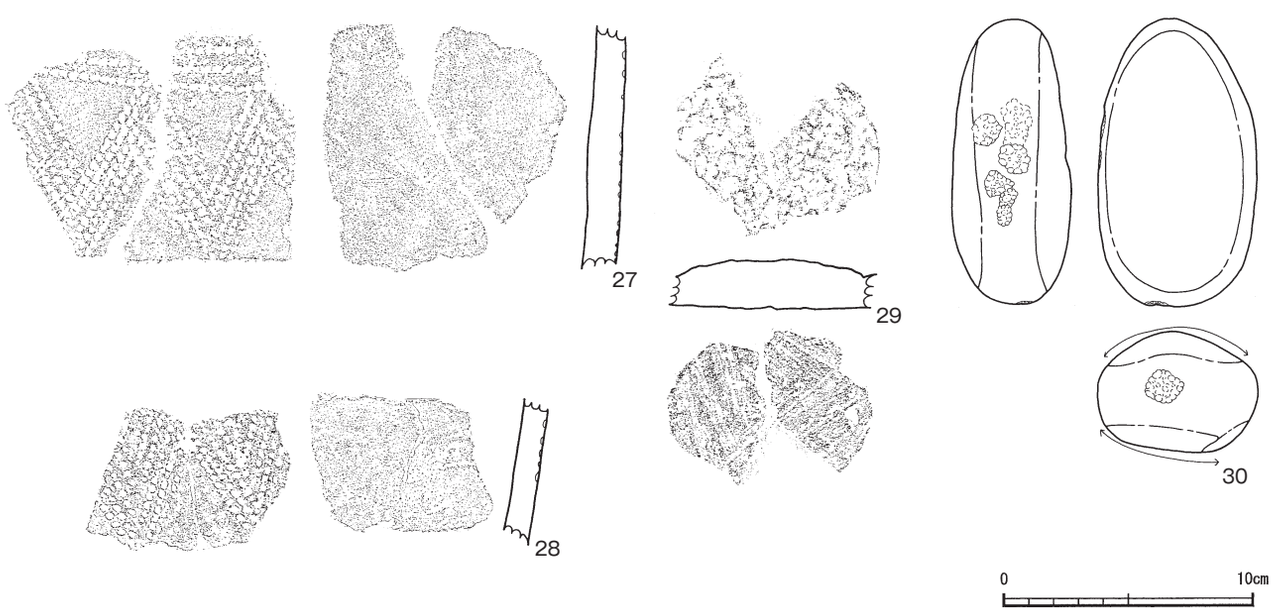
５号連穴土坑（第 44 図）

K-17 区，Ⅷ層上面で検出した。長軸 212cm，短軸 85cm，深さ 55cmを測る。長短値は 0.40 であった。

全体的に埋土①が主体をなしているが，ブリッジ付近の下位はさらに３つに分層できた。埋土①は黄色パミスを含む黒色土で，検出面全体に広がっている。その下位の埋土②は黄色パミスをやや多く含む黒褐色土，埋土③は黄色パミスと白色パミスを多く含む黒褐色土，そして底面付近には黄色パミスや白色パミスが混在しない黒色







第 44 図　４～５号連穴土坑・出土遺物，４～５号土坑

土の埋土④が堆積している。

関連する遺物は石器１点が埋土中から出土した。30は凝灰岩製の磨・敲石である。下・左側面に敲打痕が観察できるが，スポット的であり密度は低い。表面・裏面は磨面であり，表面は平滑である。

埋土中から検出した２点の炭化物で年代測定を実施したところ，8,476 － 8,236cal ＢＣの値が得られた。

６号連穴土坑（第 45 図）

Ｆ-22 区，Ⅷ層で検出された。ブリッジは下部のみが残存していることが，調査中に判明した。長軸 210cm，短軸 65cm，深さ 34cmを測る。長短値は 0.30 であった。

埋土は黒褐色土を主体とする。埋土①は黄色・白色パミスを全体に含み，埋土②はパミスの量が埋土①より少ない。いずれもやや粘性があり，強くしまった土である。床面付近には１㎜大の白色パミスを含む埋土③がブロック状に点在する。埋土④はブリッジの残存部分と推定される薩摩火山灰である。

関連する遺物は確認されなかった。

７号連穴土坑（第 45 図）

Ｆ－４区，Ⅷ層上面で検出した。長軸 135cm，短軸 45cm，深さ 17cmを測る。長短値は 0.32 であった。ブリッジは若干崩れているものの，残存状態は良好である。

埋土は黒褐色の埋土①・②・④，暗褐色の埋土③・⑤に分層される。埋土①は黄色パミスを密に含み，硬質である。埋土②は埋土①とほぼ同質で，埋土①と同様にパミスを含むが，若干軟らかい。埋土③は軟らかい粘質土である。埋土④は埋土②とほぼ同質で，埋土⑤は埋土③とほぼ同質である。

関連する遺物は確認されなかった。

８号連穴土坑（第 45 図）

Ｅ・Ｆ-20 区のⅧ層上面で，長楕円形と略円形のプランが連続して検出された。長楕円形の土坑は２段掘り気味に，略円形の土坑（小ピット）側に連結する。西側ブリッジは崩落しているが，東側がわずかに残る。埋土中に薩摩火山灰ブロックも多くみられたため，連穴土坑と判断した。長軸 260cm，短軸 75cm，深さ 51cmを測り，長短値は 0.28 であった。

埋土は３つに分層され，そのほとんどが黒褐色で白色パミスを含む埋土①である。小ピット側の立ち上がりには茶褐色の埋土②，床面付近には焼土や炭化物が混在する茶褐色の埋土③が堆積する。また，埋土①中には薩摩火山灰ブロックが点在する。

埋土中から数点の土器片が出土した。31 は口縁部片である。口縁部は胴部からほぼ直口する器形で，口唇部は平坦面を作出し，刻みが施される。口縁部は２段の凹点文が互い違いに切り合って施され，胴部は横位の貝殻条痕である。Ⅱ類土器に比定される。32 はやや丸く屈曲する胴部片である。横位の貝殻条痕の上から，縦位・斜位の貝殻刺突文が施される。焼成は良好である。Ⅲ類土器と考えられる。

９号・10 号連穴土坑（第 45 図）

Ｄ・Ｅ-23 区，Ⅷ層上面で検出し，いずれもブリッジは良好な状況で残存していた。10 号連穴土坑と，それぞれの焚き口側の土坑が直交するように切り合っている。しかし，埋土にほとんど違いはみられなかったことから，切り合い関係については不明である。

９号連穴土坑は短軸 40cm，深さ 40cmを測り，長軸は遺構が重複しているため不明である。他の連穴土坑と比較すると，ブリッジ部分が長く，小穴は小さめである。

埋土はパミスを多く含む黒色土である埋土①が主体をなし，南端にはパミスの量がやや少ない黒褐色の埋土②が堆積する。埋土②中には，10cm大の薩摩火山灰ブロックが点在している。床面にはやや粘質がある茶褐色土で，パミスの量が少ない埋土③が広がり，炭化物を含んでいる。

10 号連穴土坑は長軸 270cm，短軸 50cm，深さ 53cmを測る。長短値は 0.18 であった。焚き口側と思われる土坑は，９号連穴土坑と重複している。他の連穴土坑と比較しても，長軸が長く，東側の埋土には薩摩火山灰がブロック状に含まれる部分が観察できるため，ブリッジ状の構造物が存在した可能性がある。つまり，焚き口側の穴を共有しながら，本来は両端に小ピットがあったものが，東側の部分のみが崩落したか，２基の連穴土坑が切り合っていた可能性も考えられる。

床面付近の埋土は炭化物を含み，パミスの少ない茶褐色粘質土の埋土③であるが，大部分はパミスを多く含んだ黒色土の埋土①である。埋土②はパミスの少ない黒褐色土である。

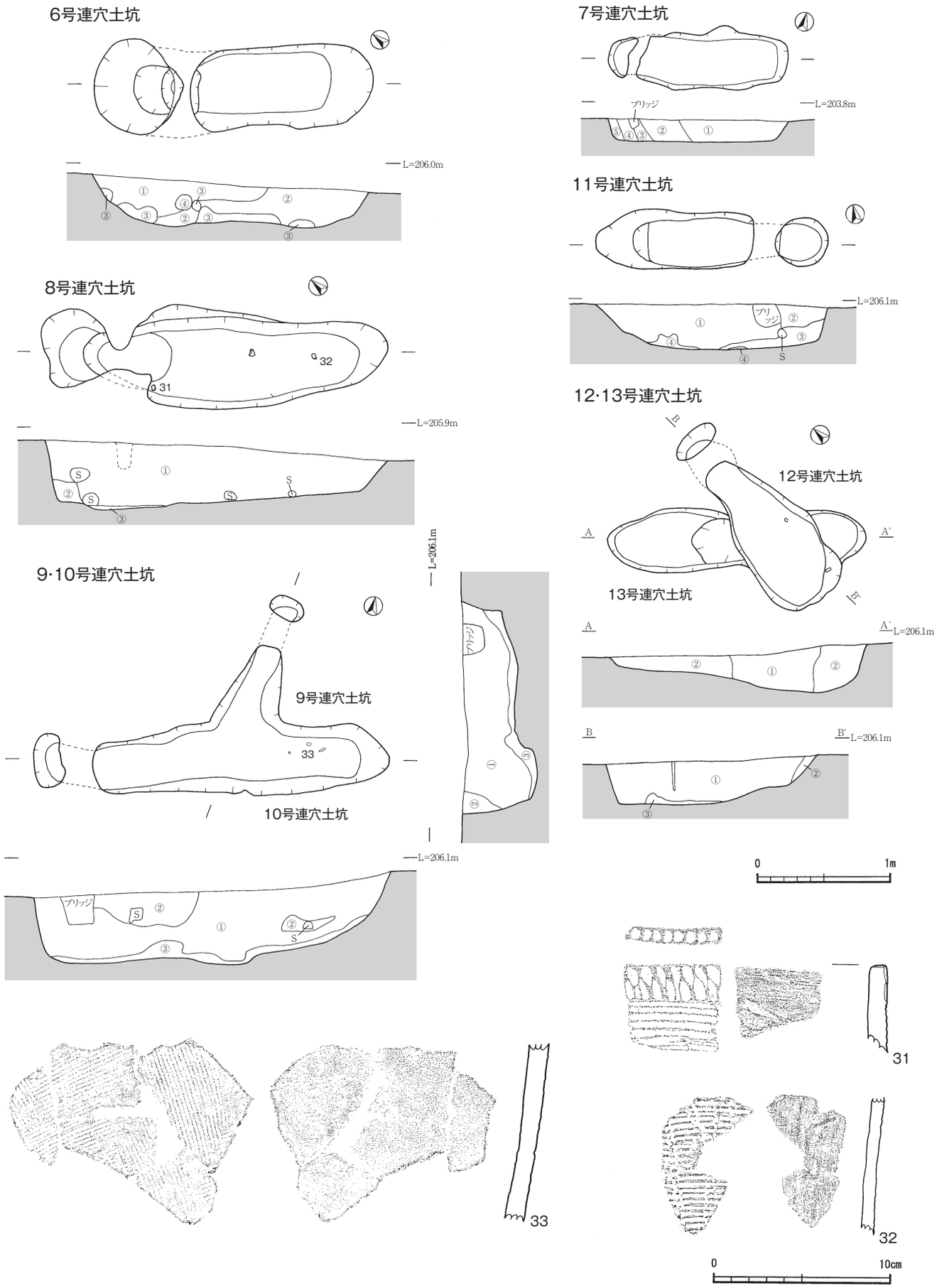
関連する遺物は 10 号連穴土坑から土器３点が出土し，その内１点を掲載した。33 は胴部のみ残存している。綾杉状の貝殻条痕が施される。条痕の幅は狭い。Ⅴ類土器に比定される。

11 号連穴土坑（第 45 図）

Ｅ-22 区，Ⅷ層上面で検出した。ブリッジは良好な状況で残存していた。31 号連穴土坑の近くに位置する。長軸 175cm，短軸 45cm，深さ 35cmを測る。長短値は 0.25 であった。焚き口側端はスロープ状に底面まで下り，小穴側端は垂直に近い立ち上がりである。床面は薩摩火山灰層の直下と同レベルである。

埋土は４つに分層される。埋土の主体を占める埋土①は，黄色パミスを多く含む黒褐色土である。埋土②は埋土①に比べてパミスの量が少ない。小ピット側の埋土③は茶褐色土で，黄色パミスを少量含む。床面付近の埋土④はやや粘質が強く，炭化物をわずかに含む茶褐色土である。

関連する遺物は自然礫２点が出土した。



第 45 図　6～13 号連穴土坑，8・10 号連穴土坑出土遺物

12・13 号連穴土坑（第 45 図）

Ｅ-23 区，Ⅷ層上面で検出した。13 号連穴土坑を 12 号連穴土坑が切っており，12 号連穴土坑が新しいといえる。12 号連穴土坑は長軸 160cm，短軸 60cm，深さ 31cmを測る。長短値は 0.37 であった。ブリッジ部分と埋土との境が不明瞭であったので正確に図化することができなかった。

13 号連穴土坑は長軸 195cm，短軸 50cm，深さ 39cmを測る。長短値は 0.25 であった。ブリッジは残存していなかったが，形状から連穴土坑と判断した。焚き口側端からスロープ状に下り，小穴付近で垂直に近い角度で立ち上がる。焚き口側端付近は，薩摩火山灰層の固い面を床にしている。そこから小穴側にかけては，薩摩火山灰の豆粒が床面に広がる。

埋土はいずれも３つに分層され，12 号連穴土坑の埋土で主体を占めるのが埋土①，13 号連穴土坑は埋土②である。埋土①は黄色パミスを密に含む黒褐色土である。埋土②は黄色パミスが非常に少なく，白色パミスが多く含まれる。12 号連穴土坑の床面付近にみられる埋土③はやや粘性のある茶褐色土である。

関連する遺物は 12 号連穴土坑から土器片２点が出土したが，小片のため掲載には至らなかった。

14 号連穴土坑（第 46 図）

Ｇ-16 区，Ⅷ層上面で検出された。長軸 173cm，短軸 57cm，深さ 48cmを測る。長短値は 0.32 であった。ブリッジは良好に残存していた。また，連穴土坑の焚き口と思われる土坑直下に，シミ状に脱色した部分が観察された。シミは深さ１ｍほどまで及ぶが，人為的な掘り込みではないと考えられる。同様の遺構は，15 号・21 号連穴土坑でも確認された。

埋土はⅦ層相当の黒色土が堆積していた。

関連する遺物はブリッジ付近で被熱した礫１点が出土した。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,292 － 8,235cal ＢＣの値が得られた。

15 号連穴土坑（第 46 図）

Ｇ-16 区，Ⅷ層上面で検出した。長軸 198cm，短軸 48cm，深さ 50cmを測る。長短値は 0.24 であった。ブリッジは良好に残存しており，床面は階段状になっている。

15 号連穴土坑の床面から 70～80cm下（ⅩⅡ層・ⅩⅢ層相当）にかけて，白く脱色した範囲が５～20cmの幅で見られた。全体的に小穴から焚き口と考えられる土坑の方向に流れるような状態が観察できる。14 号連穴土坑と同様に，本来の地層堆積に改変はなく，人為的な掘り込みとは考えがたい。14 号・15 号連穴土坑の両例から考えて連穴土坑床面から下層への水の浸透などにより，このような痕跡が残ったと考えられる。

埋土は厳密には焚き口側と思われる土坑の上位付近と，連穴土坑全体の床付近で分層されるが，全体的にはⅦ層相当の黒色土が堆積している。

関連する遺物は土器片７点，礫３点が出土した。土器は小片のため掲載には至らなかったが，胴部に横位の条痕を施している。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,347 － 8,249cal ＢＣの値が得られた。

16 号連穴土坑（第 46 図）

Ｄ・Ｅ-14 区においてⅦ層上面でパミスの集中域が検出され，精査の結果，連穴土坑と判断した。ブリッジは良好に残存していた。焚き口と考えられる土坑は 112cm × 35cm，小穴は 18cm× 35cmを測る。全体形状としては，長軸 158cm，短軸 35cm，深さ 58cmを測る。長短値は 0.22 であった。焚き口側の土坑の周囲にはⅦ層のパミスがやや集中してみられる範囲があり，図中に破線で示した。

埋土は８つに分層される。焚き口側の埋土①は多量のパミスを含む黒色粘質土で，隣接する埋土②は埋土①に近いがパミスの量が少ない。埋土①の下層の埋土④は埋土①・②よりも砂質な黒褐色土で，埋土⑤はパミスをあまり含まず，埋土①より粘性の高い。埋土③は５㎜大のパミスを含む黒色粘質土で，小穴部の埋土である。下層の埋土⑥は埋土①と類似する黒色粘質土，床面に堆積する埋土⑦は１cm大のパミスと炭化物を含む黒色粘質土である。断面の両端部分にパミスを含まない黒褐色粘質土の埋土⑧が，プランに沿って堆積していた。

関連する遺物は礫 10 点が出土した。

17 号連穴土坑（第 46 図）

Ｍ-16･17 区，Ⅷ層上面で検出された。ブリッジが良好に残存していた。焚き口と考えられる土坑は 120cm × 50cm，小穴は 30cm× 35cmの上面プランである。全体形状としては，長軸 170cm，短軸 50cm，深さ 35cmを測る。長短値は 0.29 であった。ブリッジ直下の床面は，わずかであるが凹んでいた。

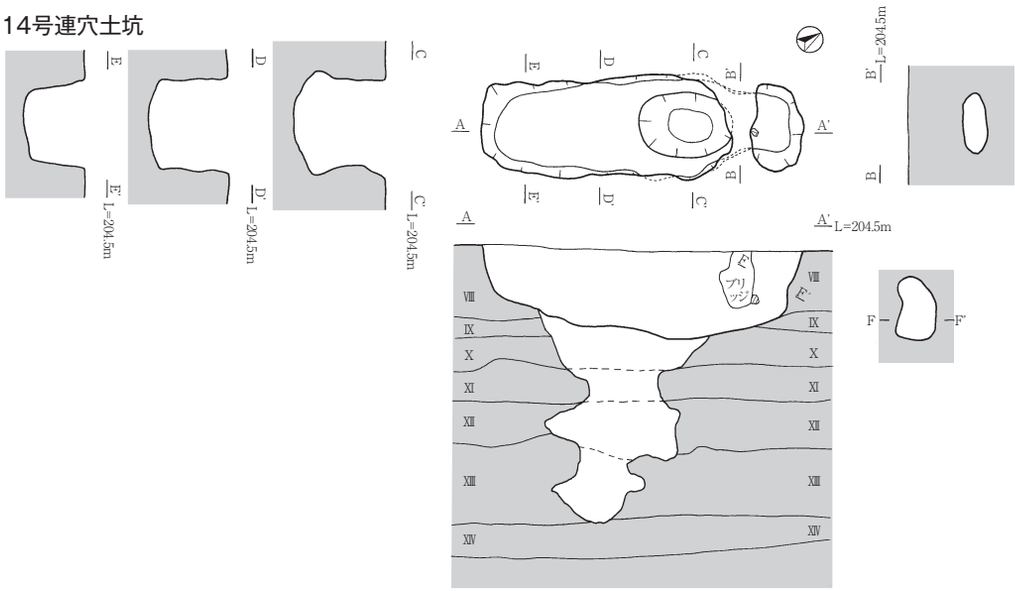
埋土の大半は黄色パミスが混ざる黒褐色土が主体であり，焚き口側の床面に暗褐色土の埋土②，ブリッジ下部の床面には茶褐色で粘性の強い埋土③が堆積していた。

関連する遺物は確認されなかった。

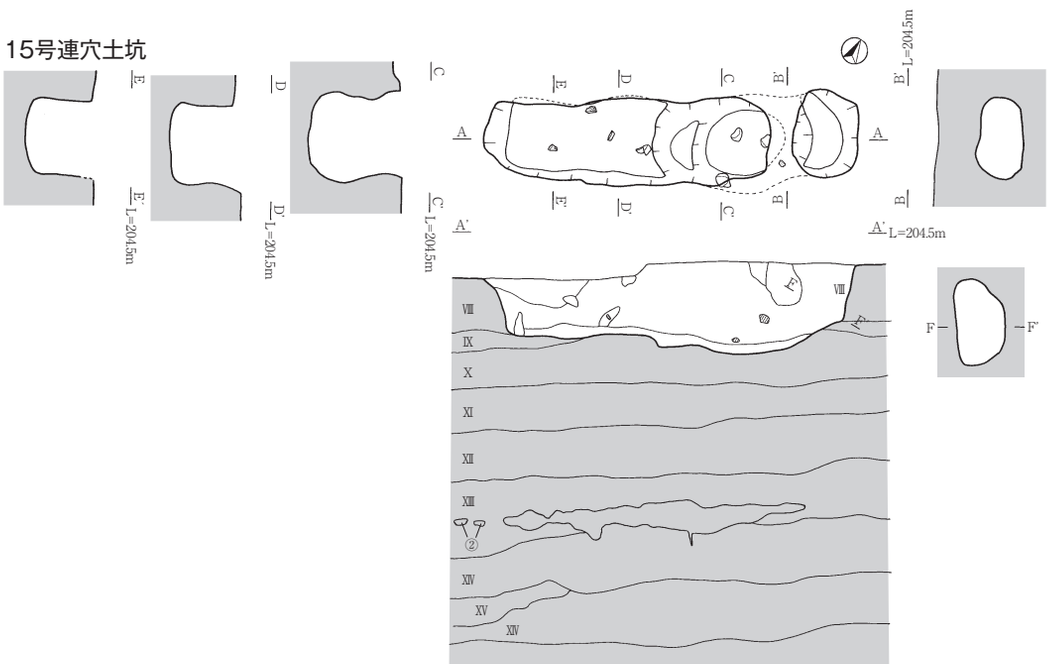
18 号連穴土坑（第 47 図）

Ｅ-21 区においてⅧ層上面で検出した。144 号集石と重複する。焚き口穴上位に多数の礫が集中しており，連穴土坑が埋没する過程で集石が形成されたと考えられる。長軸 165cm，短軸 48cm，深さ 40cmを測る。長短値は 0.29 であった。埋土中に薩摩火山灰のブロックが密に堆積していた部分があり，ブリッジの位置に対応するため，連穴土坑であると判断した。他の連穴土坑と比較して，炊き口側端の立ち上がりが垂直に近い角度で土坑底面に下りる点が特色となる。

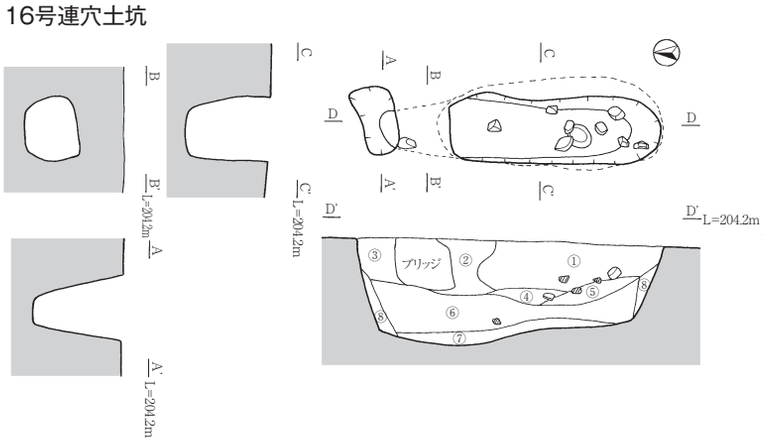
14号連穴土坑



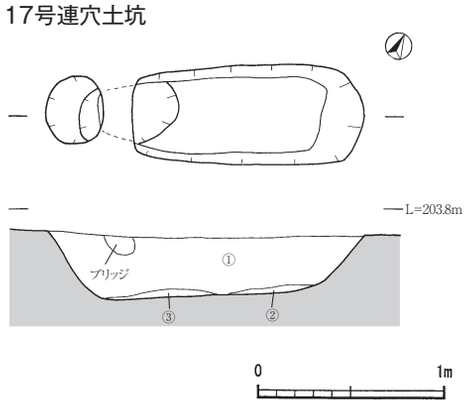
15号連穴土坑



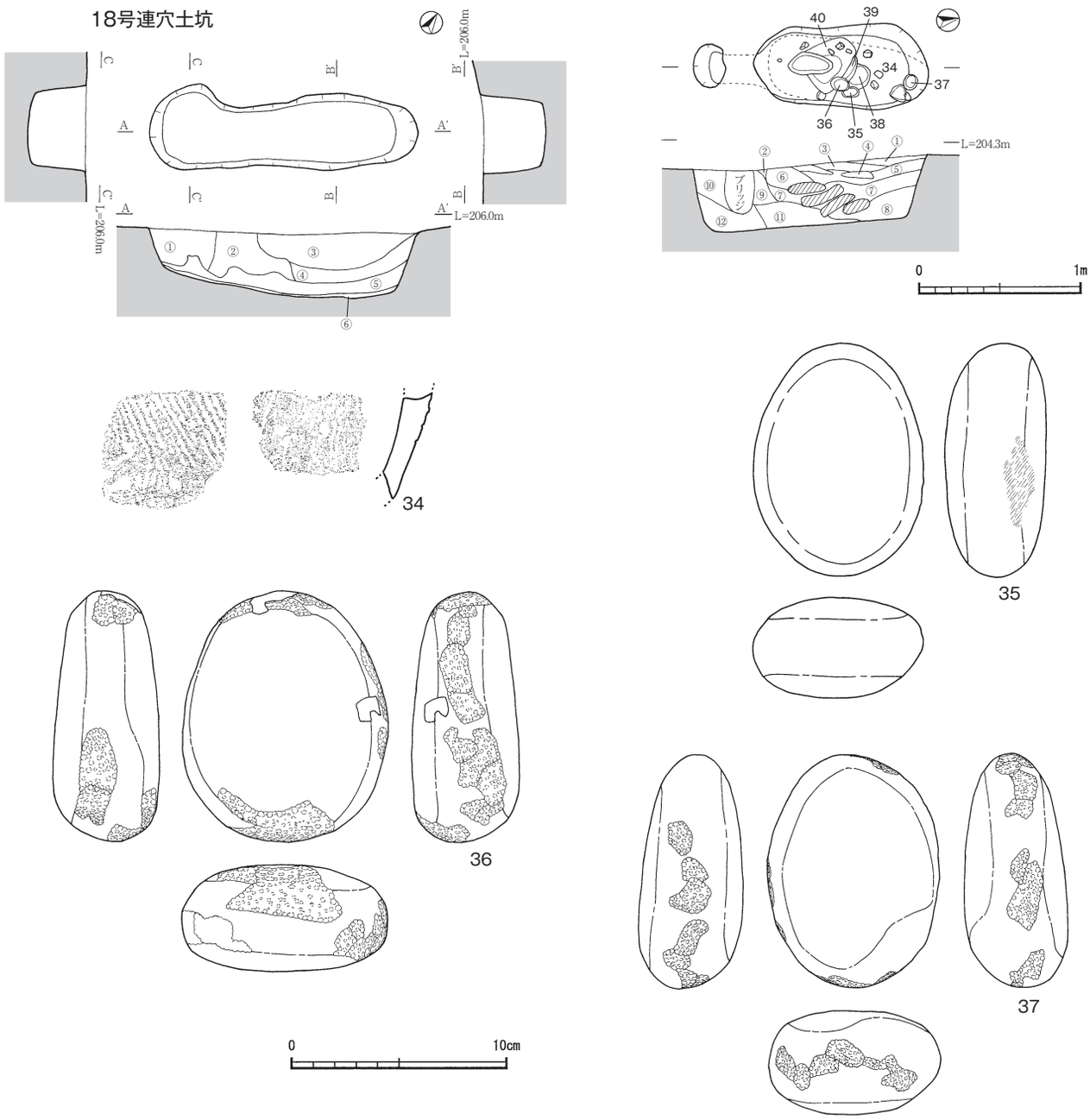
16号連穴土坑



17号連穴土坑



第 46 図　14～17 号連穴土坑



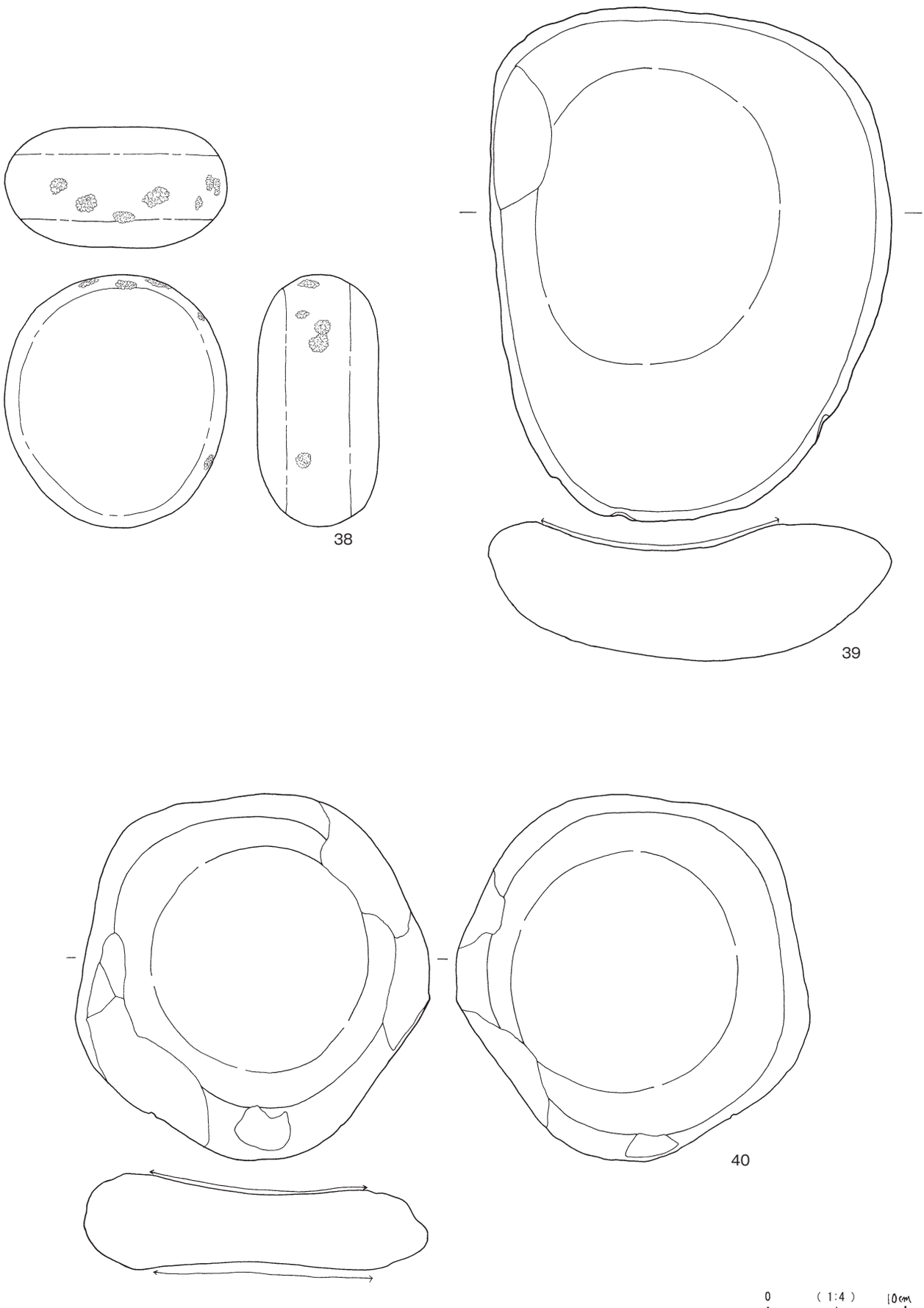
第 47 図　18～19 号連穴土坑，19 号連穴土坑出土遺物（１）

埋土は６つに分層された。小穴部の埋土①は微細な白色パミス及び黄色パミスを含み，暗茶褐色粘質土がブロック状に混在する黒褐色砂質土である。ブリッジが想定される付近の埋土②は 10cm大の白色・黄色パミスのブロックを多く含む黒褐色土である。礫が最も集中する埋土③は白色・黄色パミスを含む黒褐色砂質土である。埋土④は埋土③と類似するが，暗茶褐色粘質土がブロック状に混ざり，炭化物が多く含まれる。埋土⑤はやや粘性のある黒色の小ブロックが混在する暗茶褐色土で，砂質は弱く，炭化物が多く含まれる。床面には粒子が細かく粘性の強い暗黄褐色の埋土⑥が薄く堆積する。

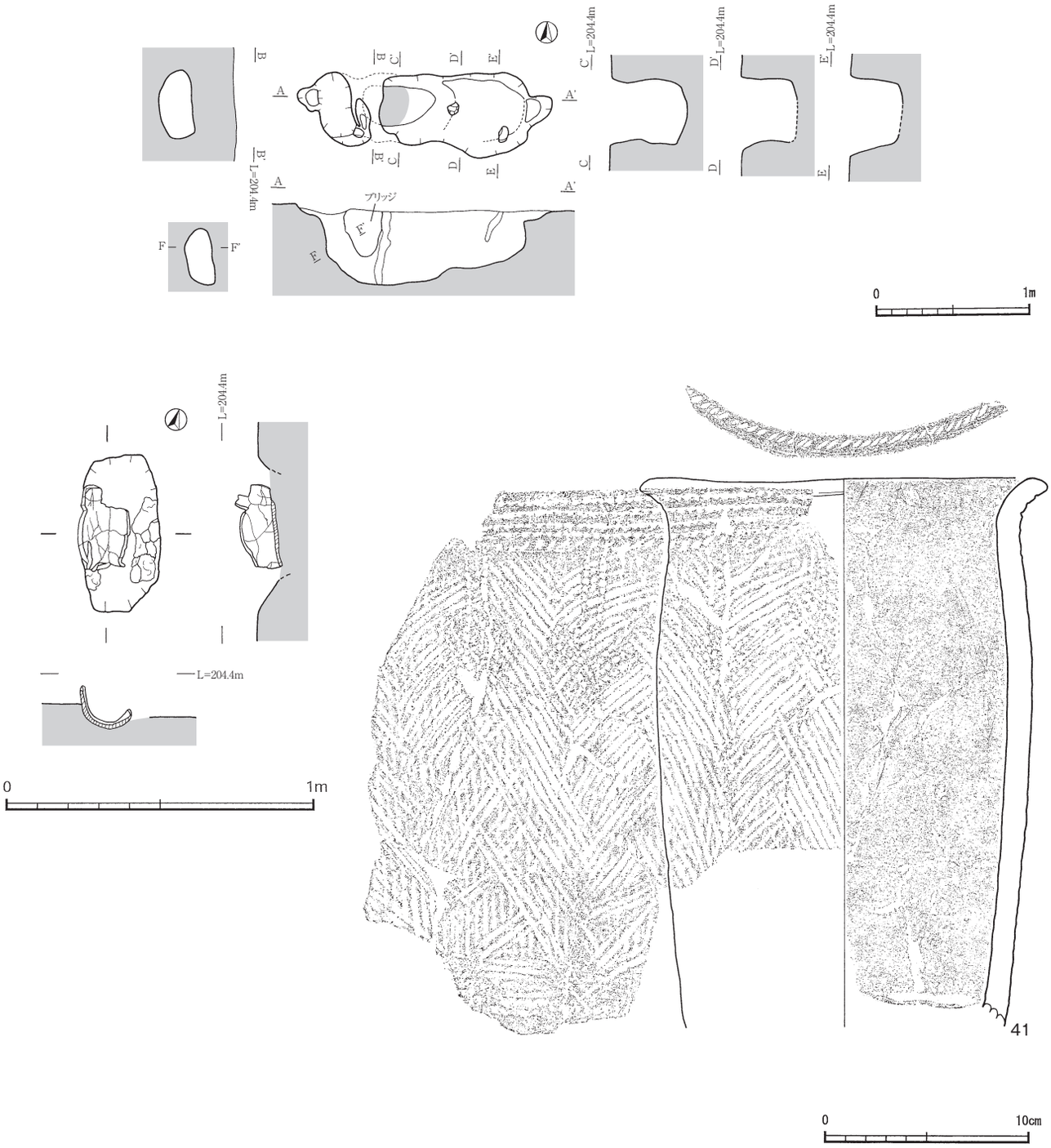
関連する遺物は確認されなかった。

19 号連穴土坑（第 47・48 図）

Ｅ-14 区においてⅦ層上面でパミスの集中域を確認し，遺構を検出した。ブリッジは良好に残存していた。焚き口と考えられる土坑は 110cm× 50cm，小穴は 20cm× 25cmの上面プランである。全体形状としては，長軸 145cm，短軸 50cm，深さ 53cmを測る。長短値は 0.34 であった。他の連穴土坑に比べると，トンネル部分が長く小穴は小さめである。ブリッジは薩摩火山灰層である。



第 48 図　19 号連穴土坑出土遺物（２）



第 49 図　20 号連穴土坑・出土遺物

また，焚き口と考えられる土坑からは石器が重なって出土した。

埋土はおおよそレンズ状に堆積する。埋土①は黄色パミスが少量に含まれる黒褐色粘質土である。埋土②は黄色パミスと白色パミスを少量含む黒色土である。埋土③はやや粒径の小さい黄色パミスを含む黄褐色土で，やや硬質な砂質土である。埋土⑤は黄色パミスを含む，ややにぶい暗褐色土であり，白色パミスを含む灰黄褐色土で硬質な砂質土の埋土④が筋状に含まれる。埋土⑥は黄色パミスを全体に含む褐色土，埋土⑦も同様のパミスを含む黒褐色土である。埋土⑧は薩摩火山灰ブロック及び黄色・白色パミスが全体に混ざる硬質な黒褐色土で，パミスの密度が高い部分は砂質である。埋土⑨は白色パミスを少量を含む黒褐色粘質土である。埋土⑩は薩摩火山灰ブロック及び黄色パミスを含む粘性の弱い黄褐色土である。床面付近の埋土⑪は薩摩火山灰ブロックを含む黒褐色土で，埋土⑫は色調が埋土⑪と同じであるが，薩摩火山灰ブロックを含まない。

関連する遺物は土器１点，石器７点，礫 11 点が出土した。残存状況が良好な６点を図化した。34 は胴部片である。上端・下端とも接合面で割れている。胴部は内外面ともケズリ調整で成形されている。外面には緩やかな山形押型文が施される。Ⅺ類土器に比定される。

また，石器がまとまって出土し，廃棄された可能性が考えられる。35 は砂岩製の磨・敲石である。節理面が明瞭に露出する石材であり，表面はやや摩滅しており，敲打部の範囲が不明瞭である。右側面にやや凹凸があり，敲打痕と考えられる。右側面の稜部に明瞭な擦痕が残る。36 は凝灰岩製の磨・敲石である。上・下・右側面に敲打痕が明瞭に観察できる。上面および下面は磨面であり，表面が平滑である。37 は凝灰岩製の磨・敲石である。下・右・左側面に敲打痕が観察できる。上下面は磨面であり，表面が平滑である。38 は砂岩製の台石である。大型の円礫で，上・右側面に敲打状の凹みが観察できるが密度は低い。上・下面は平坦であり，表面は平滑である。39 は凝灰岩製の石皿である。筋状の結晶構造が明瞭な凝灰岩を素材として用いている。裏面はやや丸みを帯びており，内面は広く作業面を設けている。凹みの程度からも使用頻度が高かったと考えられる。40 は凝灰岩製の石皿である。平面形は丸みを帯びた五角形状である。表面・裏面ともに作業面を有し，中央から広い範囲が磨耗により平滑になっている。また，作業面は凹んでおり，その磨耗度からも使用頻度が高かったことが分かる。

20 号連穴土坑（第 49 図）

Ｆ-16 区，Ⅷ層上面で検出された。当初２基の隣接する土坑と考え調査を進めたが，トンネルとブリッジ部分を確認したことから連穴土坑と判断した。最終的には，長軸 155cm，短軸 56cm，深さ 48cmを測る。長短値は 0.30 であった。

埋土はⅦ層相当の黒色土が堆積していた。ブリッジ下部から焚き口側にかけての床面に被熱の痕跡がみられた。

41 は口縁部から胴部下半まで残存する土器で，小穴の埋土上位から出土した。頸部が大きくくびれ，口縁部は大きく外反する。口唇部には浅い刻目，口縁部外面には横位の貝殻腹縁刺突文が４段施される。胴部は規則的な綾杉状の条痕で，頸部から胴部上半に貝殻腹縁刺突で垂下する矢印状の文様が描かれる。残存率はおおよそ半分であるため，完形であれば８～９か所に矢印状の文様があったと考えられる。本遺跡の中でも，このような文様を有する土器は確認されていない。器形・文様の特徴からⅤ類土器に比定される。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,349 － 8,250cal ＢＣの値が得られた。

21 号連穴土坑（第 50 図）

Ｆ-17 区，Ⅷ層上面で検出した。崩落している部分もあるが，残存しているブリッジをもって，連穴土坑と判断した。長軸 213cm，短軸 73cm，深さ 62cmを測る。長短値は 0.34 であった。

ブリッジから小穴直下の床面下に，シミ状に脱色した部分が観察された。シミは幅 60cmで，深さは床面から 100cmまで及んでいる。シミが観察できる部分は乳白色化し軟弱である。同様のシミが確認された 14 号・15 号連穴土坑と同様に，人為的な掘削の痕跡は確認されなかった。

埋土のほとんどが暗褐色の埋土①であり，５㎜～１cm 大の黄色パミスと白色パミスをまばらに含み，数cm大の薩摩火山灰ブロックが散在する。ブリッジ部分の直下にあたる埋土②は薩摩火山灰層のブロックであり，一部赤変している。埋土③の特徴は埋土①と同じであるが，非常に硬質である。埋土③の範囲のみ，床面から一段高く，硬化面を形成しており，連穴土坑使用時にステップのような役割を果たした可能性が想定される。なお，埋土②の下位にはやや赤色化している部分も観察された。

関連する遺物は確認されなかった。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,356 － 8,283cal ＢＣの値が得られた。

22 号連穴土坑（第 50 図）

Ｇ-22 区においてⅧ層上面で検出した。ブリッジは良好に残存していた。焚き口と思われる土坑は 100cm × 48cm，小穴は 30cm × 45cmを測る。全体形状は，長軸 143cm，短軸 48cm，深さ 48cmで，長短値は 0.33 であった。

埋土の主体はⅦ層類似の埋土①であり，黄色パミスを多く含む黒色砂質土である。壁面の立ち上がり付近には埋土①と類似するものの，パミスの量の少ない埋土②が堆積し，埋土①よりも軟らかい。床面の埋土③はⅨ層類似の茶褐色粘質土であり，黄色パミスを多量に含む。

関連する遺物は確認されなかった。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,455 － 8,271cal ＢＣの値が得られた。

23 号連穴土坑（第 50 図）

Ｄ-24 区においてⅧ層上面で検出された。ブリッジは良好に残存していた。長軸 185cm，短軸 60cm，深さ 42cmを測る。長短値は 0.32 であった。Ⅸ層からＸ層を床面とし，ほぼ平坦である。

埋土の主体は黄色パミスを多く含む黒褐色土の埋土①で，ブリッジ下部の床面付近にやや炭化物が混ざる茶褐色土の埋土②が堆積する。床面に焼土や被熱による赤変などは認められない。

関連する遺物は確認されなかった。

24 号連穴土坑（第 50 図）

Ｊ-18 区においてⅧ層上面で検出した。ブリッジが崩落しており，当初は土坑として調査したが，埋土中から薩摩火山灰層がブロックで集中して検出されたことから，連穴土坑であると判断した。長軸 180cm，短軸 95cm，

深さ 45cmを測る。長短値は 0.53 であった。連穴土坑の焚き口と考えられる土坑の北西側に，長軸 50cm，短軸 40cm，深さ 20cm程の張り出しをもつ。埋土は同時期と思われ，連穴土坑に降りるステップの可能性もある。

埋土はほぼレンズ状に堆積する。埋土①はⅦ層類似の黒褐色土で，黄色パミスと細粒な白色パミスを多量に含み，硬質である。埋土②は埋土①より黒色が強く，黄色パミスと白色パミスを少量含む。埋土③はⅨ層を主体とし埋土①・②が少し混じる黒褐色土である。埋土④はⅦ層の黒褐色土を主体とし，茶褐色粘質土が多少混じる。白色パミス，黄色パミスや炭化物を多少含む。埋土⑤は黒褐色土が主体であるが，黒色土と茶褐色土が混ざり，白色パミスをわずかに含む。埋土⑥は黒褐色土と茶褐色の混土で床面に堆積する。埋土⑦は黒褐色土で黄色パミス・白色パミスとも少量含まれる。埋土⑧は埋土①よりも黒色の強い色調で黄色パミス･白色パミスを少量含む。埋土⑨は埋土⑧に黒色土が混ざり，埋土⑩は埋土⑨より黒色が弱くなる。埋土⑪はⅨ層の黒褐色粘質土に近く，やわらかい。

なお，崩落したブリッジと想定される薩摩火山灰のブロックは，ある程度埋土が堆積した上から検出された。そのため，連穴土坑が廃棄された後，ある程度時間が経過してからブリッジが崩落したと考えられる。

関連する遺物は確認されなかった。

25 号連穴土坑（第 50 図）

Ｆ-22 区，Ⅷ層上面で検出した。長軸 160cm，短軸 65cm，深さ 61cmを測る。長短値は 0.40 であった。ブリッジは残存していなかったが，埋土中に薩摩火山灰のブロックが検出されたため，連穴土坑と判断した。東側の小穴と考えられる部分の床面は，やや深くなっている。

埋土は４つに分層された。主体を占める埋土①は黒色土で，１cm以下の黄色パミスを多く含み，ややしまりがあるが粘性は弱い。埋土②は薩摩火山灰のブロックであり，崩落したブリッジと考えられる。埋土③は粘性の弱い黒褐色砂質土である。埋土④は暗赤褐色粘質土で，焼土となっており，炭化物を多く含んでいる。

関連する遺物は確認されなかった。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,355 － 8,271cal ＢＣの値が得られた。

26 号連穴土坑（第 50 図）

Ｇ-24 区，Ⅷ層上面で検出した。当初は土坑として調査したが，ブリッジの端と想定される箇所があり，連穴土坑であると判断した。長軸 158cm，短軸 60cm，深さ 28cmを測るが，長軸は掘りすぎの可能性が高く，想定される範囲を破線で示した。推定される長軸は約 95cmである。

埋土は５つに分層されたが，上述した想定される破線を上端とすれば，暗茶褐色土の埋土②は遺構の範囲外である。埋土①はⅦ層の黒褐色土に非常に類似しており，黄色･白色パミスを多く含む。また，炭化物も含まれる。埋土③はⅨ層の黒褐色粘質土にⅦ層が混ざっており，粘性がやや弱く砂質である。また，パミスはほとんど含まれず，上位に白色パミスが少量みられる。

関連する遺物は確認されなかった。

27 号連穴土坑（第 51 図）

Ｇ-21 区のⅧ層上面で検出した。長軸 253cm，短軸 60cm，深さ 32cmを測る。長短値は 0.32 であった。ブリッジ等は残存していなかったが，形状から連穴土坑と判断した。南側の端部には薩摩火山灰層が露頭しており，長軸はやや短く，破線の辺りになる可能性も考えられる。また，当初は焚き口と考えられる土坑の両端に，小穴のある連穴土坑を想定して調査を行ったが，南側は遺構ではなくシミによる変色であると判断した。

埋土は南側に流れ込むように堆積しており，埋土①は白色パミスを含む黒褐色砂質土である。埋土②は埋土①と色調が類似し，１cm大の黄色パミスを含む。埋土③は埋土②に比べ，パミスの量が少ない。埋土④はＸ層に近い暗褐色粘質土である。

関連する遺物は自然礫１点が出土した。

28 号連穴土坑（第 51 図）

Ｆ-23 区，Ⅷ層で検出された。６号・７号土坑と切り合っており，北側の平面プランは不明瞭であったが，床面に焼土混じりの埋土があることや 22 号連穴土坑と埋土が類似することから，連穴土坑の可能性が高いと判断した。ただし，ブリッジについては，崩落土と考えられる薩摩火山灰のブロックを埋土中では確認できなかった。長軸 160cm，深さ 30cmを測る。短軸は不明である。

埋土は黄色パミスを含み，Ⅶ層に類似する黒色土である埋土①が主体をなす。埋土②は茶褐色粘質土で，黄色パミスと黒色土ブロックを含む。埋土③・④は黒色土で黄色パミスの多少により分層できる。なお，床面には薩摩火山灰起源のパミスや，１～３cm大の焼土ブロックが含まれる暗褐色土が堆積しており，被熱の影響を受けたものと考えられる。

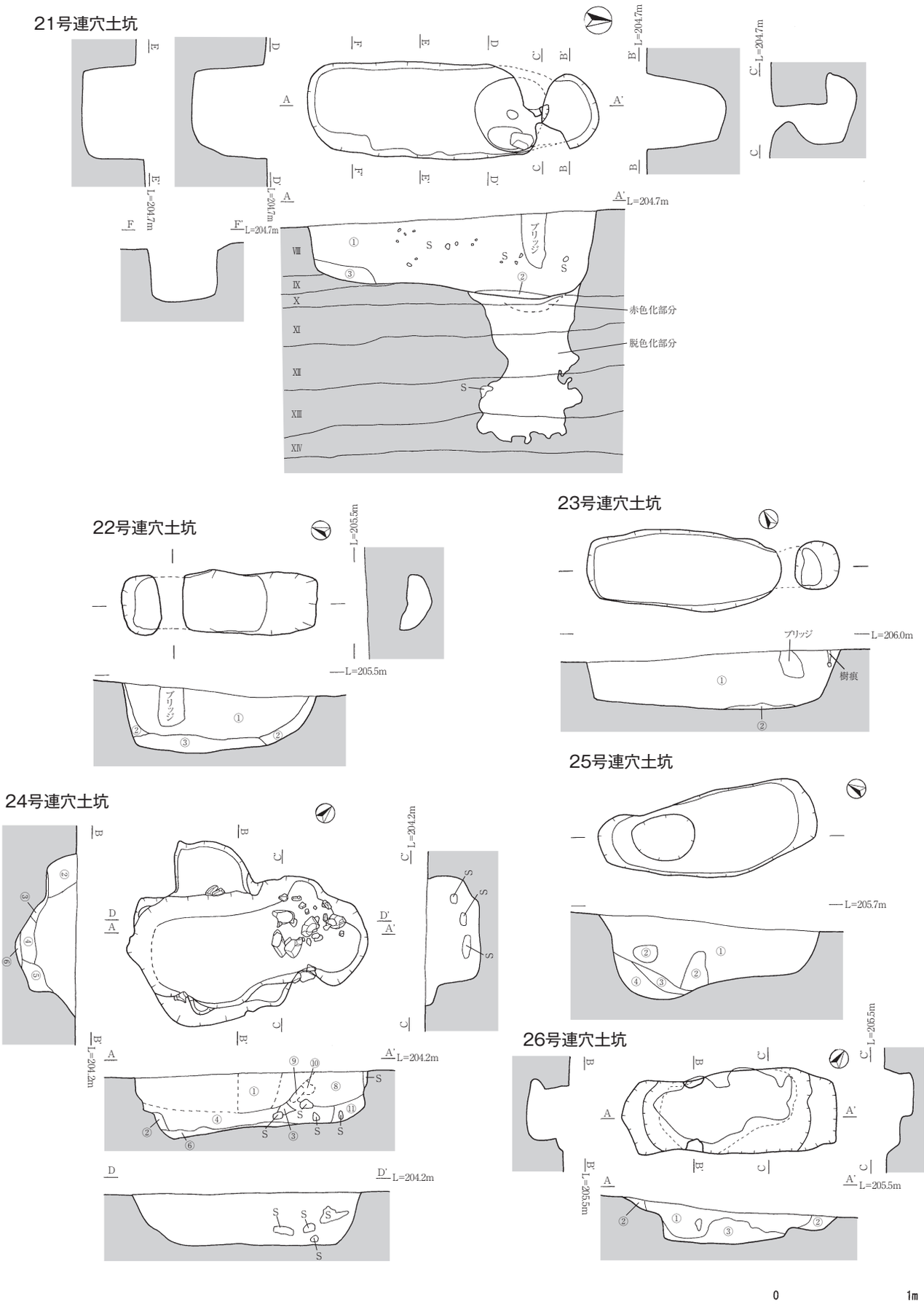
関連する遺物は土器片が出土したが，小片のため掲載には至らなかった。

28 号連穴土坑は円形の６号土坑と長楕円形の７号土坑と切り合っており，埋土の堆積状況等から６号土坑が最も新しく，28 号連穴土坑が最も古いと考えられる。

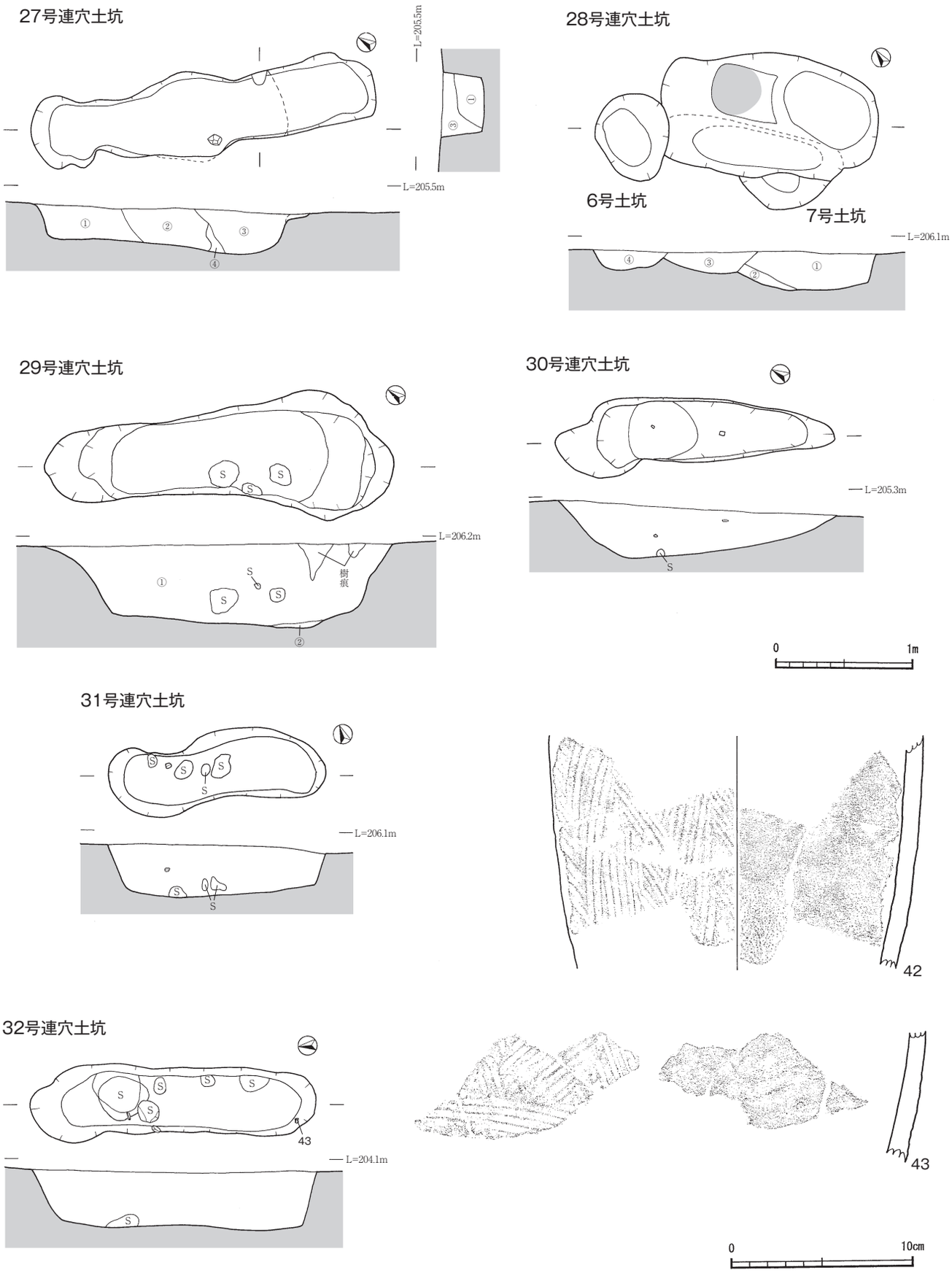
29 号連穴土坑（第 51 図）

Ｅ-23・24 区，Ⅷ層上面で検出した。ブリッジは残存していなかったが，薩摩火山灰がブロックで埋土に混入していることや床面に部分的に焼土や炭化物が堆積していることから連穴土坑と判断した。長軸 255cm，短軸最大幅 95cm，深さ 60cmを測る。長短値は 0.37 であった。

埋土はほぼ単層であり，黄色パミスが少なく白色粒子



第 50 図　21～26 号連穴土坑



第 51 図　27～32 号連穴土坑，32 号連穴土坑出土遺物

が混ざる黒褐色土の埋土①が主体を占め，床面に焼土や炭化物を含む明茶褐色土の埋土②が堆積する。また，埋土①には崩落したブリッジと想定される 10～20cm大の薩摩火山灰のブロックが含まれる。

関連する遺物は確認されなかった。

30 号連穴土坑（第 51 図）

Ｆ-20・21 区，Ⅷ層上面で検出した。ブリッジは確認できなかったが，薩摩火山灰がブロックで埋土に混入していることや，少量であるが床面に炭化物があることから連穴土坑と判断した。長軸 205cm，短軸 50cm，深さ 39cmを測る。長短値は 0.29 であった。焚き口側端からスロープ状に下り，小穴側で立ち上がる構造になっている。

埋土はほぼ単層であり，黄色パミスを少量含む黒褐色土である。床面には５cm大の薩摩火山灰のブロックが堆積していた。

関連する遺物は埋土中からⅡ類土器と思われる土器片が２点出土したが，小片のため掲載には至らなかった。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,770 － 8,599cal ＢＣの値が得られた。

31 号連穴土坑（第 51 図）

Ｅ-22 区，Ⅷ層で検出した。ブリッジは確認されなかったが，薩摩火山灰がブロックで埋土に混入していることや，床面に炭化物が多くみられることから連穴土坑と判断した。長軸 160cm，短軸 50cm，深さ 40cmを測る。長短値は 0.31 であった。平面形はやや歪んだ形状になっているが，断面は両端の立ち上がりが明瞭に確認できた。

埋土はほぼ単層であり，黄色パミスを少量含む黒褐色土である。床面及び埋土下位では薩摩火山灰のブロックが堆積していた。

関連する遺物は埋土中からⅢ類土器の角筒土器片が１点出土したが，掲載には至らなかった。

埋土中から検出した炭化物で年代測定を実施したところ，8,778 － 8,600cal ＢＣの値が得られた。

32 号連穴土坑（第 51 図）

Ｅ-21 区，Ⅷ層で検出した。ブリッジは確認できなかったが，薩摩火山灰がブロックで埋土に混入していることや床面に炭化物と焼土が広がっていることから連穴土坑と判断した。近接して１号竪穴住居状遺構が位置しており，部分的に重複する可能性もあることを想定して調査したが，切り合いはなかった。長軸 210cm，短軸 50cm，深さ 40cmを測る。長短値は 0.23 であった。

埋土はほぼ単層であり，黄色パミスを密に含む黒褐色土が主体を占める。埋土中に 10～30cm大の薩摩火山灰のブロックが含まれる。また，ブリッジが想定される床面付近には炭化物と焼土が混在する明茶褐色土が堆積する。これは被熱によるものと考えられ，連穴土坑の火所にあたると推定される。この明茶褐色土の上位には薩摩火山灰のブロックが位置しており，ブリッジが崩壊したものと考えられる。

関連する遺物は土器片２点が出土し，包含層出土の土器とそれぞれ接合した。42・43 は胴部のみ残存している。綾杉状の貝殻条痕が規則的に施されていることから，いずれもＶ類土器に比定される。

３　落とし穴（第 52・53 図）

落とし穴と考えられる遺構は，５基検出した。平面形は円形・楕円形があり，逆茂木痕の有無など形態は様々であった。検出面はⅦ層またはⅧ層である。

１号落とし穴（第 53 図）

Ⅰ-18 区，Ⅷ層上面で検出した。平面は楕円形で，長軸 90cm・短軸 67cmを測る。検出面からの深さは 100cmであり，底面に向かって，ややすぼまりながら掘り込まれている。底面下位まで掘り下げたが，逆茂木痕は確認されなかった。

埋土は単層で，赤褐色パミスや灰白色粒を含む黒褐色土である。

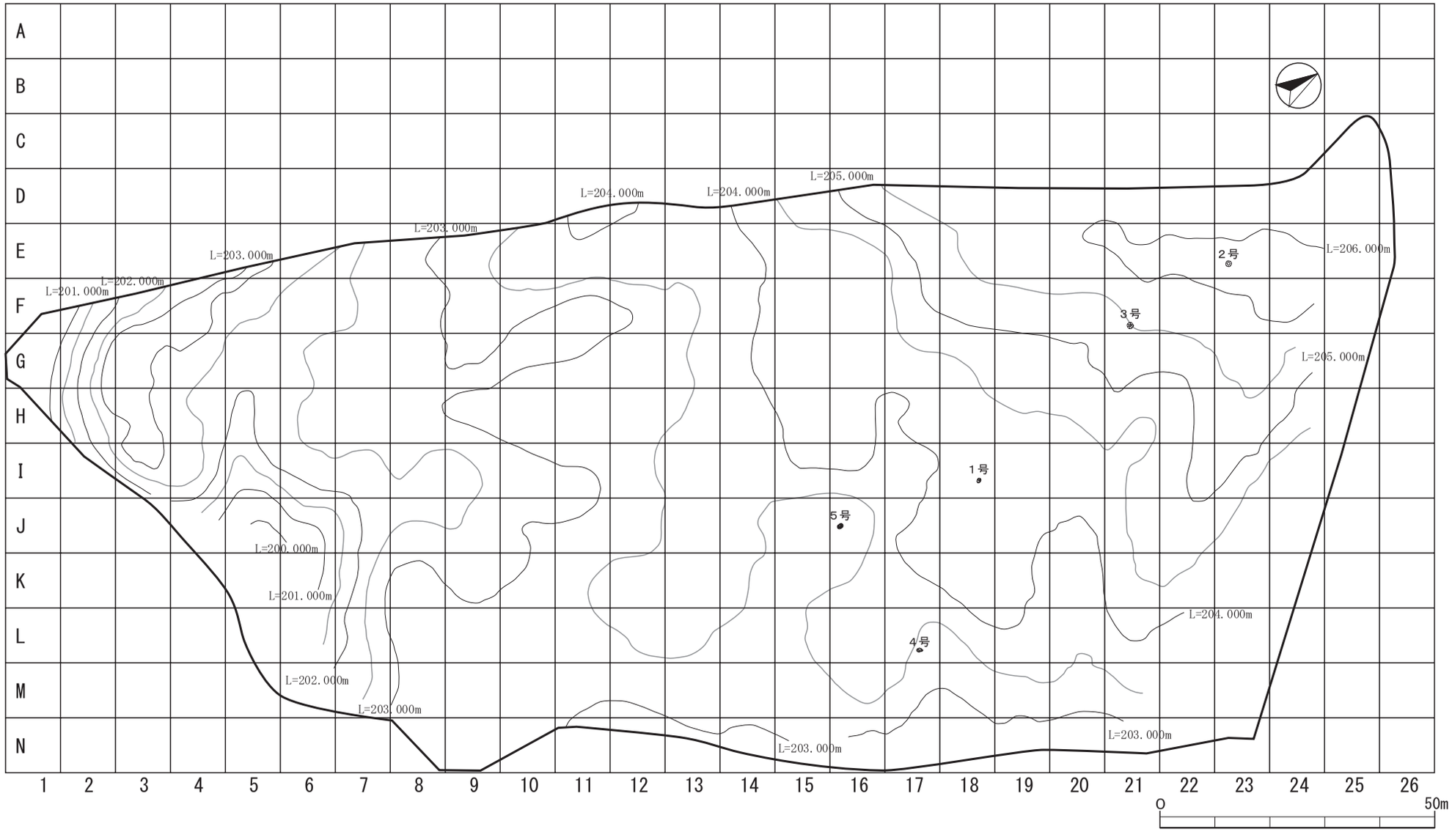
関連する遺物は埋土中位から土器片１点が出土したが，周辺の包含層内の資料と接合し，完形品となった。44 は口縁部から底部までがほぼ残存する。口縁部には押圧による凹点文が一列施され，胴部から底部付近までは横位の貝殻条痕である。外面は横位のケズリ調整ののちナデ調整であり，内面は縦位のケズリ調整ののちナデ調整が施される。擦切りによる縦長の補修孔を有する。焼成も良好で，精緻に作られた小型土器である。Ⅱ類土器に比定される。

接合した土器片の分布状況から，周辺の包含層に存在した土器片が，落とし穴が埋没する過程で入り込んだものと考えられる。そのため，早期前葉以前に掘り込まれたと想定される。

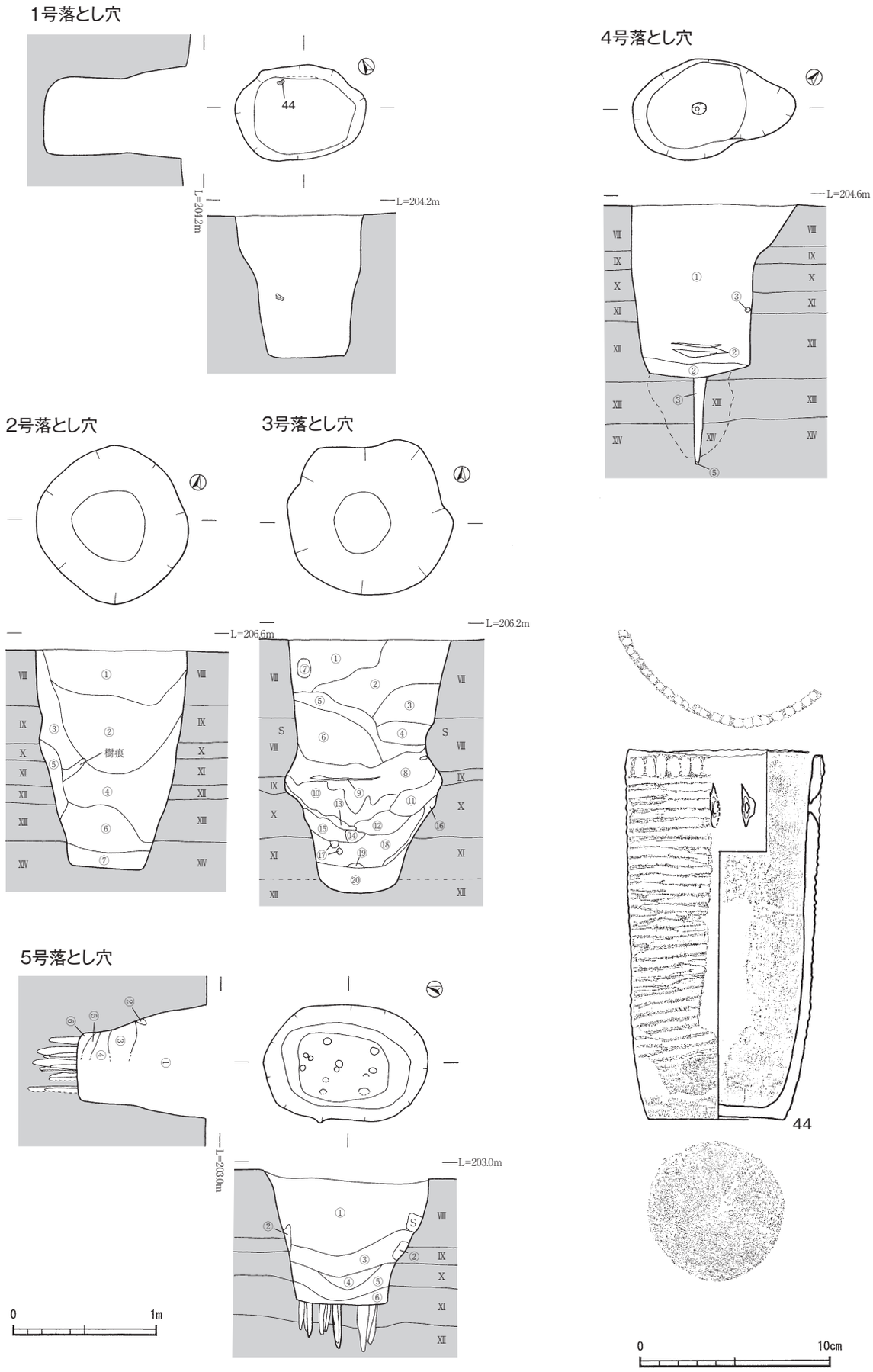
２号落とし穴（第 53 図）

Ｅ-23 区，Ⅶ層で検出した。平面はほぼ円形で，長軸 112cm・短軸 106cmである。深さは検出面から 156cmを測る。Ⅸ層までは検出面とほぼ同じ幅で，それ以下は平坦な床面に向かってすぼまる形状である。埋土の最下層はⅩⅢ層中位まで達していた。底面下位まで掘り下げたが，逆茂木痕は確認されなかった。

埋土は明黄褐色土でⅥ層に類似する。埋土①は２～10㎜の黄橙色パミスが全体に入る明黄褐色土で，アカホヤブロックを含む。やや粘性・しまりがある。埋土②は①よりもパミスの粒径が小さい。埋土③は②と同様のパミスを含むが，色調がやや暗く黄褐色である。埋土④は５～10㎜の黄橙色パミスが全体に入り，３～４cm大の薩摩火山灰のブロックも混ざる黄褐色土である。やや粘性・しまりがある。埋土⑤は壁面でのみ観察され，黄橙



第 52 図　落とし穴配置図



第 53 図　１～５号落とし穴，１号落とし穴出土遺物

色パミスを含む明赤褐色土であり，樹痕の影響を受けているためか，軟質である。埋土⑥は黄褐色を呈し，埋土④よりもややパミスの量が少なく，赤みが強い土層で，やや軟質である。埋土⑦は灰オリーブ色で粘土質の軟らかい土である。

関連する遺物は出土していない。

３号落とし穴（第 53 図）

Ｆ-21 区，Ⅶ層で検出した。平面はややいびつな円形で，長径 117㎝である。深さは検出面から 176㎝を測り，床面はＸⅡ層を一部掘り込んでいる。Ⅸ層付近でやや幅が広くなり，底面に向かってすぼまる。底面下位のまで掘り下げたが，逆茂木痕は確認されなかった。

埋土は下位から中位までレンズ状に堆積する。埋土①は５㎜大のパミスを多量に含む黄褐色土，埋土②は 10㎝大のパミスのブロックが少量混ざり粘性のある暗褐色土である。埋土③は黄褐色土で，５㎜大のパミスを含み，ブロックは混ざらない粘質土である。埋土④は埋土②とほぼ同様であるが，粘性が低い。埋土⑤は埋土③と類似するが，やや色調が明るい黄褐色である。埋土⑥は３～５㎜大のパミスや数㎝大のブロックを少量含み，やや粘性がある。埋土⑦は埋土①とⅥ層が混ざった黒色土である。埋土⑧はⅦ層上位に色調が近い黒褐色土で，間にⅥ層に類似した明黄褐色を呈する埋土⑨が薄く堆積する。埋土⑩は埋土⑨よりも若干色調が明るく，埋土⑧との境界はやや乱れている。また，埋土⑪はⅦ・Ⅷ層が混在する土で，壁面からの崩落土の可能性がある。埋土⑫は埋土⑩・⑪の混在土で浅黄橙色を呈し，埋土⑬はⅧ～Ｘ層の混在土で暗赤褐色を呈する。埋土⑭は埋土⑫と埋土⑬が混ざったような土である。また，埋土⑮は埋土⑬に類似するが，Ｘ層の割合が高い。埋土⑯と埋土⑲は，いずれもにぶい黄褐色を呈する。埋土⑰は埋土⑩と同様で，ブロック状に点在する。埋土⑱は埋土⑯よりやや色調が明るい明黄褐色で，埋土⑳はⅧ～Ｘ層が混在する黒褐色土である。

関連する遺物としては，埋土の中位から土器片が出土した。しかし，詳細な時期については判断できなかった。

４号落とし穴（第 53 図）

Ｌ-17 区，Ⅷ層上面で検出した。平面はややいびつな楕円形で長軸 115㎝・短軸 70㎝である。ほぼ底面までまっすぐに掘り込まれているが，北東側の掘り込み面付近はスロープ状になる。検出面からの深さは 122㎝を測り，ＸⅡ層下位まで掘り込まれている。

埋土はほぼⅦ層の黒褐色土である。部分的に茶褐色土の埋土②が筋状に入り，同じく底面も茶褐色土の埋土②がやや厚く堆積する。

底面はほぼ平坦であり，床面中央には径 10㎝の小ピットが検出された。形状から，逆茂木痕と考えられる。小ピットは床面から 60㎝の深さまで達しており，周囲にはシミ状の痕跡が広がっていた。ピット埋土は埋土②が軟質になったもので，先端部は白黄茶褐色土である（埋土④）。シミ状部分の土壌はやや灰色を帯び，周囲に対しやや軟質である。

関連する遺物は出土していないが，埋土から縄文早期前半の遺構と考えられる。

５号落とし穴（第 53 図）

Ｊ-16 区，Ⅷ層上面で検出した。なだらかに傾斜する地形に位置する。平面形は楕円形で，長軸 116㎝・短軸 80㎝である。検出面が最も広く，緩やかに底面へすぼまる形状である。検出面からの深さは 89㎝で，ＸⅠ層中位まで掘り込まれている。埋土は全体的にレンズ状に堆積している。埋土の上半部を占める黒褐色の埋土①はⅦ層であり，薩摩火山灰層のやや大型のブロックを含む。壁面がⅧ層であるため，その崩落土であると考えられる。黒褐色の埋土③は埋土①より色調が薄く，炭化物がわずかに混ざる。埋土④はⅦ層を基本とし，黄色・白色のパミス，数㎝の薩摩火山灰のブロックが混ざり，黒褐色を呈する。埋土⑤はⅦ層にＸ層が部分的に含まれ，埋土⑥はＸ層がより多く混在する。いずれも，黄色・白色のパミスを含む黒褐色土である。

底面は平坦で，12 か所の小ピットが検出された。断面は筋状になっており，形状から逆茂木痕と考えられる。小ピットの径は最小４㎝，最大８㎝であった。埋土は極少の白色パミスを含む暗褐色を呈し，軟らかい。

関連する遺物は出土していないが，埋土がⅦ層主体である点から早期前葉の遺構と想定される。

４　土坑（第 54～66 図）

土坑は 124 基検出した。ほとんどがⅧ層上面検出である。本遺跡で検出された土坑は，比較的小型のものが多い。また，掘り込みも浅く，床面が平坦になるものや一段深くなるものなど多様である。

土坑は平面形から４つに分類した。分類基準は下記のとおりである。

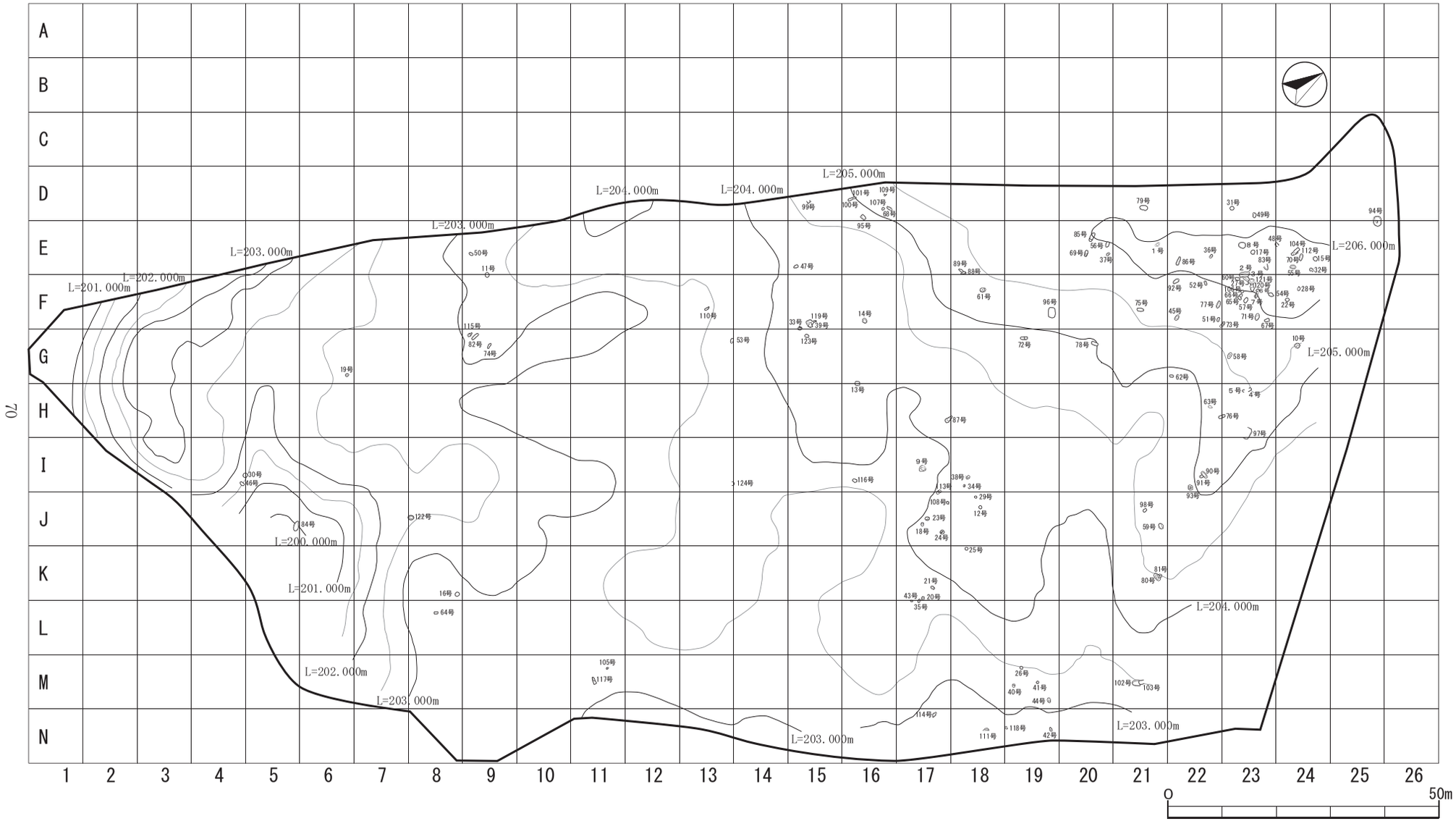
Ⅰ類　円形・楕円形を呈するもの
Ⅱ類　楕円形のものでも，長軸が短軸の約 1.5 倍以上となるもの
Ⅲ類　隅丸方形もの
Ⅳ類　不整形のもの

（１）　土坑以外の遺構と切り合って検出されたもの

124 基のうち７基が，他の遺構と切り合って検出された。全形が把握できないものもあるため，本項で個別に取り扱う。分類が可能であったものは，表記した。

１号土坑（第 30・31・55 図）

Ｅ-21 区で検出した。１号竪穴住居状遺構・１号連穴土坑と切り合っており，長軸 118㎝・短軸 68㎝・深さ 32㎝


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26
70
L=201.000m
L=202.000m
L=203.000m
L=203.000m
L=204.000m
L=204.000m
L=205.000m
L=206.000m
L=205.000m
L=204.000m
L=203.000m
L=203.000m
L=202.000m
L=201.000m
L=200.000m
0
50m

第54図　土坑配置図

である。Ⅰ類に該当する。

埋土は上下２層に分かれる。上位の埋土は，１㎝大の明黄褐色パミスと５㎜大の灰色パミスを含む黒褐色粘質土である。下位の埋土は，１㎝大の黄褐色パミスを含む黒色粘質土である。

関連する遺物は，石器１点，礫１点，炭化物１点が出土した。45 は凝灰岩製のハンマーストーンである。側面に細かく密な敲打痕が帯状に観察できる。特に左下側面と下側面は敲打により平坦面をなすため，使用頻度が高かったと考えられる。上・下面は磨面であり，表面は平滑である。

２号土坑（第 40・55 図）

Ｅ・Ｆ-23 区で検出した。８号竪穴住居状遺構，３号連穴土坑，３号土坑と切り合っており，２号土坑が最も新しい。長軸 195㎝・短軸 97㎝・深さ 57㎝である。Ⅱ類に該当する。

調査当初，２号土坑の存在を認識できず隣接する遺構の検出から始めたことにより，十分な記録を残すことができなかった。新旧関係については床面の検出状況により判断した。残存する埋土堆積状況からおおよそレンズ状堆積であったと推定される。埋土①は１～３㎜大の黄色パミスと１㎜以下の白色パミスを多く含む黒褐色砂質土，埋土②は埋土①と色調は同じであるがパミス量が少ない。埋土④は１㎜大の黄色パミスが混じるⅦ・Ⅸ・Ⅹ層の混土で暗褐色を呈する。

関連する遺物は土器８点，礫６点が出土し，土器２点を掲載した。46 は口縁部片である。一部稜線があるため，角筒形と推定される。口縁部には押引状の貝殻腹縁部による連続刺突文を施し，口縁部文様帯と胴部との境界には横位の貝殻腹縁刺突文が２段巡る。一部に縦に擦り切れたような形状があり，擦切りの補修孔と考えられる。形状からⅢ類土器と想定される。47 は口縁部片である。口縁部はつまみ上げるように外反し，わずかに口唇部に平坦面をもつ。胴部内面はケズリ調整であり，わずかに稜をなす。口唇部・内面・外面とも撚糸文が施され，外面のみ縦位でその他は横位である。Ⅺ類土器に比定される。なお，２号土坑の北側から出土した土器片が３号土坑出土の 48 と接合した。

３号土坑（第 40・55 図）

Ｅ・Ｆ-23 区で検出した。２号土坑に切られており長軸は不明・短軸およそ 75㎝・深さ 47㎝である。Ⅱ類に近い形態と考えられる。

埋土はほぼ上位と下位の２層に分かれる。上層は砂質の黒褐色土が主体であり，黄色や白色の小パミスを含む。下層は上層と色調は同じであるが，パミスの含有量がほとんどない。

関連する遺物は土器２点が出土し，周辺の土器と接合した。48 は口縁部から底部まで残存する。口縁部は波状を呈し，４つの角を有する角筒形である。胴部から底部に向けてやや稜が緩くなり，丸みを帯びる。そのため，内面は胴部上半では方形を呈するが，底部付近は円形をなす「上角下円の器形」である。口縁部には４段の刺突文を施し，胴部は横位の貝殻条痕の上から「Ｘ」字状に交差する条痕を描く，いわゆる二重施文である。口縁部文様帯と胴部文様帯との境界には細かい横位の貝殻刺突線文が一条めぐる。胴部は角の稜上および各面の中央に縦列の凹点文が施される。内面は縦位・斜位のケズリ調整を基本とするが，口縁部及び底部付近は横位のケズリ調整である。特徴から，Ⅲ類土器に比定される。49 は底部に近い胴部片で，文様が近似する 48 と同一個体である。

４号土坑（第 44 図）

Ｈ-23 区で検出した。南西側を４号連穴土坑に切られており，長軸・短軸は不明，深さ 14㎝である。

埋土は黄色パミスを少量含み，Ⅶ層に類似する黒色土の単層で，５号土坑の埋土とほぼ同じであった。

関連する遺物は出土していない。

５号土坑（第 44 図）

Ｈ-23 区で検出した。北東側を４号連穴土坑に切られており，長軸・短軸は不明，深さ 16㎝である。

埋土は黒色土で黄色パミスを少量含み，Ⅶ層に類似する。

関連する遺物は出土していない。

６号土坑（第 51 図）

Ｆ-23 区で検出した。28 号連穴土坑と切り合い，長軸 65㎝・短軸およそ 54㎝・深さ 14㎝である。７号土坑及び 28 号連穴土坑と切り合っているが，埋土の状況等から６号土坑が最も新しい。Ⅰ類に該当する。

埋土④は黄色パミスを少量含むⅦ層類似の黒色土である。

関連する遺物は出土していない。

７号土坑（第 51 図）

Ｆ-23 区で検出した。南半分と東側の一部が 28 号連穴土坑と６号土坑に切られており長軸・短軸は不明，深さ 15㎝である。埋土の堆積状況が明瞭ではなく，１基として調査を行ったが，長楕円形に一部張り出しを持つような形状であるため，２基の土坑が切り合っている可能性も考えられる。

埋土③は黄色パミスを少量含む，Ⅶ層類似の黒色土である。

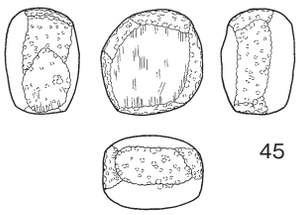
関連する遺物は出土していない。

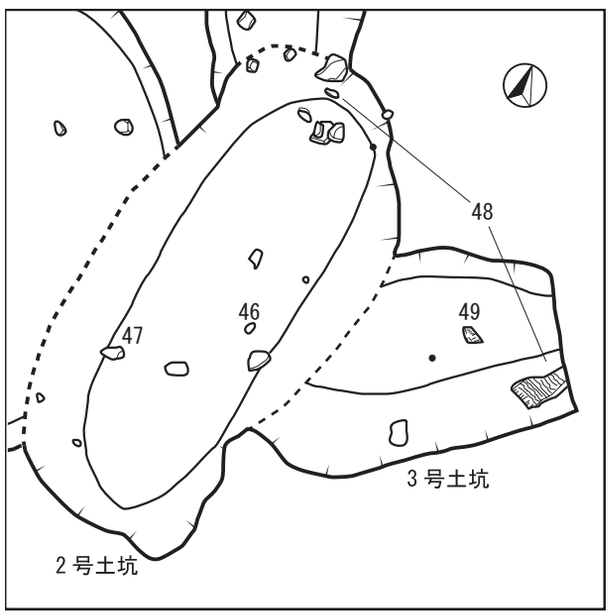
（２） 単独または土坑同士が切り合って検出されたもの

【Ⅰ　類】

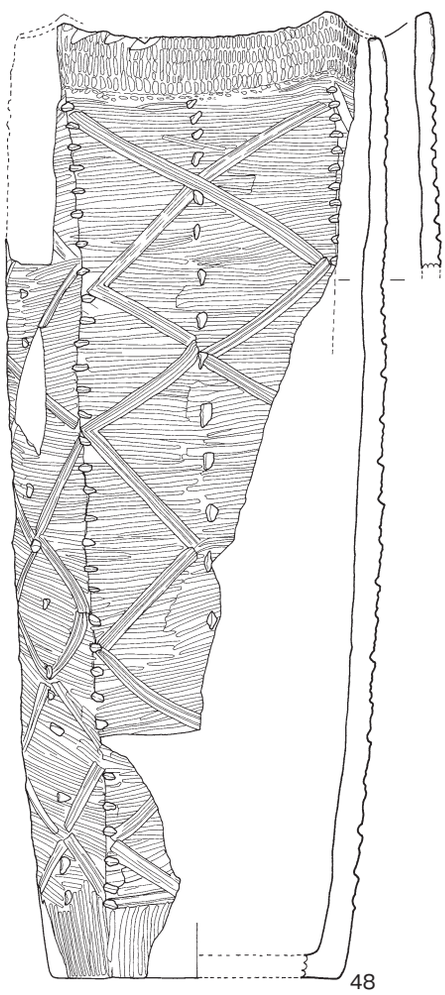
８号土坑（第 56 図）

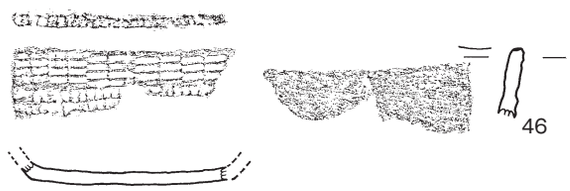
Ｅ-23 区で検出した。長軸 134㎝・短軸 129㎝・深さ



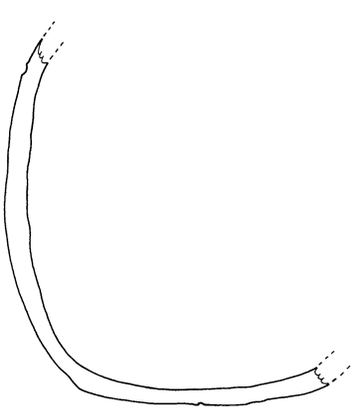


〔2･3号土坑遺物出土状況〕











第 55 図　２～３号土坑，１～３号土坑出土遺物

20cmである。床面はほぼ平坦である。

埋土は４つに分層できた。埋土①は黒色土で，５㎜程度のパミスを含む。Ⅶ層に近い。埋土②は暗赤褐色土でやや粘性がある。埋土③は黒褐色土で，１～２cm大の薩摩火山灰のブロックを含む。埋土④は粘性のある黒褐色土で，Ⅸ層に近い。

関連する遺物は，土器と軽石が１点出土した。50 は土坑内出土と土器と包含層出土のものが接合し，口縁部から胴部上半が残存する。口縁部はやや厚みがあり，内湾する。口唇部に明瞭な平坦面が作出され，外面側の端部に刻みが施されている。施文は，縦位の貝殻腹縁部による刺突文と逆ハの字状の短沈線文２列が交互に繰り返されるパターンである。また,「く」の字状の短沈線文が横位に１段巡り，その下位には部分残存ではあるが縦位の貝殻刺突文が確認できる。縦位の貝殻腹縁刺突文と短沈線文を横位の短沈線文で区画し，交互に繰り返すと考えられる。胎土は径２㎜大の長石などの角礫を多く含む胎土であるが，内面調整は丁寧であり，表面は平滑である。Ⅶ類土器に比定される。口縁部外面に炭化物が付着しており，年代測定を実施した結果，10,230 － 10,124cal ＢＣという年代値が得られた。

９号土坑（第 56 図）

Ⅰ-17 区で検出した。床面に凹凸がある。西側は樹痕の影響を受け，形状は推定であるが，長軸 155cm・短軸 111cm・深さ 33cmである。

埋土は単層であり，黒褐色土で黄色パミスと微小の白色パミスが混じる。

関連する遺物は,磨石片と思われる礫が１点出土した。

10 号土坑（第 56 図）

Ｇ-24 区で検出した。長軸 100cm･短軸 96cm･深さ 18cmである。床面は凹凸をもつ形状である。

埋土は５～15㎜大の黄色パミスと極小の白色パミスを多く含む硬質の黒褐色土が主体をなす。部分的に黄色パミスを含む茶褐色土が堆積する。

関連する遺物は，土器小片が２点と安山岩のチップが１点出土した。

11 号土坑（第 56 図）

Ｅ・Ｆ-９区で検出した。長軸 87cm・短軸 81cm・深さ 20cmである。床面は平坦であり，壁はほぼまっすぐに立ち上がる。

埋土は２つに分層できる。埋土①は茶褐色土で，５㎜大の黄色パミスを含みⅥ層に近い。埋土②は黒褐色で，１㎜大の黄色パミスを含みⅦ層に近い土である。床面は薩摩火山灰層である。

関連する遺物は出土していない。

12 号土坑（第 56 図）

Ｊ-18 区で検出した。長軸 66cm・短軸 61cm・深さ 27cmである。床面はほぼ平坦である。

埋土は単層で，黒褐色土を主体として黄色パミスと微小の白色パミス,少量の薩摩火山灰のブロックが混じる。

関連する遺物は出土していない。

13 号土坑（第 56 図）

Ｇ・Ｈ-16 区で検出した。長軸 94cm・短軸 80cm・深さ 19cmである。

埋土は３つに分層できる。埋土①は黒色土で 0.5～２cm大の黄色パミスと微細な白色パミスを多く含む。埋土②は埋土①と色調は同じで黄色・白色パミスをまばらに含む。埋土③も埋土①・②と色調は同じで，やや粘質があり，黄色・白色パミスはまばらである。

関連する遺物は，床面付近で黒曜石のフレイクが１点出土した。

14 号土坑（第 56 図）

Ｆ-16 区で検出した。長軸 96cm・短軸 84cm・深さ 19cmである。

埋土は単層で，黄色パミスを多く含む黒色土である。

関連する遺物は出土していない。

15 号土坑（第 56 図）

Ｅ-24 区で検出した。長軸 94cm・短軸 77cm・深さ 17cmである。

埋土は２つに分層できる。埋土①は粘性が弱くしまりのある黒色土で，１～３cm大の薩摩火山灰のブロックを微量に含む。埋土②は粘性が弱くしまりのある極暗褐色土で，１～２cm大の薩摩火山灰ブロックを含む。埋土②は西側の検出面付近でのみ確認された。

関連する遺物は出土していない。

16 号土坑（第 56 図）

Ｋ-８区で検出した。長軸 83cm・短軸 83cm・深さ 16cmである。床面はほぼ平坦である。

埋土は単層で，Ⅵ層の茶褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

17 号土坑（第 56 図）

Ｅ-23 区で検出した。長軸 86cm・短軸 78cm・深さ 17cmである。

埋土は３つに分層できた。埋土①は黒色土で，５～10㎜大のパミスを含む。Ⅶ層に近い。埋土②は黒褐色土で，１～５㎜大のパミスを含む。埋土③は黒褐色土で粘性がありⅨ層に近い。

関連する遺物は出土していない。

18 号土坑（第 56 図）

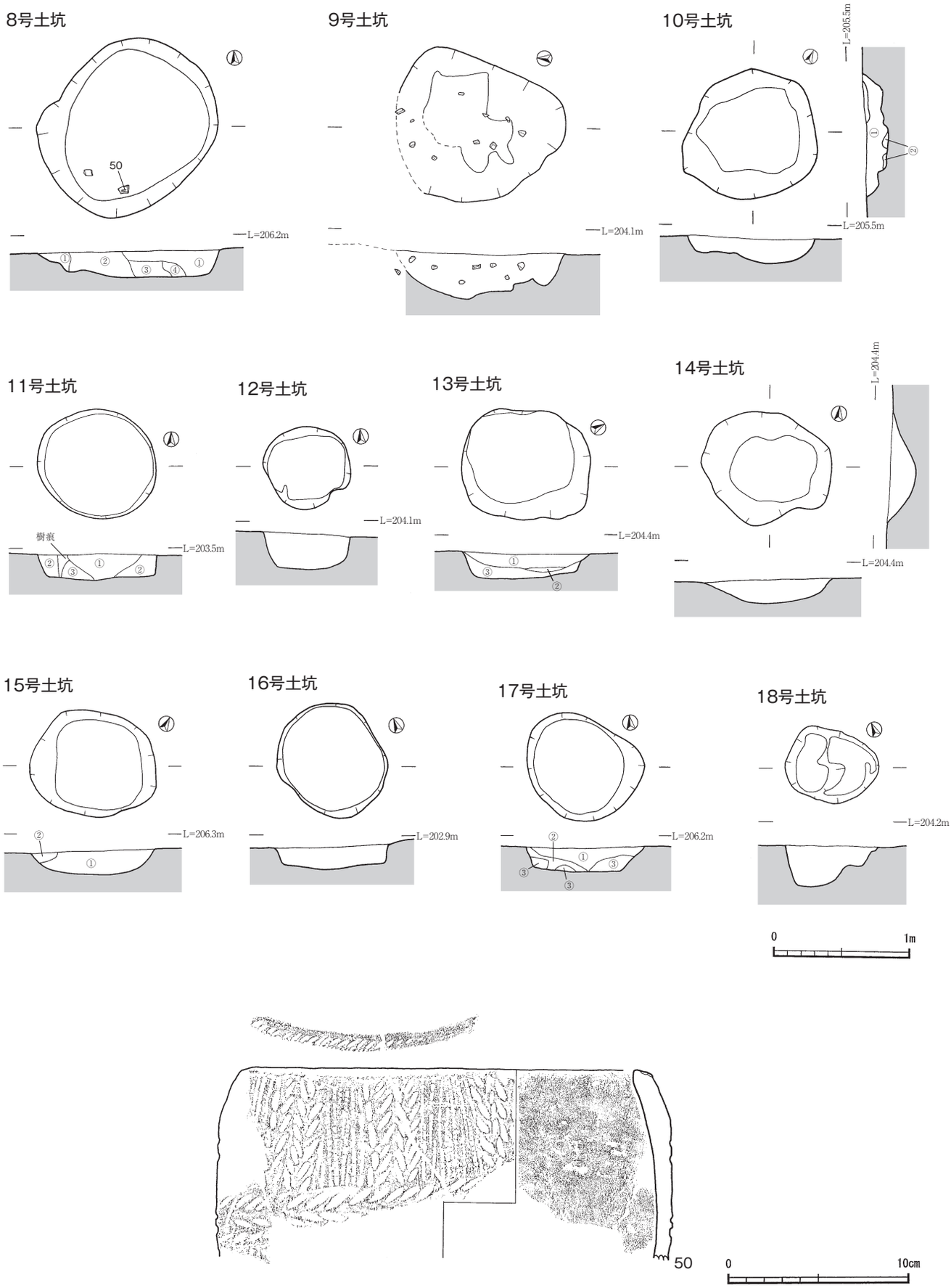
Ｊ-17 区で検出した。長軸 69cm・短軸 54cm・深さ 31cmである。

埋土は単層で，黒褐色土主体である。下部にはやや大きめの黄色パミスを含み，床面も段を有する。

関連する遺物は出土していない。

19 号土坑（第 57 図）

Ｇ-６区で検出した。長軸 64cm・短軸 55cm・深さ 37cm



第 56 図　８～18 号土坑，８号土坑出土遺物

である。

埋土は３つに分層できる。埋土①は黒色土で，２㎝大の黄色パミスを少量含み，５㎜大の黄色パミスと１㎜の白色パミスを多く含む。やや粘性があり，しまりがある。埋土②は黒色土で，１㎜大の黄色パミスを多く含み，２㎜大の白色パミスを少量含む。やや粘性があり，しまりがある。埋土③はⅧ・Ⅸ・Ⅹ層の混土で，２㎝大の薩摩火山灰を含む。埋土①・②よりも粘性があり，硬くしまっている。

関連する遺物は出土していない。

20 号土坑（第 57 図）

Ｋ・Ｌ-17 区で検出した。長軸 74cm・短軸 53cm・深さ 30cmである。

埋土は２つに分層できる。埋土①は黒褐色土で，２～５㎜ほどの黄色パミスと極小の白色パミスを含む。粘性は弱い。埋土②は暗褐色土であまり粘性はなく，１～２㎜ほどの黄色パミスを少量含む。

関連する遺物として，熱破砕した頁岩礫１点を確認した。

21 号土坑（第 57 図）

Ｋ-17 区で検出した。長軸 79cm・短軸 53cm・深さ 18cmである。床面は段をもって掘りこまれている。

埋土は単層で，黒褐色土主体に黄色パミスを多く含む。

関連する遺物は礫１点，剥片１点が出土したが，掲載には至らなかった。

22 号土坑（第 57 図）

Ｆ-24 区で検出した。長軸 78cm・短軸 63cm・深さ 11cmである。床面はほぼ平坦である。

埋土は単層で，黒色土に黄色パミスが少量含まれ，Ⅶ層に類似する。

関連する遺物はフレイク１点と少量の炭化物が確認された。

23 号土坑（第 57 図）

Ｊ-17 区で検出した。長軸 84cm・短軸 68cm・深さ 32cmである。床面は北側が一段深くなっている。

埋土は単層で，黒褐色土の全体に黄色パミスを含む。

関連する遺物は出土していない。

24 号土坑（第 57 図）

Ｊ-17 区で検出した。長軸 82cm・短軸 74cm・深さ 17cmである。床面は凹凸が多く，安定しない。

埋土は黒褐色土の単層であり，中央下部に黄色パミスを多く含む。

関連する遺物は出土していない。

25 号土坑（第 57 図）

Ｋ-18 区で検出した。直径約 60cmのほぼ円形で，深さ 30cmである。断面形状はバケツ状を呈する。

埋土は単層であり，黒褐色土に２～３㎜大の黄色パミスと微小の白色パミスを含む。粘性は弱い。

関連する遺物は出土していない。

26 号土坑（第 57 図）

Ｍ-19 区で検出した。長軸 66cm・短軸 56cm・深さ 12cmである。断面形状は皿状を呈する。

埋土は黄色パミスを多く含む茶褐色土が主体であり，砂質で軟らかい。また，Ⅶ層の黒褐色土がブロック状に混ざる。ブロック状の黒褐色土は粘質があり硬く，黄色パミス，および白色パミス細粒が含まれる。

関連する遺物は出土していないが，埋土中から炭化物の細粒が検出された。

27 号土坑（第 57 図）

Ｆ-23 区で検出した。西側半分が未調査区にかかっており，全体の大きさは不明であるが，深さは 19cmである。

埋土は４つに分層できる。埋土①はしまりのある黒褐色土で，１㎝大の薩摩火山灰ブロックを少量含む。埋土②は粘性が弱くしまりのある暗褐色土で，１～２㎝大の薩摩火山灰ブロックを少量含む。埋土③も埋土②と同様の暗褐色土で，１～５㎝大の薩摩火山灰ブロックを多量に含む。埋土④は黒褐色土で，粘性は弱く，しまりがある。

関連する遺物は出土していない。

28 号土坑（第 57 図）

Ｆ-24 区で検出した。西側は掘り過ぎのため形状を把握できなかったが，長軸 75cm・深さ 16cmを測り，短軸は約 50cm程度と考えられる。床面はほぼ平坦である。

埋土は単層で，黄色パミスを少量含む黒色土である。Ⅶ層に類似する。

関連する遺物は出土していない。

29 号土坑（第 57 図）

Ｊ-18 区で検出した。床面は平坦である。長軸 51cm・短軸 43cm・深さ９㎝である。

埋土は単層で，２～３㎜大の黄色パミスと多量の微細な白色パミスを含む黒褐色土である。粘性はほとんどない。

関連する遺物は出土していない。

30 号土坑（第 57 図）

Ｉ-４・５区で検出した。長軸 90cm・短軸 83cm・深さ 23cmである。

埋土は単層で，全体に黄色パミスを含む黒褐色の砂質土である。10cm大の薩摩火山灰ブロックが含まれる。

関連する遺物は出土していない。

31 号土坑（第 57 図）

Ｄ-23 区で検出した。長軸 77cm・短軸 72cm・深さ 12cmである。

埋土は黒色土の単層で，床面は薩摩火山灰層である。関連する遺物は，床面付近から礫 16 点が出土した。

32 号土坑（第 57 図）

Ｅ-24 区で検出した。長軸 80cm・短軸 63cm・深さ 18cm

であり，断面形状は皿状を呈する。

埋土は単層で，少量の黄色パミスを含む黒色土である。粘性は弱いが，しまりがある。

関連する遺物は出土していない。

33 号土坑（第 57 図）

Ｆ・Ｇ-15 区で検出した。長軸 86cm・短軸 73cm・深さ９cmである。

埋土は黒色土で，１㎜大の白色パミスを含む単層である。また，埋土の中位では２～10㎜大の黄色パミスが多く含まれる。

関連する遺物は礫４点が出土し，１点は花崗岩製の石皿片と考えられる。

34 号土坑（第 57 図）

Ⅰ-18 区で検出した。一部樹痕の影響を受けている。長軸 53cm・短軸 35cm・深さ 29cmである。

埋土は単層で，黒褐色土に２～５㎜大の黄色と白色の小パミスを少量含む。

関連する遺物は出土していない。

35 号土坑（第 57 図）

Ｋ・Ｌ-17 区で検出した。長軸 72cm・短軸 45cm・深さ 24cmである。

埋土は２つに分層できる。埋土①は黒褐色土で，２～10㎜大の黄色パミスと極小の白色パミスを含む。粘性は弱い。埋土②は暗褐色土で，パミスは含まれず，やや粘性がある。

関連する遺物は，埋土上面でⅥ類土器の小片１点と少量の炭化物が確認された。

36 号土坑（第 57 図）

Ｅ-22 区で検出した。長軸 74cm・短軸 46cm・深さ 14cmである。

埋土は黒褐色土の単層で，黄色パミスを含み，Ⅶ層に近い土色である。粘性は弱い。

関連する遺物は出土していない。

37 号土坑（第 57 図）

Ｅ-20 区から検出した。長軸 70cm・短軸 45cm・深さ 13cmである。

埋土は黒褐色土の単層である。

関連する遺物は出土していない。

38 号土坑（第 57 図）

Ⅰ-18 区で検出した。短軸 54cm・深さ 20cmである。土坑の北側は樹痕の影響を受けているため，長軸は 77cm程度と考えられる。

埋土は単層で，２～３㎜大の黄色パミスと微小な白色パミスを含む黒褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

39 号土坑（第 65 図）

Ｆ-15 区で検出し，119 号土坑と切り合い関係にあり，本土坑の方が新しい。長軸 62cm・短軸 33cm・深さ 18cmを測る。

埋土は単層で黒色土である。

関連する遺物は出土していない。

40 号土坑（第 137 図）

M-19 区，147 号集石の南側で検出された。長軸 70cm・短軸 57cm・深さ 18cmである。浅い皿状の掘り込みを一段深く掘り下げている。

埋土は黄褐色の小ブロックを含む褐色土主体で，床面の真上に暗茶褐色土が薄く堆積する。

埋土中から出土した 124 は，直線的に立ち上がる胴部片である。太めの沈線とその両側の刺突，さらには細めの沈線で文様を構成する。内面はケズリ後ナデ調整が施される。ⅩⅣ類土器に比定される。

41 号土坑（第 138 図）

M-19 区，148 号集石の北西の位置で検出された。直径 50cmのほぼ円形で，深さ 15cmを測る。

埋土は茶褐色土で，黄色パミスを含む。床面の真上には暗褐色土が薄く堆積する。

関連する遺物は出土していない。

【Ⅱ　類】

42 号土坑（第 58 図）

Ｎ-19 区で検出した。長軸 80cm・短軸 46cm・深さ８cmである。掘り込みは浅く，床面は平坦である。

埋土は単層で，パミスの少ない黒褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

43 号土坑（第 58 図）

Ｋ・Ｌ－ 17 区で検出した。長軸 53cm・短軸 35cm・深さ 23cmである。

埋土は２つに分層できる。埋土①は２～５㎜と１cm大の黄色パミスと小さな白色パミスを含む黒褐色土である。埋土②はパミスを含まない暗褐色土で，粘質はほとんどない。

関連する遺物は出土していない。

44 号土坑（第 58 図）

M-19 区で検出した。長軸 93cm・短軸 58cm・深さ 26cmである。

埋土は黒褐色土で，黄色パミスの含有量で２つに分層でき，埋土①は埋土②よりもパミスの量が多い。

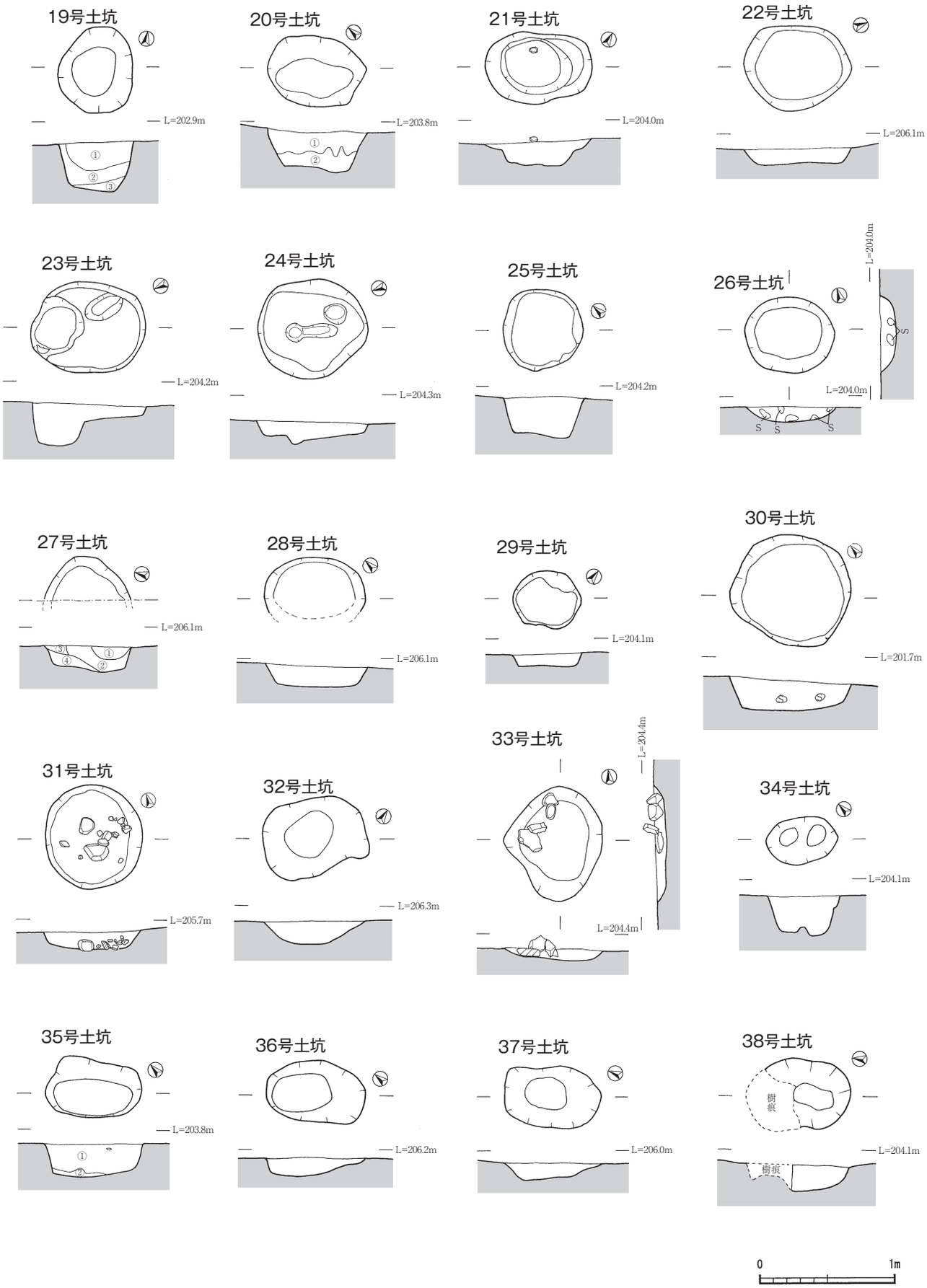
関連する遺物は出土していない。

45 号土坑（第 58 図）

Ｆ-22 区で検出した。長軸 108cm・短軸 65cm・深さ 22cmである。

埋土は埋土①が主体であり，少量の黄色パミスと白色パミスを全体に含む黒褐色土である。粘性は弱くしまりがある。埋土②は１㎜大の白色パミスを少量含む褐色土で，粘性が強くしまりがある。

関連する遺物は，Ⅺ類土器の小片１点とチップが１点



第 57 図　19～38 号土坑

出土したが，掲載には至らなかった。

46 号土坑（第 58 図）

Ⅰ－４区の東へと大きく傾斜する位置で検出した。長軸 92cm・短軸 55cm・深さ 24cmである。

埋土は単層で，黄色パミスを全体的に含む黒褐色砂質土である。部分的に薩摩火山灰のブロックが含まれる。

関連する遺物は出土していない。

47 号土坑（第 58 図）

Ｅ-15 区で検出した。長軸 92cm・短軸 55cm・深さ９cmである。

埋土は単層で，Ⅶ層より明るく，Ｐ 13 と考えられる黄色パミスを多く含む暗褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

48 号土坑（第 58 図）

Ｅ-23・24 区で検出した。林道に面しており，東側の一部は調査区外であった。短軸約 56cm・深さ 11cmで，長軸は形状から推定すると 60cm以上と思われる。

埋土は単層で，白色の小パミスを少量含む黒褐色砂質土である。黄色パミスは１か所にまとまっている。粘性は弱い。

関連する遺物は出土していない。

49 号土坑（第 58 図）

Ｄ-23 区で検出した。長軸 94cm・短軸 70cm・深さ 26cmである。

埋土は４つに分層できる。埋土①は１～５㎜大の黄色パミスを全体的に含む黒褐色砂質土で，粘性は弱い。また，白色パミスも含む。埋土②は埋土①と同様の黒褐色土で，埋土①よりパミスの量が少ない。埋土③も埋土①と同様の黒褐色土で，３㎜大のパミスが均一に分布する。埋土④は粘性の強い黒褐色土で，Ⅸ層もしくはＸ層と考えられる。

関連する遺物は土器片２点，礫 19 点が出土した。土坑の機能に伴う礫と考えにくいことから，集石等の礫を廃棄したとみられる。

50 号土坑（第 58 図）

Ｅ－９区で検出した。長軸 84cm・短軸 53cm・深さ 19cmである。床面は平坦である。

埋土は単層で，Ⅶ層土である。

関連する遺物は出土していない。

51 号土坑（第 58 図）

Ｆ-22 区で検出した。長軸 83cm・短軸 44cm・深さ 17cmである。

埋土は２つに分層できる。埋土①は少量の黄色パミスを含む黒褐色土，埋土②は黄褐色土である。床面はⅧ層の薩摩火山灰層であった。

関連する遺物は出土していない。

52 号土坑（第 58 図）

Ｆ-22 区で検出した。長軸 88cm・短軸 45cm・深さ 22cmである。

埋土は単層で，黄色パミスを少量含む砂質の黒色土である。若干の粘性をもつ。

関連する遺物は出土していない。

53 号土坑（第 58 図）

Ｇ-13 区で検出した。長軸 97cm・短軸 56cm・深さ 21cmである。

埋土は単層で，Ｐ 13 と考えられる１～10㎜大の黄色パミスを非常に密に含む黒色土である。

関連する遺物は出土していない。

54 号土坑（第 58 図）

Ｆ-23 区で検出した。長軸 107cm・短軸 70cm・深さ８cmである。掘り込みは浅く，床面はほぼ平坦である。

埋土は単層で，黄色パミスを含む黒色土である。床面は薩摩火山灰層である。

関連する遺物は出土していない。

55 号土坑（第 58 図）

Ｅ-24 区で検出した。長軸 109cm・短軸 76cm・深さ 22cmである。

埋土は２つに分層できる。埋土①は少量の黄色パミスを含み，粘性が弱くしまりのある黒色土である。埋土②は粘性が弱くしまりのある黒褐色土で，１～８㎜大の微量な薩摩火山灰ブロックと黄色パミスを含む。

関連する遺物は出土していない。

56 号土坑（第 58 図）

Ｅ-20 区で検出した。南西側の一部は，周辺遺構の調査で削平した。長軸 118cm・短軸 60cm・深さ 34cmである。床面は平坦である。

埋土は２つに分層できる。埋土①はⅦ層の黒褐色土，埋土②は黒褐色土ブロックが混ざる暗茶褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

57 号土坑（第 58 図）

Ｆ-23 区で検出した。北東側は一部削平されていた。長軸 110cm・短軸 66cm・深さ 20cmである。

埋土は４つに分層できた。埋土①は黄色・白色パミスが点在する黒褐色土，埋土②は埋土①に類似するがパミスが少ない。埋土③は薩摩火山灰のブロックを含む黒褐色粘質土，埋土④は薄い灰白色土である。

関連する遺物は出土していない。

58 号土坑（第 58 図）

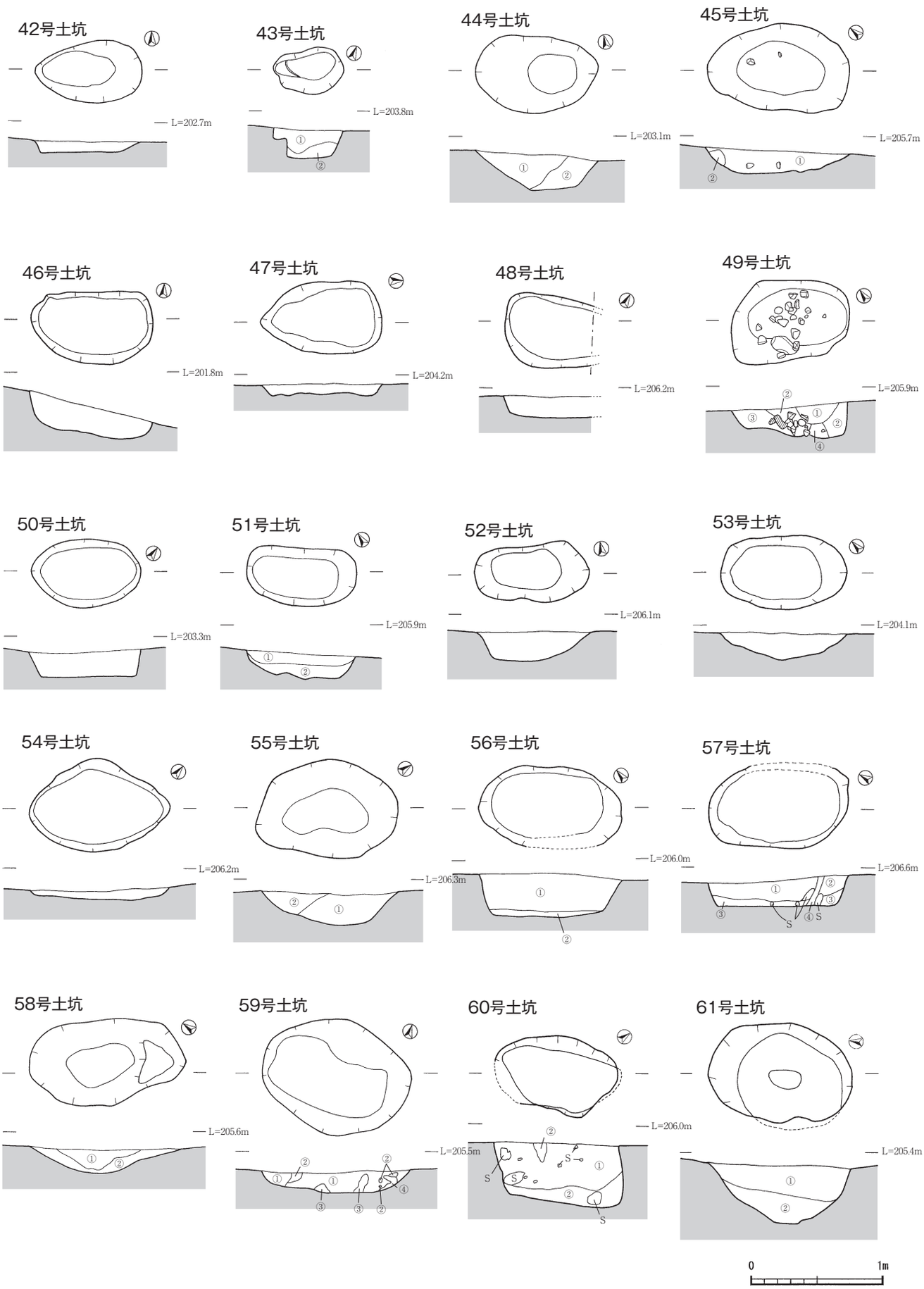
Ｇ-23 区で検出した。長軸 119cm・短軸 61cm・深さ 18cmである。

埋土は２つに分層でき，レンズ状に堆積していた。埋土①は黄色パミスを含む黒色土で，Ⅶ層に類似する。埋土②は粘質がある茶褐色土である。

関連する遺物は，Ⅶ類土器の小片が１点出土した。

59 号土坑（第 58 図）

Ｊ-21 区で検出した。長軸 112cm・短軸 88cm・深さ 16cm



第 58 図　42～61 号土坑

である。断面形状は皿状を呈する。

埋土は４つに分層できた。埋土①はＶａ層で，白・黄色の小パミスを少量含む褐色土で粘性がある。埋土②はＶｂ層で，アカホヤ火山灰二次堆積のブロックが含まれる赤褐色土である。埋土③はＶａ層の褐色土とⅥ層の明黄褐色土の混合したような黄褐色土である。色調はＶａ層が強く，やや粘性がある。埋土④はⅥ層に近い土色で粘性のある暗褐色土である。アカホヤ火山灰の小パミスを少量含む。

関連する遺物は出土していない。

60 号土坑（第 58 図）

Ｆ-23 区で検出した。一部削平されており，長軸約 96cm・短軸 58cm・深さ 47cmを測る。

埋土は２つに分層できる。埋土①は砂質の黒褐色土で，粘性は弱い。１～３㎜大の黄色パミスと１㎜大以下の白色パミスを含み，全体的にパミスの量は少ないが，上位がやや多めである。埋土②は粘性のある暗褐色土で，１㎜大の白色パミスを少量含む。Ｘ層に近い土質だが粘性が弱く，薩摩火山灰ブロックが埋土中に含まれる。

関連する遺物は出土していない。

61 号土坑（第 58 図）

Ｆ-18 区で検出した。長軸 110cm・短軸およそ 82cm・深さ 45cmである。

埋土は中位で２つに分層できる。埋土①は砂質で粘性がややある黒色土で，１～10㎜大の黄色パミスを全体に含む。特に上部に大粒のパミスがあり，Ⅶ層上位の土層に近い。埋土②は砂質・粘性が弱い黒色土で，パミスを含まない。全体に炭化物が含まれ，特に床面付近に多い。Ⅶ層下位の土層に近い。

関連する遺物は軽石１点が出土した。

埋土中から検出した２点の炭化物の年代測定を実施したところ，7,468 － 7,185cal ＢＣの年代値が得られた。

62 号土坑（第 59 図）

Ｇ-22 区で検出した。長軸 77cm・短軸 47cm・深さ 15cmである。

埋土は単層で，黄色パミスのブロックを少量含む，やや砂質の黒褐色土である。床面はⅨ層と思われるが，若干砂質である。

関連する遺物は出土していない。

63 号土坑（第 59 図）

Ｈ-22 区で検出した。長軸 82cm・短軸 41cm・深さ 13cmである。

埋土は単層で，２～10㎜大の黄色パミスを密に含む黒褐色土である。床面は薩摩火山灰層である。

関連する遺物は出土していない。

64 号土坑（第 59 図）

Ｌ-８区で検出した。長軸 80cm・短軸 45cm・深さ 15cmである。

埋土は黒褐色土の単層である。床面はⅧ層である。

関連する遺物は出土していない。

65 号土坑（第 59 図）

Ｆ-23 区で検出した。66 号土坑によって南側が一部切られて，また，東側の撹乱のため，本来の大きさは不明である。深さは９cmである。

埋土は単層で，黄色パミスを少量含む黒褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

66 号土坑（第 59 図）

Ｆ-23 区で検出した。長軸 86cm・短軸 52cm・深さ 24cmである。

埋土は 65 号土坑と同様であり，両者を分層することはできなかった。

関連する遺物は出土していない。

67 号土坑（第 59 図）

Ｆ-23 区で検出した。長軸 100cm・短軸 67cm・深さ 19cmである。

埋土は２つに分層できた。埋土①はⅦ層の黒褐色土でややしまりがあり，硬い。２cm弱の黄色パミスが点在する。埋土②は黒褐色土のⅦ層とＸ層の茶褐色粘質土が混ざったもので，ややしまりがあり硬い。埋土①よりも砂質である。床面はＸ層である。

関連する遺物は出土していない。

68 号土坑（第 59 図）

Ｄ-16 区で検出した。長軸 110cm・短軸 48cm・深さ 25cmである。

埋土は単層で，全体的に５㎜大の黄色パミスを含む砂質の暗褐色土である。Ⅵ層に近い土色である。微細な炭化物が含まれていた。

関連する遺物は軽石１点が出土した。

69 号土坑（第 59 図）

Ｅ-20 区で検出した。南東から北西へ向かってスロープ状に下る形状である。長軸 122cm・短軸 60cm・深さ 28cmである。

埋土は単層で，黄色パミスを密に含む黒褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

70 号土坑（第 59 図）

Ｅ-24 区で検出した。長軸 129cm・短軸 60cm・深さ 15cmである。

埋土は２つに分層できた。埋土①は粘性が弱くしまりのある極暗褐色土で，黄色パミスと１～３cm大の薩摩火山灰のブロックを少量含む。埋土②は粘性が弱くややしまりのある黒褐色土で，微量の黄色パミスを含む。

関連する遺物は出土していない。

71 号土坑（第 59 図）

Ｆ-23 区で検出した。長軸 133cm・短軸 74cm・深さ 19cmである。

埋土は単層で，黄色パミスを含む黒色土である。床面

であるⅨ層には薩摩火山灰のブロックがみられる。

関連する遺物は土器小片が１点出土した。

72 号土坑（第 59 図）

G-19 区で検出した。長軸 133cm･短軸 57cm･深さ 25cm である。

埋土は２つに分層でき，埋土①は粘性が弱くしまりがある黒色土で，白色パミスが全体的に，２㎜～10cm大の黄色パミスを少量含む。埋土②は粘性が弱くしまりのある黒色土で，白色パミスが全体に入る。

関連する遺物は，早期前葉と思われる条痕文を有する土器片が１点出土した。

73 号土坑（第 59 図）

F-22･23 区で検出した。長軸 128cm･短軸 51cm･深さ 31cmである。北側の床面が，一段低くなる。

埋土は単層で，黄色パミスと薩摩火山灰のブロックを少量含む黒褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

74 号土坑（第 59 図）

G-９区で検出した。長軸 113cm･短軸 43cm･深さ 21cm である。床面はほぼ平坦である。

埋土は単層で，Ⅶ層土である。

関連する遺物は出土していない。

75 号土坑（第 59 図）

F-21 区で検出した。床面はほぼ平坦である。長軸 127cm･短軸 60cm･深さ 30cmである。床面は平坦である。

埋土は単層で，少量の黄色パミスを含む黒色土である。床面はⅨ層の黒褐色粘質土まで掘りこんでいる。

関連する遺物は出土していない。

76 号土坑（第 59 図）

H-22･23 区で検出した。長軸 129cm･短軸 55cm･深さ 30cmである。床面は薩摩火山灰で，北側へ向かって傾斜する。

埋土は単層で，５㎜大の黄色パミスを少量含む黒褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

77 号土坑（第 59 図）

F-22 区で検出した。長軸 136cm･短軸 66cm･深さ 23cm である。

埋土は２つに分層できる。埋土①は粘性のない粗い砂質の黒色土で，微細な白色パミスと３㎜大の黄色パミスを含む。埋土②は粘性がなく粗い砂質の暗赤褐色で，硬くしまっている。微細な白色パミスと 10cm以下の薩摩火山灰ブロックを含む。

関連する遺物は出土していない。

78 号土坑（第 59 図）

G-20 区で検出した。長軸 133cm･短軸 62cm･深さ 30cm である。床面は平坦である。

埋土は５つに分層でき，レンズ状に堆積していた。埋土①はやや粘性のある黒褐色土で，１cm大の黄色パミスを含む。埋土②はやや粘性のある黒色土で，パミスを含まない。埋土③はやや粘性のある暗褐色土で，１cm大の黄色パミスを含む。また，５～10㎜大の炭化物を含む。埋土④は褐色土で，１cm大の黄色パミスや薩摩火山灰ブロックを含む。埋土⑤は１cm大の褐色パミスを含む暗褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

79 号土坑（第 59 図）

D-21 区で検出した。長軸 150cm･短軸 87cm･深さ 16cm である。床面が北側に緩やかに傾斜する。

埋土は単層で，黄色パミスを含む黒褐色土である。

関連する遺物は，早期前葉の条痕文を有する土器とⅥ類土器の小片，およびチャートのチップ１点が出土した。また，炭化種子が出土した。

埋土中から検出した炭化種子の年代測定を実施したところ，8,015 － 7,793cal ＢＣの年代値が得られた。

80 号土坑（第 60 図）

K-21 区で検出した。長軸 152cm･短軸 88cm･深さ 22cm である。81 号土坑と切り合って検出した。

埋土は５つに分層できる。埋土①はやや砂質で粘性の弱い黒褐色土で，Ⅵ層に近い。黄色のパミスと白色パミスを多く含む。埋土②はやや砂質で粘性の弱い黒色土でⅦ層近い。埋土①と同じようにパミスを含むが，その量は少ない。埋土③は薩摩火山灰と埋土①の黒色土が混ざった黄褐色土で，薩摩火山灰が全体の８割を占める。埋土④はやや砂質で粘性のある黒褐色土で，Ⅶ層とⅨ層との混土である。埋土⑤は埋土④にやや粒子の小さい薩摩火山灰が全体の１割程入る。

関連する遺物は黒曜石のフレイクと土器小片が出土したが，埋土①に集中するため，流れ込みと考えられる。

81 号土坑（第 60 図）

K-21 区で検出した。80 号土坑と切り合い関係にあったが，当初十分認識できなかったため南側半分を 80 号土坑の検出作業により削平した。埋土の観察により 81 号土坑が古く，80 号土坑が新しい。短軸 79cmを測り，長軸・深さは不明である。

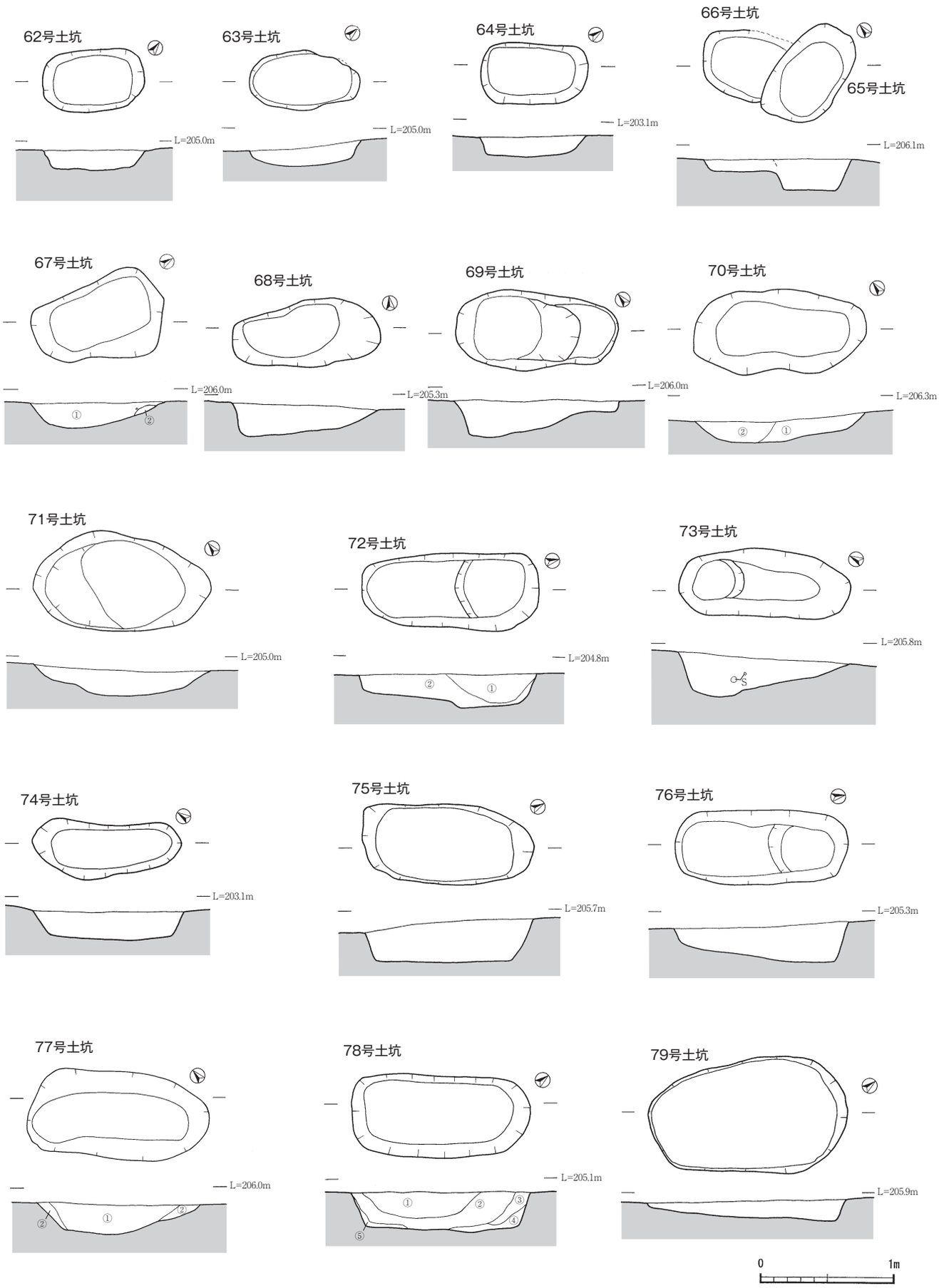
埋土は埋土⑥が主体をなし，黄色と白色パミスを含む黒褐色土で，80 号土坑の埋土①と同様にⅥ層に近い。床面の真上には埋土⑦の黄褐色土，埋土⑧の黒褐色土が薄く堆積する。

関連する遺物はチップ２点が出土したが，流れ込みと考えられる。

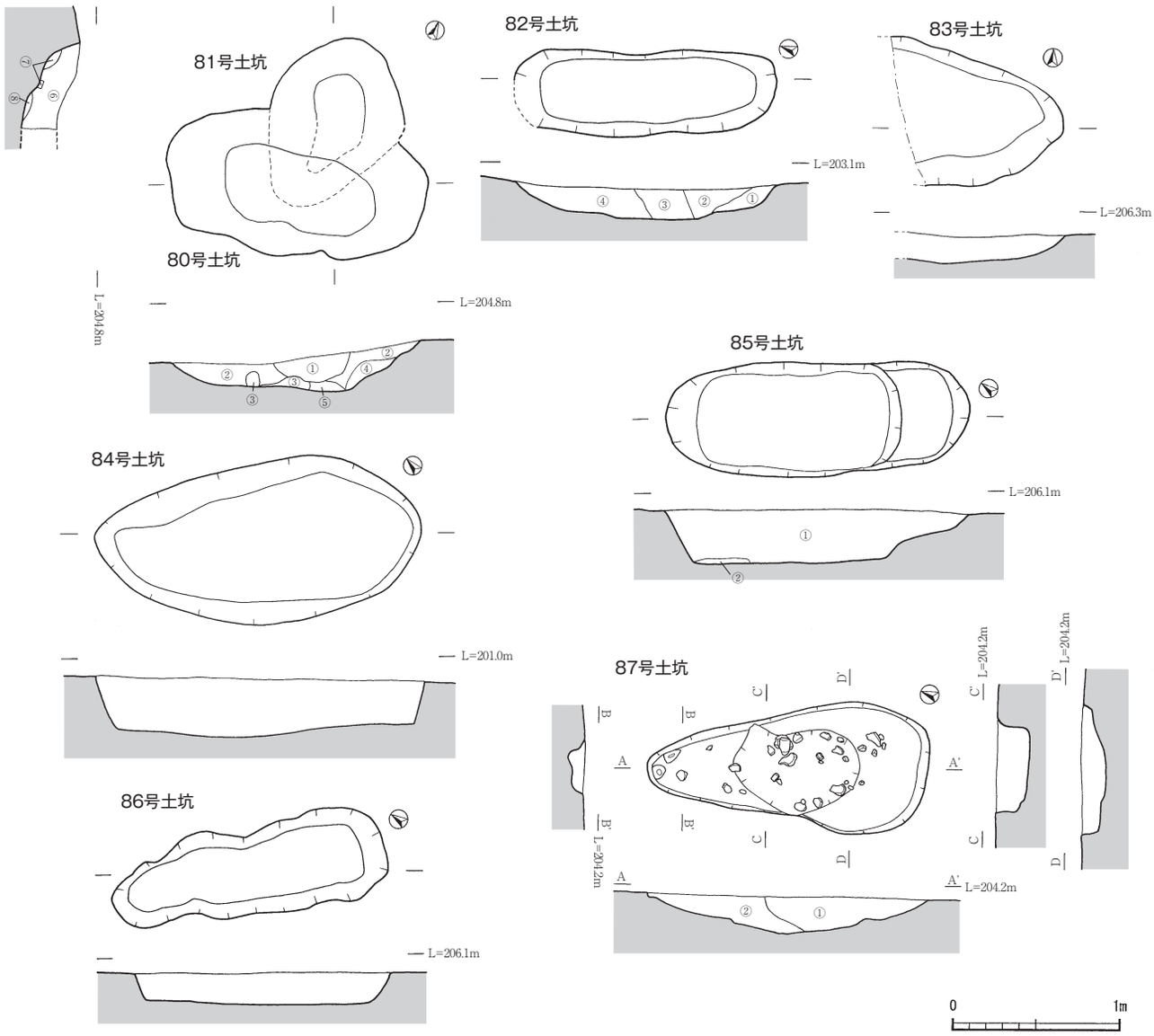
82 号土坑（第 60 図）

G-９区で検出した。北側は一部撹乱を受けている。長軸約 155cm・短軸 50cm・深さ 17cmである。

埋土は５つに分層できる。埋土①はやや粘質のある黒褐色土で，５～20㎜大の黄色パミスをまばらに含む。埋



第 59 図　62～79 号土坑



第 60 図　80～87 号土坑

土②はやや粘質のある黒褐色土で，２㎜大の灰色パミスをまばらに含む。埋土③は黒褐色土で粘質があり，１cm 大の黄色パミスをまばらに含む。埋土②・③には，一部薩摩火山灰のブロックが混ざる。

関連する遺物は出土していない。

83 号土坑（第 60 図）

Ｅ-23 区で検出した。西側の一部は調査区外であり，半分程度の検出と考えられる。長軸及び短軸は不明である。深さは 16cmを測る。

埋土は単層で，やや粘性がありしまりのある黒色土で，黄色パミスを含む。

関連する遺物は，黒曜石のフレイクが数点出土した。

84 号土坑（第 60 図）

Ｊ-５区の緩やかな斜面で検出した。床面はほぼ平坦で，立ち上がりも明瞭である。長軸 195cm・短軸 97cm・深さ 34cmである。

埋土は単層で，粘性がある褐色土で，しまりがあり硬い。また，１～５㎜大の黄色パミスを全体的にわずかに含む。

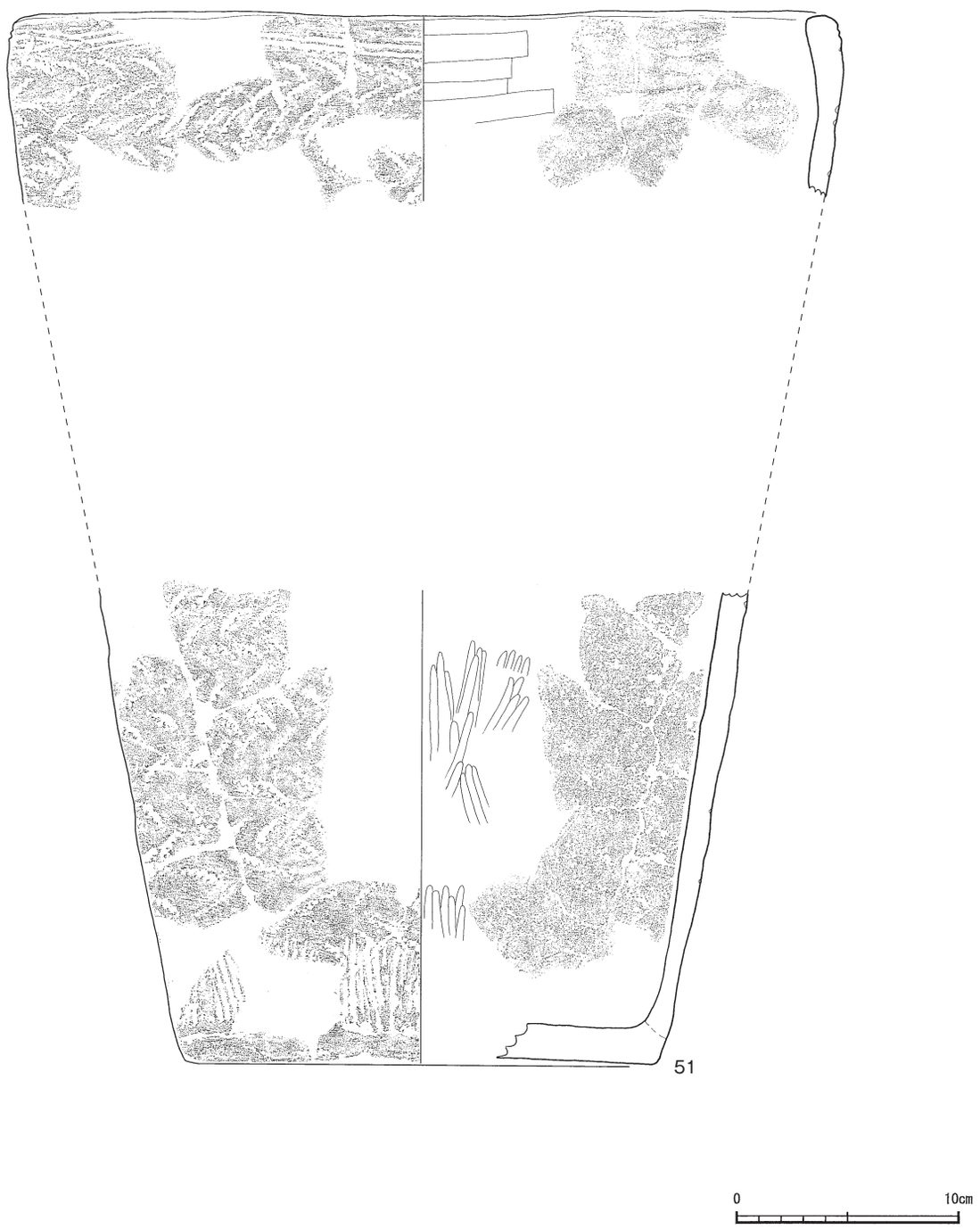
関連する遺物は出土していない。

85 号土坑（第 60 図）

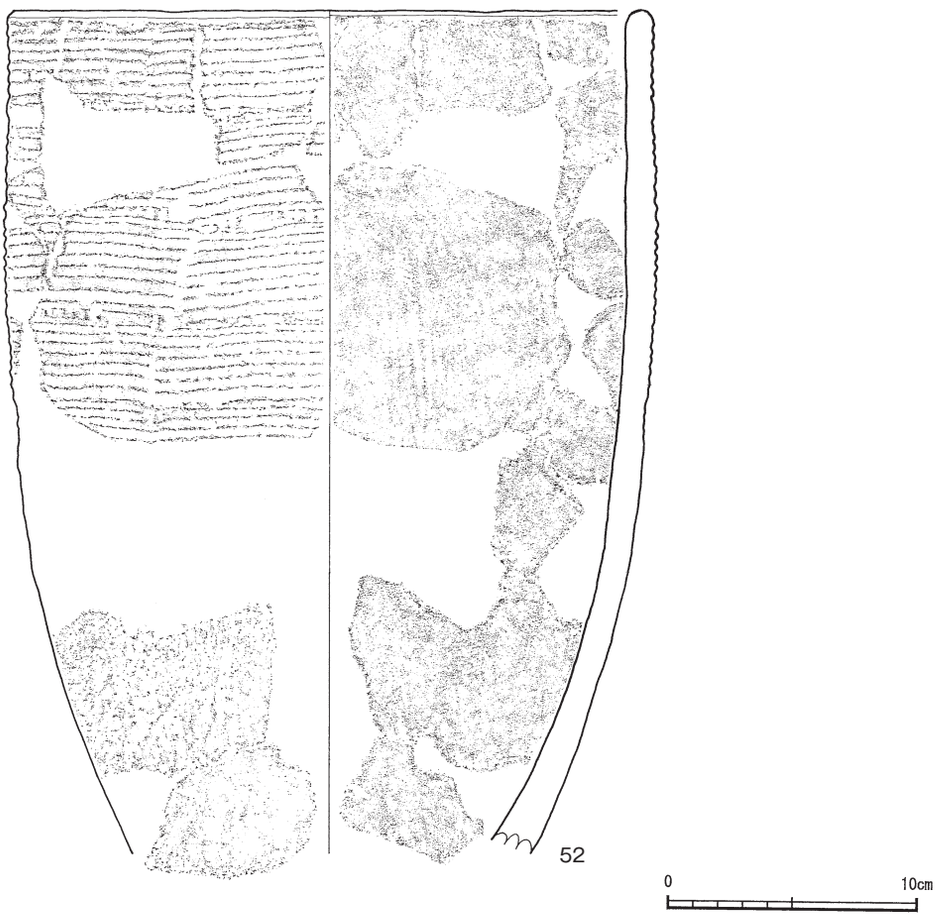
Ｅ-20 区で検出した。長軸 180cm･短軸 65cm･深さ 32cmである。南側の床面を段を有する。

埋土は２つに分層でき，埋土①は黒褐色土，埋土②はⅨ層に近い暗茶褐色土である。また，北側下部や南側の床面は薩摩火山灰層であった。

関連する遺物は，Ⅺ類土器の小片が１点出土した。



第 61 図　87 号土坑出土遺物（1）



第 62 図　87 号土坑出土遺物（２）

86 号土坑（第 60 図）

Ｅ-22 区で検出した。床面はほぼ平坦である。長軸 165cm・短軸 53cm・深さ 19cmである。

埋土は単層で，やや粘性があり，しまりのある黒褐色土である。２～５㎜大の黄色パミスを全体的に含む。

関連する遺物は出土していない。

87 号土坑（第 60～62 図）

Ｈ-17・18 区で検出した。長軸 167cm・短軸 79cm・深さ 22cmである。

埋土は２つに分層でき，埋土①はＰ 13 が密に入る暗茶褐色土で，埋土②はパミスの量が少ない暗黒褐色土である。

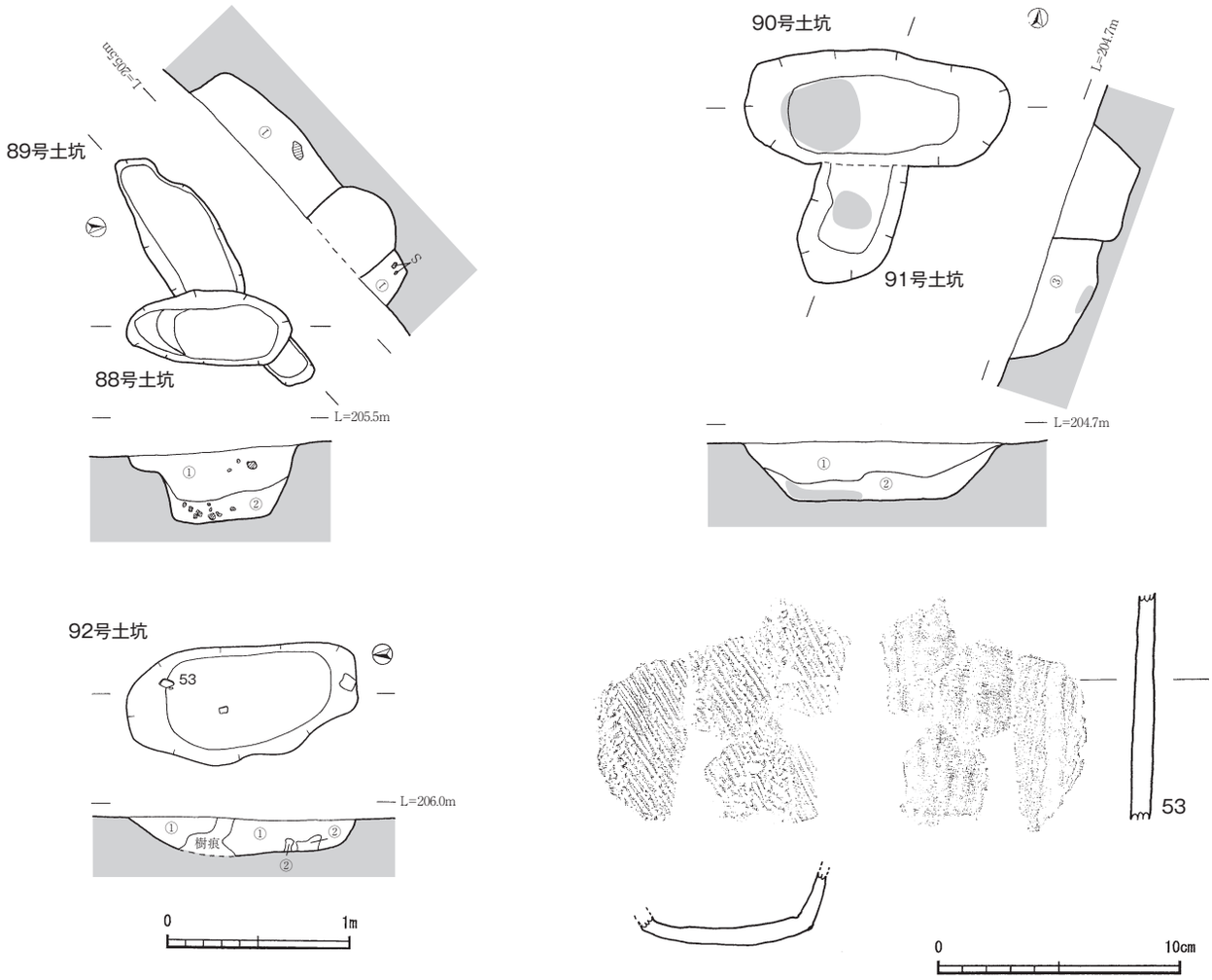
関連する遺物は土器片６点，黒曜石小剥片１点，礫 22 点が出土した。51・52 とも埋土内出土の土器片と包含層出土のものが接合した資料である。

51 は埋土中から出土した土器片５点と包含層出土の土器片と接合したものである。口縁部と胴部～底部の２個体が出土したが，文様や色調，胎土が類似する点から本来は同一個体と考えられる。やや大型の個体で，口縁部は肥厚してやや内湾し，胴部に向かってまっすぐなバケツ形に近い器形である。底面はやや上げ底になると考えられる。口唇部はミガキ状のナデで平坦面が作出され，やや内傾する。口縁部は貝殻条痕文が１周めぐり，その下位から胴部までは貝殻腹縁刺突文が「く」の字状に連続して施される。底部付近には縦位の条痕がめぐる。胎土は２・３㎜大の小礫を多量に含むが，器面調整が丁寧であり，表面は平滑である。Ⅵ類土器に比定される。また，埋土内出土の土器と 193 号集石遺構出土の土器と接合したものが 171 である。包含層出土の 172 と同一個体と考えられ，Ⅵ類土器に比定される。

52 は埋土中から出土した土器片１点と包含層出土の土器片と接合したものである。胴部はほぼ直口で円筒状に立ち上がり，底部に向かってわずかにすぼまる。口縁部から胴部上半にかけて，貝殻腹縁部による横位の条痕を施す。一部，縦位方向の条痕が横位の条痕に切られており，縦位の条痕の後に横位に密に条痕が施されたと分かる。胴下半は縦位のケズリ調整である。Ⅸ類土器に比定される。

88 号土坑（第 63 図）

Ｅ-18 区で検出した。89 号土坑を切っている。長軸



第 63 図　88～92 号土坑，92 号土坑出土遺物

90cm・短軸 42cm・深さ 38cmである。

埋土は２つに分層できる。埋土①は薩摩火山灰層のブロックが少量含まれる砂質の黒色土で，粘性が若干ある。また，灰黄色の１㎜大の小パミスを全体的に含み，特に上部に多い。埋土②はやや砂質で粘性のある黒色土で，埋土①のような灰黄色のパミスは含まないが，薩摩火山灰層のブロックや２cm大の明褐色のパミスが一部に含まれる。

関連する遺物は出土していない。

89 号土坑（第 63 図）

Ｅ-18 区で検出した。一部を 88 号土坑に切られている。長軸 160cm・短軸 44cm・深さ 30cmである。

埋土は単層で，砂質でやや粘性のある黒色土で，１㎜大の灰黄色パミスを全体に含む。下部には薩摩火山灰のブロックが点在する。

関連する遺物は出土していない。

90 号土坑（第 63 図）

Ⅰ-22 区で検出した。91 号土坑の北側を一部切っており，長軸 146cm・短軸 65cm・深さ 33cmである。

埋土は中位で２つに分層できる。埋土①は砂質で粘性の弱い黒色土で，黄色パミスと白色パミスを含む。埋土②は埋土①と同様の黒色土であり，黄色パミスの粒が大きく，白色パミスの量が少ない。埋土③は砂質でやや粘性のある黒褐色土で，白色パミスを全体的に，黄色パミスを少し含む。下位には炭化物の集中域がみらえた。

関連する遺物は軽石１点が出土した。

床面から検出した炭化物のうち２点を年代測定した結果，8,837 － 8,637cal ＢＣと 8,836 － 8,632cal ＢＣの値が得られた。

91 号土坑（第 63 図）

Ⅰ-22 区で検出した。90 号土坑により北半が切られているため長軸は不明である。短軸 51cm・深さ 31cmを測る。

埋土は単層で，黄色パミスと白色パミスを全体的に含む砂質の黒色土で，若干粘性がある。下部に炭化物の集中域がみられた。

関連する遺物は出土していない。

92 号土坑（第 63 図）

Ｆ-22 区で検出した。長軸 127cm･短軸 66cm･深さ 21cm である。中央部に樹痕が入る。

埋土は２つに分層できた。埋土①は粘性が弱く砂質の黒褐色土で,明黄褐色小パミスを少量含む。Ⅶ層に近い。埋土②は粘性がある黒褐色土である。

関連する遺物は，土器２点，軽石１点が出土した。53 はほぼ真っ直ぐに立ち上がる胴部で，屈曲を有する。１辺は約 7.0cmと小型の角筒形土器と推定される。胴部は斜位の貝殻条痕の上から縦位・斜位の貝殻刺突文を施す。また，稜線上にも貝殻刺突文が施される。内面はケズリ調整により稜が作出されている。Ⅲ類土器に比定される。

【Ⅲ　類】

93 号土坑（第 64 図）

Ⅰ-22 区で検出した。断面は漏斗状になる。長軸 108cm・短軸 93cm・深さ 31cmである。

埋土は４つに分層できた。埋土①は粘性が弱くやや砂質の黒色土で，黄色の小パミスと白色パミスを全体的に含む。Ⅶ層に近い。埋土②は埋土①に類似するが，パミスの量が少ない。埋土③は埋土②よりさらにパミスの量が少ない。埋土④は黒褐色土で，薩摩火山灰を含む。炭化物がわずかに検出された。

関連する遺物は出土していない。

94 号土坑（第 64 図）

Ｄ・Ｅ-25 区で検出した。北側には地層の横転部があり，短軸は推定である。長軸 184cm・短軸約 150cm・深さ 24cmである。

埋土は２つに分層できた。埋土①は黒褐色土で，２～３㎝大の黄色パミスと白色パミスを含む。炭化物を含み，軟らかい。埋土②は埋土①に黒色粘質土が混ざり，パミス量が少なく，炭化物を含まない。

関連する遺物は，埋土中からチップが２点出土した。

95 号土坑（第 64 図）

Ｄ-16 区で検出した。北側はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦で，地形に沿って南北へやや傾斜する。長軸 104cm・短軸 72cm・深さ 35cmである。

埋土は単層で，２～10㎜大の黄色パミスと１㎜大の白色パミスを多く含む黒色土で，２～４㎝大の薩摩火山灰の小ブロックがまばらに入る。

関連する遺物は出土していない。

96 号土坑（第 64 図）

Ｆ-19 区で検出した。４号竪穴住居状遺構のほぼ北側に位置する。長軸 191cm・短軸 131cm・深さ 15cmである。

埋土は単層であり，５～10㎜大の黄色パミスが少量，白色パミスを全体に含む黒褐色土で，粘性は弱く，ややしまりがある。埋土はほぼ均質である。

関連する遺物は,土器小片１点と炭化物が検出された。

97 号土坑（第 64 図）

Ｈ・Ｉ-23 区で検出した。削平により，東側半分しか検出できなかった。長軸 218cm・短軸 99cm・深さ 10cmである。

埋土はⅦ層を主体とする単層で，１㎝大の薩摩火山灰ブロックを少量含む。掘り込みはⅧ層の中位まで及ぶ。

関連する遺物は出土していない。

98 号土坑（第 64 図）

Ｊ-21 区で検出した。長軸 77cm・短軸 53cm・深さ 12cm である。

埋土は単層で,黄色パミスを多く含む黒褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

99 号土坑（第 64 図）

Ｄ-15 区で検出した。縄文時代前期の落とし穴（『天神段遺跡２』，３号落とし穴）によって西側の半分を切られており，全体は不明である。

埋土は粘性・しまりがややある黒褐色土で，一部に黄色パミスと少量の白色パミスを含む。

関連する遺物は出土していない。

100 号土坑（第 64 図）

Ｄ-16 区で検出した。北側の一部を 101 号土坑に切られており，長軸は不明である。短軸 40cm・深さ 24cmを測る。

埋土は４つに分層でき，埋土①・②はレンズ状に堆積する。埋土①は粘質が弱くしまりのある黒褐色土で，３～10㎜大の黄色パミスを密に含む。埋土②は埋土①と同様の黒褐色土で，埋土①より粒の大きいパミスが多い。埋土③は粘性やしまりが弱い黒色土，埋土④はややしまりのある砂質の明黄褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

101 号土坑（第 64 図）

Ｄ-16 区で検出した。長軸 74cm・短軸 39cm・深さ 22cm であるが，平面プランは不定形である。100 号土坑の北側を切っている。

埋土は２つに分層できた。埋土⑤はにぶい黄褐色土で，しまりがあるが粘性は弱い。埋土⑥は黄色パミスを少量含む黒色土で，粘質が弱くやや軟らかい。いずれも砂粒が細かい土である。

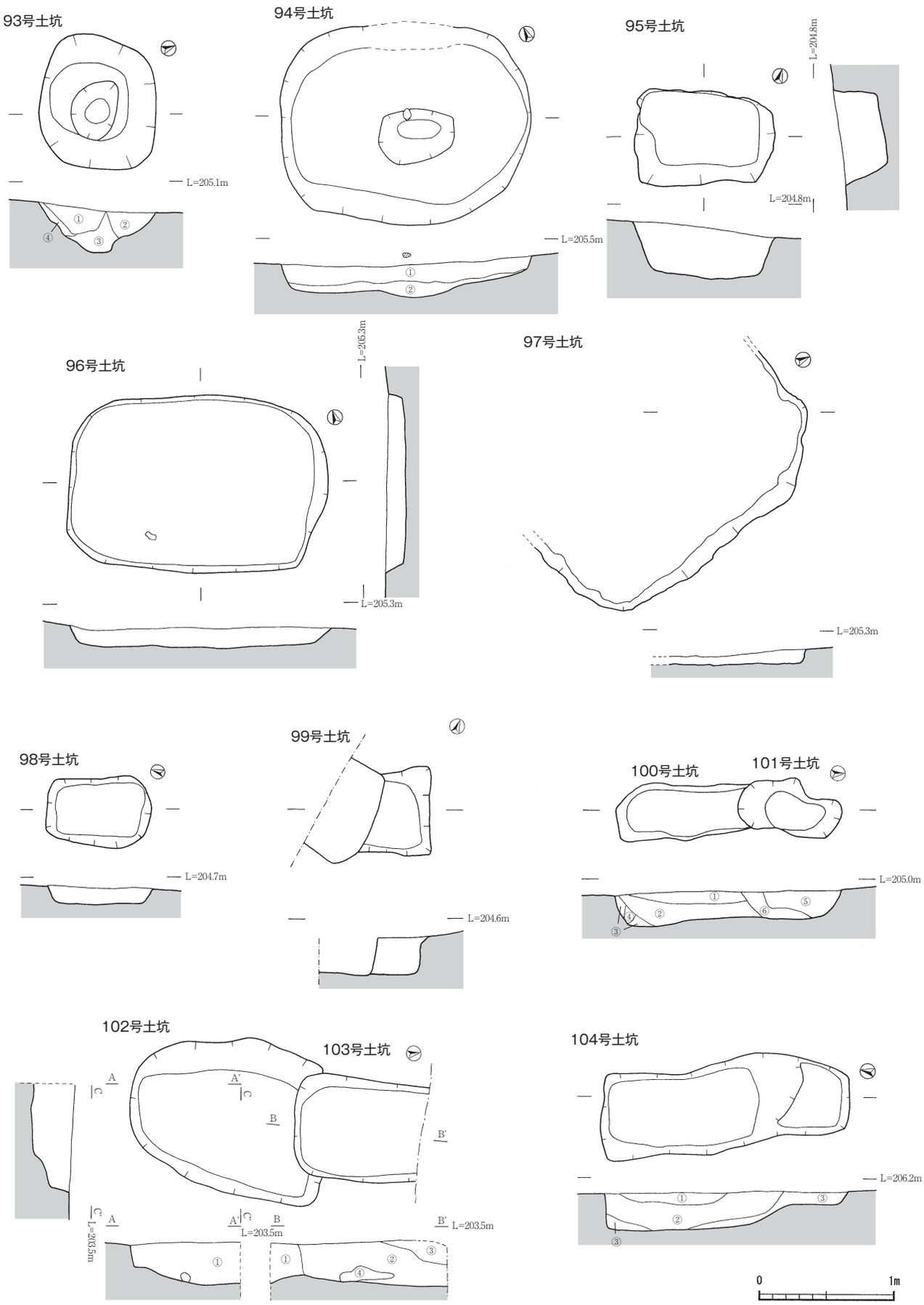
関連する遺物は出土していない。

102 号土坑（第 64 図）

Ｍ-21 区で検出した。103 号土坑に北側の一部を切られている。長軸は推定 140cm程度・短軸 115cm・深さ 30cm である。

埋土は単層で，埋土①は黒褐色土に一部薩摩火山灰ブロックが混ざる。

関連する遺物は出土していない。



第 64 図　93～104 号土坑

103 号土坑（第 64 図）

M-21 区で検出した。東側は調査区外であるため，長軸は不明である。短軸 75cm・深さ 33cmである。102 号土坑の北側の一部を切っている。

埋土は灰茶褐色土の埋土②が主体で，下位に一部薩摩火山灰ブロックが混ざる。埋土③は黄茶褐色土である。埋土④は薩摩火山灰ブロックである。

関連する遺物は，Ⅺ類土器の小片が出土した。

104 号土坑（第 64 図）

Ｅ-24 区で検出した。長軸 181cm・短軸 66cm・深さ 28cmである。112 号土坑と重複している。

埋土は３つに分層でき，レンズ状に堆積する。埋土①は粘性がなくしまりの強い黒色土で，黄色パミスと微量の炭化物を含む。埋土②は粘性が弱くしまりのある黒色土で，多量の黄色パミスと微量の炭化物を含む。埋土③は黒褐色土でパミスの量が少量である。

関連する遺物は，早期前葉と考えられる貝殻条痕を有する土器小片が出土した。

【Ⅳ　類】

105 号土坑（第 65 図）

M-11 区で検出した。長軸 51cm・短軸 35cm・深さ 39cmである。

埋土は単層で，パミスを多く含んでいるⅦ層の黒褐色土である。

関連する遺物は確認されていない。

106 号土坑（第 65 図）

Ｆ-23 区で検出した。長軸 60cm・短軸 48cm・深さ 21cmである。

埋土は３つに分層できる。埋土①はⅦ層の黒褐色土で，１～２㎜大のパミスが点在する。埋土②はⅦ層の黒褐色土とＸ層の茶褐色粘質土が混ざり，やや硬質である。埋土③はＸ層の茶褐色粘質土で，床面と同じ土であるが，しまりがあり硬質である。

関連する遺物は，床面から早期前葉の条痕文を有する土器小片が出土した。

107 号土坑（第 65 図）

D-16 区から検出した。西側の一部が樹痕の影響を受けている。長軸 59cm・短軸 49cm・深さ 24cmである。

埋土は２つに分層できる。埋土①は黒褐色土で黄色パミスと白色パミスを全体に含む。埋土②は暗褐色土で，白色パミスが少量含まれる。

関連する遺物は出土していない。

108 号土坑（第 65 図）

Ｊ-17 区で検出した。長軸 59cm・短軸 54cm・深さ 16cmである。

埋土は単層で，２～５㎜大の黄色パミスと微小な白色パミスが混ざる黒褐色土である。粘性は弱い。

関連する遺物は出土していない。

109 号土坑（第 65 図）

Ｄ-16 区から検出した。西側は調査区外であり，全体像は不明瞭である。

埋土は中位で２つに分層できた。埋土①は５㎜大のパミスが集中する黒褐色土で，埋土②はパミスの少ない黒色土で粘性がある。

関連する遺物は出土していない。

110 号土坑（第 65 図）

Ｆ-13 区で検出した。過年度の調査で北側が削平されており，正確な床面は不明であった。推定で長軸 95cm・短軸 38cmを測る。

埋土は２つに分層できた。埋土①は５～10㎜大の黄色パミスを全体的に含む黒褐色土で，やや粘性・しまりがある。埋土②は２～３㎜大の黄色パミスを含む，にぶい黄褐色土で，やや粘性・しまりがある。

関連する遺物は出土していない。

111 号土坑（第 65 図）

Ｎ-18 区で検出した。調査区境で検出された。深さは 37cmを測る。

埋土は３つに分層でき，レンズ状に堆積する。埋土①は５～10㎜大の黄色パミスを含む，色調が明るい黒褐色土で，粘性は弱くしまりがある。埋土②は５～10㎜大の黄色パミスを含む黒色土で，粘性は弱くしまりがある。埋土③は１～３㎝大の薩摩火山灰起源と思われる黄色パミスを少量含む黒色土で，粘性が弱くしまりがある。

関連する遺物は，埋土中から軽石や礫が出土した。

112 号土坑（第 65 図）

Ｅ-24 区で検出した。104 号土坑に大半は切られ，東端には樹痕が認められるため，全体的な形状は不明瞭である。

埋土はわずかしか残存しないが，２つに分層できた。埋土①は１～３㎝大の薩摩火山灰ブロックを少量含む暗褐色土で，粘性は弱く，しまりがある。埋土②は少量の黄色パミスを含む黒褐色土で，粘性は弱くしまりがある。

関連する遺物は出土していない。

113 号土坑（第 65 図）

Ｉ・Ｊ-17 区で検出した。長軸 99cm・短軸 56cm・深さ 20cmである。

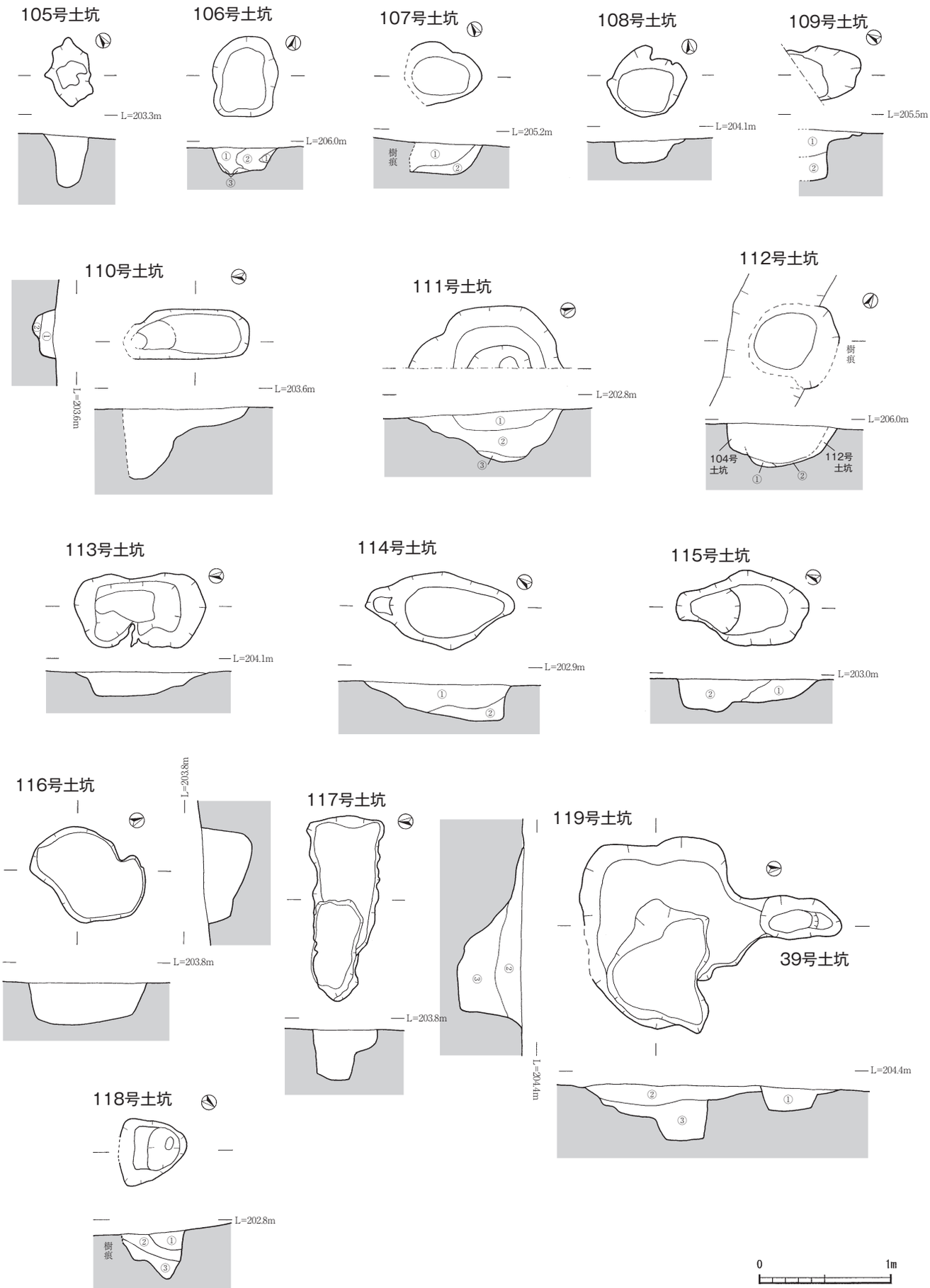
埋土は単層であり，２～３㎜大の黄色パミスと極少の白色パミスを含む黒褐色土で，粘性は弱い。

関連する遺物は出土していない。

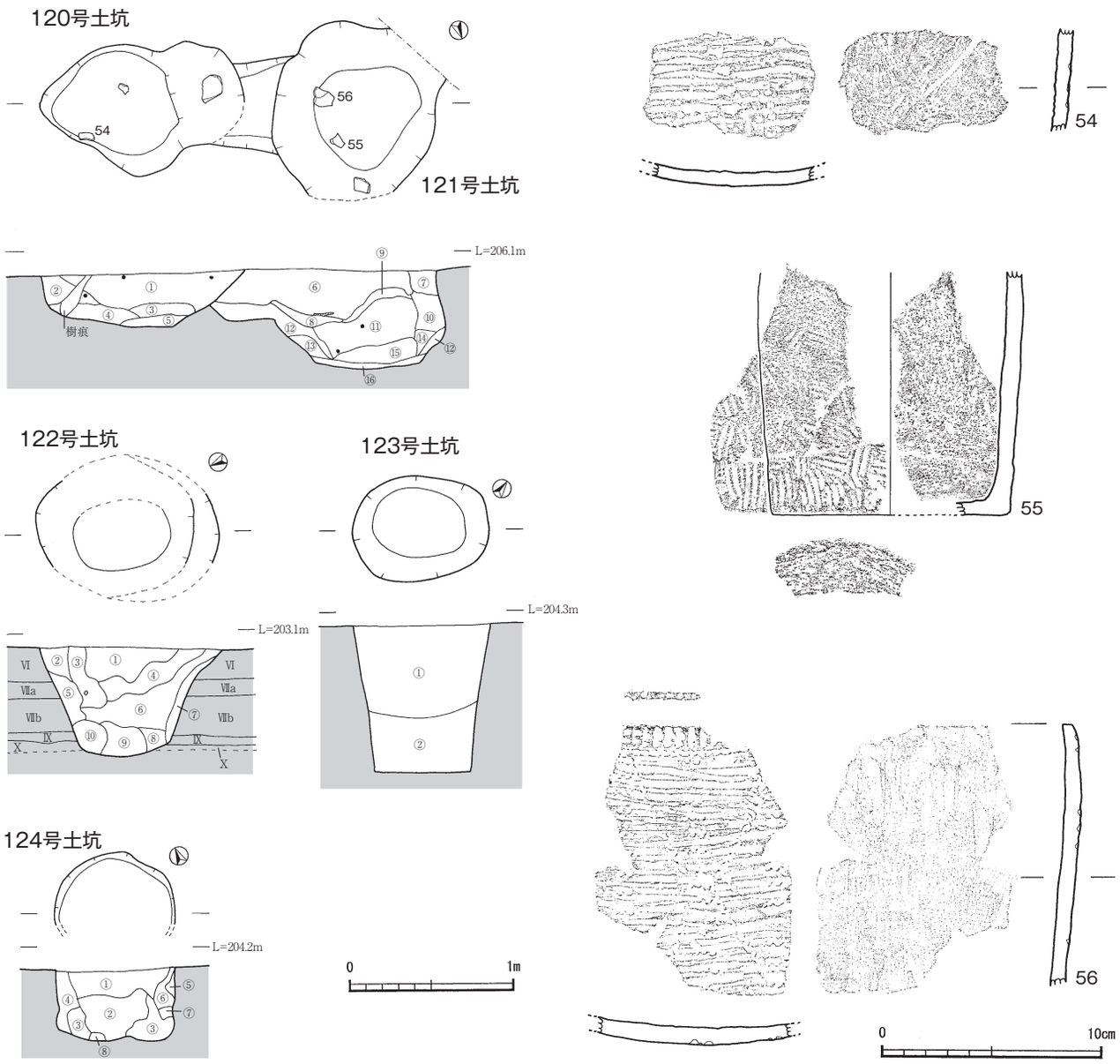
114 号土坑（第 65 図）

Ｎ-17 区で検出した。長軸 112cm・短軸 57cm・深さ 28cmである。

埋土は２つに分層でき，埋土①の黄色パミスを微量に含む黒色土が主体をなし，南側の下位にはパミスの含有量が多い黒色土の埋土②が堆積する。



第 65 図　39・105～119 号土坑



第 66 図　120～124 号土坑，120～121 号土坑出土遺物

関連する遺物は出土していない。

115 号土坑（第 65 図）

G－９区で検出した。北側の床面が一段深くなる。長軸 100cm・短軸 57cm・深さ 24cmである。

埋土は２つに分層でき，埋土①は５～10㎜大の黄色パミスを含む黒褐色土でやや粘性がある。埋土②は５～20㎜の黄色パミスを非常に密に含み，やや粘質のある黒褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

116 号土坑（第 65 図）

Ⅰ-16 区で検出した。形状が不整形である。長軸 86cm・短軸 72cm・深さ 37cmである。

埋土は単層で，２～３㎜大の黄色パミスと極少の白色パミス，薩摩火山灰のブロックが混ざる黒褐色土である。粘性はない。

関連する遺物は出土していない。

117 号土坑（第 65 図）

M-11 区で検出した。長軸 140cm･短軸 58cm･深さ 38cmである。

埋土は単層で，黒褐色土でパミスを多く含むⅦ層土である。

関連する遺物は出土していない。

118 号土坑（第 65 図）

N-18・19 区で検出した。長軸 56cm・短軸 50cm・深さ 36cmである。南側の一部に樹痕が見られる。

埋土は３つに分層でき，西側に傾斜して堆積する。埋土①は黄色パミスを含む黒色土で，粘性は弱くしまりがある。埋土②は黄色パミスを多量に含む黒色土で，粘性

やしまりがある。埋土③は埋土②と同様であるが，パミスの量が少ない。

関連する遺物は出土していない。

119 号土坑（第 65 図）

Ｆ-15 区で検出した。長軸 194cm・短軸 148cm・深さ 41cmである。北側は 39 号土坑に切られている。

埋土は２つに分層でき，埋土②は黄色パミスをまばらに含む黒色土に，１㎜大の白色パミスを少量含む。埋土③は埋土②と同様であるが，白色パミスを含まない。

関連する遺物は出土していない。

120 号土坑（第 66 図）

Ｆ-23 区で検出した。121 号土坑を切っている。長軸およそ 123cm・短軸 81cm・深さ 32cmである。121 号土坑と併せて連穴土坑の可能性もあったが，両者には土層断面の観察により切り合い関係にあることや，ブリッジ部分の痕跡がないことから２基の土坑と判断した。

埋土は５つに分層できた。埋土①は黄色パミスと白色粒を含む黒色土で，粘性は弱くしまりがある。埋土②は埋土①と同様であるが，黄色パミスと３～５㎝大の微量な薩摩火山灰ブロックを含む。埋土③は明黄褐色土で薩摩火山灰を含み，粘性は弱くしまりがある。埋土④はＸ層と黒色土が混ざる極暗褐色土で，やや粘性・しまりがあり，黄色パミスを微量含む。埋土⑤は黄色パミスと２～３㎝大の少量の薩摩火山灰ブロックを含み，極暗褐色土である。

関連する遺物は，土器２点，軽石１点が出土した。54 は横位の条痕文の上から，貝殻腹縁による刺突文を施す。胴部に屈曲がほとんどないため，角筒形土器と推定される。焼成は良好である。Ⅲ類土器に比定される。

121 号土坑（第 66 図）

Ｆ-23 区で検出した。120 号土坑によって東側の一部が切られているほか，西側が未調査区にかかっている。短軸 98cm・深さ 59cmを測る。

埋土は複雑であり，埋土⑥は少量の黄色パミスと５～10cm大のＸ層ブロックを含む黒色土で，粘性は弱くしまりがある。埋土⑦は１～10cm大の薩摩火山灰ブロックを含む黒色土である。埋土⑧は黒褐色土で粘性は弱く，しまりがある。埋土⑨はⅦ層土に近く，黒褐色で粘性・しまりは弱い。埋土⑩は⑦と同様の黒色土で，微量の黄色パミスを含み，粘性は弱くしまりがある。埋土⑪は明黄褐色土で粘性は弱く，しまりがある。埋土⑫はＸ層と黒色土が混ざった極暗褐色土で，黄色パミスと少量の薩摩火山灰ブロックを含む。粘性・しまりは弱い。埋土⑬はⅦ層とＸ層が混ざった暗褐色土で，粘性があり，しまりは弱い。埋土⑭は⑦と同様の黒色土で，１～３㎝大の少量の薩摩火山灰ブロックを含む。埋土⑮は２～８㎝大の薩摩火山灰ブロックを多く含む暗褐色土で，粘性は弱くしまりがある。埋土⑯は暗褐色土で，粘性・しまりが弱い。埋土には焼土ブロックや炭化物が含まれる。

関連する遺物は，土器３点が出土した。55・56 とⅩⅣ類土器が出土した。55 は胴部～底部片である。底部からほぼ真っ直ぐに立ち上がる器形である。胴部は斜位の貝殻条痕で，綾杉状を呈する部分もみられる。底部から胴部への立ち上がり部分では，縦位の貝殻条痕が施される。白色粒が胎土に多く含まれ，全体的にザラザラした質感である。特徴からⅢ類土器に比定される。56 は口縁部から胴部が残存する。ほぼ真っ直ぐ立ち上がる器形で，胴部の屈曲がほとんどないことから，角筒形土器と推定される。口縁部には押引状の貝殻腹縁刺突文が施され，口縁部文様帯と胴部文様帯との間に横位の貝殻復縁刺突文が１段巡る。胴部は横位の条痕文の上から斜位の貝殻刺突文が施される。内面調整は口縁部付近は横位，胴部は縦位のケズリ調整である。焼成は比較的良好である。特徴からⅢ類土器に比定される。

122 号土坑（第 66 図）

Ｊ-７・８区で検出した。東及び西側はすでに削平されており，中央部のみが残存していた。長軸 110cm・深さ 65cmである。

埋土①はⅥ・Ⅶ層が混ざる黒褐色土でわずかにパミスを含む。埋土②はⅦ層に類似し，粘質がある黒褐色土である。埋土③は埋土①よりも色調の薄い黒褐色土，埋土④は黄色パミスを少量含むアカホヤ二次堆積に近い褐色土である。埋土⑤は埋土②に類似した黒褐色土で，埋土⑥は埋土④に近いが色調が明るい黄褐色土である。埋土⑦はパミスを少量含む黒色土で，しまりがなく軟らかい。埋土⑧は樹痕等による撹乱と思われる。埋土⑨は埋土⑤・⑥が混ざった土で，埋土⑩は埋土⑨と同様の土質であるが，しまりがない黒褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

123 号土坑（第 66 図）

Ｇ-15 区で検出した。長軸 83cm・短軸 65cm・深さ 89cmで非常に深く掘り込まれている。落とし穴の可能性も考慮して調査したが，土坑と判断した。

埋土は中位で２つに分層できた。埋土①は２～10㎜大の黄色パミスと１㎜大の微細な白色パミスを多く含む黒色土で，砂粒が粗い。埋土②は埋土①と同様の黒色土であるがパミスの量少ない。

関連する遺物は出土していない。

124 号土坑（第 66 図）

Ⅰ-13・14 区で検出した。土坑の南側が削平され，長軸 72cm・深さ 44cmで底面が平坦である。

埋土はⅤ層が主体であり，８つに分層できた。埋土①はアカホヤ火山灰や火山豆石の混ざる黄褐色土である。埋土②は埋土①よりもやや暗い黄褐色土で，アカホヤ火山灰が混ざる。埋土③・④は淡褐色土で，５～10㎜大のアカホヤ火山灰の軽石が混ざる。また，炭化物が含まれ

る。埋土④はアカホヤ火山灰や火山豆石，２～４㎜大の軽石，一部薩摩火山灰のブロックを含む明褐色土である。埋土⑤はⅦ層の黒色土混じりの褐色土，埋土⑥は埋土③よりも明るい褐色土で，アカホヤ火山灰の１～２㎜大の細かい軽石が入る。埋土⑦は埋土⑤に類似する褐色土，埋土⑧も褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

５　集石遺構（第 67～220 図）

縄文時代早期の集石遺構は，Ⅵ～Ⅷ層で計 313 基を検出した。天神段遺跡では前・中期の集石遺構が 19 基，晩期の集石遺構が３基報告されており，それらをはるかに上回る遺構数である。

集石遺構は，①礫の密度，②掘り込みの有無，③掘り込みの形状の３つの点からⅠ～Ⅳ類に大別した。また，各分類群をさらに細別した。分類基準は下記の通りである。

Ⅰ類　礫が集中しないもの。さらに２つに細分される。
　Ⅰａ類　掘り込みを伴わないもの。
　Ⅰｂ類　掘り込みと関係性が不明確なもの。
Ⅱ類　礫は比較的集中するが，掘り込みが確認できないもの。さらに２つに細分される。
　Ⅱａ類　礫の堆積が重層的であり，掘り込みの存在が想定できるもの。
　Ⅱｂ類　礫の堆積が平面的であるもの。
Ⅲ類　礫が比較的集中し，掘り込みを伴うもの。さらに２つに細分される。
　Ⅲａ類　掘り込み内に礫が充填されているもの。
　Ⅲｂ類　掘り込みと礫の集中にレベル差がみられるもの。
Ⅳ類　上記Ⅰ～Ⅲに該当しないもの。礫が広域に広がり，散在部分と密集部分が混在する例などを含む。

各集石遺構の検出面や分類，規模等については，第９～16 表にまとめた。

なお，集石遺構実測図中の断面図に示してあるラインは，全て検出面である。

（１）　Ⅷ層検出の集石遺構

Ⅷ層上面で検出した集石遺構は，１基であった。薩摩火山灰層上面で検出した。Ⅵ・Ⅶ層で検出した集石遺構と形態は異なるが，礫のまとまりから集石遺構と判断した。

１号集石遺構（第 68 図）

Ｅ-22 区で検出した。検出面はⅧ層上面であり，竪穴住居状遺構・連穴土坑・土坑などが周辺で多数検出された位置にある。Ⅳ類に該当する。

長軸 272cm・短軸 127cmの不整形な長楕円形で，最大44cmの深さの掘り込み内で礫が多数検出された。南側は平面が円形かつボウル状の掘り込みであり，床面付近に20cmを超える大型の礫が位置する。その上位は５～10cm大の礫が検出面まで重層的に堆積するが，密度はさほど高くなく充填された状況ではない。礫は被熱により変色したものが多く，小型の礫は熱により破砕したものと考えられる。本来不整円形の土坑があった場所に新たに掘り込みを伴う集石が，掘り込まれた可能性もある。

掘り込みの埋土①は白色パミスの細粒と１cm大の黄色パミスが混在した砂質の黒褐色土で，３～５cm大の黄色土ブロックがわずかに含まれる。埋土②はわずかに黄色パミスを含む砂質の暗茶褐色土である。埋土③は，白色および黄色パミスを含む砂質の強い黒色土である。埋土④はやや粘性があり軟質の黒褐色土である。また，特に南側寄りで多量の炭化物が検出され，木片と判別できるものや，炭化種実が確認された。炭化種実は土坑全体に散在していた。

関連する遺物は出土していない。

埋土中から検出した３点の炭化物を年代測定した結果，較正年代で 7,574 － 7,423cal ＢＣの範囲に収まった。

（２）　Ⅶ層検出の集石遺構

Ⅶ層では，143 基の集石遺構を検出した。

以下，Ⅰ類から順に各集石遺構の特徴及び出土遺物を取り上げる。

【Ⅰａ類】

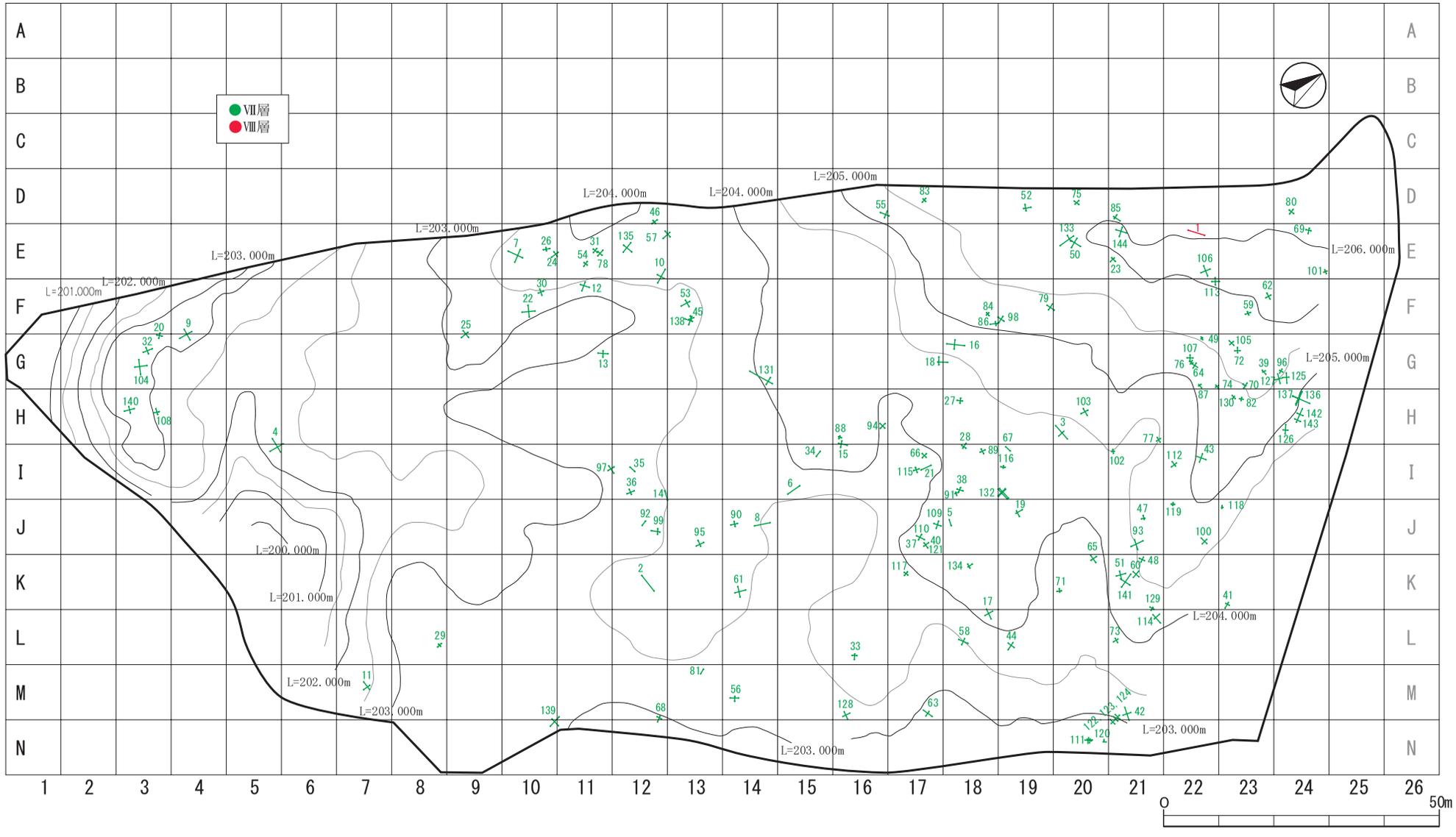
本類は集石遺構を構成する礫が集中せず，掘り込みを伴わない一群である。

２号集石遺構（第 69・70 図）

Ｋ-12 区で検出した。約 290cmの範囲に礫が広がる。構成礫は５cm程が主体であり，数点 10cm程のものがある。

集石遺構内から土器片２点と石器１点を確認した。57 は包含層出土の土器片と接合し，胴部から底部が残存する。内外面とも丁寧なミガキ状のナデ調整であり，底部の立ち上がり部分までナデ調整が施される。胴部には大ぶりの短沈線で「く」の字状の文様が施される。また，一部に縦位の短沈線文が数条みられ，文様の区画としての意味を持っていた可能性がある。胴部上半の最大径の位置に帯状にスス痕がみられ，使用時の被熱痕と考えられる。胎土は粒子が細かく精緻であり，焼成も良好である。Ⅶ類土器に比定される。他の１点は，胴部小片である。短沈線で施文するもので早期中葉に属すると思われる。

58 は一括資料である凝灰岩製のハンマーストーンで，集石遺構を構成する礫として転用されたと考えられる。



第67図　集石遺構配置図（Ⅶ・Ⅷ層）



第 68 図　１号集石遺構

約５㎝の円礫の側面に細かい敲打痕が高密度で観察できる。敲打痕が１周巡っており，使用頻度の高さが分かる。また，裏面は磨面であり，表面はほぼ平坦である。

３号集石遺構（第 71 図）

H-20 区で検出した。検出面は地層横転の影響で，一部薩摩火山灰ブロックとアカホヤ火山灰が混在する状況であった。長軸 320cm・短軸 120cmの範囲に礫が広がる。最も大きい礫は 15cm大であるが，５㎝前後の大きさのものが平均的である。

関連する遺物は，沈線文を有するXX類土器の胴部小片がある。また，本集石遺構に伴うかは不明であるが，周辺の一括資料で 59 の石鏃が出土した。59 は安山岩製の打製石鏃である。やや基部が膨らんだ直線的な側縁で，基部の両端は欠損しているが「U」字形の深い抉りをもつ。先端部は鋭利に仕上げられている。

４号集石遺構（第 72 図）

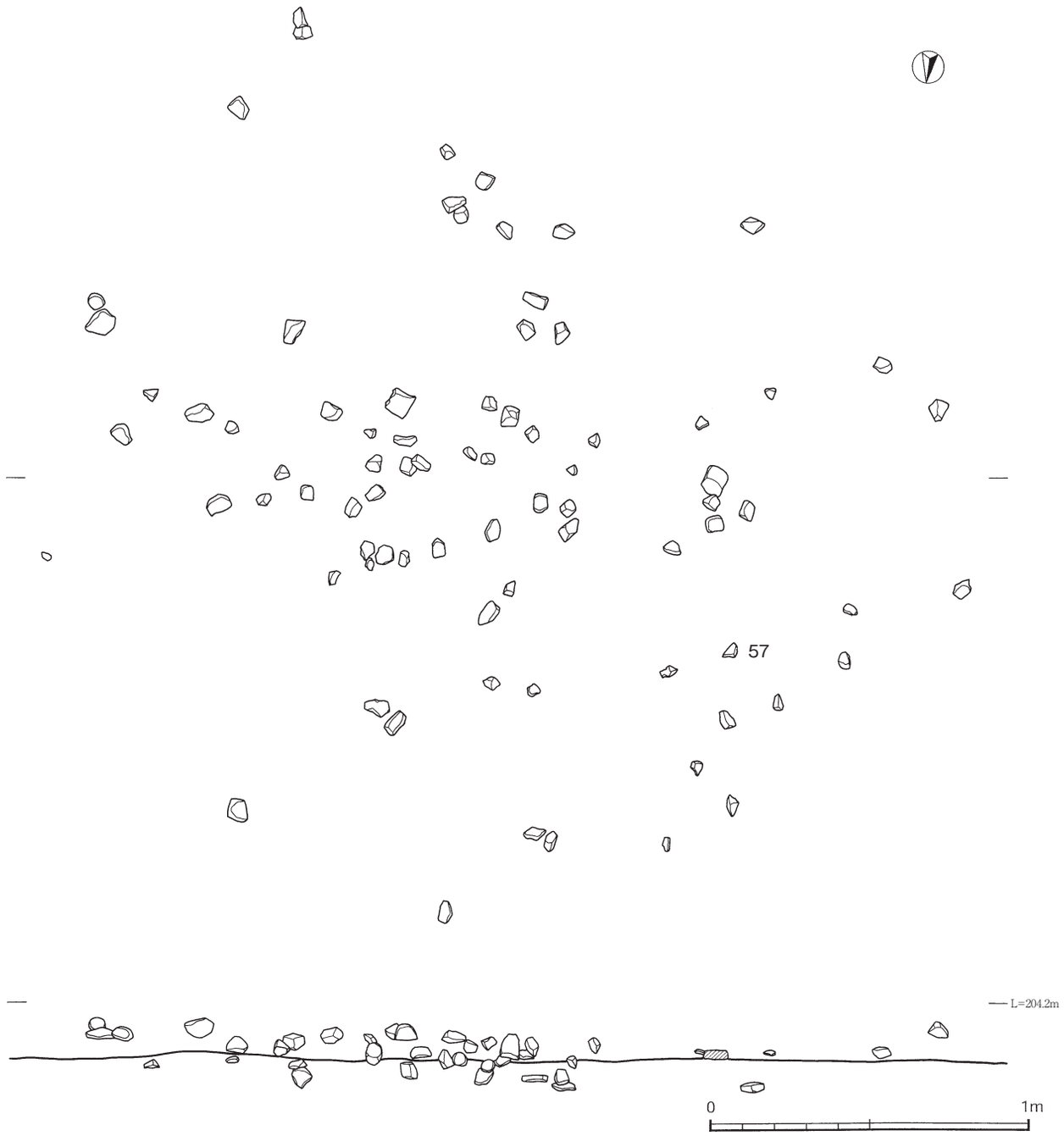
Ｈ・Ｉ-５区で検出した。周辺での礫の出土は少ない。235cmの範囲に礫が広がるが，構成礫は 27 点と密度はかなり低い。構成礫は安山岩質で８㎝程の大きさが主体をなし，表面は被熱により赤化している。破砕したものが多く，部分的な欠損や剥離したものも混ざる。

構成礫のうち１点は，磨・敲石が転用された可能性があるものであった。その他で関連する遺物は，出土していない。

５号集石遺構（第 73 図）

Ｊ-18 区で検出した。長軸 255cm・短軸 165cmの範囲に礫が広がる。構成礫は５～８㎝ほどの大きさの亜角礫が中心である。被熱による赤化やひびもいくつか確認された。礫は安山岩が主体で，ホルンフェルスや砂岩が数点含まれていた。礫が高低差を持って検出されているため，掘り込みを伴う可能性も考えられるが，調査時に検出することはできなかった。

関連する遺物は，Ｘ類土器が１点，XX類の口縁部が１点，XVI類土器の胴部小片が出土した。また，構成礫として転用されたと考えられる磨石片が２点出土した。



第 69 図　２号集石遺構

６号集石遺構（第 74 図）

Ⅰ-15 区で検出した。長軸 210cm・短軸 120cmの範囲に礫が広がる。礫の密度はかなり低く，重なりもほとんどみられない。構成礫は５cm程の大きさのものが中心である。

関連する遺物は出土していない。

７号集石遺構（第 74 図）

Ｅ-10 区で検出した。長軸約 190cm・短軸約 160cmの範囲に礫が広がる。構成礫は５cm程の角礫が中心であり，一部に 10cmを超えるやや大型の礫が用いられる。被熱による破砕礫が多い。礫の密度は低く，各礫にもレベル差がある。

関連する遺物は，隣接してⅫ類土器と思われる薄手の土器小片が出土した。

８号集石遺構（第 75 図）

Ｊ-14 区で検出した。長軸約 255cm・短軸 110cmの範囲



第 70 図　２号集石遺構出土遺物

に礫が広がる。礫の重なりもほとんどなく，平面的である。構成礫は 10cm程の大きさのものが主体であり，周辺に５cm程のやや小型の礫が散在する。

関連する遺物は出土していない。

９号集石遺構（第 75 図）

Ｆ・Ｇ−４区で検出した。長軸 180cm・短軸 130cmの範囲に礫が広がる。一部礫が重なるが，重層的ではなく平面的な分布である。構成礫は５～８cm程の角礫が主体であり，小型の礫も少量用いられている。被熱による変色が表面にみられ，数点は破砕している。

関連する遺物としては，山形押型文を施したXI類土器の小片が数点出土し，散在する状況であった。

10 号集石遺構（第 76 図）

Ｅ・Ｆ−12 区で検出した。長軸 140cm・短軸 80cmの範囲に礫が広がる。礫同士の重なりはほとんどみられず，礫間の密度も低い。構成礫は５cm程の大きさが主体をなす。同様の集石遺構が周辺でも確認された。

関連する遺物は，集石遺構に隣接してXI類土器及びＸＸ類の底部の小片や黒曜石のチップが出土した。また，敲石と思われる破片が，構成礫として転用されていた。

11 号集石遺構（第 76 図）

Ｍ−７区で検出した。長軸 175cm・短軸 110cmの範囲に礫が広がる。礫同士の重なりもほとんどなく，礫間のレベル差も大きい。構成礫は５cm程の安山岩・凝灰岩・砂岩である。礫は被熱により赤化し，崩れやすく脆い。炭化物が全体にみられるが，量は少ない。

関連する遺物は，ＸＸ類の土器小片が１点出土した。

12 号集石遺構（第 77 図）

Ｆ−11 区で検出した。周辺には集石遺構が複数基ある。長軸 160cm・短軸 140cmの範囲に礫が広がる。礫同士はほとんど重なっておらず，中央部分の密度は低い。また，礫間にやや高低差があるが，一連の集石遺構と判断した。構成礫は５～８cmほどの大きさが主体で，被熱による変色や破砕がみられる。

関連する遺物は，短沈線文が施された土器片が１点出土したが，小片のため詳細は不明である。

13 号集石遺構（第 77 図）

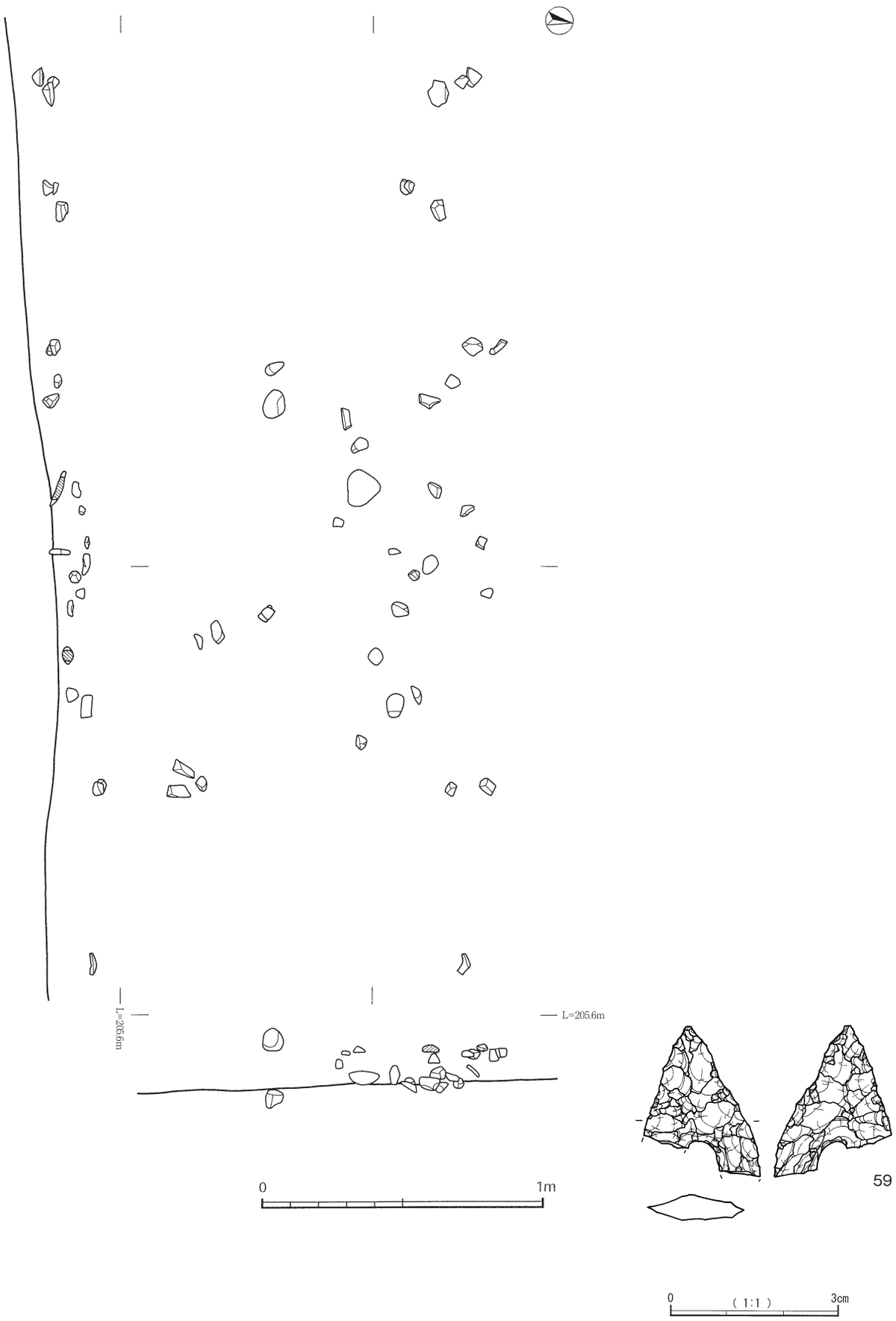
Ｇ−11 区で検出した。約 130cmの範囲に礫が広がる。礫同士の重なりはほとんどなく，礫間にレベル差がある。構成礫は５cm程の大きさのものが主体であり，10cmを超える大型の礫が数点含まれる。

関連する遺物は出土していない。

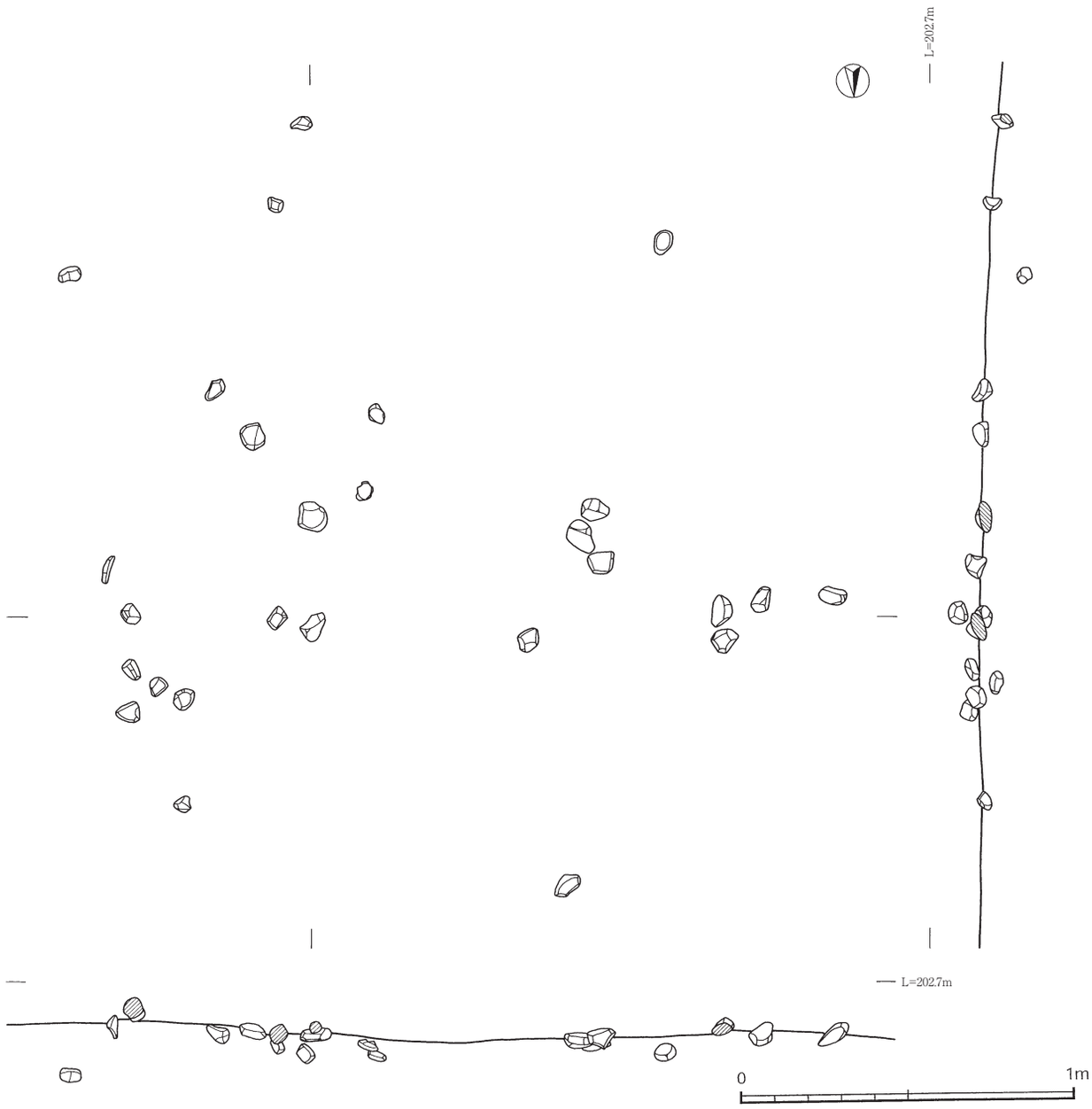
14 号集石遺構（第 78 図）

Ｉ−12 区で検出した。長軸約 185cm・短軸 150cmの範囲に礫が広がる。礫の重なりはほとんどない。構成礫の大きさは５cmが主体であるが，１点 15cmを超える大型礫も含まれる。礫は凝灰岩が約半数であり，その他に安山岩，泥岩，花崗岩が用いられている。

集石遺構に隣接してＶ類土器と思われる胴部片が１点出土したが，集石遺構の検出面より 10cm程レベルが高い。



第 71 図　３号集石遺構・出土遺物



第 72 図　４号集石遺構

15 号集石遺構（第 78 図）

Ｈ・Ｉ-16 区で検出した。長軸約 130cm・短軸約 85cm の範囲に礫が広がる。構成礫は５～８cm程の大きさが主体である。多くは安山岩が主体である。被熱の痕跡は確認されなかった。礫の重なりはほとんどなく，平面的に広がる。

関連する遺物は出土していない。

16 号集石遺構（第 78 図）

Ｇ-18 区で検出した。約長軸 290cm・短軸 150cmの範囲に礫が広がる。構成礫は５cm程の大きさのものが中心であるが，15cm程の大型礫が数点含まれる。掘り込みは確認されず，大型礫を配置したような状況もみられない。

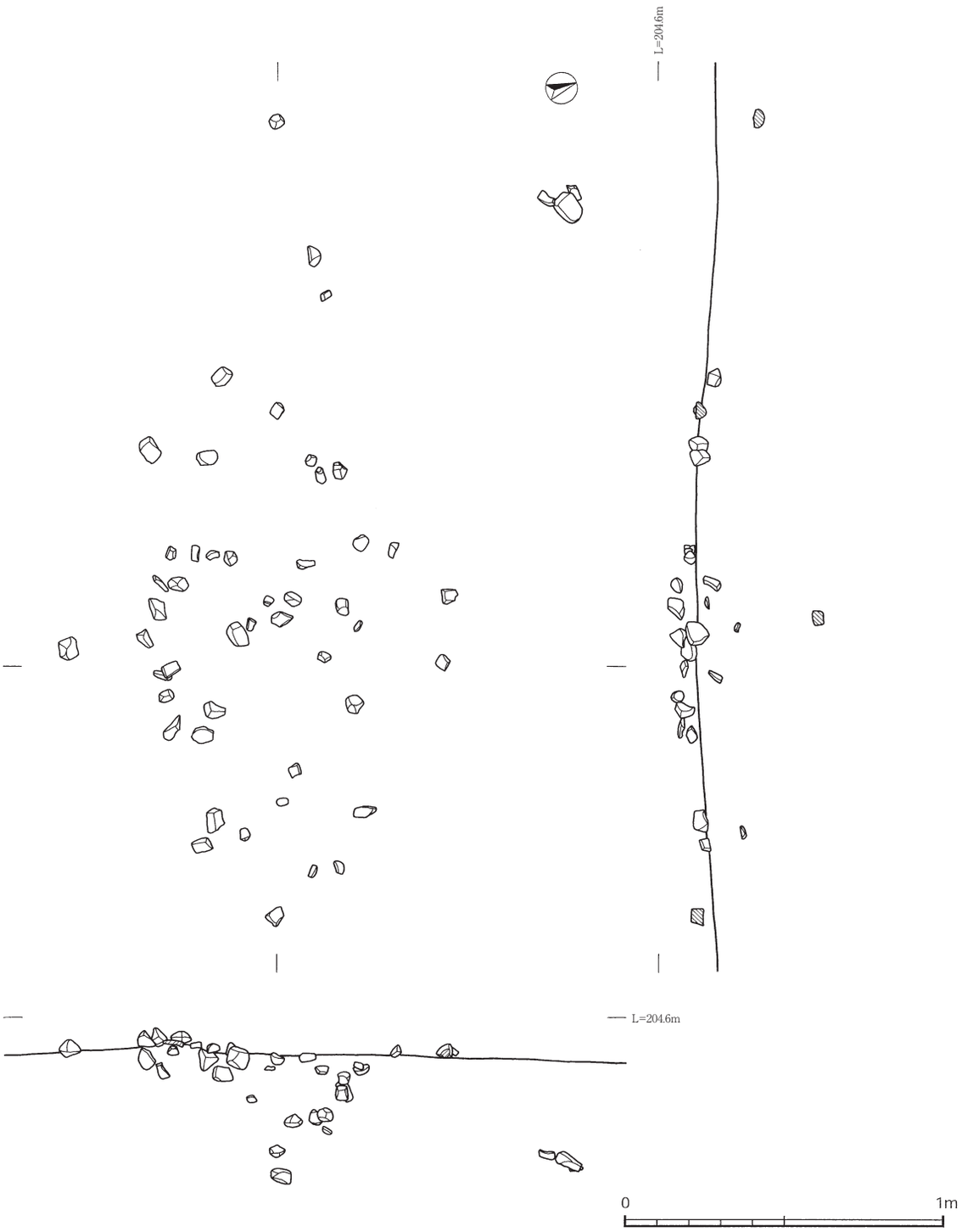
関連する遺物は，構成礫として転用されたと考えられる砂岩製の石皿片が１点出土した。

17 号集石遺構（第 79 図）

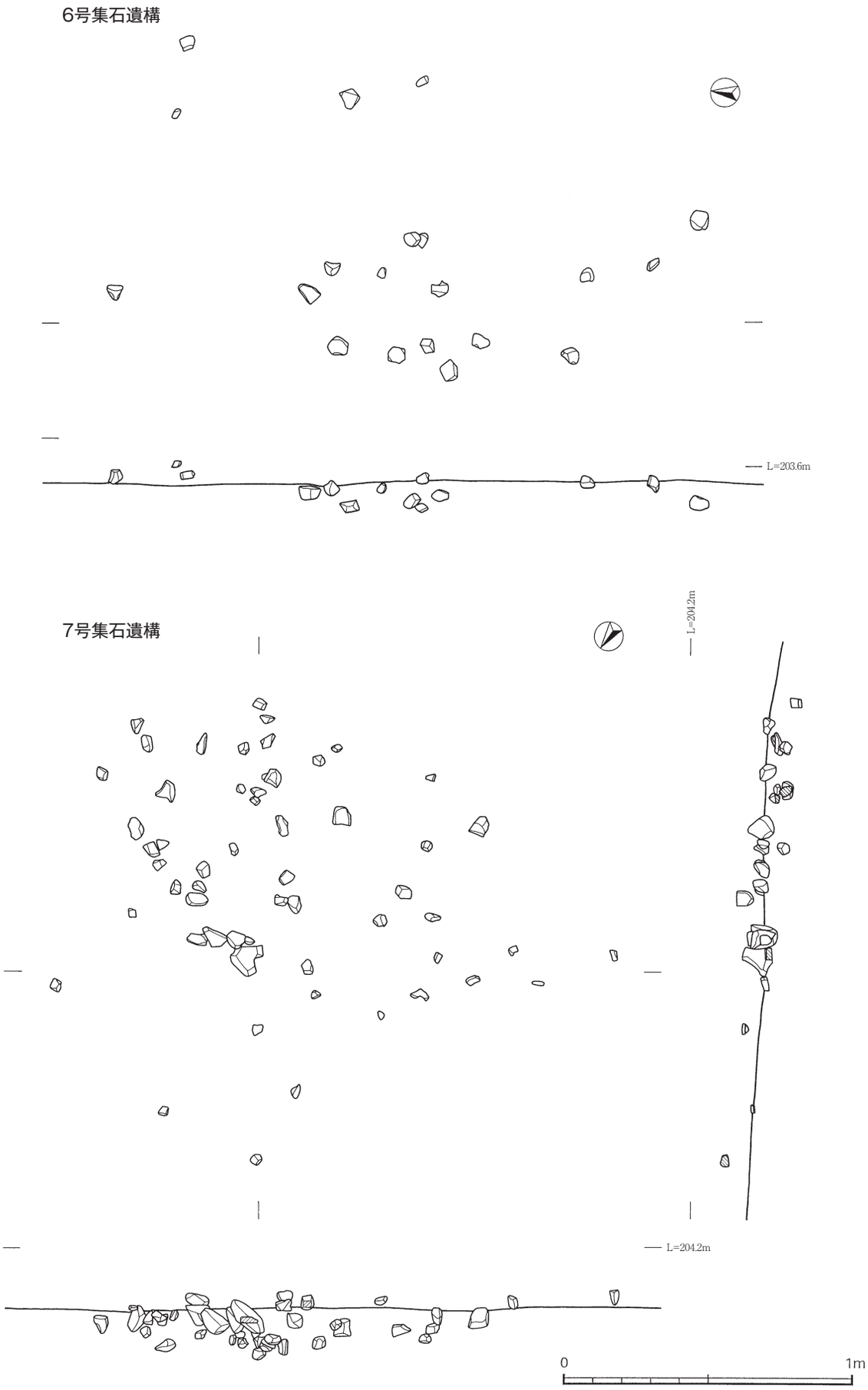
Ｋ・Ｌ-18 区で検出した。長軸 155cmの範囲に礫が広がる。構成礫は５～８cm程の大きさが主体をなし，ほとんど重なりを持たず平面的に広がる。

関連する遺物は，Ⅶ類土器が出土した。また，構成礫の中に磨石と思われる破片が転用されていた。

60 は集石遺構内出土の土器片と包含層出土の土器片が接合したもので，胴部から底部まで残存する。底部からほぼ真っ直ぐに立ち上がる。内外面ともナデ調整である。胴部は底部付近を除いて文様が施され，縦位の短沈

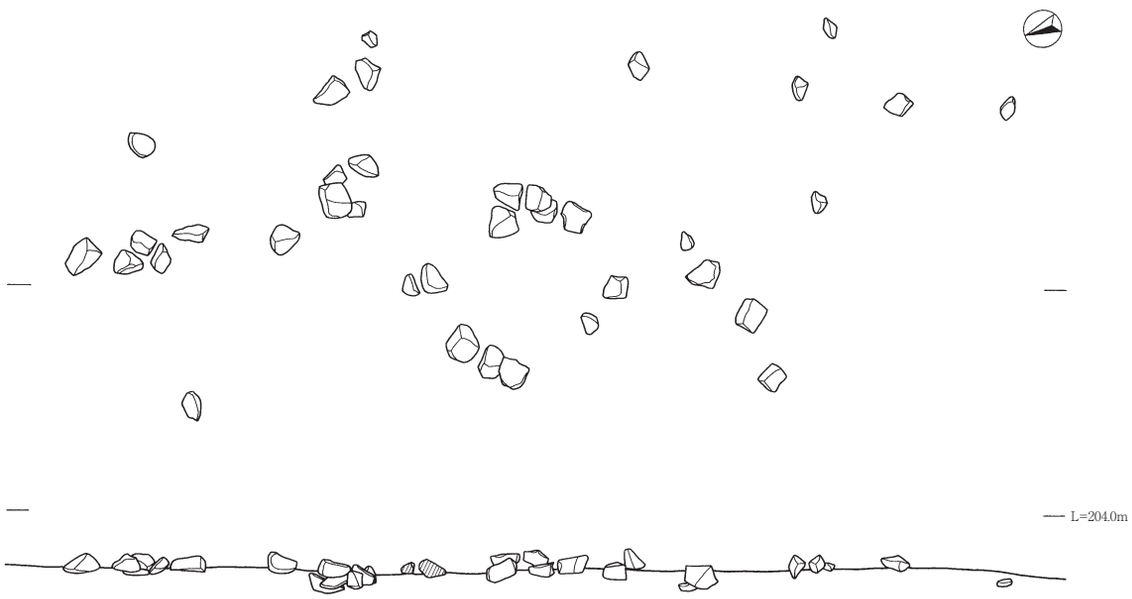


第 73 図　５号集石遺構

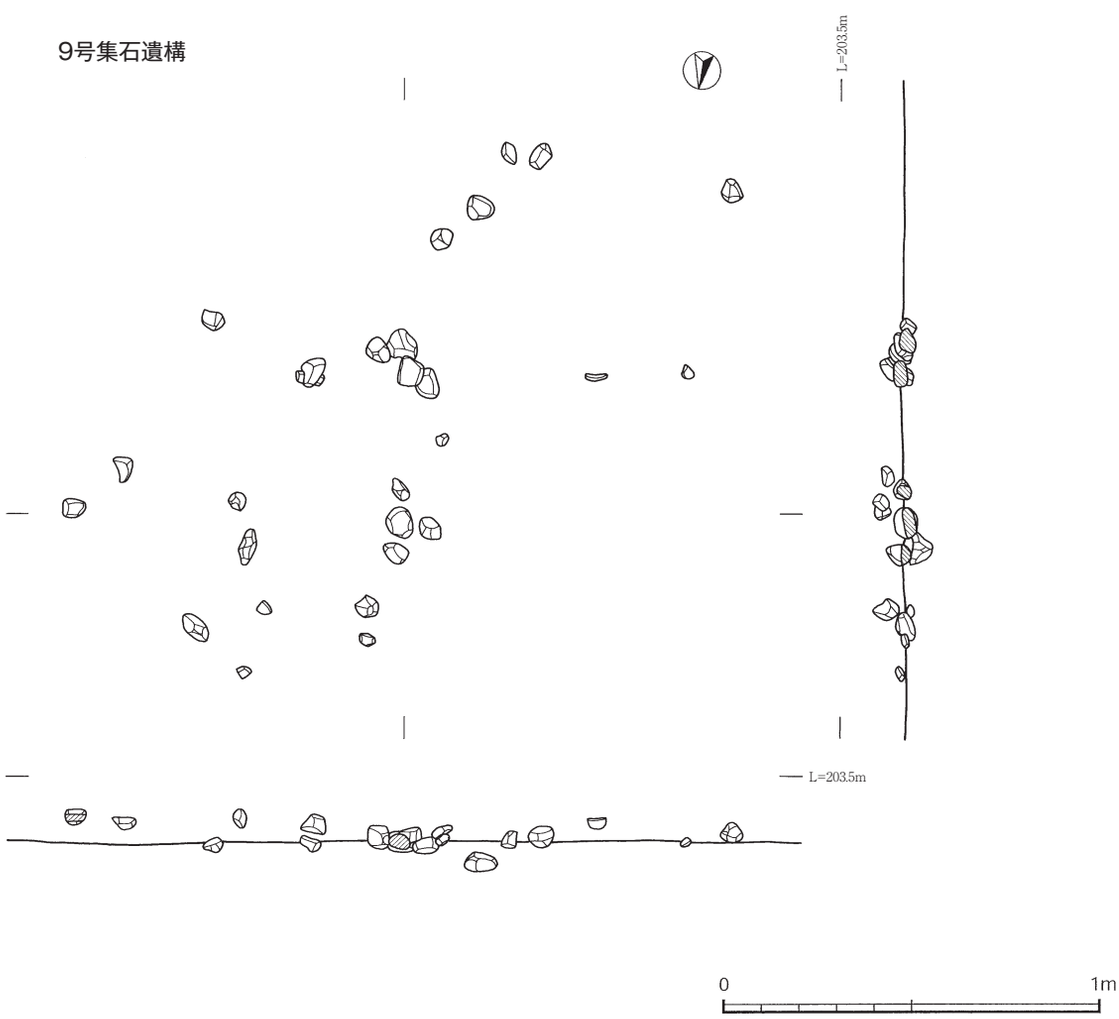


第 74 図　６～７号集石遺構

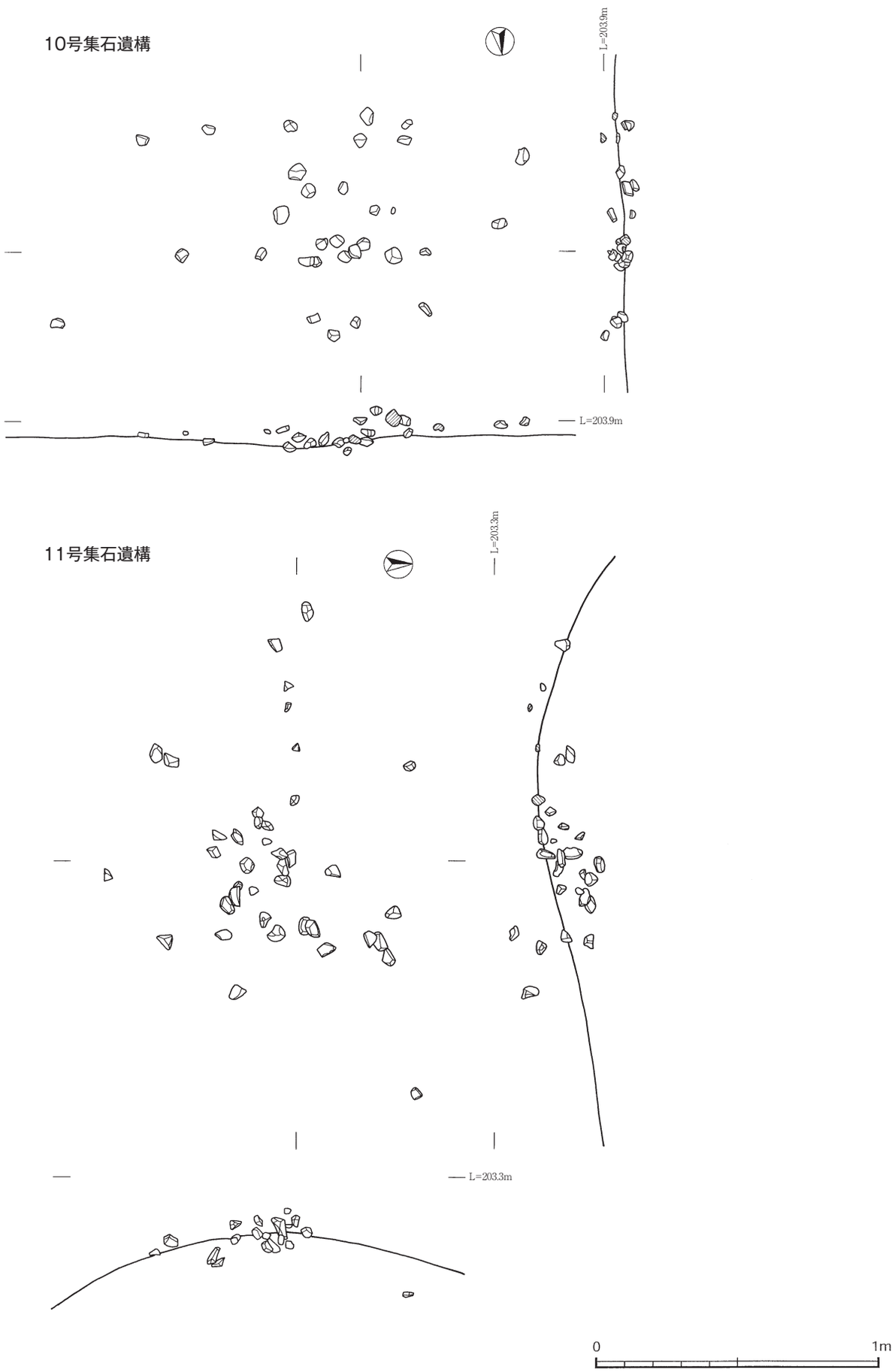
8号集石遺構



9号集石遺構



第 75 図　８～９号集石遺構

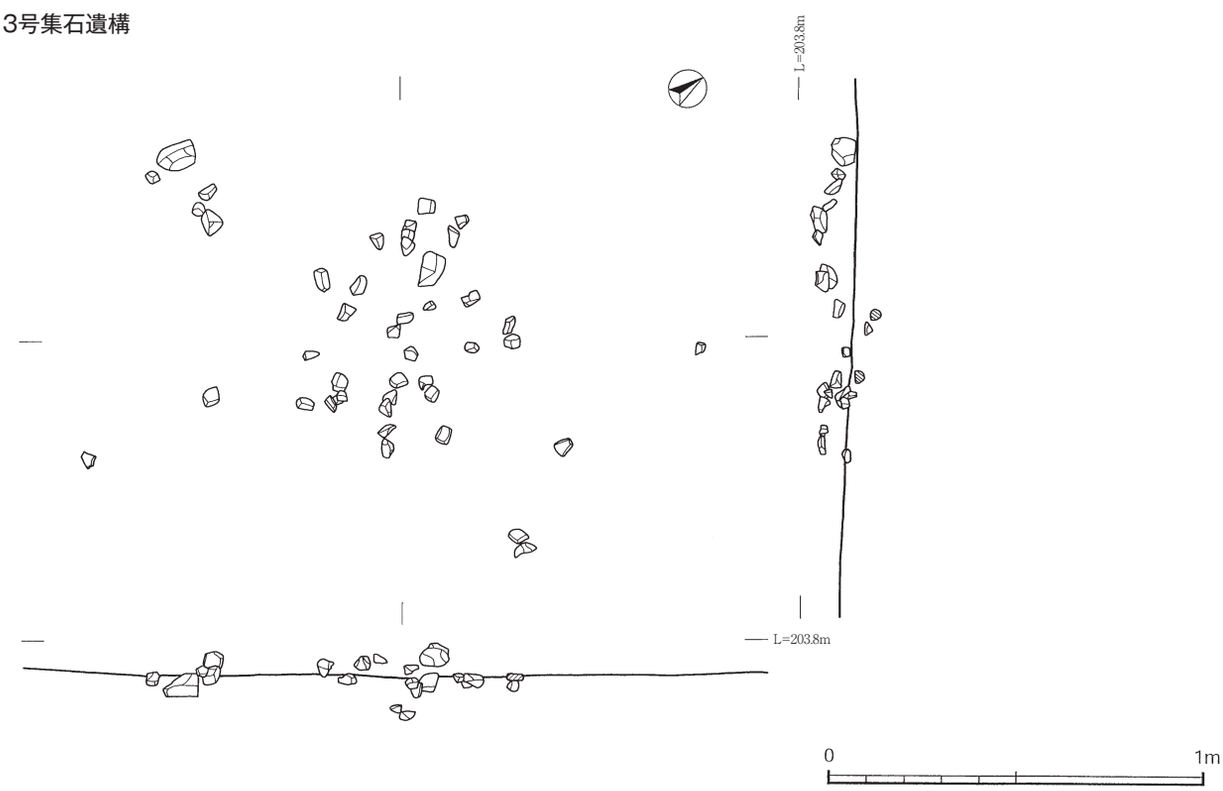


第 76 図　10～11 号集石遺構

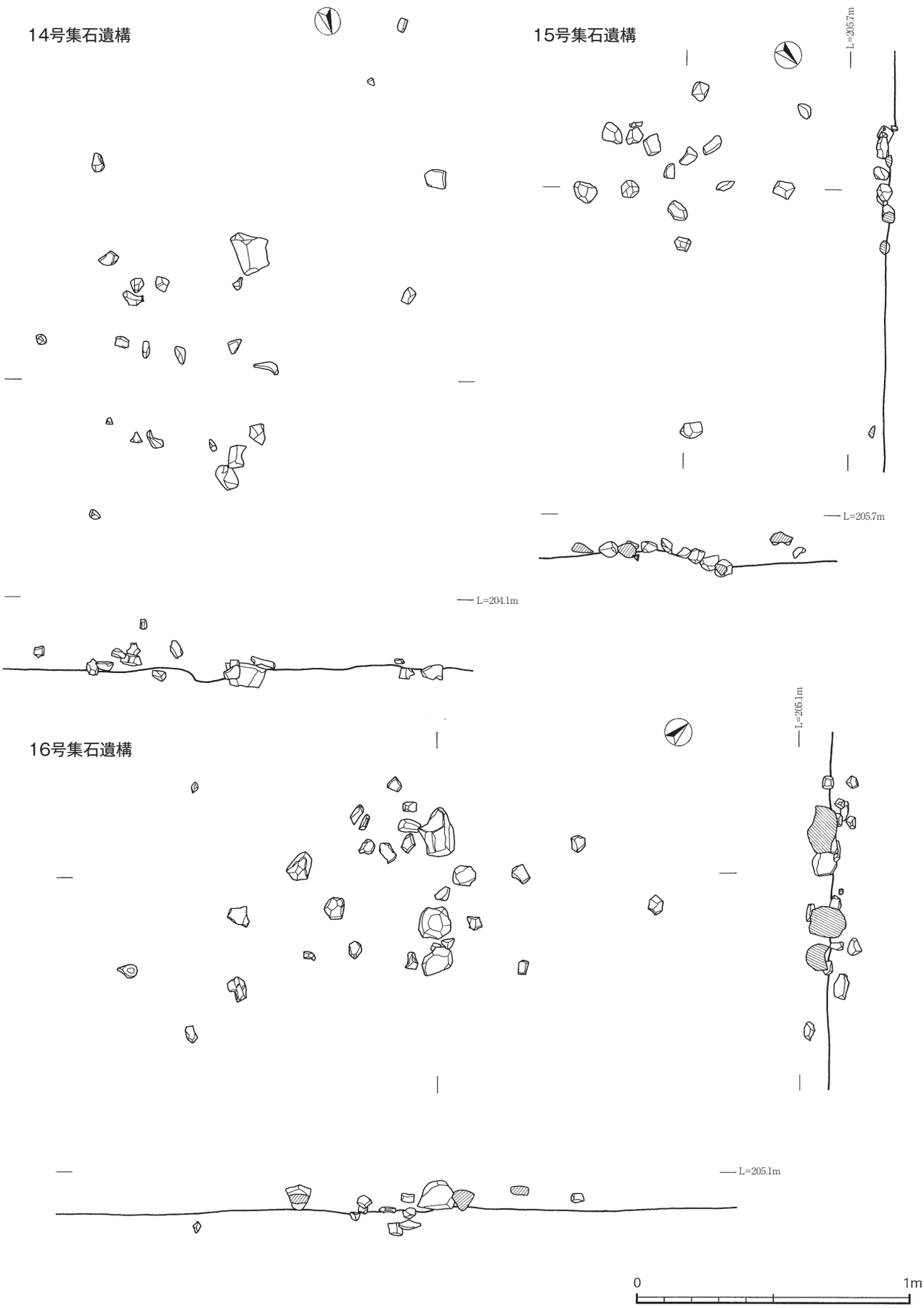
12号集石遺構



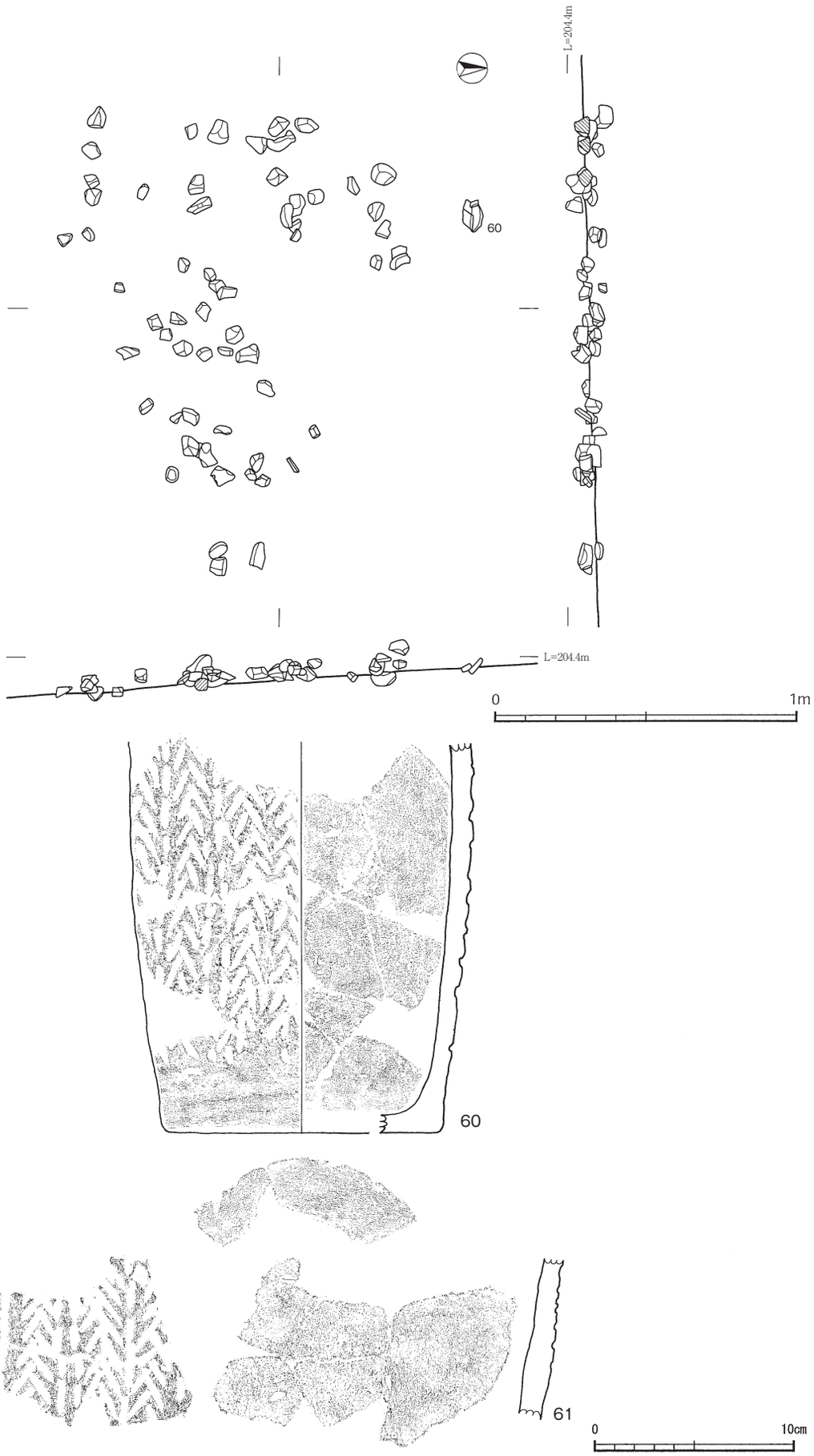
13号集石遺構



第 77 図　12～13 号集石遺構



第 78 図　14～16 号集石遺構



第 79 図　17 号集石遺構・出土遺物

線文と羽状の短沈線文が交互に施文される。沈線の幅は約５㎜で深く，凹線文に近い。全体的に調整も丁寧で焼成も良く，胎土の粒子も均質である。Ⅶ類土器に近い土器と考えられる。61 は包含層出土の土器で，60 と同一個体と考えられる。

18 号集石遺構（第 80 図）

G-17・18 区で検出した。長軸約 140cm・短軸約 130cm の範囲に礫が広がる。構成礫は５cm程の小型礫と 10cm程のやや大型の礫で構成される。安山岩と砂岩が多く，被熱による赤化や破砕したものが多い。

集石内遺構から，Ⅴ類土器，黒曜石（上牛鼻産）及びチャートのフレイクが出土した。62 は胴部片である。器壁は比較的厚く，砂粒が目立つ粗い胎土である。外面は綾杉状の貝殻条痕が全面にみられる。Ⅴ類土器に比定される。

19 号集石遺構（第 80 図）

Ｊ-19 区で検出した。約 120cmの範囲に礫が広がる。地層横転が一部絡んでおり，表面に複数の土層が観察される中に礫が散在している。また，北側の一部は調査区外であった。構成礫は 18 点で，そのうち 10 点ほどでまとまる部分があるが，掘り込みを想定できるような堆積ではなかった。構成礫は５cm程の安山岩が主体であり，砂岩，凝灰岩も混ざる。被熱により赤化したものも数点みられる。

関連する遺物は出土していない。

20 号集石遺構（第 80 図）

G-３区で検出した。散在する礫を含めても 50cm程の範囲に収まる小規模な集石遺構である。構成礫は５cm程の大きさである。３～５㎜のオレンジパミスがわずかに点在しており，礫間の埋土はⅦ層の黒色土で，硬くしまりが強く，やや粘性がある。

関連する遺物は出土していない。

21 号集石遺構（第 80 図）

Ⅰ-17 区で検出した。長軸約 45cm・短軸約 20cmの範囲に，６点の礫が広がる。構成礫は５cm程の小型の安山岩である。

関連する遺物は出土していない。

22 号集石遺構（第 81 図）

Ｆ-10 区で検出した。長軸約 120cm・短軸約 90cmの範囲に礫が広がる。東から西に向う緩やかな傾斜面に位置する。一部礫同士の重なりはあるが，重層的ではない。構成礫は５cm程の大きさのものが主体をなす。礫間では５㎜以下の炭化物がまばらに検出され，被熱による破砕礫も数点みられた。

関連する遺物として，63 の底部片が出土した。器壁は厚く，上面に接合面が明瞭に残る。内外面ともミガキに近い丁寧なナデ調整である。胎土には２㎜大の白色・褐色礫が多量に含まれる。小片のため詳細は判断できないが，早期後葉に比定されると思われる。また，綾杉状条痕が部分的に確認できるⅤ類土器の胴部小片も出土した。

23 号集石遺構（第 81 図）

Ｅ-21 区で検出した。約 50cmの範囲に礫が広がる。構成礫は 10cm程の大きさで，安山岩がほとんどである。被熱痕は確認されなかった。

関連する遺物として，集石遺構に隣接して土器片が出土した。64 は胴部片である。胎土には白色粒子が目立つが，調整は丁寧である。外面には横位の貝殻腹縁刺突文が密に施文される。Ⅵ類土器に比定される。また，ＸⅤ類土器と思われる土器片も出土した。

24 号集石遺構（第 81 図）

Ｅ-10・11 区で検出し，26 号集石遺構に隣接する。長軸 120cm・短軸 85cmの範囲に礫が広がる。礫同士の密度は南側ほど低く，礫同士のレベル差もある。構成礫は５～８cm程の大きさが主体である。

構成礫の一部に石皿や敲石と思われる破片が転用されていた。被熱痕は確認されなかった。その他関連する遺物は出土していない。

25 号集石遺構（第 82 図）

Ｆ・G-９区で検出した。長軸約 120cm・短軸約 95cmの範囲に礫が広がる。礫同士の密度も非常に低く，礫数も 16 点と少ない。構成礫は５cm大のものが主体である。

関連する遺物は出土していない。

26 号集石遺構（第 82 図）

Ｅ-10 区で検出した。約 90cmの範囲に礫が広がる。集石遺構は角礫で構成され，１点のみ 15cm程の大型であるが，その他は５cm程の大きさである。被熱痕は確認されなかった。礫同士の密度も低く，礫同士にレベル差がある。

関連する遺物は出土していない。

27 号集石遺構（第 82 図）

Ｈ-18 区で検出した。南東側にやや下る傾斜面に位置する。約 55cmの範囲に礫が広がる。礫の重なりもほとんどなく，掘り込み等も確認されなかった。構成礫は５cm程の大きさが中心で，安山岩を主体に砂岩が混ざる。構成礫の３割程度に，被熱による赤化がみられる。

関連する遺物は出土していない。

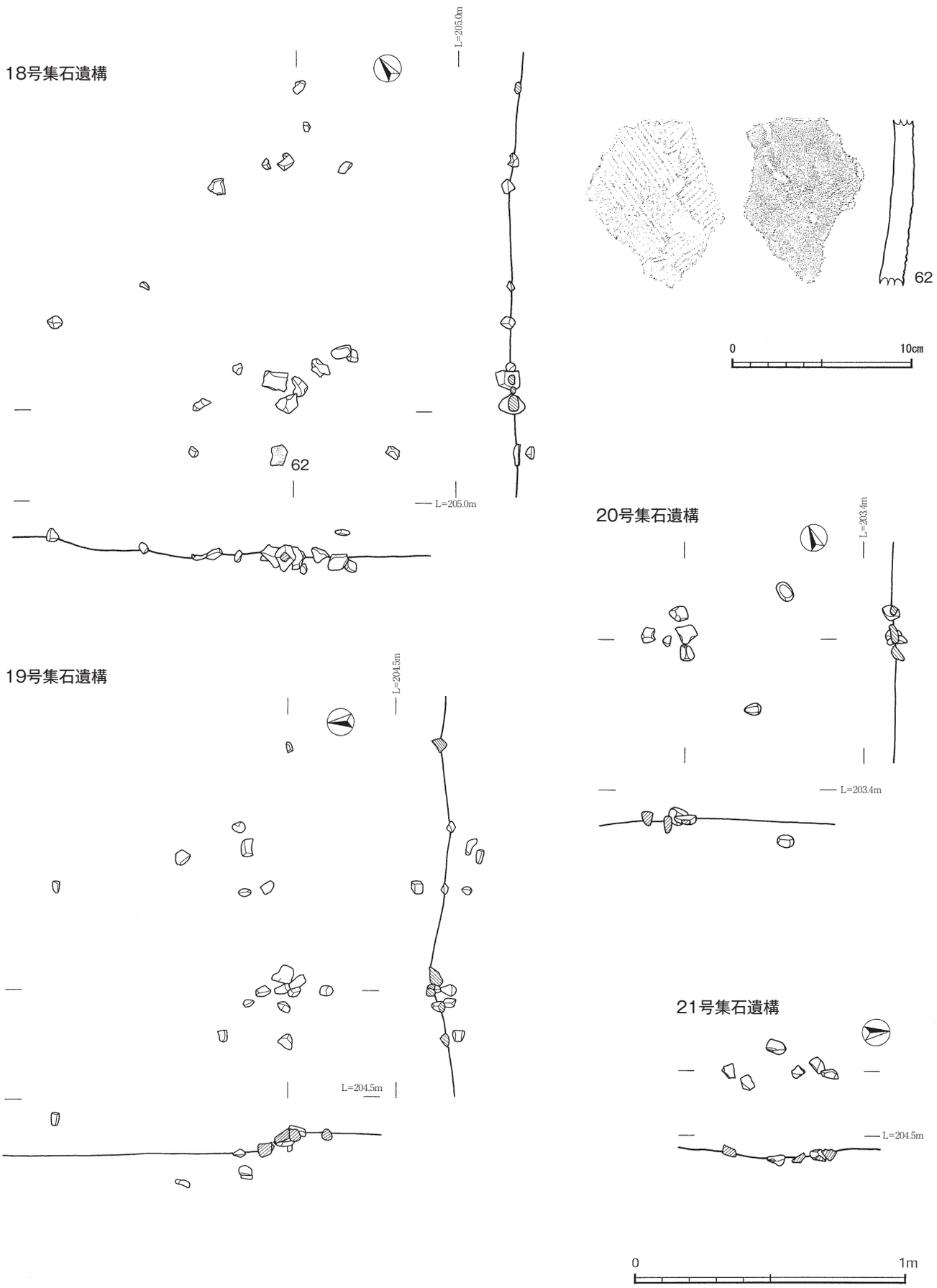
28 号集石遺構（第 82 図）

Ⅰ-18 区で検出した。約 80cmの範囲に５～８cm程の礫が広がる。構成礫にレベル差はほとんどなく，礫同士の重なりもほとんどない。安山岩の角礫が主体である。中心部の土が若干軟らかかったが，明確な掘り込みはみられなかった。

関連する遺物は出土していない。

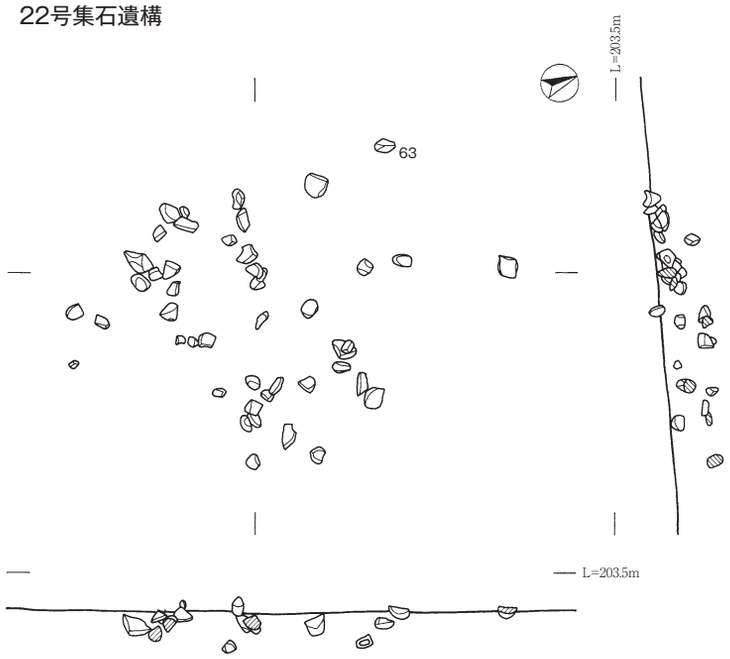
29 号集石遺構（第 82 図）

Ｌ-８区で検出した。長軸 75cm・短軸 50cmの範囲に礫

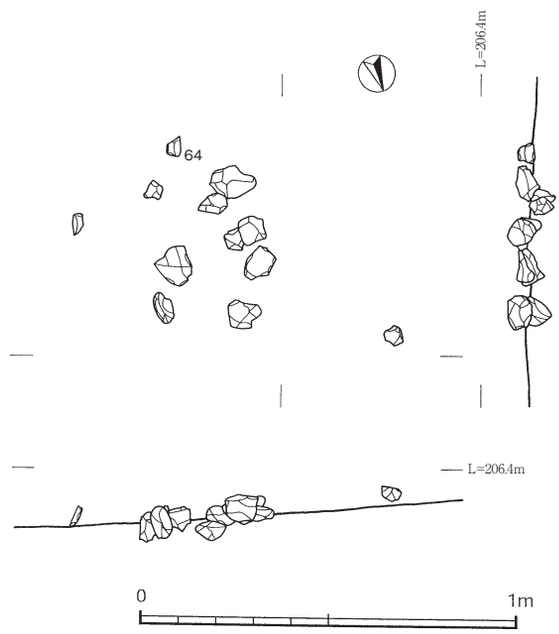


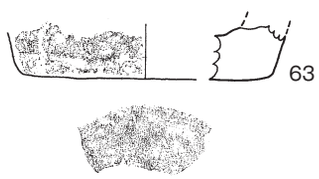
第 80 図　18～21 号集石遺構，18 号集石遺構出土遺物

22号集石遺構

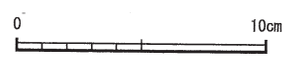


23号集石遺構





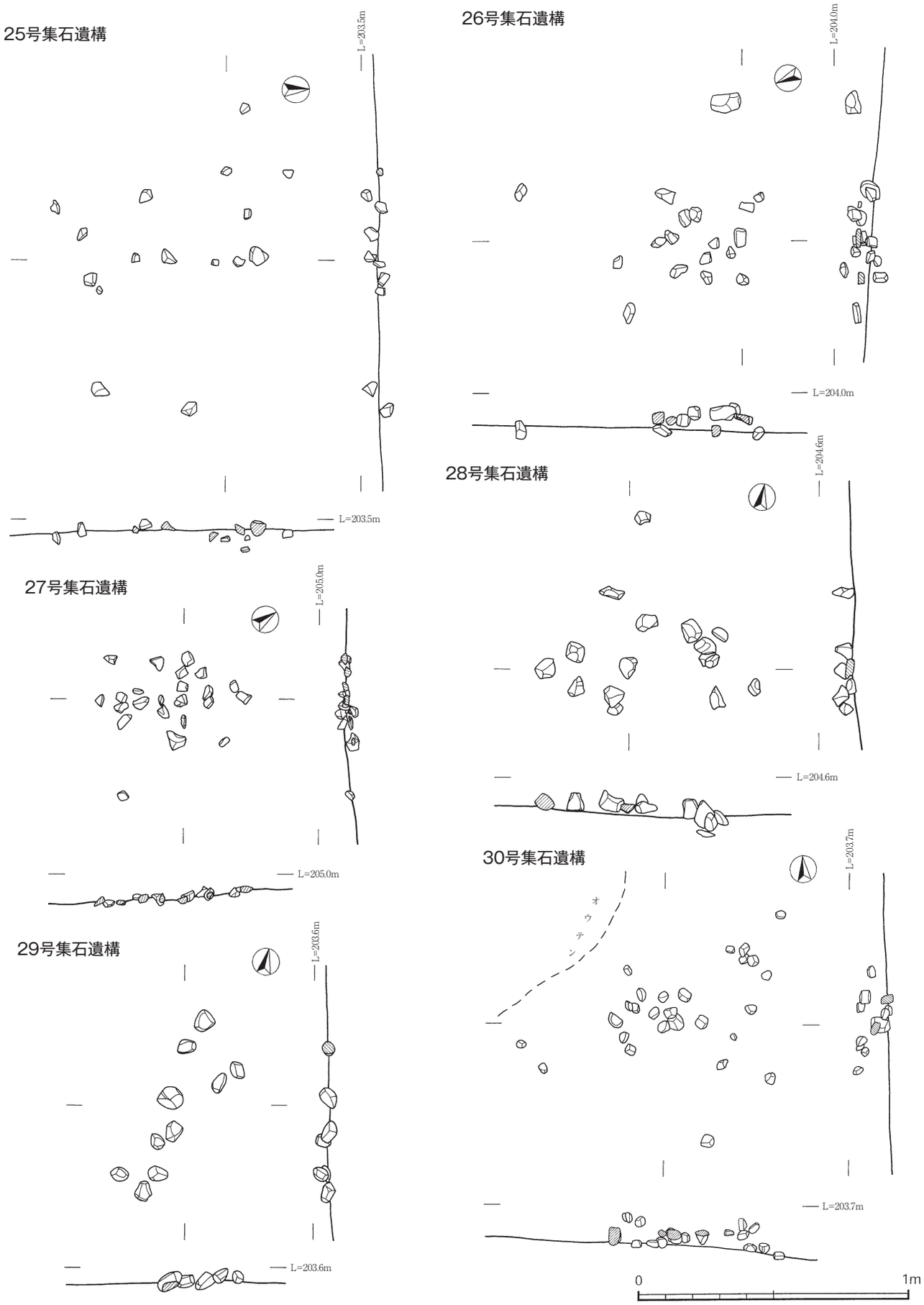




24号集石遺構



第 81 図　22～23 号集石遺構・出土遺物，24 号集石遺構



第 82 図　25～30 号集石遺構

が広がる。礫数は 10 個と少なく，重なることなく広がる。構成礫は５～８㎝大のもので，表面に被熱による赤化がわずかにみられるものが多いが，破砕礫は少ない。

関連する遺物は出土していない。

30 号集石遺構（第 82 図）

Ｆ-10 区で検出した。長軸約 100㎝・短軸約 90㎝の範囲に礫が広がる。北西側に地層横転があり，その影響で礫も散在した可能性がある。一部礫がやや重なる部分があるが，全体的に密度は低い。構成礫は５㎝程の大きさが主体である。

関連する遺物は出土していない。

31 号集石遺構（第 83 図）

Ｅ-11 区で検出した。長軸約 75㎝・短軸約 60㎝の範囲に角礫が広がる。礫同士の重なりはほとんどなく，礫同士にはレベル差がある。構成礫は５㎝程の大きさの角礫が主体である。破砕礫の中心部は赤色や紫色に発色しており，被熱の影響をかなり受けたと考えられる。

関連する遺物は出土していない。

32 号集石遺構（第 83 図）

Ｇ-３区で検出した。近接して地層横転が確認されており，その影響でやや礫が動いている可能性もある。周辺で集石遺構が数基確認されている。長軸 90㎝・短軸 60㎝の範囲に安山岩の角礫が広がる。礫同士の重なりはなく，礫間にはレベル差がある。構成礫は 10㎝程と５㎝程の大きさのものである。表面は被熱により赤化し，一部劣化している。

関連する遺物は出土していない。

33 号集石遺構（第 83 図）

Ｌ-16 区で検出した。長軸 70㎝・短軸 65㎝の範囲に広がる。構成礫は 10㎝大と比較的大型のものでそろっている。掘り込みはなく，炭化物も出土していない。石材は全て安山岩であった。

関連する遺物は出土していない。

34 号集石遺構（第 83 図）

Ｉ-15 区で検出した。長軸約 80㎝・短軸約 60㎝の範囲に礫が広がる。構成礫は 10㎝程の大きさのものが中心である。平面的に礫の重なりはほとんどなく，礫数も９点と小規模である。

関連する遺物は出土していない。

35 号集石遺構（第 83 図）

Ｉ-12 区で検出した。周辺では 36 号・97 号集石遺構が検出されている。長軸約 80㎝・短軸 70㎝の範囲に礫が広がる。構成礫は５㎝程の大きさのものが主体であり，間に小型の礫が含まれる。礫間には一部桜島起源の火山灰であるＰ 13 が混ざっていた。礫は安山岩と凝灰岩の角礫を主体とし，被熱の痕跡が認められるものも多い。

関連する遺物は出土していない。

36 号集石遺構（第 83 図）

Ｉ-12 区で検出した。長軸約 75㎝・短軸約 50㎝の範囲に広がるが，間に空白域を持って５㎝大と 10㎝大の礫が６点と４点に分かれて検出した。構成礫の大きさがほぼ同じであるため，一つの集石遺構と判断した。石材は全て安山岩で，礫同士が接合できるものはなかった。

関連する遺物は出土していない。

37 号集石遺構（第 84 図）

Ｊ-17 区で検出した。約 80㎝の範囲に礫が広がり，礫同士の重なりはほとんどみられない。また，中央部には空白部分がある。構成礫は 10㎝大の礫が主体である。110 号集石遺構よりも 50㎝ほど上位で検出されており，同一の集石遺構の可能性も想定されたが，礫の検出面にレベル差があるため，異なる集石遺構として扱った。

関連する遺物は出土していない。

38 号集石遺構（第 84 図）

Ｉ-18 区で検出した。約 60㎝の範囲に礫が広がる。構成礫は大きさは５～８㎝程の安山岩が中心であり，被熱による赤化や破砕が数点みられた。

石皿片と思われる破片が，数点構成礫として転用されていた。

39 号集石遺構（第 84 図）

Ｇ-23 区で検出した。長軸約 65㎝・短軸約 35㎝の範囲に礫が広がる。10㎝程の大型の被熱破砕礫で構成されるが，礫数は 10 点と小規模である。礫同士の重なりもほとんどない。

関連する遺物は出土していない。

40 号集石遺構（第 84 図）

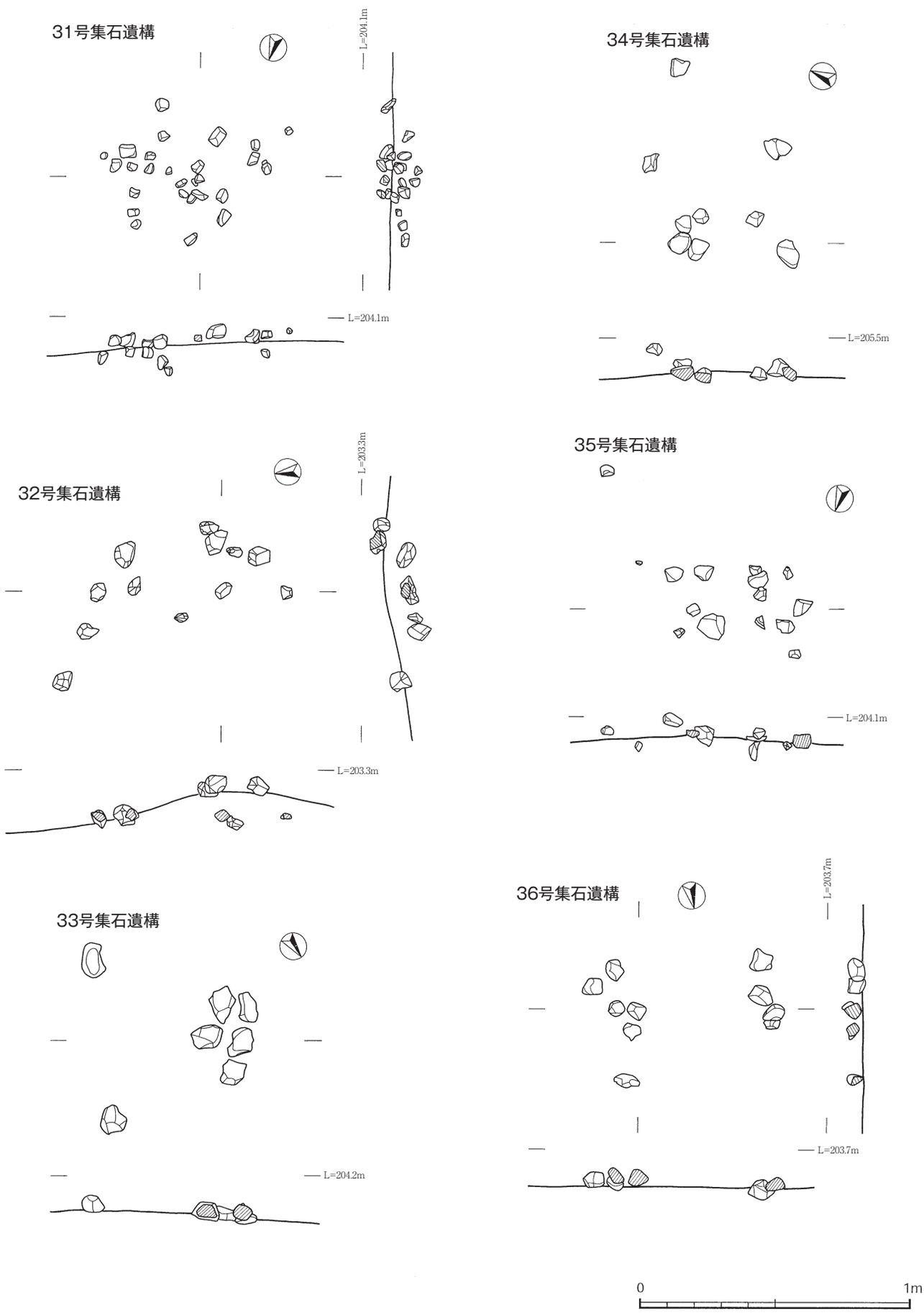
Ｊ-17 区で検出した。長軸 55㎝・短軸 40㎝の範囲に礫が広がるが，礫同士もレベル差があるなど，まとまりはみられない。構成礫は 10㎝程の大きさのものが主体である。下位から 121 号集石遺構が検出されたが，検出面にレベル差があるため，異なる集石遺構として扱った。

関連する遺物は出土していない。

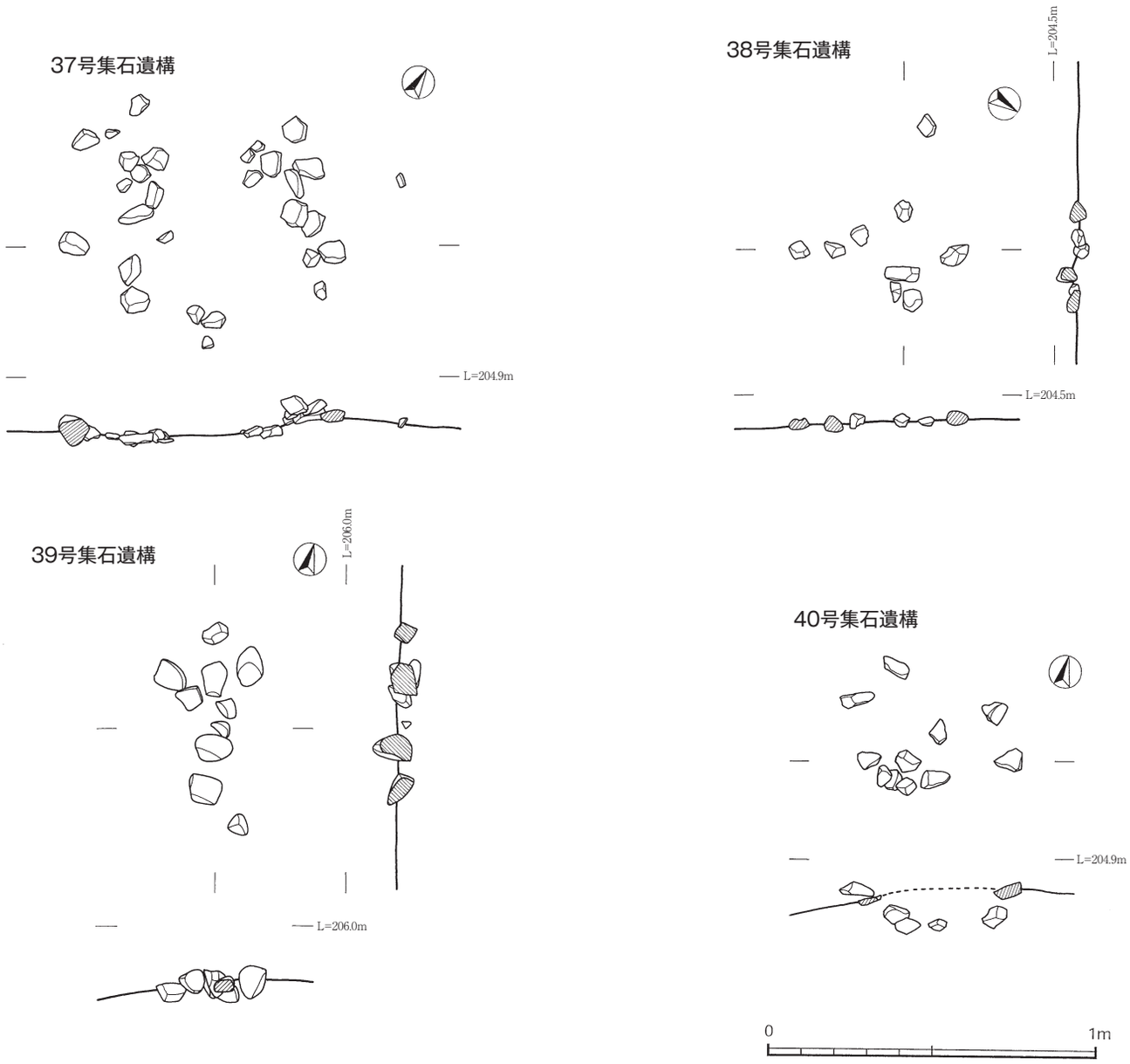
41 号集石遺構（第 85 図）

Ｋ-23 区で検出した。北側の谷へと落ちる崖面の端部で谷方向の傾斜面に位置し，若干層位が乱れている。大きさ５～８㎝程の礫が，ほとんど重ならない状態で広がる。傾斜面に位置することから礫が散らばった可能性も考えられる。

集石遺構の外縁付近で口縁部片１点が出土した。これは包含層出土の土器片と接合した。65 は口縁部から胴部まで残存する。頸部から口縁部は外反し，胴部は張り，波状口縁となる。口唇部は平坦面を作り刻みを施す。波頂部外面には突帯を垂下させ刻みを施す。また，口縁部端と頸部には瘤を貼り付ける。口縁部には縦位の沈線，頸部には３～４本の沈線を横位に巡らす。胴部には「く」の字状の沈線を数段配置し，その上に斜位の長い沈線を



第 83 図　31～36 号集石遺構



第 84 図　37～40 号集石遺構

上書きする。XIV類土器に比定される。

【Ⅰb類】

本類は集石遺構を構成する礫が集中せず，掘り込みとの関係性が不明確な一群である。

42 号集石遺構（第 86 図）

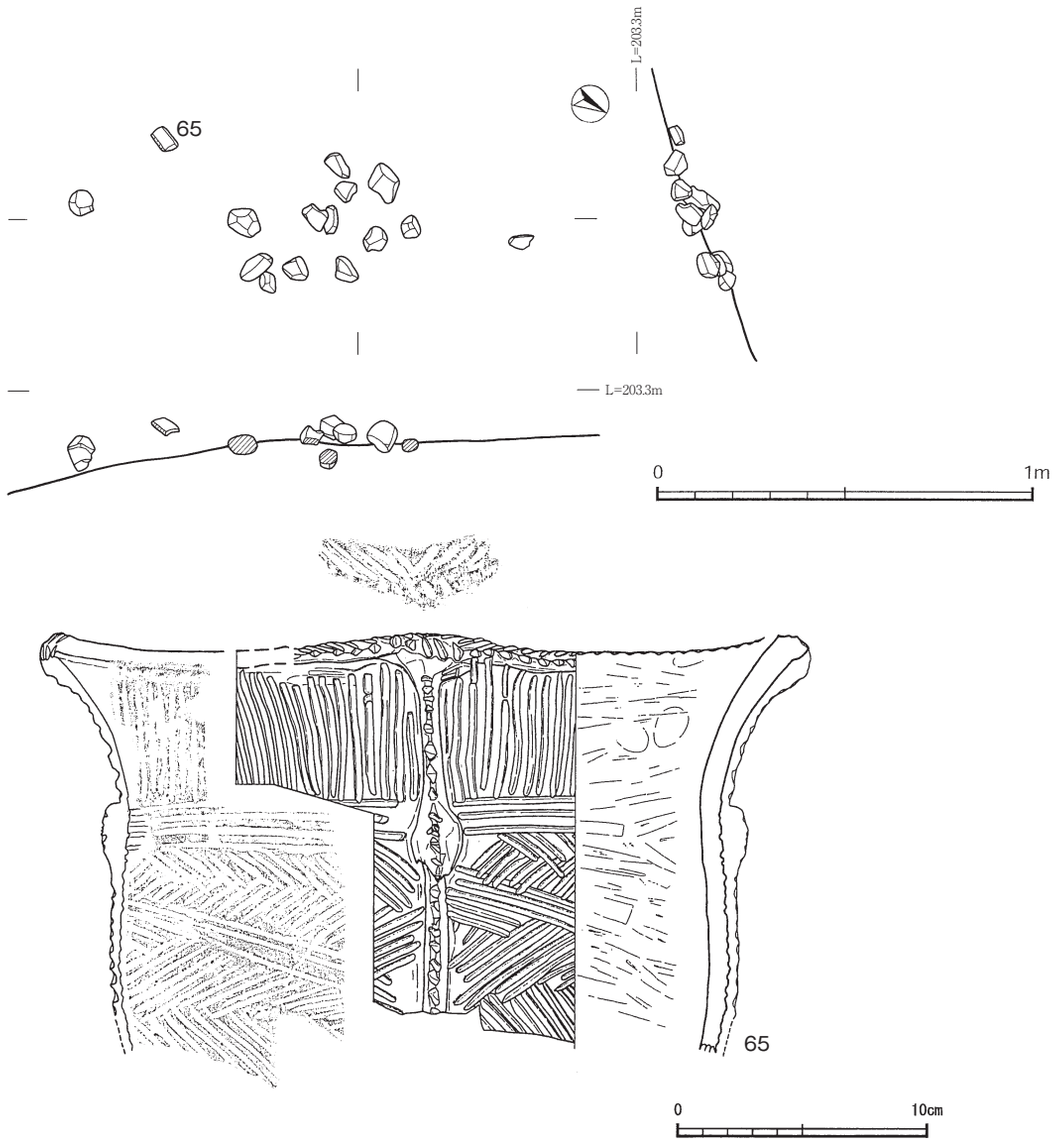
M-21 区で検出した。台地が東側へと下り始める緩やかな斜面上に位置する。検出面はⅥ層とⅦ層のほぼ境界部分にあたり，両者の土層が一部混在していた。長軸 80cm・短軸 77cmの範囲に礫が散在する。構成礫は５cm程の大きさのものが中心であり，10cm程の礫が少量含まれる。この集石遺構の南側に隣接して径約 80cm･深さ 16cmの皿状を呈する掘り込みを検出した。本遺跡検出の集石遺構の掘り込み内には礫が多く含まれるが，42 号集石遺構に隣接する掘り込み内にはほとんど含まれていないこと，また，掘り込みと集石遺構を構成する礫にレベル差があることなどから，掘り込みを伴う集石遺構であるとは判断できなかった。

掘り込みの埋土は，黄色パミスの茶褐色土と黒褐色土が混在する土である。

関連する遺物は出土していない。

【Ⅱａ類】

本類は集石遺構を構成する礫が比較的集中し，また，



第 85 図　41 号集石遺構・出土遺物

重層的であり，掘り込みの存在が想定できる一群である。

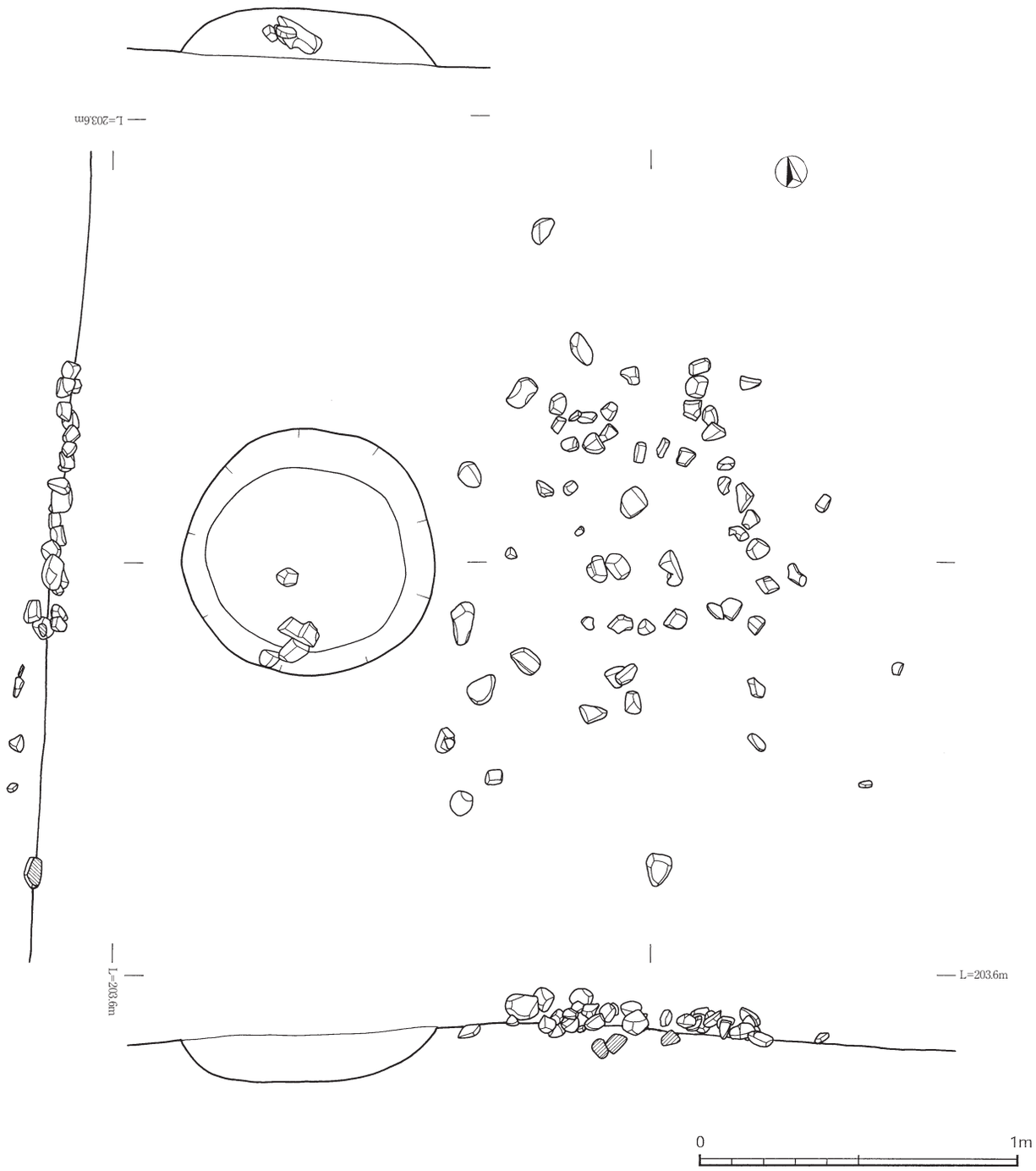
43 号集石遺構（第 87 図）

Ⅰ-22 区で検出した。約 200cmの範囲に礫は広がるが，中心は 50cmほどの範囲であり，礫の堆積も重層的である。また，調査時は確認できなかったが，礫の堆積状況から逆三角形状の掘り込みがあった可能性がある。礫間の黒色土に黄橙色パミスが混在していた。構成礫は５～８cm程のものが主体を占め，ほとんどが安山岩であった。

関連する遺物は，散在する礫に混じって土器片３点と石製品及び安山岩とチャートのチップが出土した。66 は底部片である。胴部への立ち上がり部分の接合面で剥落している。器壁は薄く，底面も平坦である。全体的にやや摩滅している。色調は明るく，胎土も粒子が細かい。特徴から，早期後葉のものと考えられる。また，無文の土器片と貝殻刺突文を斜位に組み合わせ文様を構成する土器片も確認されている。67 は安山岩製の石製品である。形状から，「アサリ形石製品」と呼称する。表面左側は厚みをもたせ，密な剥離調整を行う一方で，右側は緩やかな弧を描き，側縁調整の剥離単位も大きい。裏面は表面よりは平坦であるが，厚みを意識した剥離調整である。使用痕は無く，一般的な剥片石器とは性格が異なり，実用的な製品ではないと考えられる。この石製品はほとんど類例がなく，本遺跡でも１点のみの出土である。

44 号集石遺構（第 88 図）

Ｌ-19 区で検出した。約 100cmの範囲に礫が集中する。中心部分は礫の堆積がより重層的であり，本来は皿状の掘り込みを有していた可能性が高い。構成礫は５～８cm程の礫が主体をなし，それよりも一回り大きい 10cmを超



第 86 図　42 号集石遺構

える礫が数点含まれる。

１点は磨石片と思われるものが転用されていた。そのほかの関連する遺物は，出土していない。

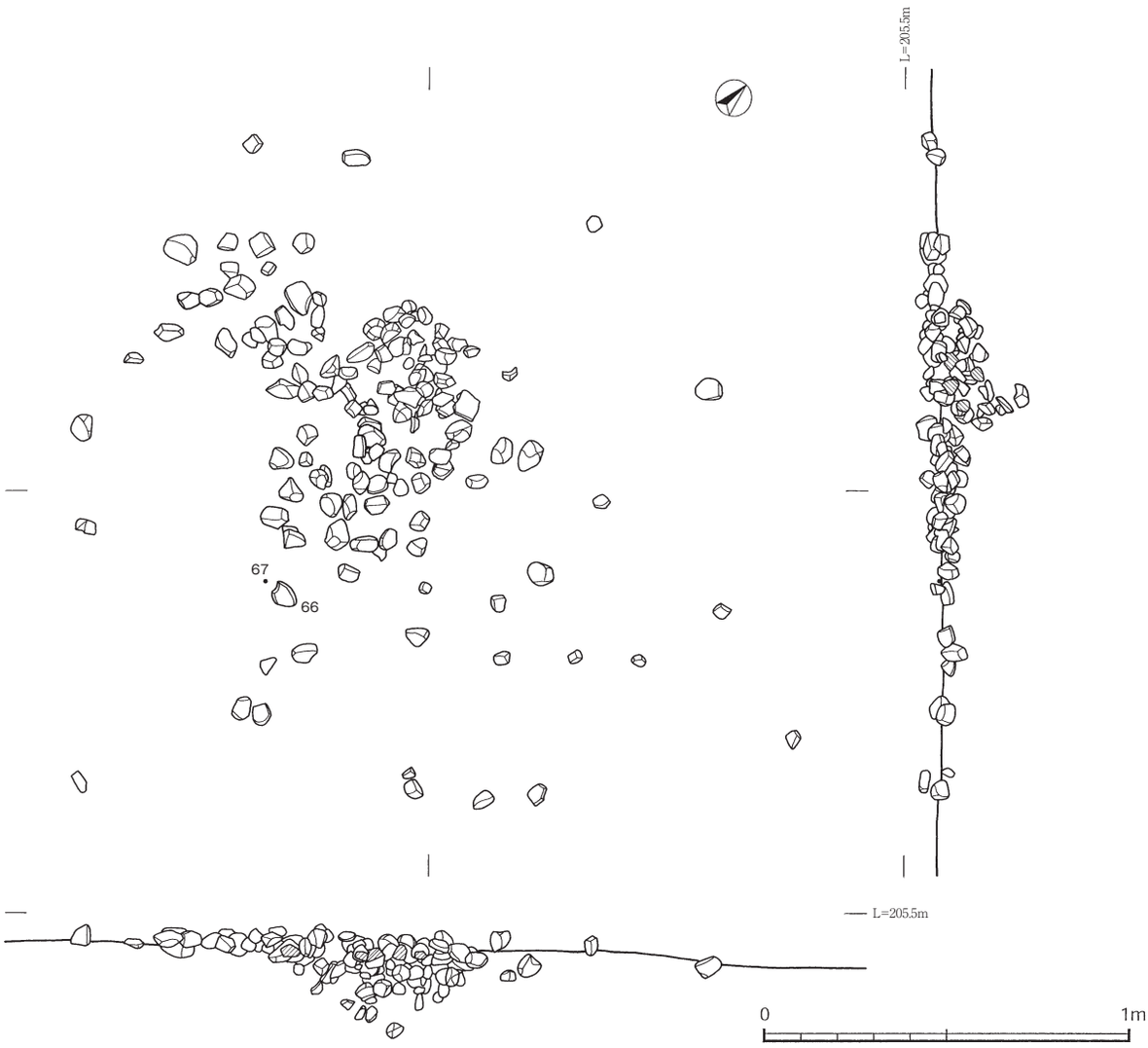
45 号集石遺構（第 88 図）

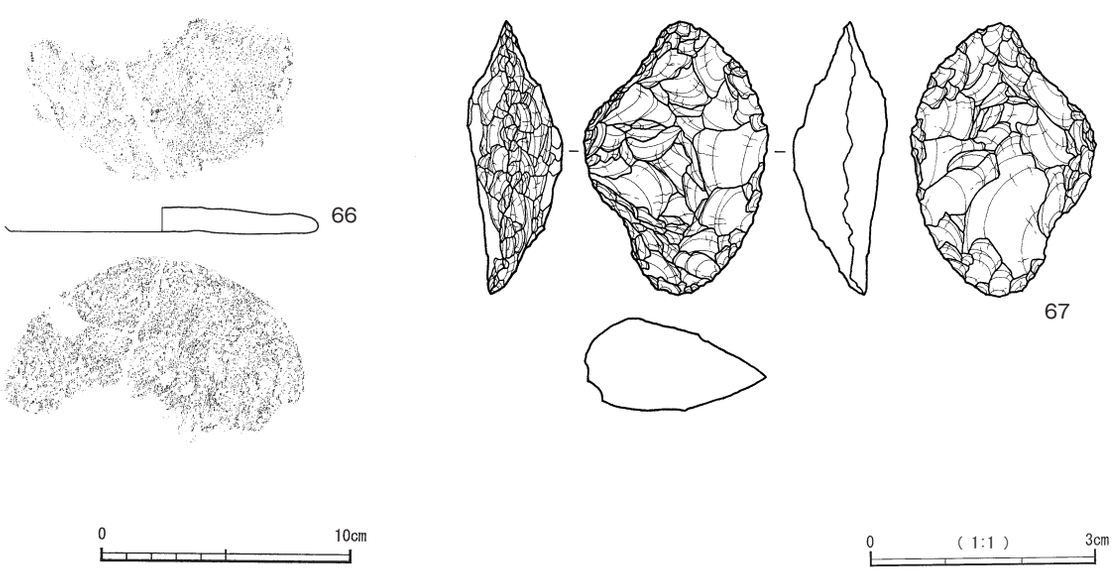
Ｆ-13 区で検出した。約 70cmの範囲に礫がまとまる。礫の重なりは浅い皿状を呈するが，明確な掘り込みは確認されなかった。構成礫は５cm程の大きさのものが主体をなす。

集石遺構内から，Ｖ類土器と考えられる綾杉状の条痕を有する土器の胴部小片が隣接して出土した。

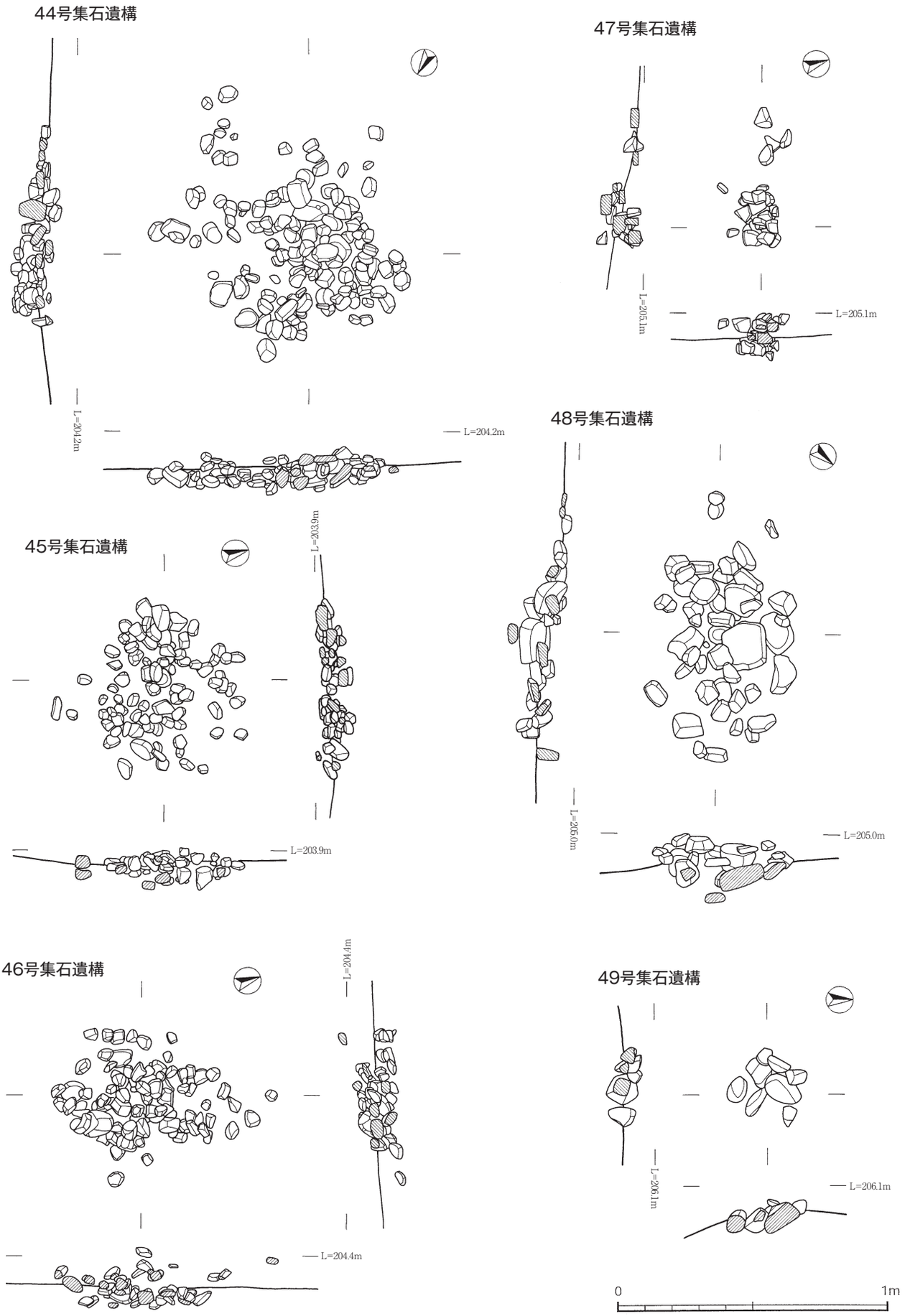
46 号集石遺構（第 88 図）

Ｄ-12 区で検出した。長軸 85cm・短軸 60cmの範囲に礫が集中する。礫同士にも重なりがあるため，掘り込みを有していた可能性がある。構成礫は５cm程の大きさが主





第 87 図　43 号集石遺構・出土遺物



第 88 図　44～49 号集石遺構

体であり，数点大型の礫を含む。礫は被熱により変色し，破砕したり脆くなったりして崩壊するものがある。礫間には炭化物が多く検出された。

関連する遺物は出土していない。

47 号集石遺構（第 88 図）

Ｊ-21 区で検出した。長軸約 50cm・短軸約 25cmの範囲に礫がまとまる。中心部の礫が重層的であり掘り込みを伴っていた可能性も想定されるが，樹痕の重なりもあり集石遺構に影響した可能性もある。構成礫は５cm程の礫が中心で，被熱破砕礫はない。

関連する遺物は，XX類の土器小片が出土した。その他，磨石片と思われる礫が集石の構成礫に転用されていた。

48 号集石遺構（第 88 図）

Ｋ-21 区で検出した。長軸 100cm・短軸約 60cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は 10cm程の大型の礫が主体であるが，20cm程の平たい礫も下位に数点確認された。礫の重なりが重層的であり，より大型の礫が下位に多い点から掘り込みを有していた可能性があるが，確認できなかった。

関連する遺物は，XX類土器の小片が１点出土した。

49 号集石遺構（第 88 図）

Ｇ-22 区で検出した。約 30cmの範囲に 10cm大の円礫がまとまる。礫は他の集石よりも大きめのものが主体をなすが，総数８点と小規模である。被熱の痕跡も弱く，破砕などはみられない。

関連する遺物は出土していない。

【Ⅱｂ類】

本類は集石遺構を構成する礫が比較的集中するが，礫の堆積が平面的な一群である。

50 号集石遺構（第 89 図）

Ｅ-20 区で検出した。133 号集石遺構に隣接する。長軸約 185cm・短軸約 160cmの範囲に礫が広がる。一部礫が重なる部分があるが，掘り込みは確認できなかった。構成礫は５～８cm程の大きさのものが主体をなす。

関連する遺物は，Ⅺ類土器の破片，Ⅻ類土器と思われる山形押型文を有する薄手土器の小片が出土した。68 は胴部片で，Ⅺ類土器と考えられる。胎土は白色粒子が目立つ粗い胎土で，内面にもケズリ調整がみられる。外面には径５㎜大の楕円押型文が施される。また，構成礫のうち数点は，石皿または磨石の破片と考えられるものが転用されていた。さらに，黒曜石とチャートのチップも出土した。

51 号集石遺構（第 89 図）

Ｋ-21 区で検出した。長軸約 160cm・短軸約 140cmの範囲に 250 点を超える礫がまとまる。構成礫は５cm程の大きさが中心であり，一部に 10～15cm大の礫も含まれる。礫の堆積はあまり重層的ではなく，平面的に広がる。

69 はホルンフェルス製の磨・敲石である。下・右・左側面に敲打痕が観察できるが，左側面は欠損している。石材の性質もあり，敲打痕は他の石材の磨・敲石類に比べて浅い。表面にはススが付着している。その他構成礫のうち１点は，磨・敲石が転用されたものであった。

52 号集石遺構（第 90 図）

Ｄ-19 区で検出した。約 140cm前後の範囲に礫が平面的に広がる。中心部分は礫の密度が低く，外縁部分ほど密度が高い。使用後に中心部分から礫が持ち出された可能性もある。構成礫は５～８cm程の大きさのものが中心であり，10cm大のものもまばらに含まれる。

関連する遺物は，チャートと安山岩のチップや楕円押型文土器の小片が出土した。構成礫の一部に磨石や石皿を転用したと思われる破片や軽石が含まれていた。

53 号集石遺構（第 90 図）

Ｆ-13 区の北東から南西方向への傾斜面で検出した。約 80cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は５cm大のものが中心である。平面的な礫の重なりはあまりなく，礫の同士のレベル差もある。礫間には黄橙色の２cm大のパミスを含む黒色土が堆積していた。構成礫は５cm程の小型の礫が中心である。

関連する遺物は出土していない。

54 号集石遺構（第 90 図）

Ｅ-11 区で検出した。約 60cm前後の範囲に礫がまとまる。中心部分はやや礫の重なりがみられるが，重層的ではない。構成礫は５cm程の大きさが主体である。

関連する遺物は出土していない。

55 号集石遺構（第 91 図）

Ｄ-16 区で検出した。長軸約 130cm・短軸約 80cmの範囲に礫がまとまる。礫同士の重なりはほとんどなく，西側の礫がややばらけたような形状である。構成礫は５cm前後の大きさの安山岩が主体をなす。

関連する遺物は出土していない。

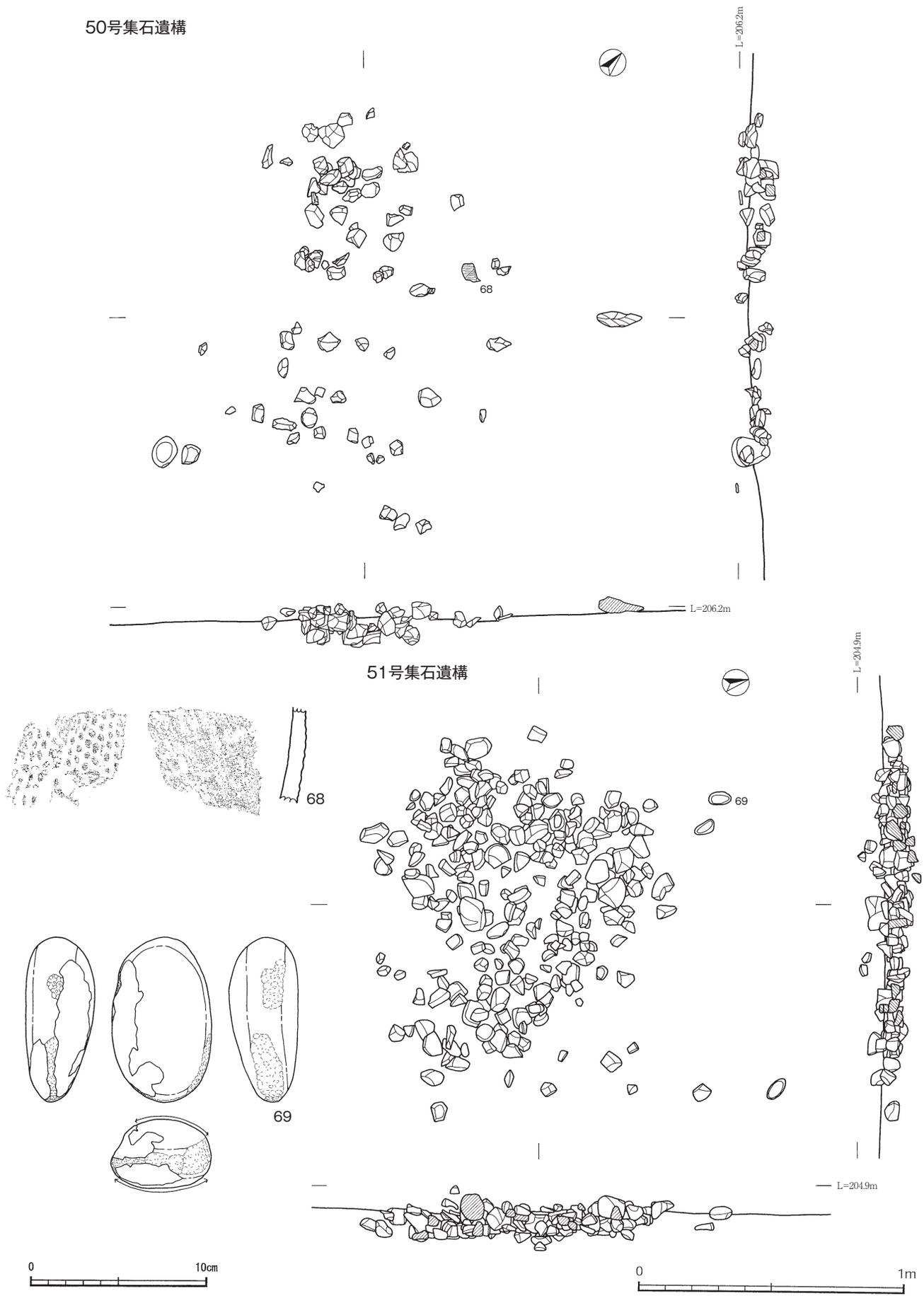
56 号集石遺構（第 91 図）

Ｍ-14 区で検出した。長軸約 125cm・短軸約 90cmを測る。礫間には桜島起源の火山灰（Ｐ 13）と思われる黄白色パミスが全体に混ざっていた。構成礫は 10cm程の礫が主体を占め，中心及び周辺に 15cmを超える大型の礫が分布する。安山岩の角礫が多く，半数ほどは被熱していた。

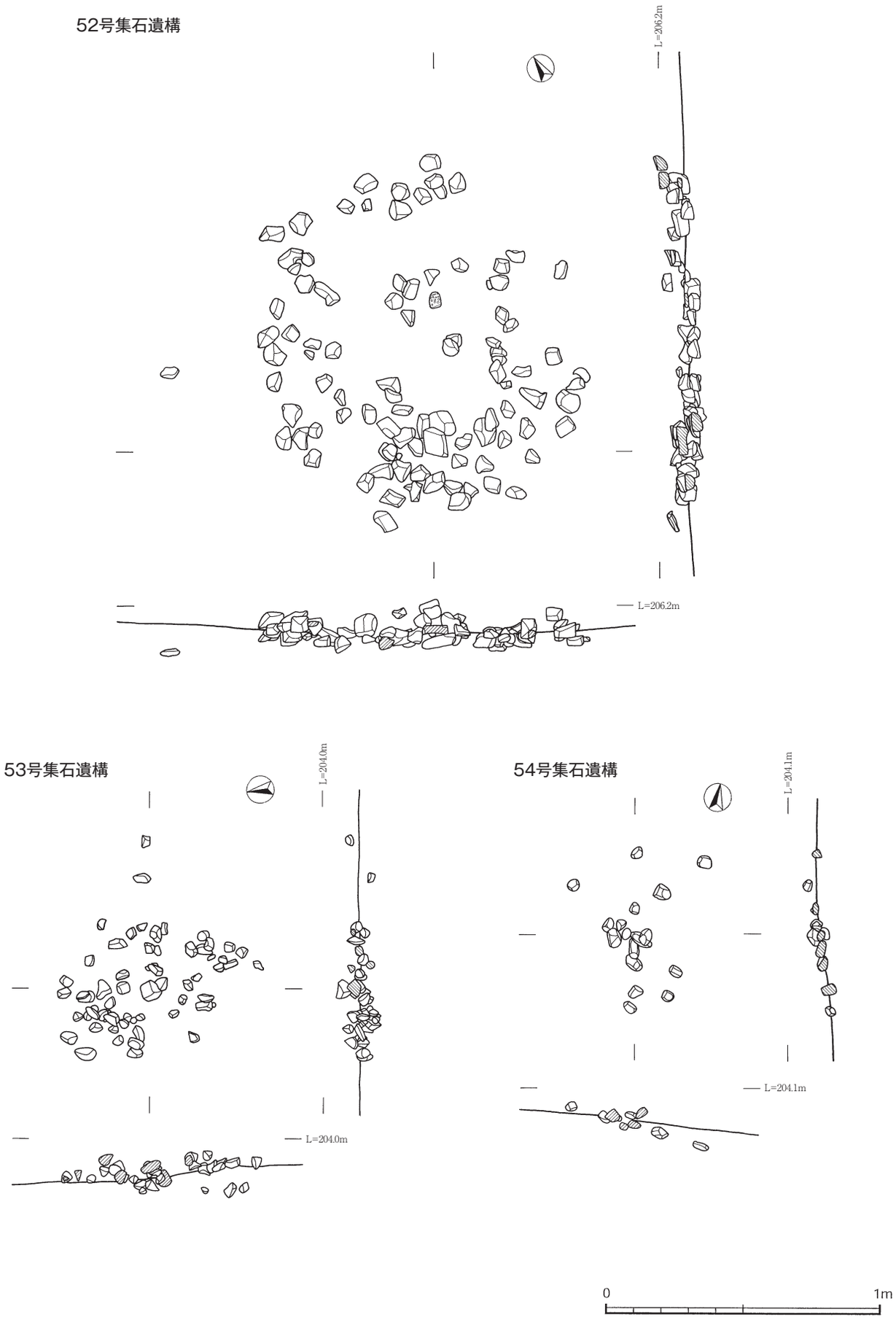
周辺でⅥ類土器の胴部片が出土しているが，集石遺構の中心部からやや離れており，遺構との関連は明確ではない。

57 号集石遺構（第 91 図）

Ｅ-12・13 区で検出した。長軸約 120cm・短軸約 100cmの範囲に礫がまとまる。中心部は礫が重なっているが，掘り込みは検出されなかった。構成礫は 10～15cm程の大型のものと，５cm程のものがある。礫は被熱により変



第 89 図　50～51 号集石遺構・出土遺物



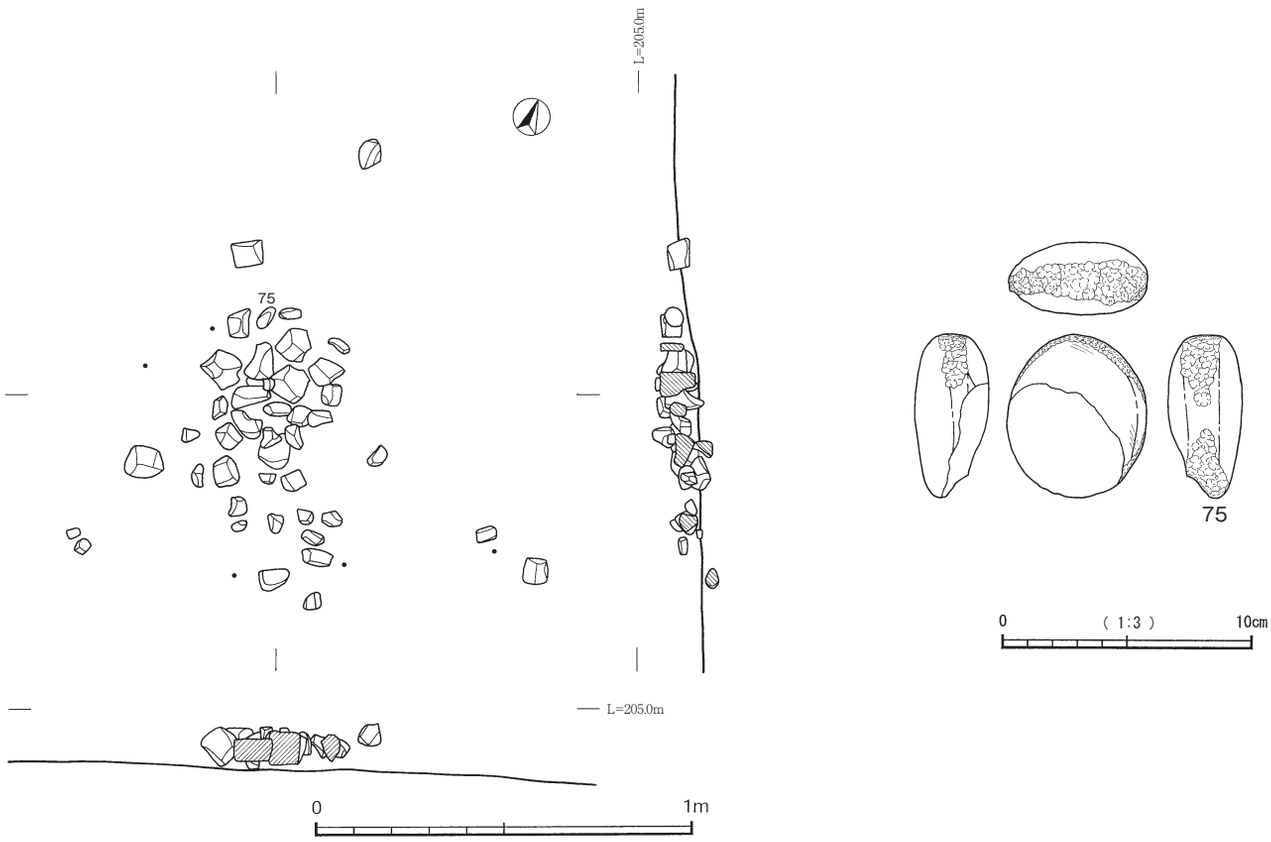
第 90 図　52～54 号集石遺構



第 91 図　55～57 号集石遺構



第 92 図　58～59 号集石遺構・出土遺物



第 93 図　60 号集石遺構・出土遺物

色し，破砕したものも多い。

構成礫のうち１点は，石皿と考えられる破片が転用されていた。その他の関連する遺物は出土していない。

58 号集石遺構（第 92 図）

Ｌ-18 区で検出した。長軸約 150cm・短軸約 90cmの範囲に礫が散在する。中心部は礫が重なっているが，重層的ではない。構成礫は５～８cm程のものが主体であり，数点 10cmを超える。

磨・敲石や磨石及び石皿等の石器が，構成礫として多く転用されている。残りが比較的良い４点を図化した。70 は凝灰岩製の磨・敲石である。全ての側面で敲打痕が観察でき，中でも上下側面の敲打の密度が高い。特に，下面は連続した敲打により端部が平坦になっている。上下面は磨面であり，表面が平滑である。71 は凝灰岩製の磨・敲石である。非常に緻密な構造で，表面も平滑である。ほぼ半分が欠損しているが，左側面の最大幅部分に弱い敲打が認められる。上・下面は磨面であり，表面が平滑である。表面にススが付着している。72 は凝灰岩製の扁平な礫を素材とした磨・敲石である。敲打痕が左右側面の上部，及び下側面に確認できるが，その密度はさほど高くない。上・下面は磨面であり，表面は平滑である。73 は凝灰岩製の磨・敲石である。３分の２程が欠損する。下面に弱い敲打痕が観察できる。上・下面は磨面であり，表面は平滑である。その他に，集石遺構内から頁岩のチップが出土した。

59 号集石遺構（第 92 図）

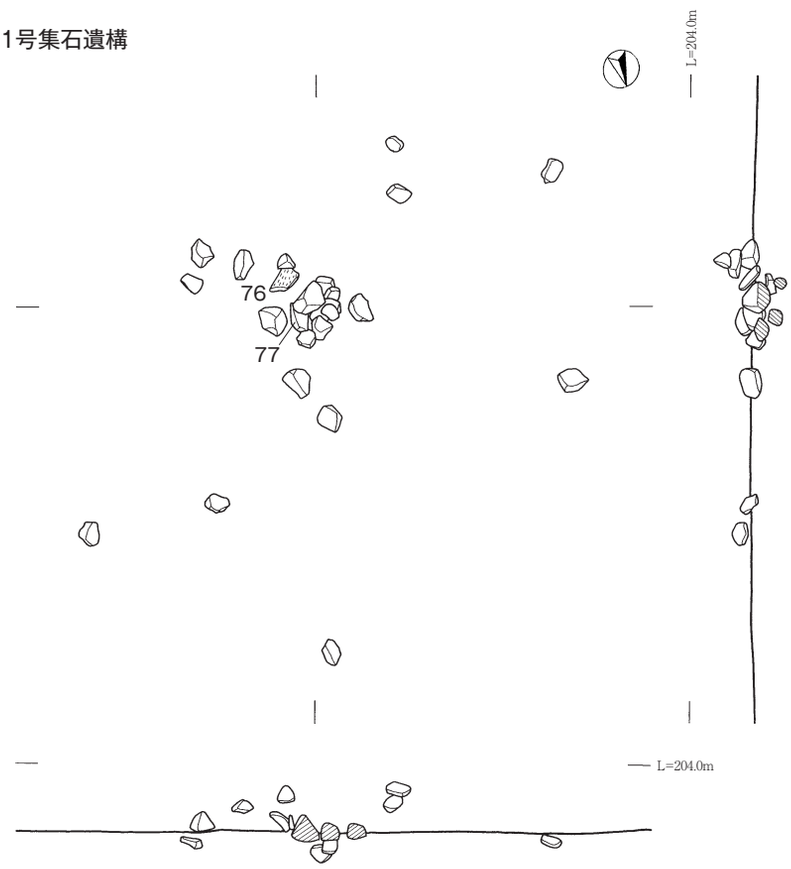
Ｆ-23 区で検出した。約 50cmの範囲に 10～15cm程の大きさの被熱破砕礫がまとまる。礫の重なりはほとんどなく，礫数も 12 点と小規模である。

74 は構成礫のうちの１点で，磨・敲石が転用されたものであった。凝灰岩を使用し，右半は欠損している。残存する部分の側面には明瞭な敲打痕が観察でき，特に左側面上部は敲打も強く密であり，原形を保っていない。破断面が赤化及び黒変しており，集石遺構の構成礫として転用された際の被熱の影響と考えられる。それ以外に関連する遺物は出土していない。

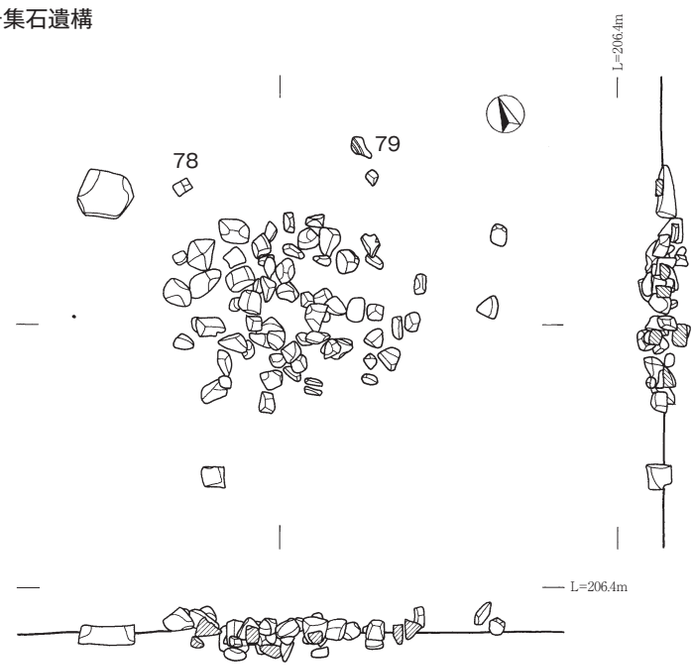
60 号集石遺構（第 93 図）

Ｋ-21 号で検出した。約 120cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は５cm程と 10cm程の礫が平面的に広がり，密度もやや低い。ほとんどは安山岩であり，一部軽石や花崗岩が含まれていた。全体的に淡く赤化したものが多かったが，明瞭に赤化し破砕したものはなかった。炭化物が中心部に多くみられ，その範囲にはアカホヤ火山灰のパミス粒が入り込んでいた。

61号集石遺構



62号集石遺構





第 94 図　61～62 号集石遺構



第 95 図　61～62 号集石遺構出土遺物

関連する遺物は，礫の周囲から黒曜石・チャート・安山岩のチップと，XX類土器の小片が出土した。また，磨・敲石が構成礫として転用されていた。75 は凝灰岩製の磨・敲石である。本遺跡出土の磨・敲石の中でも最も小型の類に含まれる。下面から３分の１程が剥離したように欠損している。残存する全ての側面に帯状の敲打痕が明瞭に観察できる。

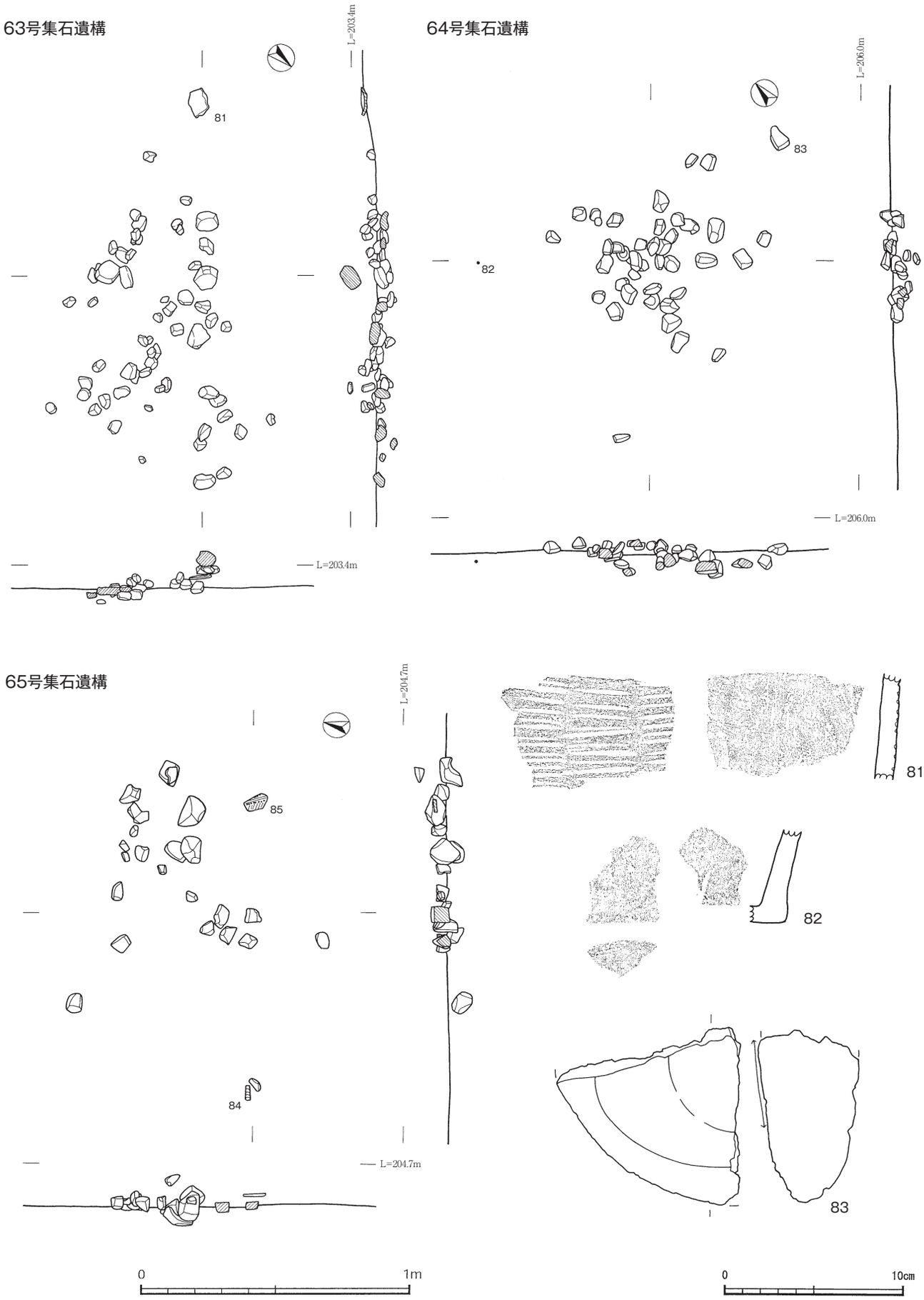
61 号集石遺構（第 94・95 図）

K-14 区で検出した。約 140cmの範囲に礫がまとまり，中心は礫の密度がやや高い。構成礫は 10cm大である。

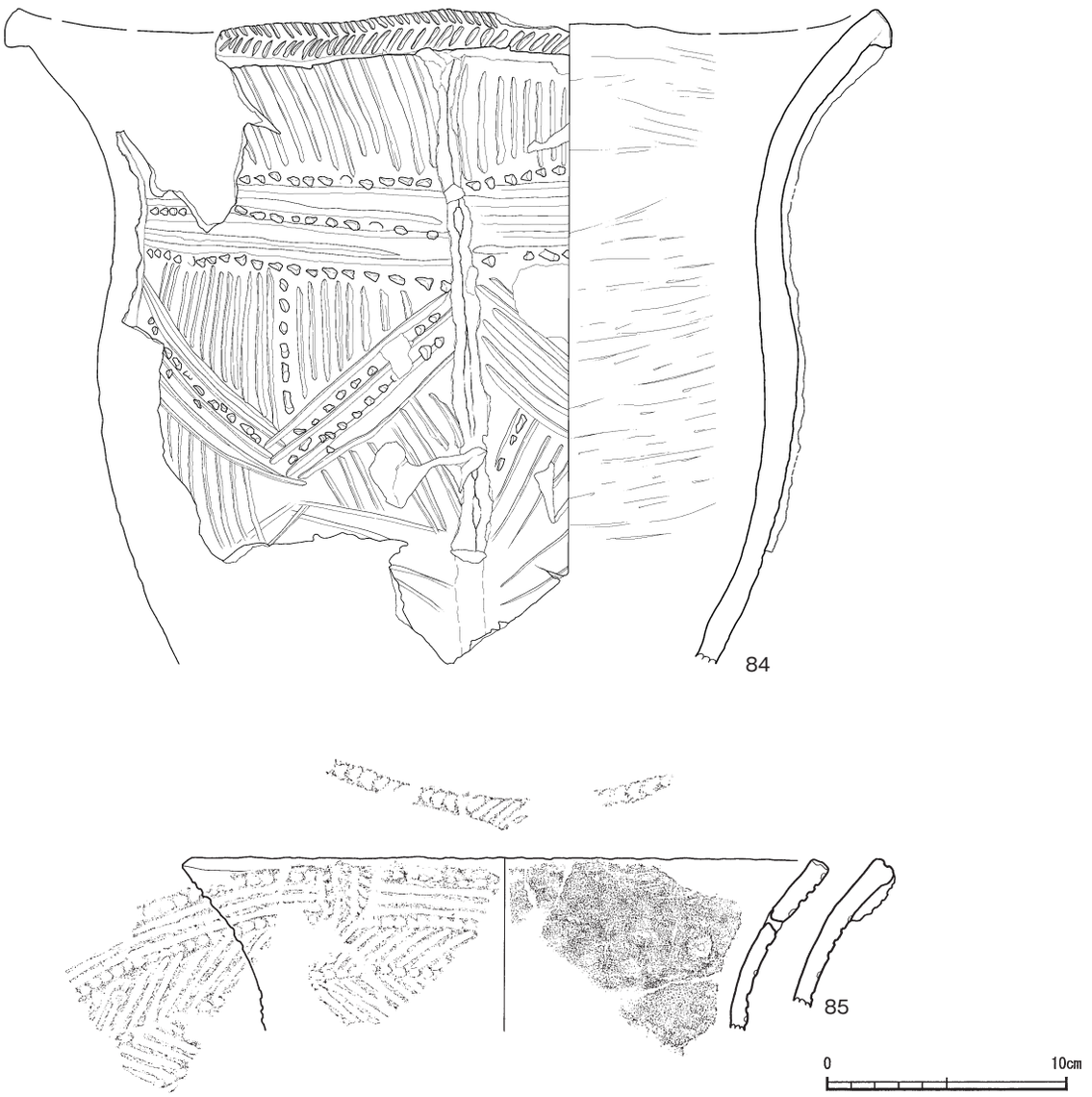
関連する遺物は，集中部から土器片が出土した。76 は胴部片である。全体的に厚く，胎土も比較的粗い。外面には縦位の貝殻腹縁刺突文が施される。特徴からⅥ類土器と考えられる。77 は胴部片である。1.5cmを超える厚みを有し，下端の破断面に接合痕を残す。白色粒が目立つ胎土で，外面は丁寧なナデ調整であるが，内面はナデ調整が弱くザラザラとした質感である。Ｘ類土器に比定される。

62 号集石遺構（第 94・95 図）

F-23 区で検出した。径 60cm前後の範囲に礫がまとまり，その周辺に数個の礫が散在する。礫が重なる部分もあるが，掘り込みは確認されなかった。構成礫は５cm程の大きさが主体を占め，被熱により赤化はしているが破砕礫はみられない。集石遺構内からは炭化物も確認され



第 96 図　63～64 号集石遺構・出土遺物，65 号集石遺構



第 97 図　65 号集石遺構出土遺物

た。

関連する遺物は，周辺から２点の土器片が出土した。78 は口縁部片である。頸部から緩やかに外反する器形と想定される。内外面とも器面は丁寧なナデ調整であり，口唇部は丸く整形されている。外面には不規則な弧状の撚糸文が施される。Ⅺ類土器に比定される。79 は集石遺構内出土の土器片と包含層出土の土器片が接合したものである。口縁部から胴部が残存する。頸部に明瞭な稜をもち，口縁部はラッパ状に大きく外反する。胴部は直線状にすぼまるため，胴部径よりも底径が小さいと考えられる。口縁部は緩やかな波状口縁であり，端部はやや丸く仕上げられ，「ハ」の字状の刻みが施される。口縁部は横位の沈線文，胴部は幅約１㎝の帯状で縦位の網目撚糸文の上から横位の沈線文が施される。胎土は黄褐色・白色粒が多量に含まれる。80 は包含層出土であるが，79 と同一個体と思われる。いずれも，XV類土器に比定される。また，隣接して約 15㎝の扁平な礫が１点出土し，形状から石皿片を転用した可能性がある。その他，頁岩のチップが１点出土した。

63 号集石遺構（第 96 図）

M-17 区，東側へやや傾斜する位置で検出した。長軸約 125㎝・短軸約 85㎝の範囲に礫がまとまる。構成礫は５㎝程の小型の礫が大半であるが，一部 10㎝大の礫が含まれる。

関連する遺物は，礫の間にXX類の土器小片，及び周囲からⅥ類土器と考えられる土器が１点出土した。81 は胴部小片である。内面はケズリ調整が明瞭にみられる。ほぼ直線的な貝殻刺突文が横位に施される。胎土はやや

粗く，石英及び白色粒によりざらついた質感である。色調は比較的暗めである。Ⅵ類土器の範疇に含まれると考えられる。

64 号集石遺構（第 96 図）

G-22 区で検出した。約 100cmの範囲に礫が集中し，平面的にはまとまりをもっているが，それぞれの礫にはレベル差がある。構成礫は５cm前後の大きさの角礫が主体をなす。炭化物が散在していた。

集石遺構内から黒曜石（日東産）のフレイクが１点，周囲から早期後葉と考えられる土器片，及び構成礫として転用された石皿が出土した。82 は底部片である。内外面とも丁寧なナデ調整であり，内面には明瞭な稜を有する。胎土が特徴的であり，石英・長石類の角礫が多量に含まれる。小片のため，詳細は判断できなかった。83 は凝灰岩製の石皿片である。４分の１程しか残存しない。表面にわずかに作業面がみられるが，ほとんど磨耗しておらず，使用頻度は低いと考えられる。表面にススが付着しており，被熱によるものと考えられる。

65 号集石遺構（第 96・97 図）

K-20 区で検出した。約 100cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は 10～15cm大の角礫が主体をなし，間に小さな礫が含まれる。被熱による赤化などはみられなかった。礫の重なりはほとんどなく，平面的である。全体的に細かい炭化物が確認された。

集石遺構と隣接して３点の土器片が出土した。84 は頸部がわずかに屈曲し，胴部に最大径を持つ深鉢形土器である。口唇部は三角形状に肥厚し，上面に羽状の沈線文が施される。口縁部から頸部屈曲部へは縦位にやや浅めの沈線文が描かれ，頸部は先端が円形に近い工具による１段の刺突文と数条の沈線文が横位に交互で施される。胴部は縦位の沈線文の上から大振りな数条単位の沈線文で，鋸歯文と刺突文が巡る。口縁は緩やかな波状を呈し，波頂部は口縁部から胴部にかけて貼り付け突帯がつけられ，刻みが施される。突帯は整形がやや粗く，指先で貼り付けたようなゆがんだ形状である。ⅩⅣ類土器に比定される。85 は口縁部片である。下端は頸部付近と考えられ，口縁部がやや外反しながらラッパ状に開く器形と考えられる。全体的に器壁も薄く，調整も丁寧である。口唇部は平坦面が作出されており，深い刻みが施される。一部，垂下する２本の突帯を貼り付けられ，その上にも刻みがみられる。外面の文様は口唇部側３分の１は１段の刺突文と３条の沈線文が横位に巡り，下３分の２は刺突文１条を中心として「く」字の沈線文が施される。また，補修孔が１箇所残存しており，内面は穴の周囲が剥落している。外面から穿孔する際の衝撃で，内面部分が穴よりも大きく剥落した可能性がある。ⅩⅣ類土器に比定される。その他に無文の土器片が１点確認された。

66 号集石遺構（第 98 図）

Ⅰ-17 区で検出した。径約 80cmの範囲に礫がややまとまる。構成礫の大きさは５cm程の小ぶりの安山岩が主体であり，平面的に広がり重なりもほとんどない。被熱により赤化したものが数点みられた。

関連する遺物は出土していない。

67 号集石遺構（第 98 図）

Ⅰ-19 区で検出した。長軸約 90cm・短軸約 80cmの範囲に礫がまとまる。礫同士の重なりはほとんどみられず，平面的に広がる。下位から礫は全く出土していない。構成礫は 10～15cm程のやや大型の安山岩と凝灰岩が中心で，被熱による赤化や破砕も確認された。

関連する遺物は出土していない。

68 号集石遺構（第 98 図）

M・N-12 区で検出した。中心に 20 × 15cmの大型の角礫があり，その周辺に 10cm大の礫がまとまっている。礫数は 16 点と小規模であり，礫も被熱痕がみられないため使用頻度が低かったと考えられる。

構成礫には磨石片が転用されたものが２点含まれていた。また，集石遺構に隣接してⅪ土器片が出土した。

69 号集石遺構（第 98 図）

E-24 区で検出した。径約 80cmの範囲に礫がまとまる。一部に礫が重なる部分があるが，重層的ではない。また，礫は円形の範囲に広がっているが，より外側の方が礫の密度が高い。構成礫は５cm程の小ぶりな被熱破砕礫が主体を占める。

関連する遺物は出土していない。

70 号集石遺構（第 98 図）

G-23 区で検出した。約 70cmの範囲に５～10cm前後を中心とする比較的大型の礫がまとまる。礫数はさほど多くなく，大型礫の周囲には５cm程の小型の礫が散在する。安山岩が中心で，１点は頁岩であった。

関連する遺物は，ⅩⅤ類土器と考えられる土器小片が１点出土した。

71 号集石遺構（第 98 図）

K-20 区で検出した。約 50～60cmの範囲に礫がまとまるが，礫同士の重なりはほとんどなく平面的である。構成礫は５cm前後の大きさのものが主体を占める。

関連する遺物はⅫ類土器が出土したが，小片のため詳細は不明である。

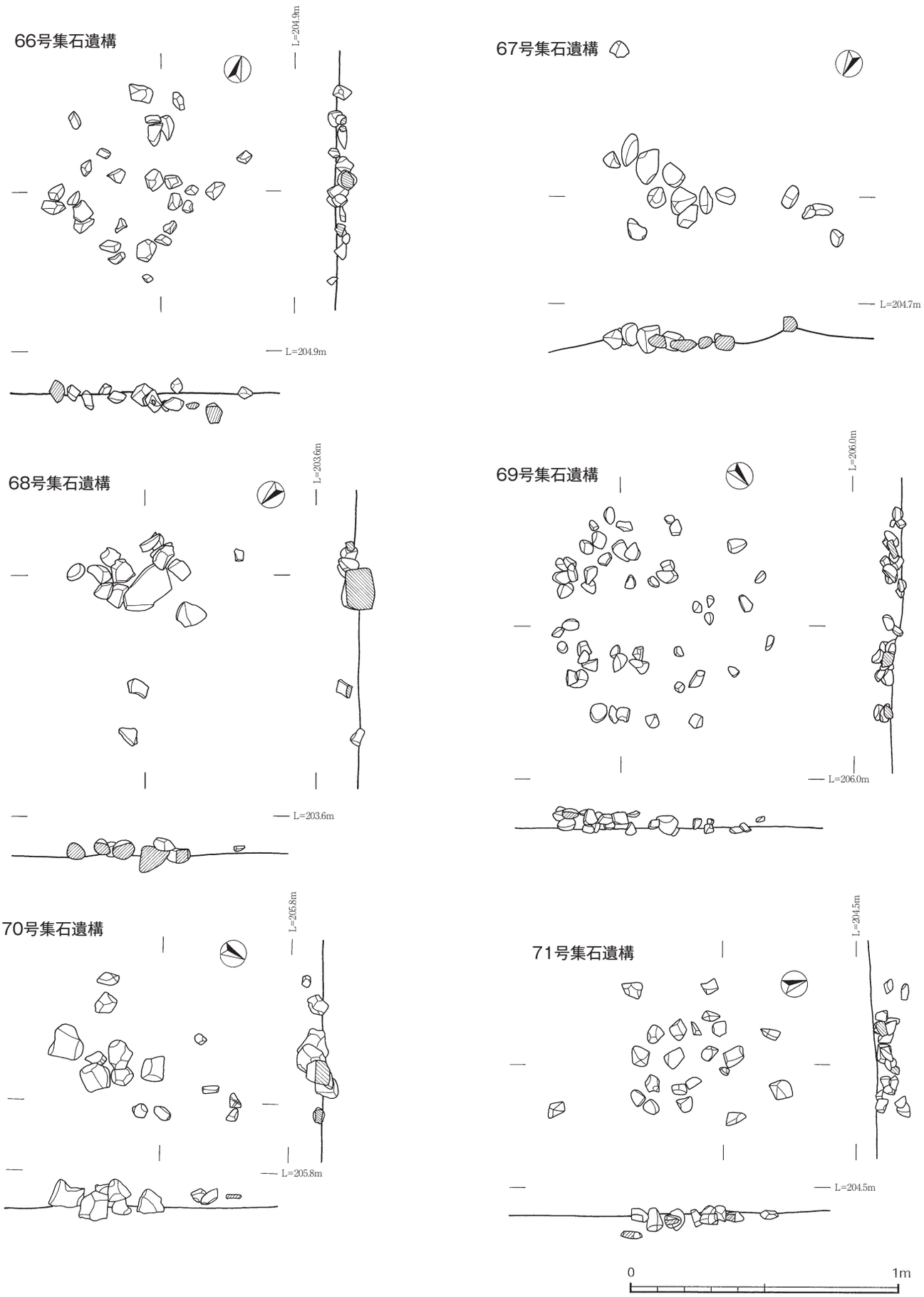
72 号集石遺構（第 99 図）

G-23 区で検出した。約 70cmの範囲に５～10cm大の礫がまとまる。一部礫が重なるが，重層的ではない。

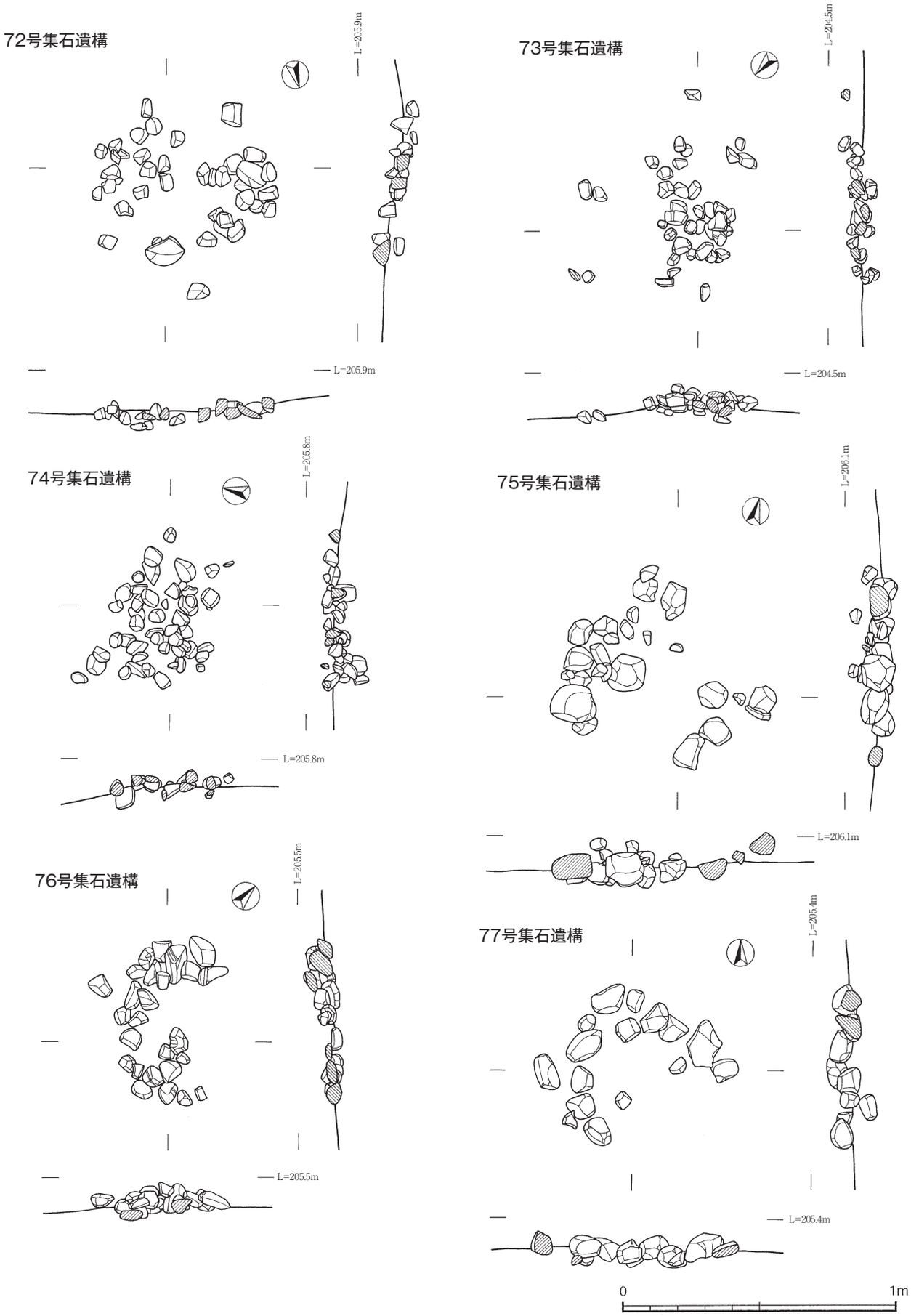
関連する遺物は出土していない。

73 号集石遺構（第 99 図）

L-21 区で検出した。約 70cmの範囲に礫がまとまる。検出面はⅦ層中位であり，Ⅷ層上面まで 30cmを測るが，その間は遺物が出土しなかった。構成礫は５cm大の破砕



第 98 図　66～71 号集石遺構



第 99 図　72～77 号集石遺構

礫が中心であり，いずれも被熱により変色し，脆くなっている。

関連する遺物は出土していない。

74 号集石遺構（第 99 図）

G-22 区で検出した。Ⅵ層検出の 277 号集石遺構のほぼ真下で検出されたが，礫の集中箇所が異なる点や 277 号集石遺構と本集石遺構の間に礫が出土しない間層を挟む点から，異なる集石であると判断した。約 55cmの範囲に礫が集中する。礫は一部重なる部分もあるが，平面的である。構成礫は５～８cm程のものが主体をなす。

関連する遺物は，集石遺構に隣接してXV類土器の小片が出土した。

75 号集石遺構（第 99 図）

D-20 区で検出した。約 80cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は 15cm程と大型のものが中心であり，やや南側に密度が偏る。一部は調査区外のため未検出である。大型礫の間には５cm大の小型の礫が含まれ，１点は磨石片の可能性がある。

関連する遺物は，XX類の土器小片が１点出土した。

76 号集石遺構（第 99 図）

G-22 区で検出した。北西側の微高地から南東方向へ下る緩やかな斜面に位置する。集石遺構下位は砂粒を多く含む黒褐色土で，約 20cmは無遺物層である。約 60cmの範囲に楕円形に礫がまとまるが，中心部分の礫の密度は低く，弧を描くようなまとまりである。平面的に礫の重なりはあるが，重層的ではない。構成礫は５cm前後の大きさが中心である。礫は被熱により表面が赤化したものが多く，ほとんどが破砕して脆い。炭化物は検出されなかった。

関連する遺物は出土していない。

77 号集石遺構（第 99 図）

H-21 区で検出した。約 70cmの範囲に礫がまとまる。礫同士の重なりはほとんどなく，平面的に広がる。集石遺構の中心部分は礫の密度が低く，弧状の礫のまとまりがある。検出状況から，集石の廃棄後に中央部分の礫が取り出されている可能性もある。構成礫は 15～20cm程の比較的大型の礫が主体をなす。全ての礫が被熱により変色し，破砕したものも多い。

関連する遺物は出土していない。

78 号集石遺構（第 100 図）

E-11 区である。約 90cmの範囲に礫がまとまり，外側ほど礫の密度も低い。構成礫は５cm程の小型のものが主体をなし，数点 10cm弱のやや大きめのものも含まれる。全体的に被熱による赤化や破砕が著しい。また，中心部の土層も赤紫色を呈しており，激しく熱を受けたと考えられる。礫のうち１点は剥片状であり，石器素材が転用された可能性もある。

集石遺構の中心部から土器の底部片１点が出土した。86 は底面部分のみ残存する。内面には肋が明瞭な貝殻押圧がみられ，成形時の痕跡と考えられる。外面はナデ調整により，ほぼ平坦に調整されている。全体的に摩滅しており，角が取れている。底部内面を貝殻で調整する手法は縄文早期前葉の円筒形貝殻文土器にみられるため，当該期のものと考えられる。

79 号集石遺構（第 100 図）

F-19 区で検出した。径約 70cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は５～８cm程の大きさのものが主体をなし，そのうち２点は軽石であった。被熱痕が確認できたのは２点のみであった。

関連する遺物は，集石遺構に隣接して土器片が１点が出土した。87 は口縁部片である。口縁端部はやや肥厚し，端部は丸くなる。口唇部及び口縁部に貝殻と考えられる刺突文が施される。胴部はナデ調整である。明瞭な貝殻条痕が確認できないため断定できないが，Ⅴ類土器に特徴は近い。

80 号集石遺構（第 100 図）

D-24 区で検出した。約 60cmの範囲に礫がややまとまる。構成礫は５cm前後のものが主体をなし，10cm大の礫も数点みられる。炭化物が検出層内で少量含まれていたが，被熱痕は数点の礫にしか確認されなかった。

関連する遺物は，集石遺構に隣接して土器片１点が出土した。88 は胴部片であり，下端にわずかであるが屈曲部が残存する。胴部は大きく外反し，口縁部に達すると考えられる。内面はナデ調整であり，外面には浅い山形押型文が連続して施文される。胎土は白色粒子や金雲母が目立ち，器壁は薄く調整も丁寧である。Ⅻ類土器に比定される。

81 号集石遺構（第 101 図）

M-13 区で検出し，その範囲は長軸 80cm・短軸 50cmを測る。10cm弱の礫と 20cm程の大型礫で構成され，大型礫は 2,600 ｇと 3,100 ｇである。全体的にみても小規模で密度も低い。掘り込みは確認されなかった。

関連する遺物は出土していない。

82 号集石遺構（第 101 図）

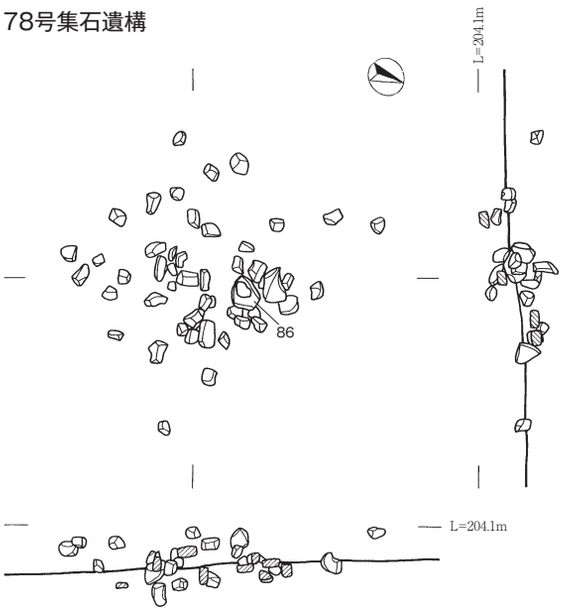
H-23 区で検出した。10cm大の礫が径 55cmの範囲に広がる。被熱痕のある礫は少なく，破砕もしていないため，使用頻度が低いか，他の集石遺構に使用するために準備した礫の可能性がある。礫数は 10 点と少なく，礫の重なりもほとんどない。

関連する遺物は出土していない。

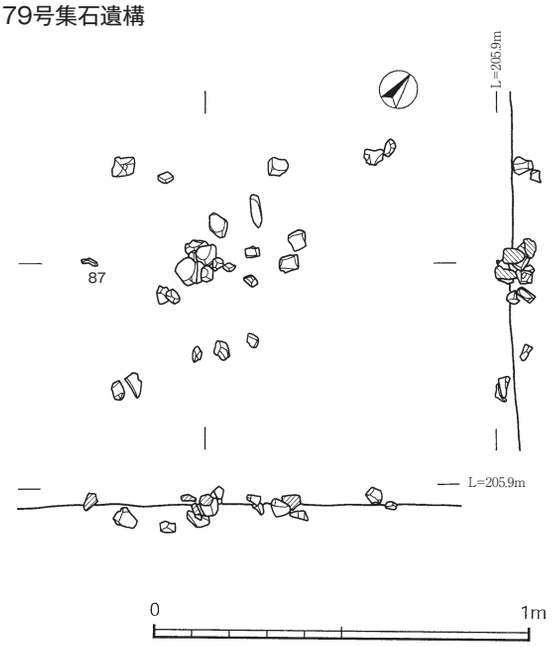
83 号集石遺構（第 101 図）

D-17 区で検出した。約 40cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は 10cm程の角礫が主体をなし，その間に５cm大の小型の礫が含まれる。被熱により赤化したものや，石器を転用したものは確認されなかった。礫の重なりはほとんどなく，密度も低い。

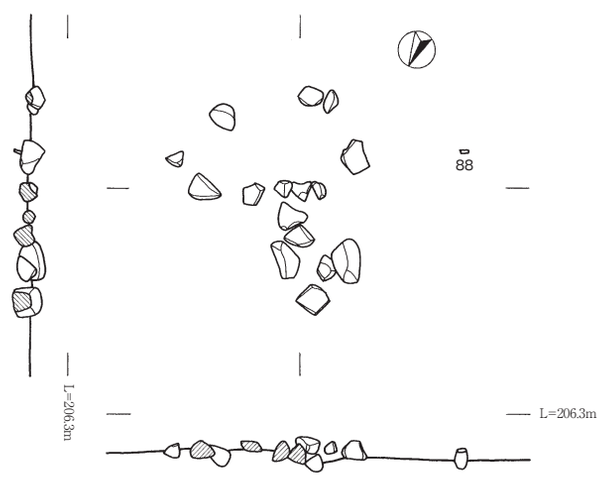
78号集石遺構

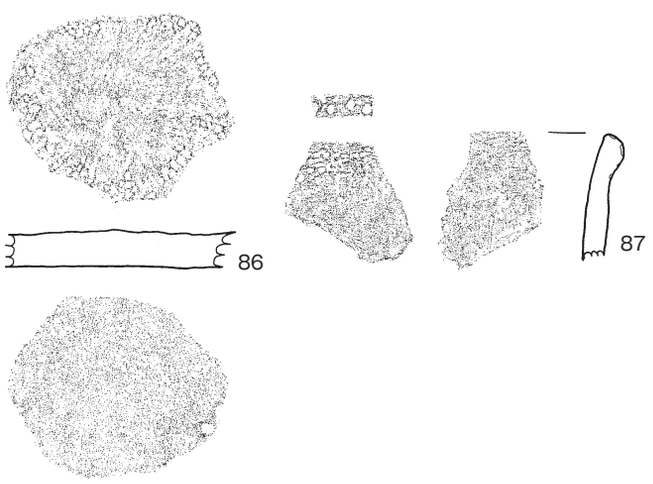


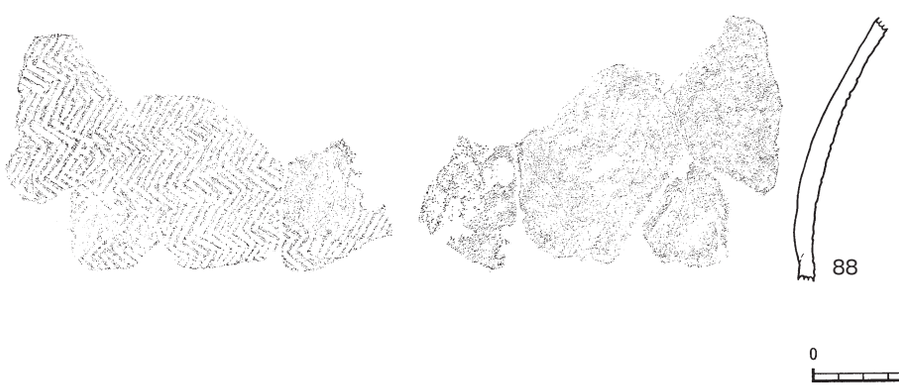
79号集石遺構

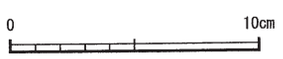


80号集石遺構



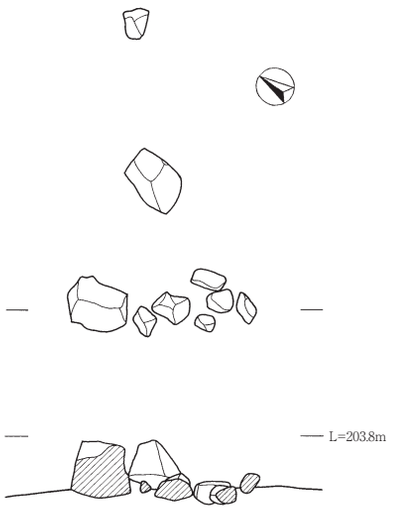




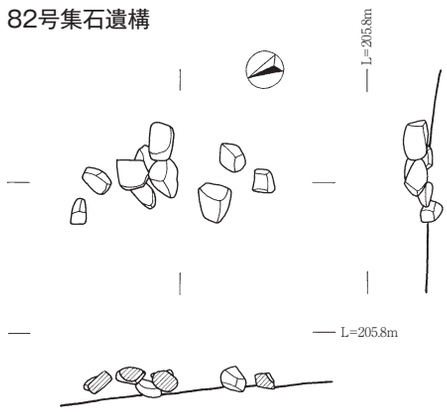


第 100 図　78～80 号集石遺構・出土遺物

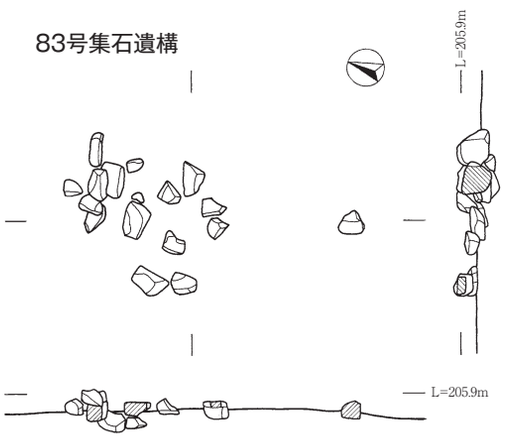
81号集石遺構



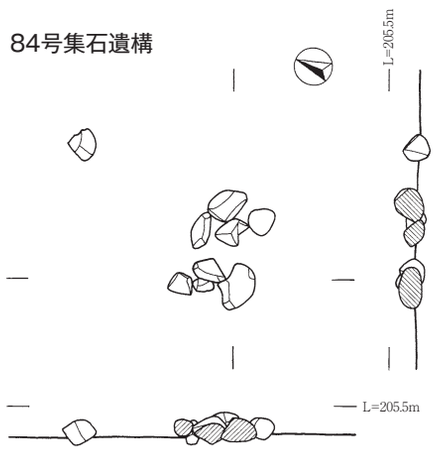
82号集石遺構



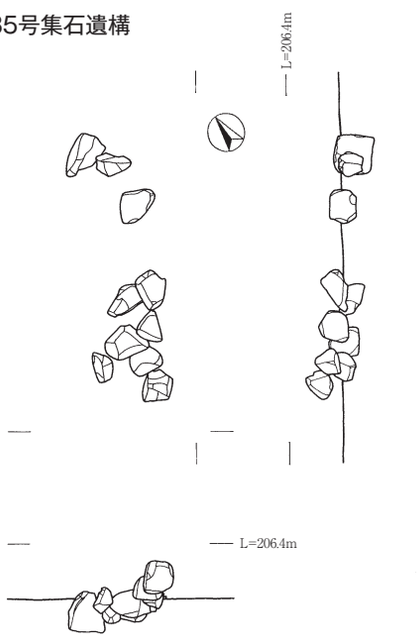
83号集石遺構



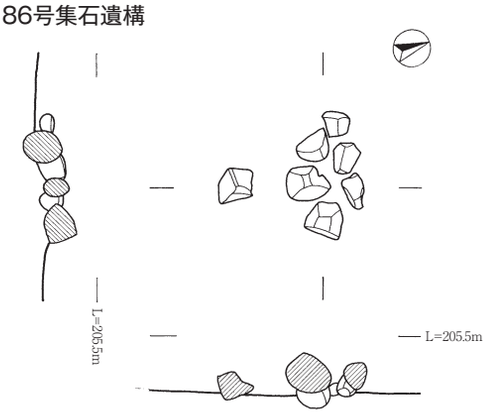
84号集石遺構

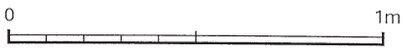


85号集石遺構

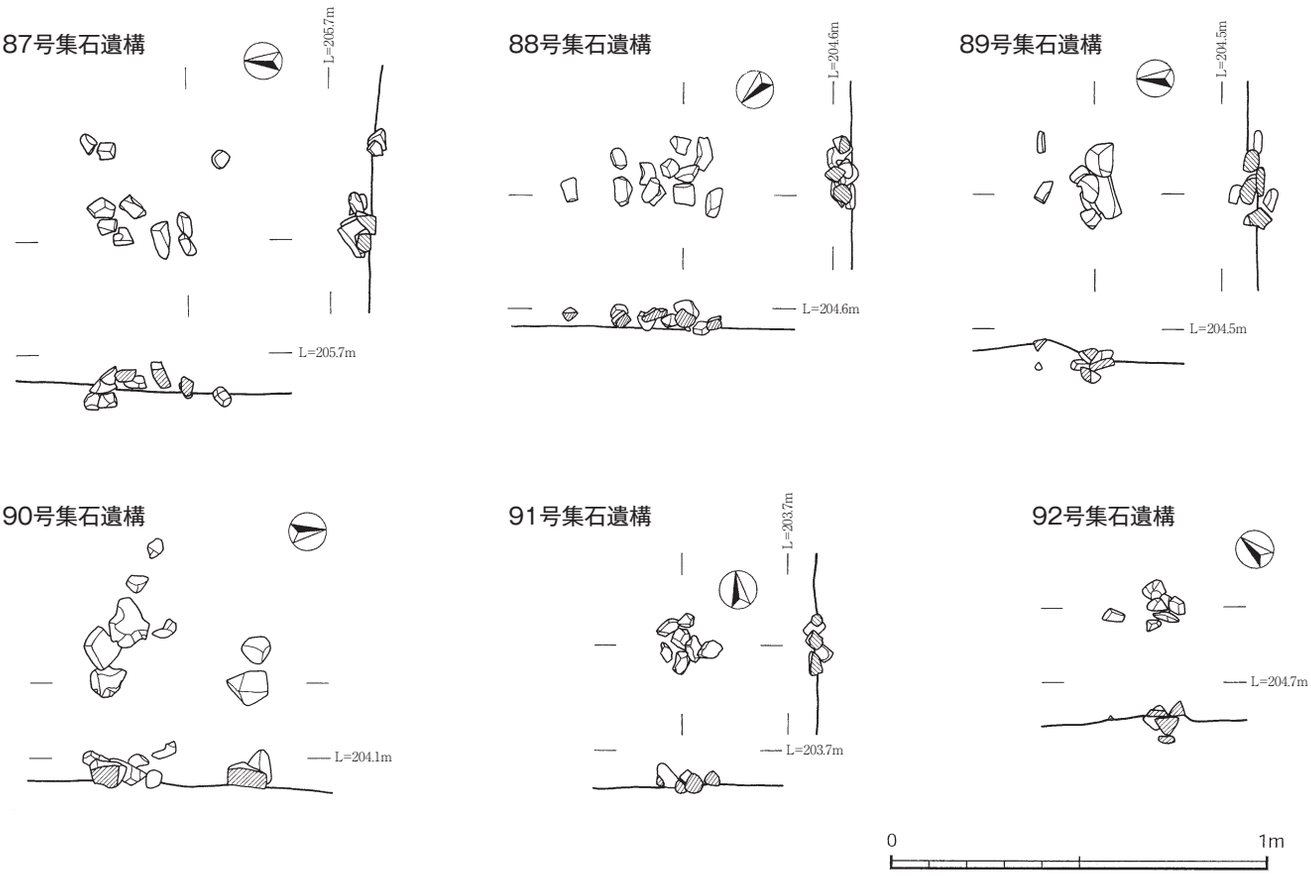


86号集石遺構





第 101 図　81～86 号集石遺構



第 102 図　87～92 号集石遺構

関連する遺物は出土していない。

84 号集石遺構（第 101 図）

Ｆ-18 区で 86 号集石遺構に隣接して検出した。約 40cmの範囲に礫がまとまっているが，礫数は９点と小規模で重なりもほとんどない。構成礫は 10cm大のものが中心であり，１点は軽石であった。被熱痕を確認した礫はなかった。

関連する遺物は出土していない。

85 号集石遺構（第 101 図）

Ｄ-21 区で検出した。長軸約 70cm・短軸約 30cmの範囲に帯状に礫がまとまる。重層的な堆積状況はなく，平面的である。構成礫は 10～15cm程のやや大型の礫が用いられている。被熱による赤化や破砕はみられない。

関連する遺物は出土していない。

86 号集石遺構（第 101 図）

Ｆ-18 区で検出した。集石遺構を構成する礫同士は隙間があるが，約 35cmの範囲にまとまる。礫数は７点と小規模であるが，10～15cm程の大型礫が用いられている。これらの礫に被熱痕は確認されなかった。

関連する遺物は出土していない。

87 号集石遺構（第 102 図）

Ｇ-22 区で検出した。約 40cmの範囲に５cm大の角礫がまとまる。構成礫は安山岩が大半であり，１点が砂岩であった。被熱による破砕などの痕跡は認められなかった。礫の重なりはほとんどなく，礫数も 10 点と小規模である。

関連する遺物は出土していない。

88 号集石遺構（第 102 図）

Ｈ-16 区で検出した。長軸約 40cm・短軸約 20cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は５～10cm程の小ぶりな角礫である。安山岩が主体で，数点が頁岩であった。被熱した礫は少なく，１点のみ赤化していた。周辺の炭化物も確認されなかった。

関連する遺物も出土していない。

89 号集石遺構（第 102 図）

Ｉ-18 区で検出した。構成礫は８点と少ないが，５～10cm大の様々な大きさの礫が約 25cmの範囲にまとまっている。構成礫の大半は安山岩の角礫で，他に砂岩・頁岩もみられた。断面では重なりはほとんどなく，掘り込みも確認されていない。

構成礫として転用されたと考えられる磨石が１点出土した。

90 号集石遺構（第 102 図）

Ｊ-14 区で検出した。長軸約 50cm・短軸 45cmの範囲に

礫がややまとまる。５㎝程の小型礫と 10㎝程の大型礫で構成される。掘り込み等は確認されず，礫は平面的に広がる。

関連する遺物は出土していない。

91 号集石遺構（第 102 図）

Ⅰ-18 区で検出した。約 15㎝の範囲に礫がまとまる。礫数は７点であり，本遺跡検出の集石遺構の中でも小規模なものである。構成礫の大きさは５㎝程であり，全て安山岩であった。掘り込み等は確認されなかった。

関連する遺物は出土していない。

92 号集石遺構（第 102 図）

Ｊ-12 区で検出した。約 20㎝の範囲に礫６点がまとまる小規模な集石遺構である。断面の堆積状況から掘り込みを伴っていたことが推定され，本来はより上位にも礫が存在していた可能性もある。また，集石遺構の使用後に礫が動かされ，下位の礫のみが残存したとも考えられる。構成礫は５㎝程の大きさの安山岩と砂岩である。

関連する遺物は出土していない。

【Ⅲａ類　皿状】

本類は集石遺構を構成する礫が比較的集中し，礫が充填された皿状の掘り込みを伴う一群である。

93 号集石遺構（第 103 図）

Ｊ-21 区で検出した。径約 180㎝・深さ 10㎝の不整形な浅い掘り込みを伴う。礫は掘り込みの底面よりわずかに上位までしか入っていないが，掘り込み内にほぼ全ての礫が集中する。構成礫は５㎝程の大きさのものが主体をなすが，数点 15～20㎝大の角礫が含まれる。礫は被熱痕が認められるものが多い。また，炭化物が散在していた。

関連する遺物は黒曜石・チャート・安山岩のチップが掘り込みの内外から，また，XX類の土器小片が掘り込み内で出土した。

94 号集石遺構（第 103 図）

H-16 区で検出した。長軸 73㎝・短軸 53㎝・深さ５㎝の不整円形の掘り込みを伴い，数個の礫が周囲に散在する。構成礫は 10㎝大のものが中心である。

関連する遺物は，Ⅸ類土器の口縁部小片が出土した。また，集石遺構の下部からはチャートの剥片が出土した。

95 号集石遺構（第 103 図）

Ｊ-13 区で検出した。長軸 67㎝・短軸 54㎝・深さ８㎝の楕円形の浅い皿状の掘り込みを伴い，ほとんどの礫がその内部に集中する。礫は北東側の方が密度が高い。構成礫は５～10㎝程の大きさのものが中心である。

関連する遺物は出土していない。

96 号集石遺構（第 104 図）

G-24 区で検出した。長軸 52㎝・短軸 36㎝・深さ 5㎝の浅い楕円形の掘り込みが伴う。10㎝程の大きさの礫が主体を占める。礫の堆積状況から，掘り込みはもう少し上のレベルから掘削されていたと考えられる。

掘り込みに隣接して土器片が１点出土した。89 は口縁部から頸部まで残存する。口縁部は肥厚し，文様帯を作出している。肥厚部分は一部剥落している。口縁部は緩やかな波状になると考えられる。頸部は屈曲し，胴部に向かって緩やかに膨らむ。また，内面は頸部以下がケズリ調整であり，屈曲部に稜をもつ。外面は丁寧なナデ調整であり，筋状の工具痕が明瞭に確認できる。頸部は先端が不整形な工具による刺突文列が１条巡り，口縁部文様帯は縄文が施されている。頸部にわずかにススが付着している。XⅣ類土器に比定される。

97 号集石遺構（第 104・105 図）

Ⅰ-11・12 区で検出した。長軸 67㎝・短軸 45㎝の範囲に礫が集中し，中心部は５㎝ほど床面が凹む。断面の礫の堆積状況からも，浅い掘り込みがあり，礫よりも上位に掘り込みの開始面があった可能性がある。構成礫は 10～15㎝程の大型礫が主体をなす。

集石遺構内から構成礫として転用された磨・敲石が２点出土した。90 は砂岩製の磨・敲石である。右側面は欠損している。下・左側面に敲打痕が確認できるが，浅く弱い敲打である。全体的に風化が激しく，表面にも亀裂が入って脆くなっている。集石遺構の構成礫として転用されたことによる被熱の影響と考えられる。91 は凝灰岩製の磨・敲石である。上・右・左側面に敲打痕がみられ，上側面以外はまばらである。上面及び下面は磨面である。集石の構成礫として転用されているためか，表面にはススが沈着している。

98 号集石遺構（第 104・105 図）

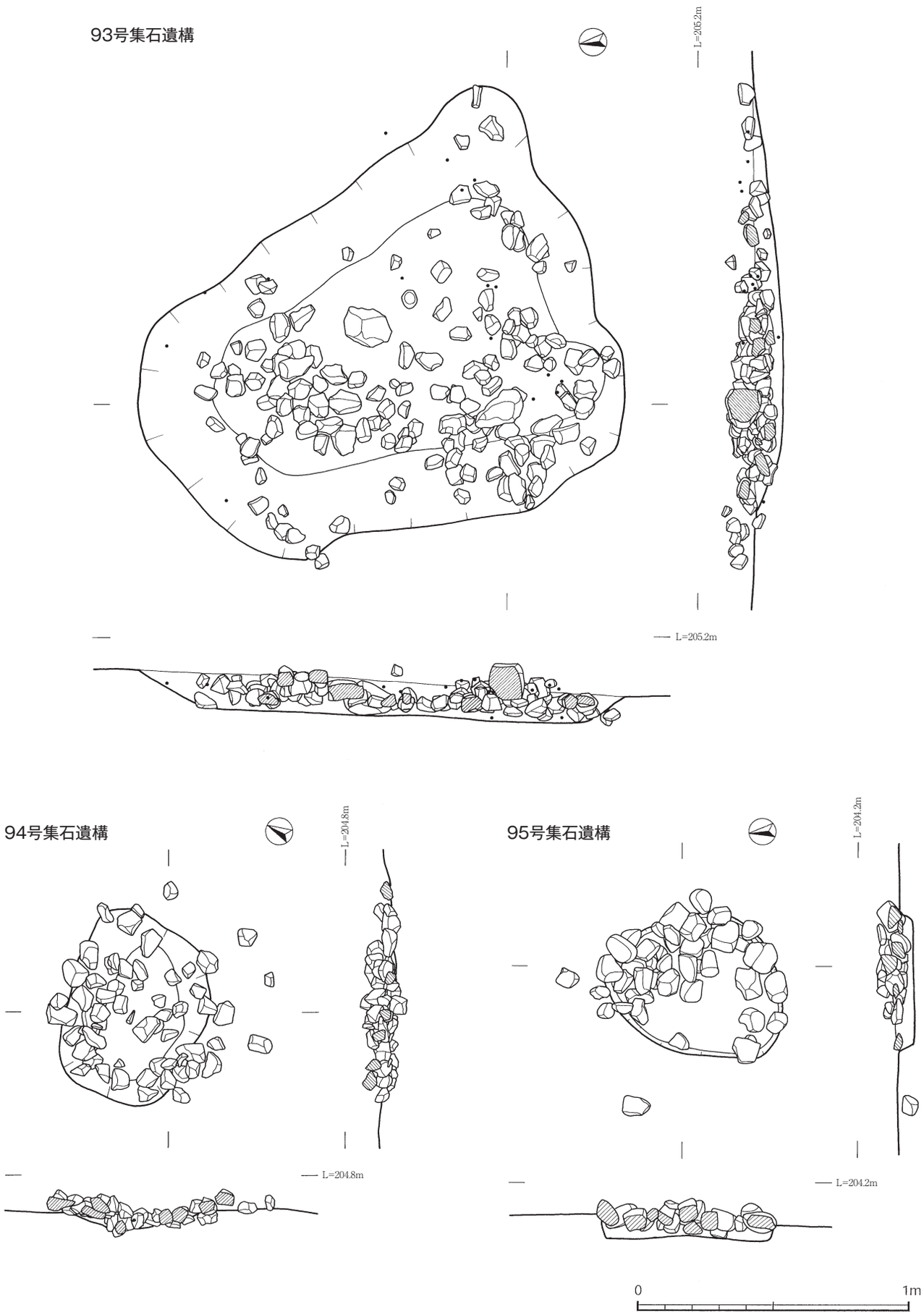
F-19 区で検出した。径 60㎝・深さ 12㎝の浅い掘り込みを伴い，掘り込み内に礫が入っている。礫は 10 点と少なく，中心はやや重なりがあるが掘り込みに充填される状況ではなかった。構成礫は 10㎝程の大きさである。

１点の磨・敲石が構成礫として転用されていた。92 は凝灰岩製の磨・敲石である。断面形は三角形を呈しており，その稜線に沿って敲打痕が観察できる。特に，上側面と右側面は敲打が強く密であり，輪郭の原形を残していない。下面は欠損している。

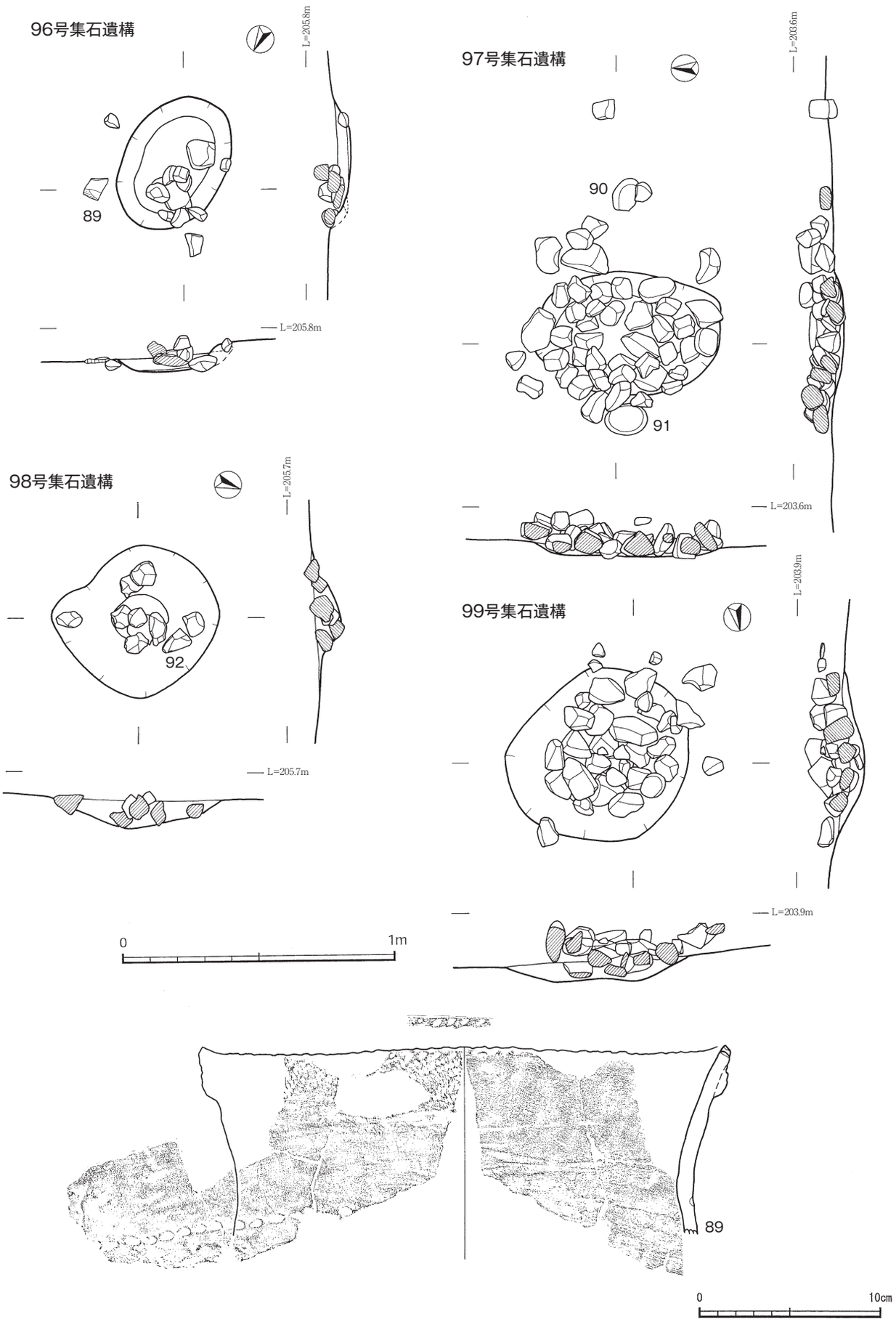
99 号集石遺構（第 104・105 図）

Ｊ-12 区で検出した。長軸 70㎝・短軸 63㎝・深さ 10㎝の円形の掘り込みを伴う。構成礫は 10～20㎝程の比較的大型の礫である。掘り込みの中心よりやや西側に礫が集中する傾向にある。

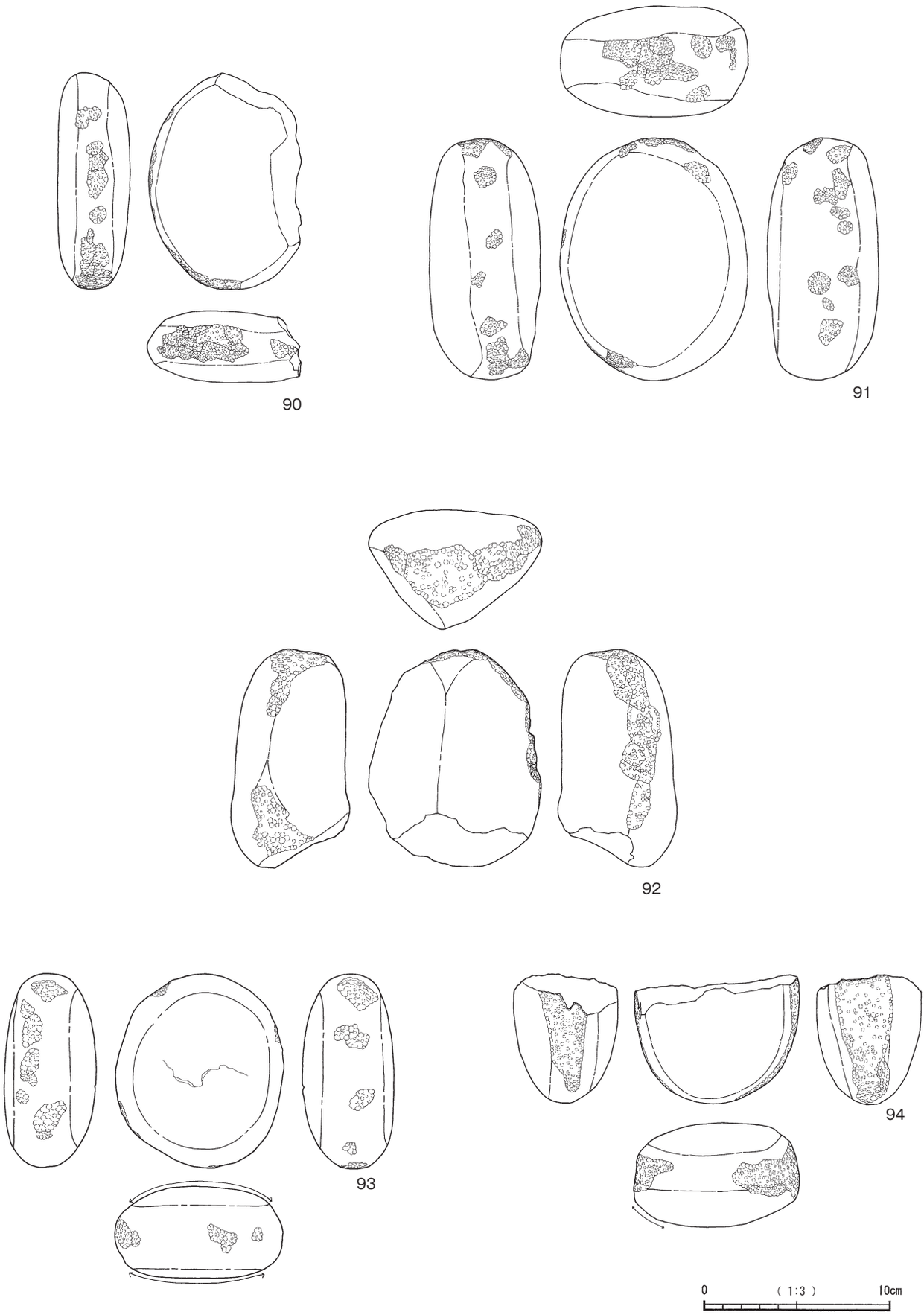
磨・敲石が構成礫として転用されていた。93 は凝灰岩製の磨・敲石である。下・右・左側面に敲打痕が観察でき，密度はまばらではあるが深い敲打痕が残っている。上・下面は磨面であり，表面が平滑である。上面の一部は剥落している。94 は凝灰岩製の磨・敲石である。上半



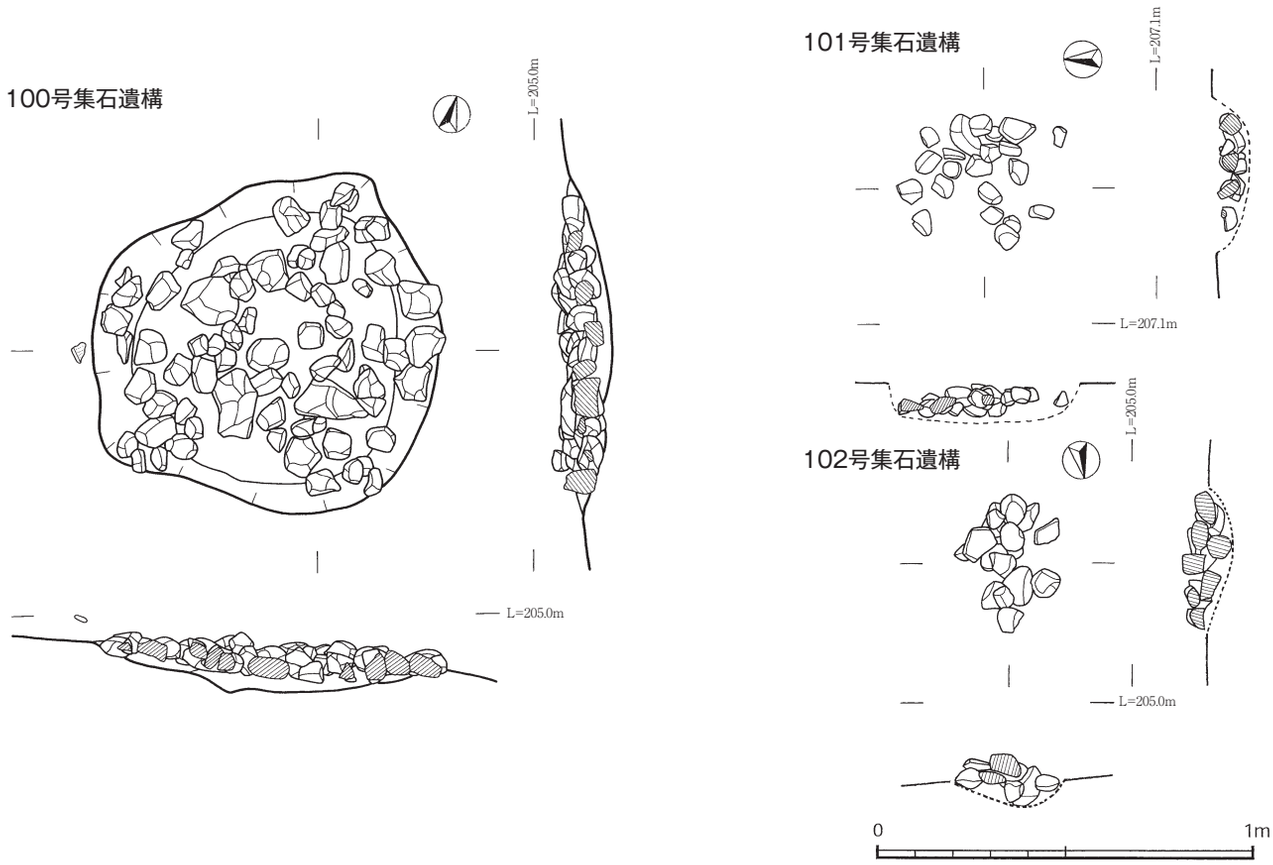
第 103 図　93～95 号集石遺構



第 104 図　96～99 号集石遺構，96 号集石遺構出土遺物



第 105 図　97～99 号集石遺構出土遺物



第 106 図　100～102 号集石遺構

は欠損するが，両側面から下側面にかけて細かく密な敲打痕が観察できる。下面には局部的な磨面があり，平坦面をなしている。

100 号集石遺構（第 106 図）

Ｊ-22 区で検出した。径約 90cm・深さ 13cmの不整円形の浅い掘り込みを伴う。礫数は 71 点であり，掘り込みの最も深い部分と礫がまとまりをなす部分とには若干のレベル差がある。掘り込みは浅い皿状をなし，その内部に 10cm程の礫が平面的に分布する。構成礫のうち数点は，15cmを超える大きさである。

掘り込みの縁付近のややレベルが高い位置でXW類土器と思われる胴部片とXX類の土器小片が出土した。

101 号集石遺構（第 106 図）

Ｅ-24 区で検出した。礫周辺を掘り下げた段階で，集石遺構に伴う掘り込みと思われる部分を検出したが，明確には判断できなかった。礫のまとまりから推定すると，長軸約 50cm・短軸約 30cmであり，礫の検出面からの深さが８cmの楕円形の浅い掘り込みとなる。ほとんどの礫がその内部で検出された。構成礫は７cm程が中心であり，礫数は 21 点と小規模である。

集石遺構より下位でチャートのチップが出土したが，レベル差があることから集石遺構と同時期ではない可能性もある。

102 号集石遺構（第 106 図）

Ｉ-21 区で検出した。掘り込みは明確でなかったが，礫のまとまりと重なりから長軸約 35cm・短軸約 25cm・深さ 10cm程の楕円形の浅い掘り込みを伴っていたと考えられる。構成礫は５～８cm程の被熱破砕礫が主体であり，10cmを超えるものがまばらに含まれる。

構成礫の１点は，磨石片の転用と思われる。その他の関連する遺物は出土していない。

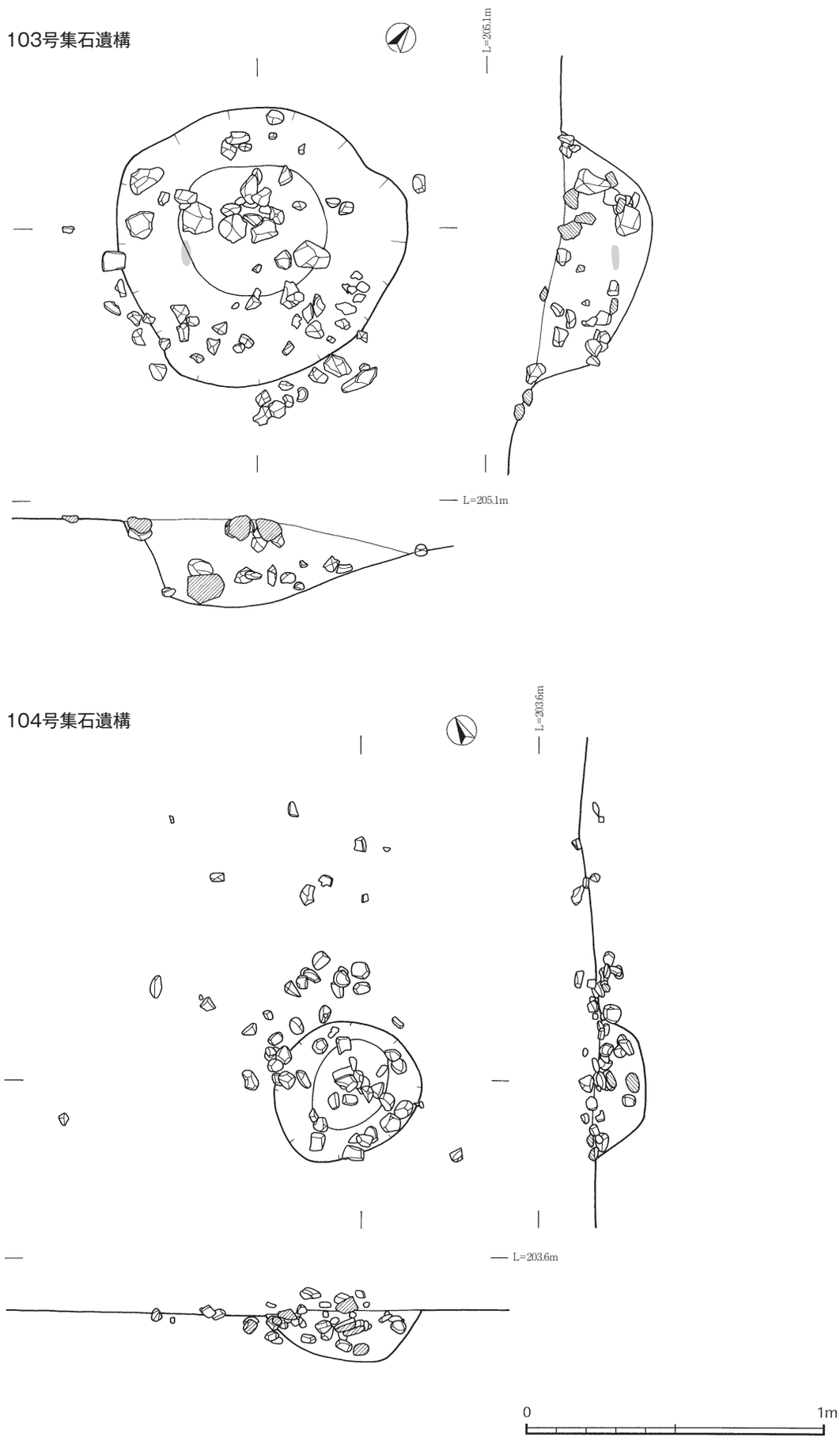
【Ⅲａ類　土坑状】

本類は集石遺構を構成する礫が比較的集中し，礫が充填された土坑状の掘り込みを伴う一群である。

103 号集石遺構（第 107 図）

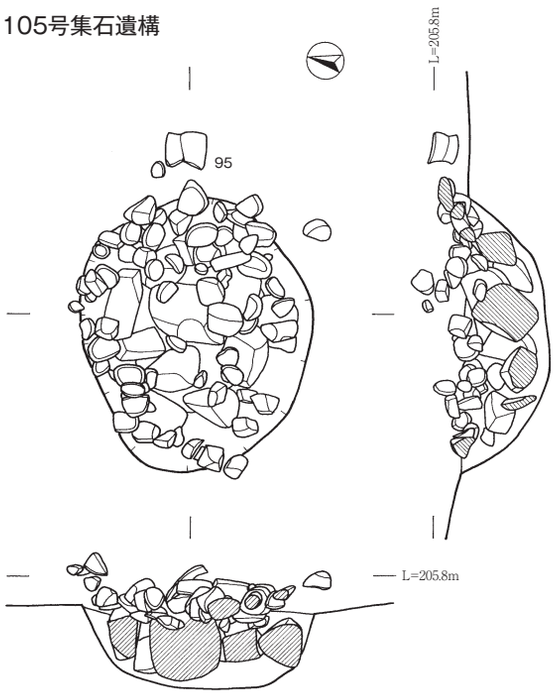
Ｈ-20 区で検出した。径約 95cm・深さ 32cmのやや楕円形を呈する掘り込みを伴う。掘り込みは深く，その内部に８割ほどの礫が含まれるが密度は低い。構成礫は 10cm程の大型のものが数点で，ほとんどは５cm大の小型ものである。

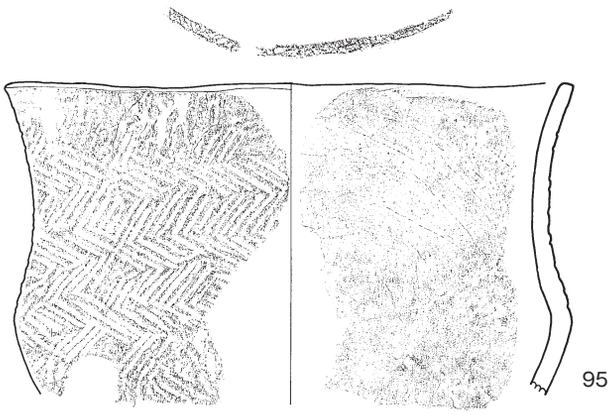
掘り込みの埋土は黒褐色で，Ⅶ層と類似する。単一層で２～４㎜程のオレンジ色のパミスや炭化物をまばらに含み，しまりは弱い。

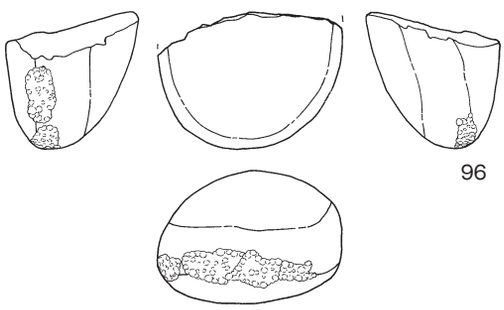


第 107 図　103～104 号集石遺構

105号集石遺構

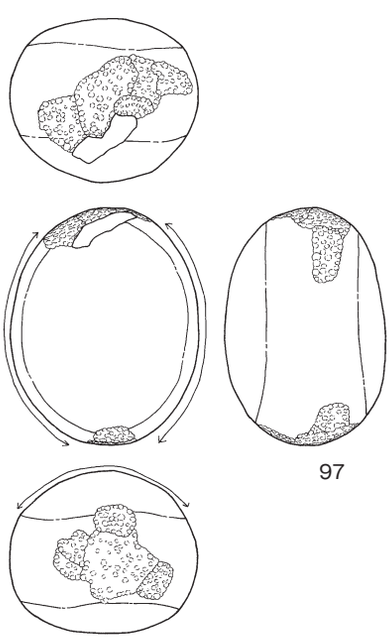






106号集石遺構

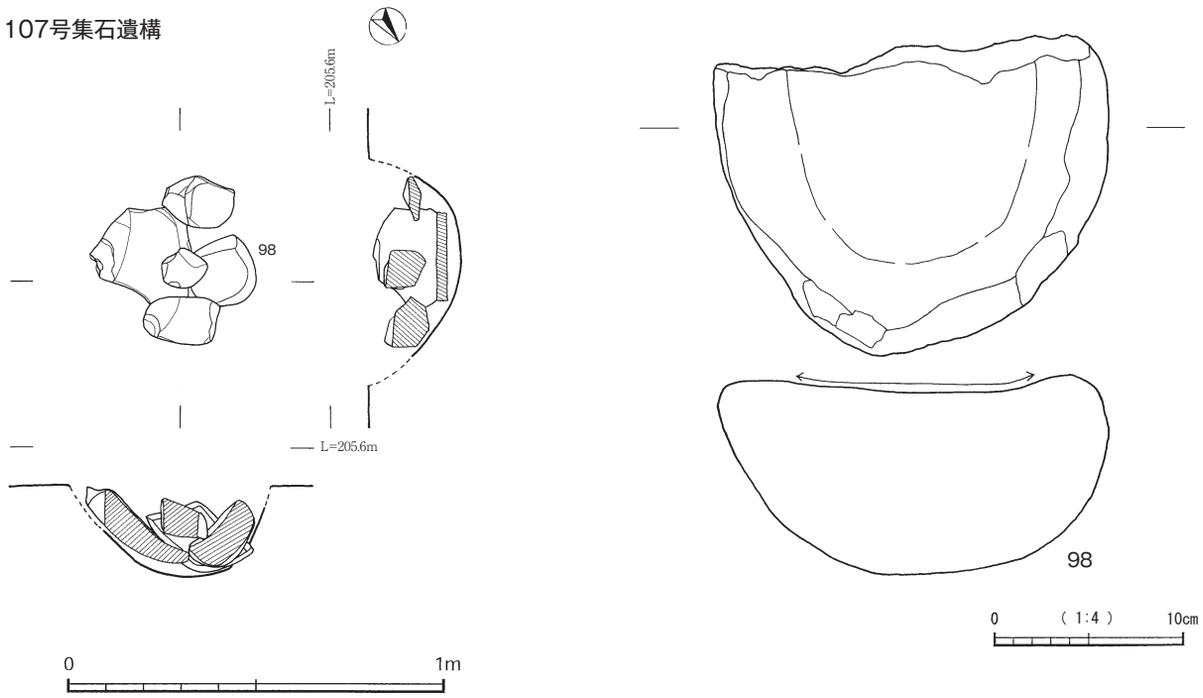




0 1m

0 10cm

第 108 図　105～106 号集石遺構・出土遺物



第 109 図　107 号集石遺構・出土遺物

構成礫のうち３点ほどは，磨石片が転用されたものであった。その他の関連する遺物は出土していない。

104 号集石遺構（第 107 図）

G－３区で検出した。検出面は樹痕による攪乱を所々受けており，礫の位置は若干動いている可能性がある。長軸 50cm・短軸 45cm・深さ 18cmの円形の掘り込みを伴い，掘り込みから東側に礫が広がる。礫の堆積は重層的ではなく，掘り込み内の礫もさほど密度が高くない。構成礫は５cm程の大きさの角礫が主体である。

掘り込みの埋土は，黄色パミス混じりの黒褐色土である。

関連する遺物は出土していない。

105 号集石遺構（第 108 図）

G-23 区で検出した。長軸 74cm・短軸 62cm・深さ 23cmの掘り込みを伴い，内部に礫が充填されている。掘り込みの下位には 20cm大の礫が敷き詰められるように配置され，上位には５～10cm大の礫が多くみられた。このような形態をなす集石遺構は本遺跡内でもほとんどない。炭化物がややまとまって検出された。

掘り込みの埋土は黒色でやや粘性があり，しまりは弱い。黄色パミスと炭化物を含む。

95 は掘り込みに隣接して出土した土器で，口縁部から胴部まで残存する。胴部に最大径を有し，屈曲して口縁部は外反，胴部以下はすぼまる。口唇部はナデ調整により平坦面が作出され，わずかであるが刻みや施文の痕跡がみられる。外面には山形押型文が施され，一部は浅い施文である。胎土には金雲母が多く含まれる。器壁も薄く，調整も丁寧である。Ⅻ類土器に比定される。

106 号集石遺構（第 108 図）

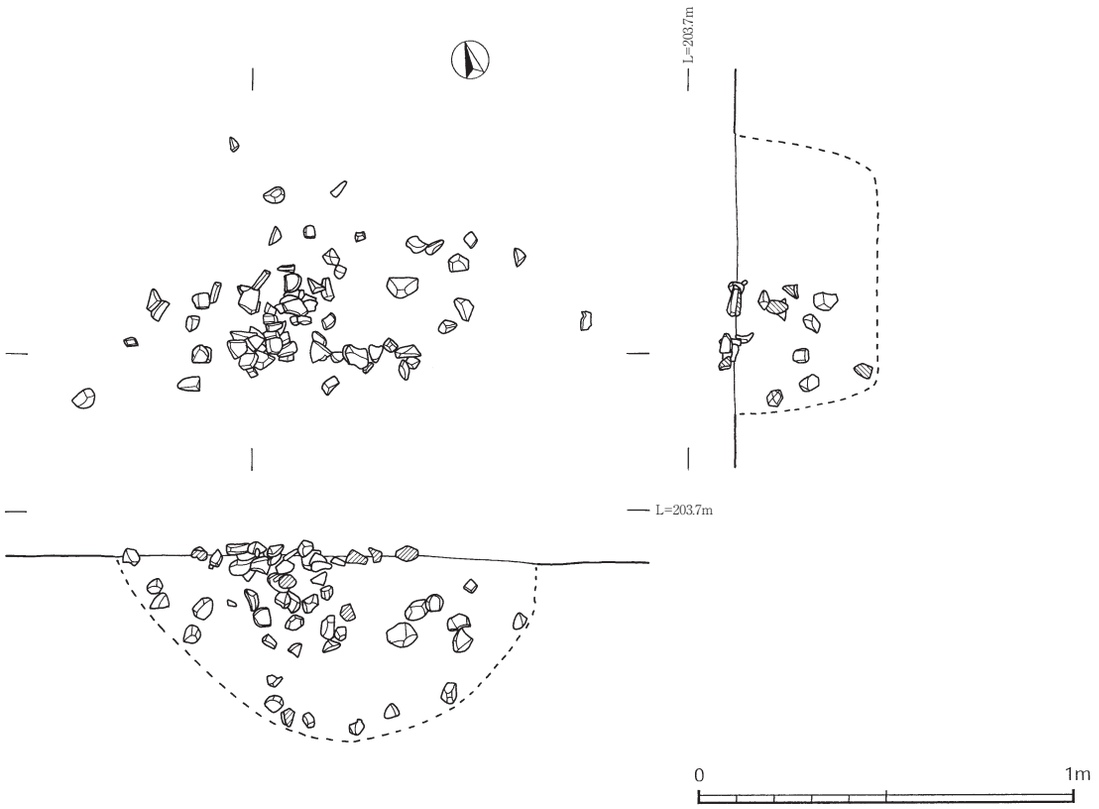
E-22 区で検出した。長軸 80cm・短軸 68cm・深さ 20cmの隅丸方形の掘り込みを伴い，掘り込みを中心として外側にも礫が散在する。構成礫は５～８cm程の大きさが主体をなし，一部一回り大きい礫が用いられている。被熱による破砕はみられない。

掘り込み内から，構成礫として転用されたと考えられる磨・敲石が出土した。96 は凝灰岩製の磨・敲石で，素材は多孔質で凹凸がある。上半は欠損している。下側面を中心に左右側面に敲打痕が帯状に観察できる。その他，土器の底部片が出土したが，詳細は不明である。97 は砂岩製の磨・敲石である。上・下側面に敲打痕が多く観察でき，それ以外の面は磨面であり，敲打部分以外は表面が平滑である。

107 号集石遺構（第 109 図）

G-22 区で検出した。掘り込みを伴うが，当初確認できなかったためその形状や構造については不明である。内部に 20～30cmの大型の石器片を伴う。掘り込みの残存する部分には 98 の石皿や磨・敲石などの大型礫が敷き詰められた状況で配置されていた。当初，埋納遺構の可能性も考えたが，上位から礫が出土している点や欠損品が多いことから集石遺構の下部と判断した。

98 は凝灰岩製の石皿片である。半分が欠損している。表面は作業面が広く，磨耗により凹んでいる。裏面は断



第 110 図　108 号集石遺構

面円形であり，原礫面のままと考えられる。凝灰岩の中でも多孔質で磨耗しており，崩れやすい。表面が黒変しており，集石遺構に転用された際の被熱の影響と考えられる。構成礫として転用された石器以外では，関連する遺物は出土していない。

108 号集石遺構（第 110 図）

Ｈ－３区で検出した。検出時に明確な掘り込みは確認できなかったが，礫の出土状況から掘り込みを伴うと想定する。北側は礫の密度が低く，掘り込みと想定した範囲内においても礫の重なりは上位の方が密である。構成礫は５cm程の角礫が主体である。

関連する遺物は出土していない。

109 号集石遺構（第 111 図）

Ｊ－17 区で検出した。掘り込みは長軸 47cm・短軸 44cm・深さ 34cm，平面プランが円形で断面がボウル状を呈する。礫は掘り込みの周辺の約 100cm四方にも散在しており，全体の形状から判断すれば，礫の重なり方はすり鉢状を呈していた可能性もある。構成礫は５～８cm程の大きさの円礫・亜角礫が中心である。

掘り込みの埋土は砂質の黒色土で，２～５㎜の黄橙色パミスが全体的に混ざる。底面付近では炭化物が多く検出された。

関連する遺物は，貝殻刺突文を有する早期前葉と思われる土器片とＸ類土器の小片が各１点出土した。

110 号集石遺構（第 112 図）

Ｊ－17 区で検出した。長軸 80cm・短軸 66cm・深さ 20cmの不整円形の掘り込みを伴い，内部に礫が集中する。構成礫は 10cm程の大きさのものが中心であり，掘り込みの底面に敷き詰めたような状況はみられない。掘り込み内では炭化物が少量みられたが，集中する部分はなかった。

関連する遺物は，掘り込みから少し離れた地点からⅥ類土器の胴部片が出土しているが，明確にこの集石遺構に伴うものであるかは判断できない。

埋土中から検出した炭化物を年代測定した結果，10,444－ 10,259cal ＢＰの年代値が得られた。

111 号集石遺構（第 112 図）

Ｎ－20 区で検出した。西側の一部は確認トレンチによって削平されていた。径約 80cm・深さ 20cmの円形の掘り込みを有し，掘り込み内部北側に偏って礫が堆積している。構成礫は５～８cm程の大きさが主体であり，掘り込みの床面よりも深い位置まで礫が確認された。礫のほとんどは被熱により変色している。目立った破砕礫はなく，主体は角礫である。

掘り込みの埋土は暗茶褐色の砂質土で軟らかく，黄色パミスをわずかに，白色パミスの細粒を全体的に含む。黄色パミスは１cm大のものもあり，部分的に集中する状況であった。掘り込みの底面付近はやや明赤褐色に変色しており，集石を使用した際に被熱したものと考えられ



第 111 図　109 号集石遺構

る。

関連する遺物は出土していない。

112 号集石遺構（第 113 図）

Ⅰ-22 区で検出した。長軸 60cm程度・短軸 49cm・深さ 28cmの掘り込みを伴い，その内部に礫が充填されている。東側には長軸 50cm程度・短軸 35cm・深さ 23cmの土坑状の掘り込みが位置している。両者の切り合いは不明確であるが，集石遺構２基が重なり合っている可能性がある。構成礫は 10cm程の大きさの角礫が主体をなし，１点のみ軽石であった。比較的大きい礫は被熱により破砕しており，状態は悪い。掘り込みの壁はしっかりしているが，プランに対して礫が密に詰まった様子ではなく，壁面とは若干の空白がある。

掘り込みの埋土は砂質が強く軟らかい黒褐色土主体で，暗茶褐色土や黄色・白色のパミスが少量混ざる。掘り込みを壊すように他の土坑状の掘り込みが切り合っている。掘り込みに対し礫の数が少ない点からも，北東側から礫が取り出された可能性がある。

掘り込み内及び周辺から貝殻刺突文を有する土器が出土したが，小片のため詳細は不明である。

113 号集石遺構（第 113 図）

Ｆ-22 区で検出した。集石遺構の検出中に掘り込みを確認した。検出時の掘り込みは，径約 60cm・深さ 15cmを測る。礫の堆積状況から，より上位から掘り込まれている可能性が高く，平面プランも明確にとらえられなかった。掘り込みのプランと礫のまとまりには空白がある。構成礫は５cm程のものが主体をなし，最下面で 10cm大の礫を１点検出したが，想定される掘り込み底面よりも下位であった。ほとんどの礫が被熱により赤化し，破砕していた。

関連する遺物は，Ⅵ類土器と思われる貝殻刺突文を有する胴部片が１点出土した。

114 号集石遺構（第 113 図）

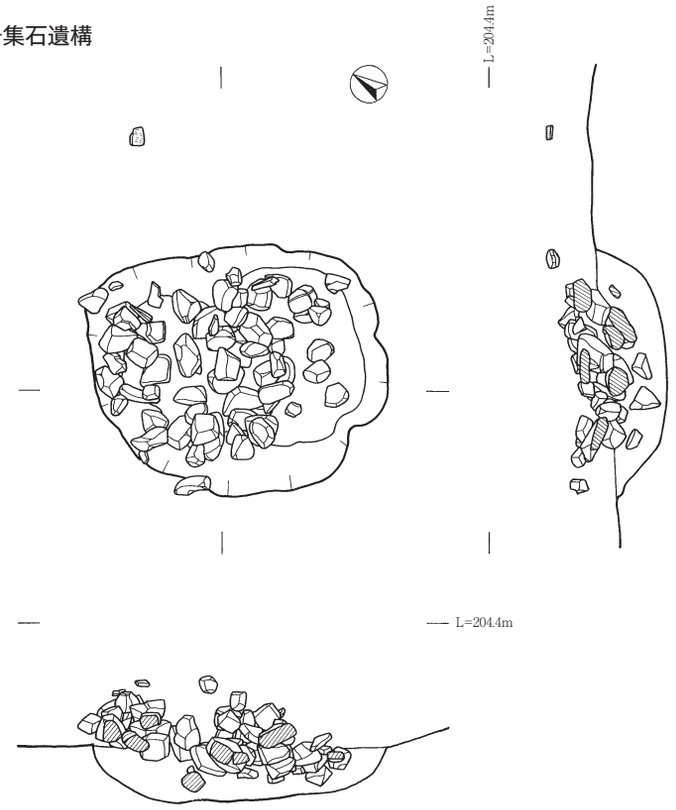
Ｌ-21 区で検出した。径約 50cm・深さ約 20cmの掘り込みを伴い，ほとんどの礫が集中する。構成礫は５cm程の大きさのものが主体であり，底に近い部分では 15cmを超える大型の角礫が出土した。掘り込みの底面と礫のまとまりにはレベル差があり，前述した大型の礫も底面に敷石として配置されたような状況は確認できない。

関連する遺物は，XX類の土器小片が出土した。

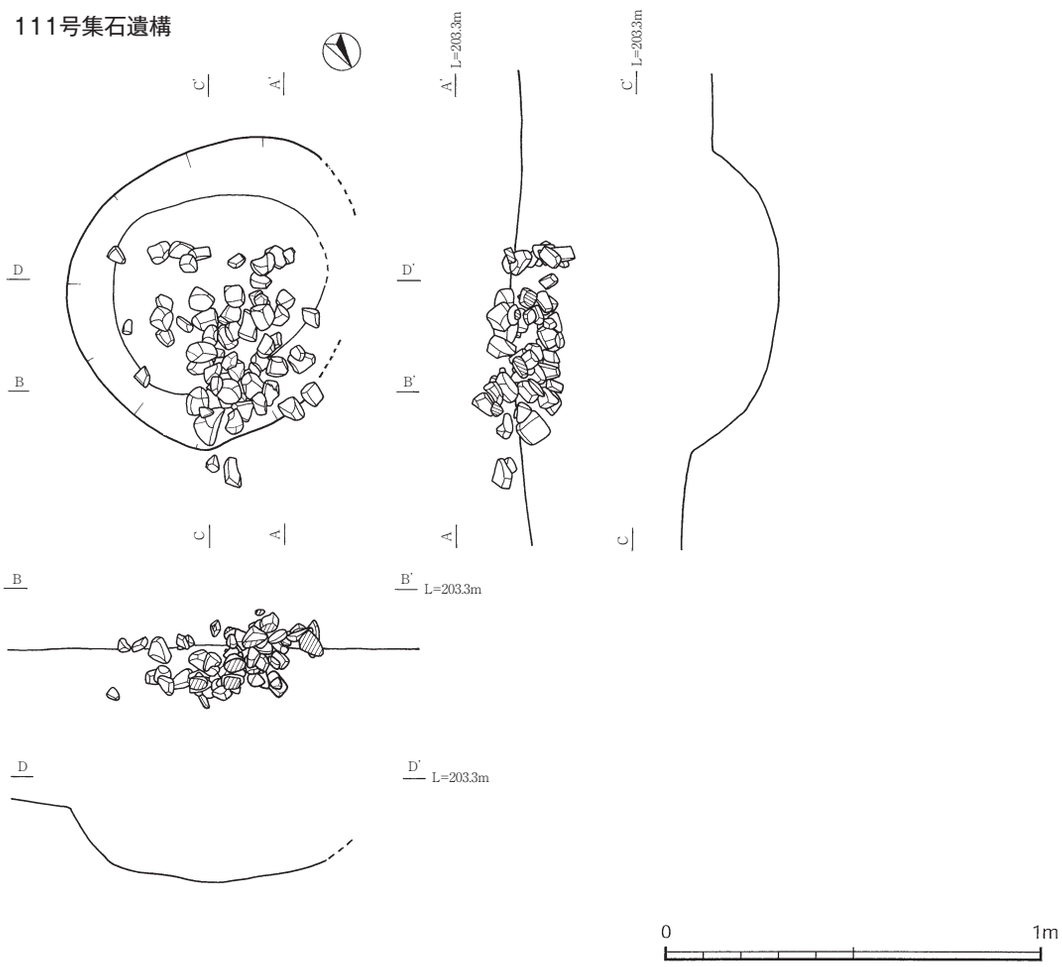
115 号集石遺構（第 113 図）

Ⅰ-17 区で検出した。北側・東側に横転や樹痕が多く，その影響下での残存部を検出した。中央に 20cm大の大型礫が２つ配置され，その周囲に５cm以下の小型の礫が

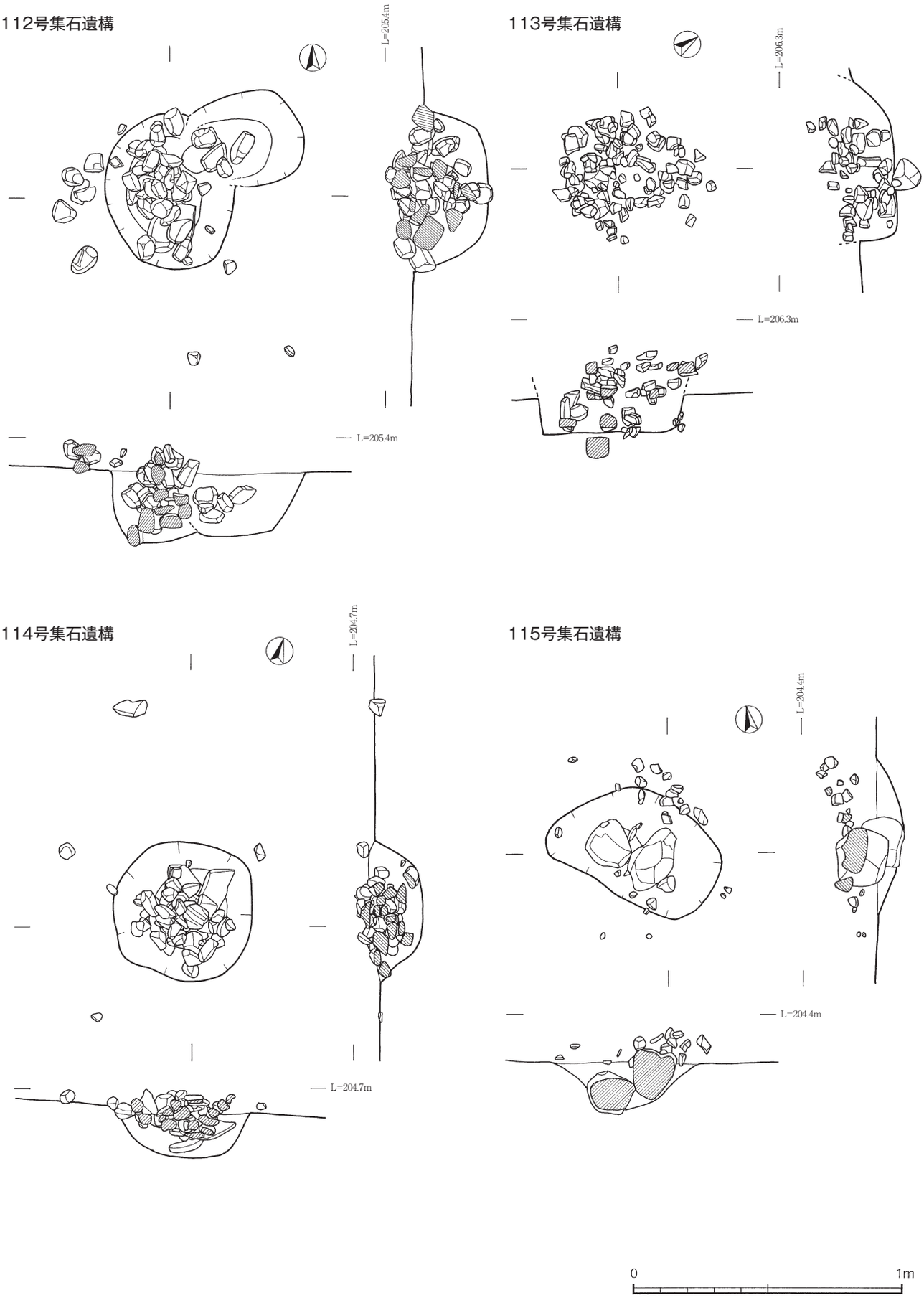
110号集石遺構



111号集石遺構



第 112 図　110～111 号集石遺構



第 113 図　112～115 号集石遺構

散在する。礫は安山岩が主体で砂岩を含み，破砕礫が約半数である。被熱により赤化したものは少ない。中央の大型礫は内側が赤みを帯びており，掘り下げて空気に触れるとひび割れが多くなった。集石遺構を下位まで掘り下げた段階で掘り込みを確認した。掘り込みは長軸64cm・短軸44cm・深さ17cmの不整円形であったが，礫の堆積から推定すれば，さらに上位から掘り込まれている可能性がある。

関連する遺物は出土していない。

116号集石遺構（第114図）

Ⅰ-19区で検出した。長軸30cm・短軸26cm・深さ20cmの掘り込みを伴い，その内部は５～８cm大の礫で充填されている。礫は全て安山岩で，ほとんどが角礫であった。礫の大部分は赤みを帯びており，被熱によるものと考えられる。また，礫を取り上げる際に破砕する礫も多く，これも被熱による影響と思われる。本遺跡の掘り込みを伴う集石遺構の中でも，比較的小型で深さがある点が特徴的である。

関連する遺物は出土していない。

117号集石遺構（第114図）

K-17区で検出した。長軸58cm・短軸52cm・深さ16cmの円形の掘り込みを伴い，その内部から15点の礫が出土した。礫の密度は高くはないが，掘り込みの底面中央付近に15cm程の大型礫が１点あり，意図的に配置されたような状況である。それ以外の構成礫は５cm程の大きさが中心であり，大型礫からやや上のレベルで検出された。石材は砂岩と安山岩が半々の割合であり，ほぼ全て角礫であった。

掘り込みの埋土は単層で，黄褐色パミスが密に入る黒色土である。

関連する遺物は出土していない。

118号集石遺構（第114図）

Ｊ-23区で検出した。Ⅶ層上位で礫を検出したが，掘り込みも考慮すると主体はⅦ層中位と考えられる。長軸42cm・短軸38cm・深さ15cmの掘り込みを伴う。礫は東西側へと傾斜して堆積しており，礫を掘り込み内から掻き出したものと考えられる。構成礫は５～10cm程の大きさが主体をなす角礫で，ほとんどが被熱しており，最も下位の礫は非常にもろく，一部破砕していた。

掘り込みの埋土は黒褐色の軟らかい砂質土で，炭化物や黄色・白色パミスの細粒を少量含む。

関連する遺物は出土していない。

119号集石遺構（第114図）

Ｊ-22区で検出した。周辺にはⅥ層下位あるいはⅦ層上面検出の集石遺構が多数検出されている。径約35cm・深さ10cmの掘り込み内に礫が集中する。礫は掘り込みの床面まで重層的に充填されている。構成礫は掘り込み下部が10cmを超える大型の礫であり，上位に５cm程のやや小型の礫が重なる。礫は被熱により白く変色したものや破砕したものもあった。

掘り込みの埋土は，軟らかい黒褐色土で黄色のパミスが少し混ざる。

関連する遺物は出土していない。

【Ⅲｂ類　土坑状】

本類は集石遺構を構成する礫が比較的集中し，土坑状の掘り込みを伴うが，礫と掘り込みにレベル差がみられる一群である。

120号集石遺構（第114図）

Ｎ-20区で検出した。上位でも礫が確認されていたが，明確なまとまりがなかったため一般礫として取り上げてしまった。掘り下げる中で掘り込みを確認し，集石遺構として記録した。径約55cm・深さ15cmの掘り込みを伴う。礫数は10点と少なく，ほとんどが掘り込みの西側に集中する。構成礫は５cm程の大きさであり，１点は軽石であった。そのほとんどが被熱により変色している。

掘り込みの埋土は，パミスを多く含む黒色土で全体的にⅦ層よりも柔らかい。掘り込みの下位では炭化物も多く検出された。底面付近は茶褐色土に変色がみられ，やや土が脆くなっている印象がある。

関連する遺物は出土していない。

121号集石遺構（第114図）

Ｊ-17区で検出した。長軸70cm・短軸42cm・深さ32cmの掘り込みを伴う。礫は掘り込みの上位に集中しており，掘り込みがある程度埋没してから集石遺構が形成された可能性がある。構成礫は５cm程の大きさのものが中心である。

掘り込みの埋土は，Ⅶ層に黄色パミスが全体に混ざる。また，炭化物が埋土全体及び掘り込みに隣接した北側にみられる。

関連する遺物は出土していない。

埋土中から検出した炭化物を年代測定した結果，9,324 － 9,128cal ＢＰの年代値が得られた。

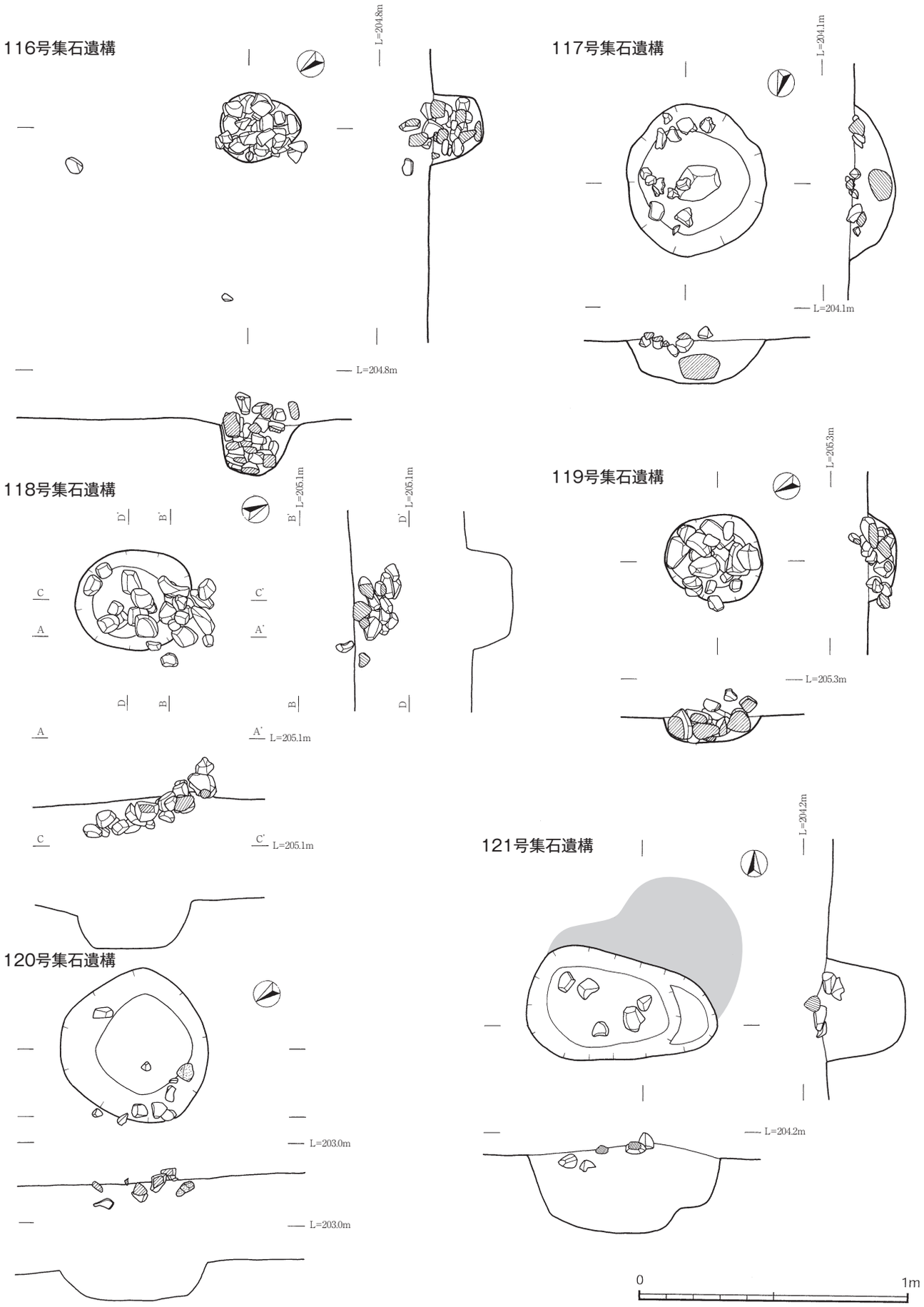
【Ⅲｂ類　皿状】

本類は集石遺構を構成する礫が比較的集中し，皿状の掘り込みを伴うが，礫と掘り込みにレベル差がみられる一群である。

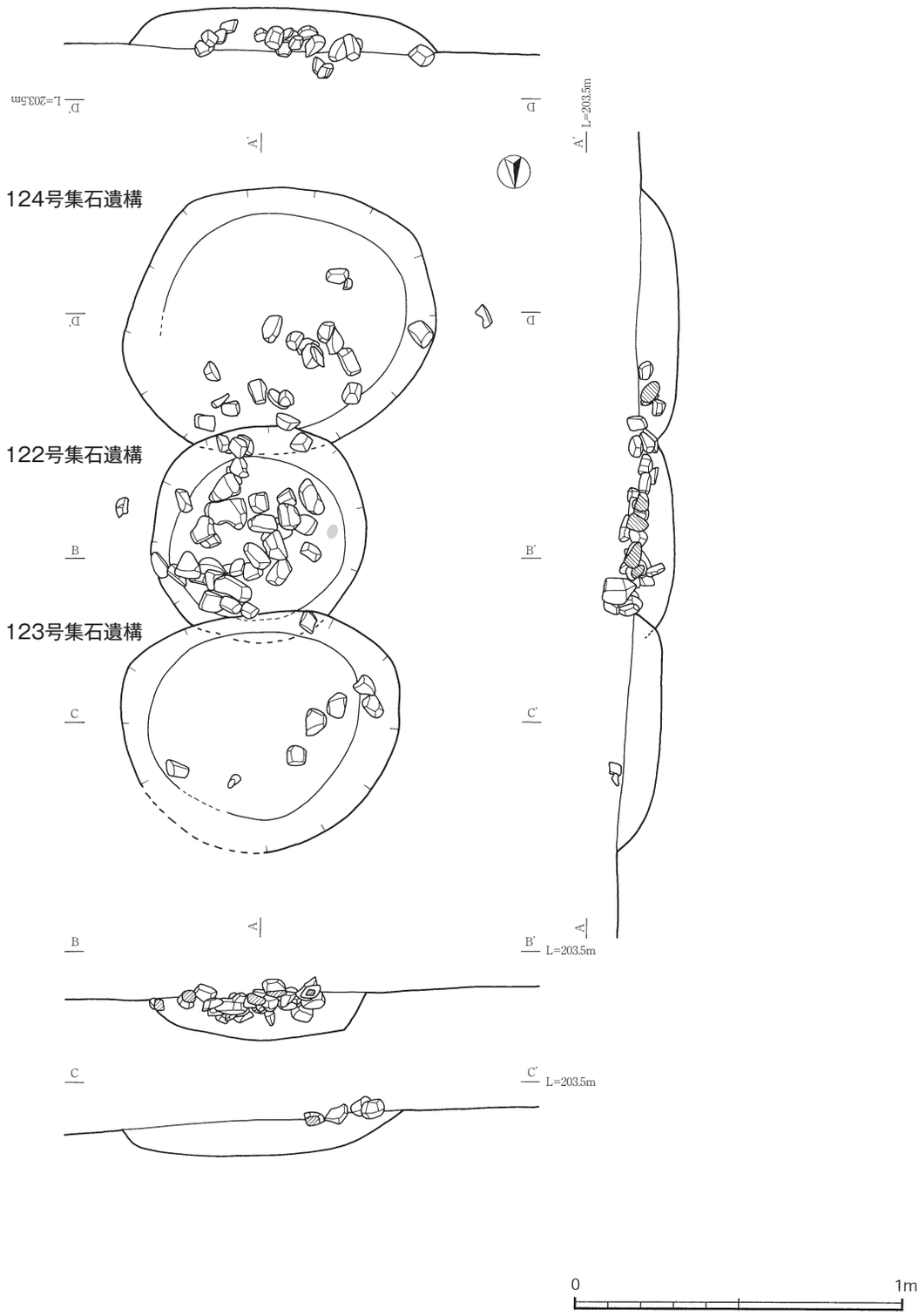
122～124号集石遺構（第115図）

３基とも円形の浅い皿状を呈する掘り込みを有し，M・N-21区で検出した。いずれの集石遺構も掘り込みの床面と礫の集中部分には若干のレベル差を伴う。

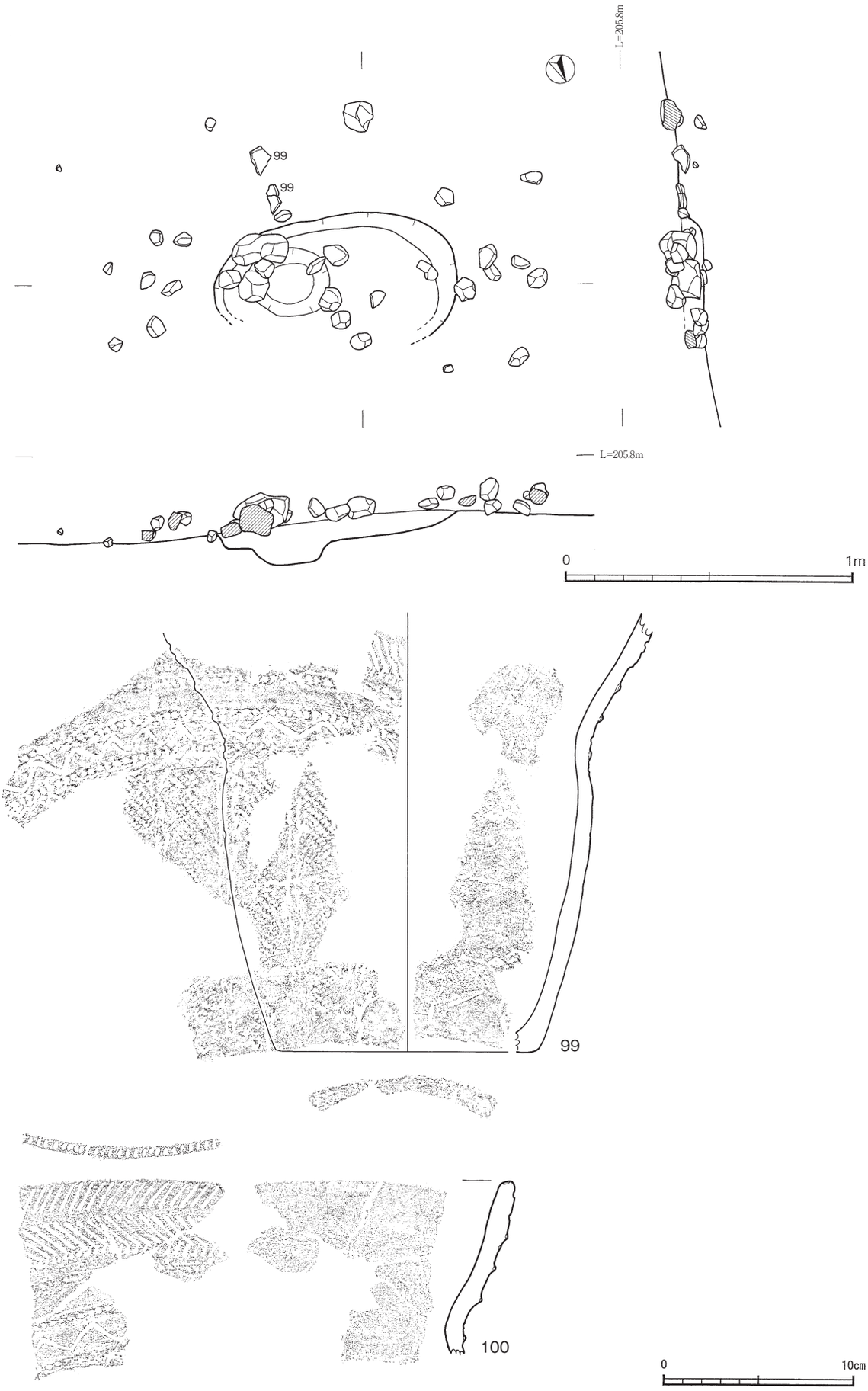
122号集石遺構は５～10cm程のやや大きめの礫が集中し，被熱による破砕礫が多い。集中部の下位に掘り込みがあり，埋土は炭化物や黄色パミスを含む黒褐色土で，



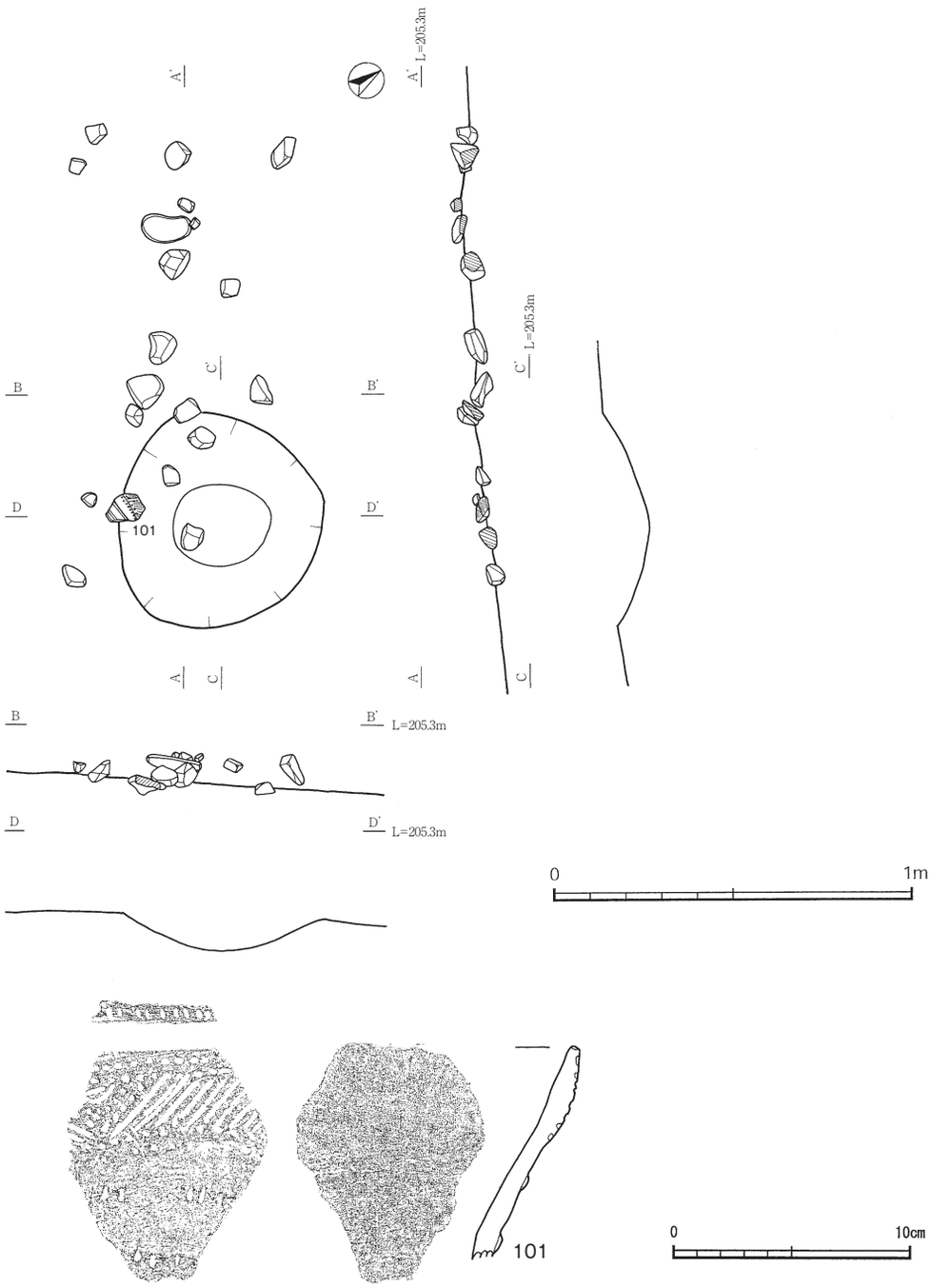
第 114 図　116～121 号集石遺構



第 115 図　122～124 号集石遺構



第 116 図　125 号集石遺構・出土遺物



第 117 図　126 号集石遺構・出土遺物

軟らかい黒色土の小ブロックが少量混在する。出土した土器はいずれも小片であり，深浦式土器と思われる連点文を有する土器やXX類土器の小片であった。また，構成礫として転用された磨石が２点含まれていた。

123 号集石遺構は 10cm大の礫で構成されるが，点数は最も少ない。122 号集石遺構を切っている。掘り込みの埋土は暗茶褐色土で軟らかく，茶褐色土の小ブロックや黄色パミス，及び炭化物が多量に含まれる。関連する遺物は出土していない。

124 号集石遺構は 10cm大の礫で構成され，やや集中する部分もみられるが，全体的にはまばらな密度である。礫は被熱しているが，炭化物は少ない。掘り込みの埋土は茶褐色土主体で，黄色・黒褐色土の小ブロック及び黄色パミスが多く含まれる。関連する遺物は，磨石片が構成礫として転用されていた。また，水晶のフレイクが出土した。

いずれの集石遺構も掘り込みの大きさに対して礫数が少ないため，使用後に礫を掻き出したり取り出したりした可能性が想定される。切り合い関係から古い順に 124 号・122 号・123 号集石遺構となる。

125 号集石遺構（第 116 図）

G-24 区で検出した。遺跡内でも比較的標高が高い位置にあたり，周辺には集石遺構が多数存在する。長軸 80cm・短軸約 50cm（推定）・深さ最大 14cmの楕円形の掘り込みを伴い，一部が径約 20cmのピット状に一段深くなっている。構成礫は５～８cm大が中心であるが，20cm程のやや大型の礫を数個含む。大きめの礫は，一段深くなるピット状の掘り込みの周辺にまとまっていた。

掘り込みの埋土は暗茶褐色で，黄色パミスを多量，白色パミスを少量含む。また，黒褐色土の小ブロックも少量含まれていた。礫のまとまりと掘り込みの床面にはレベル差がある。

集石遺構内から出土した２点の土器片と包含層出土の土器片が接合したものが 99 である。口縁部付近から底部まで残存する。頸部で屈曲し，大きくラッパ状に口縁部は開く。胴部は緩やかにすぼまる。口縁部付近には逆「く」字文がみられ，ヘラ状の工具によって押圧されたような形状である。頸部には３条の突帯が巡り，刻みが施される。また，波状の沈線文が描かれ，胴部以下は縦位に結節縄文が全面に施されると考えられる。胎土は白色・黄褐色の粒子が目立つが比較的粒径は整っており，焼成も良好である。XW類土器に比定される。100 は包含層出土であるが，99 と同一個体と考えられる。口唇部はやや丸みを帯びているが平坦面を作出しており，刻みが施される。また，周辺に散在する礫に磨石片と思われるものがあり，構成礫として転用された可能性がある。

126 号集石遺構（第 117 図）

H-24 区で検出した。緩やかに北側に下る地形である。周辺にも多くの礫が散在しており，本集石遺構からの散礫であった可能性もある。径約 60cm・深さ 16cmの掘り込みを伴う。掘り込みの縁は不明瞭であったが，平面プランはほぼ円形であった。構成礫は５～８cm大の礫が主体を占め，10cmを超える円礫が数点ある。掘り込みの西側に礫が散在し，重なりはない。また，大部分の礫は被熱している。これらのことから，礫が中心部分から掻き出された可能性も想定される。

掘り込みの埋土は暗茶褐色土主体で黄色パミスを含みやや粘性のある砂質土で，炭化物がわずかに含まれる。また，掘り込みの中央部では，１～２cmのアカホヤ火山灰ブロックが混ざっていた。

集石遺構内から土器が１点出土した。101 は口縁部から頸部までが残存する。口縁部はやや肥厚し，わずかに内湾する。口縁部は横位の刺突文を枠とし，その間を斜位の沈線文で埋めている。頸部に２段の突帯を有し，刻みが施される。胎土には白色粒が多量に含まれる。XW類土器に比定される。また，構成礫の中に磨石片と考えられるものが１点含まれていた。

127 号集石遺構（第 118 図）

G-24 区で検出した。長軸 95cm・短軸 72cmの掘り込みを伴い，その内部に礫が散在する。検出面からの掘り込みは８cmと浅いが，礫の堆積状況から考えれば，より上位から掘り込まれていたと考えられる。構成礫は 10cm程が主体であり礫の密度は低く，重層的でもない。

関連する遺物は，XW類土器と考えられる胴部片が２点出土した。

128 号集石遺構（第 118 図）

M-16 区，Ⅵ層とⅦ層の境界部で検出した。長軸 70cm・短軸 50cm・深さ 10cmの掘り込みを伴い，その上位に礫が散在する。集石遺構を含む半径３ｍの範囲では，大ぶりの炭化物が広がっていた。構成礫は５cm程の大きさが主体を占め，集中部の赤化が激しく破砕礫も多い。

掘り込み内の埋土は黒褐色土が主体であり，茶褐色土が部分的に混在する。また，しまりがなく，黄色・白色のパミスを多く含んでいる。

関連する遺物は，掘り込みの近くでXX類土器の底部片が出土した。この土器片は礫の検出面よりやや上位で出土している。

129 号集石遺構（第 118 図）

K・L-21 区で検出した。長軸 52cm・短軸 33cm・深さ７cmの楕円形の浅い掘り込みが伴う。掘り込み内には樹根が入り込んでおり，床面は不安定であった。礫は掘り込みの床面よりも高いレベルにまとまっており，礫同士の重なりもほとんどみられず密度が低い。構成礫は５cm程の大きさのものが主体であり，数点 10cmを超えるものが含まれる。

掘り込みの埋土は，Ⅶ層の土にやや茶色の土が混ざり，炭化物を含んでいる。

関連する遺物は出土していない。

130 号集石遺構（第 118 図）

H-23 区で検出した。径約 30cm・深さ 6cmの楕円形の浅い掘り込みを伴い，礫が内部に集中する。掘り込みの検出面よりも礫の検出面が上位であるため，本来はもう少し高いレベルから掘り込まれていたと考えられる。構成礫は５～８cm大の被熱破砕礫が主体をなし，礫数も少なく小規模である。

関連する遺物は出土していない。

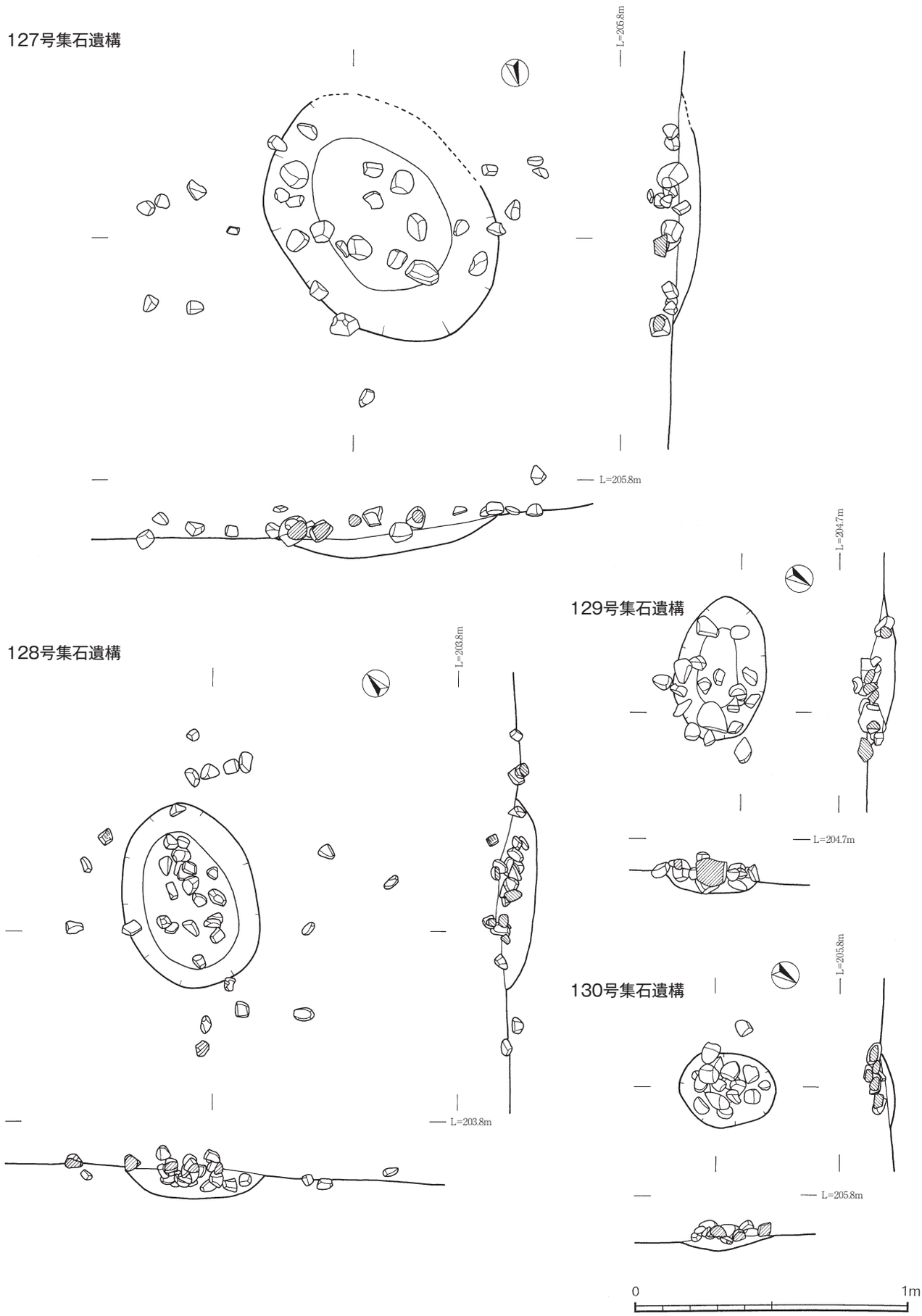
【Ⅳ　類】

本類は，Ⅰ～Ⅲ類に該当しない一群である。

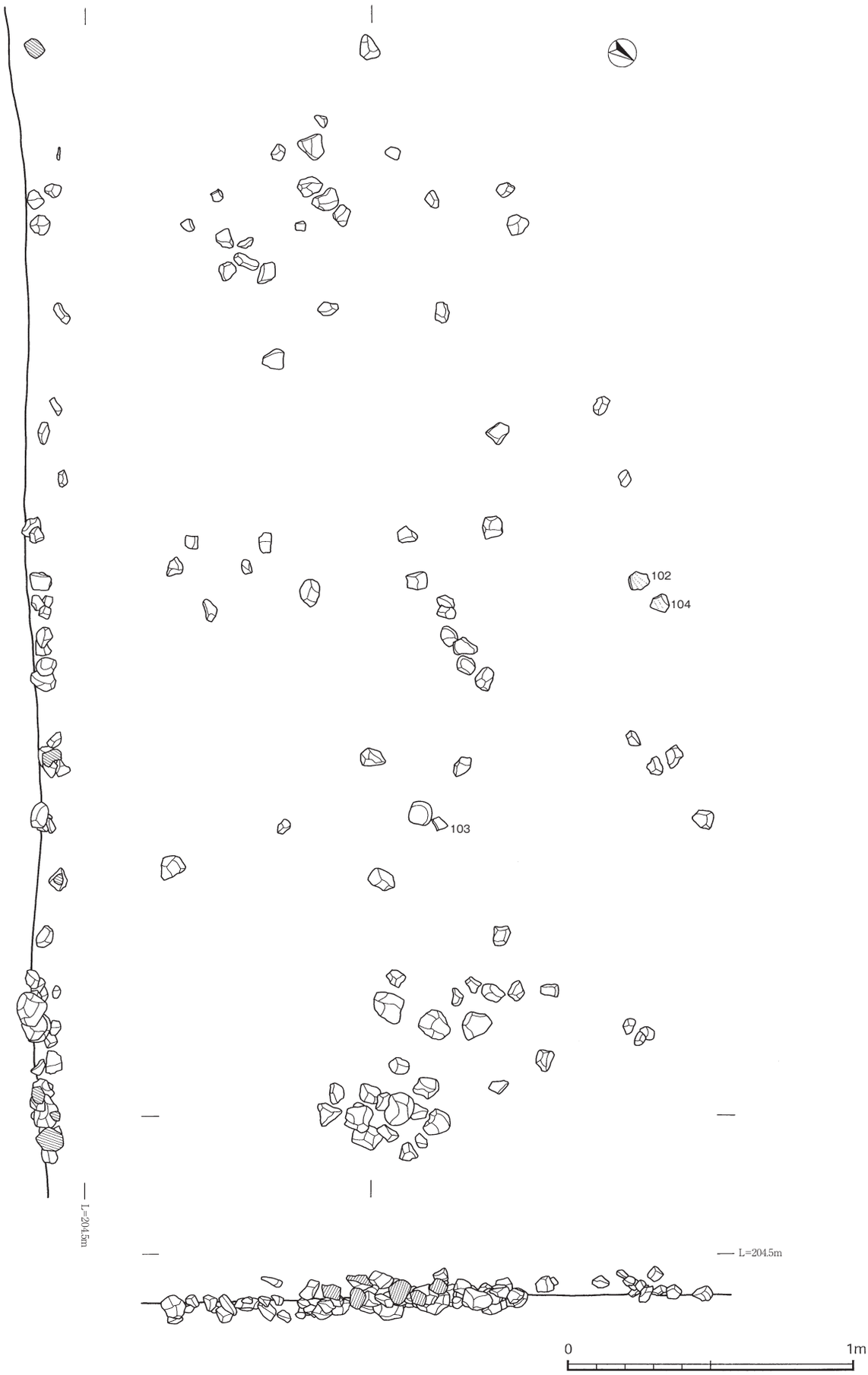
131 号集石遺構（第 119・120 図）

G-14 区で検出した。長軸 395cm・短軸 195cmの範囲に礫が広がる。東側にややまとまる部分がみられ，集石遺構の本体部分であった可能性もある。しかし，礫の堆積はさほど重層的ではなく，掘り込みも確認されなかった。10～15cm程の小型の礫で構成される。

集石遺構内からは，数点の土器が確認された。102 は



第 118 図　127～130 号集石遺構



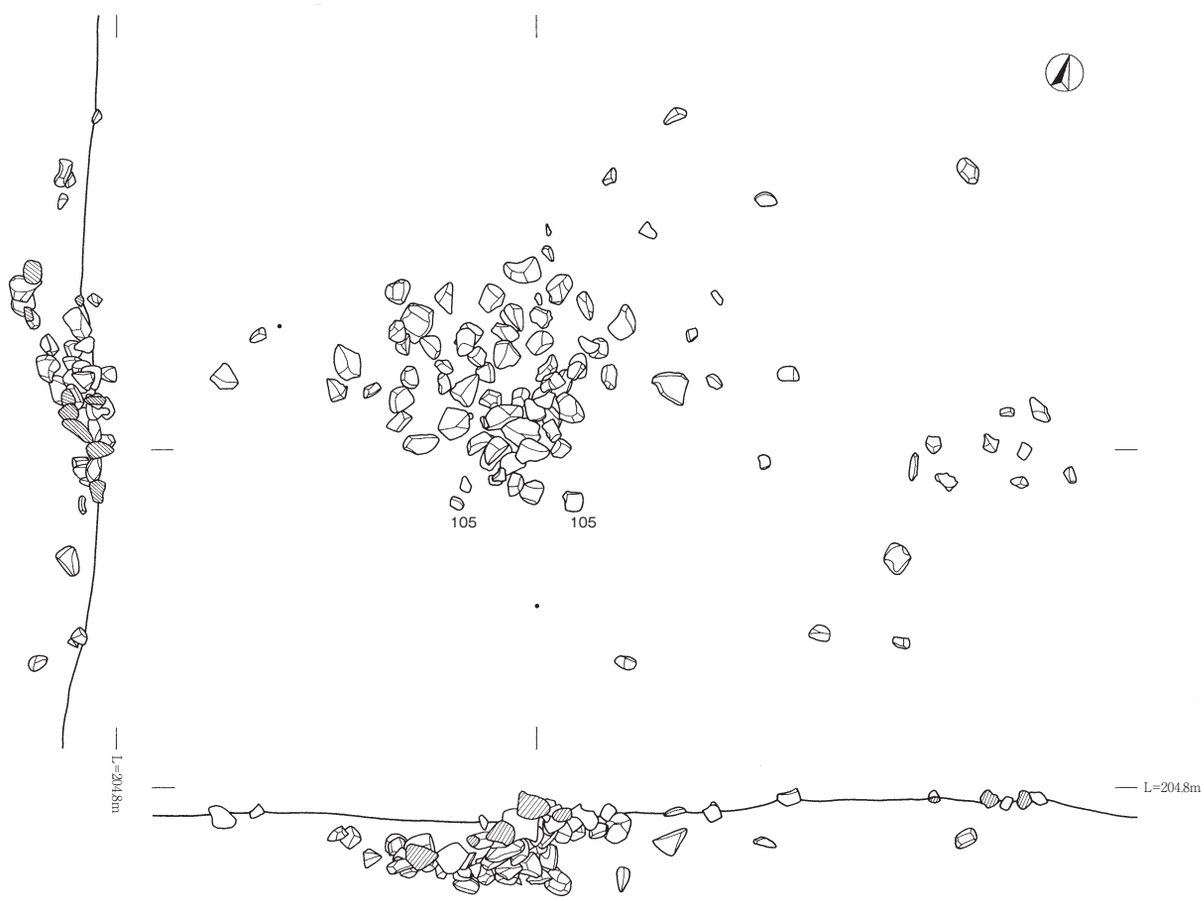
第 119 図　131 号集石遺構



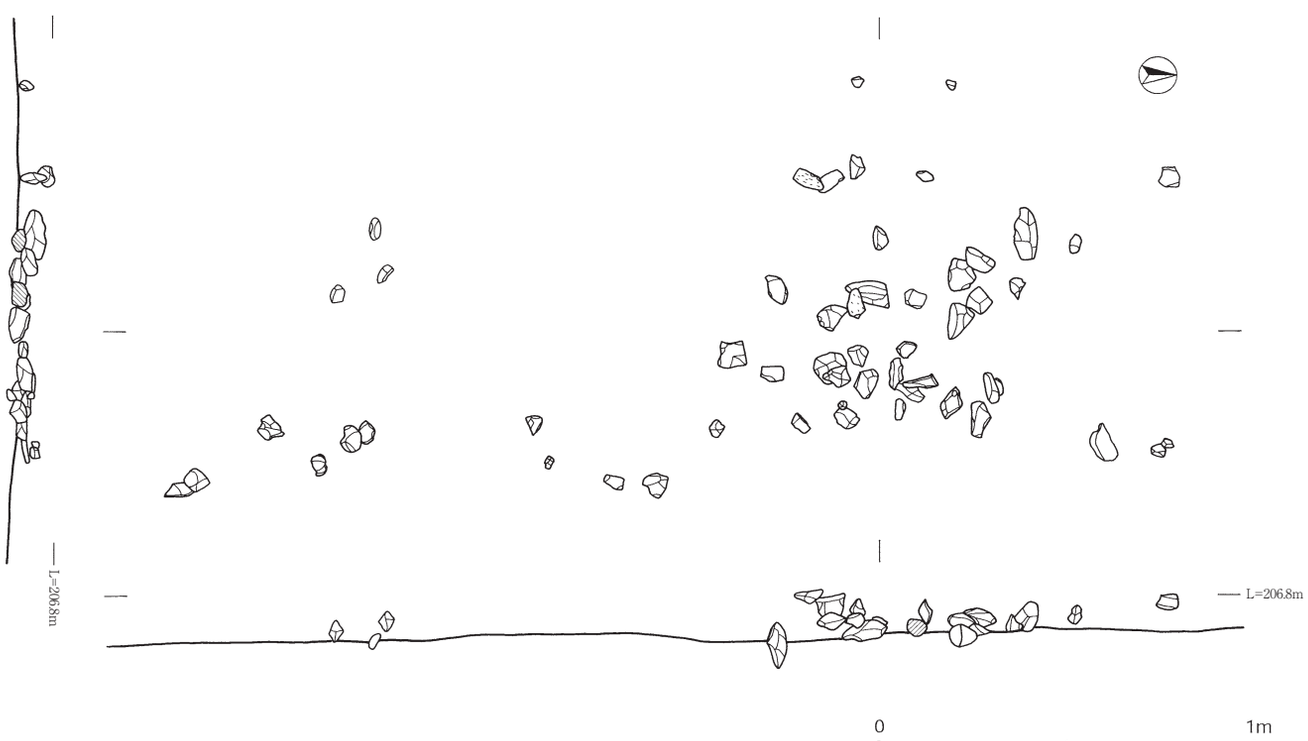
第 120 図　131 号集石遺構出土遺物

口縁部が残存する。口縁端部はやや内湾し，波状口縁の波頂部に近い部分と考えられる。口縁端部には羽状の短沈線文，その下位には斜位の貝殻腹縁刺突文を施す。胎土は白色粒が目立ち，やや粗い。Ⅶ類土器に比定される。103 は集石遺構内出土の土器片と包含層出土の土器片が接合したものである。口縁部から胴部が残存する。口縁部がわずかに内傾し，胴部以下はほぼ直線状にすぼまると考えられる。口唇部には内傾する平坦面をもつ。調整は丁寧なナデ調整が施される。口縁部は横位の貝殻腹縁刺突文，屈曲部より下は縦位の貝殻腹縁刺突文が施される。刺突文は非常に密であり，ほとんど隙間なく充填されている。Ⅵ類土器に比定される。104 は集石遺構内から出土した底部片と包含層出土の土器と接合したものである。口縁部から底部まで接合し，全体の約３分の１が残存する。器形はやや口縁部が内湾し，底部に向かってすぼまるバケツ形を呈する。底面はやや上げ底である。口唇部はナデ調整により明瞭ではないものの，平坦面を作出している。口縁部下から底部付近まで貝殻腹縁刺突文が，鋸歯状に施される。各刺突文の両端は凹みが大きく，鋸歯状に施文する際に方向転換する部分に力がより加わったためと考えられる。胎土には径２～３㎜程の礫を多量に含む。Ⅵ類土器に比定される。その他，土器小

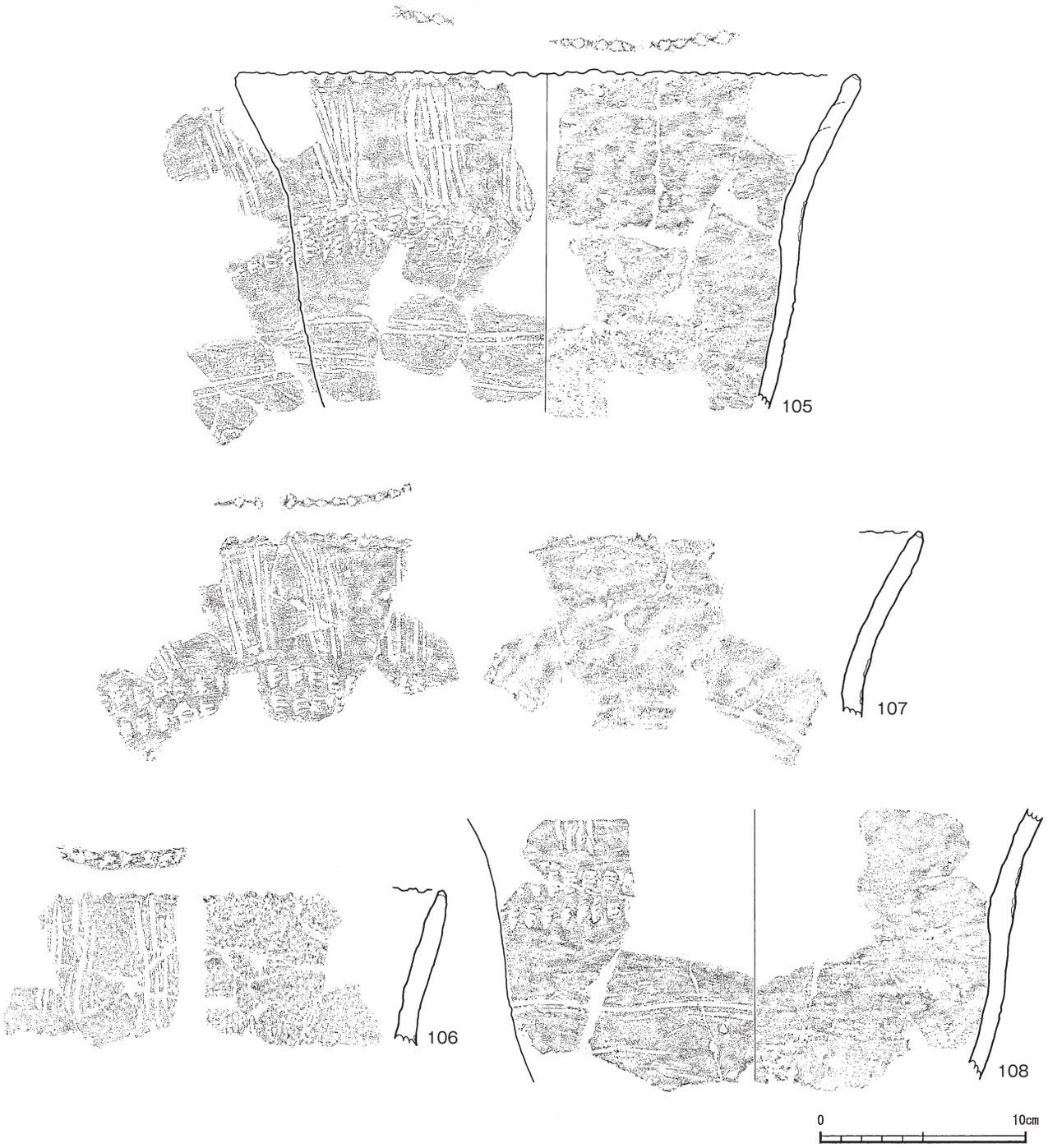
132号集石遺構



133号集石遺構



第 121 図　132～133 号集石遺構



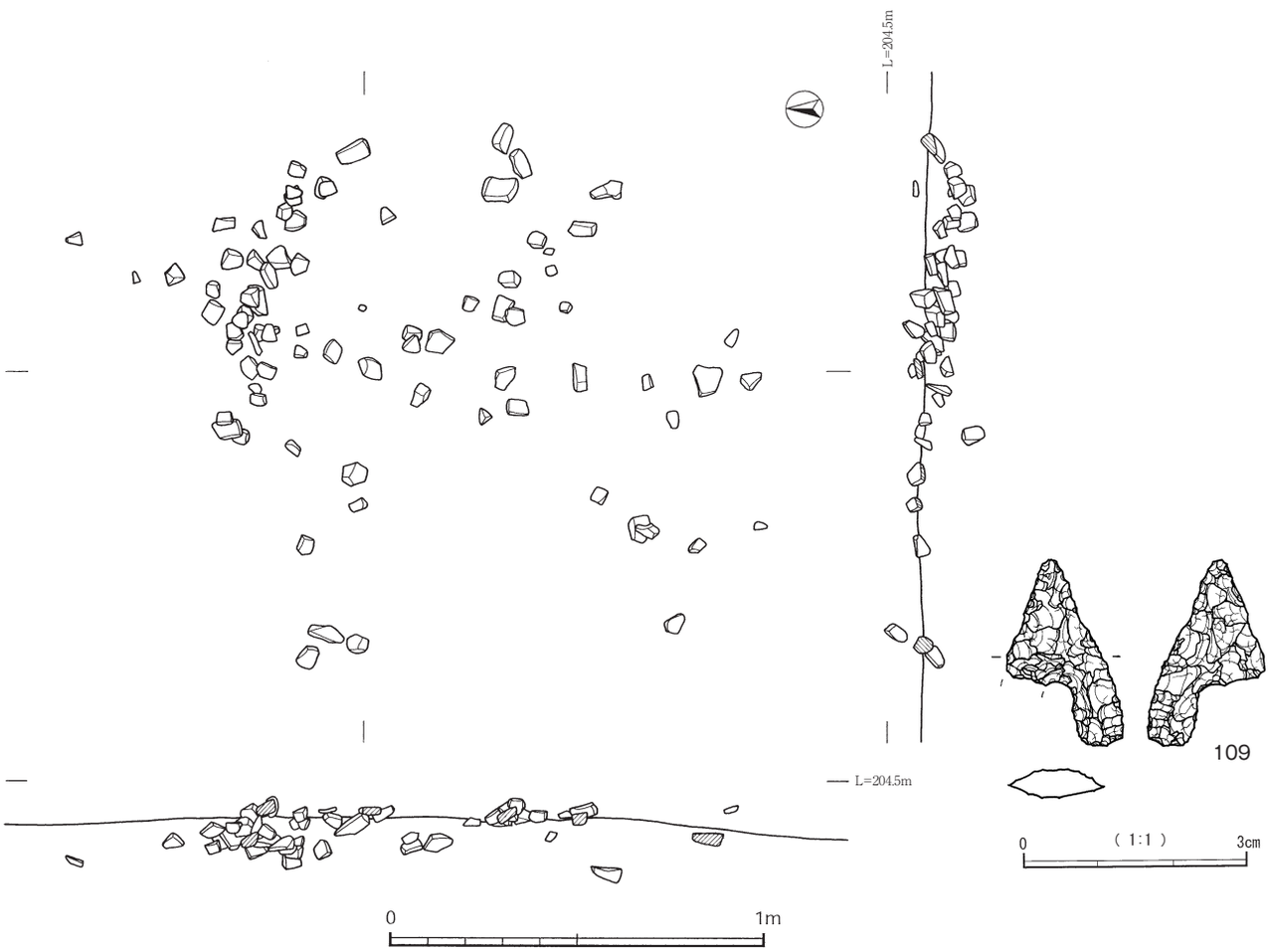
第 122 図　132 号集石遺構出土遺物

片が出土したが，詳細は不明である。

132 号集石遺構（第 121・122 図）

Ⅰ-19 区で検出した。長軸約 230cm・短軸 150cmの範囲に礫がまとまり，中でも径 60cm程の範囲に礫が集中する。断面からみても，この集中域が集石遺構の中心であり，そこから東側へ礫が掻き出されたような検出状況である。構成礫は５～10cm程の大きさのものが主体を占め，中心部では礫が重層的に堆積していた点から，掘り込みを伴っていた可能性も考えられる。構成礫は安山岩と凝灰岩がそれぞれ半数ずつであった。集石の下位に炭化物が混ざるが，集中はしていない。

集石遺構内から胴部と考えられる土器片と，チャートのチップが出土した。105 は集石遺構内出土の胴部片２点と包含層出土の土器が接合したものである。また，106～108 は 105 と同一個体と考えられる資料で，周辺から出土している。これらは頸部で緩やかに屈曲し，口縁



第 123 図　134 号集石遺構・出土遺物

部はほぼ直線的に広がる。内外面ともナデ調整であるが，内面の口縁部付近には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残る。口唇部は貝殻腹縁による深い刻みにより，小波状をなす。外面の屈曲部には２条の貝殻腹縁刺突文がめぐり，口縁部は縦位，胴部には横位の貝殻条痕文が施される。口縁部は文様間の空白が広く，１つの条痕の幅の単位が施文具の貝殻の幅にあたると考えられる。屈曲部下部及び口唇部外面にススが付着している。特徴からⅩⅥ類土器に比定される。

133 号集石遺構（第 121 図）

Ｅ-20 区で検出し，50 号集石遺構に隣接する。長軸 270cm・短軸 110cmの範囲に礫が広がる。礫は北側に集中し，南側の礫は広がる。構成礫は５～７cm程のものが主体をなす。

構成礫の一部に石皿や磨石片の破片と考えられるものが転用されていた。また，２点は軽石であった。

134 号集石遺構（第 123 図）

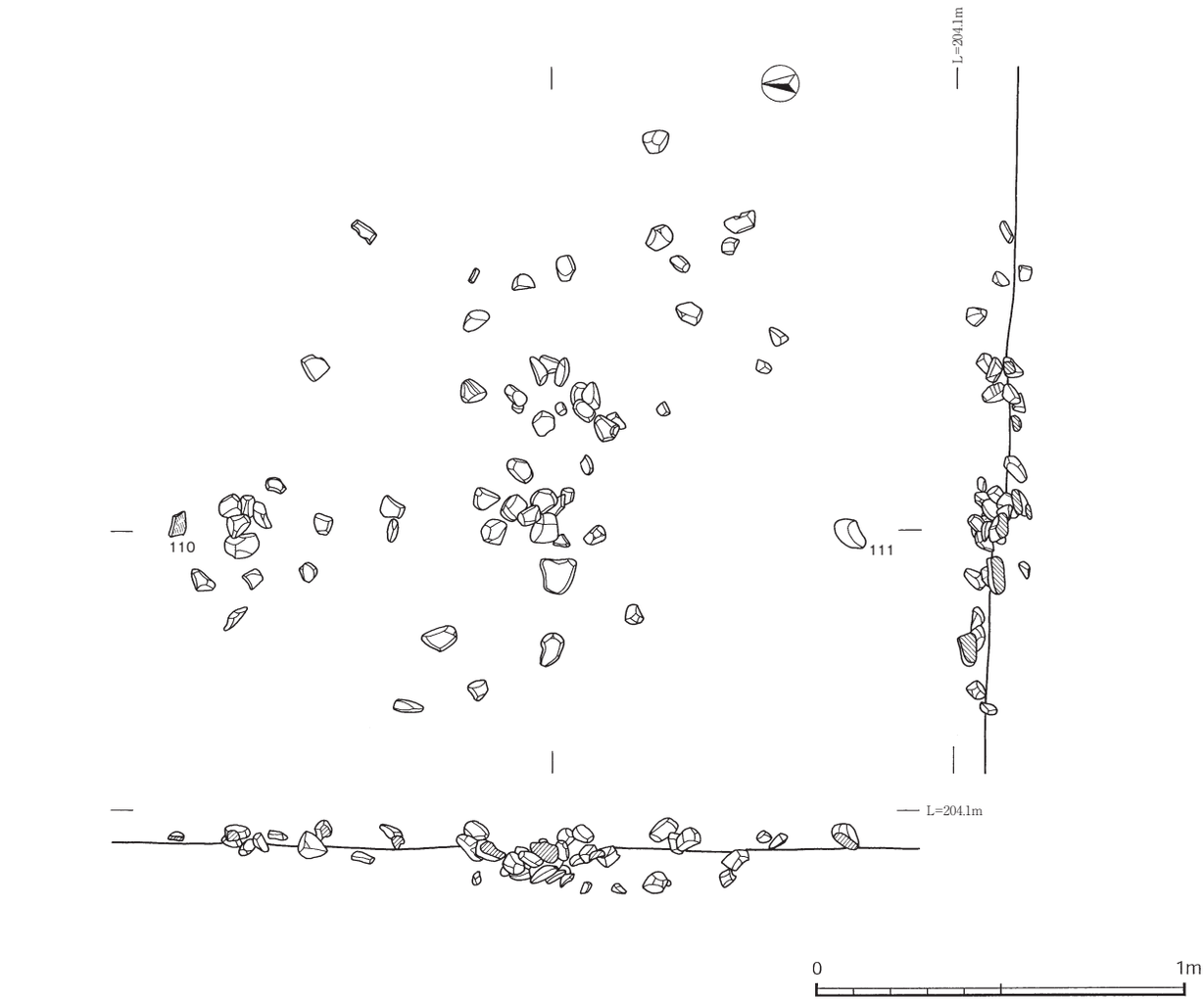
Ｋ-18 区で検出した。約 190cmの範囲に礫がまとまる。北側に礫が集中する傾向となるが，礫の重なりもさほどなく上下に若干のバラつきはあるものの，掘り込みは確認されなかった。構成礫は５～８cm程の大きさが主体であり，数点 10cm大のものが含まれる。礫の多くは安山岩で，数点砂岩・頁岩・凝灰岩が含まれる。また，磨石片が転用されていた。

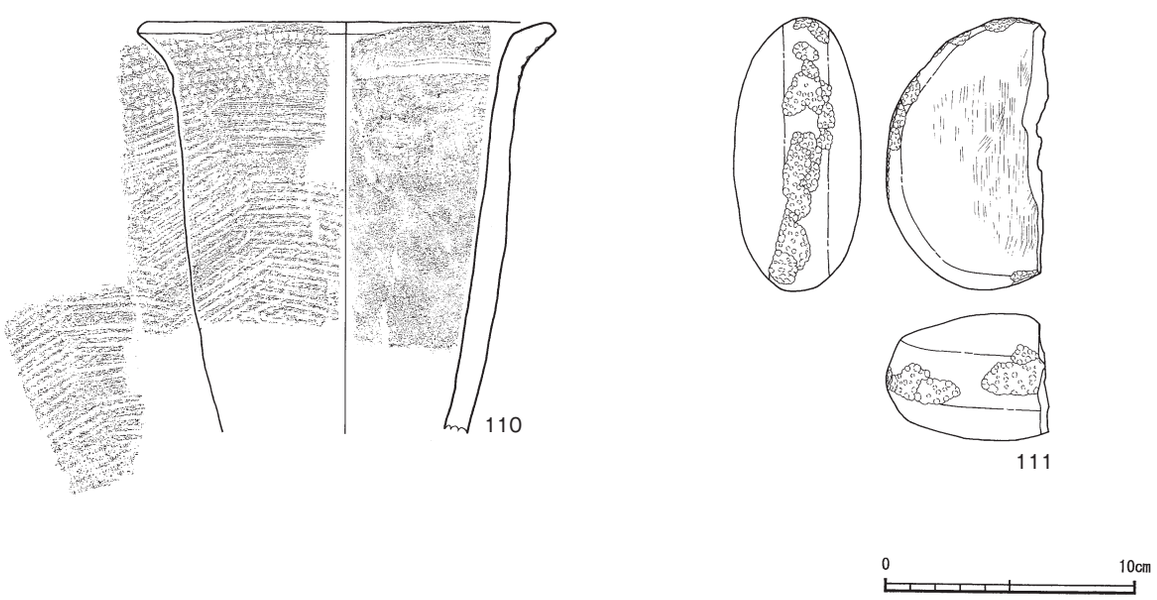
そのほかの関連する遺物は，Ⅻ類土器とⅩⅩ類土器の小片，チャートのチップ，黒曜石（姫島産）・チャート・頁岩のフレイク，チャートの使用痕剥片及び石鏃が出土した。109 は頁岩製の打製石鏃である。直線的な側縁で，左側の基部が欠損しているものの深い「Ｕ」字形の抉りをもつ。

135 号集石遺構（第 124 図）

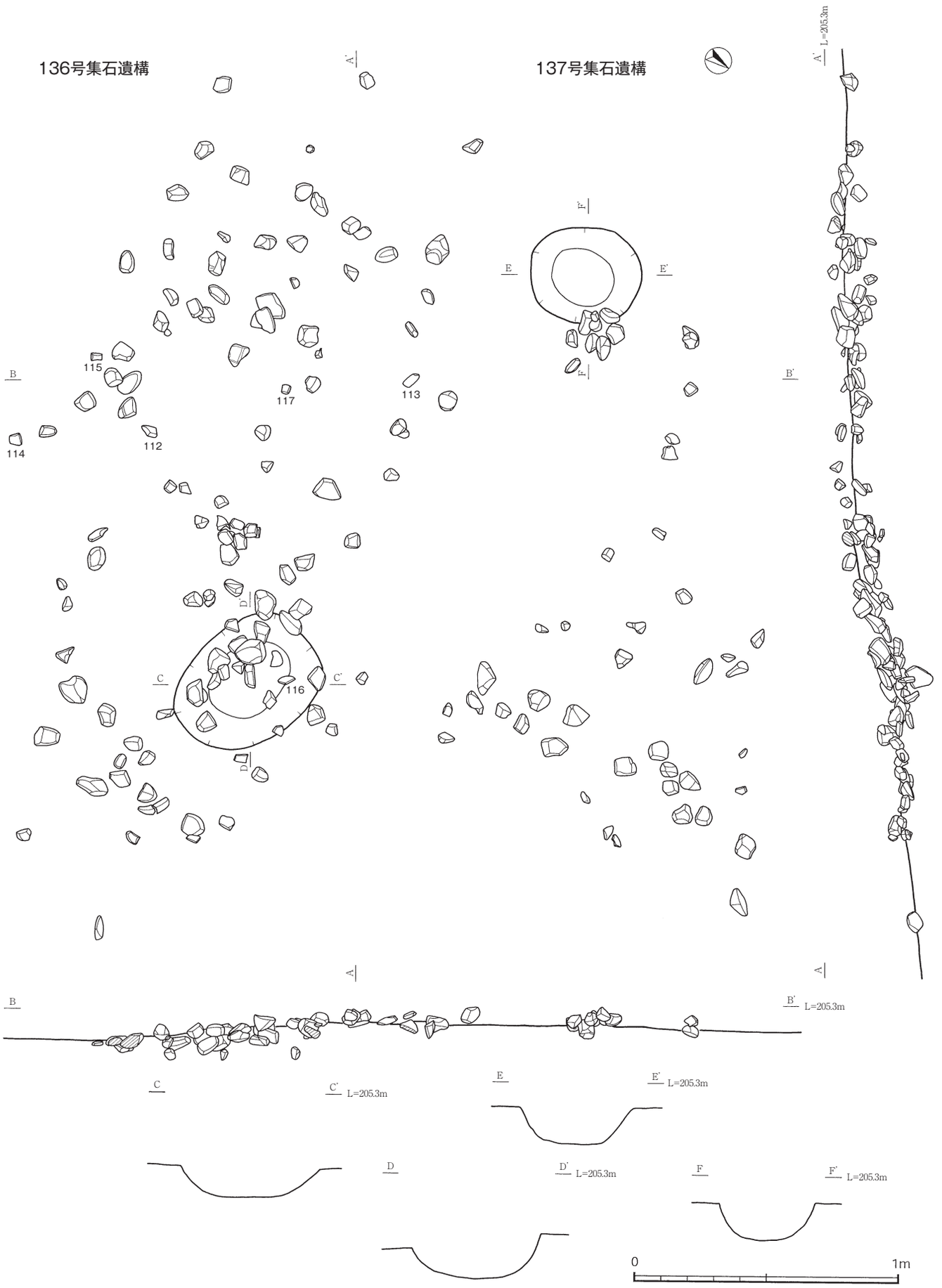
Ｅ-12 区で検出した。南側約２ｍに 78 号集石遺構が位置する。長軸 180cm・短軸 160cmの範囲に礫がまとまる。中心部分は礫の密度が高い。構成礫は５cm程の破砕した角礫が主体で，数点 10cm程の礫が散在する。中心部分では礫の重なりもみられるが，掘り込みは確認できなかった。

集石遺構内から口縁部から胴部が残存する 110 が出土した。胴部はほぼ直立するが，頸部で屈曲し緩やかに口縁部が外反する。口縁部の内面には，明瞭な稜をもつ。

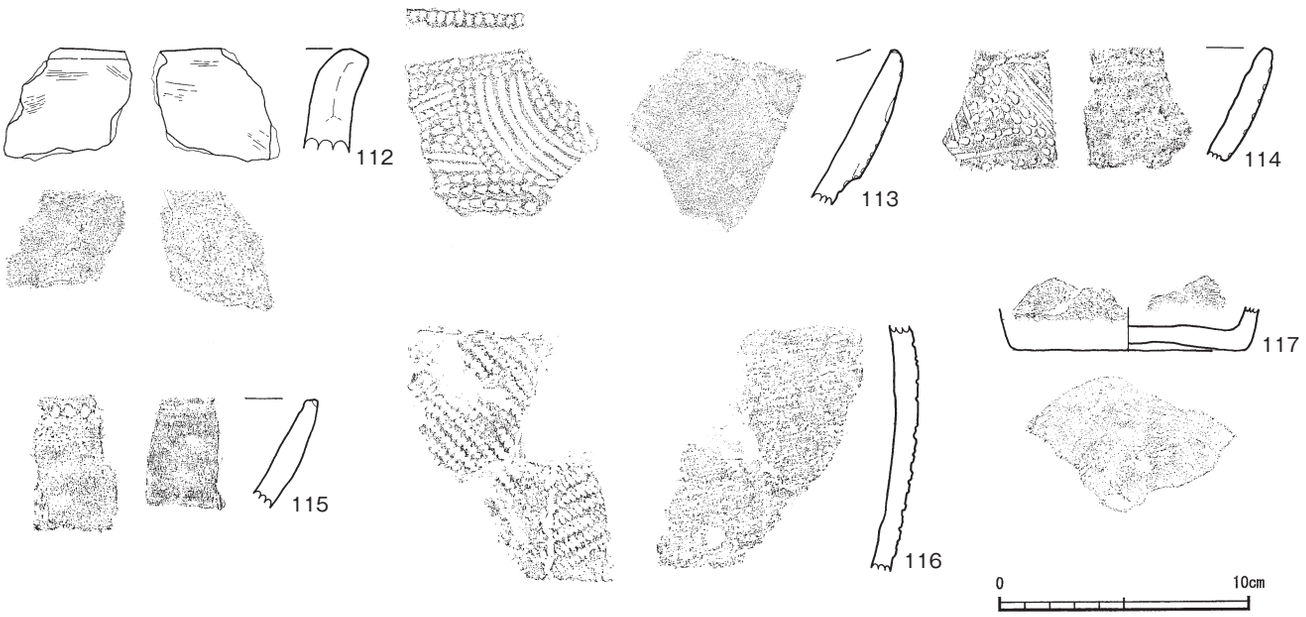




第 124 図　135 号集石遺構・出土遺物



第 125 図　136～137 号集石遺構



第 126 図　136～137 号集石遺構出土遺物

口縁部外面には横位の貝殻刺突文が密に施され，胴部は緩やかな綾杉状の条痕が施される。内面のナデ調整も丁寧であり，全体的に精緻な印象である。Ⅴ類土器に比定される。また，隣接して 111 の磨・敲石が出土し，構成礫として転用された可能性がある。凝灰岩製で右半分は欠損している。上・下・左側面には明瞭な敲打痕が確認できる。また，上面は擦痕が明瞭であり，下面よりも平坦である。比較的小型の製品である。

136・137 号集石遺構（第 125・126 図）

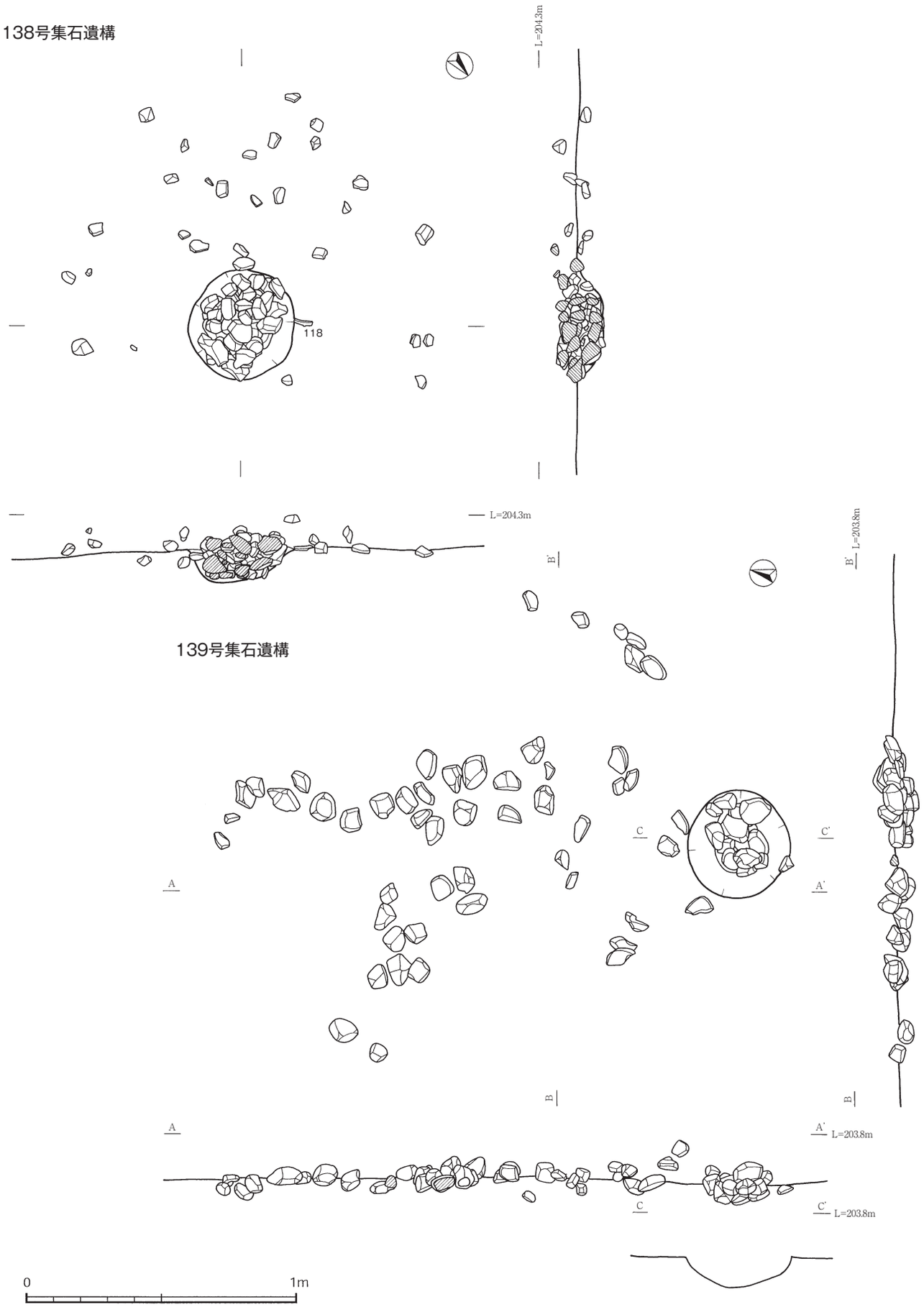
H-24 区で検出した。北側の谷へ向かって緩やかに傾斜する位置にある。土坑状の掘り込みが隣接して２基検出され，周辺には 10cm程の礫が散在する。破砕礫の割合は少ないが，被熱により変色したものが多い。136 号集石遺構は長軸 57cm・短軸 45cm・深さ 18cmの掘り込みを伴い，その上位で礫が多く出土しているのに対し，137 号集石遺構は径約 40cm・深さ 15cmの掘り込みの東側に礫が小規模にまとまっているのみである。また，両者の掘り込みの間には礫が散在しており，明確に両者の礫を区別するのは困難であった。

136 号集石遺構の掘り込みの埋土は暗茶褐色でやや粘質のある砂質土であり，白色・黄色パミスを多く含む。下位では炭化物が広くみられた。137 号集石遺構の掘り込みの埋土は黒褐色の砂質土で軟らかく，黄色・白色のパミスが多量に混ざる。炭化物が少量確認された。

集石遺構内からは小片も含め 10 数点の土器が出土した。112 は口縁部片である。やや端部が外反し，器壁は 1.8cmと分厚い。胎土には白色粒が目立つ。Ｘ類土器に比定される。113 は口縁部片で包含層出土の土器と接合した。文様帯は幅広く，口縁部を肥厚して作出されている。口唇部はやや平坦であり，刻みが施される。文様帯は沈線による曲線文とその間を充填するように刺突連点文が施される。明確ではないが，波状口縁をなす可能性がある。Ⅻ類に比定される。114 はラッパ状に開くと考えられる口縁部片である。口唇部はわずかに平坦面をもつ。内外面とも，丁寧なナデ調整である。外面には横位・斜位の沈線文と刺突文が施文される。Ⅻ類土器に比定される。115 は口縁部片である。ラッパ状に開き，わずかに内湾する器形と考えられる。内外面とも丁寧なナデ調整で，口唇部外面端部に刻みが施される。胎土には多量の白色粒が含まれる。116 は胴部片で 143 号集石遺構から出土した土器と接合した。厚みは一定であり，緩やかにカーブする器形である。外面には結節縄文が全面に施される。胎土には径１㎜大の白色・黄褐色粒を多く含む。Ⅻ類土器に比定される。117 は底部片である。立ち上がりまでが一部残存する。内外面ともナデ調整であるが，底面はやや凹凸がある。詳細は不明であるが，器壁が薄いことや外面に文様がみられない点から，縄文早期後葉の可能性がある。早期中葉と後葉の２時期の遺物が出土しており，この２基の集石遺構が時期差である可能性も考えられるが，ほぼ同じレベルで礫が集中しているため，詳細な時期差は判断できなかった。

138 号集石遺構（第 127・129 図）

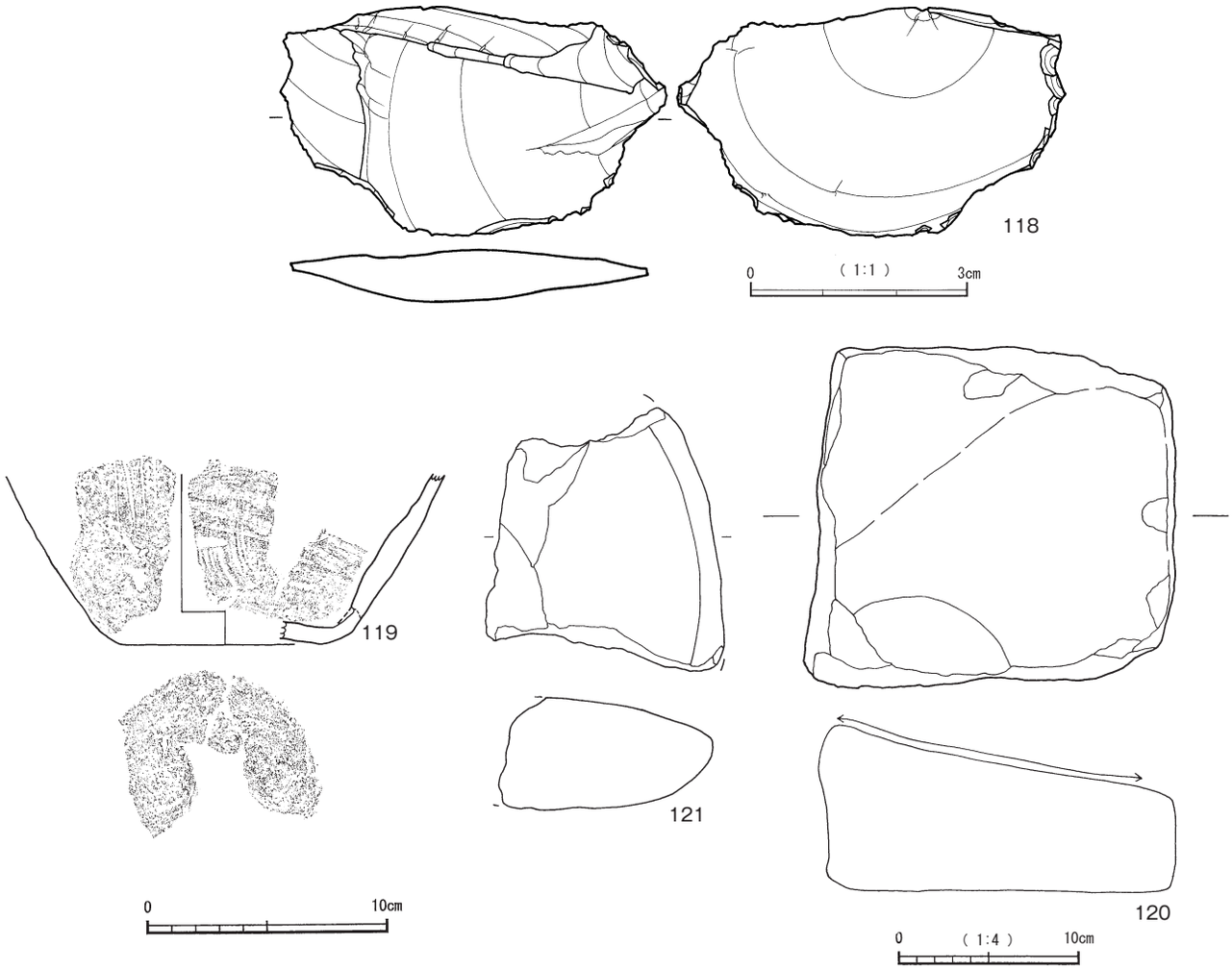
F-13 区で検出した。礫の広がりは長軸 140cm・短軸約 110cmを測り，径 40cm・深さ 11cmの掘り込みを伴う。構成礫は 5～10cm大の礫が主体で，密に重なる。南側に礫が散乱しており，掻き出された礫が散乱した可能性も



第 127 図　138～139 号集石遺構



第 128 図　140～141 号集石遺構



第 129 図　138・141 号集石遺構出土遺物

考えられる。

関連する遺物は，刺突連点文を有する土器小片，黒曜石とチャートのフレイクが出土した。118 は姫島産黒曜石のフレイクである。端部に微小な調整痕があり，剥片石器を製作しようとした可能性がある。

139 号集石遺構（第 127 図）

M・N-10・11 区で検出した。集石遺構の東側は調査区外であることから，さらに集石遺構の範囲が広がる可能性も考えられる。径約 40cm・深さ９cmの円形の浅い掘り込みを伴い，内部には礫がまとまって確認された。また，北側に礫が帯状に広がる。掘り込みの規模に対して礫数は多いため，掘り込みから掻き出したものかの断定はできなかった。構成礫は掘り込み内外とも 10cm程のやや大型の丸みを帯びた角礫が主体をなす。被熱により表面が赤化したものが多く，破砕礫や表面が劣化したものも認められた。また，破砕により欠損しているものも多かった。

礫間ではやや大粒な炭化物が検出され，数点の敲石や石皿と考えられる破片が構成礫として転用されていた。

埋土中から検出した炭化物の年代測定を行ったところ，6,391 － 6,236cal ＢＣの年代値が得られた。

140 号集石遺構（第 128 図）

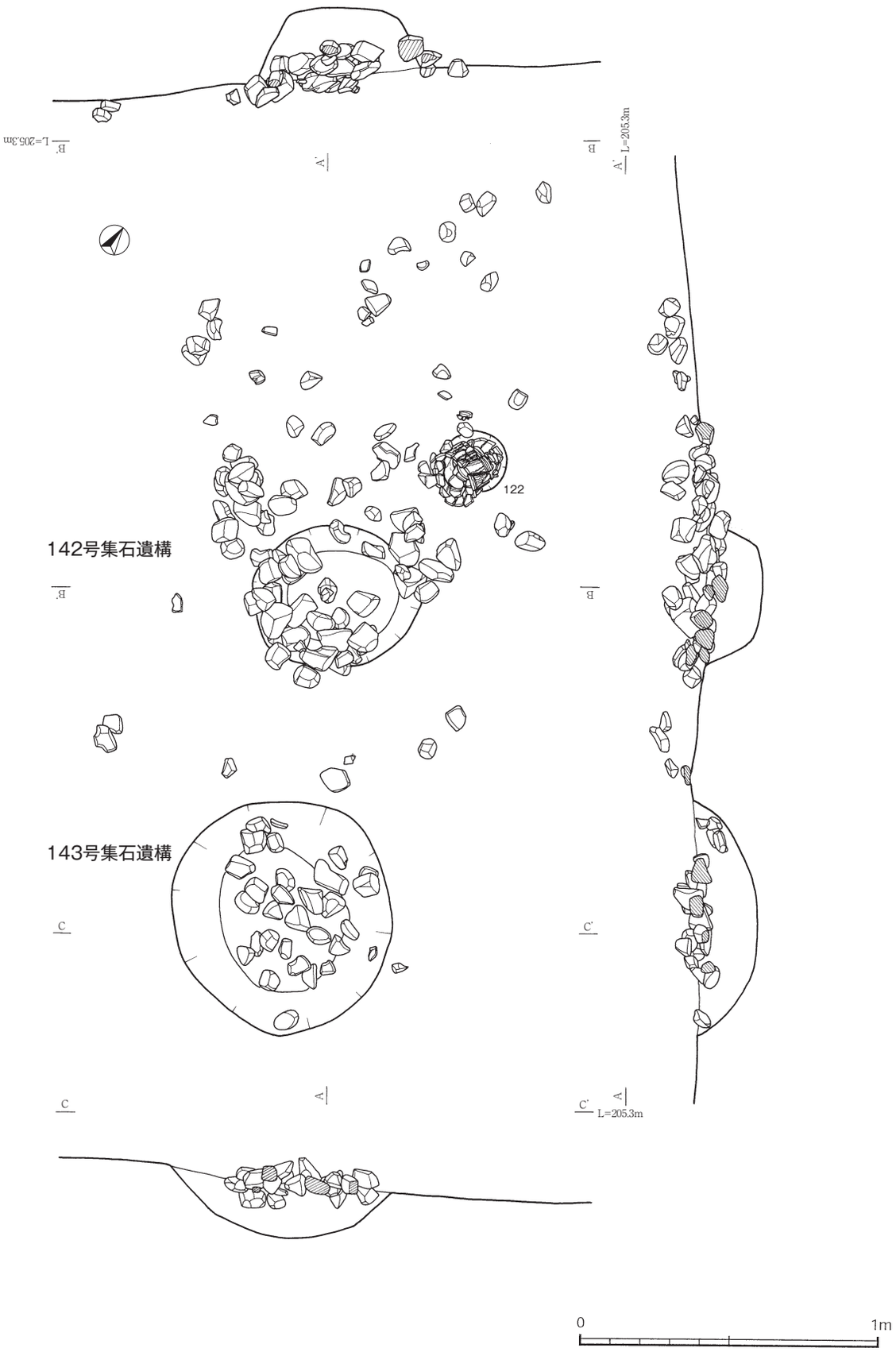
H-３区で検出した。長軸 170cm・短軸 115cmの範囲に礫は広がる。集石遺構の南側の約 50cm程の範囲に礫が集中する部分が認められ，浅い皿状の掘り込みがあった可能性を想定した。構成礫は５～８cm程のものが主体である。

掘り込みの埋土はⅦ層の黒色土でしまりがあり硬く，粘質をもつ。１～５㎜の白色と橙色のパミスを多く含み，わずかに炭化物もみられる。

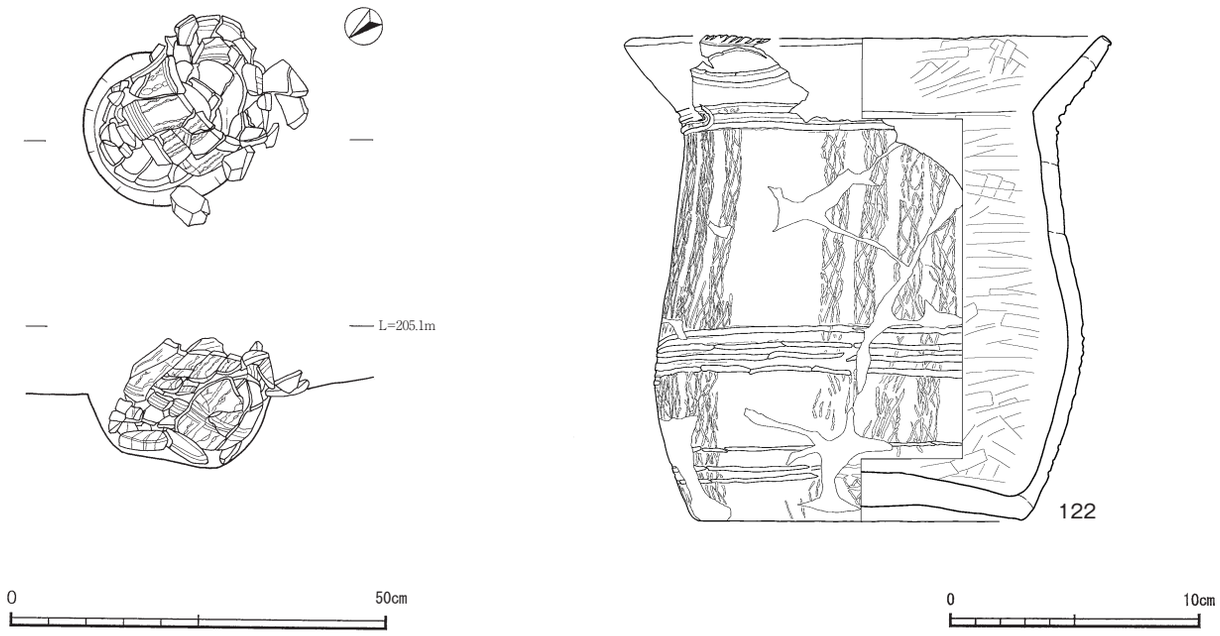
関連する遺物は，XX類土器の小片が出土した。

141 号集石遺構（第 128・129 図）

K-21 区で検出した。礫はやや広い範囲に散在するが，中心部は 20～25cm程の大型の礫がまとまる。それ以外の礫は 15cm大のものが数点で，５cm大の小型の礫が散在する。安山岩が構成礫の主体を占め，砂岩などが少量



第 130 図　142～143 号集石遺構



第 131 図　142 号集石遺構出土遺物

含まれる。礫は被熱痕が認められるものが多い。また，掘り込みが伴う可能性もあり，その床面に大型礫が配置されたような出土状況である。大型礫は被熱痕が明瞭であり，崩れやすい部分もある。

集石遺構内及び隣接して 119 の底部が出土した。底部から胴部へは外開きに立ち上がる。胴部が丸く膨らむ深鉢形土器か，あるいは壺形土器の可能性が考えられる。内面には粘土の接合線が明瞭に残っている。底部は若干の上げ底になる。外面には縦位の沈線文が施されている。詳細な型式は判断できないが，形状から早期後葉のものと考えられる。120・121 は石皿が転用されたものである。120 は凝灰岩製の石皿である。方形の台石状であり，裏面は平坦である。表面・裏面とも表面が平滑であり，使用によるものと考えられる。また，表面はやや凹んでいる。側面は表裏面ほどではないものの，破断面の角が取れて磨耗している。そのため，使用後に破砕したのではなく，使用時にはすでにこの大きさであった可能性がある。裏面にはススが沈着している。121 は凝灰岩製の石皿片であり，一部しか残存していない。裏面は平坦で安定しており，表面は中央付近がわずかに磨耗で平滑になっている。破断面も赤化しているため，集石内の礫として転用された際の被熱の影響と考えられる。

142・143 号集石遺構（第 130・131 図）

いずれの集石遺構も H-24 区で検出した。142 号集石遺構は長軸 56cm・短軸 47cm・深さ 22cmの掘り込みを伴い，掘り込みの上半に 10cm大の礫が集中する。また，礫は掘り込みの西側にも広がっており，礫の間に土器片を含む。

掘り込みの埋土は暗茶褐色土が主体で，礫間の埋土は砂質が強くやわらかい。

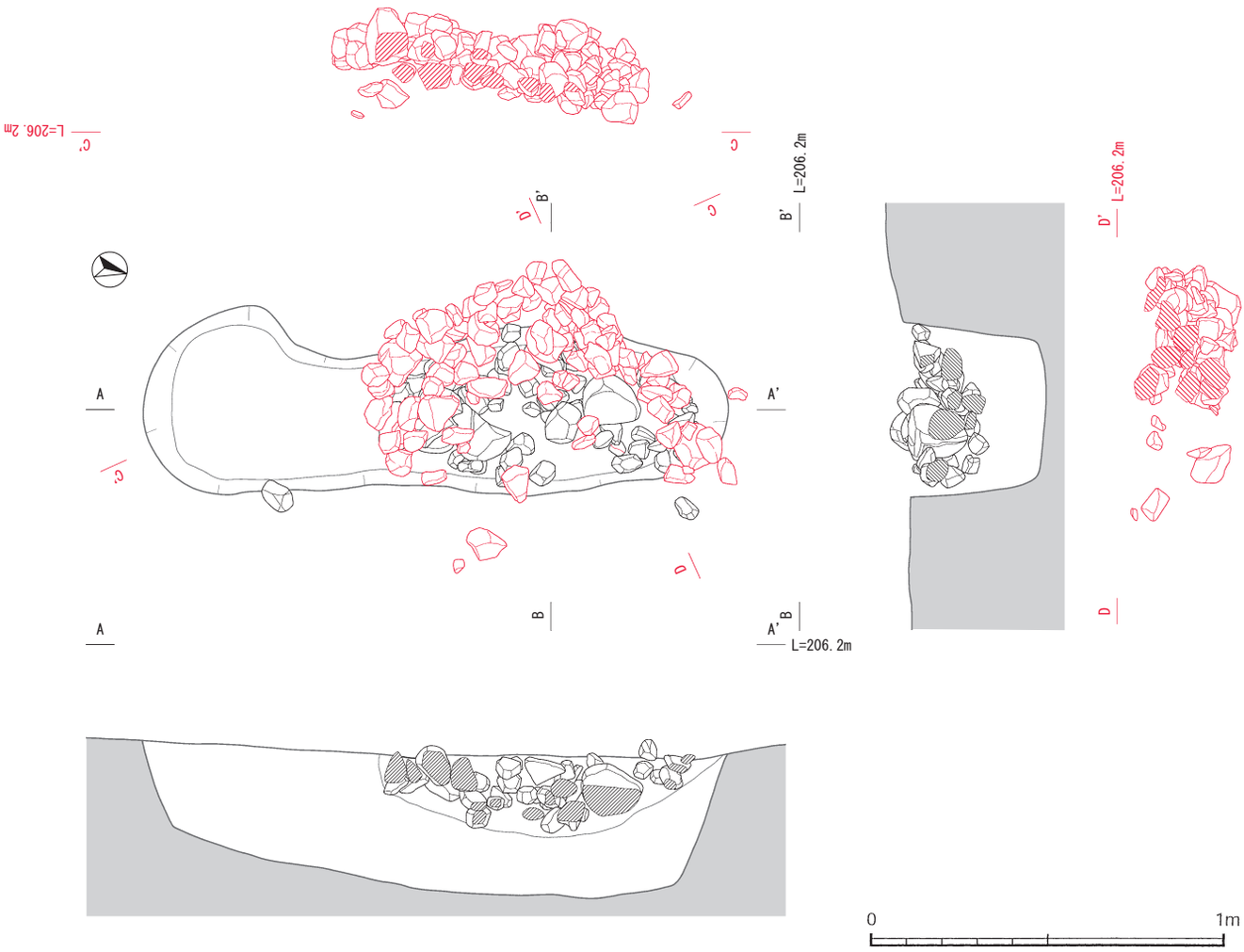
143 号集石遺構は長軸 80cm・短軸 73cm・深さ 20cmの掘り込みを伴い，掘り込みの上半に５～８cm程の礫が集中する。142 号集石遺構と掘り込みの形状や規模が異なるものの，掘り込みの深さやと礫の堆積状況は類似する。

掘り込みの埋土は黄色パミスや白色パミスを含む暗褐色土が主体で，底面近くは暗茶褐色土となる。

143 号集石遺構の掘り込み内から土器片が出土し，136 号集石遺構から出土した土器片と接合したものがXV類の 116 である。143 号集石遺構と 136 号集石遺構は近接した時期と考えられる。142 号集石遺構に隣接して，122 が出土した。検出面がほぼ同じであることから 142 号集石遺構に伴うものと判断した。口縁部から底部まで残存する完形品である。頸部で明瞭な稜をもって屈曲し，外反する。胴部下半に最大径を有し，全体でも下に重心がくる器形である。底部は上げ底である。口唇部には平坦面が作出され，刻みが施される。口縁部は曲線状の沈線文がわずかに確認でき，屈曲部以下は縦位の網目状撚糸文が施され，その上から横位の沈線文が巡る。沈線文は頸部及び胴部下半にそれぞれ数条単位で施される。XV類土器に比定される。

144 号集石遺構（第 132 図）

E-21 区で検出した。18 号連穴土坑と重複し，連穴土坑が埋没する過程で集石遺構が形成されたと考えられる。長軸 100cm・短軸 82cmの範囲に礫がまとまり，西側を中心に弧状に礫が密集する。礫は重層的に堆積しており，土坑状の掘り込みが伴った可能性も考えられる。構



第 132 図　144 号集石遺構

成礫の主体は 10cm程の大きさで，間に５cm程の小型の礫が含まれる。

関連する遺物は，集石遺構内からⅡ類土器の口縁部小片，及び玉髄（CC2）の剥片が出土した。

(3)　Ⅵ層検出の集石遺構

Ⅵ層では，169 基の集石遺構を検出した。

以下，Ⅶ層検出の集石遺構と同様に，各分類のⅠ類から順に各集石遺構の特徴および出土遺物を取り上げる。

【Ⅰ　類】

本類は，集石遺構を構成する礫が集中しない一群である。

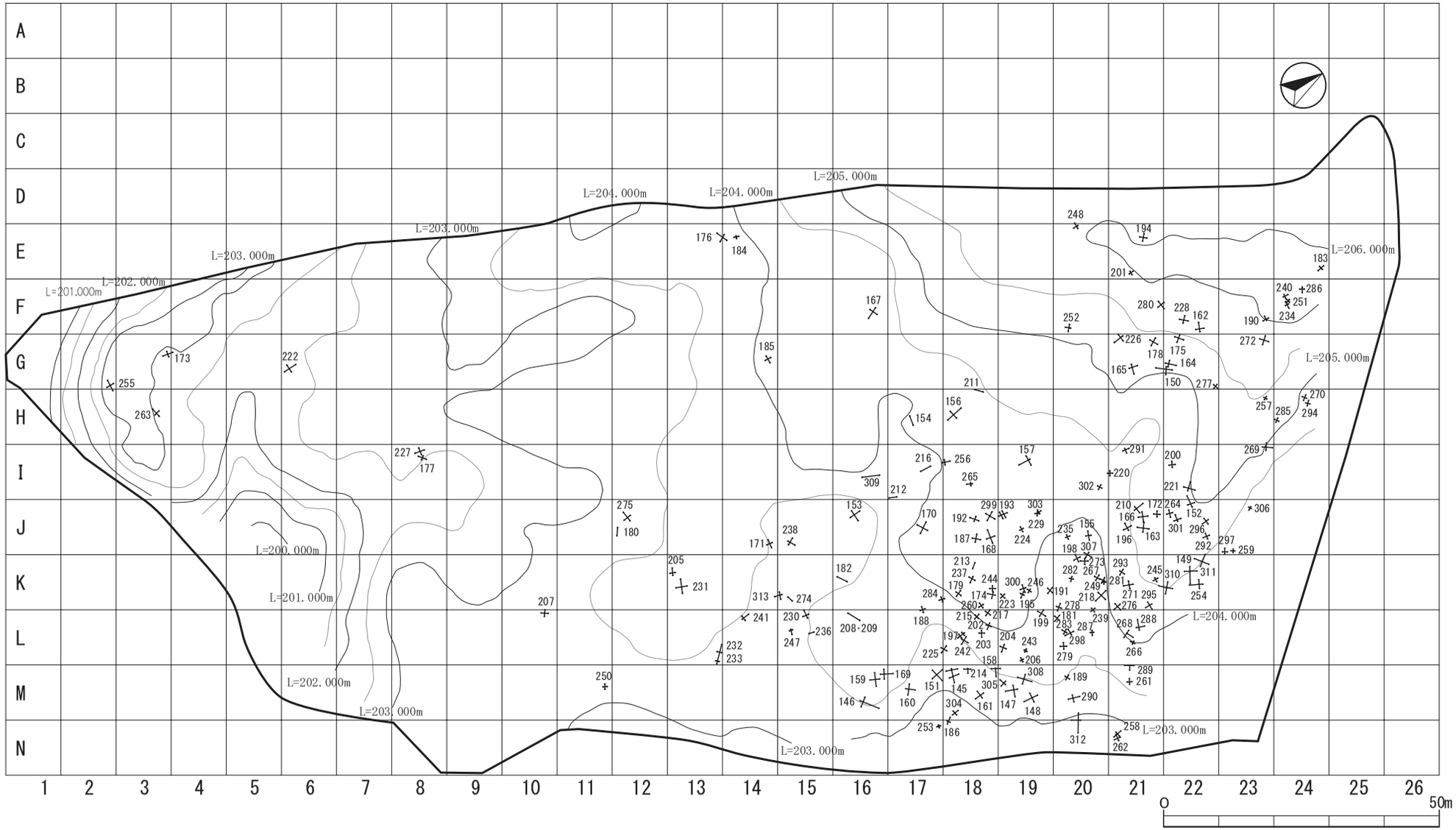
145 号集石遺構（第 134・135 図）

M-18 区で検出した。長軸約 260cm・短軸約 205cmの範囲に礫が広がる。２ヶ所で礫の集中部がみられるため，２基の集石遺構であった可能性も否定できない。構成礫は５cm程の大きさの砂岩が多く，被熱による破砕礫が目立つ。

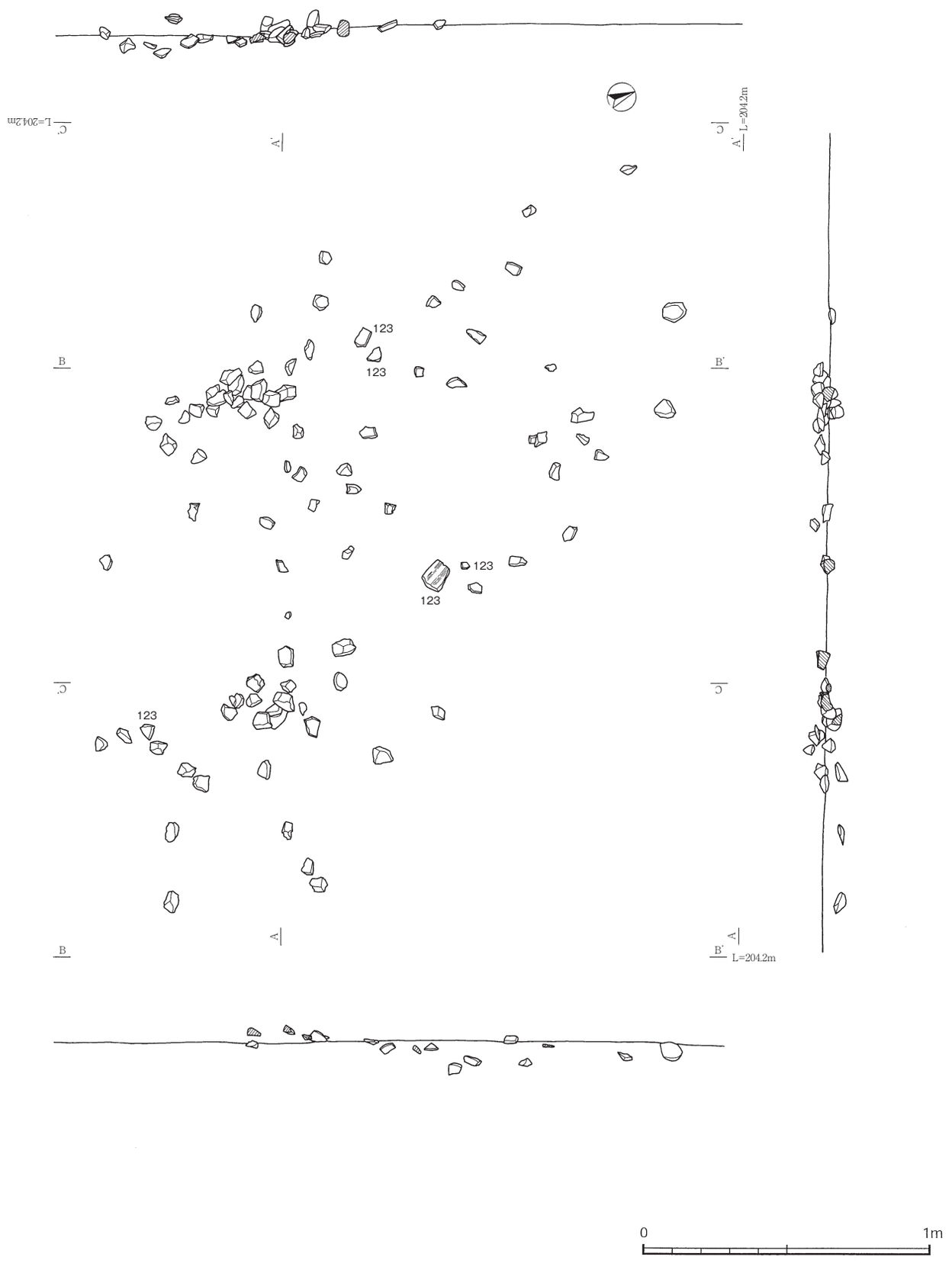
集石内から８点の土器片が出土した。123 は集石遺構内出土の４点の土器片と周辺の包含層出土の土器片が接合したもので，口縁部から胴部まで残存する。本遺跡の中でも大型の個体で，全体的に器壁も厚く，重量感がある。口縁部から胴部にかけてほぼ直線的にすぼまるバケツ形を呈し，口唇部はナデ調整により明瞭な平坦面を作出し，外面端部に貝殻腹縁による刻みが施される。外面の４箇所に横位の突帯が３条ずつ貼り付けられ，口唇部と同様に刻目がつけられている。胴部は横位または斜位の条痕文が帯状に施文される。Ⅻ類土器に比定される。また，磨石が構成礫として転用されていた。

146 号集石遺構（第 136 図）

M-16 区で検出した。長軸 350cm・短軸 150cmの範囲に広がる。構成礫のほとんどが５～８cm程の被熱した砂岩の破砕礫であり，南側に一部 10cm程の比較的大型の礫が



第 133 図　集石遺構配置図（Ⅵ層）



第 134 図　145 号集石遺構



第 135 図　145 号集石遺構出土遺物

まとまっている。炭化物や焼土は確認されなかった。

関連する遺物では，XX類土器の小片が出土した。

147 号集石遺構（第 137 図）

M-19 区で検出した。長軸約 200cm・短軸約 195cmの範囲に５～８cm程の角礫が広がる。集石遺構の南側に 40 号土坑が検出されたが，それぞれの検出面にレベル差があることなどから関連性はないと判断した。

集石遺構内からXW類土器の小片，チャートおよび安山岩のチップが出土した。

148 号集石遺構（第 138 図）

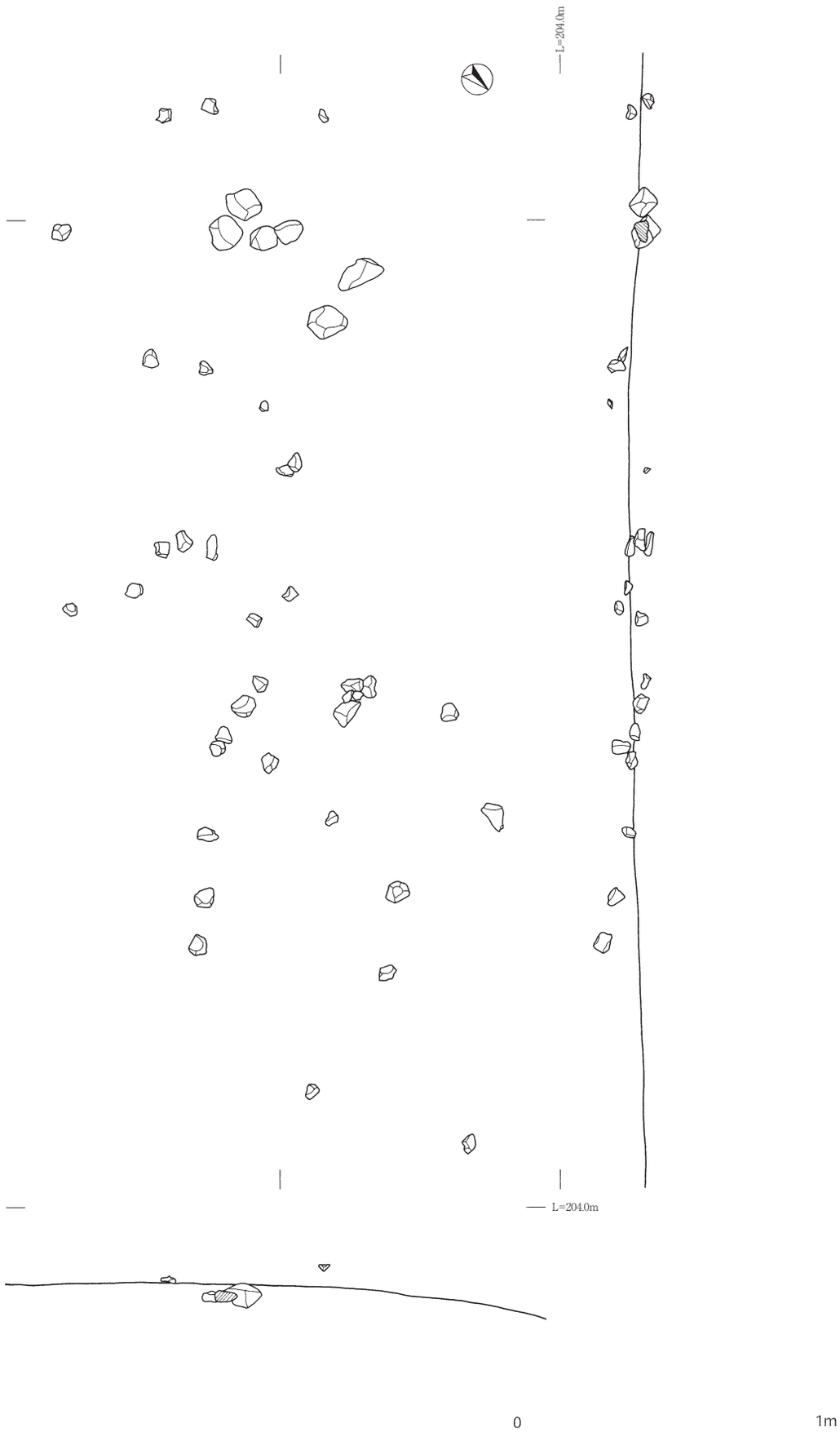
M-19 区，Ⅵ層の上位で検出した。長軸 235cm・短軸 185cmの範囲に広がる。構成礫は５cm程の小型の角礫がほとんどである。集石遺構の西側に隣接して 41 号土坑が位置している。集石遺構に伴う掘り込みの可能性も検討したが，土坑内や周辺には礫が少なく，礫の分布と土坑の位置に明らかな相関性を見いだすことは困難である。相互の関連性については特定できなかった。

関連する遺物はXX類土器の小片，石皿片，頁岩および黒曜石のフレイクが出土した。

149 号集石遺構（第 139 図）

K-22 区で検出した。長軸約 300cm・短軸約 230cmの範囲に平面的に礫が広がる。構成礫は 10cm程の大きさであり，５cm以下の小型の礫も間に含まれる。礫の重なりの状況から，本来集石遺構が形成された面は，より上位であったと考えられるが，掘り込み等は確認できなかった。

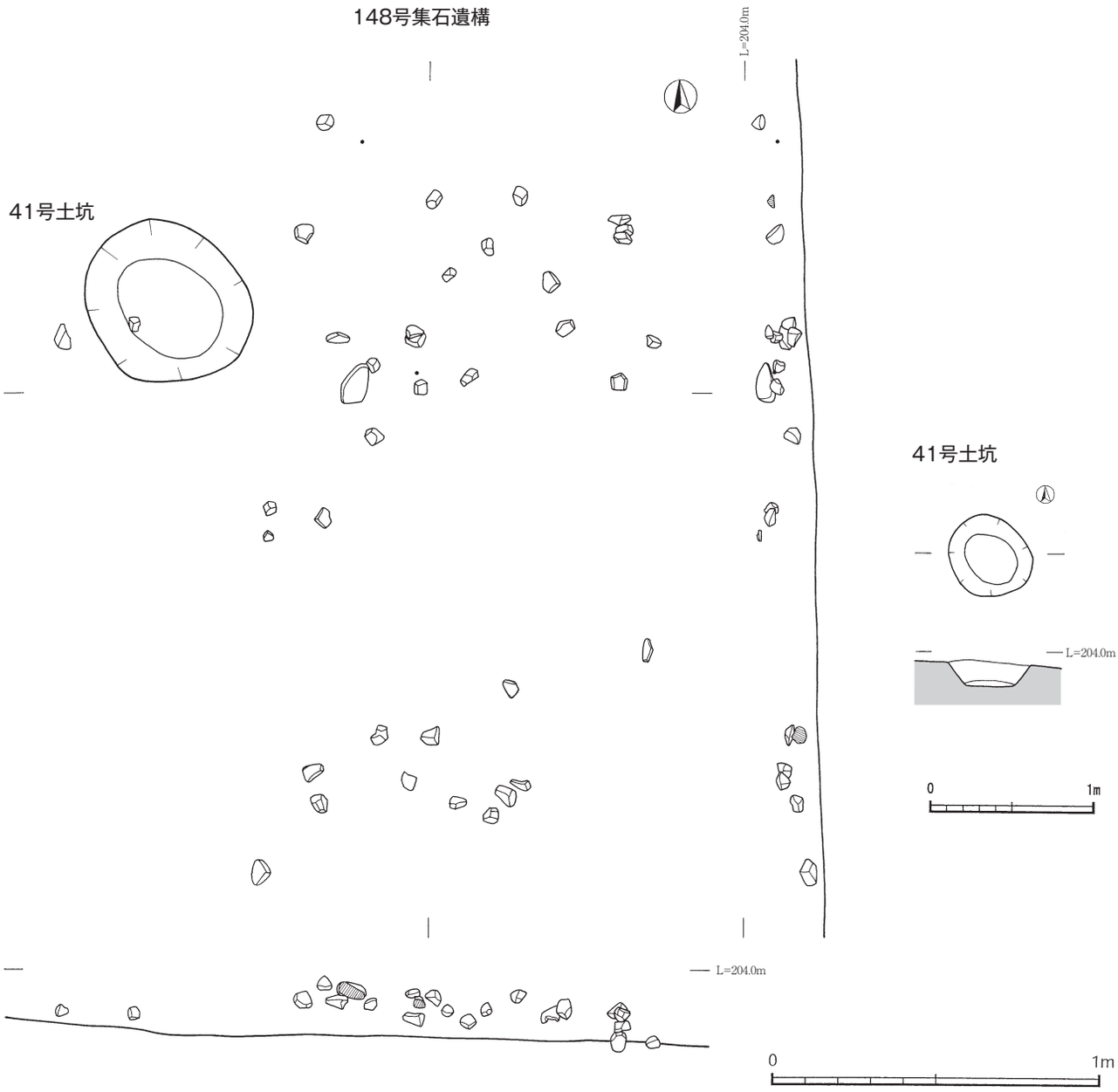
集石遺構内から土器片が出土した。125 は集石遺構内出土土器１点と包含層出土の土器が接合したもので，口



第 136 図　146 号集石遺構



第 137 図　147 号集石遺構，40 号土坑・出土遺物



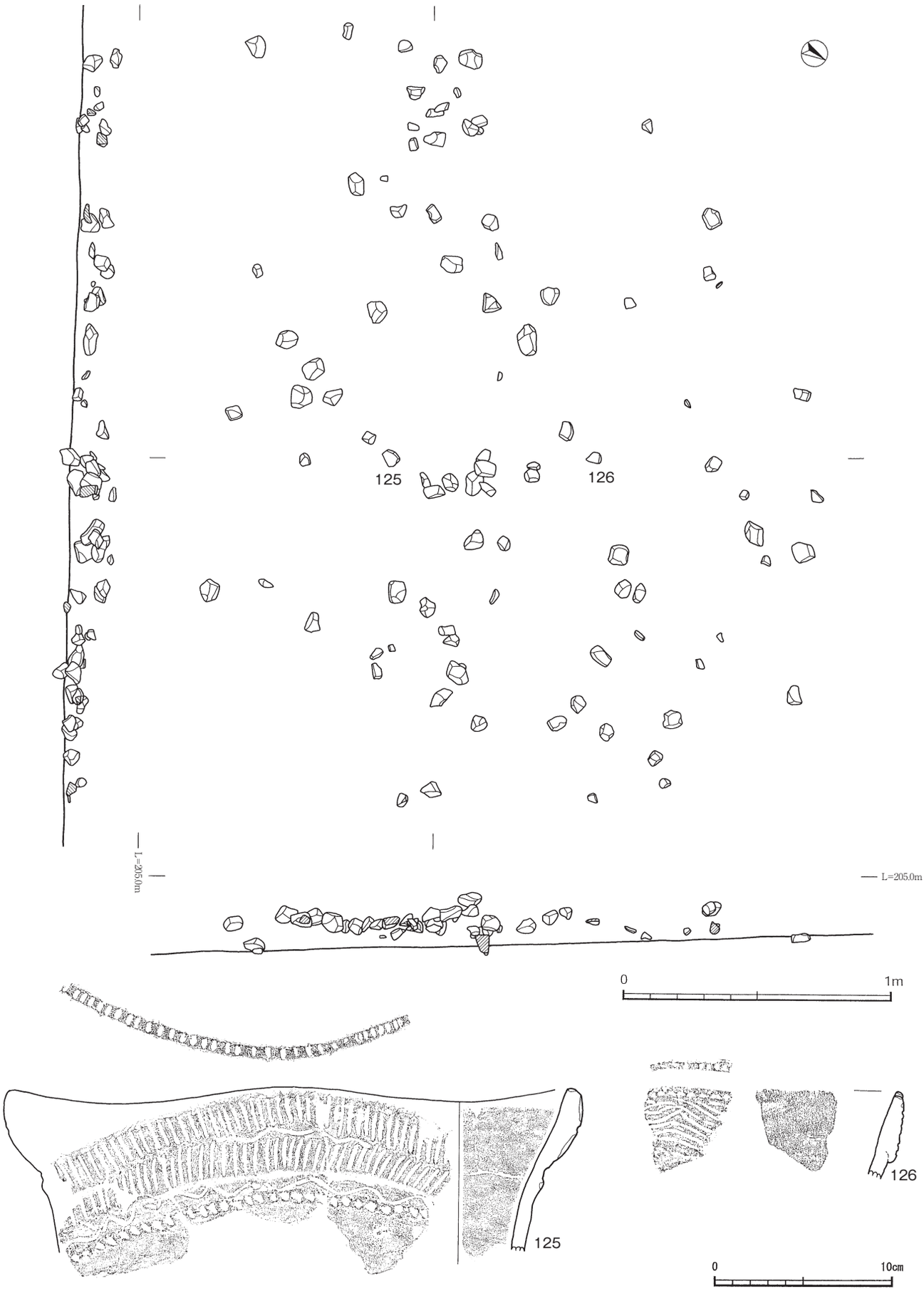
第 138 図　148 号集石遺構，41 号土坑

縁部から頸部が残存する。口縁部は肥厚し，頸部から緩やかに内湾する。口縁部は緩やかな波状口縁を呈する。頸部には１条の小突帯が巡り，先端が凹凸のある施文具で刺突文が施される。口縁肥厚部はやや羽状になる沈線文と，波頂部に波状の沈線文が施される。また，口縁肥厚部と突帯との間にも波状沈線文が１条描かれる。内外面とも丁寧なナデ調整であり，胎土も整っている。Ⅻ類土器に比定される。126 は口縁部片である。口縁部は帯状に肥厚し，文様帯を作出している。口唇部は平坦面をなし，刻みが施される。文様は沈線による曲線文を主体として，口唇部下に１段横位の刺突文列がめぐる。わずかに口唇部が持ち上がる点から，波状口縁の可能性も考えられる。Ⅻ類土器に比定される。

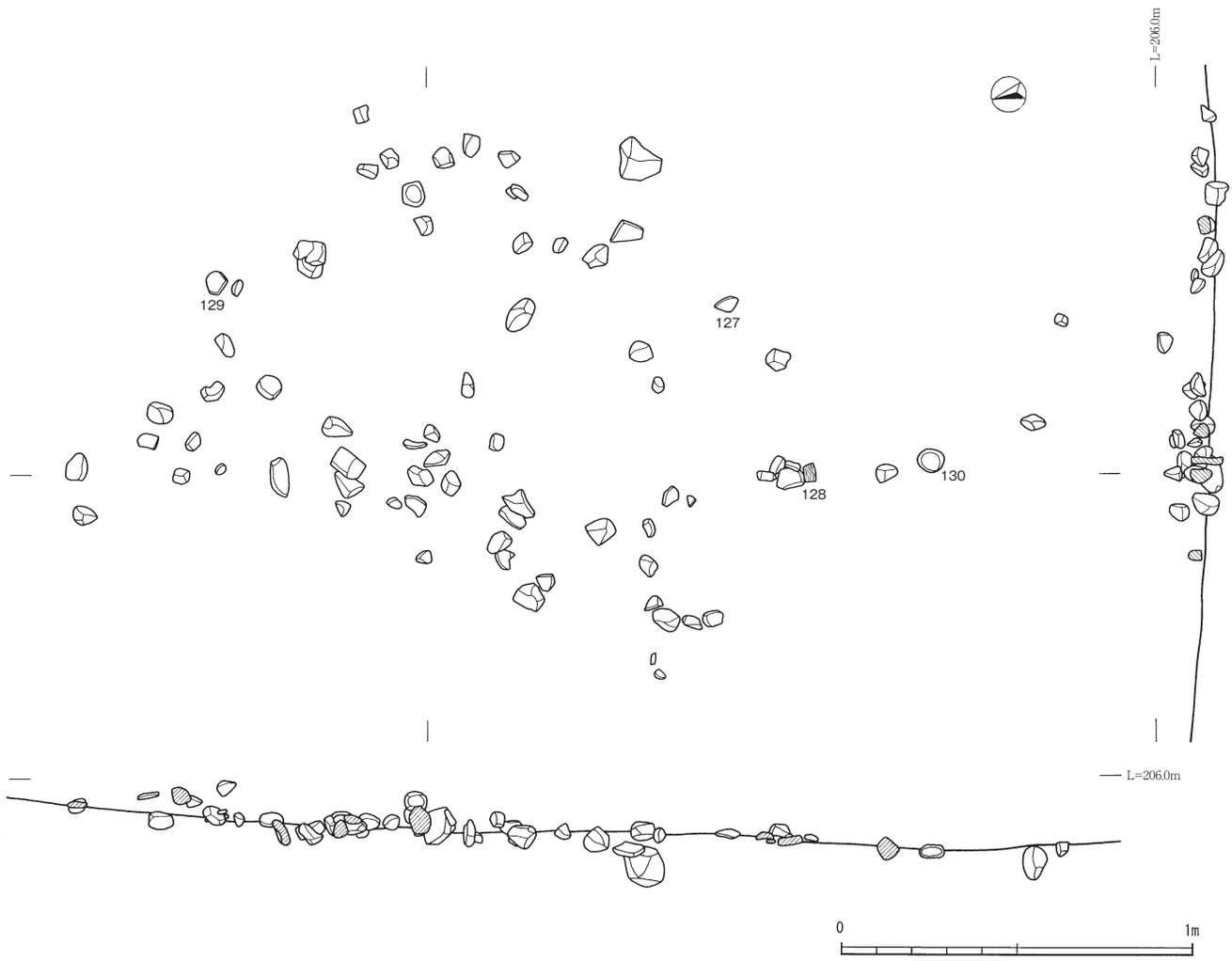
150 号集石遺構（第 140 図）

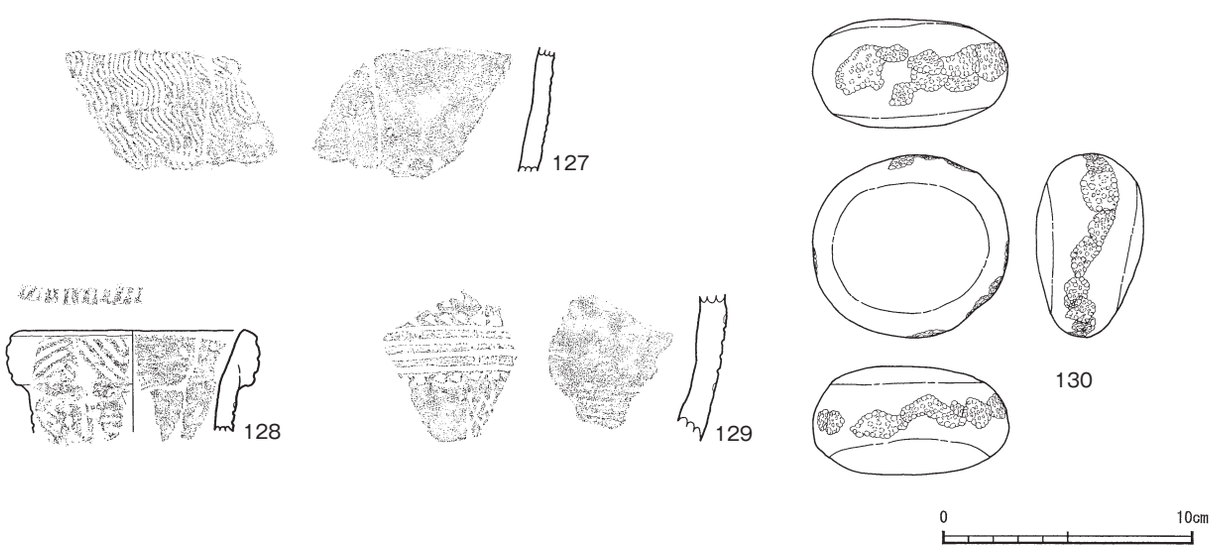
G-21・22 区で検出した。長軸 290cm・短軸約 170cmの範囲に礫が広がる。構成礫は５～10cm程の大きさが主体であり，１点のみ 15cmを超えるものがある。礫同士の重なりはほとんどみられない。

集石遺構内から土器片，石器，黒曜石（姫島産・針尾産・在地産）とチャートのチップが出土した。127 は胴部片である。内面は丁寧なナデ調整であり，外面には波状の押型文が密に施される。器壁は薄く，焼成も良好である。Ⅻ類土器と考えられる。128 は口縁部から頸部のかけての土器片である。口径は 8.8cmと小さく，頸部が

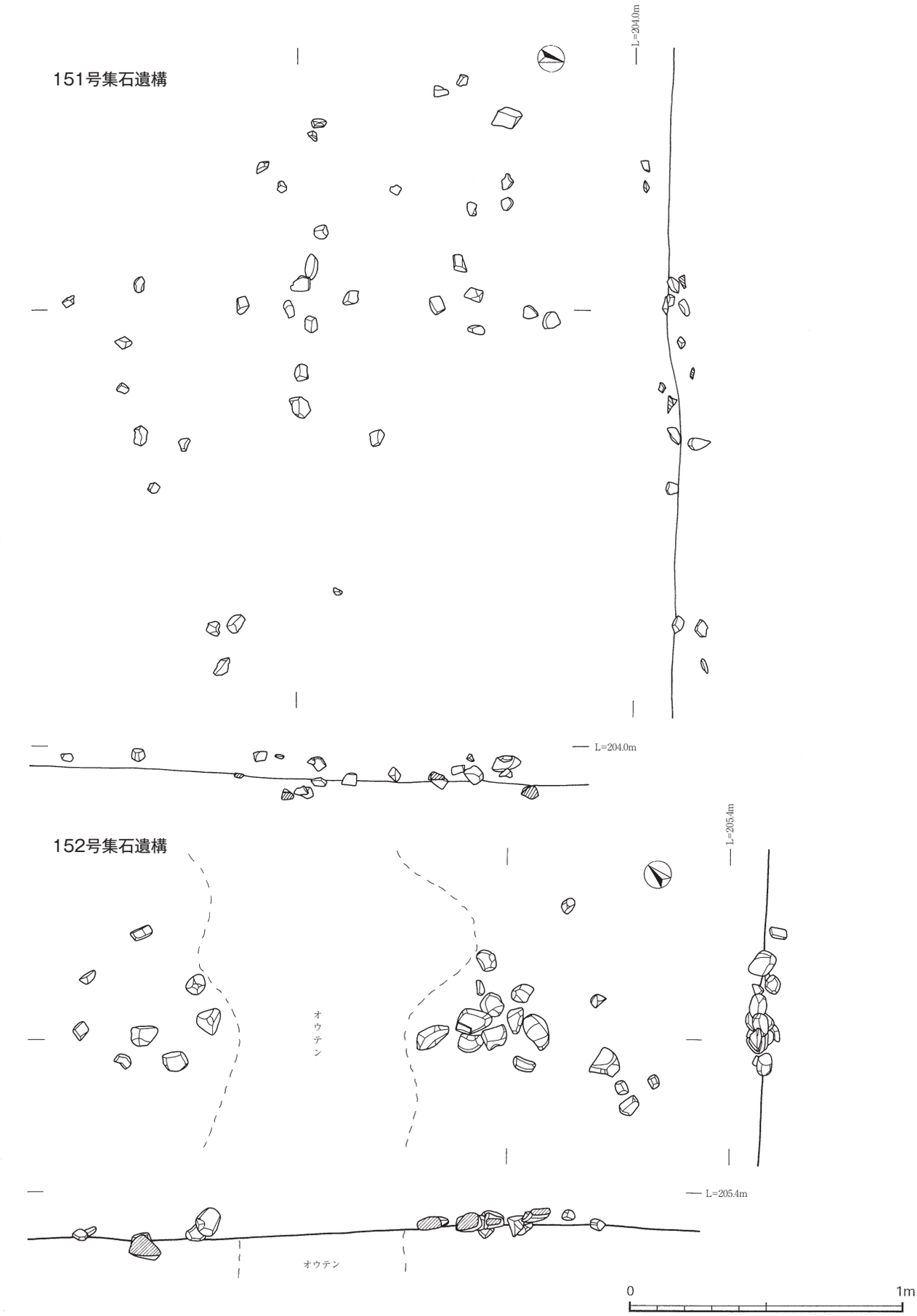


第 139 図　149 号集石遺構・出土遺物



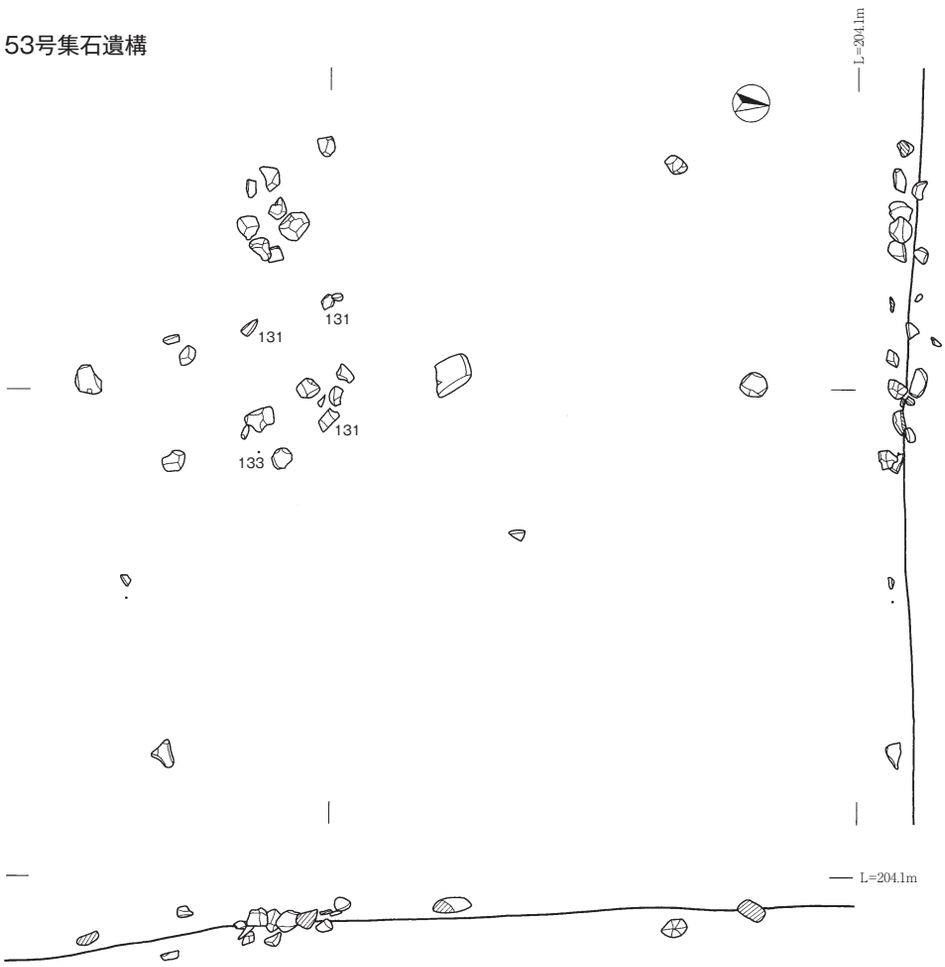


第 140 図　150 号集石遺構・出土遺物

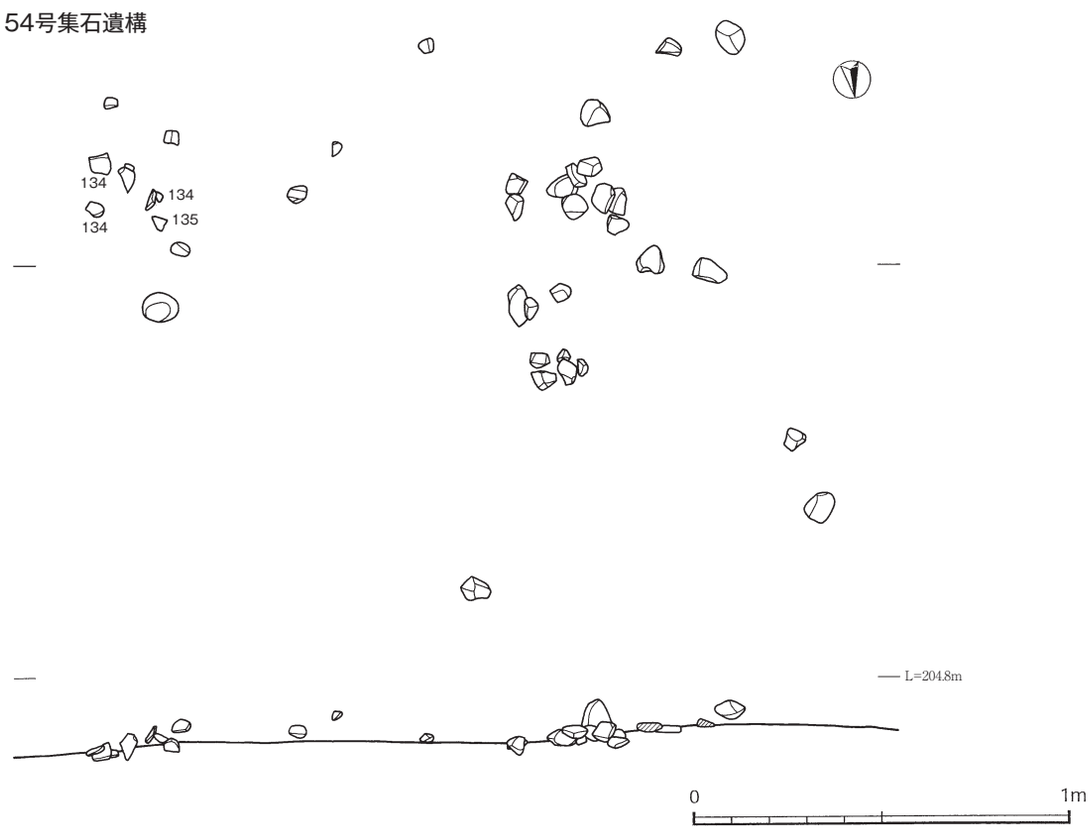


第 141 図　151～152 号集石遺構

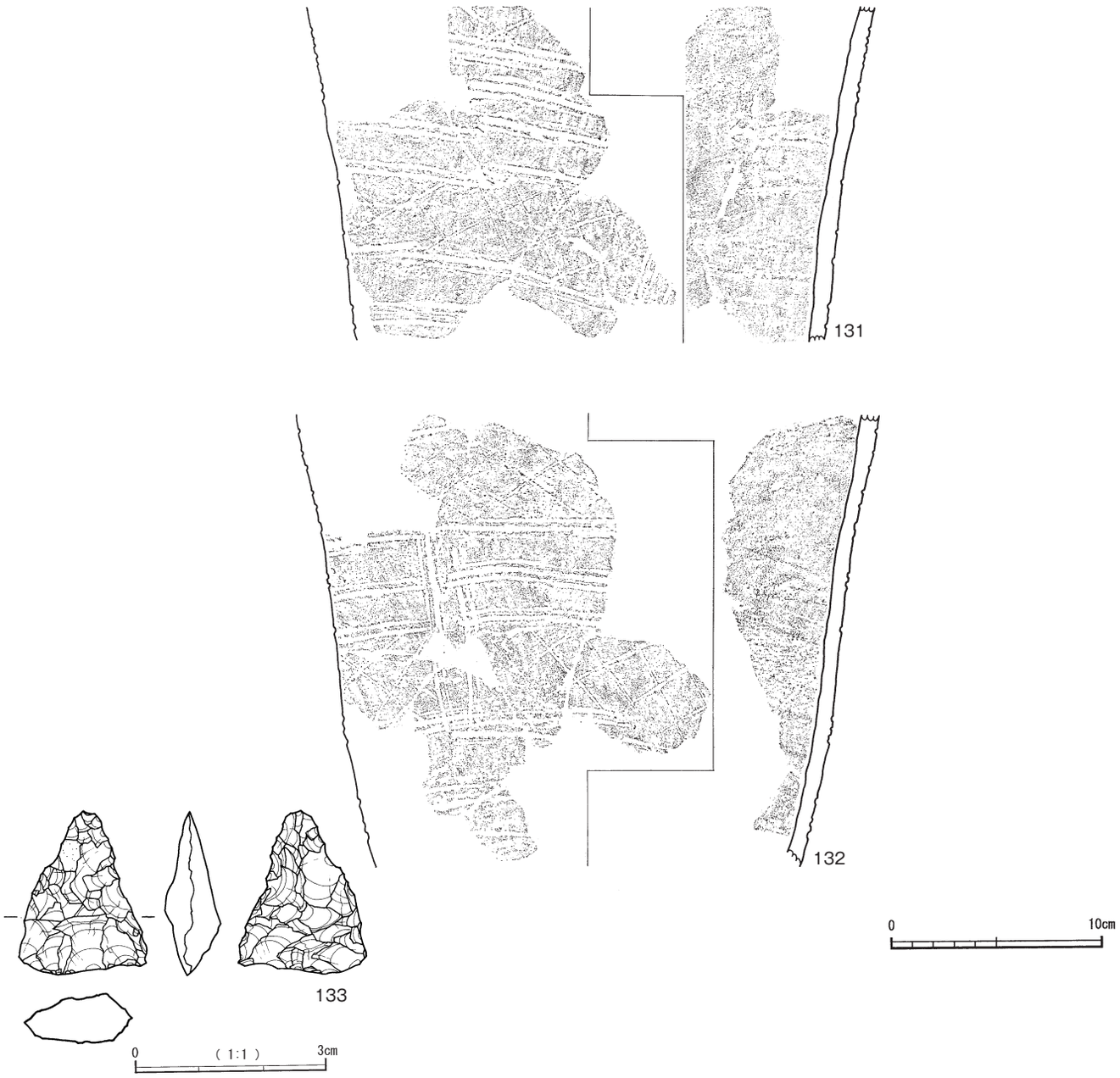
153号集石遺構



154号集石遺構



第 142 図　153～154 号集石遺構



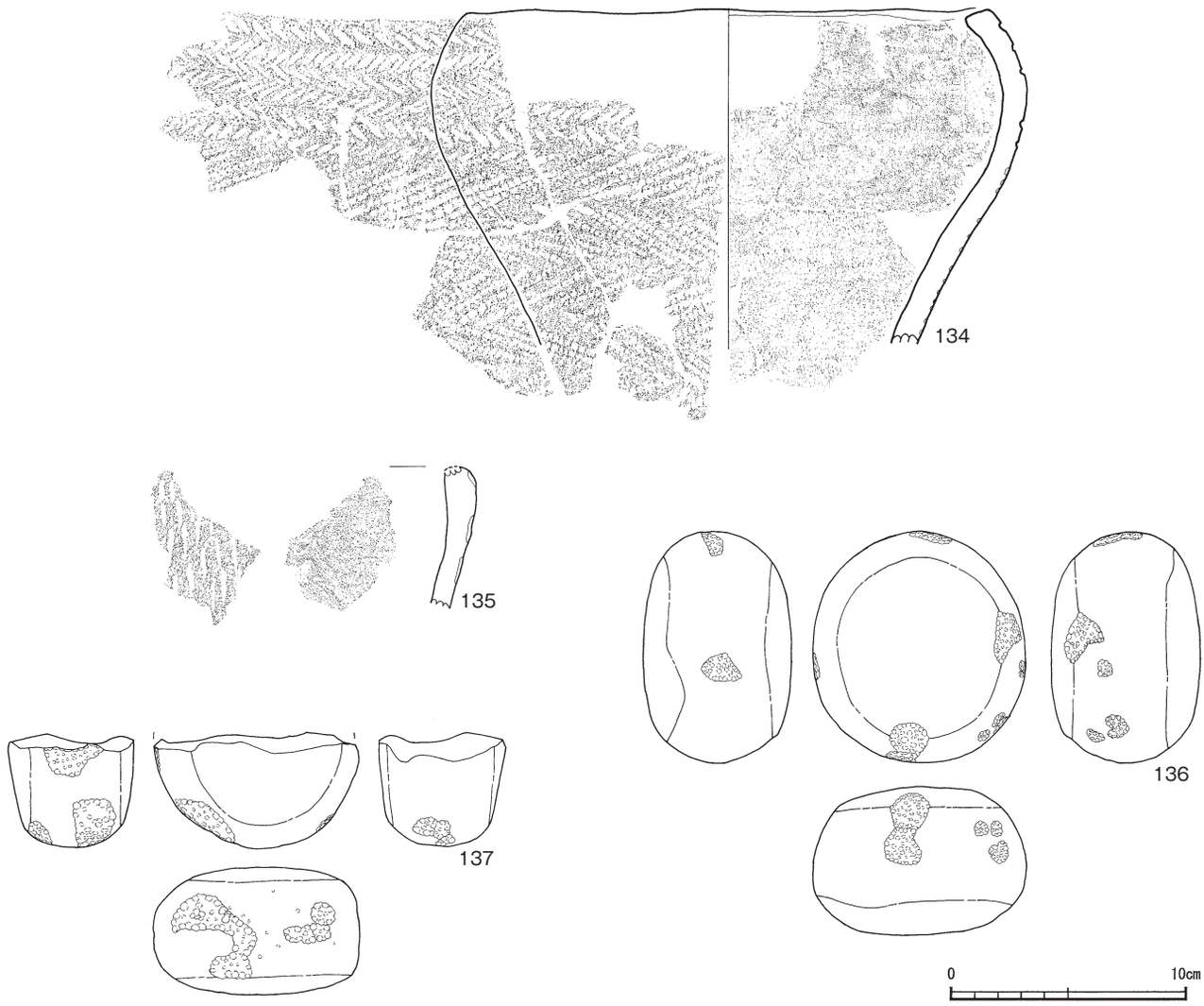
第 143 図　153 号集石遺構出土遺物

細長く伸びる壺形土器と考えられる。口縁部はカマボコ状に肥厚し，文様帯を作出している。口唇部はナデ調整で平坦面を作出し，刻みが施されている。口縁部文様帯は，沈線で連続した山形文が描かれている。頸部以下は縦位・横位の沈線文と刺突文が施される。XW類土器に比定される。129 は胴部片で，下端に緩いカーブがあるため，底部からの立ち上がり付近と考えられる。内外面とも丁寧なナデ調整であり，胎土も粒子が細かい。外面には縦位の網目状撚糸文が施され，その上位から横位の沈線文，沈線文の両端に刺突文が１段ずつ巡る。XV類土器に比定される。また，磨・敲石が１点構成礫として転用されていた。130 は比較的小型な凝灰岩製の磨・敲石である。下・右・左側面に敲打痕が明瞭に観察できる。凝灰岩の中でも多孔質な石材であり，全体に細かな凹凸がある。

151 号集石遺構（第 141 図）

M-17 区で検出した。長軸約 220cm・短軸約 180cmの範囲に礫が広がる。構成礫のほとんどが被熱により破砕した砂岩であり，５～８cm程の大きさである。炭化物や焼土などはみられなかった。

集石遺構内から時期不明の土器底部片，および構成礫として転用された磨石片が２点出土した。



第 144 図　154 号集石遺構出土遺物

152 号集石遺構（第 141 図）

Ⅰ・Ｊ-22 区で検出した。221 号集石遺構と近接する。長軸約 200cm・短軸約 80cmの範囲に礫が広がる。中央部分は地層横転により寸断されており，詳細は不明である。残存する範囲では礫の重なりはほとんどない。構成礫は 10～15cm程の大型礫が主体をなし，被熱により赤化したものもみられ，特に大型礫は破砕し脆くなっている。

関連する遺物は出土していない。

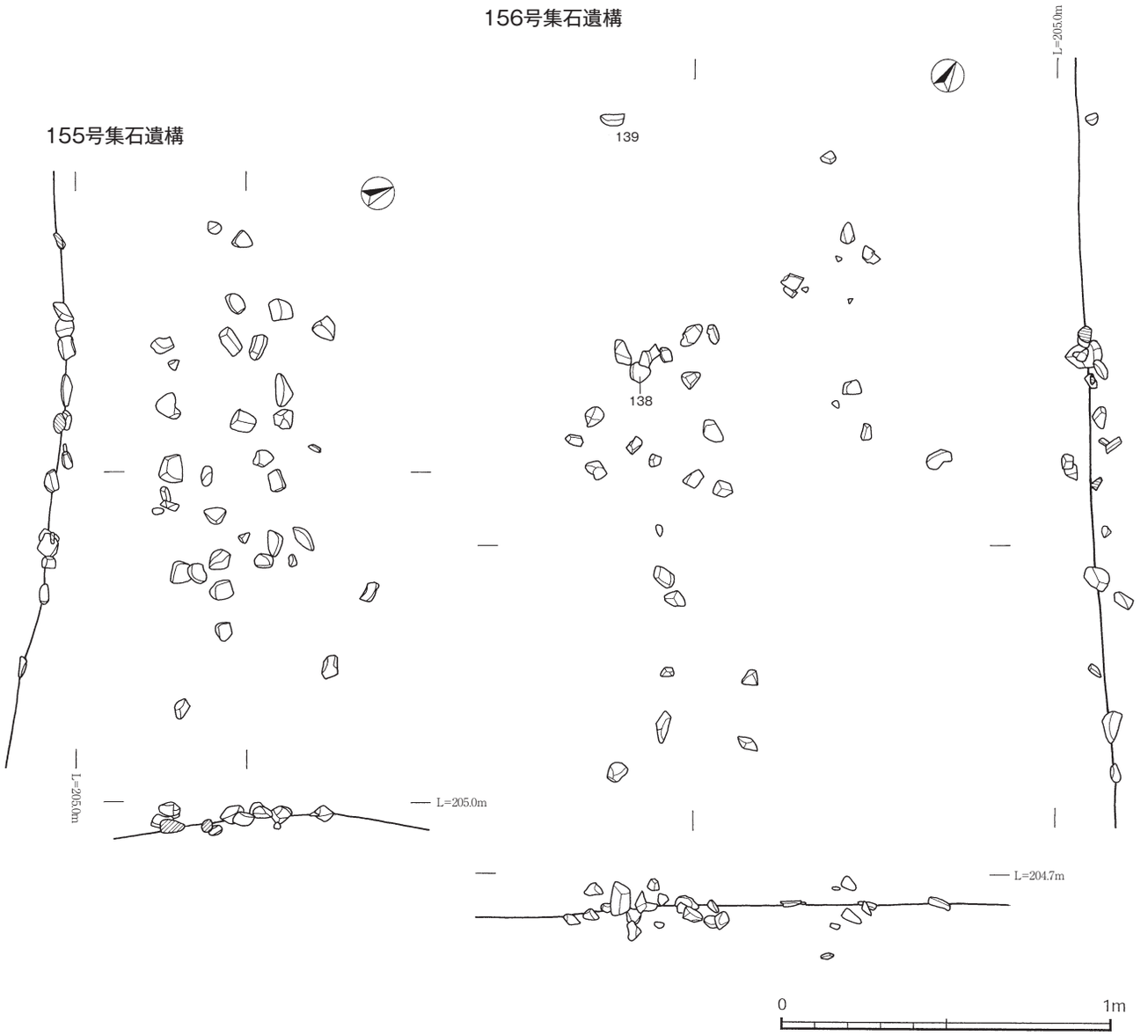
153 号集石遺構（第 142・143 図）

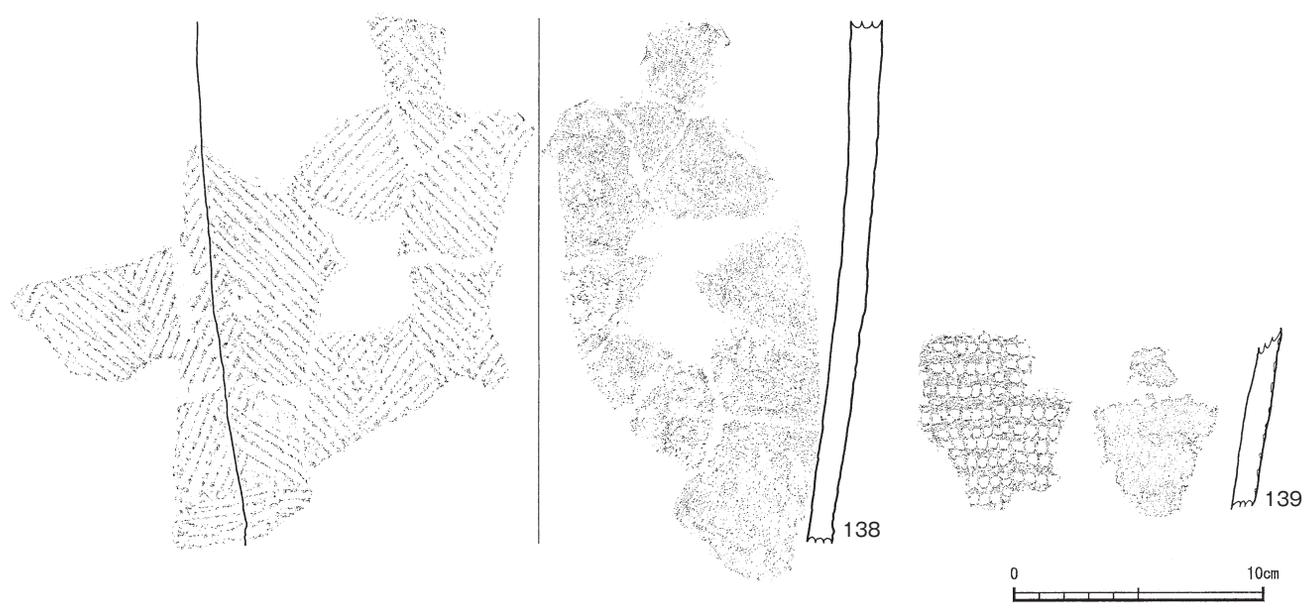
Ｊ-16 区で検出した。長軸約 190cm・短軸約 170cmの範囲に礫が広がる。構成礫のほとんどが５～８cm程の安山岩であり，１点被熱礫が含まれる。また，石皿片が構成礫として転用されていた。

集石遺構内から６点の土器片と石器が出土した。土器片のうち包含層出土の土器３点と接合したのが 131 である。132 は包含層出土の土器で 131 と同一個体と考えられることから，ここで取り上げた。131 および 132 ともに胴部片で頸部がわずかにくびれ，胴に向かってすぼまる器形と考えられる。器壁は薄く，内外面ともナデ調整である。頸部および胴部に格子状の沈線文が帯状に施され，その間は縦位と横位の条痕文である。沈線文は幅が細く，細線状である。胎土は白色粒および金雲母を多量に含み，全体的に粒子が細かい。XVI類土器もしくはXVII類土器に比定される。133 はチャート製の打製石鏃で，幅に対して長さがあり，二等辺三角形に近い形状である。基部の抉りはなく，平基である。全体的に厚みが残り，未製品の可能性もある。

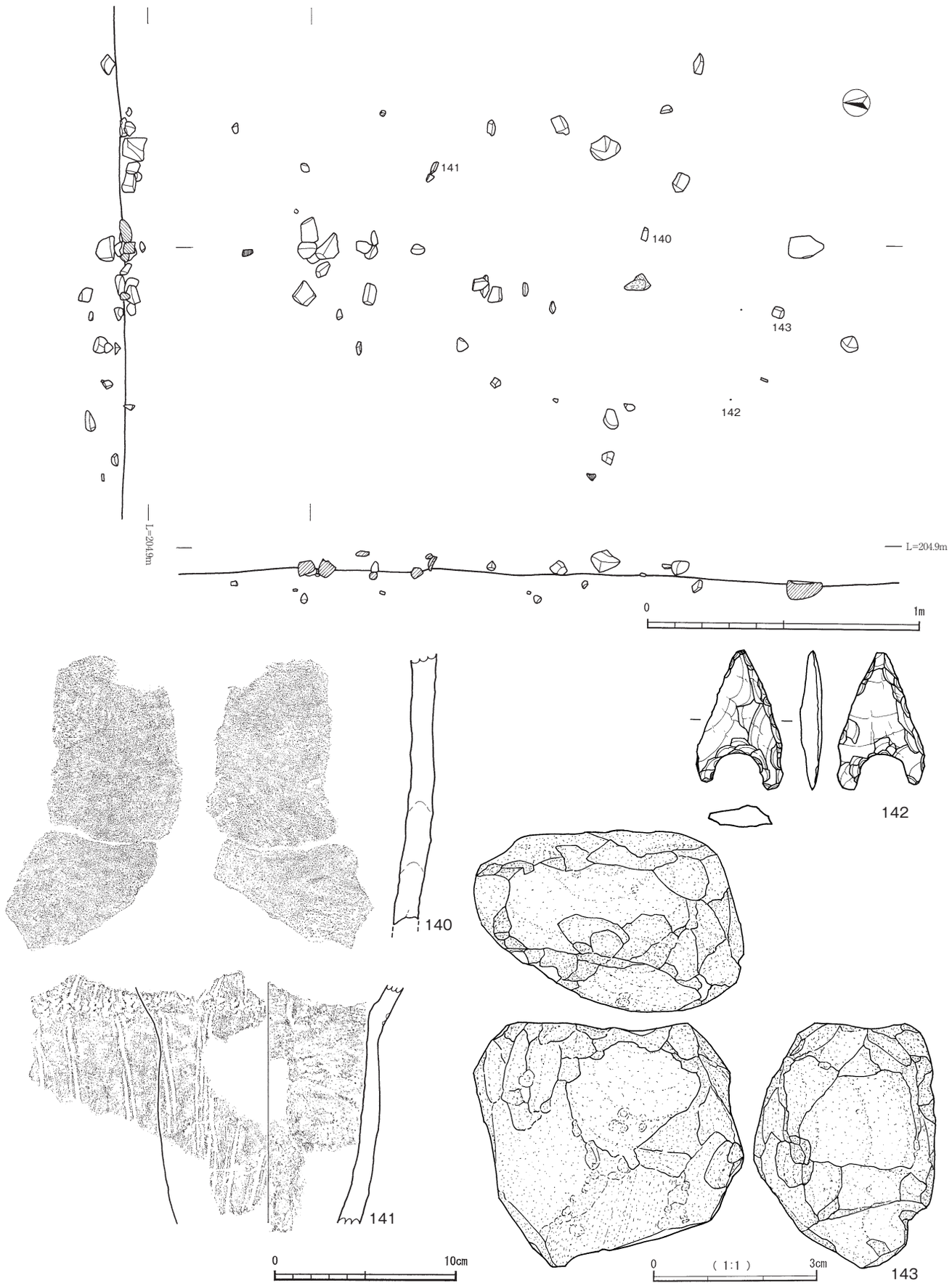
154 号集石遺構（第 142・144 図）

Ｈ-17 区で検出した。長軸約 195cm・短軸約 155cmの範囲に礫が広がり，東側には土器片が多く，礫は西側の約 80cmの範囲にまとまる。集石遺構は 10cm弱の大きさの礫で構成される。

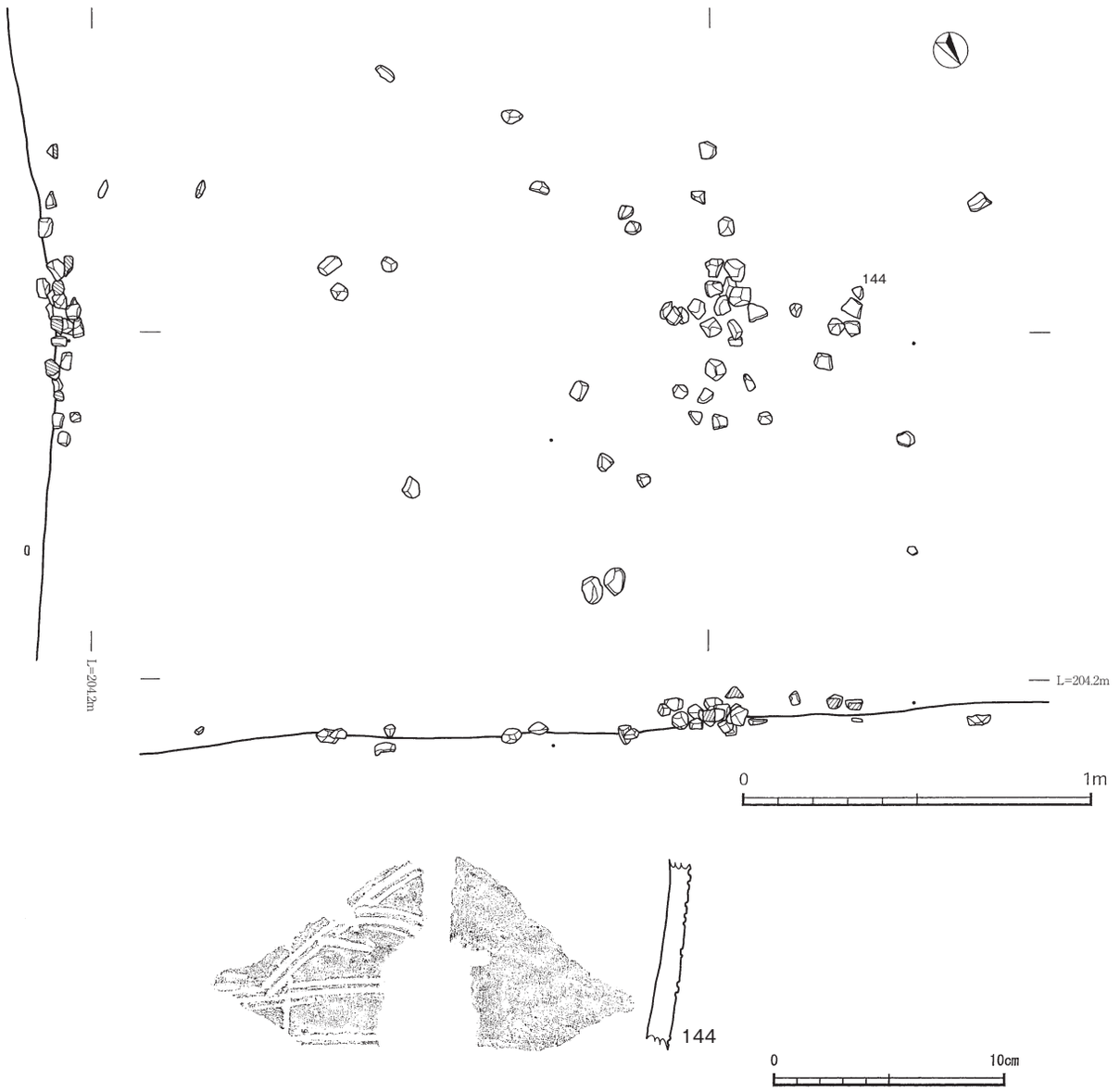




第 145 図　155 号集石遺構，156 号集石遺構・出土遺物



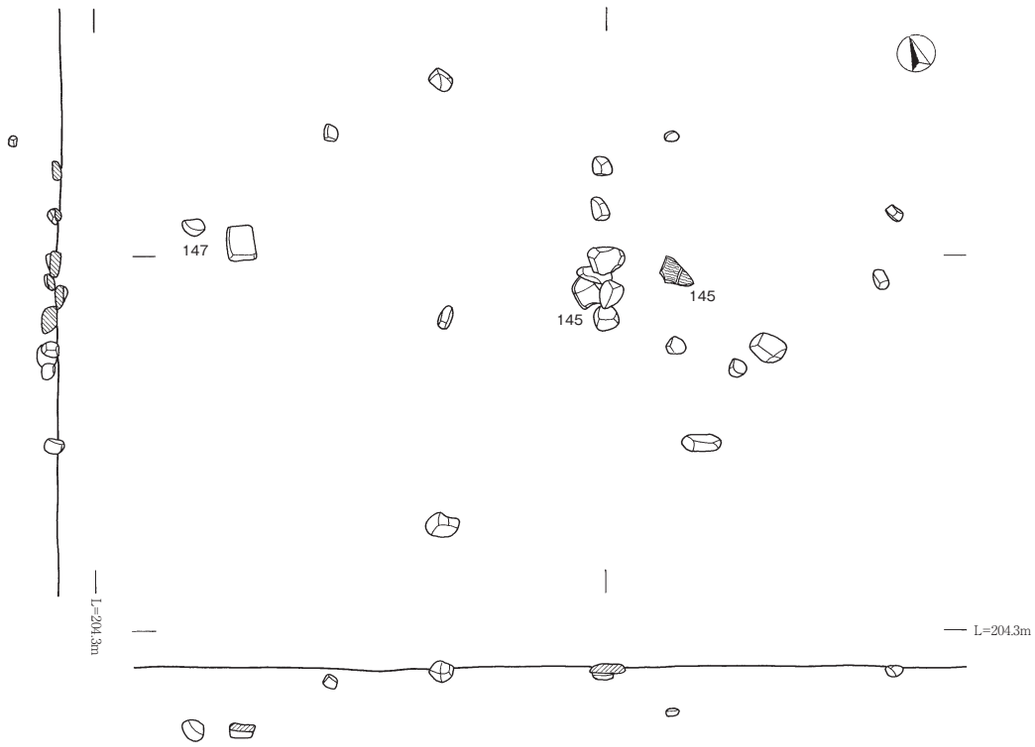
第 146 図　157 号集石遺構・出土遺物



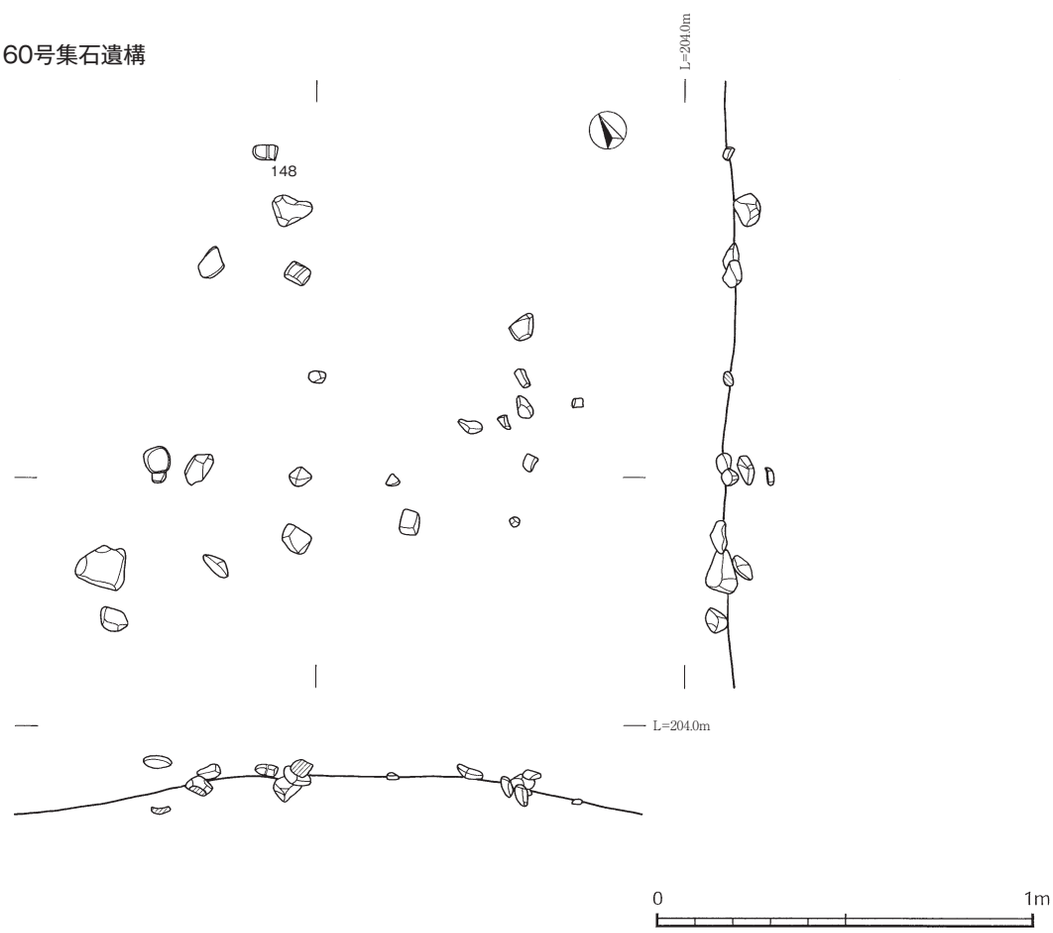
第 147 図　158 号集石遺構・出土遺物

集石遺構内から土器片８点出土し，磨・敲石２点が構成礫として転用されていた。134 は集石遺構内出土の４点の土器片と包含層出土の土器が接合したもので，口縁部から胴部まで残存する。口縁部は大きく膨らんで内湾し，キャリパー形に近い形状を呈する。口唇部は平坦面を有し，内傾する。全体的にナデ調整が施されており，特に口縁部内面の湾曲部分は，ミガキ状のナデ調整が丁寧である。外面は口縁部に羽状の短沈線文を数段施し，胴部は「く」の字状に連続した貝殻腹縁刺突文を施す。口縁部が最も外に張り出す部分にはススが付着しており，帯状に黒く変色している。胎土は白色粒子および石英粒が目立つ。Ⅶ類土器に比定される。135 は口縁部片であり，口唇部がわずかに欠損する。口縁部はやや内湾する。胎土は径１㎜ほどの白色粒が目立つ。文様は先端の細い工具でやや深い短沈線文を縦位に連続して施す。器形や文様の特徴はⅥ類土器やⅦ類土器の特徴に近い。136 は凝灰岩製の磨・敲石である。全ての側面で敲打痕が観察できるが，密度は低く，浅い。下面は一部剥離しており，破断面が赤化している。集石の構成礫として使用された際に被熱したものと考えられる。137 は凝灰岩製の磨・敲石である。３分の２程は欠損している。下・左側面に明瞭な敲打痕が観察でき，一部は平坦になっている。また，上・下面は磨面であり，表面が平滑である。その他，チャートと安山岩のフレイク，台石片が１点出土した。

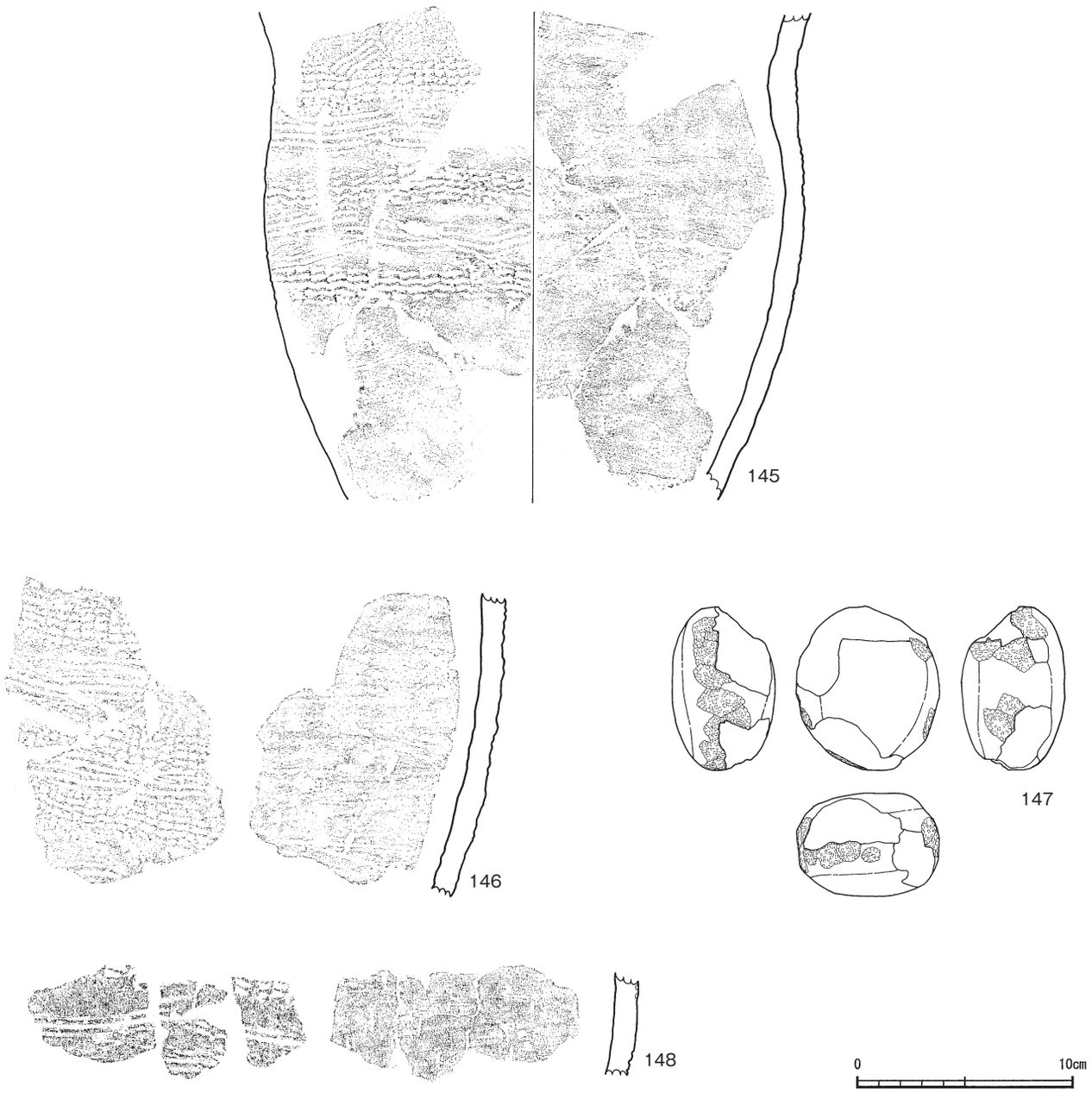
159号集石遺構



160号集石遺構



第 148 図　159～160 号集石遺構



第 149 図　159～160 号集石遺構出土遺物

155 号集石遺構（第 145 図）

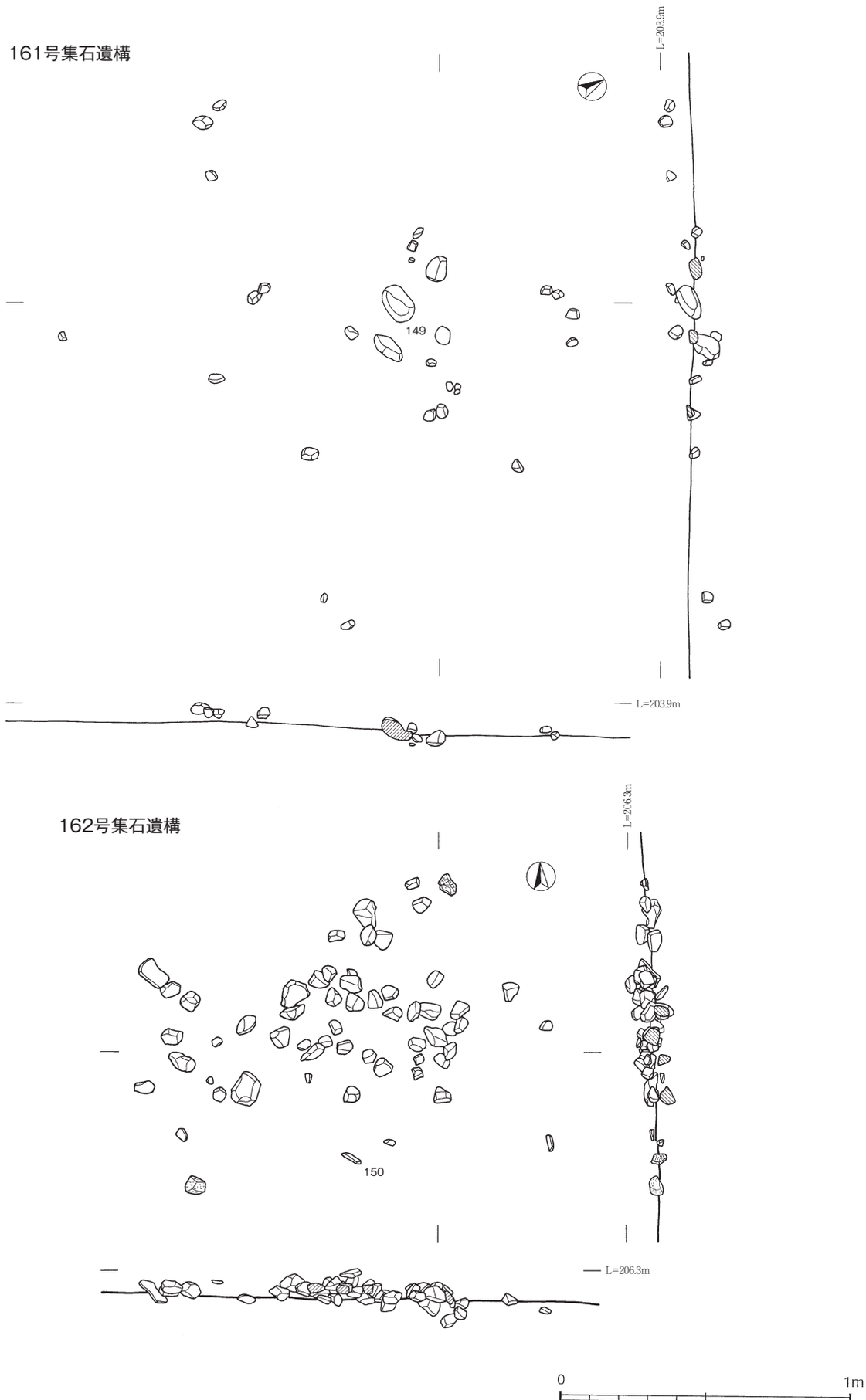
Ｊ-20 区で検出した。長軸約 150cm・短軸約 70cmの範囲に礫が広がる。礫同士の重なりはほとんどなく，密度も低い。構成礫は 10cm大のものが主体の被熱破砕礫であり，間に小型礫が散在する。

関連する遺物は，XW類土器およびXX類土器の小片，チャートのチップが出土した。

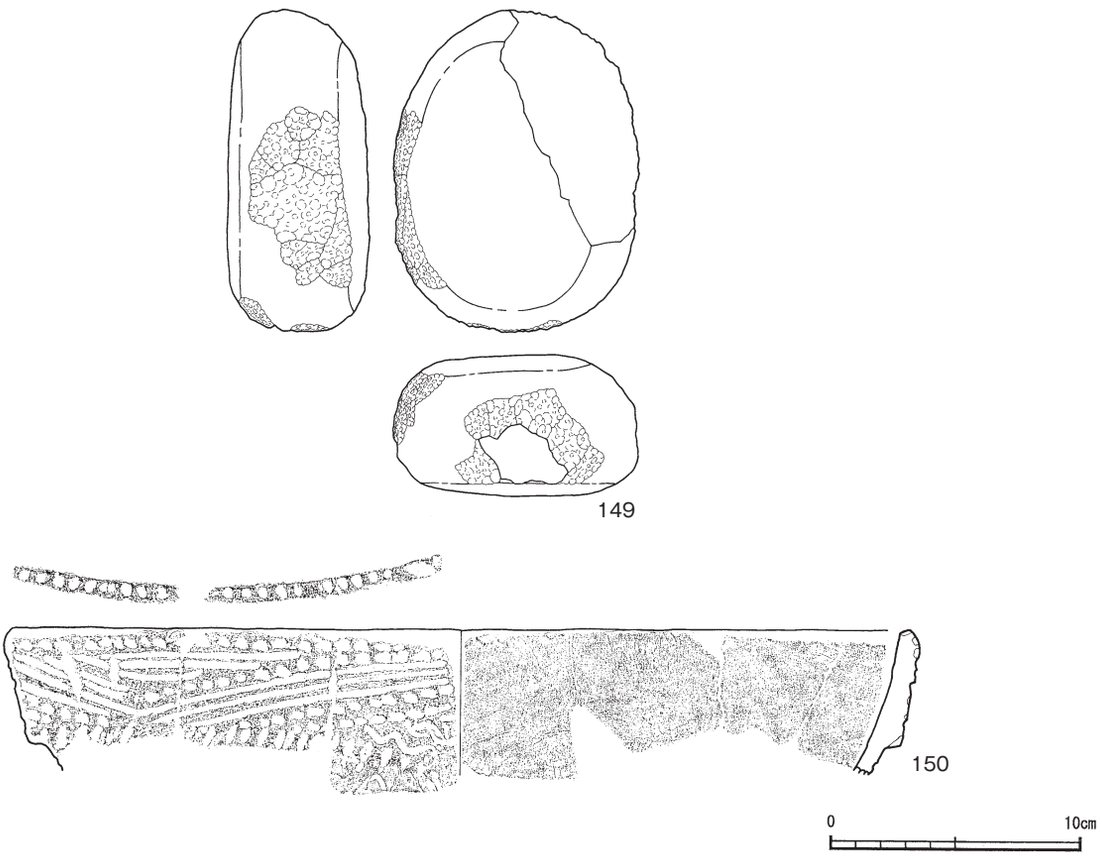
156 号集石遺構（第 145 図）

H-18 区で検出した。長軸約 200cm・短軸約 120cmの範囲に礫が広がる。集石は５cm前後の大きさの安山岩，頁岩，花崗岩等の礫で構成され，約半数が赤化している。礫同士にレベル差もあり，密度は低い。

集石遺構内から，138・139 が出土した。138 は胴部から底部付近までが残存する。胴部は幅が広めで深い綾杉状の貝殻条痕が，底部付近には横位の貝殻条痕が施される。比較的径の大きい個体で，Ｖ類土器に比定される。139 は胴部片である。胎土は粗く，白色・褐色の３～５㎜大の角礫が露出する。外面には大ぶりの貝殻腹縁刺突文が横位に施文される。特徴からⅥ類土器と考えられる。



第 150 図　161～162 号集石遺構



第 151 図　161～162 号集石遺構出土遺物

157 号集石遺構（第 146 図）

Ⅰ-19 区で検出した。長軸約 230cm・短軸約 170cmの範囲に礫が広がる。構成礫は５～10cmほどのものがほとんどであり，安山岩，凝灰岩，頁岩などで構成されている。遺構内からは炭化物も全体的に確認されたが，樹痕の影響も多く，明確に集石遺構に伴うものとは断定できなかった。

集石遺構内から，Ｘ類土器・Ⅺ類土器・山形押型文を有するⅫ類土器・ⅩⅣ類土器・ⅩⅥ類土器の小片が出土するなど，複数時期にわたる土器が出土している。石器は頁岩製の石鏃，黒曜石原石が出土した。140 は集石遺構内から出土した胴部片と包含層出土の土器が接合したものである。全体的に器壁が厚く，接合痕が明瞭に残っている。内外面ともナデ調整であり，特に外面が丁寧である。Ｘ類土器に該当する。141 は集石遺構内出土と包含層出土の土器片が接合したもので，頸部から胴部が残存する。頸部でくびれ，ラッパ状に口縁部が開く器形と考えられる。胴部は緩やかに底部へすぼまる。内面には緩い稜線を有する。頸部の屈曲部には貝殻腹縁刺突文が１段施され，胴部には数条の条痕文が縦位に描かれる。

胴部文様は空白が多い。ⅩⅥ類土器に比定できると考えられるが，ⅩⅦ類土器の可能性もある。142 は頁岩製の打製石鏃である。側縁部が直線状になり，基部は緩やかな「Ｕ」字形の抉りが入る。側縁部は微小な剥離調整が行われているが，全体的には素材剥片の剥離面を活かして製作されている。143 は黒曜石の原礫である。加工痕は無く，表面は全て礫面を残している。

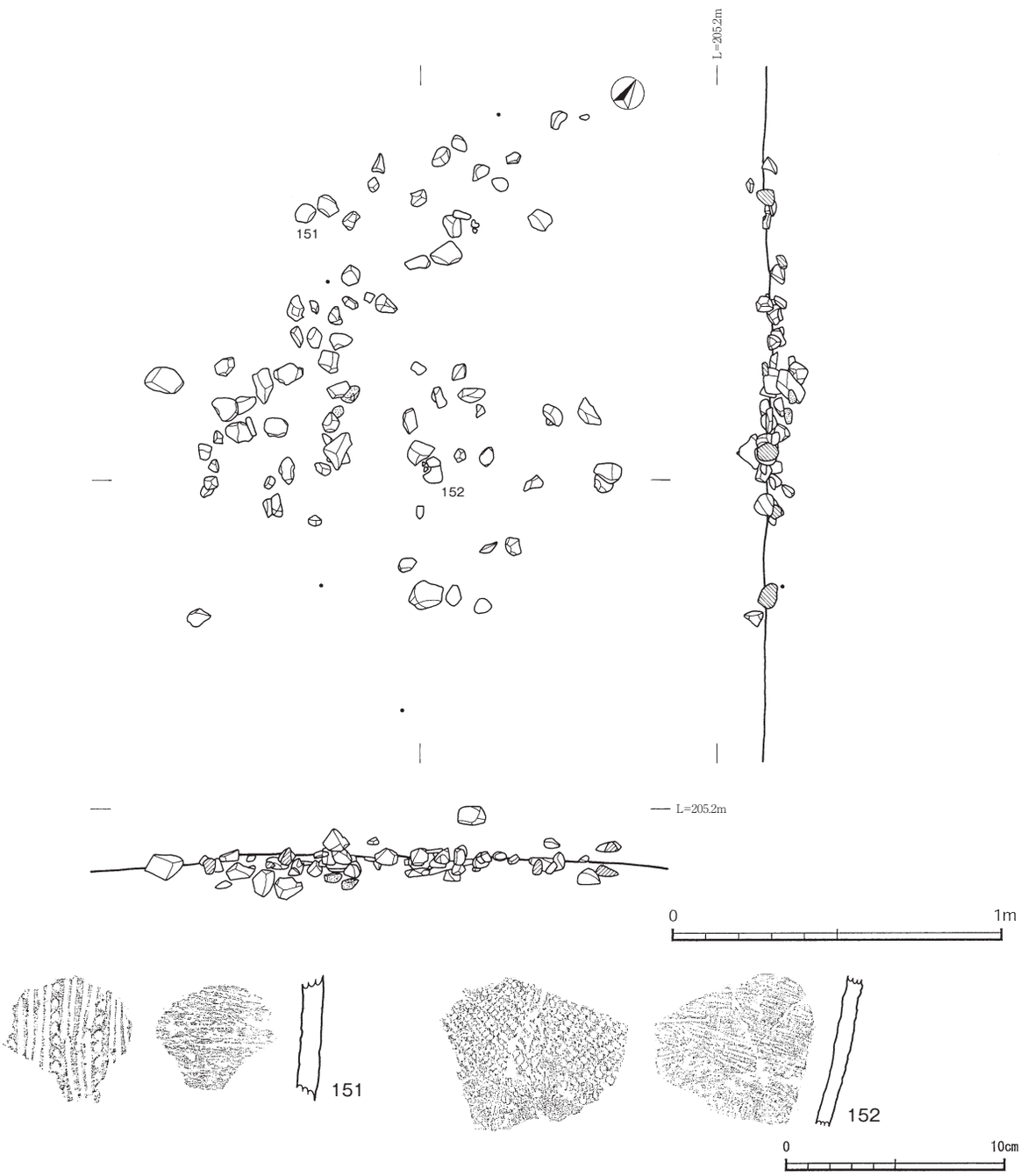
158 号集石遺構（第 147 図）

M-18･19 区で検出した。長軸約 230cm・短軸約 160cmの範囲に礫が広がり，北側にややまとまりがある。検出面が北西から南東に緩やかに傾斜する地形であるため，中心部から礫が流れた可能性もある。構成礫は５～10cm程の大きさのものがほとんどである。礫集中部及びその周辺に炭化物が散在していた。

集石遺構から土器片とチャートのフレイクとチップが出土した。144 は胴部片で，包含層出土の土器と接合した資料である。厚みもほぼ一定であり，ほぼ真っ直ぐに立ち上がる器形と考えられる。内外面とも丁寧なナデ調整で，外面には横位・斜位の貝殻条痕文が施されるⅩⅥ類土器もしくはⅩⅦ類土器と考えられる。

159 号集石遺構（第 148・149 図）

M-16 区，Ⅵ層の上位で検出した。長軸約 200cm・短軸



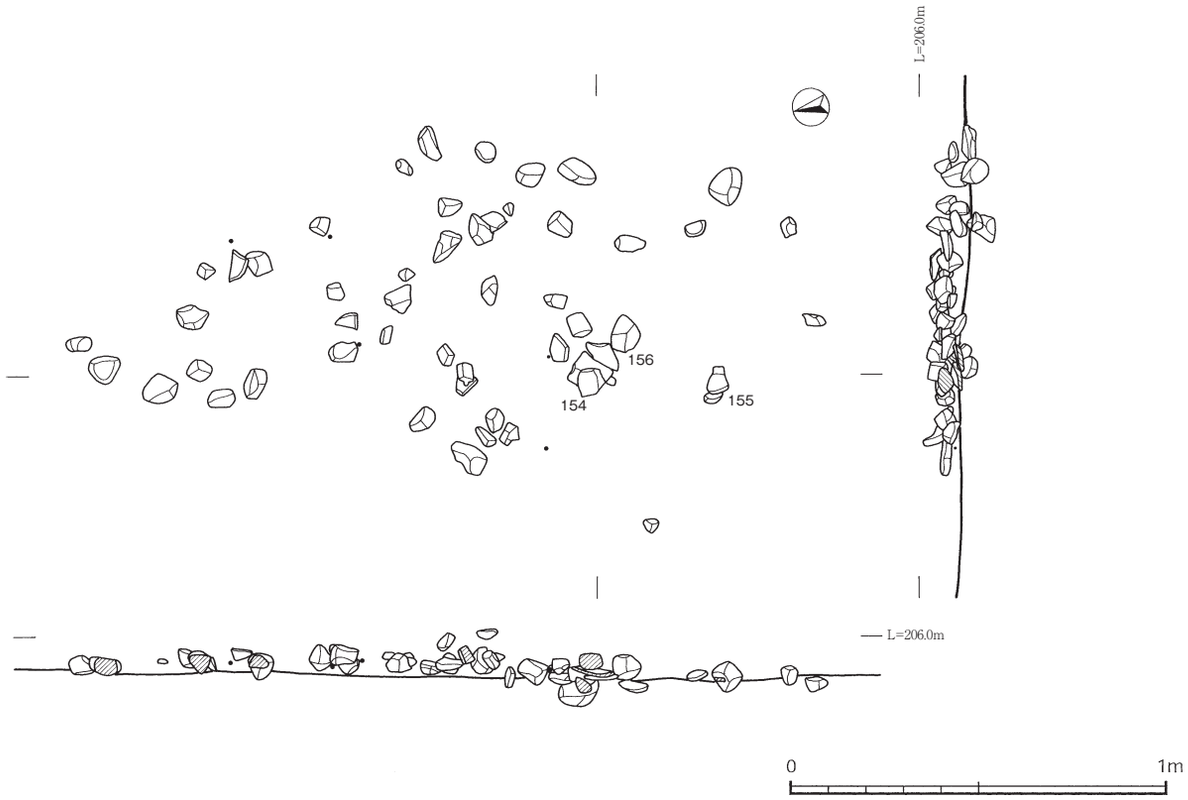
第 152 図　163 号集石遺構・出土遺物

約 130cmの範囲に礫が広がる。構成礫は被熱しているが，焼土や炭化物は検出されなかった。

集石遺構内からⅩⅦ類土器の土器片が出土した。また，磨石や砥石が，構成礫として転用されていた。145は集石遺構内と包含層出土の土器が接合したもので，146 と同一個体と考えられる。残存する胴部上半に最大径をもって屈曲し，口縁部は外反すると考えられる。文様は貝殻腹縁による直線状と波状の条痕文，条痕文と押引文が横位に交互に施文される。下部はナデ調整により無文である。胎土は白色・黄褐色の３㎜程の粒子を多く含み，器面にも礫が露出する。ⅩⅥ類もしくはⅩⅦ類土器に比定される。147 は凝灰岩製の磨・敲石で，比較的小型である。欠損部が多いが，残存する全ての側面に明瞭な敲打痕が観察できる。また，上下面は磨面であり，表面が平滑である。

160 号集石遺構（第 148・149 図）

M-17 区で検出した。長軸・短軸とも 130cmの範囲に礫が広がる。構成礫は 10cm程の大型の礫の割合が高く，ほとんどが被熱・破砕している。また，５cm程度の礫は被熱により剥離割れしたものと考えられる。



第 153 図　164 号集石遺構

集石遺構内からは 148 の中の１点および刺突文を有するXX類土器の小片が出土した。148 は胴部片である。内面はナデ調整により平滑であるが，外面はやや凹凸がある。横位の貝殻刺突文と条痕文がみられる。径５㎜大の灰色礫がまばらに含まれる。XVI類土器もしくはXVII類土器と考えられる。159 号集石遺構から出土した 145 と類似する。

161 号集石遺構（第 150・151 図）

M-18 区，Ⅵ層の上位で検出した。長軸約 180cm・短軸約 130cmの範囲に礫が広がり，被熱したものもある。

集石遺構の中央で磨・敲石と 10cm大の軽石が出土した。いずれも構成礫として転用されたものである。また，貝殻刺突文を有する土器小片，および刺突文の撚糸文を有する口縁部小片が出土した。149 は花崗岩製の磨・敲石である。右上部は欠損しているが，下・左側面には明瞭な敲打痕が観察できる。また，上・下面は磨面であり，表面は平滑である。全体的にやや赤化しており，集石遺構の構成礫として転用された被熱の影響と考えられる。

162 号集石遺構（第 150・151 図）

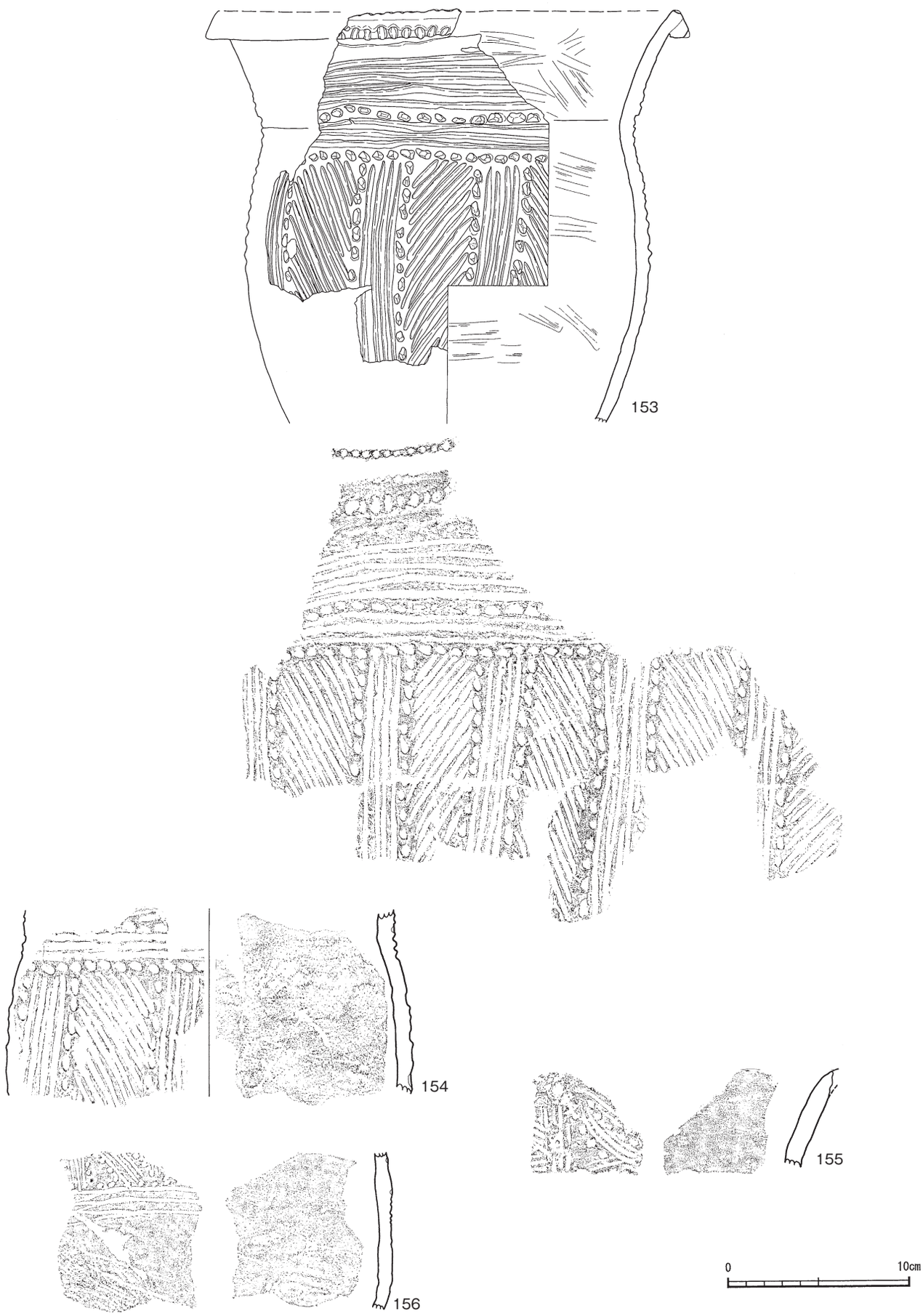
F-22 区で検出した。長軸約 150cm・短軸約 110cmの範囲に礫が広がる。礫同士の重なりはほとんどなく，平面的である。構成礫は５cm程の大きさのものが主体であり，10cm大のものが数点含まれる。１点は軽石，２点は石皿片と考えられるものが転用されていた。

集石遺構の縁辺部で土器片が出土し，Ⅵ類土器やXV類土器の小片がみられた。150 は口縁部片で，その中の１点が集石遺構内から出土した。口縁部は肥厚して文様帯を作出し，下端には明瞭な段を有する。緩やかに内湾する器形である。口唇部および文様帯下の段には刻みがあり，文様帯は斜位の沈線文を基本とし，その間が棒状工具による刺突文で埋められる。わずかに残る頸部付近には波状の沈線文が一部確認でき，125 と類似した文様が施文されていると考えられる。XV類土器に比定される。

163 号集石遺構（第 152 図）

J-21 区で検出した。長軸約 160cm・短軸約 140cmの範囲に礫が広がり，重なりもほとんど見られない。構成礫は安山岩が多く，５～７cm程のものと 10cmを超えるものとが入り混じっている。

集石遺構内からは，土器片および黒曜石・チャート・安山岩のチップが出土した。151 は胴部片である。内面には明瞭なケズリ調整がみられる。文様は縦位の沈線文が主体で，数条の刺突文が施され，153・197 に類似する。XV類土器に比定される。152 は胴部片である。器壁は薄く，厚みはほぼ一定である。内面には明瞭なケズリ調整がみられる。外面は結節縄文で充填されている。XV類土器に比定される。



第 154 図　164 号集石遺構出土遺物

164 号集石遺構（第 153・154 図）

G-22 区で出土した。長軸約 200cm・短軸約 110cmの範囲に礫が広がる。構成礫は５～８cm程が主体であり，小型の礫もわずかに含まれる。礫同士の重なりはほとんどない。

集石遺構内からXⅣ類土器やXV類土器および早期後葉と考えられる土器小片，チャート・安山岩・砂岩のチップが出土した。153 と 154 は同一個体で，口縁部から胴部が残存する。153 は包含層出土で，154 には集石遺構内出土の土器が含まれる。頸部で屈曲し，口縁部はラッパ状に開く，口唇部には三角形状に粘土紐が貼り付けられ，端部に刻みが施される。口唇部内面も同様である。胴部は丸く膨らみ，頸部からほぼ厚みは一定である。頸部より上部は横位の沈線文に刺突文が施され，頸部の横位の刺突文を挟んで胴部は縦位の施文である。胴部は４条の沈線文の両側に刺突文が１列垂下し，その区画を埋めるように斜位の沈線文が密に施される。斜位の沈線文は右下がり・左下がりが交互に施文される。調整は丁寧で，焼成も良好である。XⅣ類土器に比定される。155 は口縁部付近の破片であるが，口唇部分が剥離割れしている。外面には縦に筋状に色調が明るい部分があり，粘土紐が剥落した痕跡の可能性がある。外面は斜位の沈線文で両端に刺突文が施される。詳細な型式は判断できなかったが，特徴から早期後葉のものと考えられる。156 は胴部片である。下半が緩やかに屈曲するため，底部へとすぼまる器形と考えられる。内外面ともケズリ痕がわずかに残っており，やや凹凸がある。文様は縦位・斜位の沈線文の間に円形の刺突文が施され，無文部との境界には横位の沈線文が数条含まれる。XⅣ類土器の範疇に含まれると考えられる。

165 号集石遺構（第 155・156 図）

G-21 区で検出した，径約 120cmの範囲に礫が広がる。一部に礫が重なる部分があるが，掘り込みは確認されなかった。構成礫は７～10cm程の大きさが主体であり，１点は磨石片と考えられるものが転用されていた。

集石遺構内から土器片およびチャートのチップが出土した。157・158 は集石遺構内出土土器と包含層出土の土器が接合した資料で，同一個体である。口縁部から底部まで残存する。頸部内面に明瞭な稜をもって口縁部がラッパ状に外反する。頸部から底部まではやや膨らみをもったバケツ状になる。口唇部は平坦面を有し，端部に刻みが施される。内外面ともナデ調整が丁寧である。口縁部と頸部には横位の沈線文がめぐり，その間を格子状の沈線文が施文される。頸部以下は縦位の網目撚糸文が帯状に施され，その上から横位・格子状の沈線文が施文される。この個体は胴部が一部扁平になっている箇所があり，文様も潰れている。また，潰れた部分の口縁部内面には粘土が帯状に貼り付けられている。この粘土は不整形であり，稜の上にも重なって貼り付けられている。突帯の成形とは異なり，文様を意識したとは考えがたい。胴部が潰れていることから推測すれば，焼成前の乾燥段階で土器が倒れて胴部が潰れ，その際に口縁内面に入ったひびを粘土で補修した可能性がある。157 と 158 は同一個体ではあるが，胴部形状が異なるため，それぞれの断面を掲載した。XV類土器に比定される。159 は集石遺構内出土の１点の土器が含まれ，口縁部が残存する。内外面とも丁寧なナデ調整のXIX類土器で，口縁部がやや肥厚する。口縁部は緩やかな波状を呈すると考えられる。胎土には白色粒や金雲母が多量に含まれる。形状から，XⅣ類土器に伴う無文土器と考えられる。160 は集石遺構内出土の土器と包含層出土の土器が接合した底部片である。底径は 8.4cmと小さく，底部から緩やかに立ち上がる。内外面ともナデ調整であり，外面には帯状の撚糸文がみられる。胎土の砂粒は細かく，全体的に摩滅している。XV類土器に比定される。

166 号集石遺構（第 155・156 図）

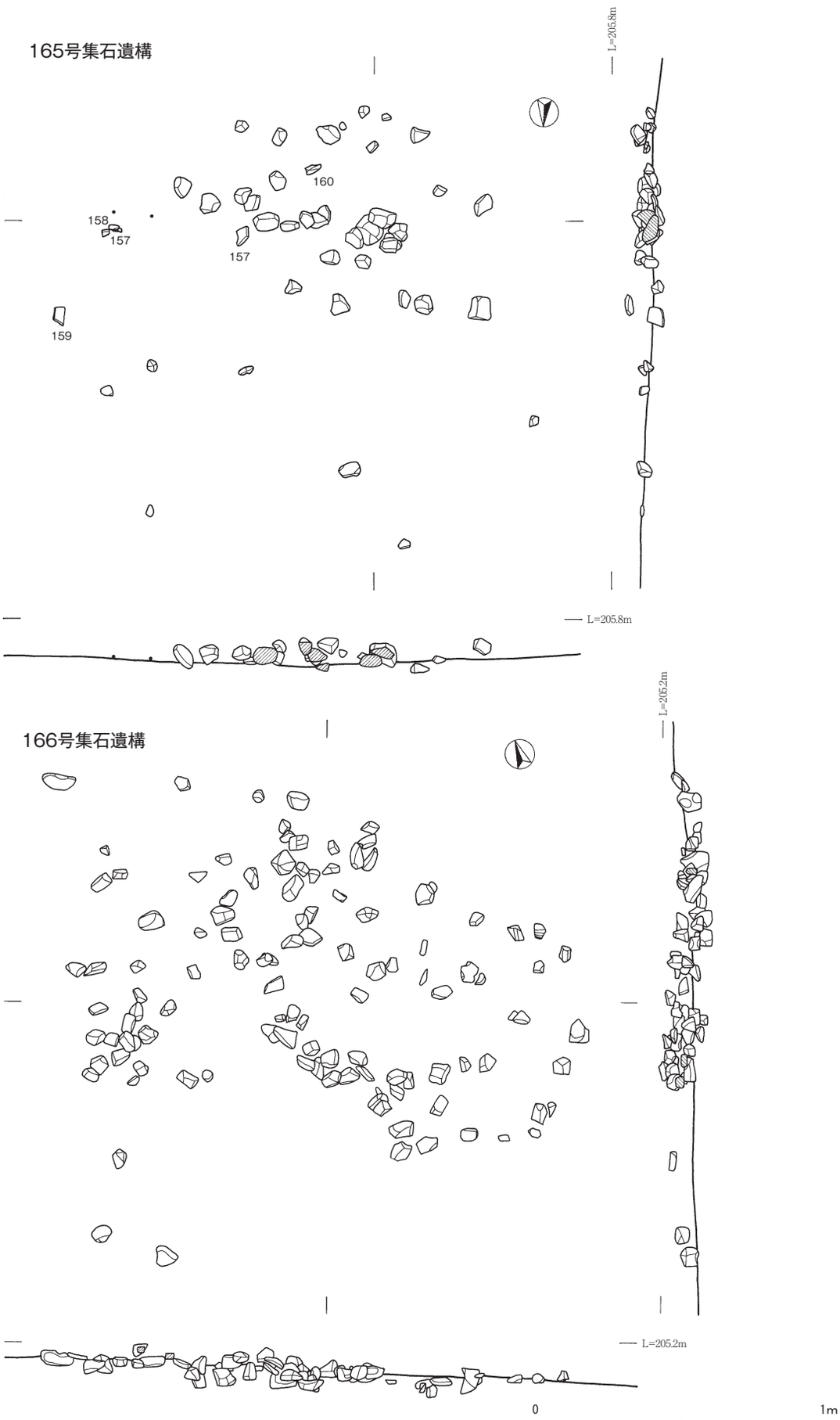
J-21 区で検出した。礫は長軸約 190cm・短軸約 170cmの範囲に広がり，重なりもほとんどない。構成礫は５～７cm程の大きさのものが主体であり，小型礫が間に含まれる。

集石遺構内から早期後葉と考えられる土器片が出土した。また，１点の磨石片と考えられるものが，構成礫として転用されていた。161 には集石遺構内から出土した土器片１点が含まれ，口縁部から胴部まで残存する。頸部に１条の突帯を有し，口縁部は緩やかに内湾しながらラッパ状に開く。口縁は波状となり，上面観は方形を呈する。胴部はやや膨らみをもちながらすぼまる。内外面とも丁寧なナデ調整であり，口唇部もナデ調整によって平坦面が作出され，刻みが施される。口縁部は沈線で曲線文が描かれ，その間が円形の刺突文で充填される。胴部最大径の部分は数条の横位の沈線文がめぐり，上下は結節縄文が全面に施文される。XⅣ類土器に比定される。162 は頸部片と考えられる。器壁は薄く，内外面のナデ調整も丁寧である。若干摩滅しており，外面の文様は判然としない。詳細な型式は不明だが，特徴から早期後葉のものと考えられる。

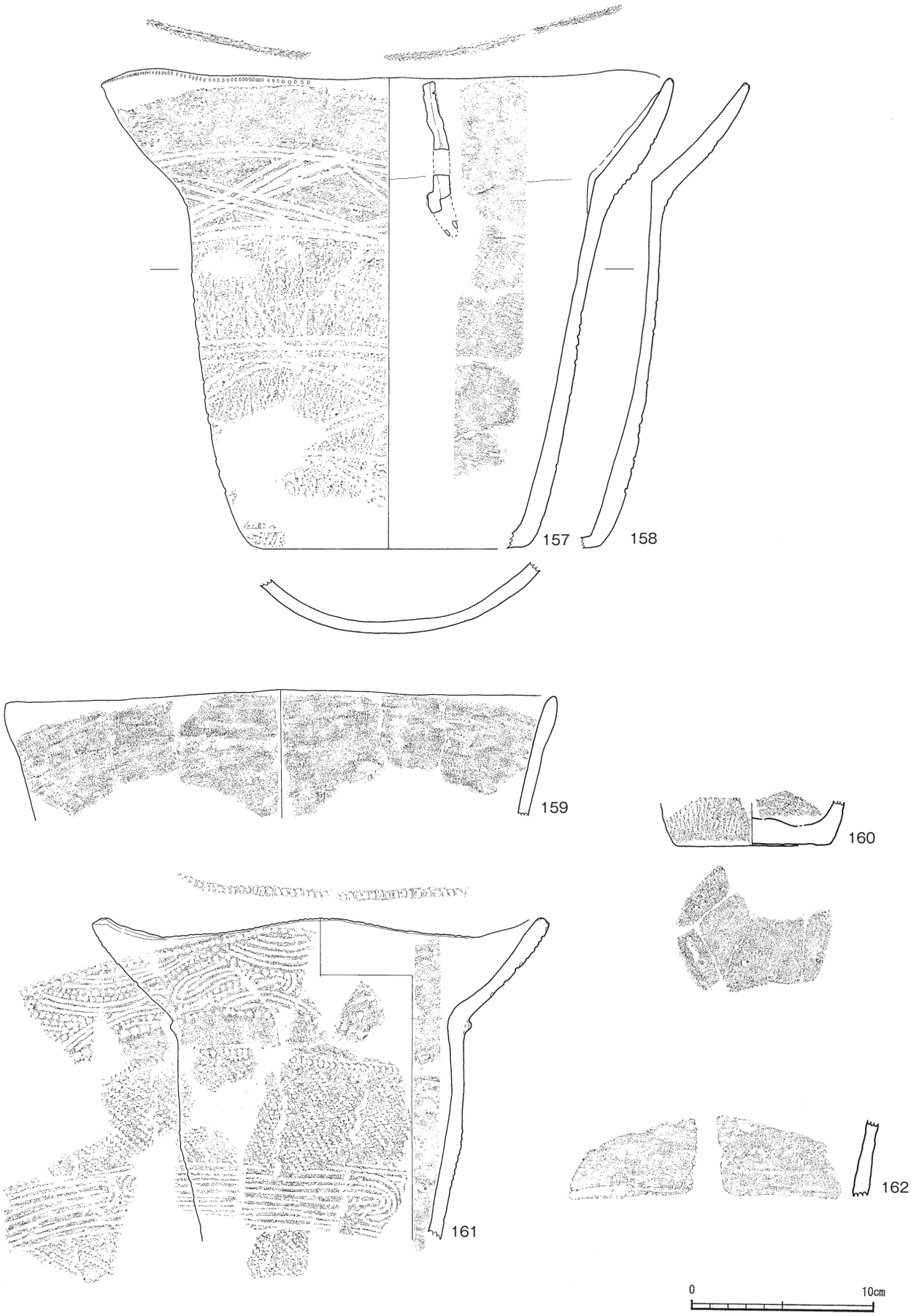
167 号集石遺構（第 157 図）

F-16 区で検出した。長軸約 170cm・短軸約 140cmの範囲に，ほぼ平面的に礫が広がる。10cm程度の礫が主体をなすが，20cm近い大型の礫も数個含まれる。大部分が安山岩の亜円礫や角礫で，赤色化した礫はほとんどない。一部礫の密度が高い部分があり，周辺へと礫が掻き出されたような形状である。

集石遺構内から平底の土器底部片が出土したが，小片のため詳細は不明である。



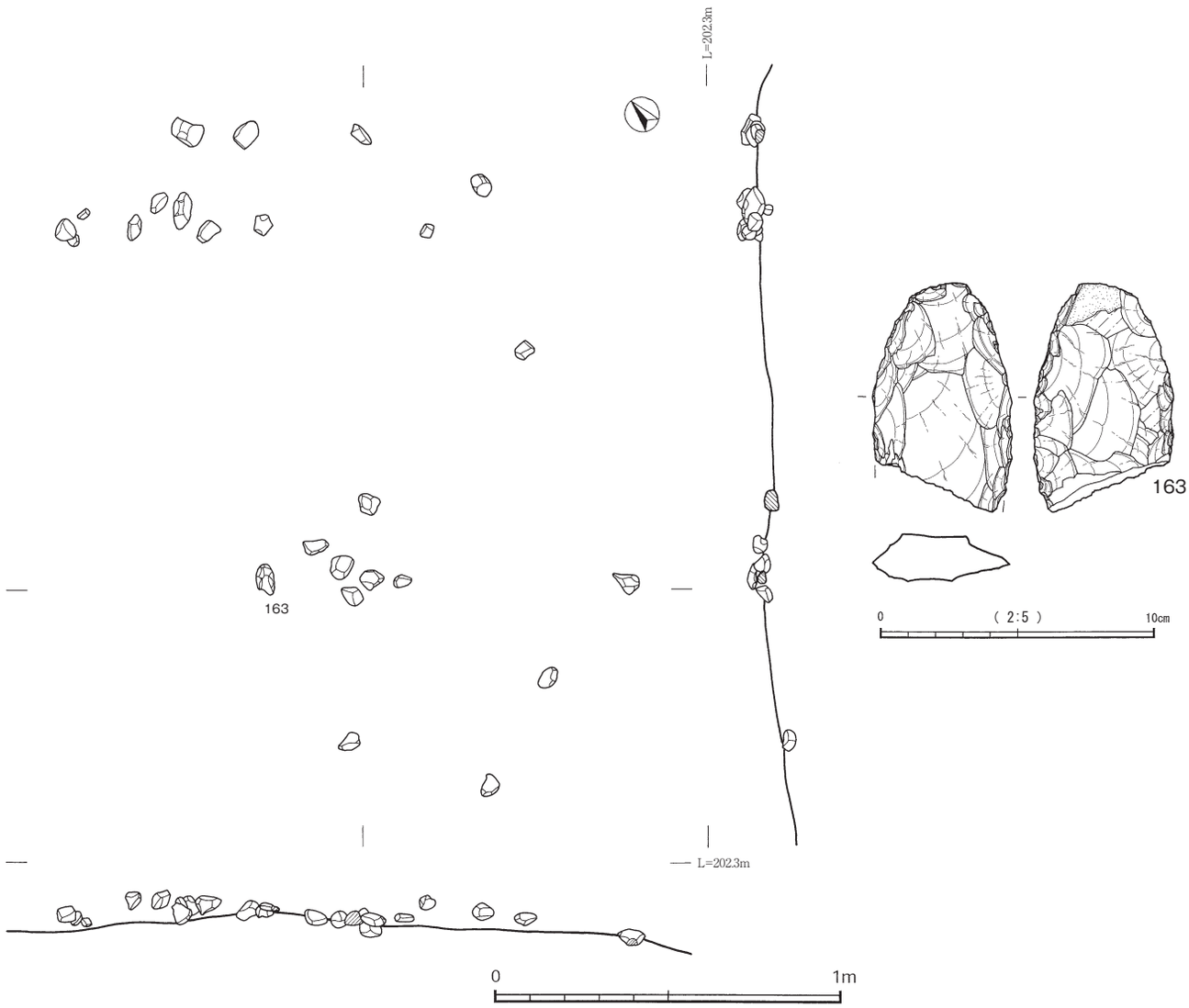
第 155 図　165～166 号集石遺構



第 156 図　165～166 号集石遺構出土遺物



第 157 図　167～168 号集石遺構



第 158 図　169 号集石遺構・出土遺物

168 号集石遺構（第 157 図）

Ｊ-18 区で検出した。長軸約 150cm・短軸約 100cmの範囲に礫が広がる。構成礫は安山岩や凝灰岩で，半数が破砕礫である。５～８cm程の大きさのものが主体であり，10cmを超える大型礫が１点含まれる。

関連する遺物は出土していない。

169 号集石遺構（第 158 図）

M-16・17 区のⅥ層中位で検出した。長軸約 200cm・短軸約 170cmの範囲に礫が広がる。範囲は広いが，構成礫は 23 点と少ない。構成礫は５～10cm程で，やや丸みを帯びた角礫が多い。被熱し赤化した礫も目立ち，全体に１～３㎜程の炭化物が広がっている。

集石遺構内からⅥ類土器の小片および欠損した打製石斧，磨石片が出土した。163 は頁岩製の打製石斧である。下半は欠損しており，基部しか残存していないが，本来はバチ型であったと考えられる。裏面の頂部には原礫面を残す。側縁部は剥離調整により成形されている。

埋土中から検出された炭化物の年代測定を行ったところ，7,044 － 6,750cal ＢＣの年代値が得られた。

170 号集石遺構（第 159 図）

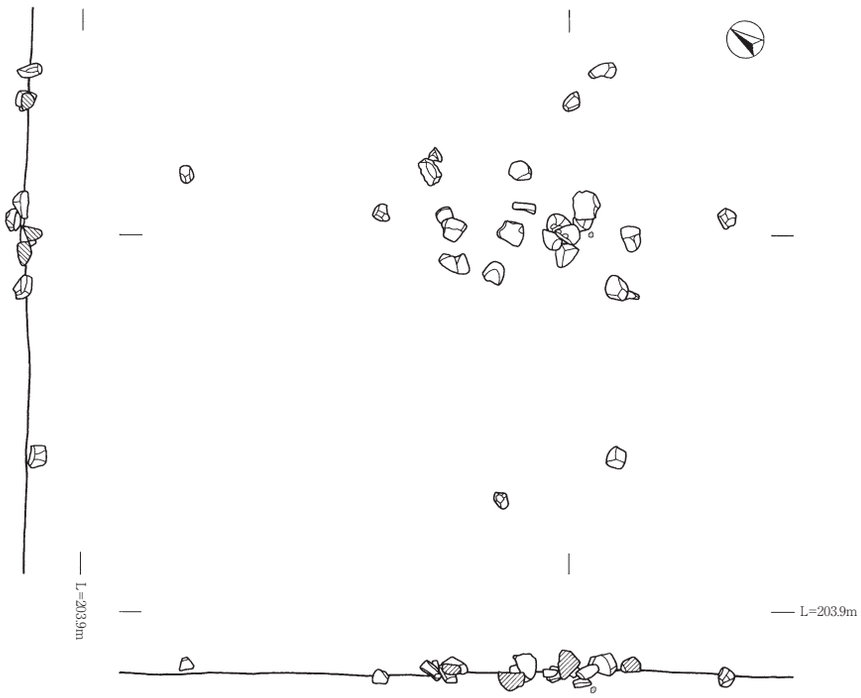
Ｊ-17 区で検出した。長軸約 150cm・短軸約 120cmの範囲に礫が広がる。周辺の土には炭化物が混在していた。構成礫数は 25 点と少なく，５～８cm程の大きさのものが主体である。構成礫のうち１点は磨石の転用品であった。

埋土中から検出した炭化物の年代測定を行ったところ，8,655 － 8,545cal ＢＰの年代値が得られた。

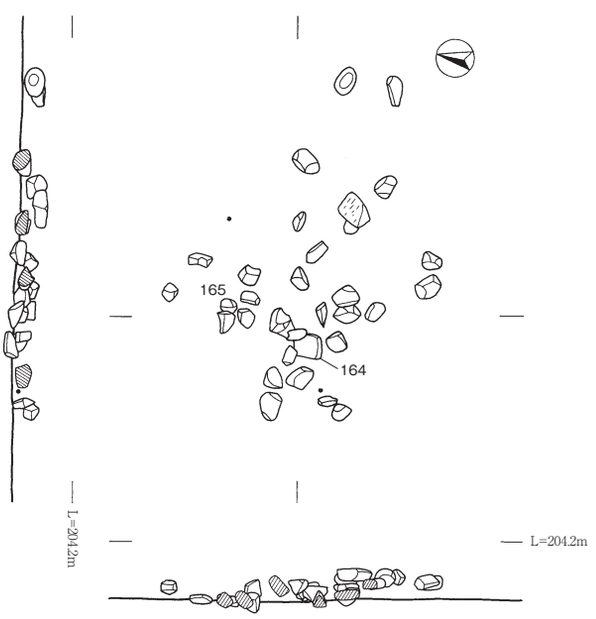
171 号集石遺構（第 159 図）

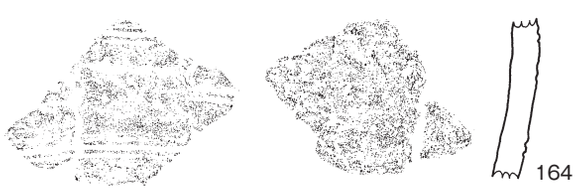
Ｊ-14 区で検出された。礫は長軸 95cm・短軸 75cmの範囲にほぼ平面的に広がる。また，遺構は５～８cm程度の小型の礫で構成される。炭化物や掘り込みは確認できなかった。

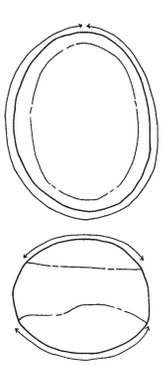
170号集石遺構

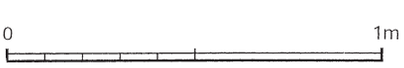


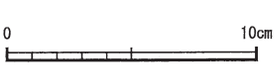
171号集石遺構



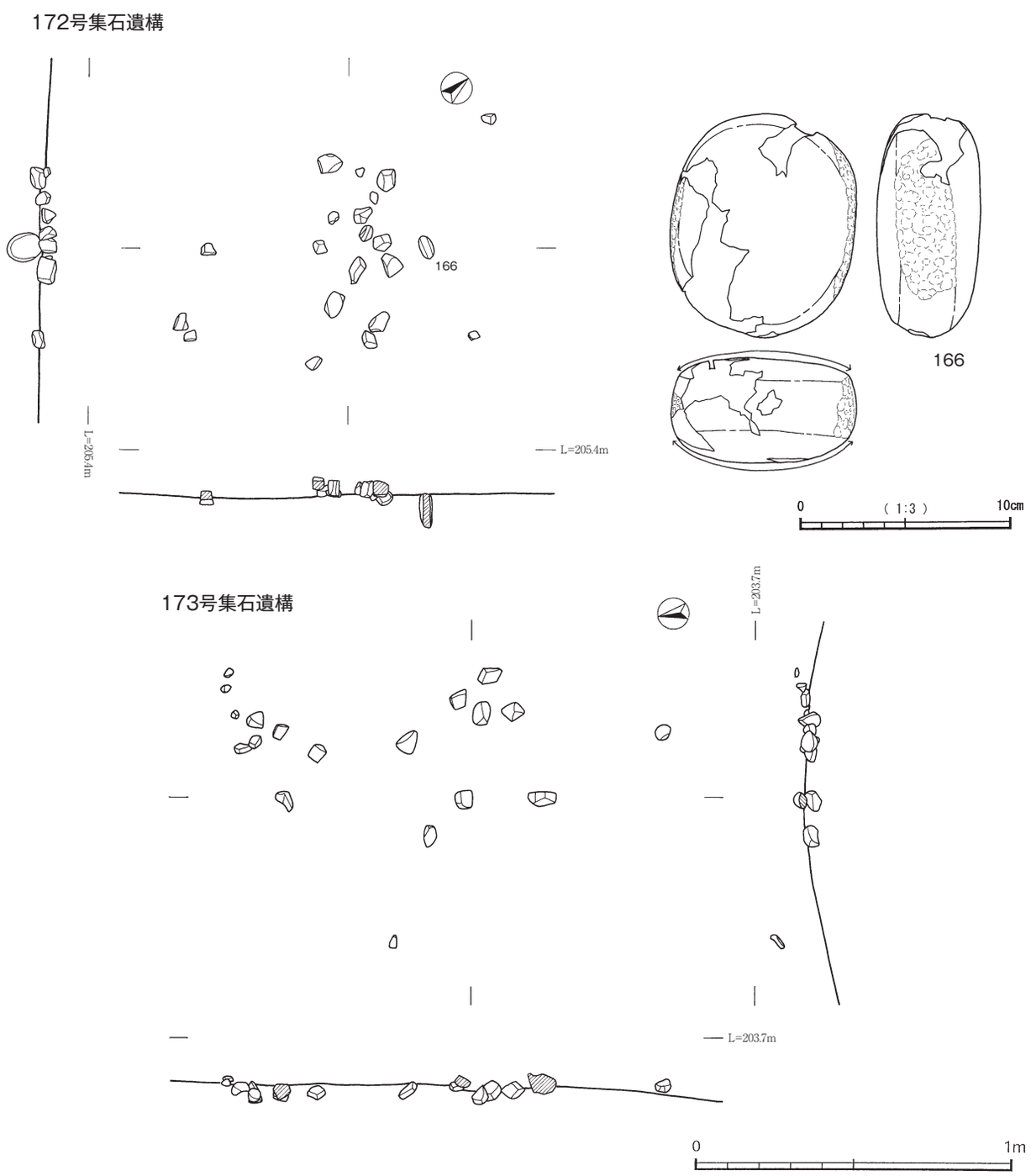








第 159 図　170 号集石遺構，171 号集石遺構・出土遺物



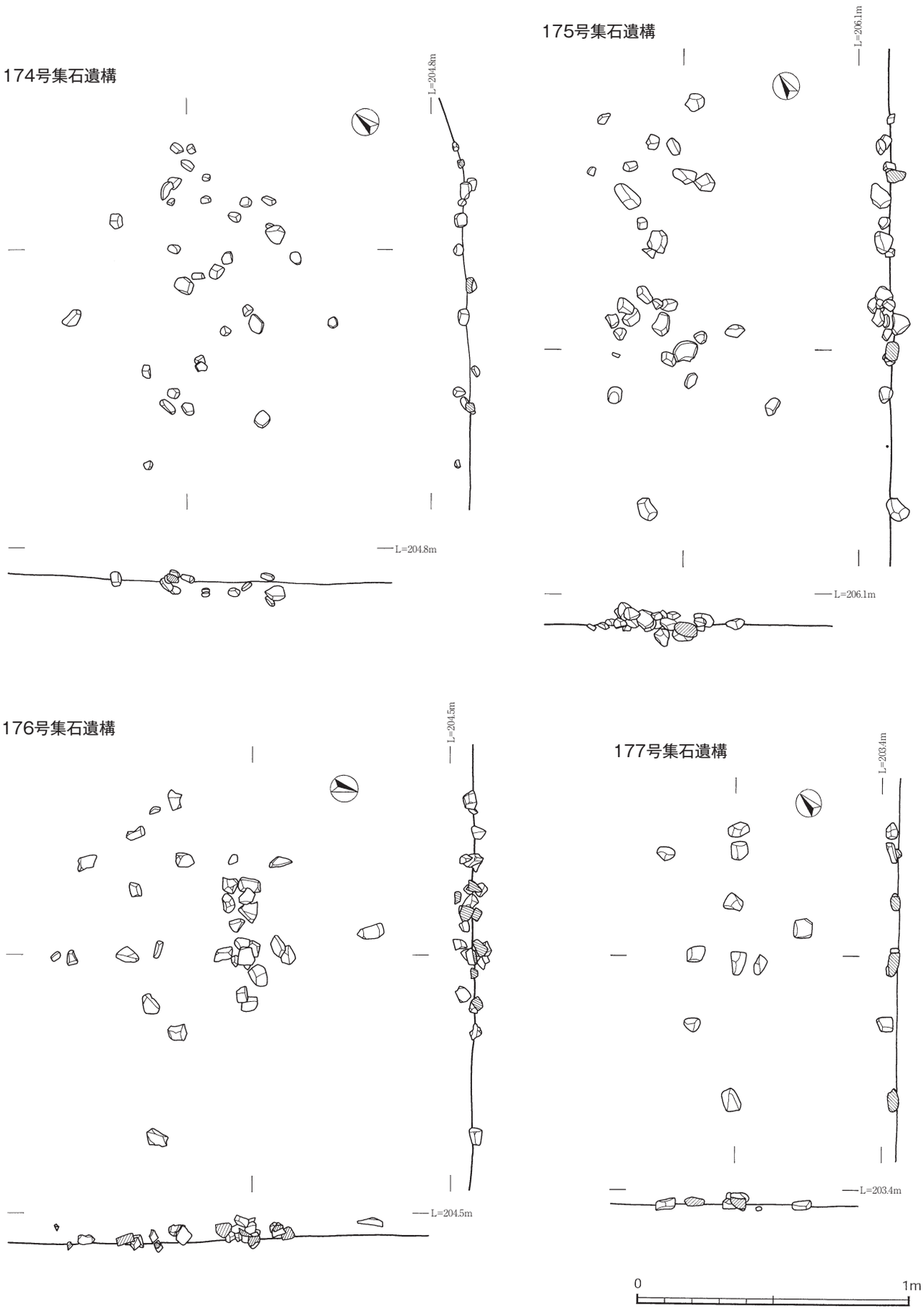
第 160 図　172 号集石遺構・出土遺物，173 号集石遺構

集石遺構内から 164，チャートのチップ，およびハンマーストーン片が出土した。また，磨石が構成礫として転用されており，1 点を図化した。164 は胴部片である。色調は他の土器よりも明るく，胎土は多孔質で軽い。白色のやや大きめの粒を多量に含む。外面には貝殻条痕文が数条施文されるが，施文されない部分も多い。特徴から，XVI類土器もしくはXVII類土器と考えられる。165 は凝灰岩製の磨石である。手のひらに収まるほどの小型の製品である。全面が磨面であり，表面が平滑である。

172 号集石遺構（第 160 図）

J -21 区で検出した。長軸約 100cm・短軸約 70cmの範囲に礫が広がる。礫の重なりはみられない。構成礫は５～７cm程のやや小型の礫が主体を占める。数点は被熱で赤化し，取り上げ時に砕けたものもあった。炭化物が全体的に検出された。

166 は集石遺構内出土で，砂岩製の磨・敲石である。立位の状態で出土しており，他の礫よりも下位で検出されている。表面は非常に脆く剥離しており，右・左側面



第 161 図　174～177 号集石遺構

には細かい敲打痕が認められ，平坦面をなしている。集石遺構内の構成礫として転用され，被熱した影響で脆弱化したものと考えられる。

173 号集石遺構（第 160 図）

G-３・４区，Ｖｃ層の直下で検出した。長軸約 110cm・短軸約 60cmの範囲に 19 点の礫が広がる。構成礫は８cm程の大きさのものが主体であり，一部小型礫が含まれる。被熱により赤化した礫がみられ，１～２cmほどの炭化物が点在する。

関連する遺物は出土していない。

174 号集石遺構（第 161 図）

K-18 区で検出した。長軸約 120cm・短軸約 100cmの範囲に 31 点の礫が広がる。構成礫は３～10cmとまばらであるが，比較的小型の礫が多い。

集石遺構内からXX類土器の小片が出土したが，集石遺構との共伴関係については不明である。

埋土中から検出された炭化物の年代測定を行ったところ，5,989 － 5,833cal ＢＣの年代値が得られた。

175 号集石遺構（第 161 図）

G-22 区で検出した。長軸約 160cm・短軸約 80cmの範囲に 27 点の礫が広がる。構成礫は５～８cm程が主体であり，10cmを超えるものが２点含まれる。

磨石片と考えられるものが，集石遺構の構成礫として転用されていた。その他の関連する遺物では，XX類土器の小片，およびチャートのチップが出土した。

176 号集石遺構（第 161 図）

Ｅ-13・14 区で検出した。径約 130cmの範囲に礫が広がり，中心部分は礫の密度がやや高い。構成礫は５～８ｃｍ程の大きさのものが主体であり，全て角礫であった。数点が被熱により赤化し，破砕しかかったものがみられた。

関連する遺物は，早期前葉と考えられる貝殻条痕文を有する土器小片が１点出土した。

177 号集石遺構（第 161 図）

Ｉ-８区，Ｖｃ層の直下で検出した。同様にＶｃ層の直下で検出された 227 号集石遺構に近接しており，本集石遺構の礫が 227 号集石遺構から広がったものである可能性もある。長軸約 110cm・短軸約 60cmの範囲に 10 点の礫が広がる。構成礫は５～７cm程の大きさで揃っており，安山岩が主体である。被熱による赤化はみられない。

関連する遺物は出土していない。

178 号集石遺構（第 162 図）

G-21 区で検出した。長軸約 130cm・短軸約 120cmの範囲に礫が広がる。礫同士はわずかに重なる部分もあるが，全体的には平面的な広がりである。構成礫は８cm程の礫が主体であり，より小型のものも散在する。１点は石皿片と思われるものが転用されていた。

関連する遺物は，貝殻刺突文を有する土器およびXX類土器の小片や黒曜石のチップが出土した。

179 号集石遺構（第 162 図）

K-18 区で検出した。長軸約 110cm・短軸約 90cmの範囲に礫が広がる。礫の重なりはほとんどなく，密度はやや低い。構成礫は５～８cm程の大きさのものが主体をなす。

集石遺構内からはXVI類土器もしくはXVII類土器と考えられる小片が１点出土した。

180 号集石遺構（第 162 図）

Ｊ-12 区で検出した。長軸約 120cm・短軸約 110cmの範囲に広がる。構成礫は大きさ５～８cm程のものが主体を占め，重さ 200ｇ前後のものが多い。

関連する遺物は出土していない。

181 号集石遺構（第 163 図）

Ｌ-20 区で検出した。長軸約 120cm・短軸約 90cmの範囲に礫が広がる。構成礫は 10cm程のやや大型の礫が主体である。礫同士の重なりは，やや重層的である。

関連する遺物は，XX類土器の小片が２点出土した。

182 号集石遺構（第 163 図）

K-16 区で検出した。長軸約 130cm・短軸約 70cmの範囲に礫が広がる。東側の礫はややまとまり，若干重なりをもつ。構成礫の半数以上が５cm程の大きさで，重さ 100 ｇ以下の小型礫である。

関連する遺物では，周辺からXII類土器，XI類土器，VI類土器及び詳細不明の口縁部と胴部片が出土した。いずれも小片であり，明確に集石遺構に伴う土器は判断できなかった。

183 号集石遺構（第 163 図）

Ｅ-24 区で検出した。長軸約 40cm・短軸約 30cmの範囲に 12 点の礫がまとまる小規模な集石遺構である。礫同士の重なりもほとんどなく，密度も低い。構成礫は５～７cm程の大きさの被熱破砕礫である。

関連する遺物は出土していない。

184 号集石遺構（第 163 図）

Ｅ-14 区で出土した。長軸約 60cm・短軸約 45cmの範囲に礫が９点まとまる。構成礫は９点と少なく５cm以下から 15cm程まで多様であるが，大型の礫が主体である。約半数が被熱により赤化しており，一部破砕したものもあった。

関連する遺物は出土していない。

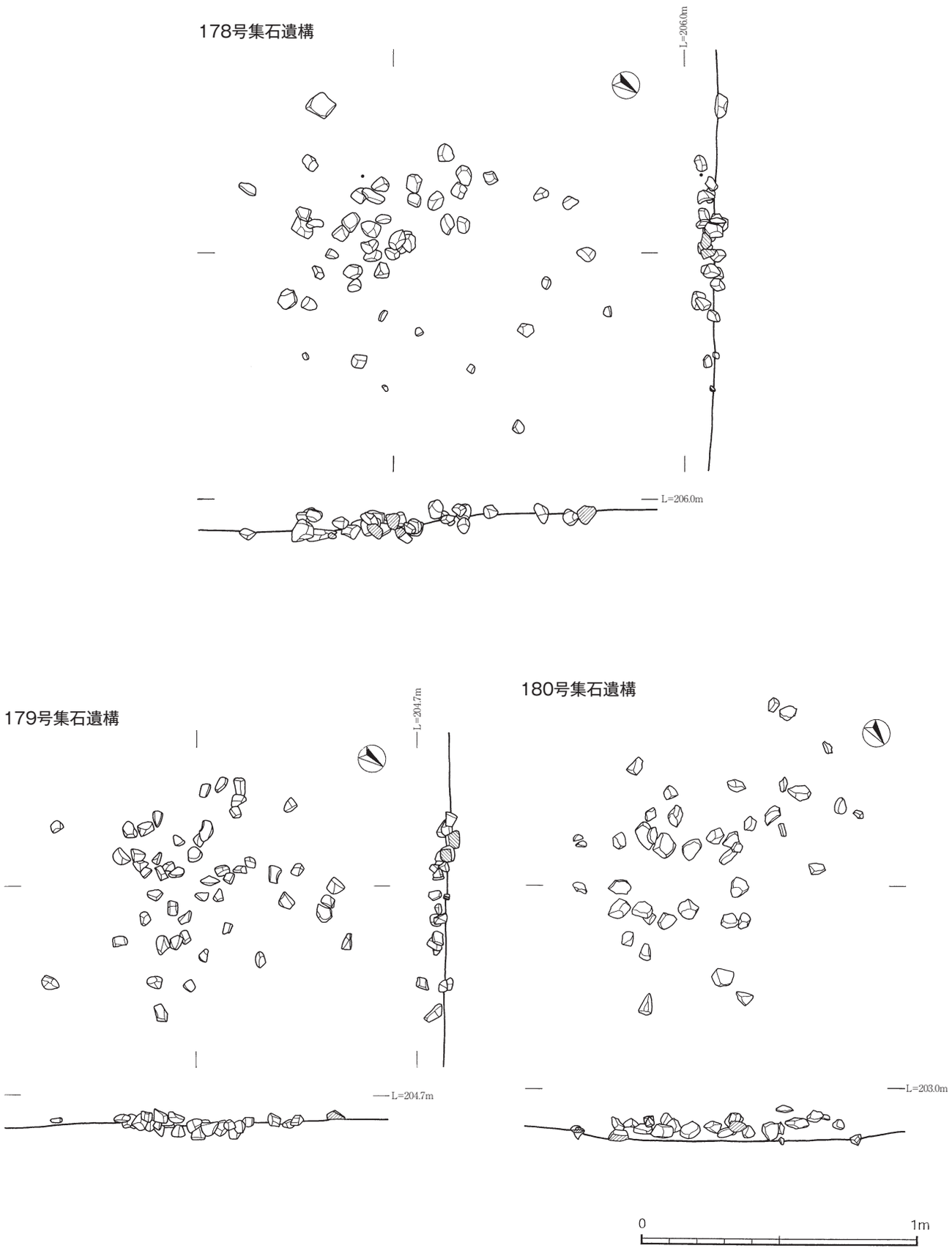
185 号集石遺構（第 164 図）

G-14 区で検出した。長軸約 130cm・短軸約 90cmの範囲にほぼ平面的に 23 点の礫が広がる。10cm程の角礫が主体をなし，被熱礫は少ない。周辺にも多くの礫が広がっており，本集石遺構から広がった可能性がある。

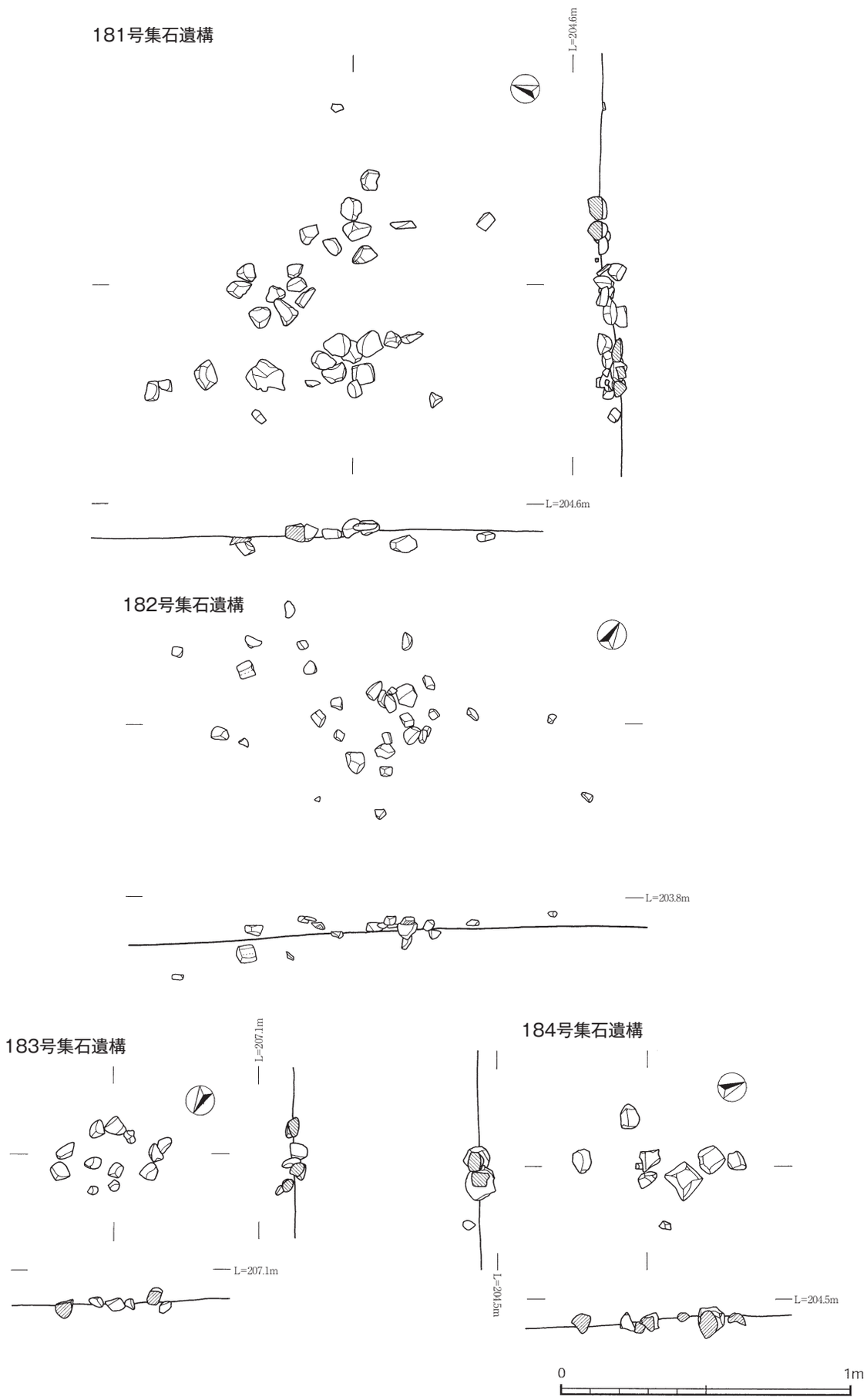
関連する遺物は出土していない。

186 号集石遺構（第 164 図）

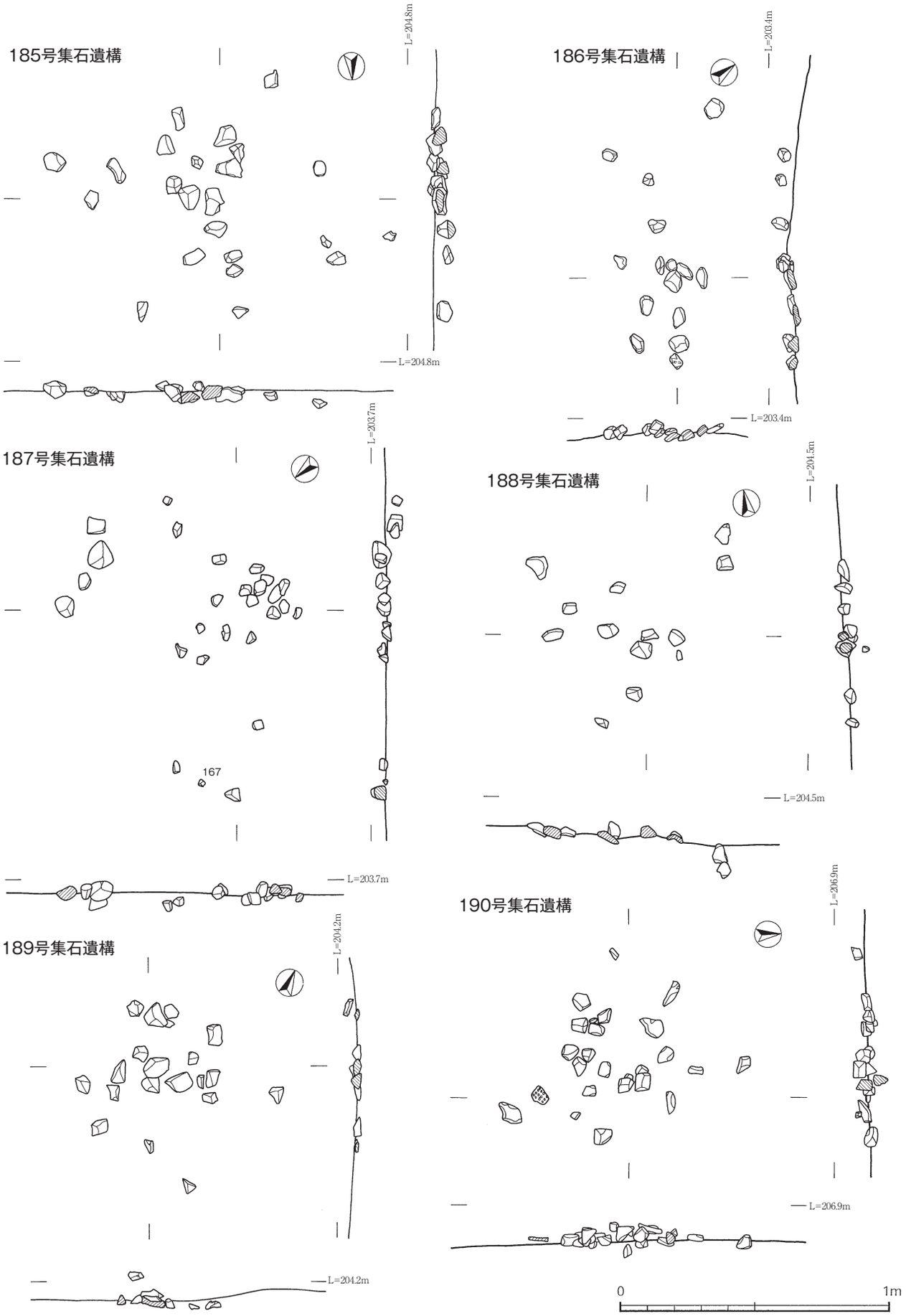
Ｍ・Ｎ-18 区の北東方向へ緩やかに傾斜する位置で検出した。253 号・304 号集石遺構に隣接する。長軸約



第 162 図　178～180 号集石遺構



第 163 図　181～184 号集石遺構



第 164 図　185～190 号集石遺構

100cm・短軸約 50cmの範囲に礫が広がる。構成礫７～８cm大の被熱した角礫が多く，破砕礫は少ない。炭化物がわずかに検出された。

関連する遺物は出土していない。

炭化物の年代測定を行ったところ，6,059 － 5,973cal ＢＣの年代値が得られた。

187 号集石遺構（第 164・165 図）

Ｊ-18 区で検出した。長軸約 120cm・短軸約 90cmの範囲に礫が広がる。構成礫のほとんどは５cm程の大きさで 100 ｇ以下の小型の安山岩であり，その他，300ｇを超える赤化し，脆くなった砂岩の円礫も１点含まれる。中心は明確ではないが，大型の礫が東側にまとまっている状況は確認できた。

集石遺構内から 167 の石核が，１点出土した。玉髄（CC2）製の石核で，剥片素材の礫面を打面としている。礫面は３面残存しており，各礫面から剥離をおこなっている。その他，鉄石英製のフレイクが１点出土した。

188 号集石遺構（第 164 図）

Ｋ・Ｌ-17 区で検出した。径約 80cmの範囲に礫が広がる。全体的に炭化物が点在していた。構成礫のほとんどが５cm程の大きさの安山岩で，被熱により赤化または破砕した状態である。

関連する遺物は出土していない。

189 号集石遺構（第 164 図）

M-20 区で検出した。長軸約 80cm・短軸約 70cmの範囲に 20 点の礫が広がる。構成礫は５～８cm程の大きさでそろっている。

関連する遺物は出土していない。

190 号集石遺構（第 164 図）

Ｆ-23 区で検出した。長軸約 90cm・短軸約 80cmの範囲に礫が広がる。礫の重なりはほとんどなく，平面的である。構成礫の大きさは，５～８cm程の大きさの角礫が主体である。被熱による赤化や破砕したものはなかった。

関連する遺物は，Ⅶ類土器および楕円押型文を有するⅪ類土器の胴部小片が各１点出土した。

【Ⅱａ類】

本類は集石遺構を構成する礫が比較的集中し，また，重層的であり，掘り込みの存在が想定できる一群である。

191 号集石遺構（第 165 図）

Ｋ-19 区で検出した。径約 110cmの範囲に礫がまとまる。礫の密度は高く，重なりも重層的であるため掘り込みが伴っていた可能性が高い。また，他の集石遺構では掘り込みの埋土となることが多い，明褐色のパミス粒を含む黒褐色土から礫が出土する状況であり，この点も掘り込みを有していた可能性を示唆する。構成礫は５cm以下の大きさが主体であり，数点 10cm近いものがある。

集石遺構内からは早期後葉と考えられる底部片および条痕文を有する胴部小片，黒曜石とチャートのチップが出土した。168 は底部片で，胴部への立ち上がり部分の接合面で剥落している。器壁は比較的厚いが，胎土も砂粒が細かく丁寧な調整である。底面は上げ底になる。特徴から，早期後葉のものと考えられる。

192 号集石遺構（第 165 図）

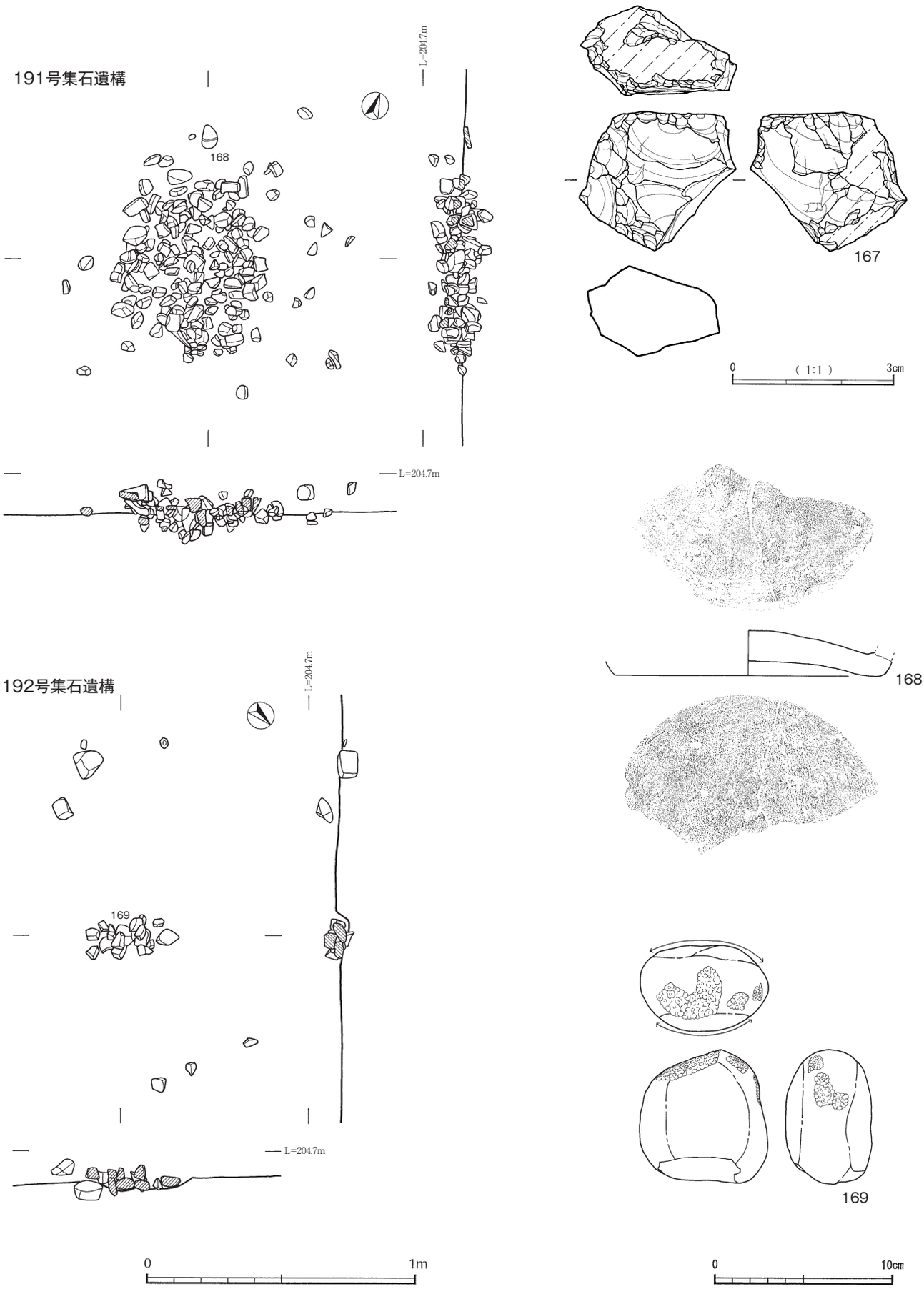
Ｊ-18 区で検出した。長軸約 35cm・短軸約 20cmの範囲に 24 点の５cm程の礫が集中し，周囲にも点在する。礫の集中部はやや窪んでいたが，明確な掘り込みは確認できなかった。構成礫は安山岩が多く，周縁部に 10cm大の角礫が認められた。

関連する遺物は玉髄（CC2）のフレイクが出土し，構成礫として磨・敲石が１点転用されていた。169 は凝灰岩製の磨・敲石である。上側面および右側面上部に敲打痕が確認できる。特に上面の敲打痕は密度が高く，原形を保っていないため，使用頻度が高かったと考えられる。表裏面とも磨面であり，表面は平滑である。磨・敲石は集石遺構のほぼ中央に位置していた。

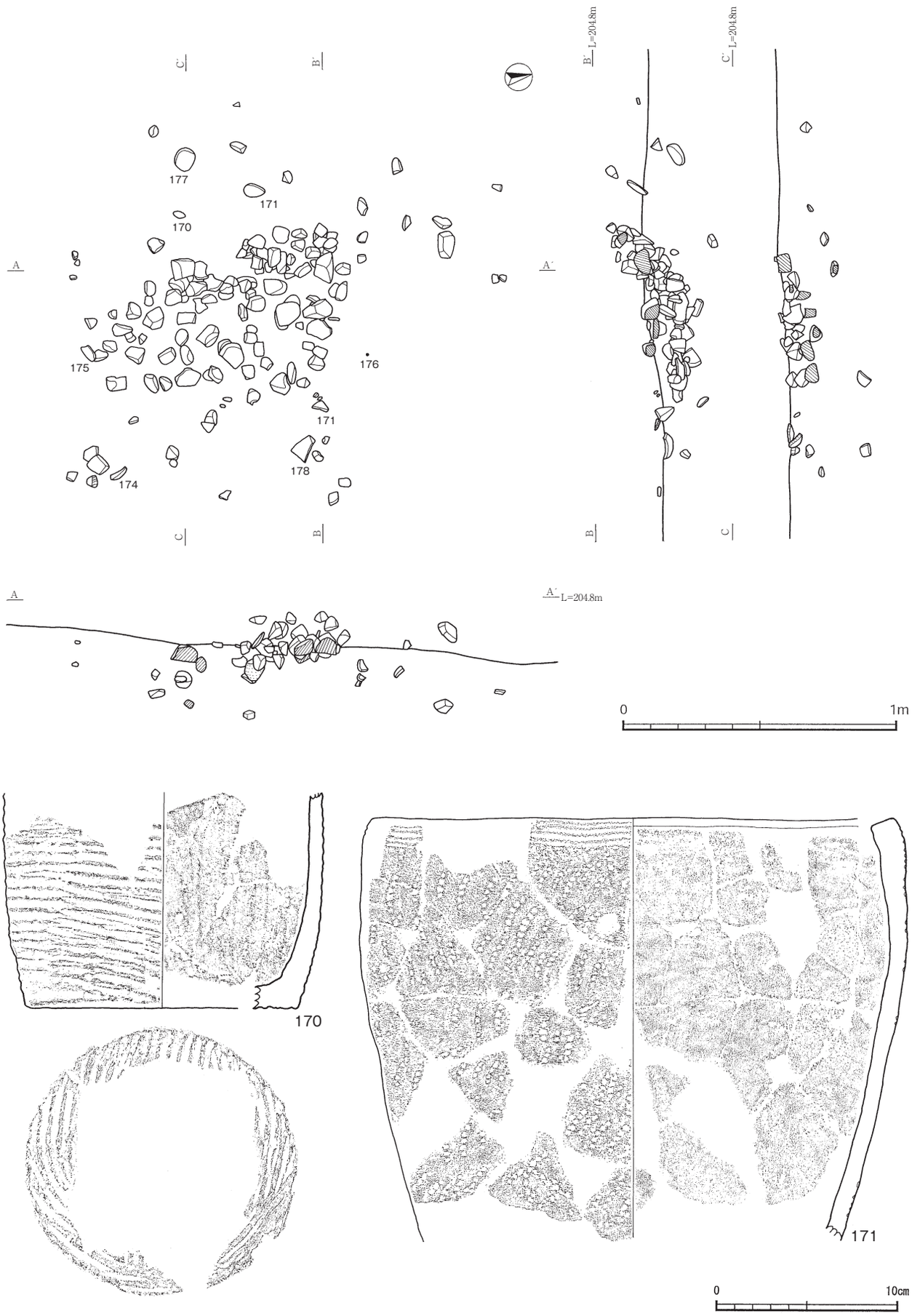
193 号集石遺構（第 166～168 図）

Ｊ-19 区で検出した。長軸約 100cm・短軸約 60cmを中心に礫が集中し，周辺にも広がる。構成礫の大半は５cm程の安山岩や凝灰岩の角礫であり，集中部の下層には赤化した礫が多く確認された。礫の重なりから，小規模な掘り込みがあった可能性も考えられる。

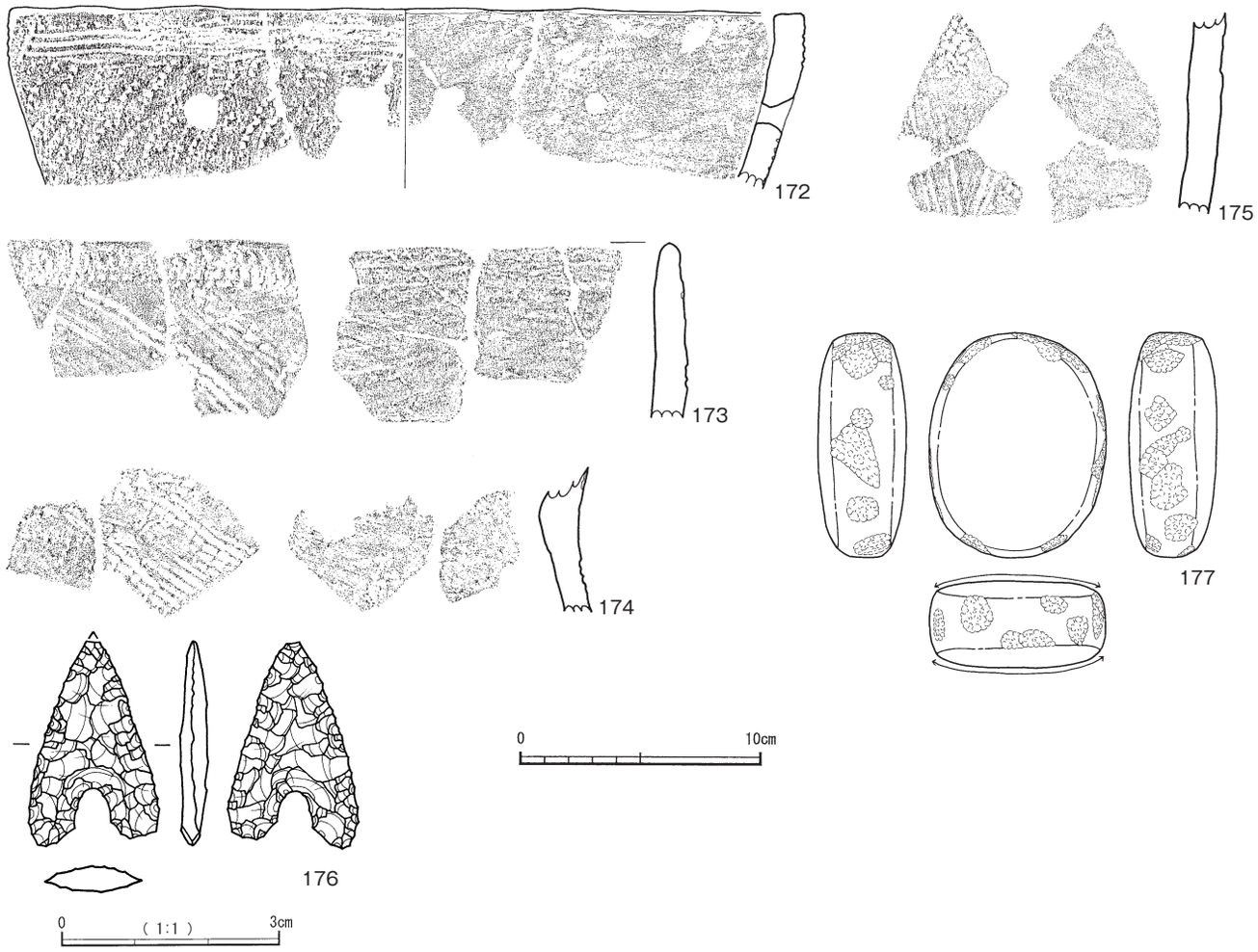
関連する遺物は多く，170・171・173～175・178 の土器が出土した。170 は集石遺構内から出土した１点の土器片と包含層出土の土器が接合したもので，胴下半から底部が残存する。幅の広い大振りの肋を持つ貝殻でやや斜位の条痕を施す。底面も輪郭に沿うように条痕が施されている。内面は縦位のケズリ調整であり，底部から掻き上げるように調整されている。Ⅱ類土器と考えられる。171 は本集石遺構・87 号土坑・包含層出土の土器が接合した。口縁部から胴部まで残存する。口縁部はやや内湾し，胴部上位がやや膨らんですぼまる器形である。口唇部は平坦であり，やや内傾する。口縁部には貝殻条痕文が巡り，胴部は貝殻腹縁刺突文が全面に施される。刺突文は貝殻腹縁によるロッキングで，相交弧文に近い形状である。胎土は約２㎜の白色粒を多く含み，表面にも露出している。Ⅵ類土器に比定される。172 は包含層出土の土器で，171 と同一個体と考えられる。補修孔が対で残存しており，内外両側から穿孔されている。穿孔は内外面で非対称であり，８割近くが外面側から穿孔されている。胎土は石英や白色粒を多く含むやや粗い胎土で，一部表面が剥落している。173 は集石遺構内出土の一括資料である。口縁部片で，口唇部は丸く成形されている。全体的に厚みがあり，明確な径は算出できないが，残存部のカーブからみて大型の深鉢になると考えられる。口縁部には不鮮明な貝殻刺突文が１段巡り，胴部には斜位



第 165 図　187 号集石遺構出土遺物，191～192 号集石遺構・出土遺物



第 166 図　193 号集石遺構・出土遺物

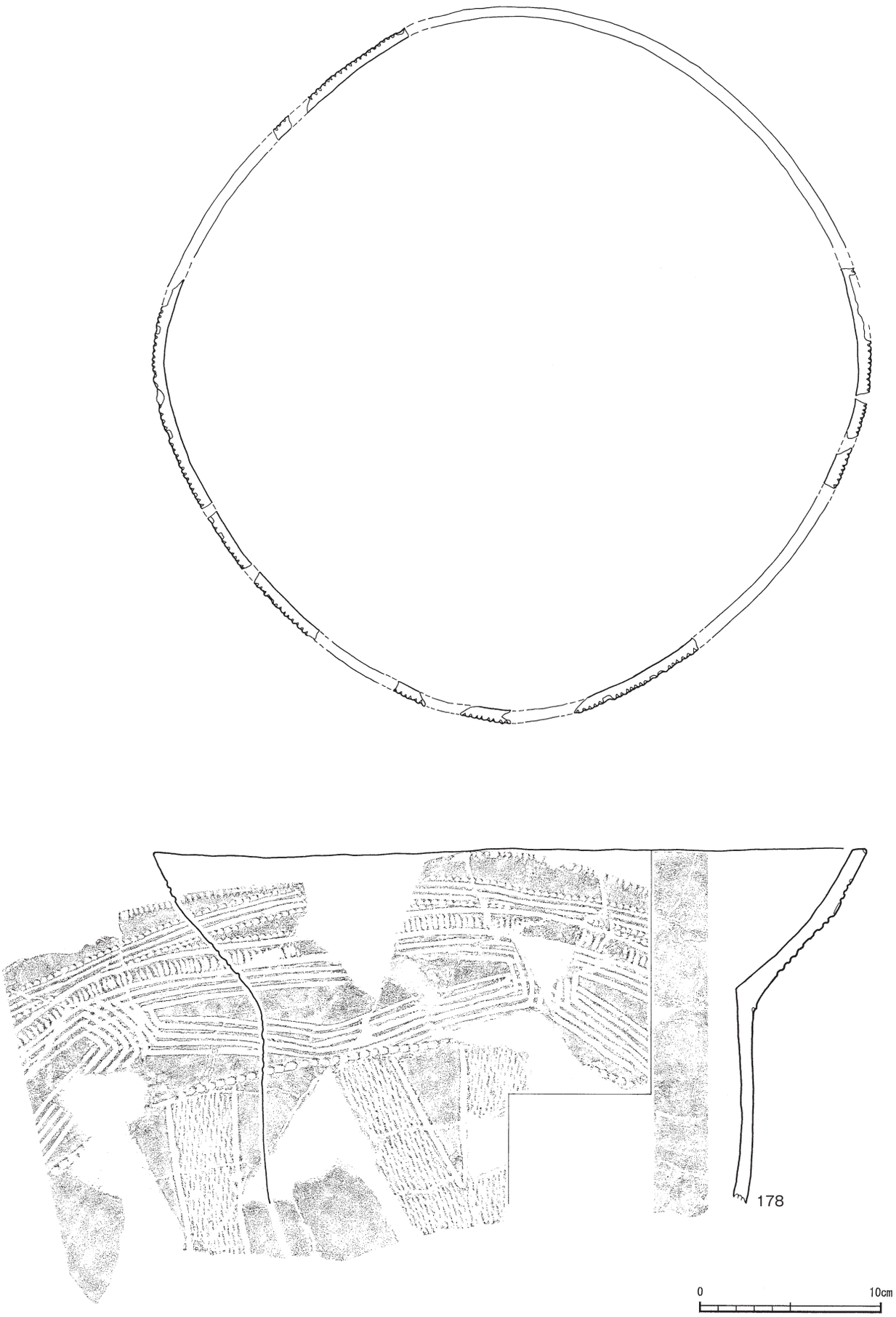


第 167 図　193 号集石遺構出土遺物（１）

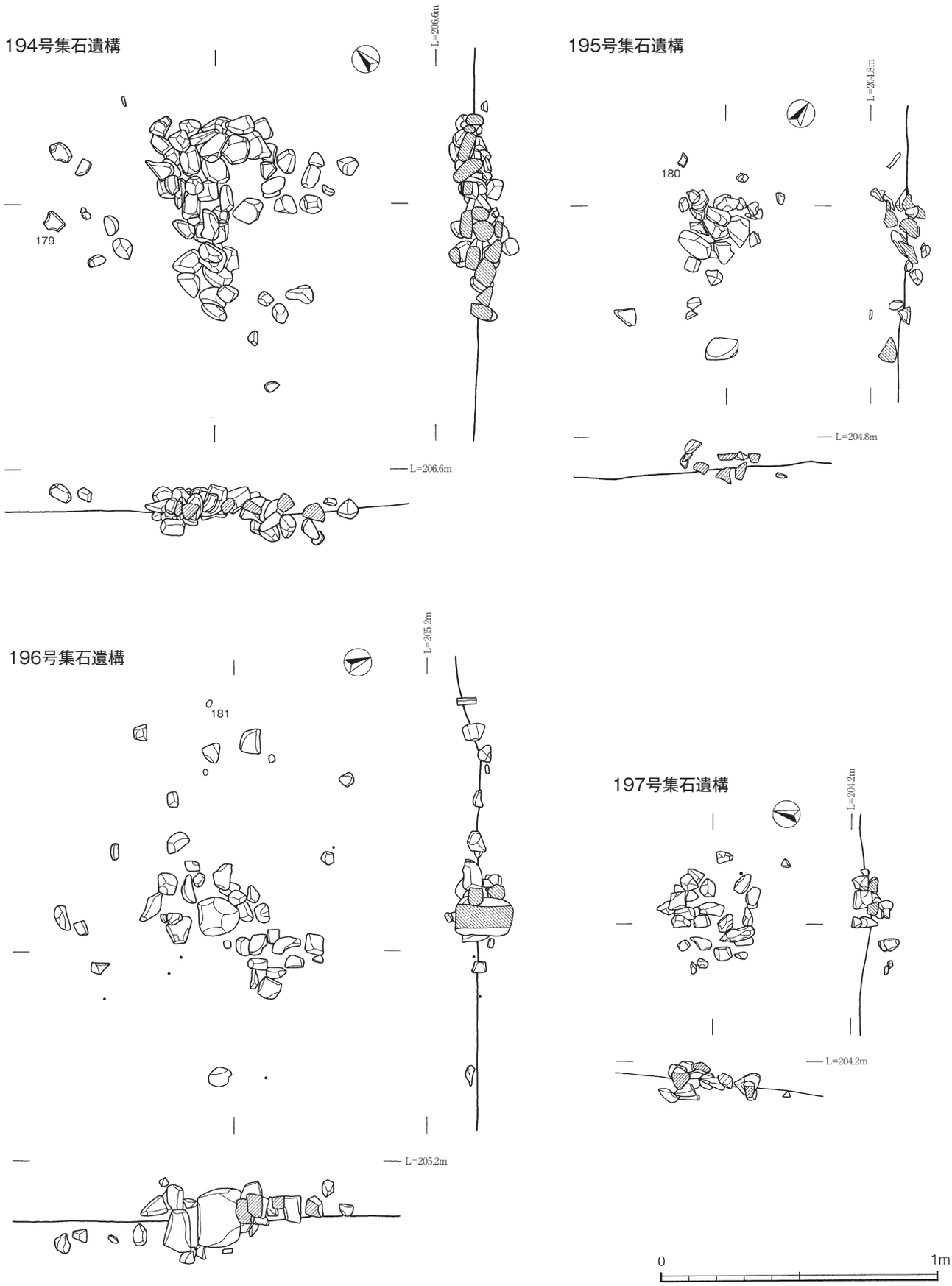
の貝殻条痕文が施される。条痕は小波状をなす。XVI類土器もしくはXVII類土器に比定される。174 は頸部片，175 は胴部片である。いずれも集石遺構内出土と包含層出土の土器が接合した資料である。形状から，頸部で屈曲して口縁部が開く器形と考えられる。器壁は厚い。胎土は土師質のように破断面が脆く，外面はやや赤変している。集石遺構内からの出土のため二次的に被熱した可能性もある。特徴から，両者はXVI類もしくはXII類土器で，同一個体と考えられる。また，石鏃や構成礫に転用された磨・敲石も出土した。176 はチャート製の打製石鏃である。先端がわずかに欠損しているが，本来は鋭利であったと考えられる。側縁部は直線状になる形態で，基部には「U」字型の抉りが入る。抉りの幅が狭いため，脚部は幅広くなっている。177 は砂岩製の磨・敲石である。上・下面は磨面のため表面が平滑である。また，全ての側面で敲打が観察され，各側面がやや平坦面をなすため，石鹸状の形状を呈する。上側面の敲打痕が最も密度が高い。その他，黒曜石（姫島産・在地産）・チャート・玉髄（CC2）のチップが出土した。どの時期の土器が明確に集石遺構に伴うかは判断できなかった。178 は集石遺構内出土の土器片１点が接合した資料である。口縁部から胴部まで残存する。頸部内面には明瞭な稜をもち，口縁はやや内湾しながら大きくラッパ状に開く。口縁部外面は途中で屈曲する。胴部はやや膨らむが，ほぼ径は変わらない。口唇端部は平坦面を作出し，断面方形に成形され，端部に刻みが施される。頸部以下の断面形は円形であるが，口縁部の上面観は緩やかな方形を呈する。口縁部の屈曲部には刻みが施され，屈曲部より上位は刺突文と沈線文，下位は沈施文で文様が描かれる。胴部は沈線文で枠を描き，その内部が網目撚糸文で充填される。内外面とも丁寧なナデ調整であり，胎土も精製され，焼成も良好である。XV類土器に比定される。

194 号集石遺構（第 169・170 図）

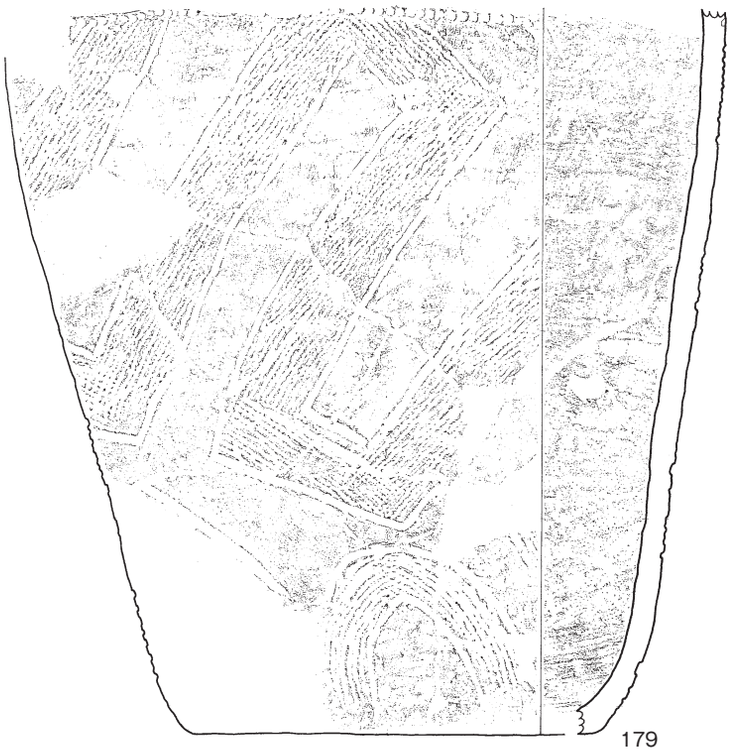
E-21 区で検出した。径約 110cmの範囲に礫がまとまる。礫の重なりも重層的であり，掘り込みを伴った可能性がある。周辺には同時期の集石遺構はみられなかった。構成礫は 10cm程のやや大型の角礫が主体であり，周辺に５cm大の礫が散在する。強い被熱により赤化して非



第 168 図　193 号集石遺構出土遺物（２）



第 169 図　194～197 号集石遺構



第 170 図　194～197 号集石遺構出土遺物

常に脆く，破砕したものも多い。周囲にやや散在した礫があるが，密集部分は原位置を保った状態と考えられる。

集石遺構内から 179 の中の１点が出土した。頸部から底部までが残存する。胴部の最大径は 28.5cmを測る比較的大型の個体である。底部の端部はやや丸みを帯び，すぼまるように底面へとつながる。頸部には円形の刺突文が１段巡り，その上に沈線文がわずかに確認できる。胴部は沈線文で枠をつくり，その内部が無節の撚糸文で充填される。外面の無文部は丁寧なナデ調整であり，内面はケズリ調整である。XV類土器に比定される。また，磨石片と思われるものが構成礫として転用されていた。

195 号集石遺構（第 169・170 図）

K-19 区で検出した。長軸約 70cm・短軸約 60cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は５cm弱の小型のものから 10cmを超える大型のものまでみられる。破砕礫や被熱により脆くなった礫はほとんどなかった。

集石遺構内からVI類土器および押引状の貝殻刺突文を有する土器の小片，石器では石皿片２点と磨石片１点が出土した。180 の中の１点が，集石遺構内から出土した。口縁部から胴部まで残存し，口縁部は緩やかに内湾し，口唇部の平坦面は内傾する。内面は丁寧なミガキ状のナデ調整であり，表面も平滑である。口縁部から胴部まで「く」の字状に貝殻腹縁刺突文が施され，やや凹凸がある。胎土は白色粒が目立ち，平滑な内面に対して外面はザラザラした質感である。口縁部下の最大径部分は帯状に幾分黒変しており，使用時のススが付着したものと考えられる。VI類土器に比定される。石皿及び磨石は，構成礫として転用されたと考えられる。

埋土中から検出された炭化物の年代測定を行ったところ，5,891 － 5,733cal ＢＣの年代値が得られた。

196 号集石遺構（第 169・170 図）

Ｊ-21 区で検出した。長軸約 130cm・短軸約 110cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は安山岩が多く，５～10cmほどの大きさのものが主体であるが，中央部に 20cmの大型礫があり，その周辺の礫の密度が高い。また，大型礫は立位の状態であり，集石遺構の中心として配置された可能性もある。そのため，掘り込みを伴っていたことも想定したが，包含層との明確な差はみられなかった。７～８点ほどの礫が被熱により赤化していたが，破砕してはいなかった。

集石遺構内から土器片，安山岩と玉髄（CC2）のチップが出土した。181 は集石遺構内と包含層から出土した土器片が接合したもので，口縁部片である。小片ではあるが破片にほとんどカーブがなく，ほぼ直線的な口唇部であるため，上面観が方形になる壺形土器の破片と考えられる。口唇部は粘土を巻き込むようにして成形し，肥厚している。口唇部の内面端部には刻みが施され，口唇部には羽状の沈線文が描かれる。口縁部下には粘土紐が貼り付けられ，凹線で深い抉りが入る。XIV類土器に比定される。その他，XX類土器の小片が出土している。

197 号集石遺構（第 169・170 図）

Ｌ-18 区で検出し，242 号集石遺構と隣接している。掘り込みは確認できなかったが，長軸 50cm・短軸 45cmの比較的狭い範囲に礫がまとまっている。構成礫は５cm程の小型のものが多い。

集石遺構内から石鏃と玉髄（CC1）のフレイクが１点出土した。一括資料の 182 は安山岩製の打製石鏃である。剥離面を利用し，端部に細かい調整剥離が観察される。基部は緩やかに幅広く凹み，脚部は短い。右脚は打点をそのまま利用し，脚部としている。

198 号集石遺構（第 171 図）

K-20 区で検出した。長軸約 130cm・短軸約 110cmの範囲に礫がまとまる。中心部分は礫の重なりも密であり，浅い皿状の掘り込みがあった可能性があるが調査時は検出できなかった。構成礫はほとんどが５～８cm程の大きさである。被熱により赤化したものが 10 点程みられた。

周辺の集石遺構と比較すると遺物がやや多い方であるが，いずれも小片のため詳細な時期は判断できなかった。XIV類土器と思われる胴部片が，１点含まれていた。また，黒曜石製の石鏃や黒曜石（姫島産）・チャート・安山岩のチップが出土した。183 は小型の打製石鏃であり，石材は細かい不純物が目立ち，やや淡い灰色がかった色調である点から，日東産と考えられる。正三角形に近く，基部がやや凹む。両脚の端部は先端部に比べてやや角が鈍い。

199 号集石遺構（第 171 図）

Ｌ-19 区で検出した。径約 70cmの範囲に礫が密にまとまり，重なりも重層的であるため，土坑状の掘り込みを伴っていた可能性が想定される。構成礫は 10cm程の大きさのものが主体をなし，小型の礫が間に含まれる。

関連する遺物は出土していない。

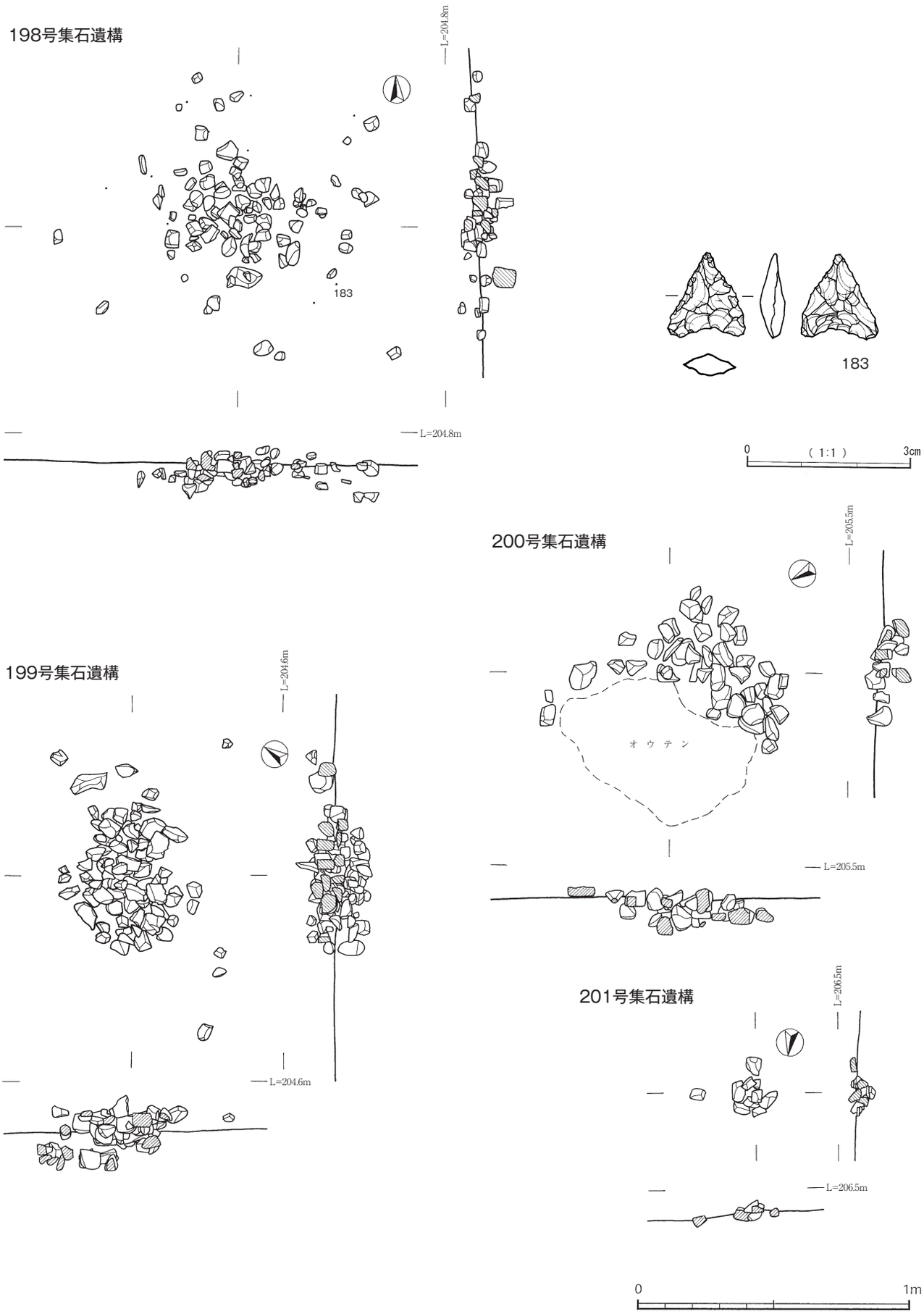
200 号集石遺構（第 171 図）

Ｉ-22 区で検出した。長軸約 90cm・幅約 60cmを測り，西側は地層横転の影響を受けて礫の多くが失われたと考えられ，弧状に礫が残存する。構成礫は 10cm程の大きさのものが主体をなす。ほとんどが安山岩の角礫で，被熱により赤化しているが破砕したものは少ない。礫の堆積から掘り込みも想定したが，周囲の包含層と集石遺構内の埋土とに違いはみられなかった。

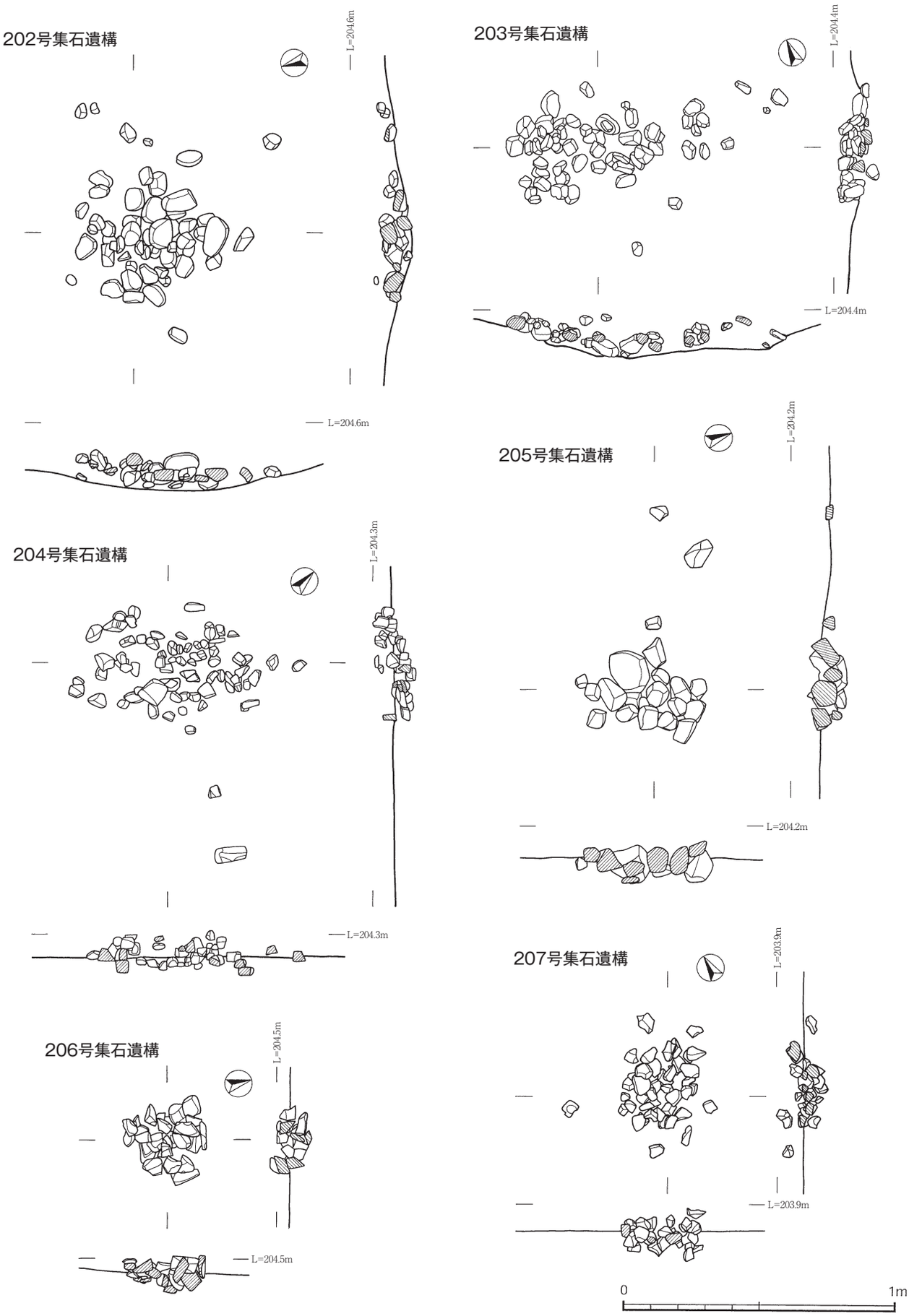
関連する遺物や炭化物は確認されていない。

201 号集石遺構（第 171 図）

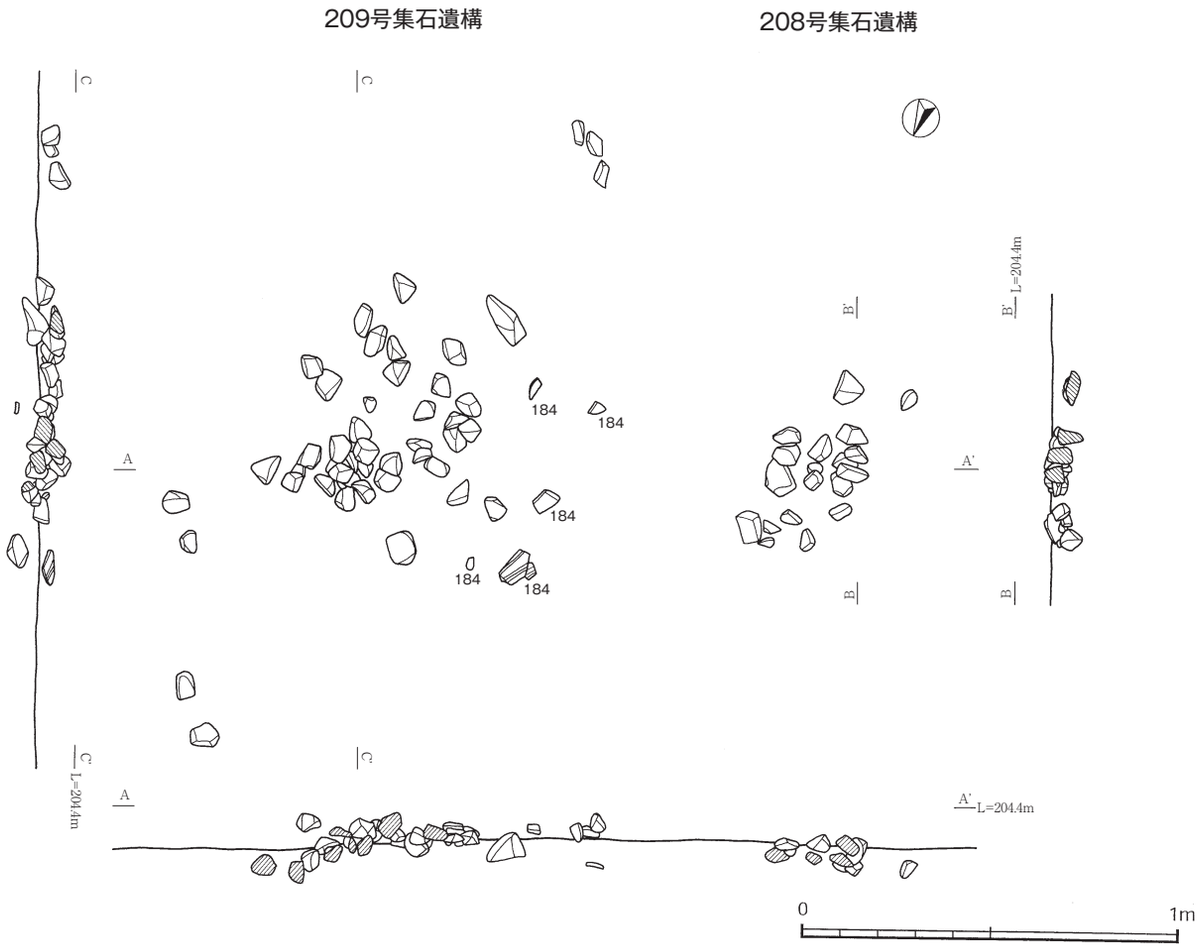
Ｅ-21 区で検出した。径約 25cmの範囲に礫 10 点がまとまる。小規模ながらも礫の堆積は重層的であり，掘り込みを伴っていた可能性が考えられる。構成礫は５～８cm程の大きさの砂岩が主体であり，被熱により赤化したものが約半数であった。



第 171 図　198 号集石遺構・出土遺物，199～201 号集石遺構



第 172 図　202～207 号集石遺構



第 173 図　208～209 号集石遺構

関連する遺物は出土していない。

202 号集石遺構（第 172 図）

Ｌ-18 区で検出した。礫は約 80cmの範囲に集中する。明確な掘り込みは確認できなかったが，中心部が浅く窪んだ形状を呈する。礫は 10～15cm程の比較的大型のものが目立つ。間には５cmほどの小型の礫も含まれる。

関連する遺物は出土していないが，周辺ではXVI類土器が出土した。

203 号集石遺構（第 172 図）

Ｌ-18 区で検出した。長軸約 100cm・短軸約 70cmの範囲に礫がまとまる。明確な掘り込みは確認できなかったが，礫の検出状況から浅い皿状の掘り込みを伴った可能性がある。

関連する遺物は出土していない。

204 号集石遺構（第 172 図）

Ｌ-19 区で検出した。径約 90cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は 10cmの大きさの大型礫が数点含まれるが，主体は５cm程の小型のものである。礫の多くは被熱による赤化がみられたが，炭化物等は確認されなかった。礫の堆積状況が皿状を呈するため，掘り込みを伴っていた可能性を想定し，本類に含めた。

関連する遺物は，XVI類土器と考えられる胴部小片が１点出土した。

205 号集石遺構（第 172 図）

Ｋ-13 区で検出した。礫は径約 50cmの狭い範囲に集中する。ほとんどが 10～15cm程の礫で構成されるが，数点は２kgを超えるほどの大型礫である。礫集中部の下部に２～３㎜の炭化物粒が点在していた。

関連する遺物は出土していない。

206 号集石遺構（第 172 図）

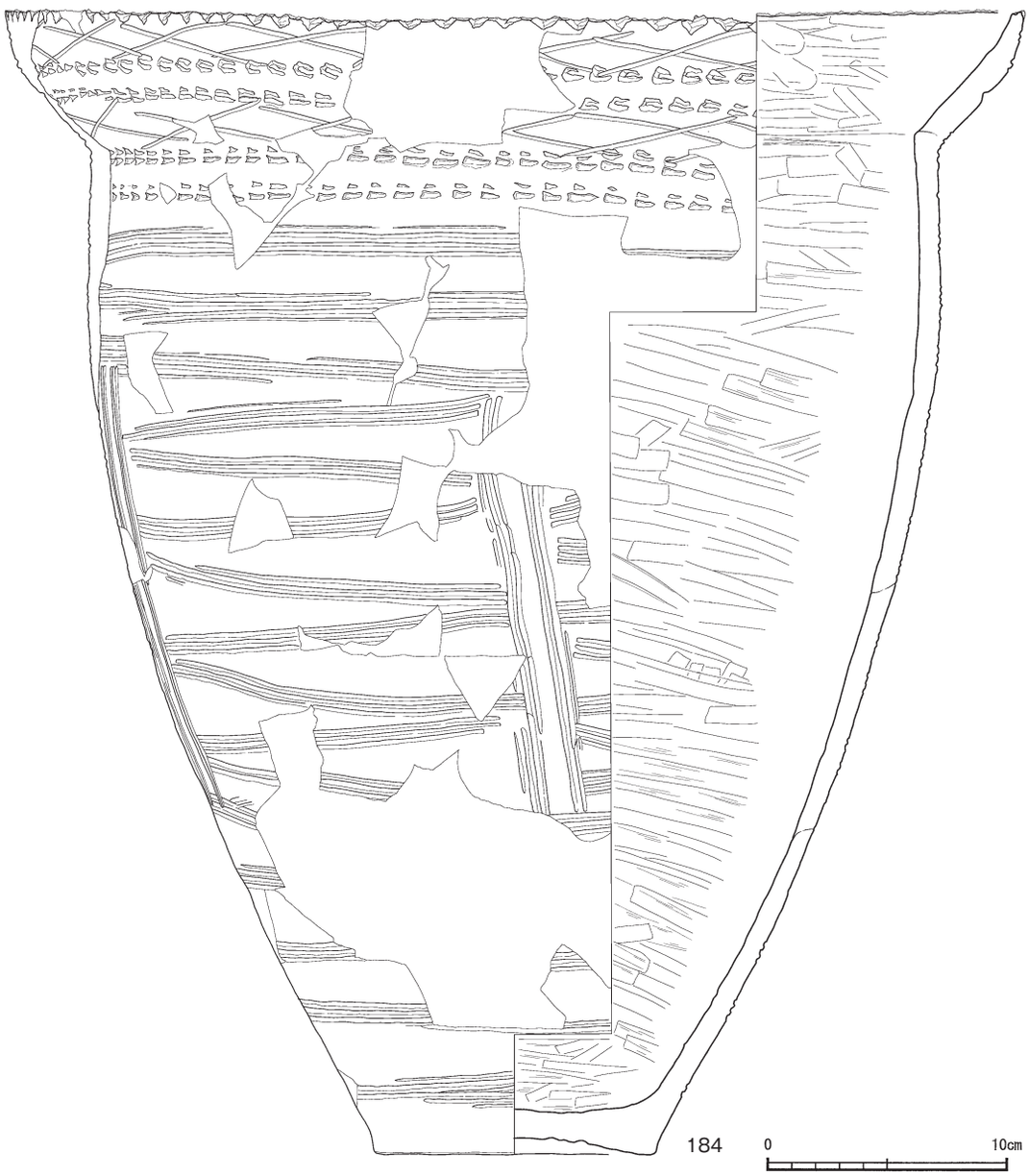
Ｌ-19 区で検出した。径約 30cmの範囲に礫が集中する。明確な掘り込みは確認できなかったが，礫の検出状況をみると掘り込みを伴っていた可能性もある。構成礫は５～８cm程の角礫が多い。赤化するなど被熱したものは，２・３点と少ない。また，取り上げ時に崩れるような破砕礫もみられなかった。

磨石片が構成礫として転用されていた。

埋土中から検出された炭化物の年代測定を行ったところ，5,807 － 5,659cal ＢＣの年代値が得られた。

207 号集石遺構（第 172 図）

Ｌ-10 区で検出した。長軸約 50cm・短軸約 40cmの範囲に礫がまとまる。５～10cm程の比較的小型の礫で構成さ



第 174 図　209 号集石遺構出土遺物（１）

れ，中心から約 30㎝の範囲に礫が集中する。１点は軽石であった。明確な掘り込みは確認できなかった。

関連する遺物は出土していない。

【Ⅱｂ類】

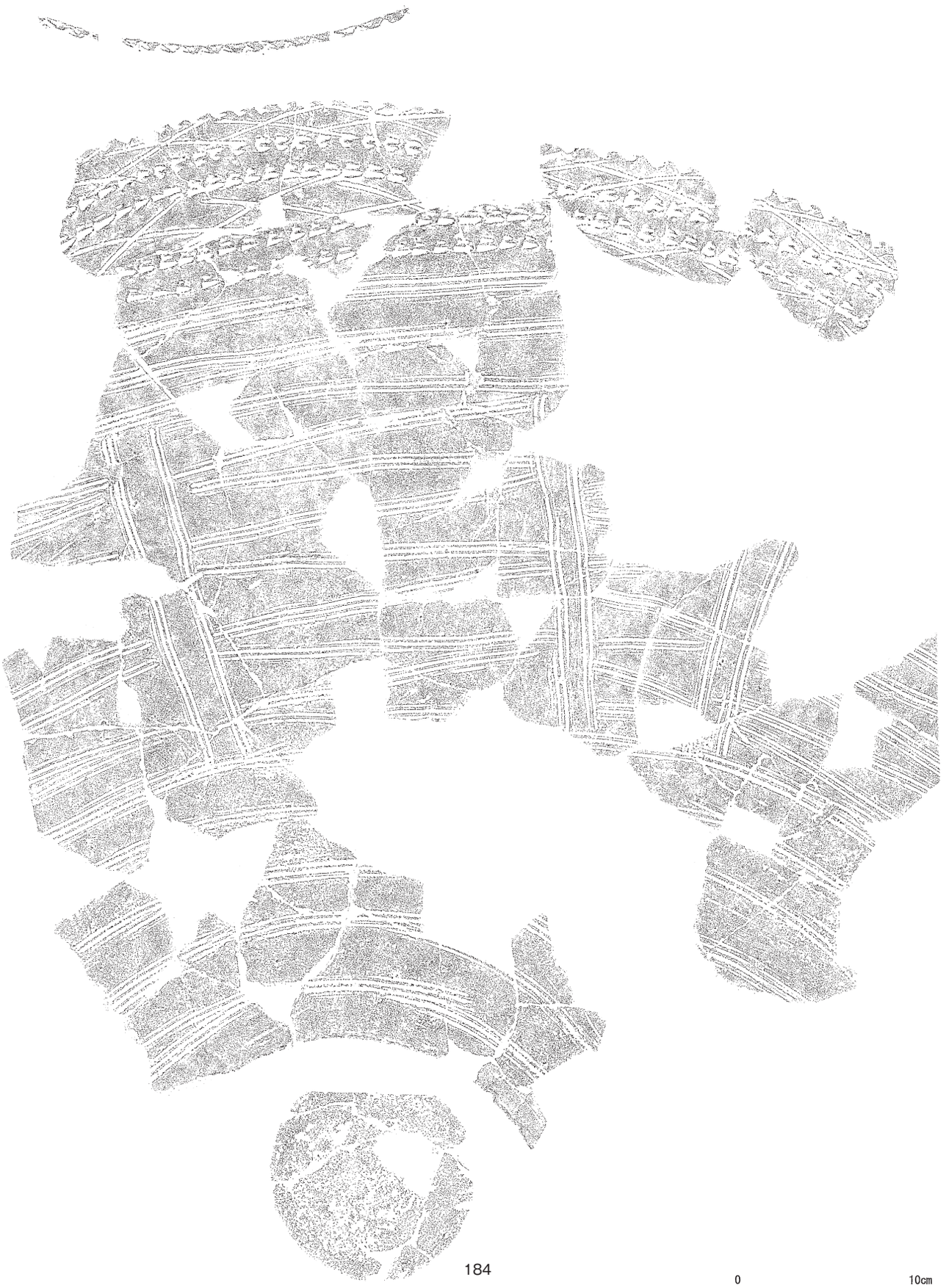
本類は集石遺構を構成する礫が比較的集中するが，礫の堆積が平面的な一群である。

208・209 号集石遺構（第 173～175 図）

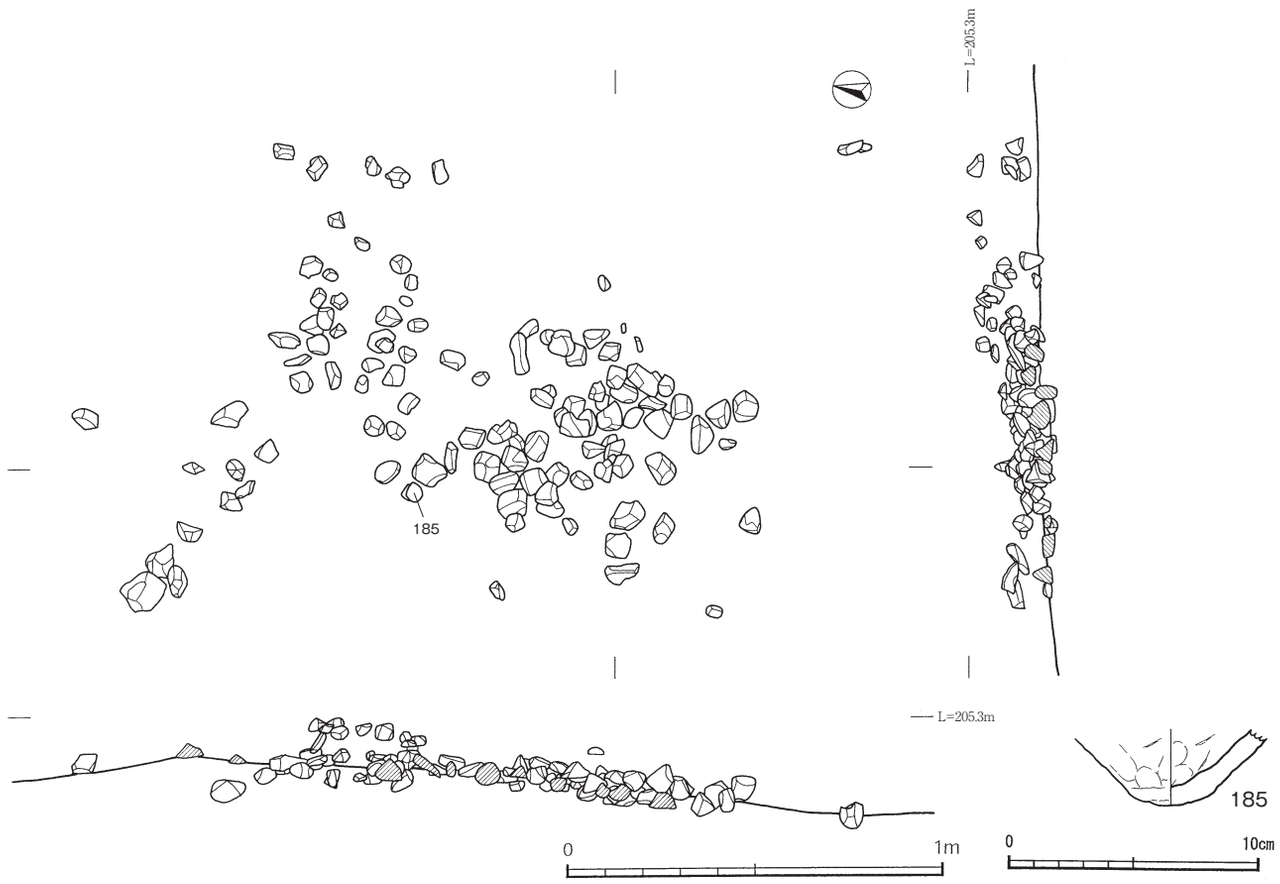
208 号集石遺構は，Ｌ-16 区で検出した。径約 50㎝の範囲に礫が平面的に広がっている。209 号集石遺構の西側に隣接し，構成礫は 10㎝程の礫が主体を占め，５㎝程の小型の礫が中心にまとまっている。小規模であり，掘り込みをもたない。

関連する遺物は出土していない。

209 号集石遺構は，Ｌ-16 区で検出した。礫は径約 80㎝の範囲にまとまり，その周辺の数個が散在する。208 号集石遺構の東側に隣接する。構成礫は 10㎝弱のものが主体を占め，石材の形状は 208 号集石遺構と類似している。北東方向にやや傾斜し，落ち込むような形状をなす。また，南西方向に散らばる傾向にある。208 号集石遺構と 209 号集石遺構は位置的にも非常に近く，構成礫や礫の検出レベルも類似している点から，本来は同一



第 175 図　209 号集石遺構出土遺物（２）



第 176 図　210 号集石遺構・出土遺物

の集石遺構であった可能性も想定される。

関連する遺物は，６点の土器片，チャートのチップが出土した。この６点の土器片と接合した 184 は，口縁部から底部まで全体の約２分の１が残存する。口縁部下に明瞭な稜を持って屈曲し，口縁部は外反する。口縁端部は，やや立ち上がって直口状になる。胴部は中央に最大径をもち，底部に向かってすぼまる。底面は上げ底である。口縁部には斜位の沈線文で菱形状の文様が作出される。口唇部は貝殻腹縁によって刻みが施され，同様の施文具で口縁部の屈曲部上下に２条ずつ刺突文列が巡る。胴部は横位・やや斜位の条痕で帯状に文様が施され，それを切って縦位の条痕文が施される。器面調整も丁寧であり，焼成も良好である。Ⅻ類土器に比定される。

210 号集石遺構（第 176 図）

Ｊ-21 区で検出した。長軸約 210cm・短軸約 130cmの範囲に礫がまとまる。礫が重なる部分はあるが，重層的ではない。構成礫は５～７cm程の安山岩が主体をなし，被熱したものが多い。

集石遺構内から 185，周辺からⅫ類土器の小片やチャートのチップが出土した。185 は底部片である。丸底で底部の形状はレンズ状である。内外面ともナデ調整と成形時の指頭押圧が明瞭に確認できる。表面には細い筋状の空隙がみられ，胎土に含まれる繊維痕と考えられる。また，胎土は砂質であり，色調も明るい。時期については不明である。

211 号集石遺構（第 177 図）

Ｈ-18 区で検出した。長軸約 80cm・短軸約 60cmの範囲に構成礫のほとんどが集中し，周辺にも礫が散在する。構成礫は５～８cmほどが主体であり，中心及び周縁部に 10cmを超えるやや大型の礫が含まれる。調査時に掘り込みは確認されず，礫の堆積も平面的である。

関連する遺物として，XX類土器の小片が出土した。

212 号集石遺構（第 177 図）

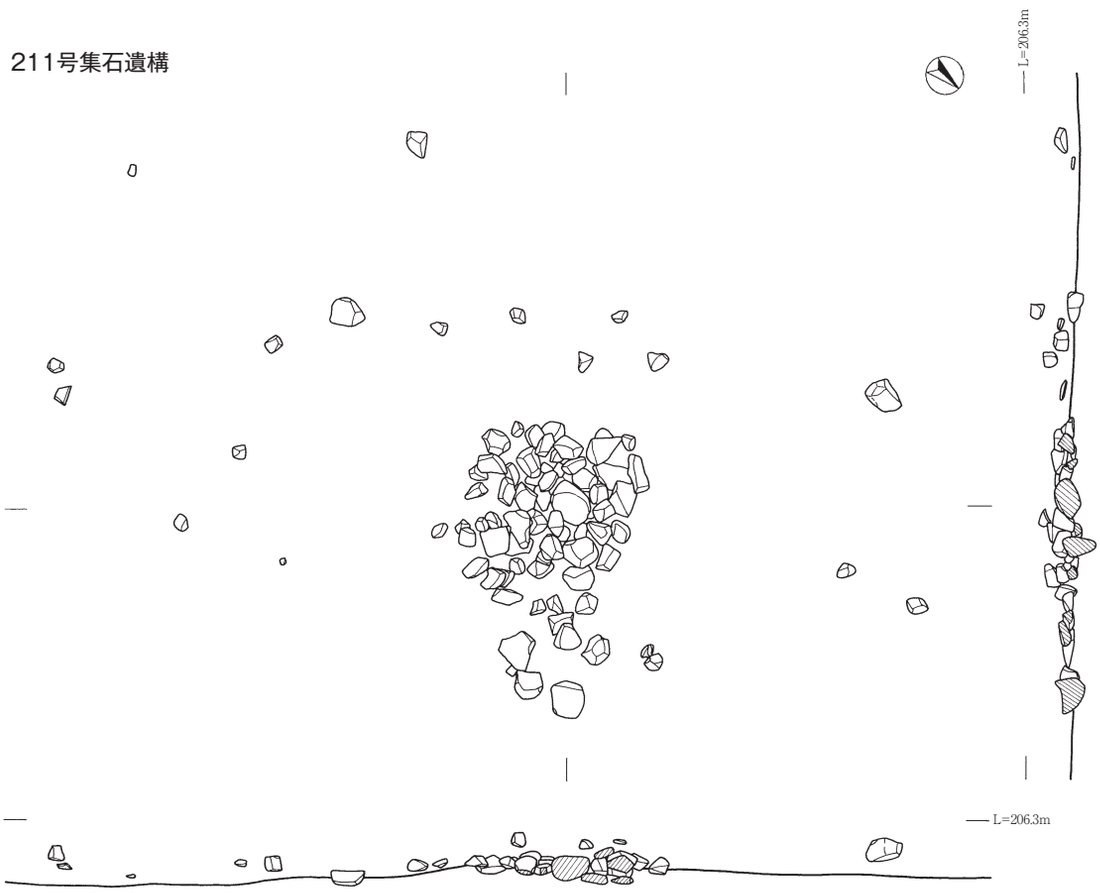
Ｉ-17 区で検出した。長軸約 120cm・短軸約 100cmの範囲にまとまる。構成礫の半数は 10cm程で 500ｇを超える大型礫であり，間にはやや小型の礫が含まれる。礫間の密度は高いものの，礫同士の重なりは少ない。

関連する遺物は出土していない。

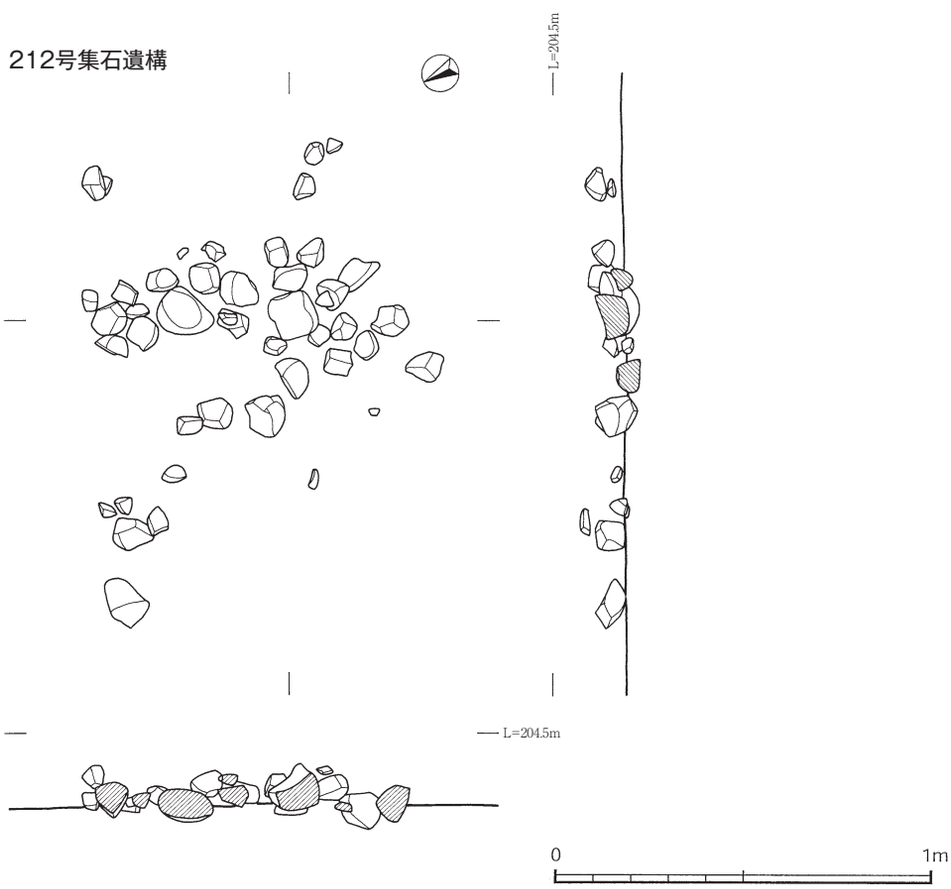
213 号集石遺構（第 178 図）

Ｋ-18 区で検出した。長軸約 240cm・短軸約 170cmの範囲に礫が広がるが，中心は長軸約 60cm・短軸約 50cmの範囲にまとまる。掘り込みは確認できなかった。構成礫のは５～８cm程の大きさと 15cmを超える大型のものとがあり，北側に大型礫が多い傾向にある。集石遺構の東側は調査区外となるため，図化した検出状況よりもやや集石遺構の規模は広がると想定される。

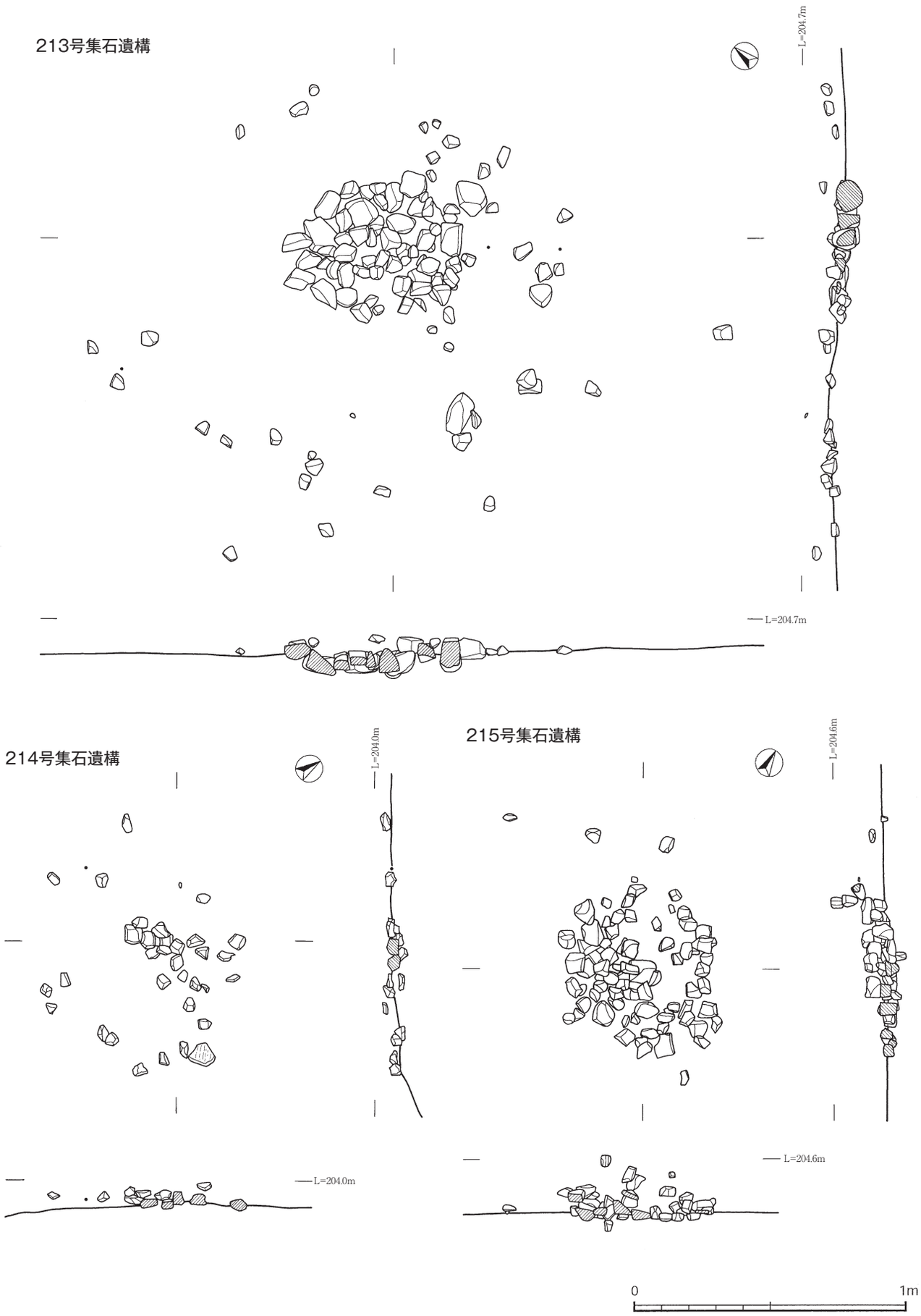
211号集石遺構



212号集石遺構

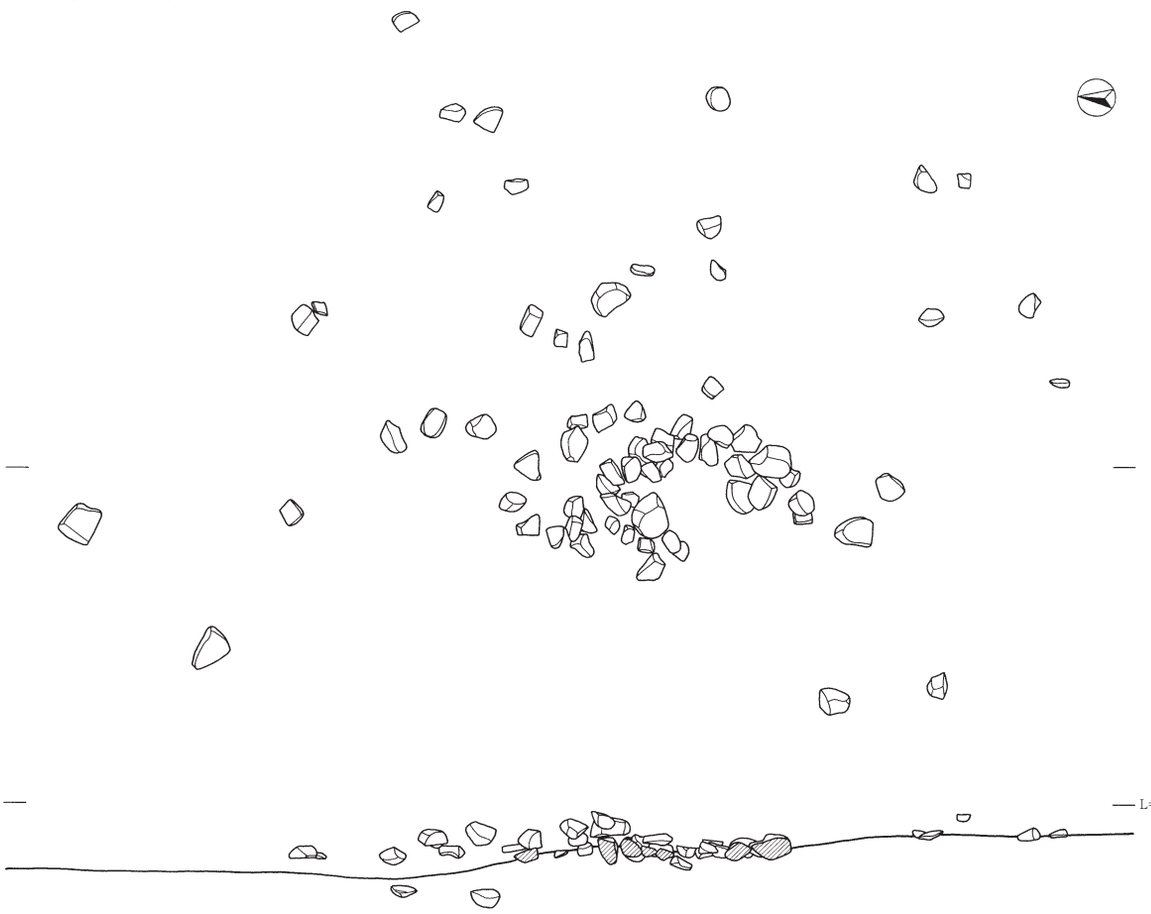


第 177 図　211～212 号集石遺構

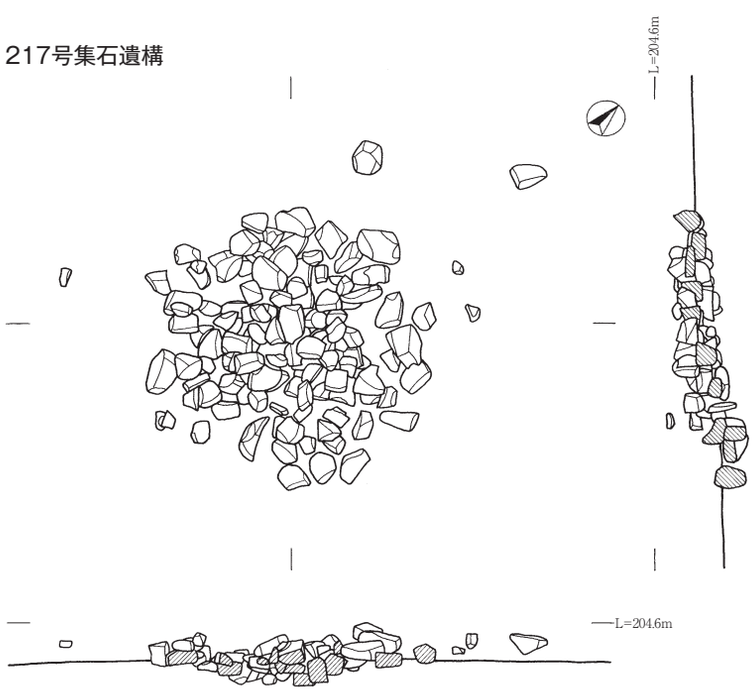


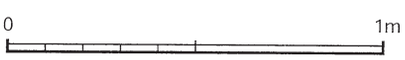
第 178 図　213～215 号集石遺構

216号集石遺構

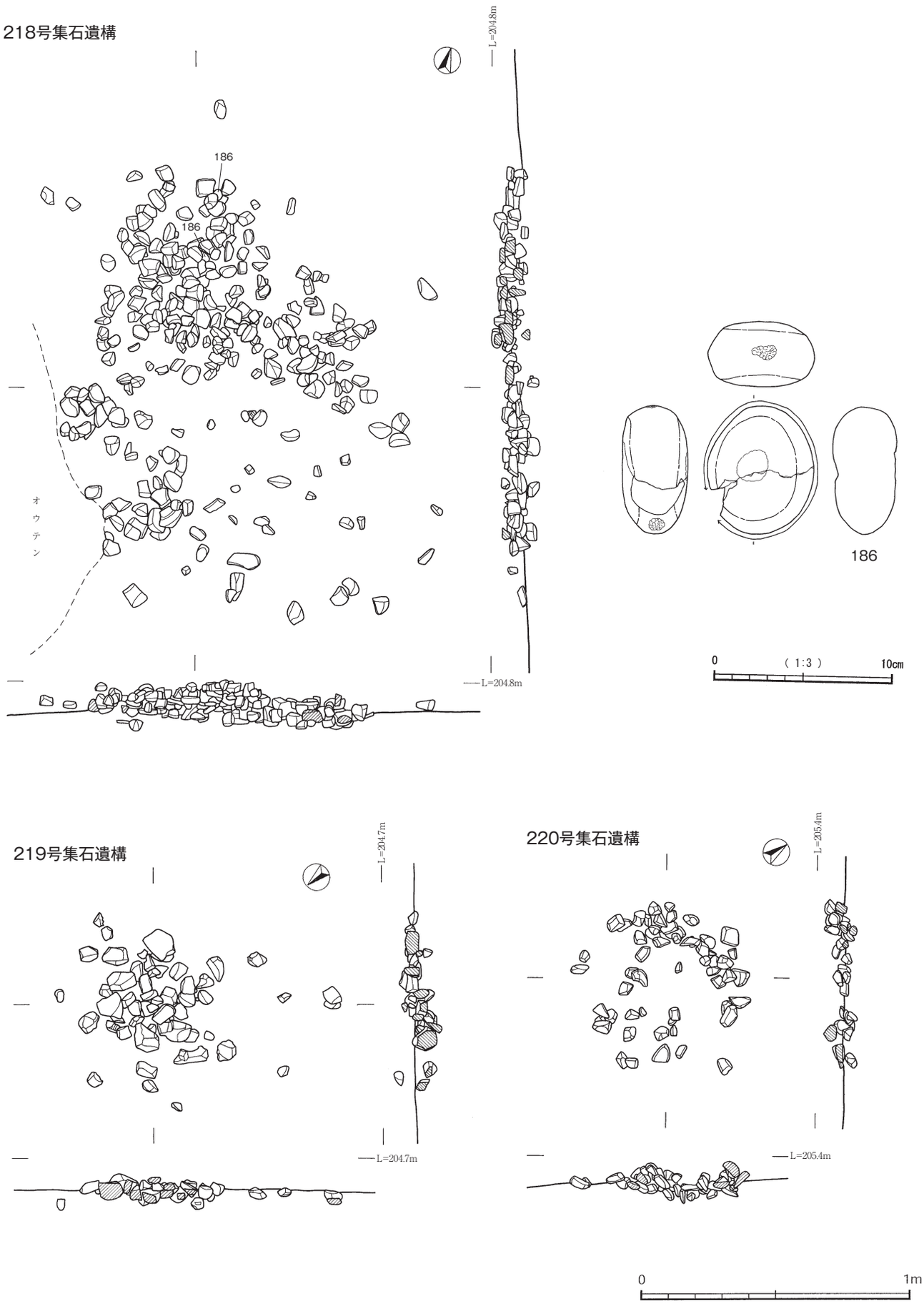


217号集石遺構





第 179 図　216～217 号集石遺構



第 180 図　218 号集石遺構・出土遺物，219～220 号集石遺構

関連する遺物では，XX類土器の小片が１点出土した。

214 号集石遺構（第 178 図）

M-18 区で検出した。長軸約 100cm・短軸約 80cmの範囲に礫が小規模にまとまる。礫は５cm以下のものがほとんどであり，１点 10cm大の軽石が含まれる。

集石遺構内から土器片１点が出土し，XVI類土器と考えられる。

215 号集石遺構（第 178 図）

Ｌ-18 区で検出した。径約 80cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は５cm～８cm程のものが主体であり，数点 10cmを超えるものも含まれる。全ての礫を取り上げた面で炭化物がまばらに検出された。

関連する遺物は，XX類土器の小片が出土した。

216 号集石遺構（第 179 図）

Ⅰ-17 区で検出した。長軸約 270cm・短軸約 190cmの範囲まで礫は広がるが，長軸 85cm・短軸 50cmの範囲に構成礫のほとんどが集中する。また，礫が密集する部分は弧状を呈しており，その外側に礫が広がるような検出状況である。５～８cm程の礫が主体をなし，数点 10cmを超えるものがある。

関連する遺物は出土していない。

217 号集石遺構（第 179 図）

Ｌ-18 区で検出した。やや南側に向けて傾斜する位置にある。径 80cmの範囲に円形に礫が密にまとまる。構成礫は５～８cm大のものが多く，10cmを超えるものも数点みられる。掘り込みは確認できなかった。

集石遺構に近接してXVI類土器片が出土した。

埋土中から検出された炭化物の年代測定を行ったところ，5,988 － 5,808cal ＢＣの年代値が得られた。

218 号集石遺構（第 180 図）

K-20 区で検出した。長軸約 200cm・短軸約 150cmの範囲に礫がまとまる。礫数は 274 点で，早期の集石遺構の中で最も多い。特に北側は礫の密度が高く，礫同士の重なりもみられるが，堆積は重層的ではなく，掘り込みも確認できなかった。また，集石遺構の西側に地層横転があり，本来はより広い範囲であった可能性もある。構成礫は 10cm程の礫が主体をなし，５cm以下の小型の礫が広がる。

集石遺構内から 186 の凹石が出土した。凝灰岩製で２つに割れて出土し，接合した。表裏面の中央に凹みがあり，上下側面にも密度が低い敲打痕がみられる。側面は磨面でもあり，表面は平滑である。割れた状態の凹石がそれぞれ集石遺構の構成礫として転用されたものと考えられる。その他は，早期後葉と考えられる土器小片が出土した。

219 号集石遺構（第 180 図）

K-20 区で検出したが，詳細な位置は測量時のデータにエラーが生じ，不明である。径約 70cmの範囲に礫がまとまる。礫同士に重なりは見られるが，重層的ではない。構成礫は 10cm程のやや大型の礫が主体であり，15cmを超えるものも目立つ。

関連する遺物は，土器小片が２点出土した。そのうち１点は，貝殻条痕が明瞭であるため早期前葉の可能性が高い。

220 号集石遺構（第 180 図）

Ⅰ-21 区で検出した。径約 65cmの範囲に礫がまとまる。中心部の密度は低く，北側に礫はやや偏っている。構成礫は５cm以下の小型の角礫が主体であり，大きさはそろっている。被熱により表面が変色し，破砕したものが多い。炭化物が少量検出された。

関連する遺物としてXVI類土器の小片が出土した。

221 号集石遺構（第 181 図）

Ⅰ-22 区で検出した。152 号集石遺構の西側に近接する。長軸約 220cm・短軸約 190cmの範囲に 150 点を超える礫がまとまる。礫が密集する部分はあるが，重なりはさほど重層的ではない。構成礫は５～７cm程の角礫が主体であり，数点が 10cm大である。強い被熱により変色し，破砕したものもみられる。炭化物が少量検出された。

集石遺構内から 187 およびXX類土器の底部小片が出土した。187 は包含層出土の土器と集石遺構内出土の土器片１点が接合したもので，口縁部から胴上半部が残存する。口縁部がほぼ真っ直ぐに立ち上がり，口縁端部がわずかに外反する。器壁が厚く，外面全面に横位の貝殻背面条痕を施す。Ⅸ類土器に比定される。

222 号集石遺構（第 182 図）

G-６区，Ｖｃ層の直下で検出された。集石遺構の礫間にもアカホヤ火山灰由来のパミスが多く落ち込んでいた。長軸約 210cm・短軸約 120cmの範囲に礫がまとまる。中心部分では礫が重なりを持つが，重層的ではない。構成礫は５～８cm程のものが主体であり，10cmを超える大型礫が２点用いられている。被熱により赤化し，表面が劣化したものが多く認められた。特に，北東側に顕著である。礫の周辺には炭化物が，散在していた。

関連する遺物は，条痕文や沈線文を有する土器小片が出土した。

223 号集石遺構（第 182 図）

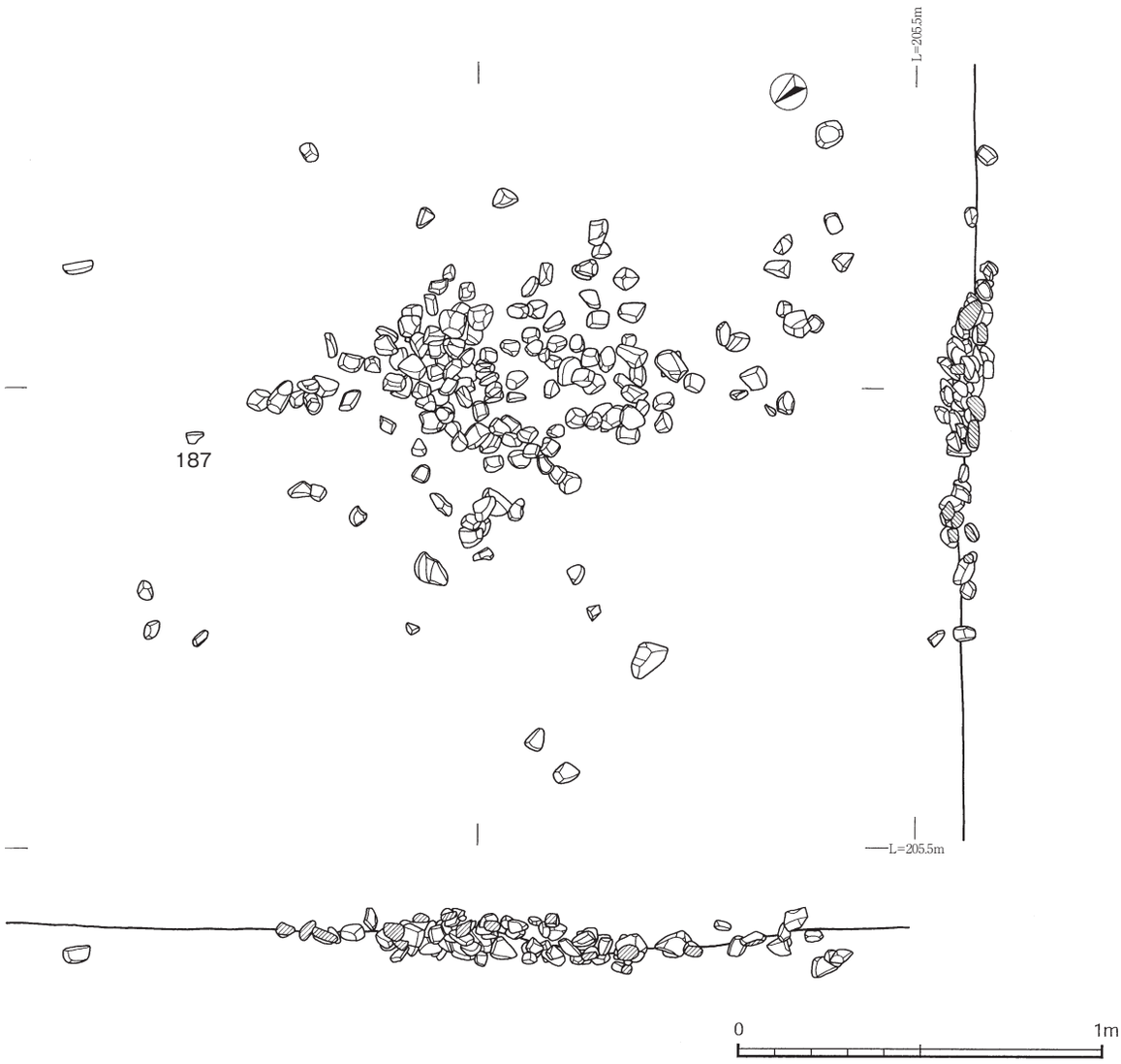
K-19 区で検出した。長軸約 100 m・短軸約 70cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は５～８cm程のやや小型の礫である。掘り込みや炭化物は，確認できなかった。

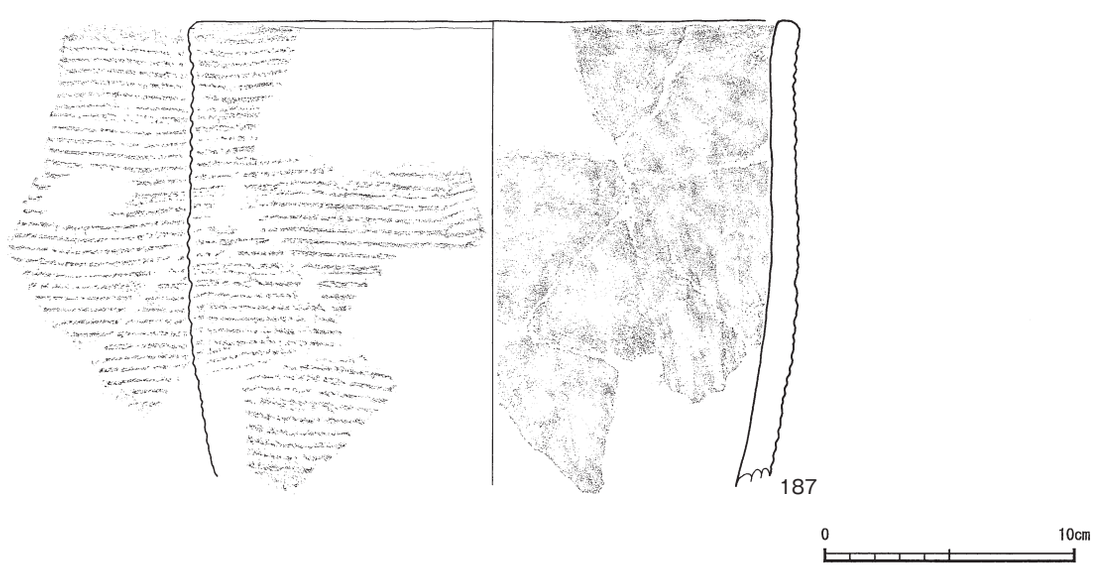
関連する遺物は出土していない。

遺構内から検出した炭化物を年代測定したところ，5,984 － 5,787cal ＢＣの値が得られた。

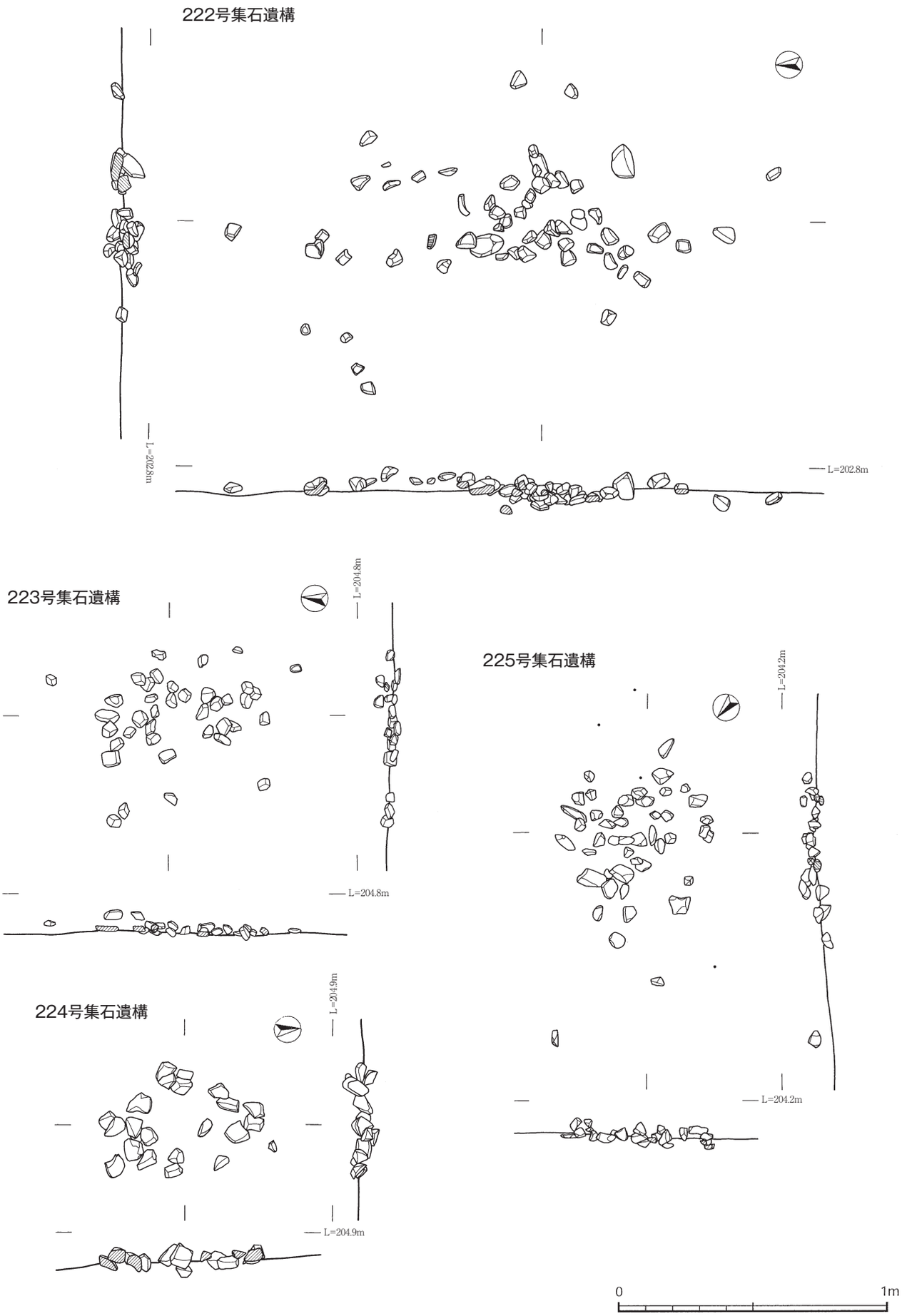
224 号集石遺構（第 182 図）

Ｊ-19 区で検出した。長軸約 60cm・短軸約 40cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は５～８cm程の小型の安山岩が多い。いずれも被熱し，破砕したものである。

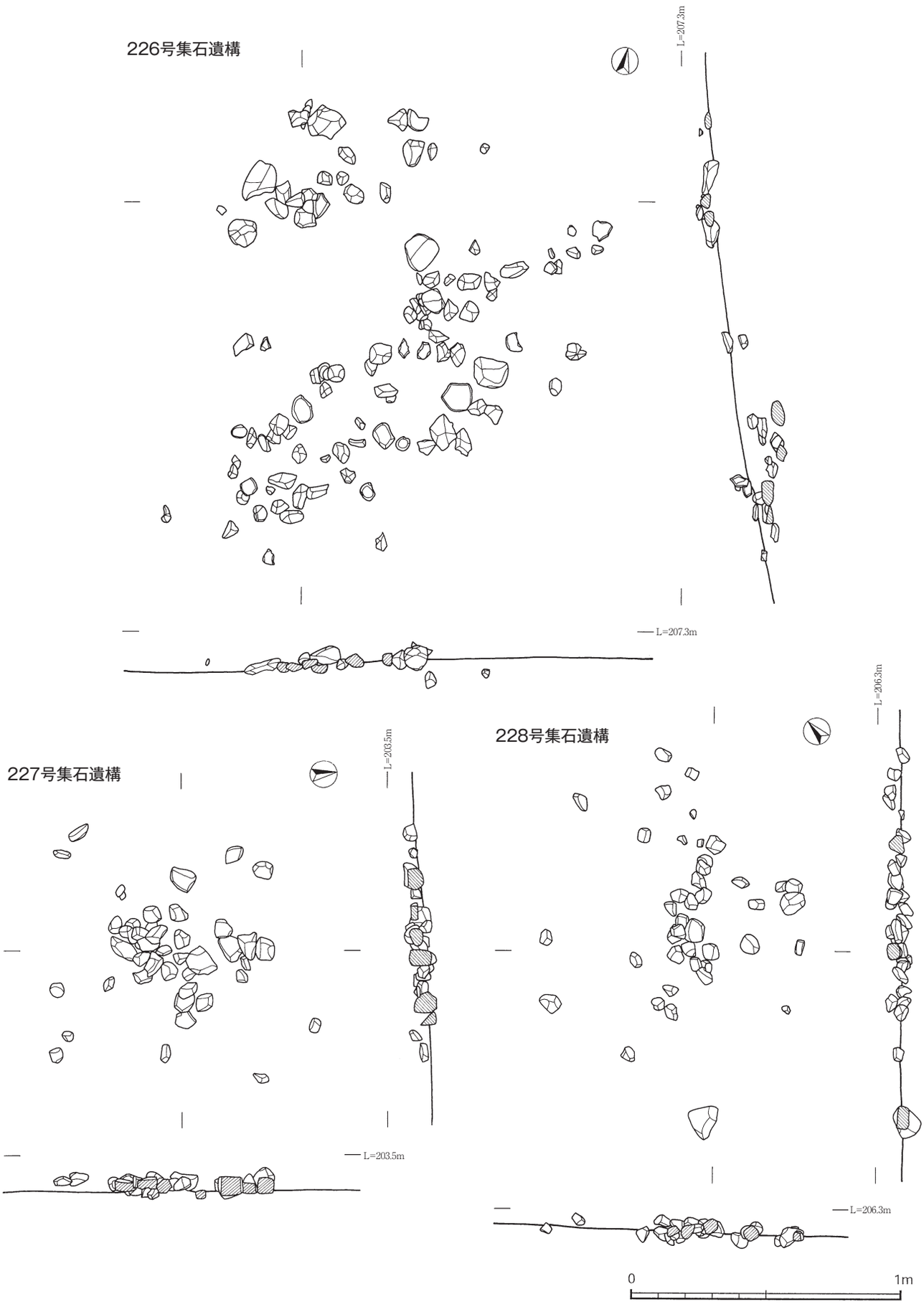




第 181 図　221 号集石遺構・出土遺物



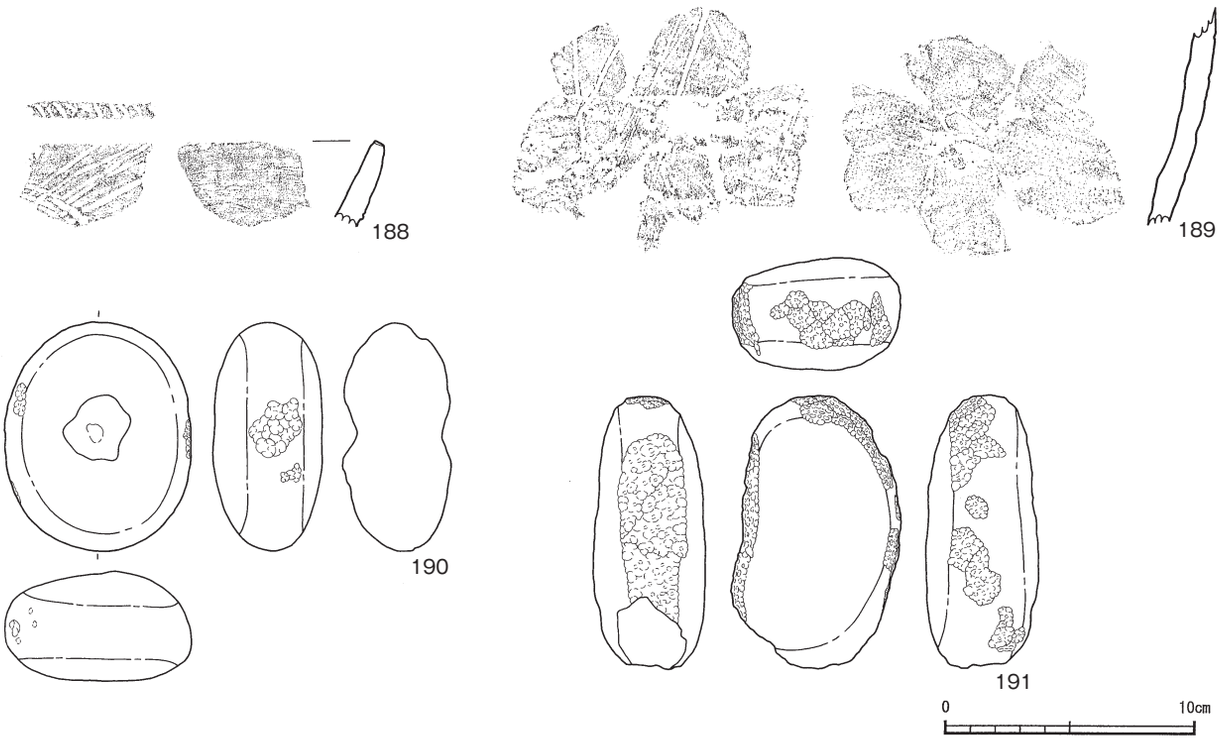
第 182 図　222～225 号集石遺構



第 183 図　226～228 号集石遺構



第 184 図　229～231 号集石遺構



第 185 図　229～231 号集石遺構出土遺物

関連する遺物は出土していない。

225 号集石遺構（第 182 図）

Ｌ-17・18 区で検出した。長軸約 90cm・短軸約 60cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は５cm程の小型のものが多く，被熱したものもあるが破砕礫は少ない。掘り込みや炭化物は確認できなかった。

関連する遺物は出土していない。

226 号集石遺構（第 183 図）

Ｇ-21 区で検出した。径約 170cmの範囲に礫がまとまるが，一部地層横転が絡んでいる。構成礫は５cm大と 10cm以上の２つの大きさに大別される。数点は強い被熱により変色し，表面がひび割れていた。大型の礫も散在するが，意図的に配置したような状況ではない。構成礫の一部には，石皿片や磨石片と考えられるものが転用されていた。

その他の関連する遺物はⅡ類土器と思われる口縁部小片，Ｘ類土器の胴部片，早期前葉と思われる貝殻刺突文を有する土器小片が集石遺構に隣接して出土した。

227 号集石遺構（第 183 図）

Ⅰ-８区，Ｖｃ層の直下で検出された。径約 100cmの範囲に礫が広がり，中心部の礫は密度が高いが重なりは平面的である。構成礫は５～８cm程の安山岩の角礫が主体であり，10cm大の礫がまばらにみられる。また，小型礫が間に含まれる。

関連する遺物は出土していない。

228 号集石遺構（第 183 図）

Ｆ-22 区で検出した。長軸約 140cm・短軸約 100cmの範囲に礫が広がる。中央部分は礫の密度が高いが，重層的ではない。構成礫は５～７cm程の大きさが主体をなし，一部 10cm程の大型の礫が点在する。

関連する遺物は，Ⅵ類土器およびⅩⅩ類土器の小片が出土した。

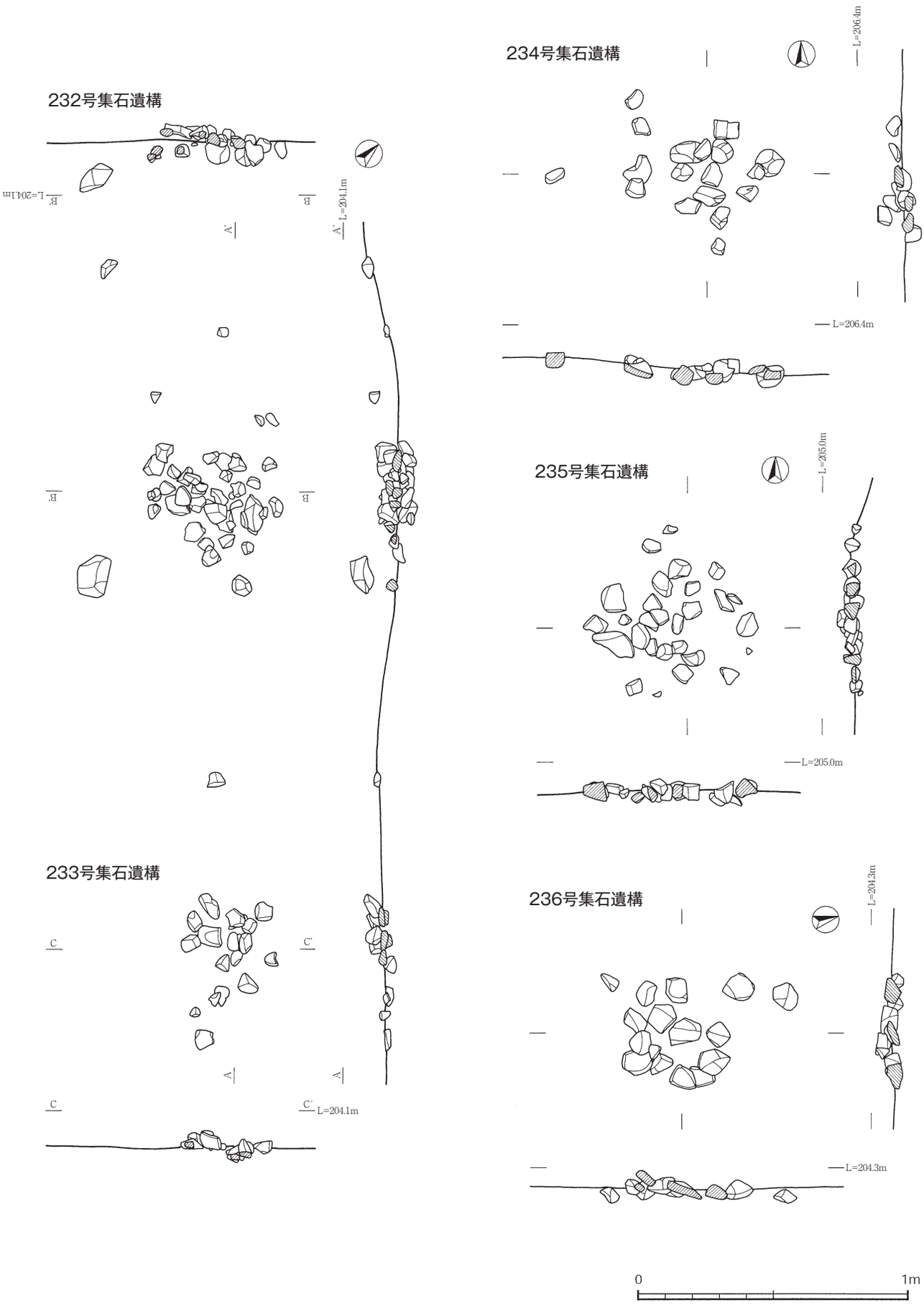
229 号集石遺構（第 184・185 図）

Ｊ-19 区で検出した。径約 40cmの範囲に礫が，やや密にまとまる。構成礫の大半は５cm程の破砕した小型の安山岩であり，10cm大のものが２点含まれる。

集石遺構内から 188・189 が出土した。188 は口縁部片である。ラッパ状に開く口縁部と考えられる。全体的に丁寧なナデ調整が施される。口唇部には平坦部が作出され，刻みが施される。外面の文様は不明瞭であるが，沈線文が確認できることから，ⅩⅥ類土器に比定される。189 は胴部片であるが，礫が集中するレベルよりも上位からの出土のため，集石遺構よりも新しい時期の可能性がある。内外面ともナデ調整であるが，器面には凹凸が目立ち，胎土中の砂礫も露出している。外面は斜位の沈線文が主体である。沈線文の間が細線状になるため，沈線文で枠を描き，その内部が細線文で充填されていた可能性もある。ⅩⅥ類土器もしくはⅩⅦ類土器に比定される。

230 号集石遺構（第 184・185 図）

Ｌ-15 区で検出した。礫は長軸約 130cm・短軸約 100cm



第 186 図　232～236 号集石遺構

の範囲にほぼ平面的に広がる。掘り込みや炭化物は，確認できなかった。５㎝程の小型礫が主体を占め，10㎝程の礫が小型礫の周囲に分布する。

関連する遺物は，集石遺構の中心部に隣接して190が出土した。190は凝灰岩製の凹石である。多孔質で軽石を多く含んでおり，表面はやや摩滅してザラザラした質感である。上・下面の中央に幅2.5㎝，深さ５㎜程の凹みがある。また，右側面には敲打痕もみられる。表面にはススが沈着している。

231号集石遺構（第184・185図）

K-13区で検出した。径約90㎝の範囲に多くの構成礫が集中し，その周囲にも広がりを見せる。構成礫は５～８㎝ほどのものが主体であり，わずかであるが10㎝を超えるものもある。砂岩が４点で，他は安山岩である。掘り込みは確認されなかった。

191は凝灰岩製の磨・敲石で，構成礫として転用されていた。凝灰岩の中でも鉱物粒が非常に明瞭な石材である。上・右・左側面に敲打が明瞭に観察でき，特に左側面は敲打により抉れている。全体的に赤化しており，集石の構成礫として転用されたことによる被熱の影響と考えられる。また，一部にススが沈着している。

232・233号集石遺構（第186図）

232号集石遺構は，L-13区で検出した。233号集石遺構と近接し，長軸約50㎝の範囲に礫がまとまり，その周囲に数点の礫が広がる。５～10㎝程の礫で構成され，数点１㎏を超える大型礫もみられる。安山岩が主体をなし，砂岩も10点ほど含まれる。明瞭な掘り込みは確認されなかったが，断面形状をみると掘り込みを伴っていた可能性も考えられる。

233号集石遺構は，L-13区で検出した。その範囲は，長軸約60㎝・短軸約40㎝を測る。232号集石遺構に隣接するため本来は同一の集石遺構であった可能性も想定したが，同様に近接する208・209号集石遺構とは異なり，それぞれに礫のまとまりが認められたことから，２基の集石遺構と判断した。

いずれの集石遺構からも関連する遺物は，確認されなかった。

234号集石遺構（第186図）

F-24区で検出した。長軸約90㎝・短軸約60㎝の範囲に礫がまとまる。構成礫は５～７㎝程の礫が主体であり，１点は石皿片が転用されたものの可能性がある。被熱により赤化したものが多い。

235号集石遺構（第186図）

J-20区で検出した。径約65㎝の範囲に礫が広がる。構成礫は10㎝程の大きさが主体であるが，20㎝大の比較的大型の被熱破砕礫も含む。やや密にまとまるが，礫の重なりはわずかである。

関連する遺物は出土していない。

236号集石遺構（第186図）

L-15区で検出した。長軸約70㎝・短軸約40㎝の範囲に礫が集中し，10～15㎝程のやや大型の角礫が小規模にまとまっている。掘り込みは確認していない。

関連する遺物は出土していない。

237号集石遺構（第187・188図）

K-18区で検出した。径約100㎝の範囲に礫がまとまる。構成礫は３㎝程の小型のものから10㎝大のものまであり，その多くは被熱により赤化している。掘り込みや炭化物は確認していない。

192は集石遺構内から出土した１点と包含層から出土した土器が接合したものである。頸部がやや屈曲して外反し，内面には稜を持つが，ややシャープさに欠ける。口唇部は刻みにより小波状を呈する。また，二又状の工具による刺突文が，屈曲部および口縁部に数条めぐる。口唇部の刻みも同様の工具であり，貝殻腹縁を用いたものと考えられる。口縁部は刺突文の後に交差する沈線文が施され，胴部は貝殻腹縁部によって条線文が横位・斜位に描かれている。胎土には金雲母が含まれている。以上の特徴から，XVI類土器と思われる。

238号集石遺構（第187・188図）

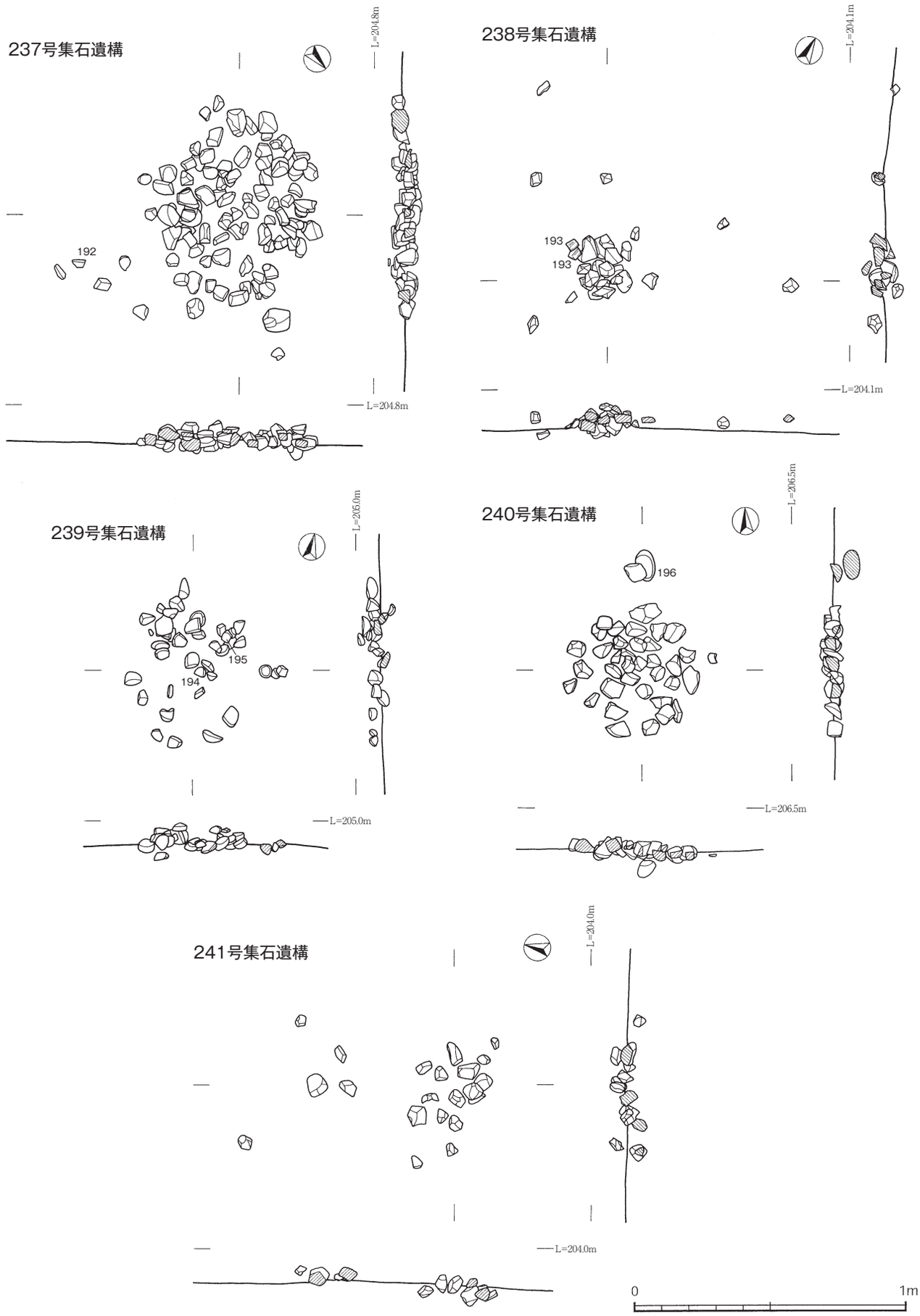
J-15区で検出した。径約20㎝の範囲に礫が集中し，周辺にも数点の礫が広がる。掘り込みを伴った可能性はあるが，確認できなかった。構成礫はほとんど５㎝程の大きさの安山岩である。

集石遺構内から193の中の２点が出土した。193は胴部片である。黄褐色の礫を多く含み，器面にも露出する。外面には数条単位の条痕文が施され，やや空白が多い。特徴から，XVI類土器もしくはXVII類土器と考えられる。

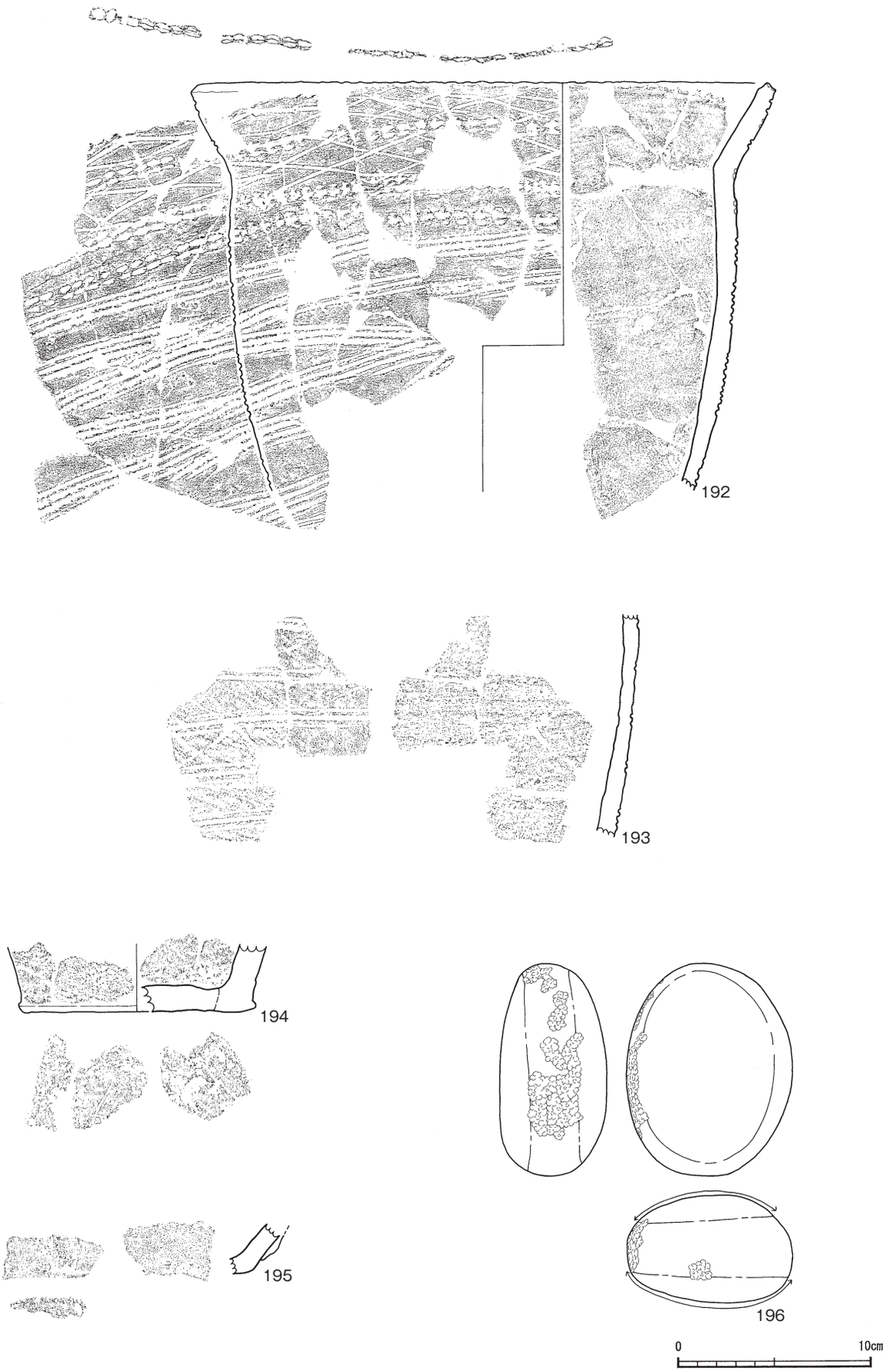
239号集石遺構（第187・188図）

K・L-20区，VI層の下位で検出した。約60㎝四方の範囲に礫がまとまる。構成礫は５～８㎝程の大きさが主体を占め，一部小型の礫が間に含まれる。被熱により破砕した安山岩が主体である。

集石遺構内から早期後葉に相当すると思われる底部片が２点と玉髄（CC2）のチップが出土した。194は底部片である。全体的に器壁が厚く，端部は張り出している。内面には接合線が明瞭に残っており，粘土板状に底面を作出し，その周囲に粘土紐を積んで立ち上がり部分を成形したことが分かる。また，白色土が底面に付着している。胎土も粗く，径２～５㎜大の小礫がまばらに含まれる。詳細な型式は判断できないが，形状から早期後葉のものと考えられる。195の内の１点が集石遺構内出土である。底部片で，内外面ともナデ調整が施される。底部から胴部にかけて開く器形と考えられる。立ち上がり部分には縦位の粘土紐が貼り付けられており，突帯状になっていたと推定される。小片のため詳細は不明である。

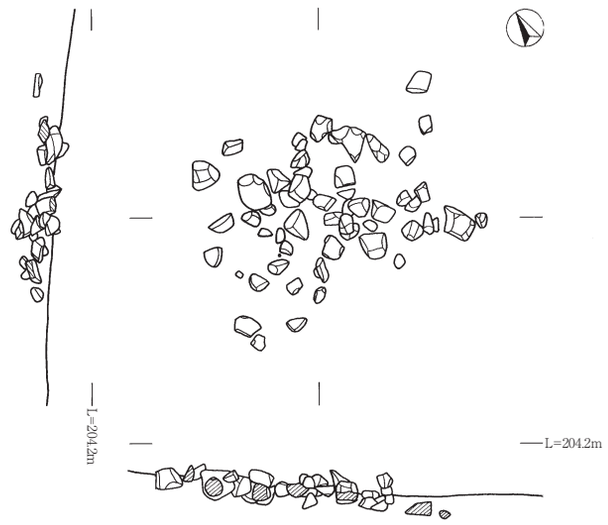


第 187 図　237～241 号集石遺構

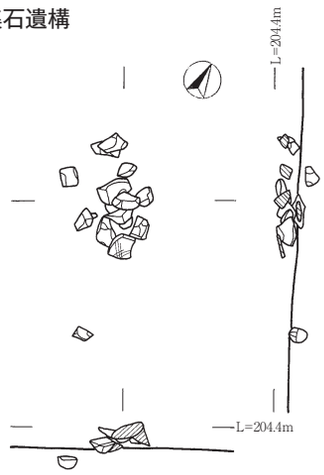


第 188 図　237～240 号集石遺構出土遺物

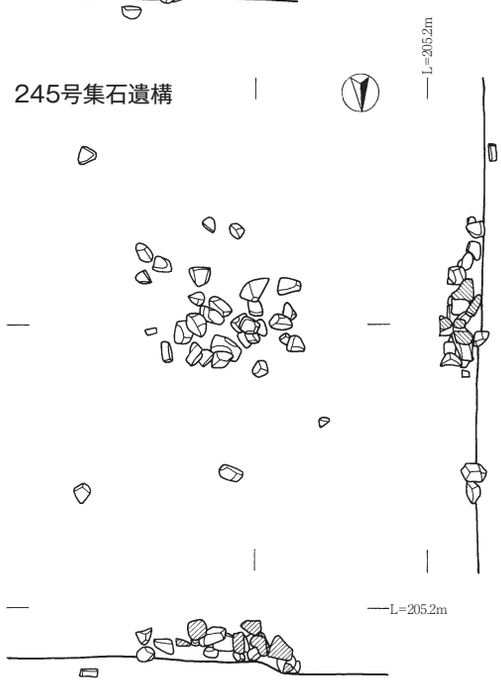
242号集石遺構



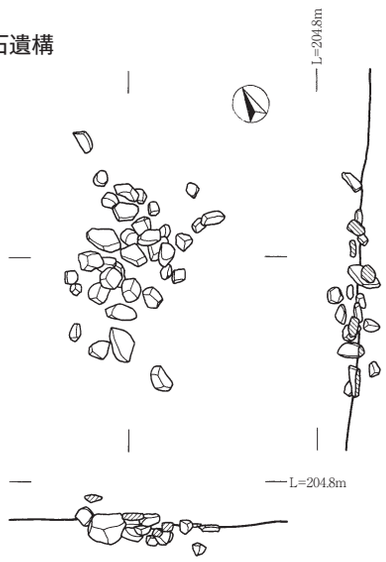
243号集石遺構



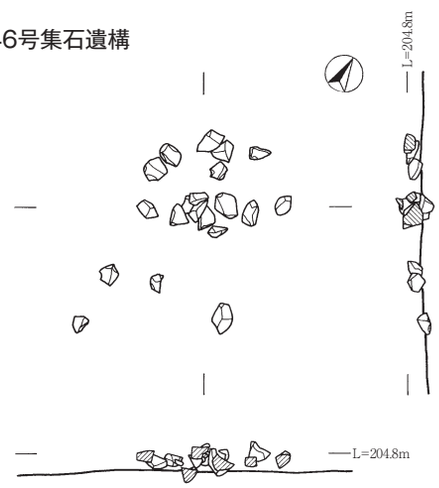
245号集石遺構



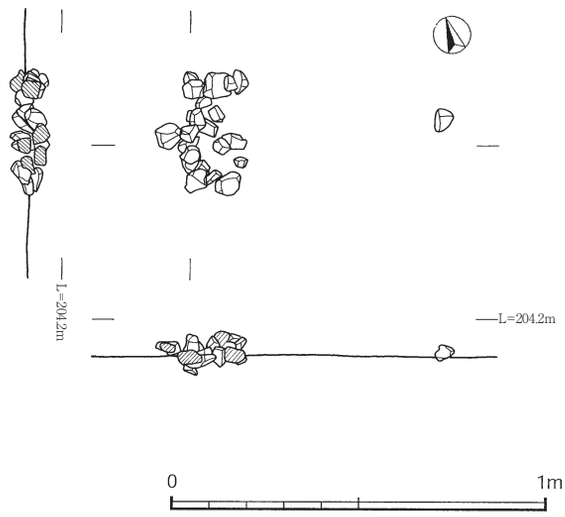
244号集石遺構



246号集石遺構



247号集石遺構



第 189 図　242～247 号集石遺構

240 号集石遺構（第 187・188 図）

Ｆ-24 区で検出した。径約 50cmの範囲に礫が円形にまとまる。構成礫は５～８cm程の大きさであり，重なりはほとんどない。

構成礫のうち１点は磨・敲石であり，集石の礫として転用されたと考えられる。196 は凝灰岩製の磨・敲石である。左側面に敲打痕が残り，それ以外の面は平滑である。他に土器片が出土したが，詳細は不明であった。

241 号集石遺構（第 187 図）

Ｌ-14 区で検出した。礫は長軸 95cm・短軸 55cmの範囲に平面的に広がり，５～10cm大の礫で構成される。掘り込みをもたず，南側にややまとまっているが，密度は低い。

隣接する地点で土器が出土したが，小片のため詳細は不明である。

242 号集石遺構（第 189 図）

Ｌ-18 区，やや東側に向かって傾斜する位置で検出した。長軸約 80cm・短軸約 70cmの範囲に礫がやや集中する。構成礫は 10cm前後の礫が多く，間に２，３cm程の小型礫が含まれる。炭化物が少量確認された。

集石遺構内から黒曜石のチップ，およびチャートの剥片が出土した。

243 号集石遺構（第 189 図）

Ｌ-19 区で検出した。径約 30cmの範囲に，ほとんどの礫がまとまる。構成礫はほぼ７cm前後でそろっており，角礫が主体をなす。被熱により赤化したものが多いが，破砕礫は１点であり，礫の形状は留めていた。

関連する遺物は，XVI類土器もしくはXVII類土器と考えられる小片が出土した。

244 号集石遺構（第 189 図）

Ｋ-18 区で検出した。構成礫は長軸約 70cm・短軸約 50ｍの範囲に平面的に広がり，多くは５～10cm大の円礫である。

集石遺構内からXX類土器の土器片が出土し，磨石片と思われる礫が構成礫として転用されていた。

埋土中から検出された炭化物の年代測定を行ったところ，6,018 － 5,888cal ＢＣの年代値が得られた。

245 号集石遺構（第 189 図）

Ｋ-21 区で検出した。おおよそ 50cm程の範囲に礫は集中し，周囲にも数点の礫が広がる。構成礫は５cm未満が主体であり，数点が 10cm程である。角礫が多く，被熱による赤化や破砕はみられなかった。礫の重なりは重層的であったが，明確な掘り込みは確認できなかった。

関連する遺物は，遺構内出土の一括資料で黒曜石（姫島産・針尾産・在地産）や安山岩，凝灰質頁岩のチップが出土している。

246 号集石遺構（第 189 図）

Ｋ-19 区で検出した。300 号集石遺構に近接し，礫の形状も類似する。集石遺構の範囲は，長軸約 60cm・短軸約 55cmを測る。構成礫は５cm程の小型のものが中心である。１点のみ赤化し亀裂が入る礫があったが，ほとんどの礫は赤化していない。

関連する遺物は確認されていない。

埋土中から検出された炭化物の年代測定を行ったところ，7,513 － 7,304cal ＢＣの年代値が得られた。

247 号集石遺構（第 189 図）

Ｌ-15 区で検出した。構成礫数は 22 点と少なく，径約 30cmの狭い範囲に集中する。掘り込みはもたない。礫は 10cm以下の小型のものが多い。

関連する遺物は確認されていない。

248 号集石遺構（第 190 図）

Ｅ-20 区で検出した。径約 65cmの範囲に礫がまとまる。礫は楕円形に広がり，中心部分は礫の密度が低い。構成礫は５～８cm程の大きさが主体であり，中央部には 10cmを超えるものも数点みられる。被熱の痕跡はみられなかったが，周辺から少量の炭化物が検出された。

平坦面を持つ礫が数点含まれており，磨石や石皿片の可能性がある。その他で関連する遺物は出土していない。

249 号集石遺構（第 190 図）

Ｋ-20 区で検出された。径約 50cmの範囲に礫がまとまる。構成礫は５cm程の大きさが主体であり，重なりはほとんどない。南西方向約１ｍの位置に 267 号集石遺構があり，その散礫の可能性もあるが，礫のまとまりから別の集石遺構として図化した。

関連する遺物は確認されていない。

250 号集石遺構（第 190 図）

Ｍ-11 区で検出した。礫は長軸約 50cm・短軸約 40cmの範囲に重なり合いながら集中するが，掘り込みは確認することができなかった。図化した部分よりも上位で礫が確認されたが，まとまりがなかったため集石遺構として認識しなかった。しかし，一部取り上げを行なった後に本体を確認し，図化した。構成礫は５～10cm程の小型のものである。

関連する遺物は確認されていない。

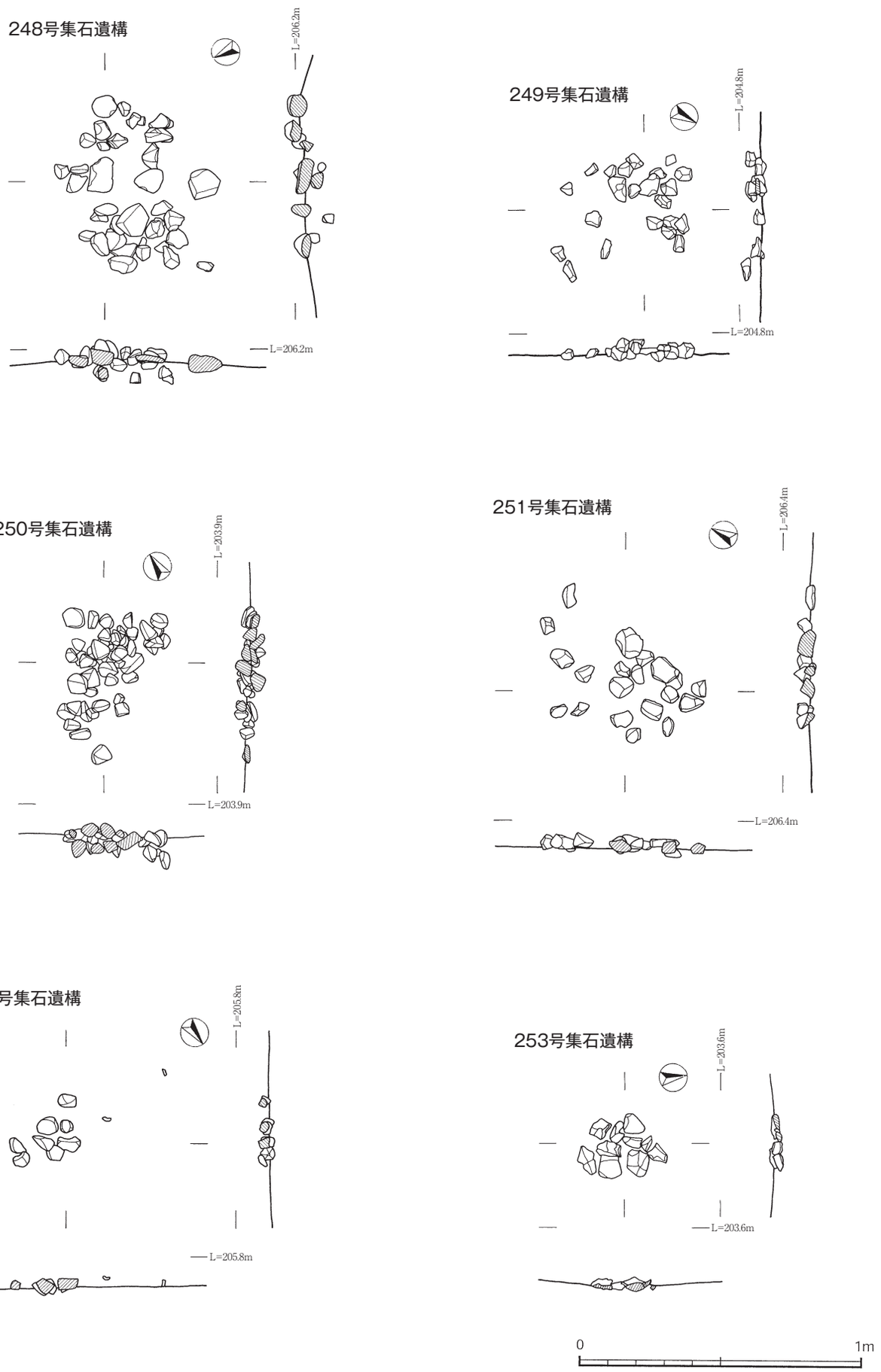
251 号集石遺構（第 190 図）

Ｆ-24 区で検出した。径約 60cmの範囲に礫が広がる。礫同士の重なりはほとんどなく，平面的である。構成礫は５cm大のものが主体であり，10cmを超える大きさのものも数点ある。

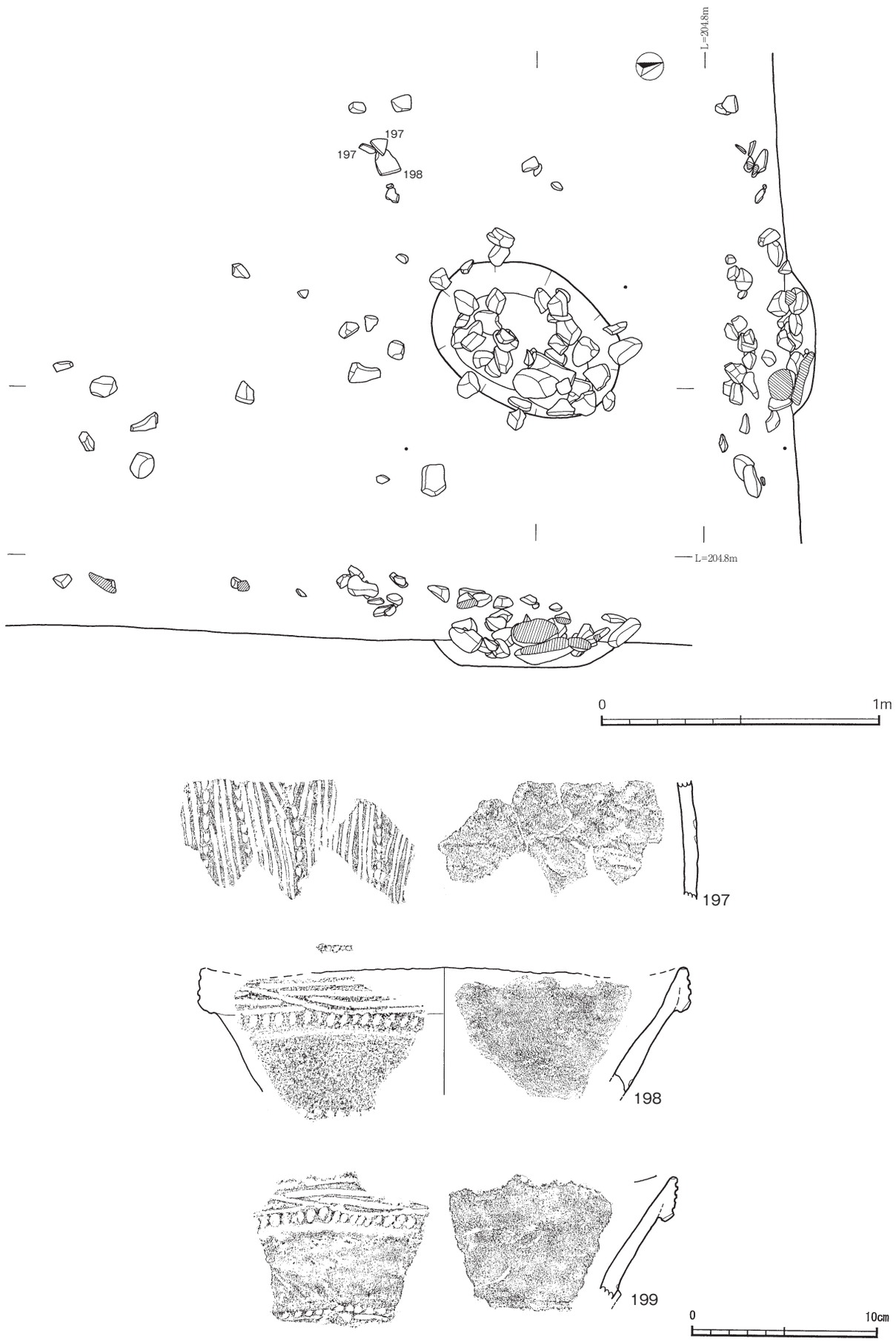
関連する遺物は確認されていない。

252 号集石遺構（第 190 図）

Ｆ-20 区で検出した。径約 30cmの範囲に８点の礫で構成される小規模な集石遺構である。礫同士はわずかに重なるが，掘り込み等は確認されなかった。構成礫は５～７cm程の礫が主体であり，被熱により赤化しているものもある。

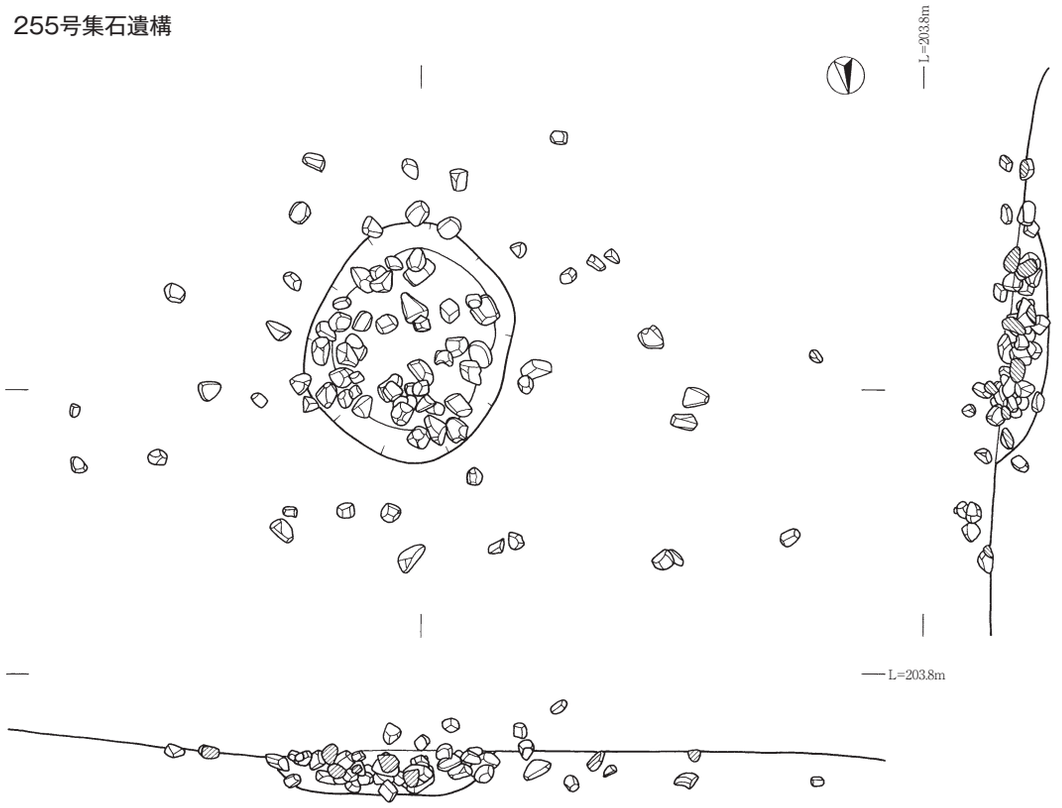


第 190 図　248～253 号集石遺構

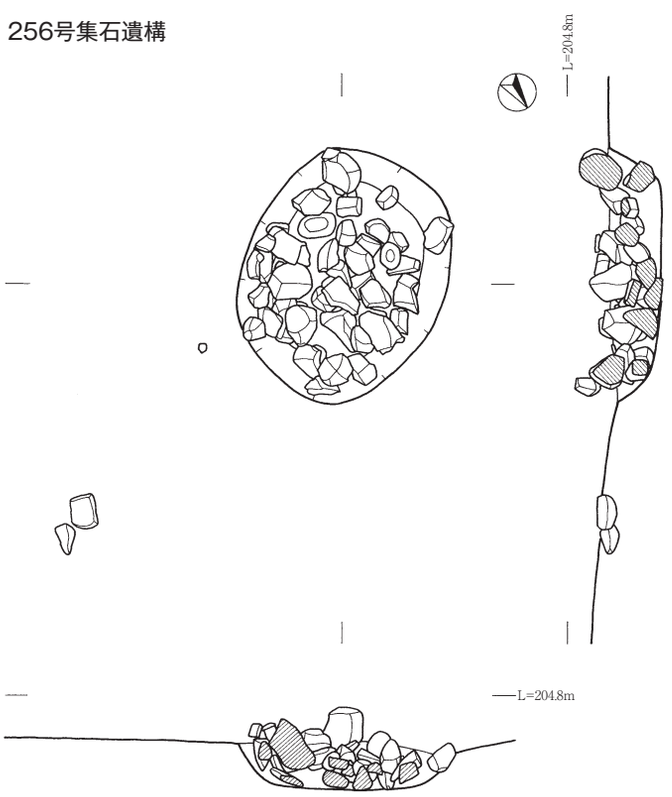


第 191 図　254 号集石遺構・出土遺物

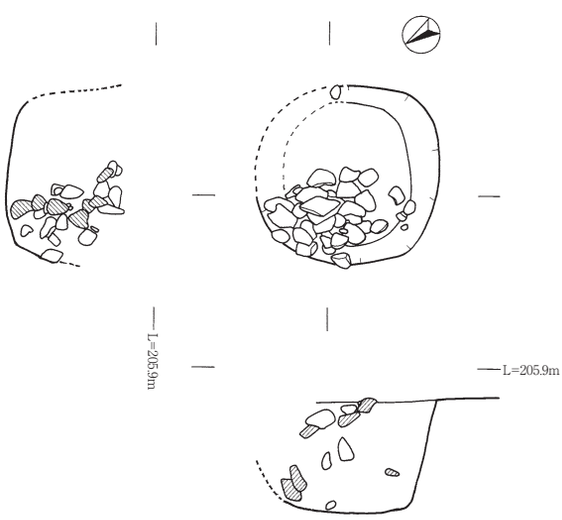
255号集石遺構

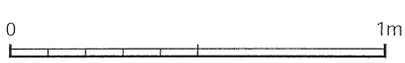


256号集石遺構



257号集石遺構





第 192 図　255～257 号集石遺構

集石遺構に隣接して，XX類土器の底部片が出土した。

253 号集石遺構（第 190 図）

N-17 区で検出した。径約 30cmの狭い範囲に 10 点の礫がまとまる。構成礫の大半が，10cm弱の被熱した安山岩である。礫の下部は，Ⅵ層とⅦ層が混じり合う状況であった。

関連する遺物は確認されていない。

【Ⅲａ類　土坑状】

本類は集石遺構を構成する礫が比較的集中し，礫が充填された掘り込みを伴う一群である。

254 号集石遺構（第 191 図）

K-22 区で検出した。長軸 71cm・短軸 50cm・深さ 11cmの掘り込みを伴う。構成礫は 10cmほどのやや大型のものが主体であり，中心部分に 15cmを超える礫がまとまり，下位ほど大型の礫が使用されていた様子がうかがえる。また，掘り込み内から南側へと礫が広がる。礫の堆積から，掘り込み面および集石が本来形成されていたレベルはより上位であったと考えられる。

集石遺構内から土器片が出土し，包含層出土の土器片と接合した。197 は胴部片である。器壁は薄く，内外面とも丁寧なナデ調整である。外面は縦位の沈線文が密に施文され，間に棒状工具による縦位の刺突文が施される。特徴から 153 に近いと考えられ，XⅣ類土器に比定される。198 は口縁部から頸部にかけて残存する。口縁部は折り返して三角形状に肥厚し，文様帯を作出している。口縁部はゆるやかな波状をなす。頸部は丁寧なナデ調整である。口唇部および口縁部文様帯の端部は刻みが施され，その間は横位・斜位の沈線で区画文が描かれている。199 は包含層出土であるが，198 と同一個体と考えられる。XⅣ類土器に比定される。また，被熱した軽石も出土しており，構成礫として使用されていた可能性も考えられる。

255 号集石遺構（第 192 図）

G-２区で検出した。表土下約 50cm程で検出されたため，竹の根の影響が全体に及んでいた。長軸 65cm・短軸 55cm・深さ 12cmの楕円形の掘り込みを伴い，その周辺の径約 200cmの範囲に礫が広がる。構成礫の７割ほどは掘り込み内で検出され，８cm程の大きさのものが主体である。また，小型の礫が間に含まれる。掘り込みの埋土は暗茶褐色土が主体で，赤褐色土の小ブロックや黄橙色パミスを含み，やや粘性のある砂質土であった。

関連する遺物や炭化物は出土していない。

256 号集石遺構（第 192 図）

Ⅰ-18 区で検出した。南側３分の１程は樹痕の影響により，若干原位置から動いている可能性もある。長軸 66cm・短軸 54cm・深さ 15cmの楕円形の掘り込み内に，15～20cm大の礫が詰まった状態である。構成礫は全て安山岩であり，赤化したものが多い。磨石状の円礫も確認したが，使用痕はみられなかった。また，礫同士の接合も試みたが，同一個体と断定できるものはなかった。炭化物はまばらに検出された。

関連する遺物は，条痕文を有する土器小片および早期後葉と考えられる底部片が出土した。

257 号集石遺構（第 192 図）

H-23 区で検出した。検出面はⅥ層上面であるが，北西側に地層横転と思われる撹乱があり，形態は一部推定も含まれる。掘り込みは径約 50cmのほぼ円形･深さ 30cm程と想定され，掘り込み内にほとんどの礫が集中する。埋土は茶褐色の砂質土でやわらかい。構成礫は 10cm以下の角礫が多く，赤化したものもあった。

関連する遺物は，埋土からはXX類土器の小片が出土した。

258 号集石遺構（第 193 図）

N-21 区で検出した。262 号集石遺構に隣接して検出されたが，262 集石遺構の掘り込みの下位とほぼ同一レベルで検出されたことから，258 号集石遺構が若干古いと考えられる。長軸 80cm・短軸 65cm・深さ 10cmの楕円形の掘り込みを伴う。構成礫は５～10cmの小型礫で被熱しており，ほとんどが掘り込み部分に集中し，密度も高い。掘り込みの底は平坦で，浅い。掘り込み内の埋土は暗褐色土で粘性があり，黄色のパミスを含んでいた。

集石遺構内から遺物は確認できなかったが，炭化物がわずかに残存していた。

259 号集石遺構（第 193 図）

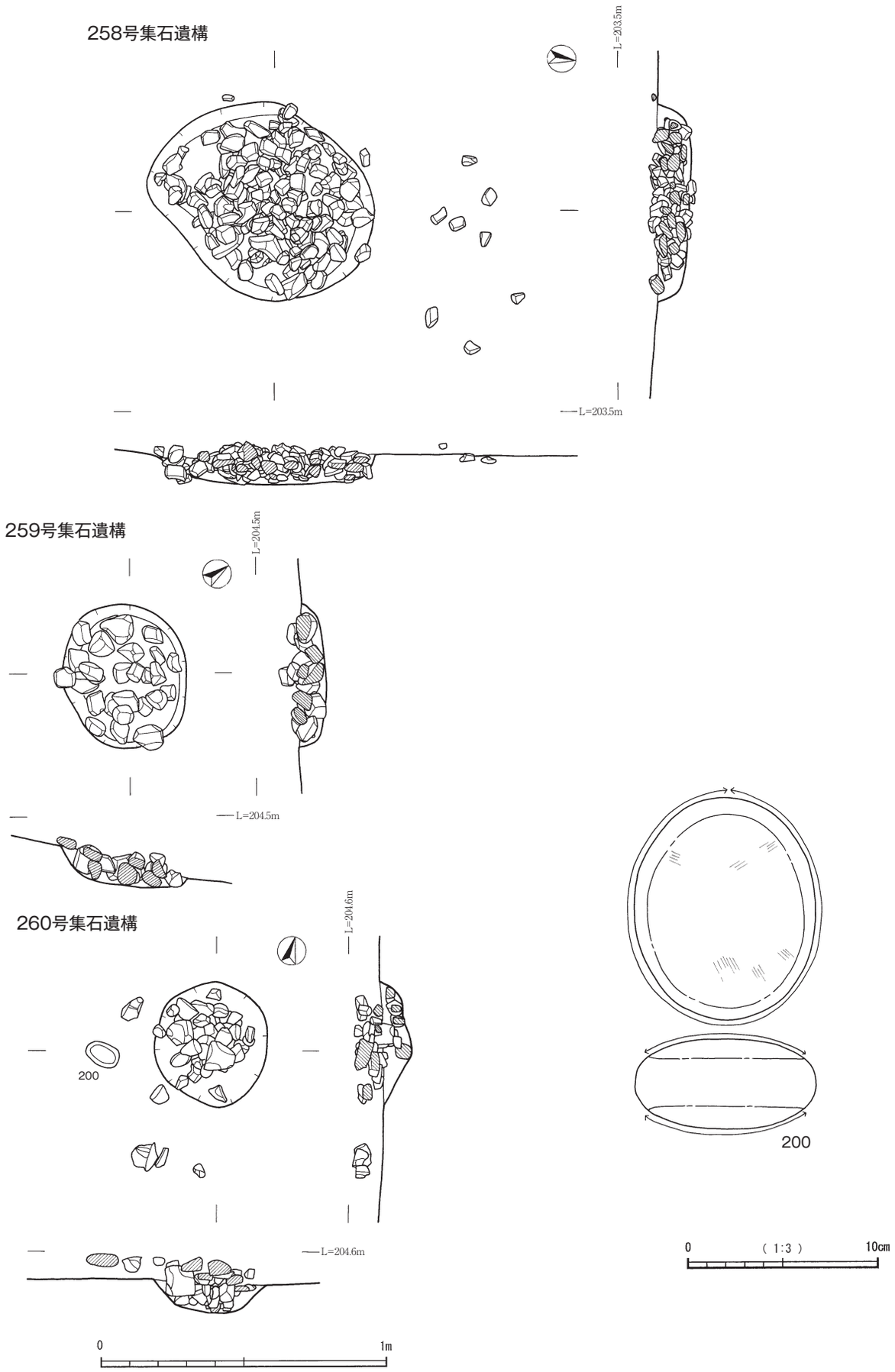
Ｊ-23 区で検出した。長軸 51cm・短軸 44cm・深さ８cmの円形の掘り込み内に，10cm程のやや大きめの礫が集中する。礫の大きさや堆積状況を考慮すると，掘り込み面はもっと高いレベルであったと想定される。構成礫のほとんどは被熱で赤化しているが，破砕したものは少ない。掘り込みの外側にはほとんど礫は確認されず，礫同士の密度もさほど高くない。掘り込みの埋土は細かい黄色のパミスを含む砂質の黄褐色土が主体で，わずかにⅦ層と考えられる黒褐色土のブロックが混ざる。

関連する遺物の出土はなかった。

260 号集石遺構（第 193 図）

K-18 区で検出した。礫のほとんどは径約 40cm・深さ 10cmの掘り込みに集中する。掘り込み内からは，炭化物がまばらに検出された。構成礫は５～８cm大が主体を占め，10cm大のものも数点含まれる。礫の出土状況から，本来の掘り込み面は礫の検出面と同じくらいであったと考えられる。

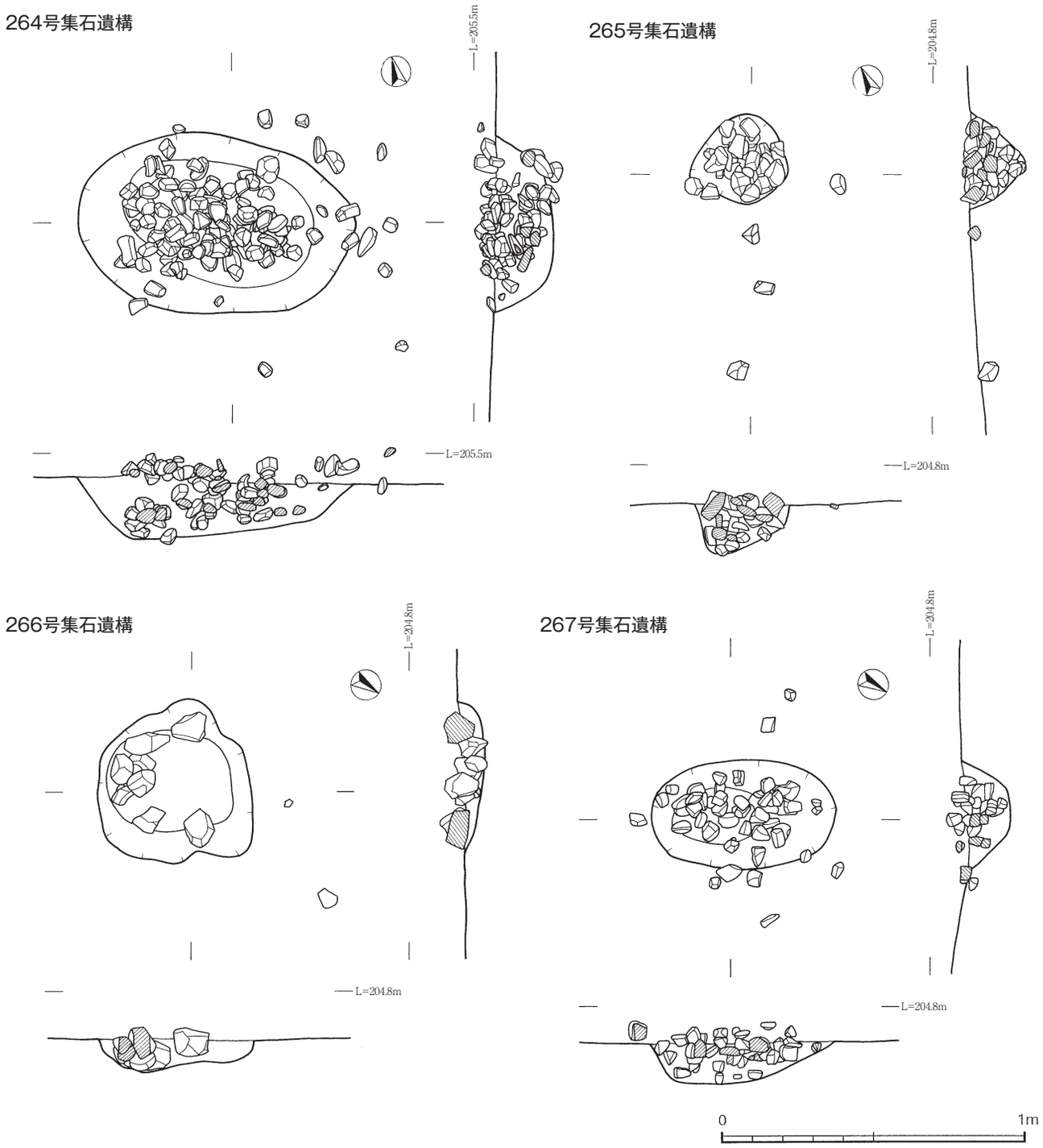
関連する遺物は，玉髄のフレイク１点，掘り込みの近くから構成礫として転用されたと考えられる磨石が１点出土した。200 は凝灰岩製の磨石である。全面が磨面であり，上面には複数方向の擦痕が観察できる。



第 193 図　258～259 号集石遺構，260 号集石遺構・出土遺物



第 194 図　261～263 号集石遺構



第 195 図　264～267 号集石遺構

261 号集石遺構（第 194 図）

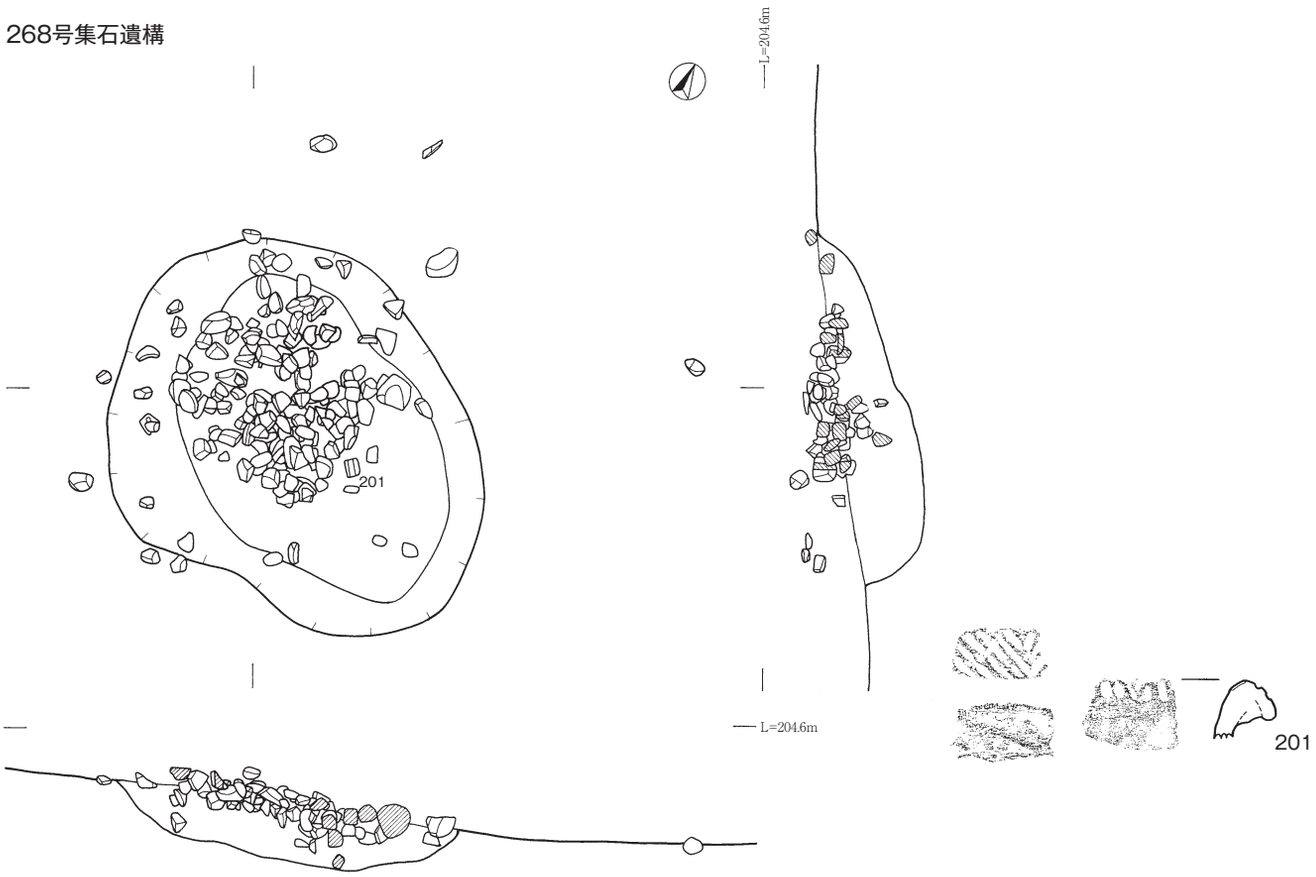
M-21 区，やや東側への傾斜面で検出した。検出面はⅥ層中位である。長軸 75cm・短軸 60cm・深さ 18cmの掘り込みを伴い，ほとんどの礫が掘り込み内に位置している。構成礫は５～10cm程の角礫が中心である。掘り込みの埋土は暗茶褐色土が主体で，砂質が強く炭化物を少量含んでいる。周辺にも礫が位置するが，礫が掘り込み内にしっかりまとまったものは本集石遺構以外では少ない。

関連する遺物は，Ⅺ類土器小片が出土した。

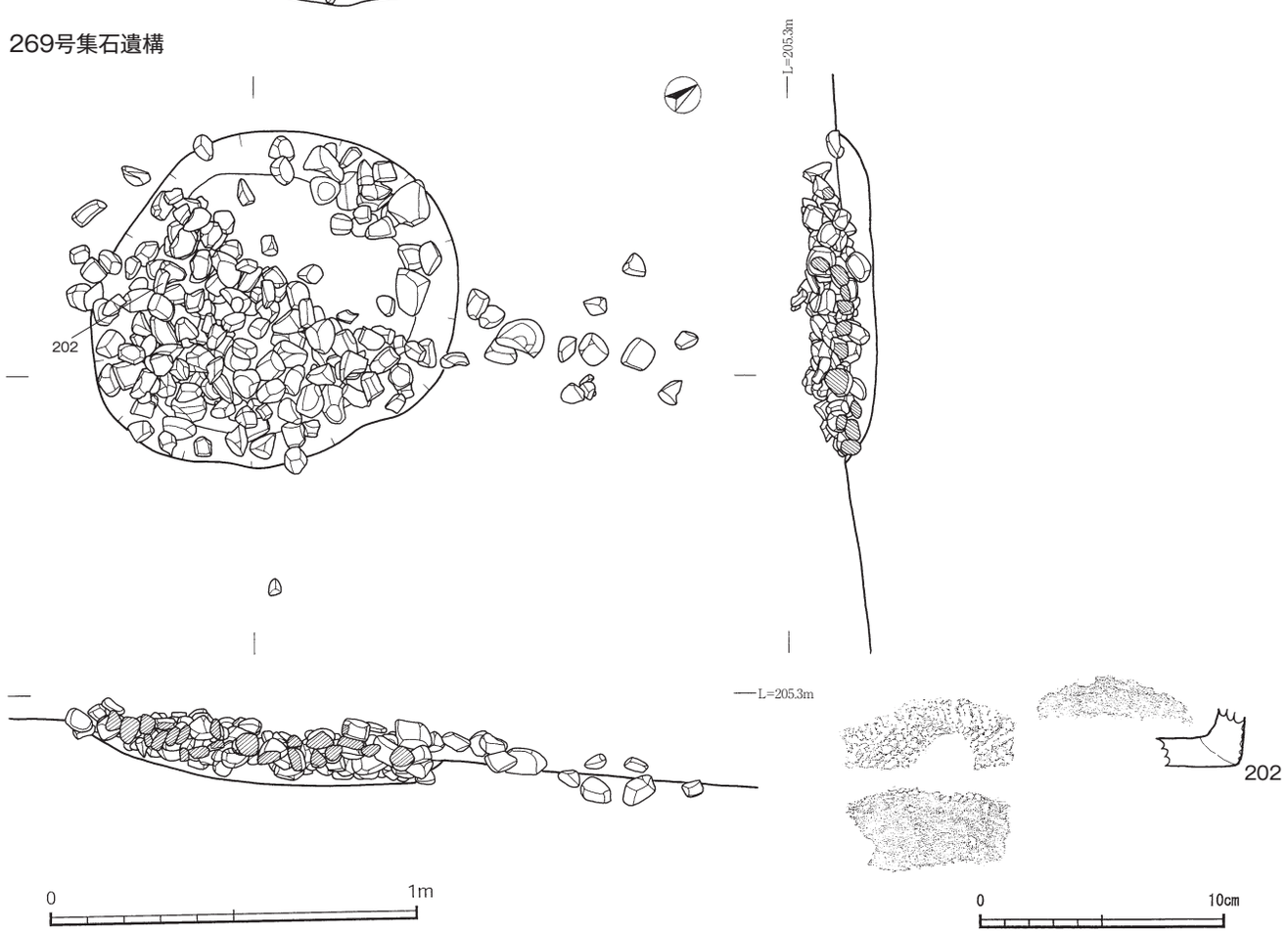
262 号集石遺構（第 194 図）

N-21 区で検出した。径約 50cmの円形のプランで，深さ 12cmほどの掘り込みを伴う。集石遺構を構成する礫のほとんどが掘り込み内で検出された。構成礫は５

268号集石遺構



269号集石遺構



第 196 図　268～269 号集石遺構・出土遺物

～10cmのものがほとんどであり，赤化していた。炭化物が少量確認された。本遺跡の集石遺構の中でも礫の密度が高く，まとまった形状の集石遺構である。最下面の礫は掘り込みに沿って位置しているが，底面に礫を敷き詰めたような構造は確認できなかった。掘り込み内の埋土は黄色パミス混じりの暗茶褐色土で，やや粘性がみられた。

関連する遺物は条痕を有する土器片が出土しているが，小片のため詳細は不明である。

263 号集石遺構（第 194 図）

H－３区で検出した。長軸 130cm・短軸約 120cmの範囲に礫が拡がるが，中でも長軸 60cm・短軸 50cm・深さ 15cmの範囲に礫が集中する。そのため，検出時には明瞭ではなかったが，土坑状の掘り込みが存在すると判断した。構成礫は５cm程の比較的小型の角礫が主体である。石材は安山岩を主体とし，砂岩とホルンフェルスが用いられていた。掘り込みと想定される部分はⅦ層の黒色土で，やや粘性がある硬くてしまりが強く，白色・黄色パミスがわずかに含まれていたが，掘り込みを明確には検出できなかった。

関連する遺物は確認されていない。

264 号集石遺構（第 195 図）

Ｊ－22 区で検出した。長軸 90cm・短軸 60cm・深さ 20cmの楕円形の掘り込み内に，礫のほとんどが集中する。掘り込みの東側へと礫が散在しており，中心部から掻き出されたと想定される。構成礫の多くは５～10cm程の角礫が主体であり，破砕したものも多い。掘り込みの埋土は黒褐色土が主体で，炭化物も全体的に含まれる。

関連する遺物は，XX類土器の小片，チャートと安山岩のチップが出土した。

265 号集石遺構（第 195 図）

Ⅰ－18 区で検出した。平面的な広がりはないが，重層的に礫が堆積し，ほとんどの礫は長軸・短軸とも約 30cm・深さ 18cmを測る掘り込みに集中する。明確な掘り込みのラインをつかむことは難しかったが，埋土と思われる掘り込み内の土は周囲よりも軟らかかった。構成礫は下位ほど小さく，被熱しているものが多い。構成礫のほとんどが，安山岩の角礫であった。

関連する遺物は確認されていない。

266 号集石遺構（第 195 図）

Ｌ－21 区，Ⅵ層の下部で検出した。径約 50cm・深さ 12cmの不整円形の掘り込みに礫が集中する。構成礫は 10～15cmほどの大型のものが目立ち，掘り込み内でも南側に片寄って検出された。埋土はＶｃ層とⅥ層が混在し，炭化物をわずかに含んでいる。

関連する遺物は確認されていない。

267 号集石遺構（第 195 図）

K－20 区で検出した。長軸 60cm・短軸 37cm・深さ 15cmの楕円形の掘り込みを伴い，その内部にほとんどの礫が入り，周囲に数点広がる。構成礫は５cm程の大きさが主体であり，掘り込み内の礫は下位にいくほど密度が低くなる。

関連する遺物は確認されていない。

268 号集石遺構（第 196 図）

Ｌ－21 区で検出した。長軸 115cm・短軸 90cm・深さ 20cmの不整円形の掘り込みを伴い，ほとんどの礫が掘り込み内の西側に集中する。構成礫は５cm以下の小型礫が大半であり，10cm大のものは２点しかない。掘り込みの埋土はＶｃ層とⅥ層が混在するもので，炭化物を含む。

201 は集石遺構内から出土した口縁部片である。外側に粘土を折り返して作出したと考えられ，三角形状に肥厚する。口唇部には綾杉状に沈線文が施される。XⅣ類土器に比定される。また，Ⅵ類土器小片および無文の口縁部の小片が出土した。

269 号集石遺構（第 196 図）

Ⅰ－23 区で検出し，北側の谷へ向かう緩斜面に位置する。検出面はⅥ層の中ほどである。径約 100cm・深さ 10cmの円形の掘り込みにほとんどの礫が集中し，一部が南側に偏る。掘り込みの埋土は黄褐色土が主体であり，礫間は砂質が強く軟らかい。また，埋土中に炭化物がわずかに混ざる。構成礫は５～８cm程が中心であり，破砕した角礫や被熱で赤化し，脆く崩れやすい礫が多かった。

集石遺構内から底部片の 202 が出土した。内面・底面は丁寧なナデ調整であり，底面はほぼ平坦である。外面には貝殻腹縁刺突文が密に施されている。胎土は白色・褐色の粒子を多量に含む。Ⅵ類土器に比定される。

270 号集石遺構（第 197 図）

H－24 区で検出した。長軸 90cm・短軸 85cm・深さ 22cmの不整円形の掘り込みにほとんどの礫が集中する。構成礫は 10cm程の大きさが主体を占め，間に５cmほどの礫が含まれる。掘り込みの床面は礫よりもやや下位であり，若干空白がある。また，礫の堆積状況から，本来の掘り込み面はより上位であったと想定される。

203 は集石遺構内から出土した頸部～胴部片である。頸部に突帯が一部残存しており，胴部に最大径をもって底部にすぼまる器形である。器壁は薄く，厚みはほぼ一定である。胴部には結節縄文が縦位に施される。さらに，頸部の突帯には刻みが施されている。XⅣ類土器に比定される。また，Ⅺ類土器および沈線文を有する土器の小片も出土した。

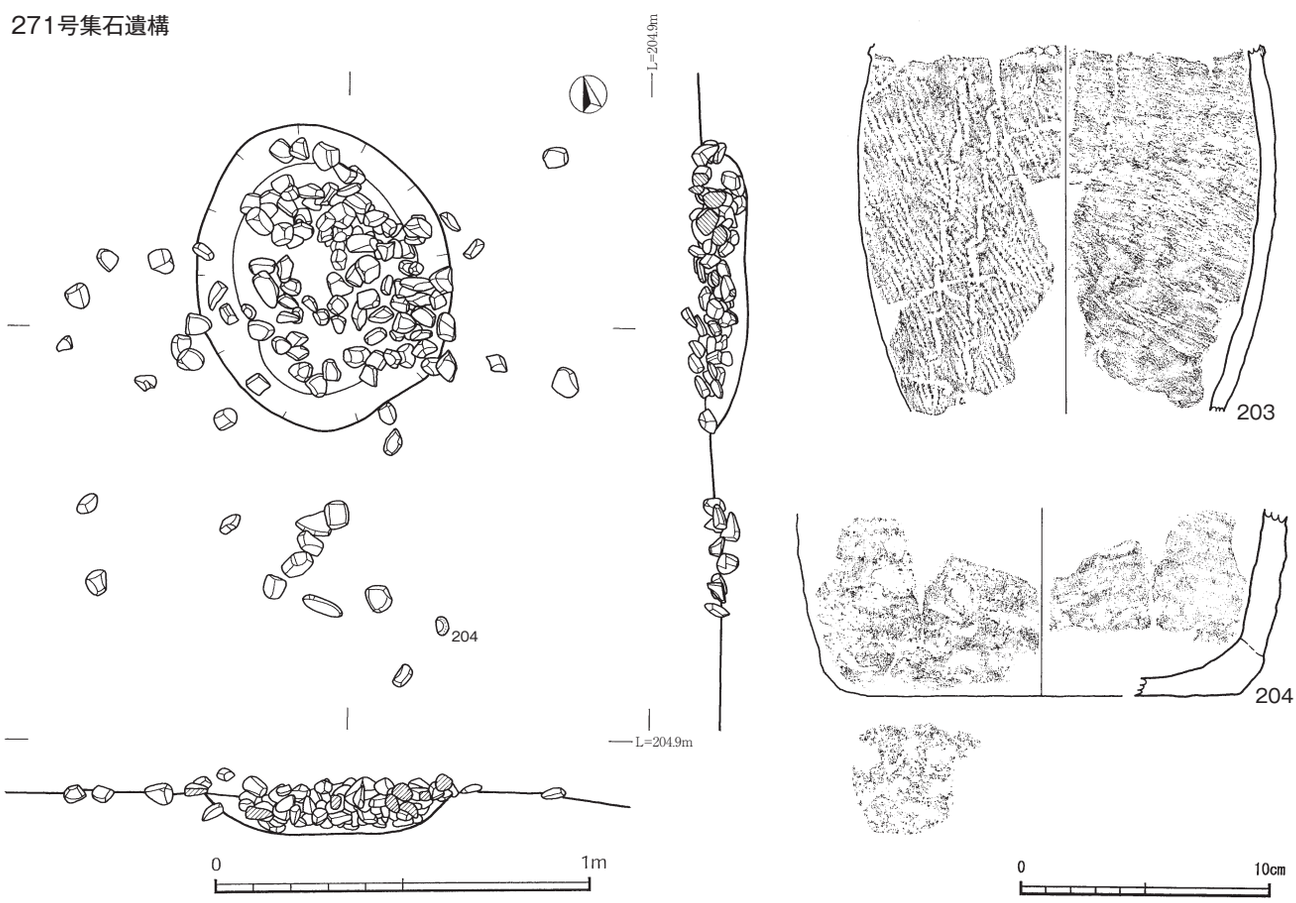
271 号集石遺構（第 197 図）

K－21 区で検出した。礫の広がりは約 140cm程の範囲であるが，長軸 80cm・短軸 68cm・深さ 10cmの円形の掘り込みを伴い，掘り込みにほとんどの礫が集中する。掘り込み内の礫は密度が高く，掘り込みから西側に向かって礫が掻き出されたような状況である。構成礫は５～８cm

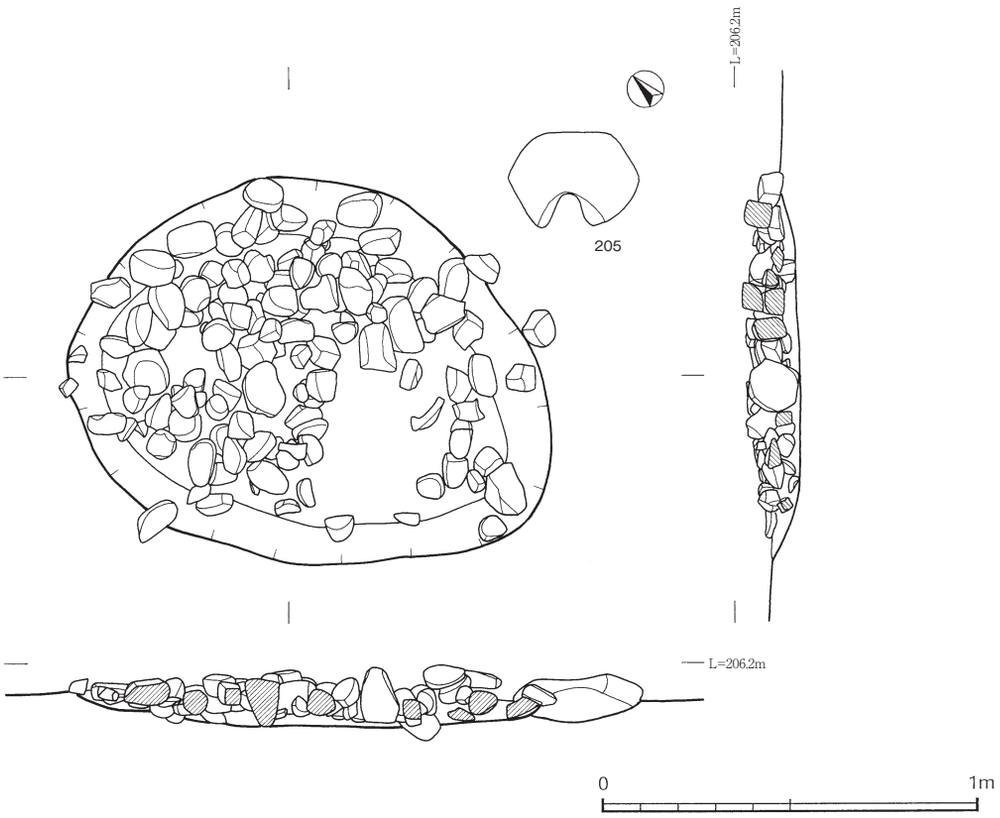
270号集石遺構

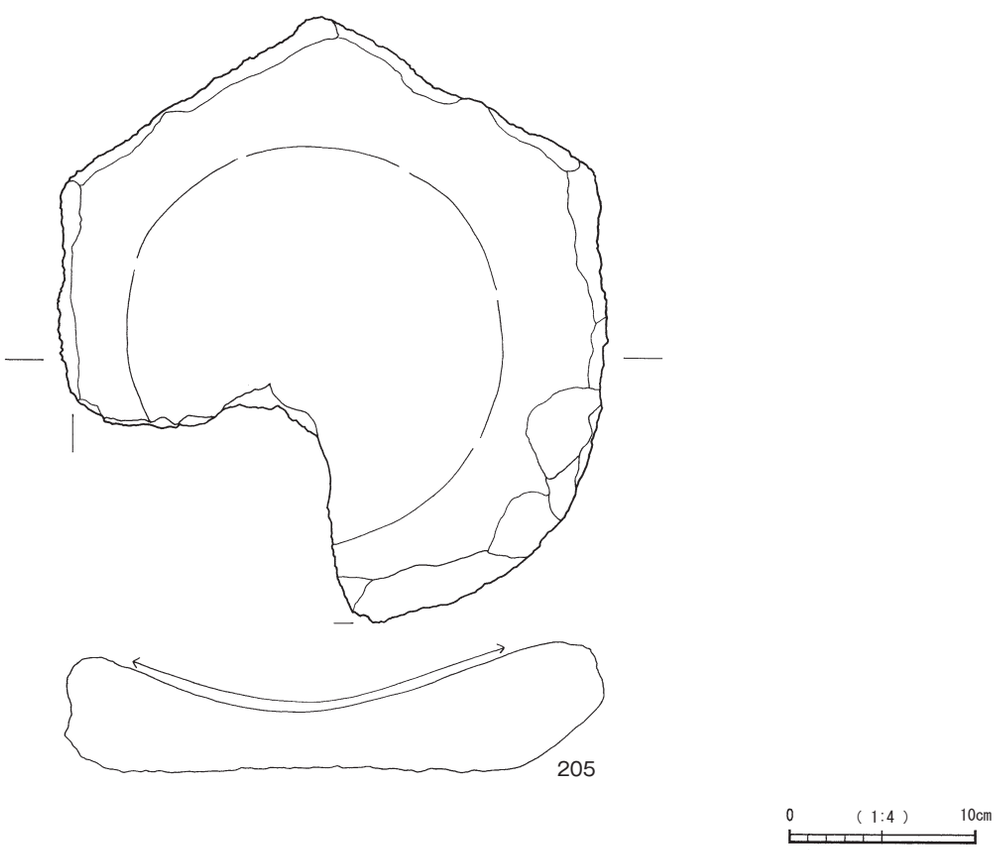


271号集石遺構

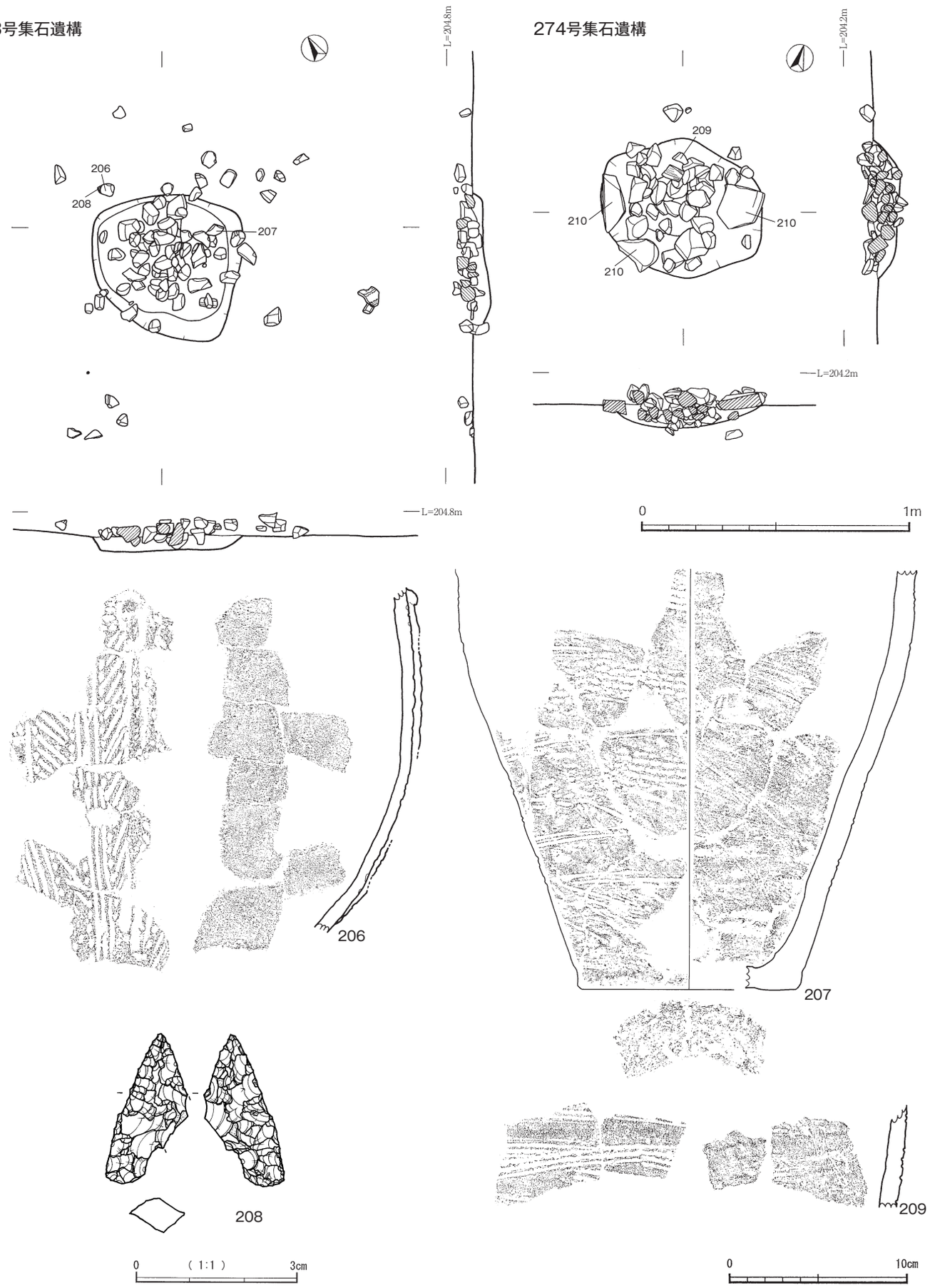


第 197 図　270～271 号集石遺構・出土遺物

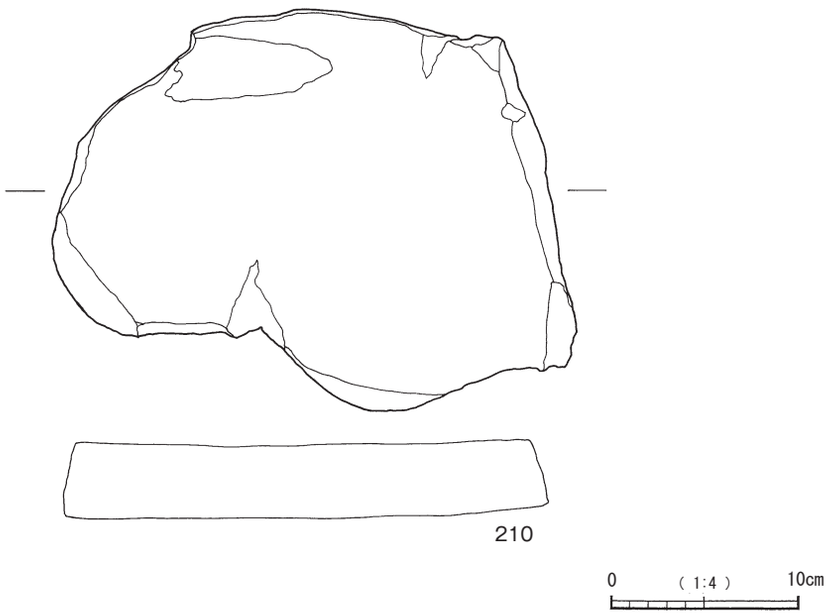




第 198 図　272 号集石遺構・出土遺物



第 199 図　273～274 号集石遺構・出土遺物



第 200 図　274 号集石遺構出土遺物

程の大きさが主体であり，被熱により表面が赤化し破砕したものも多い。また，表面の劣化が激しいものが多くみられた。掘り込み内の埋土は，黒褐色土で軟らかく脆い。

204 は礫間から出土した土器底部片である。内外面ともナデ調整であるが，外面および底面は凹凸が目立つ。また，有機質が抜けた痕跡と考えられる空隙が，数か所にみられる。胎土には径２・３㎜程の軽石粒が含まれる。詳細な型式は判断できないが，形状から早期後葉のものと考えられる。

272 号集石遺構（第 198 図）

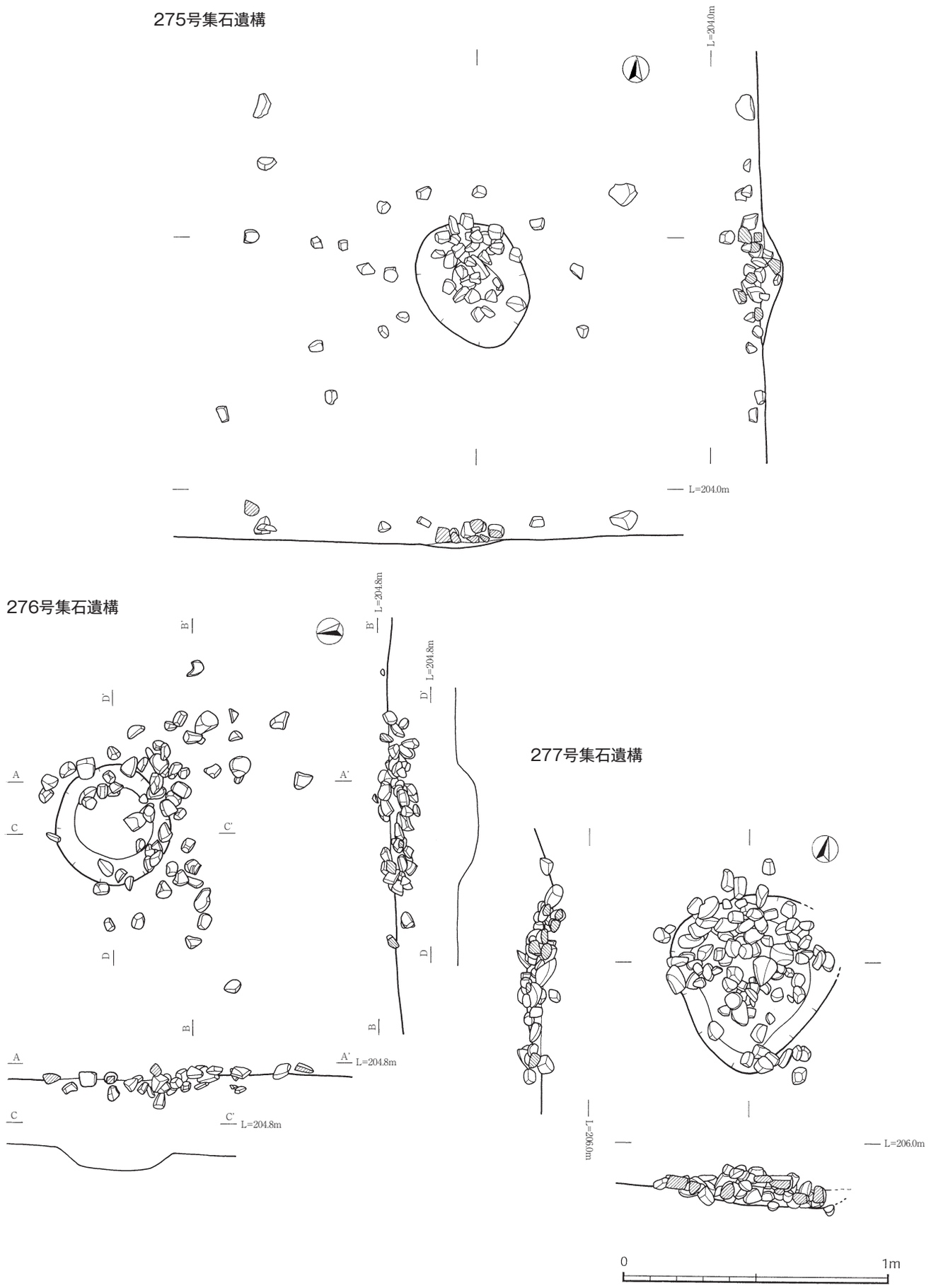
G-23 区で検出した。長軸 130cm・短軸 104cm・深さ８cmの楕円形の掘り込み内で，ほとんどの礫が検出された。構成礫は５～10cm程の小型と 15cmを超える大型礫が混在し，大型礫の割合が高い。礫はほとんど破砕しておらず，使用頻度が少ないと考えられる。また，南側に礫が少ない部分があり，礫が取り出されている可能性も想定される。

205 は掘り込みに隣接して出土した花崗岩製の石皿である。端部はやや欠損しているが，平面はおおよそ五角形状である。裏面は平坦であり，安定している。表面は作業面を広く設け，大きく凹んでいる。また，使用による磨耗で表面は平滑になっており，使用頻度が高かったことが分かる。その他，転用されたと考えられる石皿片や型式不明の底部小片が掘り込み内から出土した。

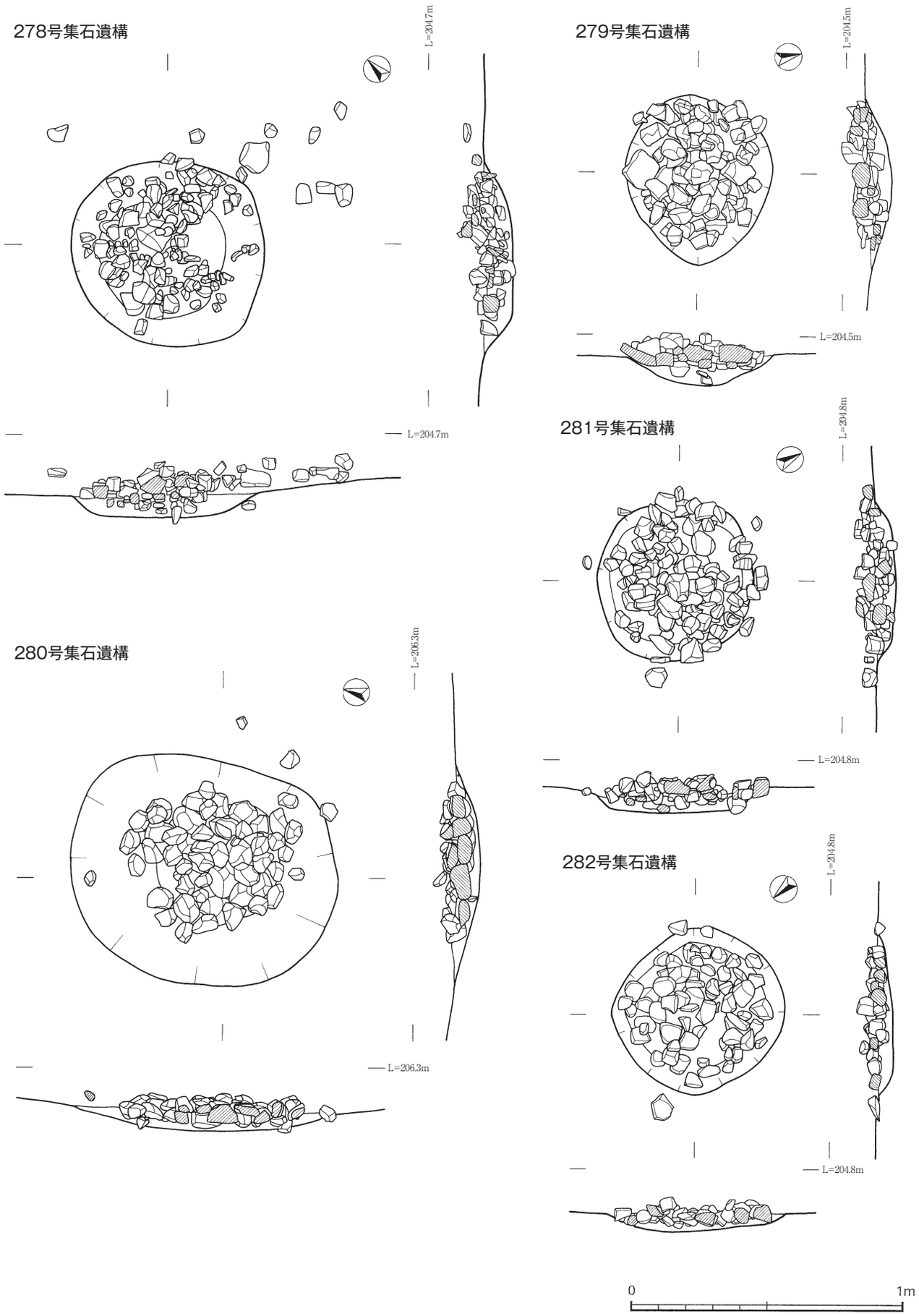
273 号集石遺構（第 199 図）

K-20 区で検出した。径約 120cmの範囲に礫が広がり，中心に長軸 57cm・短軸 53cm・深さ７cmの不整円形の浅い掘り込みが伴う。ほとんどの礫は掘り込み内から検出され，数点の礫が周囲に広がる。構成礫は５～10cm程の大きさの角礫であり，掘り込みの床面と礫が重なる層には若干のレベル差がある。若干被熱により赤化したものがあるが，全体としては形をしっかりと留めているものが多い。掘り込みの埋土は黒褐色土でしまりがあり，若干粘質がある。また，明褐色土の小パミスを含む。Ⅵ層に近い色をしており，パミスの量や粒径もほとんど変わらない。

掘り込み内および周辺から，包含層出土の土器と接合した 206・207 及び 208 が出土した。206 は胴部片である。緩やかに膨らむ器形で，下部は底部付近と考えられる。突帯を縦位に２本１組で貼り付け，その上位に瘤状の突起が施される。突帯の上部には刻目が施され，突帯の両端部は丁寧に調整されている。突帯間は縦位・斜位の沈線文と縦位の刺突文で構成される。ⅩⅣ類土器に比定される。207 は胴部から底部まで残存する。胴部上半に最大径を有し，底部に向かって直線的にすぼまる。内外面とも比較的丁寧なナデ調整であるが，底部付近は若干凹凸がある。胴部には横位の押引状の貝殻条痕文と直線状の沈線が交互に施文される。押引状の条痕文は貝殻の形状が明瞭であり，小波状を呈する。ⅩⅥ類土器もしくはⅩⅦ類土器に比定される。208 は黒曜石（腰岳）製の打製石鏃であり，206 の直下から出土した。脚部の右側は欠損しているが，直線的な側縁でＵ字形のやや深めの抉りをもつ二等辺三角形型と考えられる。先端は細く鋭利に仕上げられ，体部は厚みがあり，断面は紡錘形を呈する。



第 201 図　275～277 号集石遺構



第 202 図　278～282 号集石遺構

274 号集石遺構（第 199・200 図）

K-15 区で検出した。長軸 65cm・短軸 52cm・深さ 10cm の掘り込みを中心に，密に礫が検出された。扁平な石皿片を掘り込みの輪郭に沿って数点配置し，その中を５～10cm程の礫で充填したような検出状況であった。掘り込みの埋土には，ごく少量の炭化物が確認された。

集石遺構の礫の間から 209 の胴部片が出土した。金雲母を多量に含む胎土で，器面にも露出する。内外面ともナデ調整であり，数条の沈線がみられる。特徴から，XVI類土器もしくはXVII類土器と考えられる。210 は掘り込み内に構成礫として使用されていた砂岩製の石皿片で，集石内で３つに分割した状態で出土した。厚みのある扁平な板状素材を用いており，裏面は平坦で安定している。表面は磨耗により平滑になっているが，凹みはほとんどない。ススが沈着して赤化しており，集石遺構の構成礫として転用された際の被熱の影響と考えられる。

275 号集石遺構（第 201 図）

Ｊ-12 区で検出した。集石遺構中心部に長軸 50cm・短軸 40cm・深さ７cmの楕円形の浅い掘り込みを伴い，礫が集中する。さらに，掘り込み周辺の長軸 160cm・短軸 120cmの範囲に礫が広がる。構成礫は５cmほどで大きさがそろっており，周囲では 10cmを超えるやや大型の礫もみられた。

関連する遺物は確認されていない。

276 号集石遺構（第 201 図）

K-21 区で検出した。径約 45cm・深さ８cmの円形の掘り込みを伴い，掘り込みから東方向へ礫が広がる。構成礫は５～８cm程の大きさが主体を占め，１点は軽石であった。角礫がほとんどで，被熱により破砕するなど劣化が著しい。礫の散在状況から，礫を掻き出したり取り出した可能性が想定される。掘り込みの埋土は暗黄褐色主体の砂質土で軟らかく，黄色や白色のパミス細粒を多く含む。また，炭化物が多く検出された。

関連する遺物は，礫の内部からXX類土器の口縁部小片が１点出土した。

構成礫と掘り込みは一体のものとして，この類に含めたが，両者にはレベル差があることから別の遺構である可能性も残る。

277 号集石遺構（第 201 図）

G-22 区で検出した。径約 65cm・深さ 10cmの円形に近い浅い掘り込みが伴う。構成礫は５～７cm程が主体を占め，数点が 10cmを超え，そのほとんどが掘り込み内に位置している。礫は被熱の度合いが強く，使用頻度が高かったと推定される。掘り込みの埋土は単一であり，暗褐色土でしまりがあるが，粘性はない。また，黄色パミスや白色粒を少量含む。掘り込みの北東端はプランの確認が十分にできなかった。

関連する遺物は確認されていない。

278 号集石遺構（第 202 図）

Ｋ・Ｌ-20 区で検出した。径約 70cm・深さ 12cmのほぼ円形に近い掘り込みを伴い，ほとんどの礫が掘り込み内で検出された。集石遺構の東側に礫の密度が低い部分があり，樹痕の影響を受けていた。構成礫は 15cm程の大型礫もあるが，５～８cm大のものが主体をなし，大小様々な礫が用いられている点に特徴がある。角礫を中心とし，被熱により赤化し，破砕しかけた礫も４・５点みられたが，それ以外は概ねしっかりと形を保っている。また，１点は軽石であり，１点は磨石片と思われるものが転用されていた。掘り込みの埋土は黒褐色土で，黄橙色および灰白色の極小粒を含む。

関連する遺物は，掘り込み内からXX類土器の小片，掘り込みに隣接してチャートのチップが１点出土した。

279 号集石遺構（第 202 図）

Ｌ-20 区で検出した。長軸 62cm・短軸 55cm・深さ 10cmの円形に近い掘り込みを伴う。構成礫のほとんどは５～８cm程の角礫で，10cmを超えるものもまばらにみられる。掘り込みの床面と礫の下面の間に若干の空間がある。掘り込みの中央付近で炭化物がややまとまって検出された。

関連する遺物として，黒曜石のチップが出土した。

280 号集石遺構（第 202 図）

Ｆ-21 区で検出した。長軸 100cm・短軸 83cm・深さ 10cmの円形に近い掘り込みを伴い，その中心部分に密集して礫が検出された。構成礫は７～15cm程のやや大型の礫が主体である。

掘り込み内外から，早期後葉と思われる底部片や黒曜石・チャート・安山岩のチップが出土した。

281 号集石遺構（第 202 図）

K-20 区で検出した。249 号集石遺構に隣接する。径約 60cm・深さ９cmの浅い円形の掘り込みを伴い，ほとんどの礫は掘り込み内で検出された。炭化物は東側で少量検出された。構成礫は５cm程と 10cm程の大きさのものに大別できる。

関連する遺物は確認されていない。

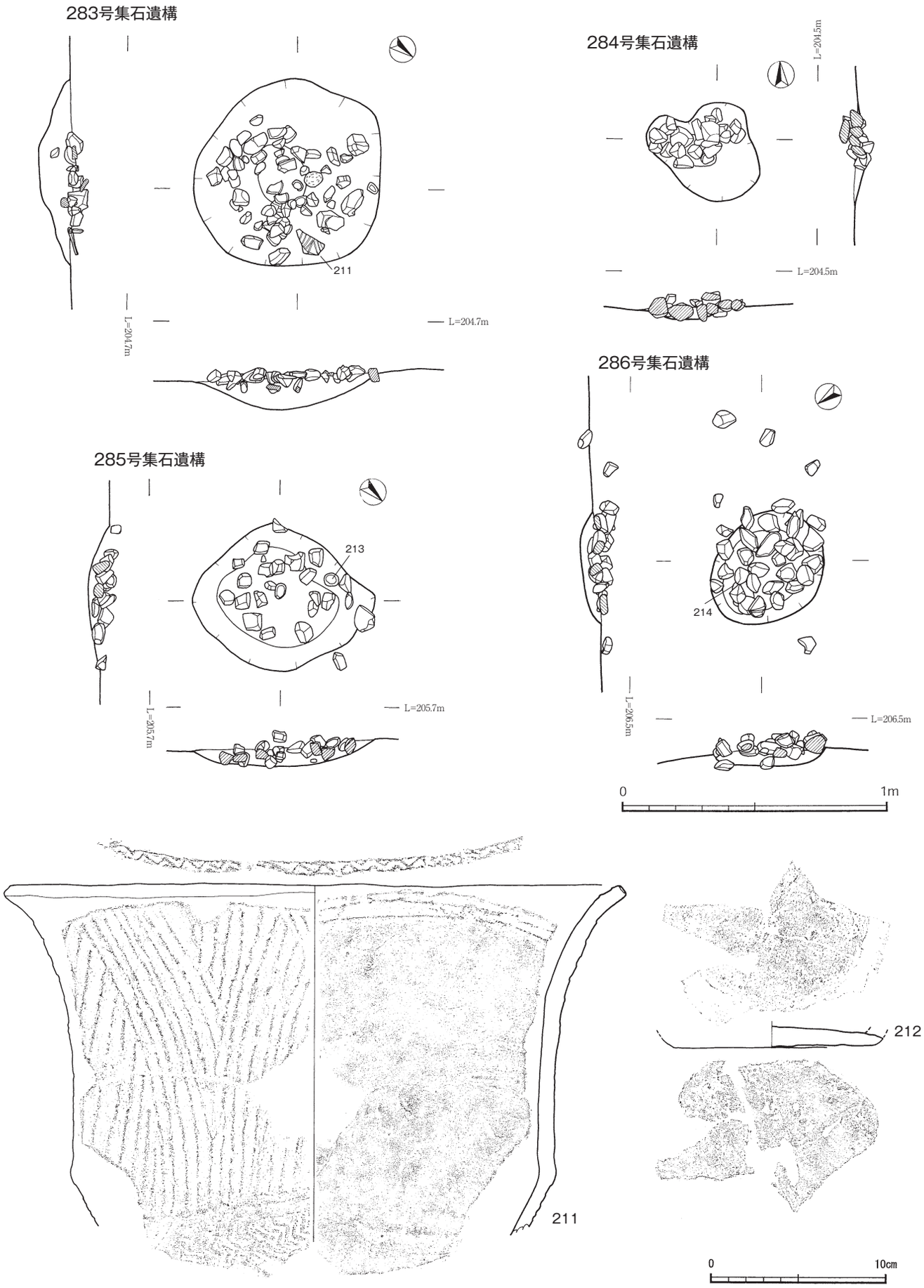
282 号集石遺構（第 202 図）

K-20 区で検出した。径約 65cm・深さ７cmの円形の掘り込みを伴う。礫のほとんどが掘り込み内から検出されており，大きさは 10cm程のものが主体である。掘り込みの埋土は単一で，極暗褐色のしまりがややある土で，粘性は低い。黄色パミスや白色粒子を含む。

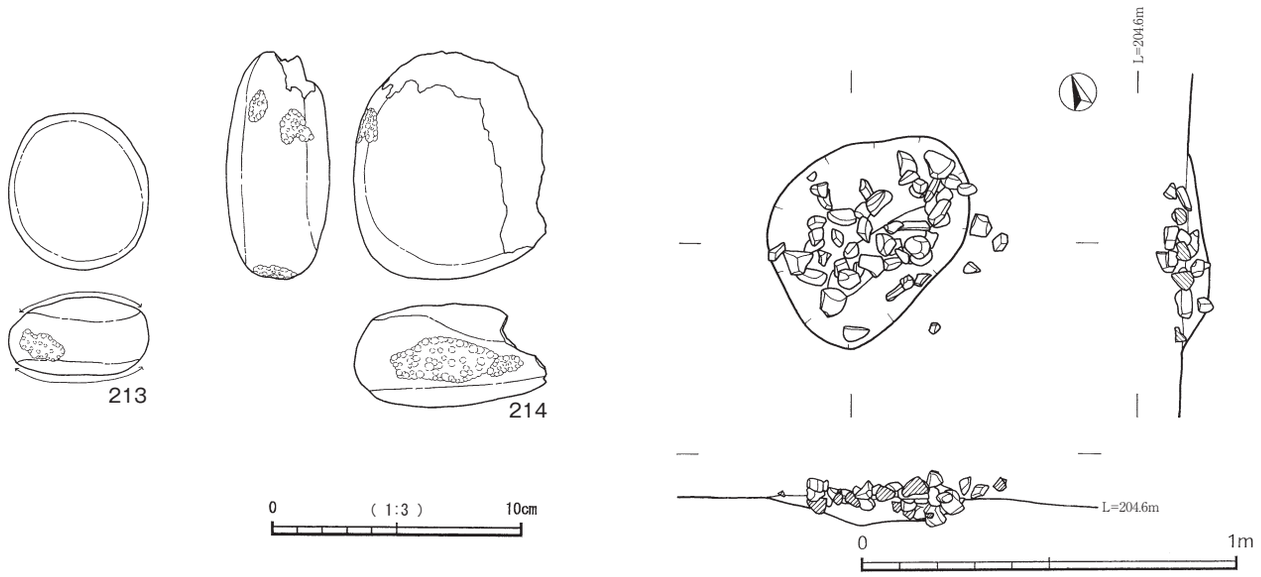
関連する遺物は，中心付近で土器片が１点出土したが小片のため詳細は不明である。

283 号集石遺構（第 203 図）

Ｌ-20 区で検出した。直径約 70cm・深さ 12cmの円形の掘り込みに礫が集中する。構成礫の大半は５cm程の小型の角礫である。被熱により赤化した礫は少なく，形状を



第 203 図　283～284 号集石遺構・出土遺物，285～286 号集石遺構



第 204 図　285～286 号集石遺構出土遺物，287 号集石遺構

とどめている。298 号集石遺構と隣接しており，礫の形状などの特徴が類似する。掘り込みの埋土は黒褐色土で粘性・しまりがあるⅥ層に近い土で，明黄褐色の微小なパミス粒を含む。

集石遺構内から口縁部から胴部まで残存する 211 が出土した。口縁部は大きく外反して開き，胴部で屈曲する。口唇部は平坦面を作出し，胴下半と同様の押型文が施文される。外面は屈曲部を境界に上下で施文手法が異なり，上半は綾杉状の微隆起突帯，下半は山形押型文が施文される。突帯の間隔はほぼ一定である。また，内面の口縁部にも２条の微隆起突帯が横位にめぐる。色調は明るく，白色粒や角閃石が目立つ。器壁は比較的厚いが，調整は丁寧である。Ⅻ類土器に比定される。

埋土中から検出された炭化物の年代測定を行ったところ，6,089 － 5,987cal ＢＣの年代値が得られた。

284 号集石遺構（第 203 図）

K-17・18 区で検出した。掘り込みは長軸 45cm・短軸 35cmを測り，浅く窪んだ部分の北側に礫が集中する。深さは検出時では６cmであったが，礫の堆積状況からもう少し上位から掘り込まれていた可能性がある。構成礫のほとんどは５cm程の小型の安山岩で，被熱により破砕したものが数点含まれる。炭化物は確認できなかった。

集石遺構内から一括資料として取り上げた底部片の 212 および貝殻刺突文を有する土器小片が出土した。212 の端部には胴部との接合痕が残る。内外面とも丁寧なナデ調整であり，ほぼ扁平である。胎土は白色粒子が目立つ。詳細な時期は不明であるが，底部の厚みから早期後葉の可能性が考えられる。

285 号集石遺構（第 203・204 図）

H-24 区で検出した。北側の谷へ向かって緩やかに傾斜する位置にある。長軸 70cm・短軸 55cm・深さ 8cmの掘り込みにほとんどの礫が集中する。ただし，礫数は 26 点と少なく，礫同士の密度はさほど高くない。構成礫は５～８cm程が主体と小型の角礫が多く，被熱に撚り変色したものも見られた。掘り込み内の埋土は茶褐色土が主体で，一部Ⅴ層のパミスを含む軟らかい土である。

集石遺構内から砂岩製の磨・敲石である 213 が出土した。下側面に一部弱い敲打痕が観察される。上・下面は磨面であり，表面は平滑である。全体的に赤化しており，集石遺構の構成礫として転用された際の被熱の影響と考えられる。

286 号集石遺構（第 203・204 図）

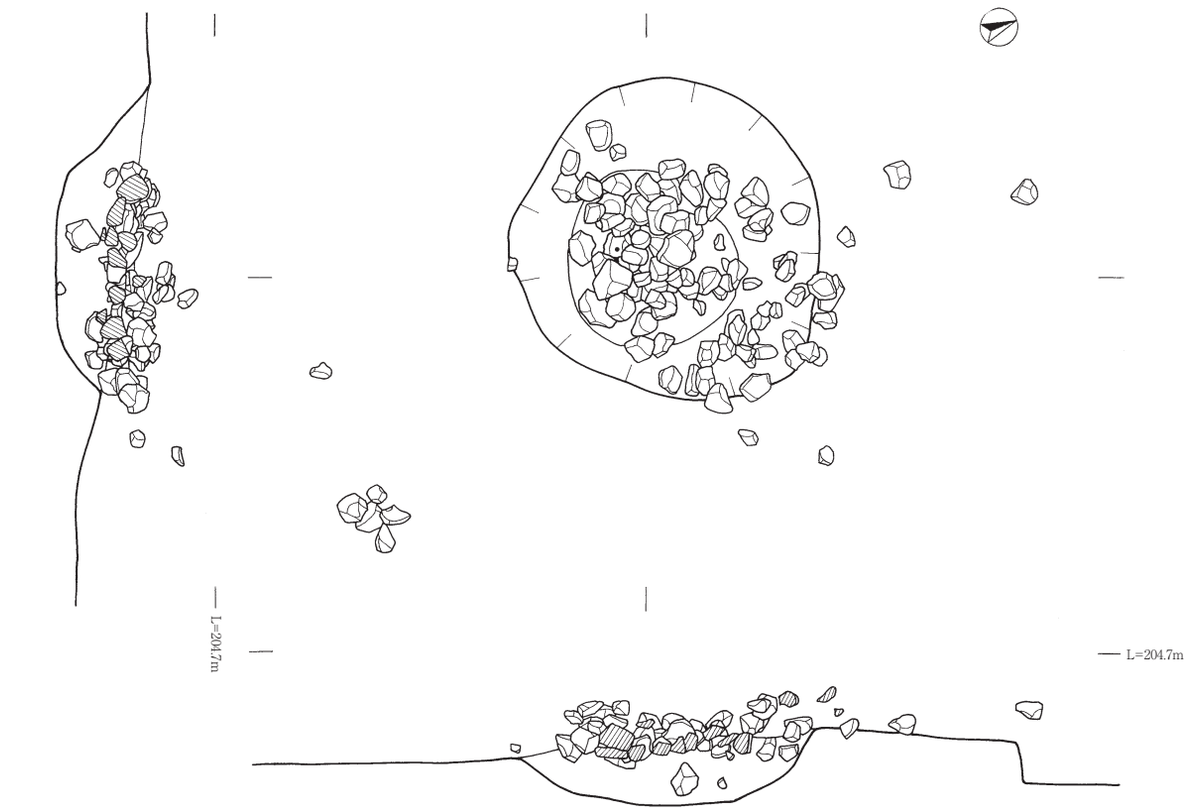
F-24 区で検出した。標高約 207 ｍと調査区内でも比較的原地形のレベルが高い位置にあたる。周辺はなだらかな尾根の坂上付近にあたり，東西方向に下る。径約 40cm・深さ８cmの円形の掘り込みを伴い，ほとんどの礫がその内部で検出された。構成礫は 10cm程の礫が主体であり，平面的な密度はやや低い。礫は被熱により変色し，一部破砕もみられる。掘り込みの埋土は砂質の強い暗茶褐色土で，黄色土の小ブロックが混ざる。また，一部は被熱により脆く崩れた部分もみられた。

関連する遺物は，掘り込み内で磨・敲石や研磨痕のある礫１点，さらにXX類土器の小片が１点出土した。214 には剥離やひびがみられ，右上部は欠損している。下側面を中心に左側面にわずかに敲打痕が確認できる。下側面の敲打は密度が高く，形状も平坦になっている。磨・敲石や研磨痕のある礫は構成礫として転用されたものと考えられる。

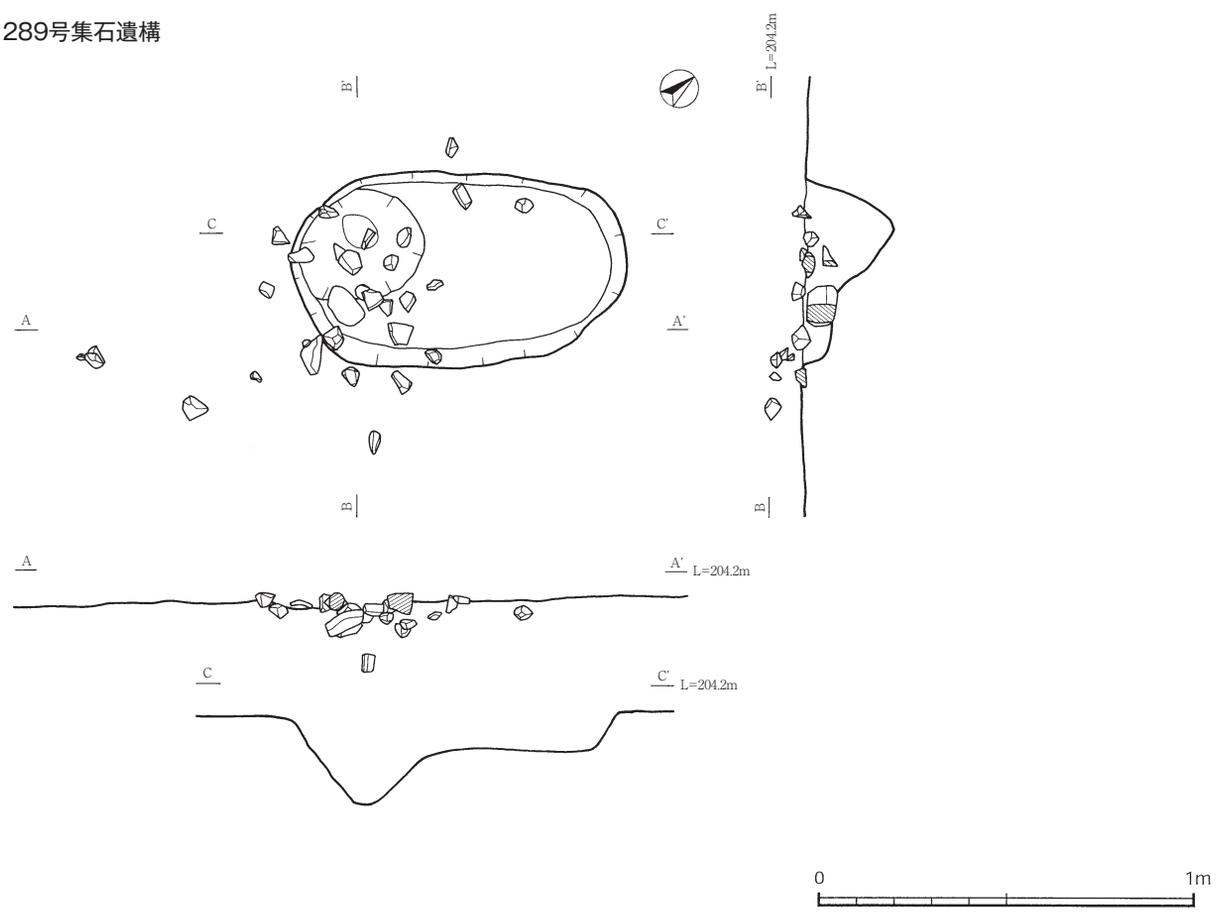
287 号集石遺構（第 204 図）

L-20 区で検出した。長軸 62cm・短軸 45cm・深さ７cm

288号集石遺構

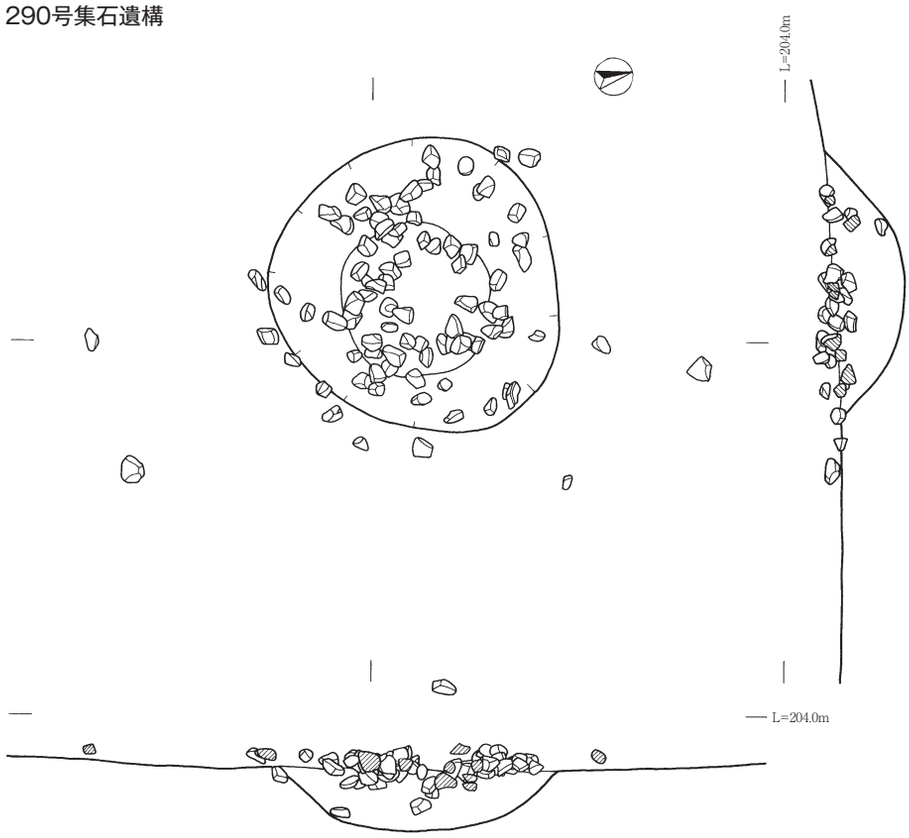


289号集石遺構

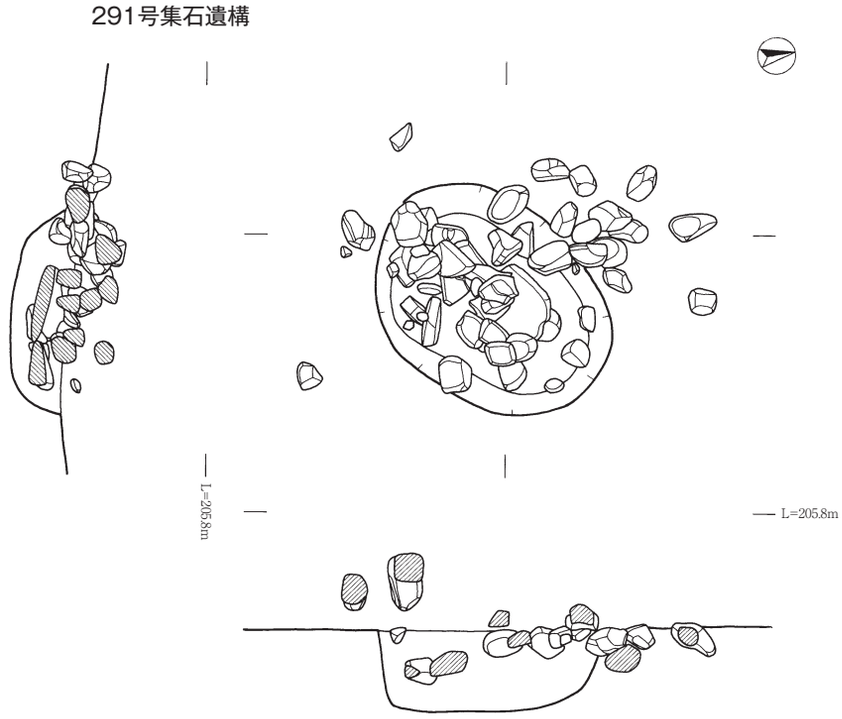


第 205 図　288～289 号集石遺構

290号集石遺構

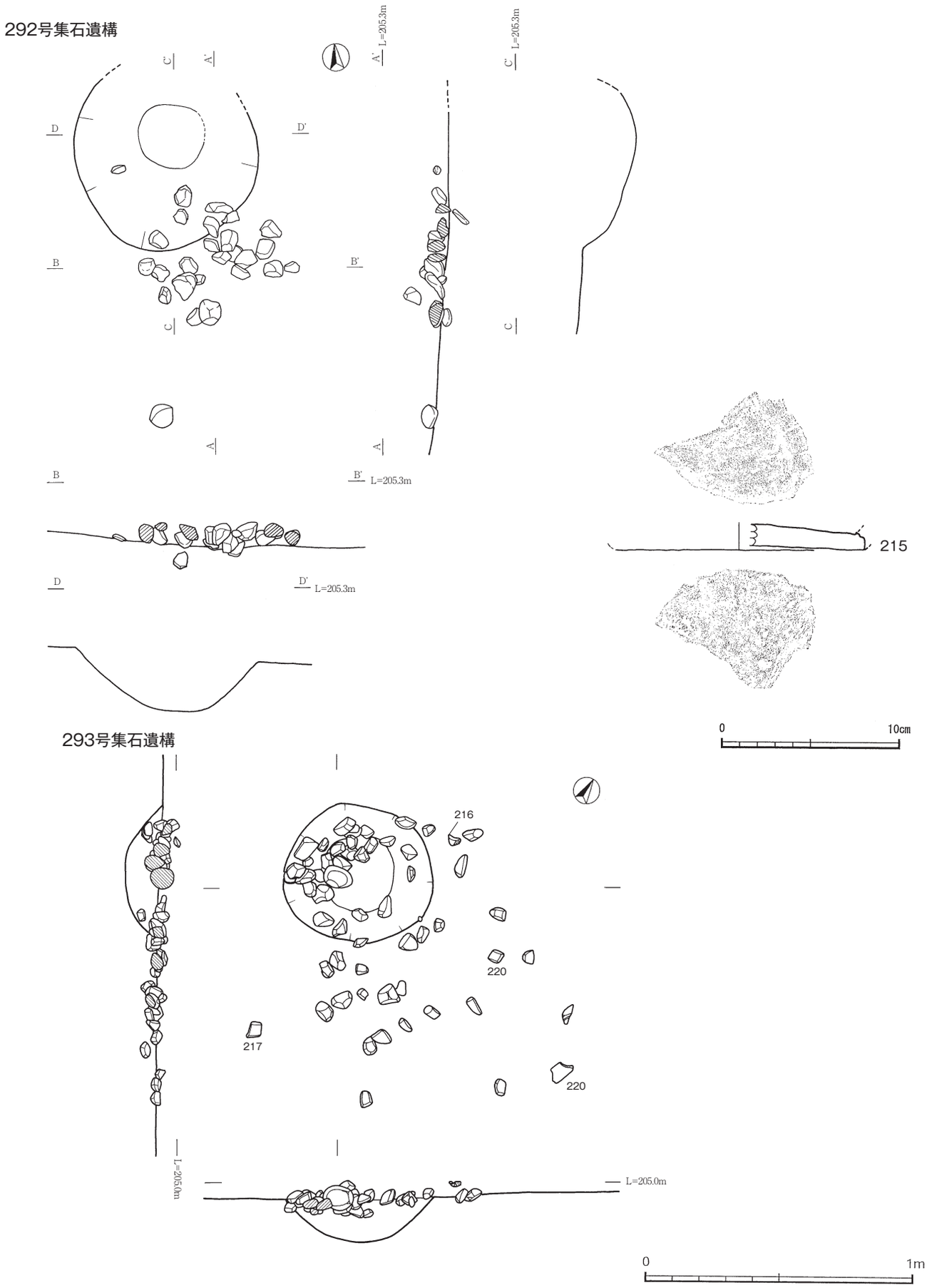


291号集石遺構

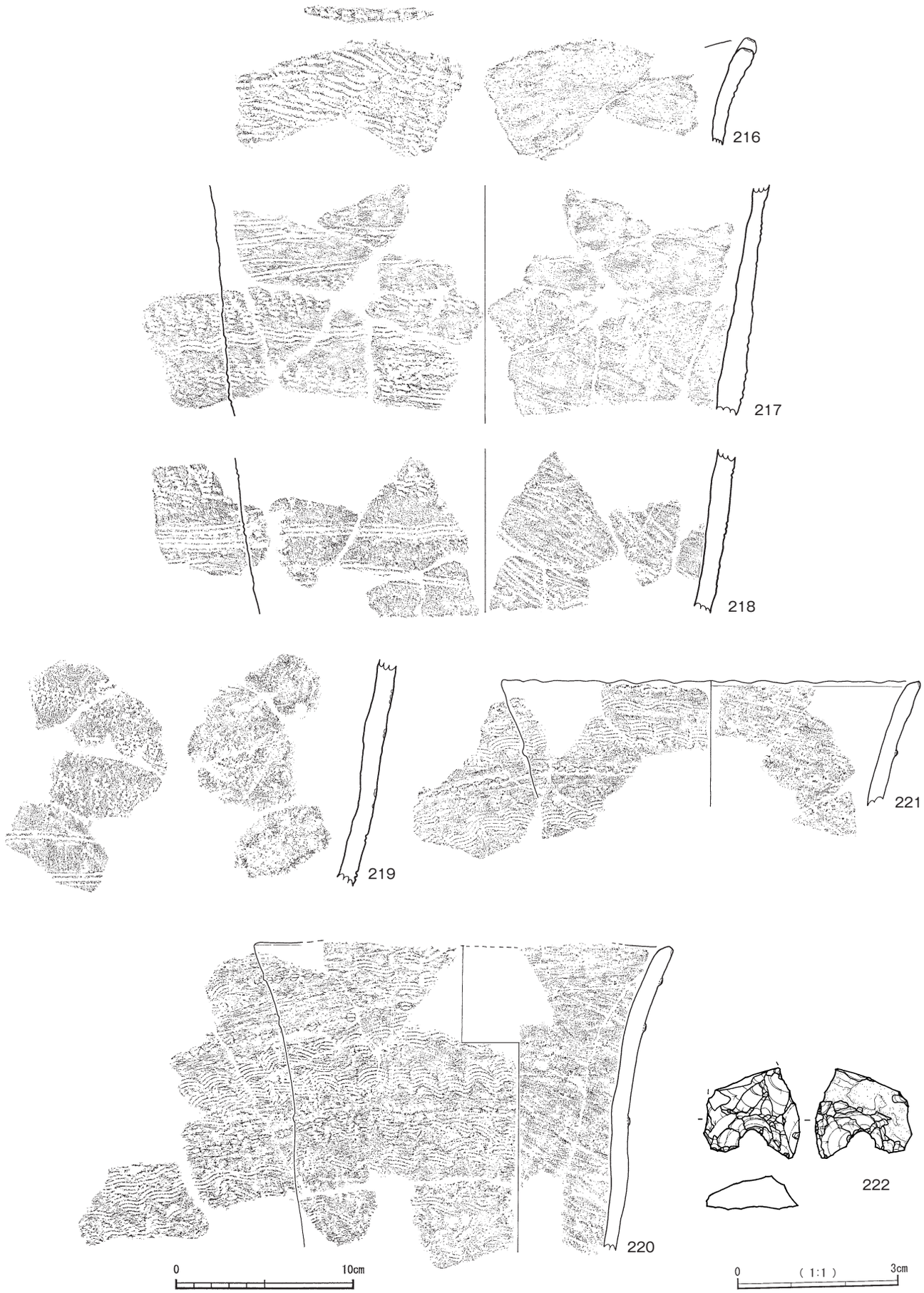




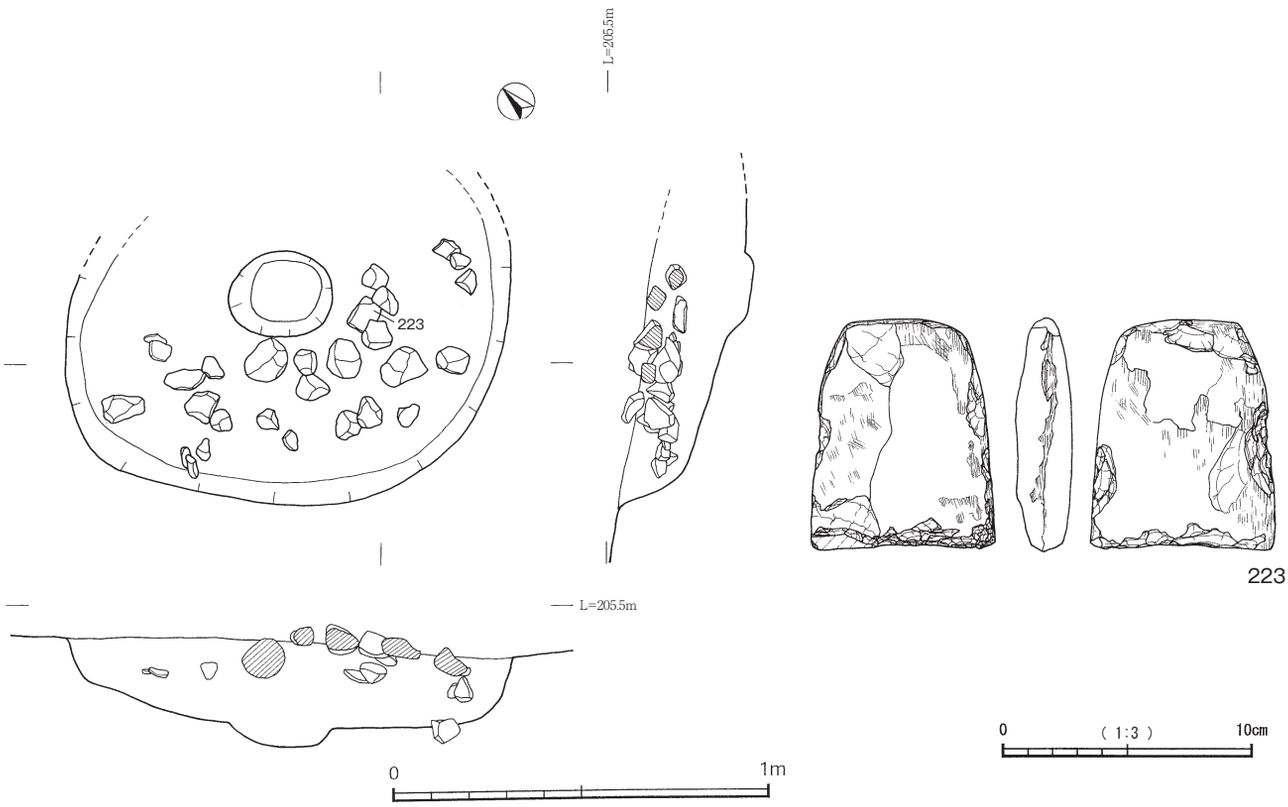
第 206 図　290～291 号集石遺構



第 207 図　292 号集石遺構・出土遺物，293 号集石遺構



第 208 図　293 号集石遺構出土遺物



第 209 図　294 号集石遺構・出土遺物

のやや楕円形の浅い掘り込みを伴い，その内部で礫がまとまって検出された。集石遺構は 10cm未満の礫で構成されるが，その中でも５cm程の角礫が中心であり，間に小型の礫が含まれる。構成礫のうち数点は，磨石片などの石器が転用されたものであった。被熱により赤化したものは２・３点みられるが形はしっかりしており，集石遺構自体の使用頻度は低かったと考えられる。掘り込みの埋土は，黒褐色土で粘性・しまりがある。特徴はⅥ層に近く，明黄褐色の微小パミスを含む。

関連する遺物は，XX類土器の小片が掘り込み内から出土した。

288 号集石遺構（第 205 図）

Ｌ-21 区で検出した。径約 85cm・深さ 25cmの円形の掘り込みを伴い，ほとんどの礫が集中する。礫の大半は掘り込みの上位に位置しており，掘り込みの床面とはレベル差がある。また，礫の検出状況から掘り込み面はより上位であったと考えられる。構成礫は５～８cmほどのものが多く，まばらに 10cm前後の比較的大型のものが含まれる。

関連する遺物は，XX類土器底部の小片が出土した。

289 号集石遺構（第 205 図）

M-21 区で検出した。長軸 90cm・短軸 52cm・深さ 24cmの楕円形の掘り込みを伴う。掘り込みの西端は一段低くなり，その上位にほとんどの礫が集中する。埋土はⅤ層とⅥ層が混ざり，炭化物を含む軟らかい土である。構成礫は５cm程の小型礫がほとんどで，10cmを超えるものは１点のみであった。

関連する遺物は，XVI類土器もしくはXVII類土器と思われる貝殻刺突文を有する土器小片が出土した。

290 号集石遺構（第 206 図）

M-20 区で検出した。径約 80cm・深さ 18cmの円形の掘り込みを伴う。ほとんどの礫は，掘り込みの上位で検出している。構成礫のほとんどは５cmほどの角礫で，大きさがそろっている。掘り込み内の埋土は黄褐色土主体の砂質の強い土で，黄色パミスを含む。炭化物の検出も少量であった。

関連する遺物は確認されていない。

291 号集石遺構（第 206 図）

Ⅰ-21 区で検出した。長軸 70cm・短軸 52cm・深さ 19cmの楕円形の掘り込みを伴う。礫は掘り込みから北西方向に向かって掻き出されたと考えられる。下位から扁平な礫が１点確認された。構成礫は 10cm程の大きさが主体を占め，20cmを超える石皿状の礫や磨・敲石片を転用したと考えられるものが数点含まれていた。その他の自然礫は角礫と円礫が半々で，被熱により赤化や破砕している。掘り込みの床面と礫のまとまりにはレベル差がみられた。掘り込みの埋土は黒褐色土主体で，黄色パミスや微細な炭化物を含む。

関連する遺物は，XV類土器の小片およびXX類土器の小片が掘り込み内外から出土した。土器の詳細な時期は絞り込めなかったが，胎土が複数種みられたため，数個体の胴部が含まれていると考えられる。

292 号集石遺構（第 207 図）

Ｊ-22 区で検出した。径約 70cm・深さ 18cmの円形の掘り込みを伴うが，内部には礫は充填されず掻き出されたような様相を示す。構成礫は５～８cm大のものが主体である。掘り込みの一部は不明瞭であり，掘り下げてしまった部分もあり，推定線を記載した。

関連する遺物としては，215 の底部片が出土した。胴部への立ち上がりとの接合部分で剥離している。内外面とも丁寧なナデ調整である。一部内面に，粘土紐を貼り付けたような微隆起がみられる。底面はやや上げ底になると推定される。特徴から，早期後葉の土器と推定される。

集石部と掘り込みは一体のものとして，この類に含めたが，両者にはレベル差があることから別の遺構である可能性も残る。

293 号集石遺構（第 207・208 図）

Ｋ-21 区で検出した。礫は約 110cmの範囲に広がり，径約 55cm・深さ 16cmの円形の掘り込みを伴う。礫の分布は，集中する部分と東側の散石状に広がる部分とに分かれる。構成礫は５～８cmの大きさが主体であり，被熱により変色している。また，一部破砕したものもある。掘り込みの埋土は黒褐色土が中心であり，被熱により軟らかく脆い部分が認められた。また，黄色パミスが混ざっていた。

集石遺構内および周辺から 216～221，掘り込み内部で 222 が出土した。また，XV類土器の口縁部小片が出土した。216 は口縁部片で緩やかな波状になる。内面はナデ調整であるが，やや凹凸がある。口唇部は平坦面を作出し，貝殻腹縁による刻みがみられる。胴部は斜位や横位の押引状の貝殻条痕文が密に施される。色調は暗く，金雲母を多量に含む砂粒の粗い胎土である。XVI類土器もしくはXVII類土器に比定される。217 は集石遺構内出土の土器片１点と接合した胴部である。残存する部位から，おおよそバケツ形の胴部になると考えられる。器壁は厚めであり，砂粒が目立つ。また，内外面ともナデ調整であるが，器面には凹凸がある。外面は横位の沈線文と貝殻腹縁による相交弧文状の刺突文がそれぞれ帯状に施文される。刺突文の肋は明瞭である。218・219 は集石遺構周辺の包含層から出土し，217 と同一個体と考えられる。XVI類土器もしくはXVII類土器に比定される。220 は集石遺構内出土の土器と包含層出土の土器が接合した資料である。口縁部～胴部片で，頸部で緩くくびれ，口縁部は外反する。口縁部の残存状況から波状口縁になると考えられ，口唇部は平坦面を作出する。内面には段を有し，ケズリ痕を明瞭に残す。外面には３条の幅が狭い突帯がめぐり，貝殻腹縁により刺突文が施される。突帯間は，貝殻腹縁による波状の条痕文が密に施される。包含層出土の 221 と同一個体と思われる。XVII類土器と考えられる。222 は黒曜石（上牛鼻）製の打製石鏃である。上半は欠損しているが，やや丸みを帯びた三角形型になると考えられる。基部は円形の抉りであり，裏面は自然面をそのまま用いている。

294 号集石遺構（第 209 図）

Ｈ-24 区で検出した。長軸 125cm・深さ 27cmの掘り込みにほとんどの礫が集中する。掘り込みの床面は東側に向かって傾斜する。構成礫は５cm大と 10cm大のものがある。掘り込みの東側は，はっきりとプランがとらえられなかった。

集石遺構内から壺形土器と考えられる胴部小片，および打製石斧が出土した。223 はホルンフェルス製の打製石斧である。形状はバチ型であり，扁平な板状剥片素材の周縁部に整形剥離を行っている。左右両端部には抉り状の剥離調整がみられる。また，上・下面には擦痕があり，成形時の調整と考えられる。

295 号集石遺構（第 210 図）

Ｋ-21 区で検出した。長軸 70cm・短軸 58cm・深さ 22cmの楕円形の掘り込みを伴い，礫のほとんどが掘り込み内の北側に位置する。構成礫は５～８cm程が主体であり，10cmを超えるものは数点である。

関連する遺物は，XV類土器の小片が出土した。

296 号集石遺構（第 210 図）

Ｊ-22 区で検出した。長軸 70cm・短軸 57cm・深さ 14cmの楕円形の掘り込みに礫が集中する。構成礫は 10cmを超えるものと５～８cmほどのものが，それぞれまとまった状況であった。礫同士の密度は低く，掘り込みの床面より上位に礫は位置している。

関連する遺物は確認されていない。

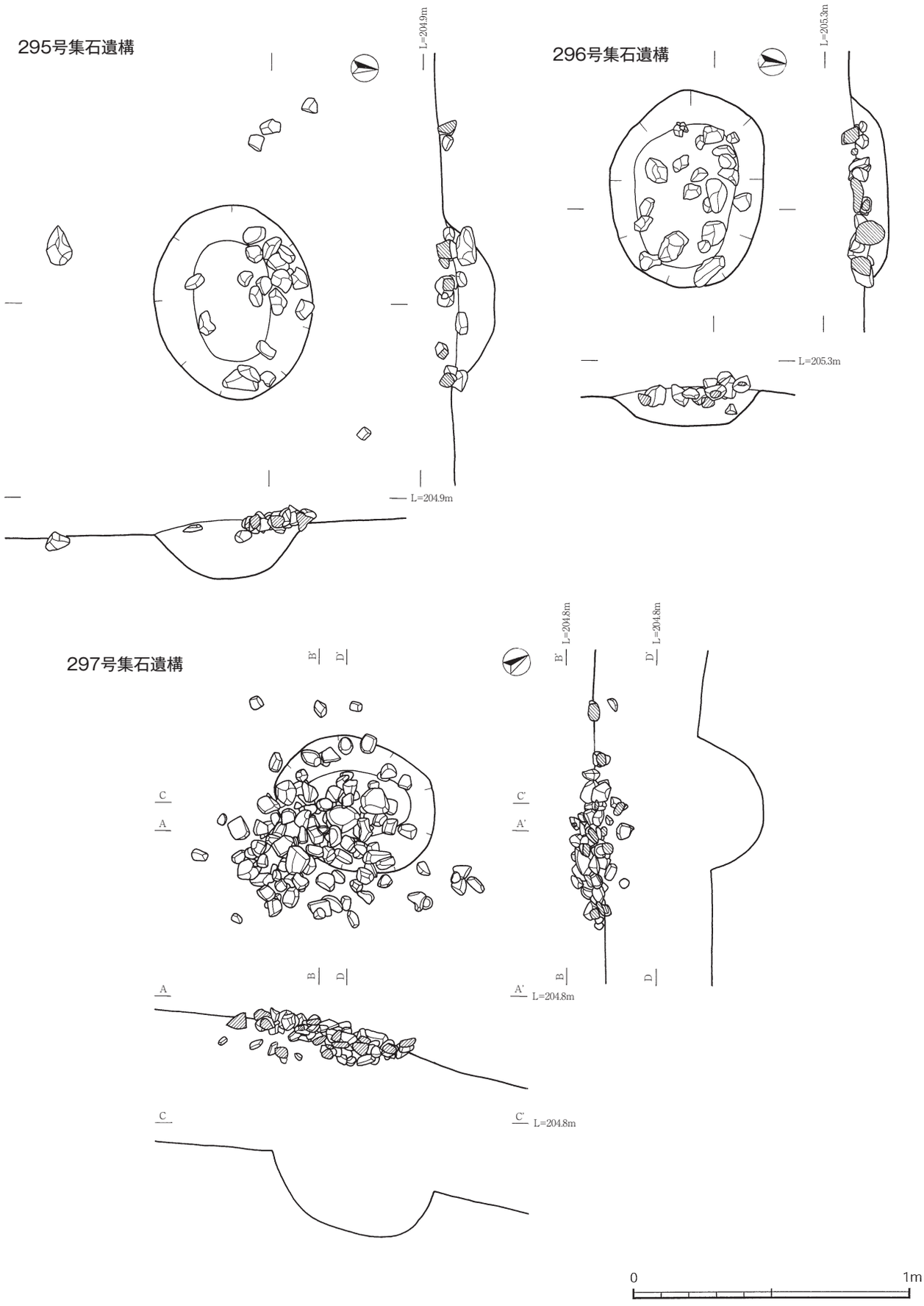
297 号集石遺構（第 210 図）

Ｊ-23 区で検出した。北側の谷へ向かって下る斜面上に位置している。長軸 59cm・短軸 47cm・深さ 24cmの掘り込みを伴う。礫と掘り込みの間にはレベル差がある点や礫の中心と掘り込みの位置がややずれている点を考慮すると，それぞれが形成された時期は若干異なる可能性がある。構成礫は５cm前後のものが多数を占め，10cm程のものが数点含まれる。被熱しているが破砕したものは少なく，ほとんどが自然礫の形状を保っている。埋土は黄褐色土が主体であり，黒褐色土の小ブロックも少し混ざる。炭化物は全体的に土壌と混在していた。

関連する遺物は，XI類土器小片及びチャートのチップが出土した。

298 号集石遺構（第 211 図）

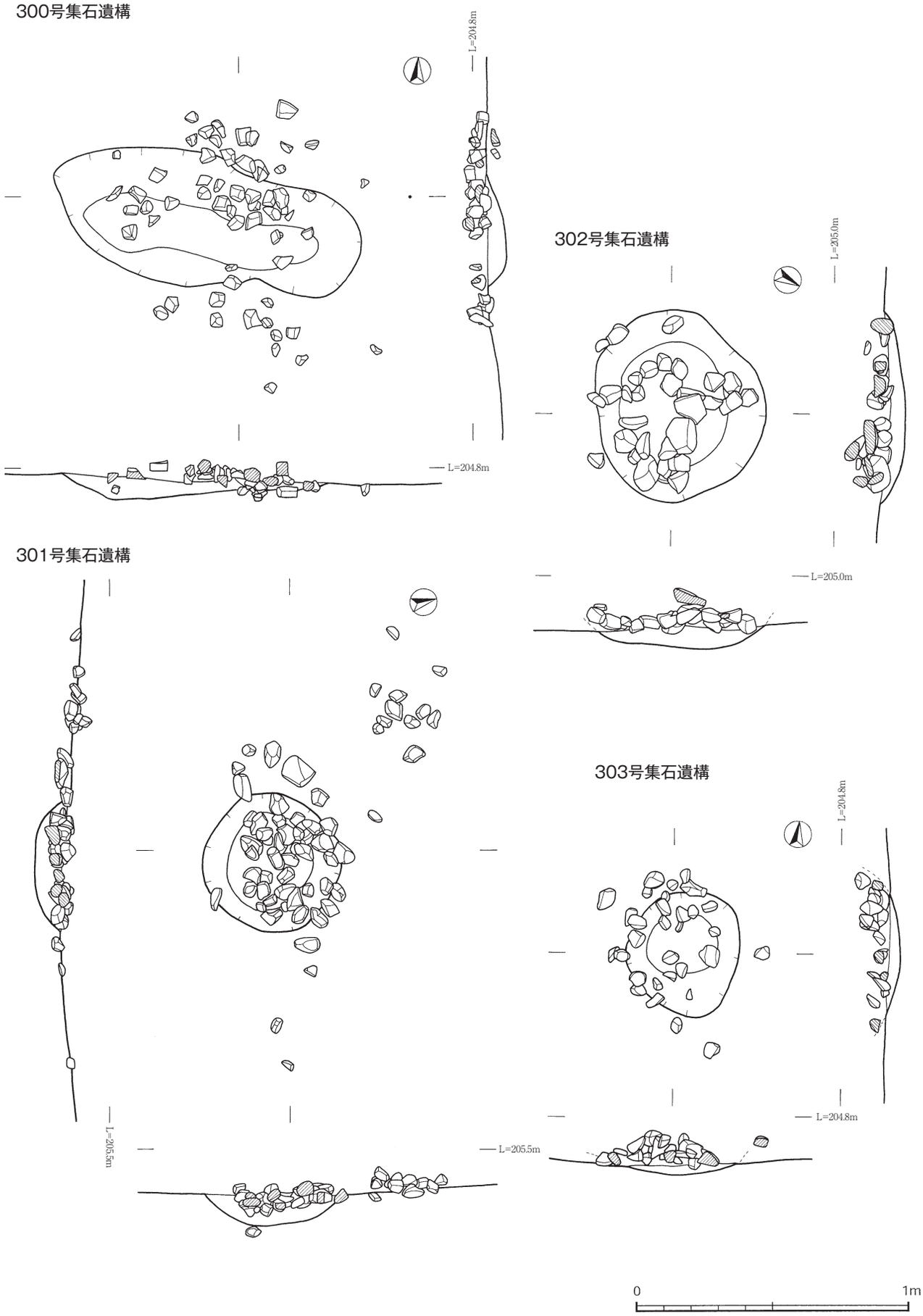
Ｌ-20 区で検出した。長軸 85cm・短軸 65cm・深さ 11cm



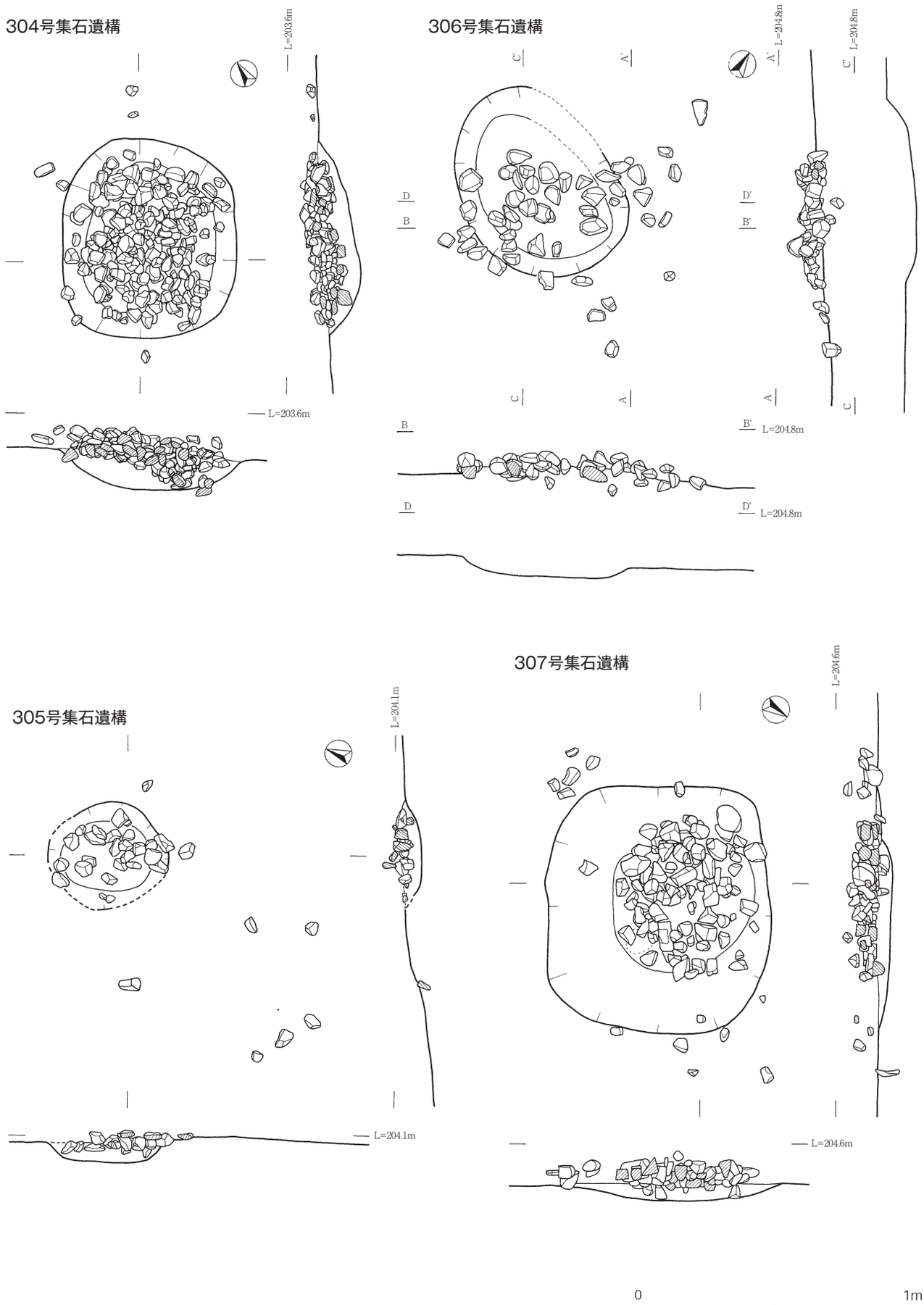
第 210 図　295～297 号集石遺構



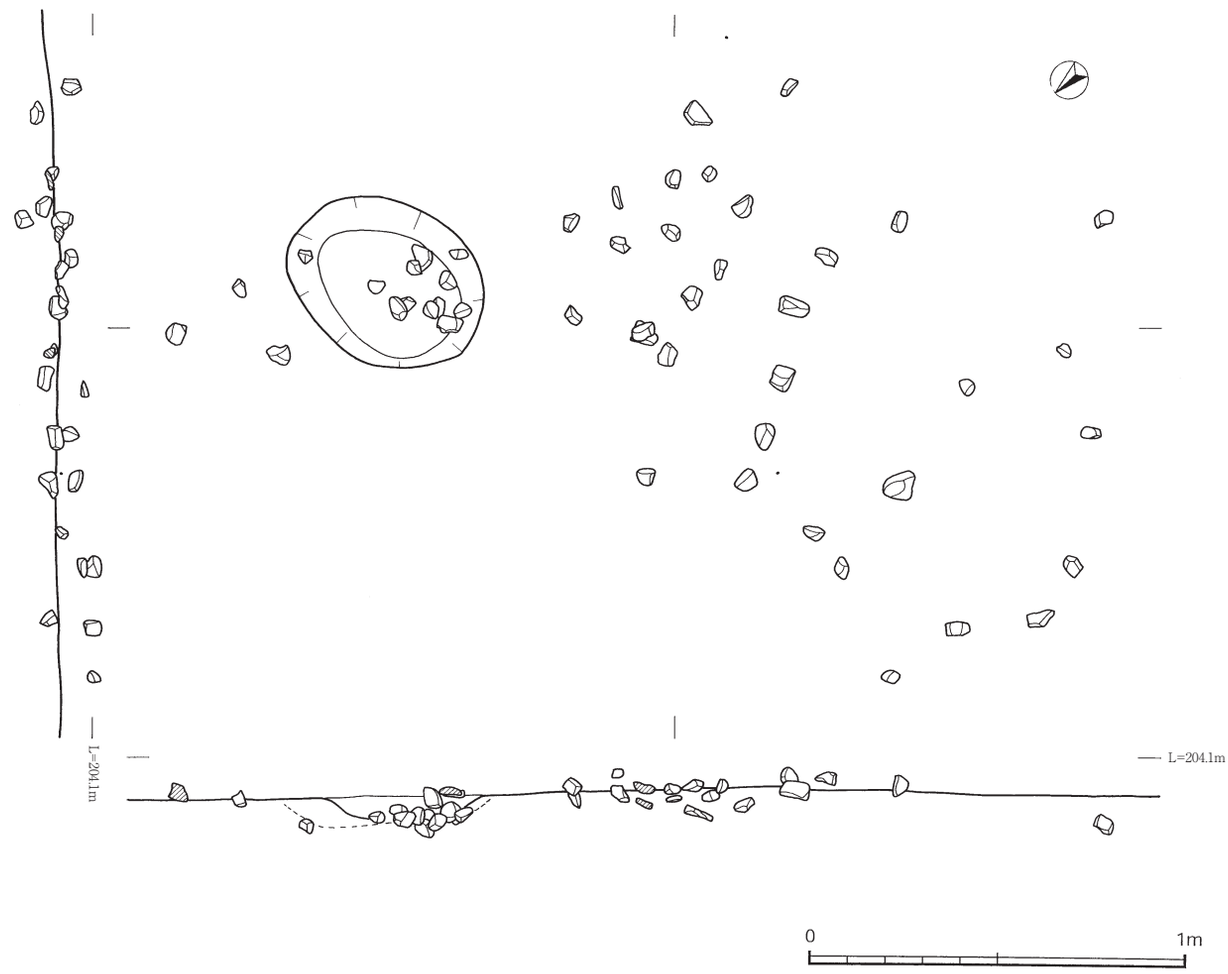
第 211 図　298～299 号集石遺構・出土遺物



第 212 図　300～303 号集石遺構



第 213 図　304～307 号集石遺構



第 214 図　308 号集石遺構

の楕円形の掘り込みを伴い，周辺に礫が広がる。構成礫の多くは５㎝程の小型の角礫であり，被熱により赤化したものは少ない。中心よりも南側に礫が偏っており，礫を掻き出すなどの行為による結果と想定される。

集石遺構内から 224，XIX類土器の口縁部小片，XX類土器の小片，石器では黒曜石（姫島産）のフレイクが出土した。224 は胴部片である。下端がやや厚みが増すため，底部付近と推定され，直線的に立ち上がる器形と考えられる。上半には微隆起突帯が付され，刻みが施される。色調は明るく，胎土には１㎜大の軽石状の粒が含まれる。特徴からXVII類土器に比定される。また，掘り込みに隣接して石皿片が出土し，構成礫として転用されたと考えられる。

埋土中から検出された炭化物の年代測定を行ったところ，5,990 － 5,836cal ＢＣの年代値が得られた。

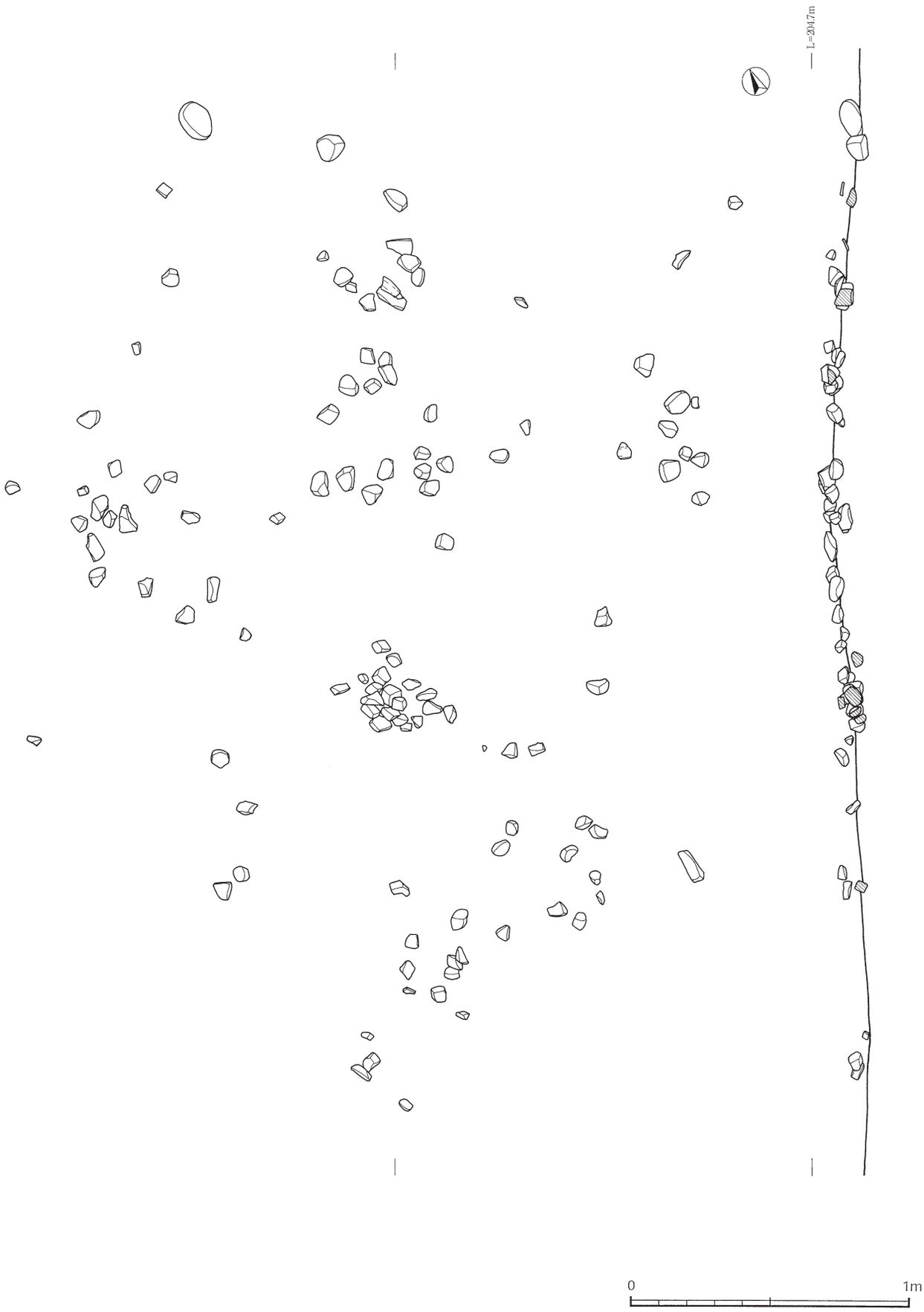
299 号集石遺構（第 211 図）

Ｊ-18 区で検出した。長軸約 180cm・短軸約 160cmの範囲に礫が広がるが，中心部 60cmの範囲に礫が特に集中する。中央部は長軸 29cm・短軸 22cm・深さ 10cm程の浅い掘り込みが伴うが，内部には礫は入っていない。構成礫は５～10cm大のものが主体であり，小型の礫が周囲に散らばっている。ほとんどが安山岩であり，赤化したものも多かった。接合を試みたが，同一個体と断定できるものはなかった。炭化物は少量であった。

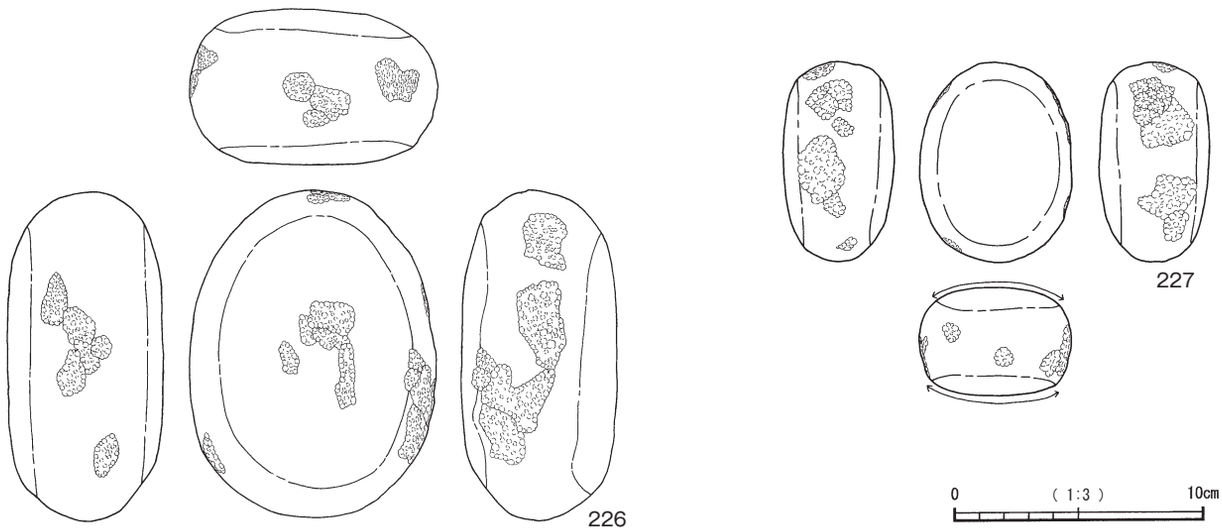
集石遺構内から胴部片の 225 が出土した。色調は特に外面が赤みを帯びており，集石遺構使用よる被熱の可能性もある。胎土には白色の礫を多く含む。外面には細線で横位・斜位の文様が描かれる。文様や器壁の厚さなどからXVI類土器もしくはXVII類土器と考えられる。また，条痕文を施した胴部片も出土している。その他に黒曜石・チャートのチップ，黒曜石（針尾産）のフレイクが出土した。

300 号集石遺構（第 212 図）

K-19 区で検出した。礫は長軸 116cm・短軸 50cm・深さ８cmの長楕円形の掘り込みの上面に集中する。構成礫は５～８㎝程の小型角礫が多く，掘り込みの外にも広が



第 215 図　309 号集石遺構



第 216 図　309 号集石遺構出土遺物

る。掘り込みの埋土は黒褐色土で粘性やしまりのあるⅥ層に近い土で，明黄褐色の微小なパミスを含む。

関連する遺物は，黒曜石のチップ，磨石と石皿の破片が出土した。磨石･石皿は構成礫として転用されている。

埋土中から検出された炭化物の年代測定を行ったところ，5,822 － 5,729cal ＢＣの年代値が得られた。

301 号集石遺構（第 212 図）

Ｊ-22 区で検出した。径約 50 m・深さ８cmの円形の掘り込みを伴い，その内部で８割ほどの礫が検出された。また，掘り込みの外側も含めて東西方向へ長軸 160cm程の範囲に礫が散在するが，同一の集石遺構の礫が散在したものと判断した。礫が掘り込みから掻き出された可能性もあるが，掘り込みの床面と礫のまとまりにはレベル差がある。構成礫は５～８cm程の大きさが主体を占めるが，数点 10cmを超える大型礫も含まれる。被熱により表面が変色しているが，破砕したものは少ない。掘り込みの埋土は黒褐色土で砂質が強く，黄色パミスを多く含み，炭化物が少量混ざる。

関連する遺物は確認されていない。

302 号集石遺構（第 212 図）

Ⅰ-20 区で検出した。長軸 70cm・短軸 62cm・深さ８cmの不整円形の掘り込みを伴う。構成礫は 10cm程のものが多いが，中には 15cmを超えるものがあるなど全体的に大型で自然面を多く残す被熱破砕礫であった。安山岩が多く，１点のみ軽石であった。ほとんどが掘り込みの上位にまとまっており，あまり密集しない。掘り込みの床面とはレベル差がある。掘り込みの埋土は単一の黒褐色土でしまりは良いが，粘性があまりない。黄色パミスや微量の炭化物を含んでいた。

関連する遺物は確認されていない。

303 号集石遺構（第 212 図）

Ｊ-19 区で検出した。長軸 50cm・短軸 42cm・深さ４cmの円形の浅い掘り込みを伴い，その内部とやや外側まで礫が広がる。検出面ではとらえられなかったが，礫の堆積状況と掘り込みの床面の状況から掘り込み面はより上位であったと想定される。掘り込みの床面と礫の中心には若干レベル差がある。構成礫は 10cm未満の被熱破砕礫である。

関連する遺物は，中心近くからⅥ類土器と思われる貝殻刺突文を有する土器小片が１点出土した。

304 号集石遺構（第 213 図）

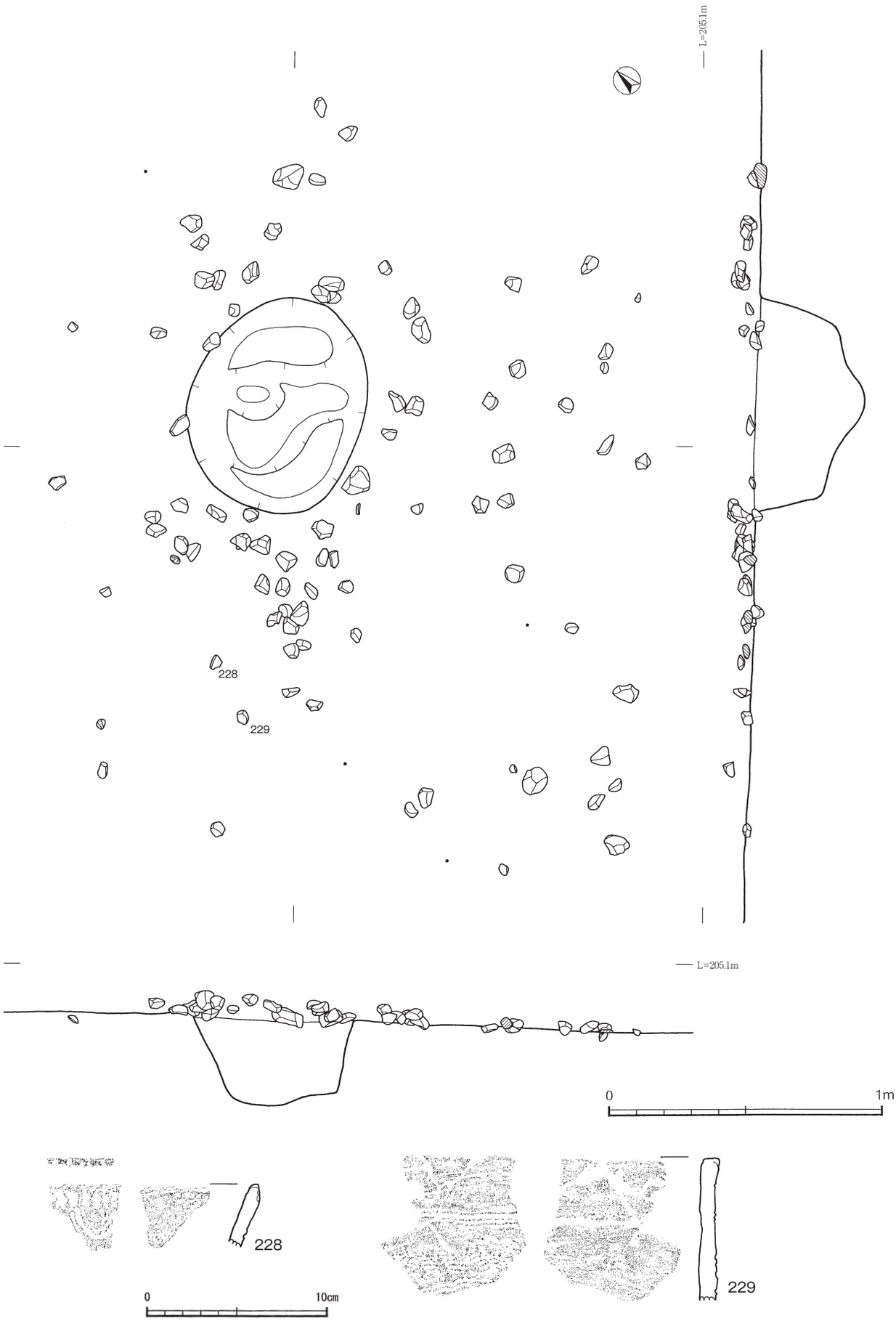
M-18 区で検出した。東側から西側へかけて緩やかに傾斜する位置にある。径約 70cm・深さ 13cmの円形に近い掘り込みにほとんどの礫が集中する。埋土はⅥ層が主体の茶褐色の砂質土で，やや大粒の黄色パミスや白色パミスの細粒が含まれ，黒色土の小ブロックや炭化物が全体に混在する。構成礫は５cm程の小型の礫が多い。掘り込みの底面近くのものは，被熱により赤化したものがわずかに見られ，崩れるほど脆くなっていた。

関連する遺物は，型式不明の条痕文を有する土器片が出土した。

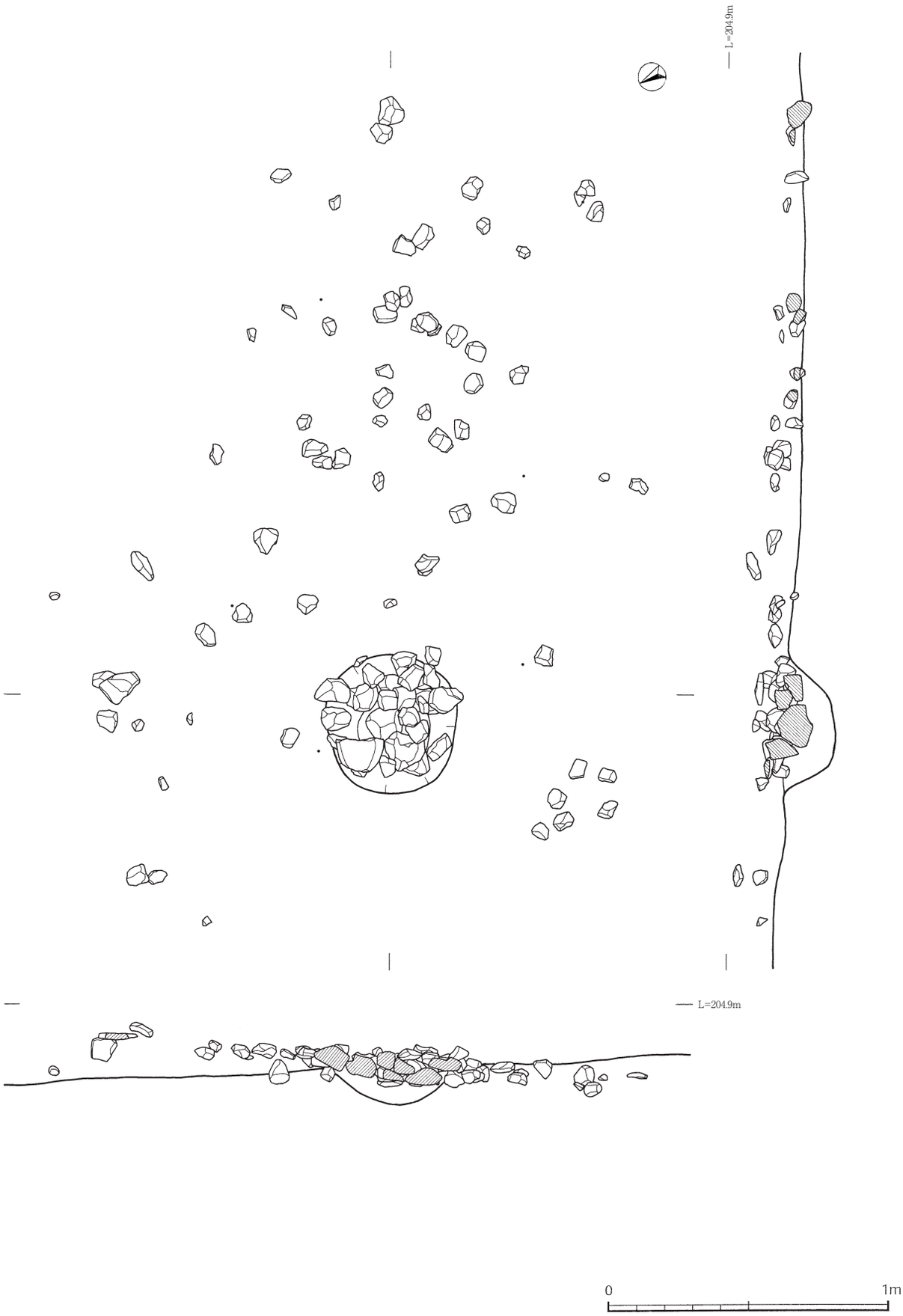
埋土中から検出された炭化物の年代測定を行ったところ，6,212 － 6,029cal ＢＣの年代値が得られた。

305 号集石遺構（第 213 図）

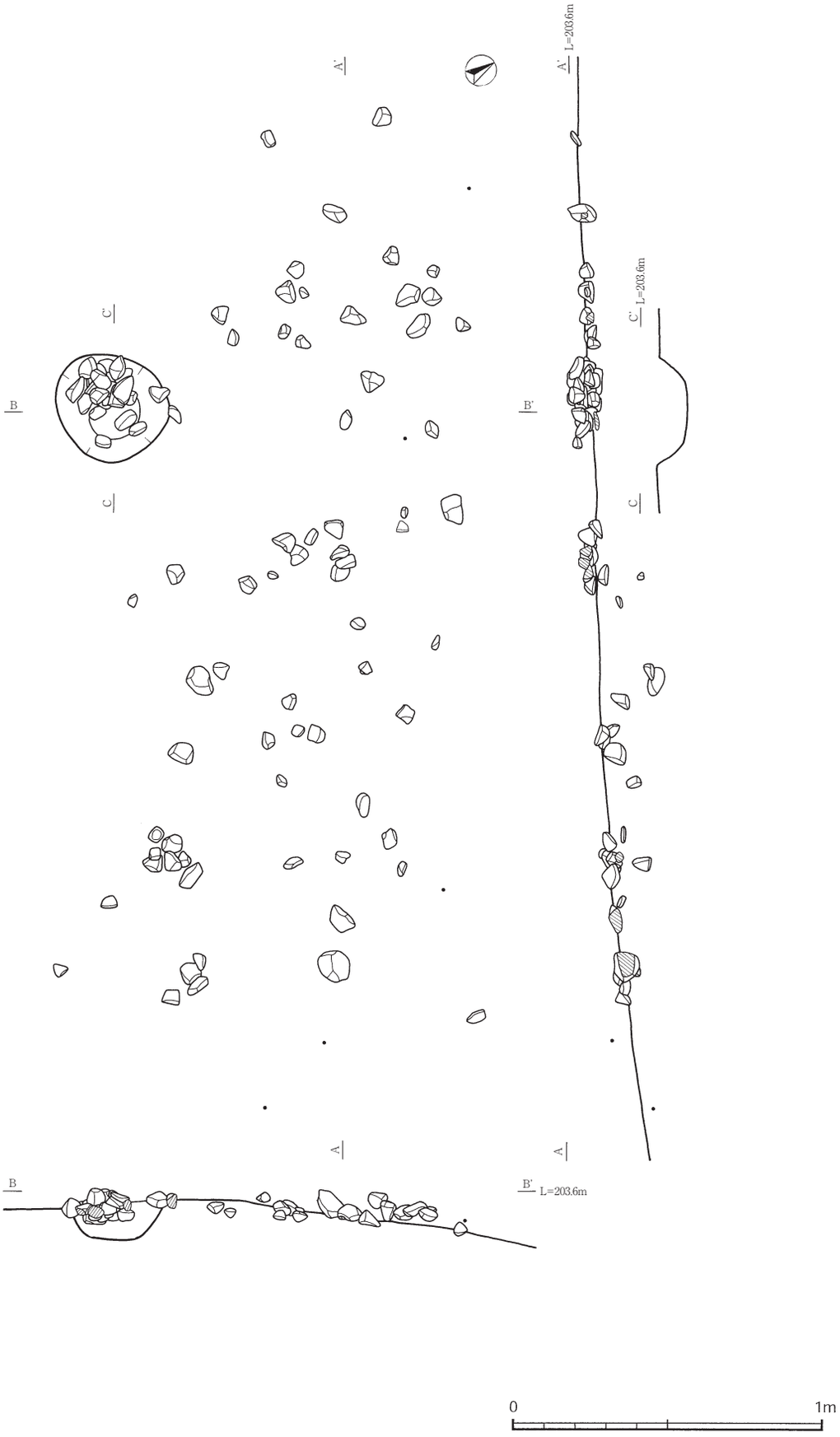
M-19 区のⅥ層上位で検出した。径約 40cm程度・深さ８cmの浅い皿状の掘り込みを伴うが，部分的にプランが不明確であった。掘り込み内にほとんどの礫がまとまっており，南側に礫が散乱する。礫の検出状況からも，掘り込み面のレベルはもっと高かったと想定される。構成礫は５～８cm程の小ぶりの角礫を主体とする。埋土は下



第 217 図　310 号集石遺構・出土遺物



第 218 図　311 号集石遺構



第 219 図　312 号集石遺構



第 220 図　313 号集石遺構

位に暗褐色土，上位に黄色パミスを含む軟らかい褐色砂質土で炭化物を少量含む。

関連する遺物は，XX類土器の小片と頁岩のフレイクが１点出土した。

306 号集石遺構（第 213 図）

Ｊ-23 区で検出した。長軸約 100cm・短軸約 80cmの範囲に礫が集中する。礫の集中部の中心とは若干ずれた位置に浅い掘り込みを伴う。掘り込みは長軸 75cm・短軸 55cm・深さ６cmほどの楕円形であり，黄褐色土を主体とする埋土であった。掘り込みのプランは，一部不明確であった。礫が掘り込みの東側に散石状に広がる。構成礫は 10cm大の角礫がほとんどであり，被熱しているが破砕したものはほとんどなかった。炭化物は少量検出された。

構成礫の中には，磨石片と思われるものが転用されていた。そのほかの関連する遺物では，XX類土器の小片が出土した。

307 号集石遺構（第 213 図）

Ｊ・Ｋ-20 区で検出した。長軸 90cm・短軸 80cm・深さ７cmの隅丸方形の掘り込みを伴い，ほとんどの礫が掘り込みのやや上位で検出された。構成礫は５～７cm大の大きさのものが主体であり，一部 10cm程のものがまばらに含まれる。角礫がほとんどで多くの礫は原型を保っていたが，４・５点ほど被熱により赤化し，脆いものがあった。掘り込みの埋土は，黒褐色土でしまりと若干の粘質がある。明黄褐色の小パミスを多く含み，全体としてⅥ層に近く，灰白色の極小粒を含んでいる。

掘り込みの外側付近から黒曜石（姫島産）・チャート・安山岩のチップが出土した。また，構成礫として転用されたと考えられる磨石片が１点出土した。

埋土中から検出した炭化物２点で年代測定を実施したところ，7,797 － 7,489cal ＢＰの値が得られた。

【Ⅳ　類】

本類は，Ⅰ～Ⅲ類に該当しない一群である。

308 号集石遺構（第 214 図）

M-19 区で検出した。検出面はⅥ層中位から下位にかけてである。長軸 250cm・短軸 170cmの範囲に礫が散在する。構成礫の大半は５～８cmの小型礫であり，10cm程度のものもわずかに混ざる。１点は軽石であった。礫がやや集中する部分があり，長軸 54cm・短軸 43cm・深さ７cmの浅い皿状の掘り込みが伴う。礫は被熱しており，中

には変色し破砕した礫もみられた。

関連する遺物は，XX類土器の小片，チャートのフレイクおよびチップが出土した。

309 号集石遺構（第 215・216 図）

Ⅰ-16 区で検出した。長軸約 360cm，短軸約 250cmの広範囲に礫が散在するが，比較的密度が高い部分が数か所みられ，本来は複数の集石遺構であった可能性も考えられる。構成礫は５～８cm大が中心であり，周縁部にやや大型の礫が点在する。

関連する遺物はXX類土器の小片が数点，および磨・敲石が構成礫として転用されていた。226 は凝灰岩製の磨・敲石である。上・右・左側面および表面に敲打痕がみられるが，帯状ではなくまばらである。比較的大型の磨・敲石であり，1,259 ｇと重量がある。227 は凝灰岩製の磨・敲石である。下・右・左側面に敲打痕が観察でき，特に左右側面の密度が高い。上下面は磨面であり，表面は平滑である。やや色調が赤みを帯びており，集石遺構の構成礫として転用されたことで被熱したものと考えられる。また，全体的にススが沈着している。226・227 とも遺構内出土の一括資料である。

310 号集石遺構（第 217 図）

K-21・22 区で検出した。長軸約 290cm・短軸約 220cmの範囲に礫は広がるが，中央に長軸 79cm・短軸 63cm・深さ 40cmの掘り込みを検出した。掘り込み内には礫は入っておらず，周辺に散在する礫が本来掘り込み内に位置していたかは不明である。構成礫は５～８cm大のものがほとんどであり，10cm大のものが数点含まれる。１点は軽石であった。

関連する遺物として 228・229，XV類土器およびXX類土器の小片，黒曜石・チャート・安山岩のチップが出土した。228 は口縁部片である。口唇部にはわずかに平坦面を持ち，貝殻腹縁による刻みが施される。外面には貝殻腹縁による刺突文が１段巡り，「U」字形に条痕文が施文される。XV類土器もしくはXVI類土器と考えられる。229 は口縁部片で，集石遺構内と包含層出土の土器が接合した。口縁部はほぼ直口する。口唇部には平坦面を有し，外面にわずかに粘土が盛り上がる。全体的に表面の色調が明るく，器体は黒色でコントラストが明白である。文様は浅いが，数条の横位の条痕文の下に押引状の貝殻刺突文がめぐる。XVI類土器もしくはXVII類土器に比定される。

311 号集石遺構（第 218 図）

K-22 区で検出した。礫の広がる範囲は長軸約 300cm・短軸約 210cmを測るが，径約 50cm・深さ 18cmの掘り込みを伴い，その内部に礫が集中する。構成礫は 10cm大のものが主体であり，20cmを超える大型のものが掘り込みに集中する。掘り込みの床面と礫の集中部とにはレベル差がある。また，礫の検出状況から本来の検出面および掘り込み面はより上位であったと考えられる。

関連する遺物は，XX類土器の小片，磨石片が出土した。

312 号集石遺構（第 219 図）

M・N-20 区で検出した。長軸約 300cm・短軸約 130cmの範囲に礫が広がる。南側には，径 35cm・深さ 12cmの楕円形を呈する掘り込みが確認できた。礫は掘り込みから周囲へとやや傾斜しながら広がっている。掘り込みの規模に対して礫数が多い印象である。構成礫は５～８cmほどが大半であり，少量 10cm大のものが含まれる。

関連する遺物は，土器小片，安山岩・チャート・頁岩のフレイクが出土した。

313 号集石（第 220 図）

K-14・15 区で検出した。約 50cm程の範囲に礫が広がり，密集部には長軸 48cm・短軸 35cm・深さ 22cmの楕円形に近い掘り込みを伴う。10cm大の礫が主体をなし，南側に掻き出されたような状況で礫が広がる。掘り込み内の礫の密度は高く，床面まで充填されている。掘り込み内外には，炭化物は確認できなかった。

関連する遺物は確認されていない。

６　埋設遺構（第 221～225 図）

縄文時代早期に該当する埋設遺構は，３基検出された。内訳は土器埋設遺構が２基，石器埋設遺構が１基である。土器埋設遺構のうち，１基は入れ子状を呈していた。土器埋設遺構はいずれもXII類土器の時期である。石器埋設遺構についての詳細な時期は不明である。

（１）　土器埋設遺構

１号土器埋設遺構（第 222 図　230）

H-20 区，VI層で検出した。長軸 65cm・短軸 56cm・深さ 20.5cmの楕円形の土坑内で，土器が横倒しで割れた状態で出土した。土坑の床面はレンズ状になっており，立ち上がりは垂直に近い。土坑の床面よりも若干浮いた状態で検出された。

土坑の埋土は，黒褐色の砂質土で黄褐色や灰白色の１mm大のパミスを含む。また，若干の粘性がある。

土坑内から出土した 230 は完形品である。口縁部は胴部から大きく外反し，胴部に屈曲・最大径をもち，また，胴部は丸みを帯びながらすぼまる。口径・胴径に対し，底径が非常に小さい。底部は上げ底である。内面の底部付近は，指おさえ痕が残るなど凹凸がある。口唇部は平坦面を作出し，山形押型文が施される。胴部の屈曲部より上位は山形押型文が施文されるが，胴部以下はナデ調整により無文である。また，屈曲部には粘土の接合痕が明瞭にみられる。さらに補修孔が対で残存しており，紐ズレ痕も確認できる。胎土には大粒の金雲母が目立つ。全体的に器壁が薄く，調整も丁寧である。これらの特徴からXII類土器に比定される。

土器片はやや西側に偏っており，土器の大きさに合わ

せて土坑を掘り込むのではなく，土器の大きさよりもかなり広く土坑を掘り，その中に土器を埋設したと考えられる。

２号土器埋設遺構（第 223・224 図　231・232）

H-19 区，Ⅶ層上面で検出した。２個体の土器が入れ子状になって出土した。埋土は周辺の包含層との差がみられず，掘り込みも確認できなかった。

231 は内側の個体である。口縁部は欠損しているが，壺形の器形となる可能性がある。胴部に最大径を有し，胴部が張り出して丸く膨らんだ器形である。底部は若干の上げ底であるが，ドーム状にはならない。出土した段階では非常に脆く，薬剤で強化して取り上げた。外面には全面に山形押型文が施文されるが，形状が明瞭であるのは一部であり，ナデ調整により消されている部分もかなり多い。内面調整は指頭押圧による凹凸が明瞭であり，成形時の技法を観察できる。以上の特徴からⅫ類土器に比定される。また，胴部には帯状に巡るスス痕がみられる。

232 は外側の個体である。完形品で，残存率は８割ほどである。口縁部は大きく外反し，屈曲部から緩やかに膨らみながら底部にすぼまる。底部は明瞭な上げ底である。口唇部は平坦面を作出しているが，施文はみられない。内面の屈曲部周辺及び胴部下半は指頭押圧が明瞭であり，凹凸がある。外面は山形押型文が連続して施文されるが，不明確である。胴部の屈曲部下に一部帯状に山形押型文が確認できるが，それより下位はナデ調整により無文である。内面に使用痕と考えられる黒斑が残存しており，水玉状をなす特徴的な色調である。煮沸した内容物に関連する可能性がある。器壁は薄く，調整も丁寧である。Ⅻ類土器に比定される。

入れ子状に出土した２個の土器は同一型式の範疇であり，文様も施文の不鮮明さは類似しているが，器形や脆弱さなどが異なる。

（２）　石器埋設遺構（第 225 図　233～235）

D-20 区，Ⅶ層で検出した。径 33㎝・深さ８㎝の浅い円形の土坑を伴い，その内部から礫石器がまとまって出土した。掘り込みの床面を中心に石器が集中し，本遺構の上位や周辺には一般礫が点在する。本遺跡から検出された集石遺構では磨・敲石類の破片を構成礫として転用する例が確認されているが，本遺構の場合は完形率が高い石器がまとまって用いられている点や，他の集石遺構では出土していない打製石斧がみられる点から埋設遺構と判断した。ただし，一般礫も出土していることを考慮すれば，本遺構は集石遺構の床面部分であり，本来は上位に礫が伴っていた可能性もある。

土坑の埋土は，Ⅶ層を主体とする黄・白色パミスの細粒を含む軟らかい黒色土である。検出面はⅥ層であるが，検出状況から，より上位から掘り込まれていた可能性も考えられる。

磨・敲石が３点，石皿片と思われるものが２点，打製石斧片と思われるものが１点出土しており，残存状況の良い３点を図化した。233 は凝灰岩製の磨・敲石である。欠損部も多いが，全側面および表面に敲打痕がみられる。比較的小型である。234 は砂岩製の磨・敲石である。形状がほぼ正円に近い扁平な礫を素材とする。下面が剥離により欠損している。左側面に弱い敲打痕が観察でき，周辺は風化している。上・下面は磨面であり，表面は平滑である。235 は凝灰岩製の磨石である。表面はひび割れ，下面の表面は全体的に剥落している。上面には複数方向の擦痕が確認できる。表面にはススが沈着しており，礫の状態からも被熱の影響が考えられる。いずれも使用による表面の剥離があり，打製石斧は基部が折れている。使用痕が明瞭である点から，石器の使用後に廃棄されたと考えられる。

７　遺構内出土土器接合状況

整理作業において包含層出土の土器同士の接合作業だけでなく，遺構内出土土器と包含層出土土器の接合作業も並行して実施した。その接合状況については，第 226 図から第 245 図に示した。なお，遺構内出土の土器と接合はしない包含層出土の土器も同一個体と判断したものについては併せて示した。

遺構内出土の土器と包含層出土の土器が接合する事例がほとんどであるが，異なる遺構から出土した土器同士が接合，もしくは同一個体と考えられる事例が３例あった。

竪穴住居状遺構

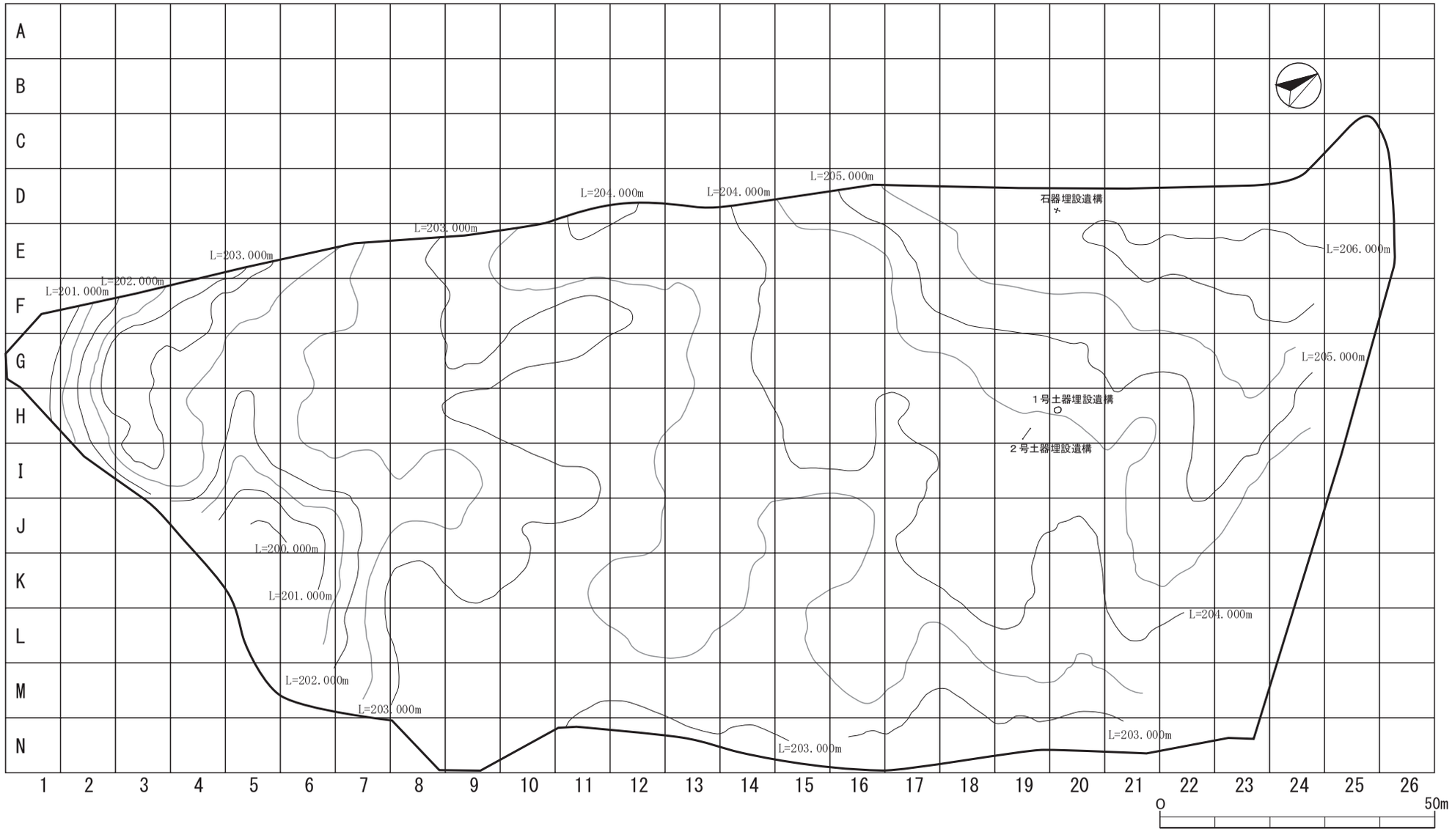
９基検出された中で１号及び４号竪穴住居状遺構から出土した土器が，包含層出土の土器と接合した。１号竪穴住居状遺構からはⅢ類土器が出土し，包含層出土の土器と接合した。４号竪穴住居状遺構から出土し，包含層出土のものと接合したのはⅤ類土器であった。

連穴土坑

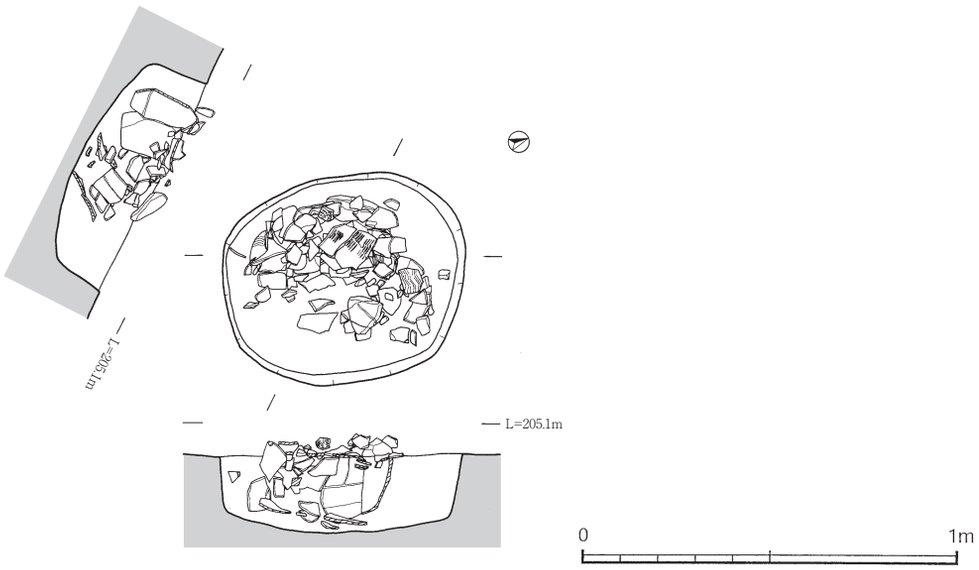
32 基の中で５基の連穴土坑から出土した土器が，包含層出土の土器と接合した。また，３号連穴土坑と３号土坑から出土した土器は接合しなかったが，同一個体と考えられる。接合した土器は，Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・XX類土器であった。

落とし穴

５基の中で１号落とし穴だけが包含層出土の土器と接合した。包含層出土の土器は，１号落とし穴に隣接した場所，10ｍ程離れた場所，20ｍ以上離れた場所の３か所でブロック状に出土した。接合した土器はⅡ類土器であった。



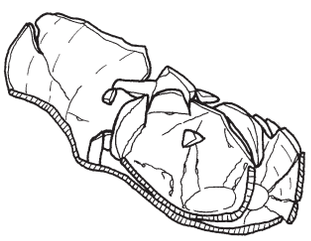
第 221 図　埋設遺構配置図

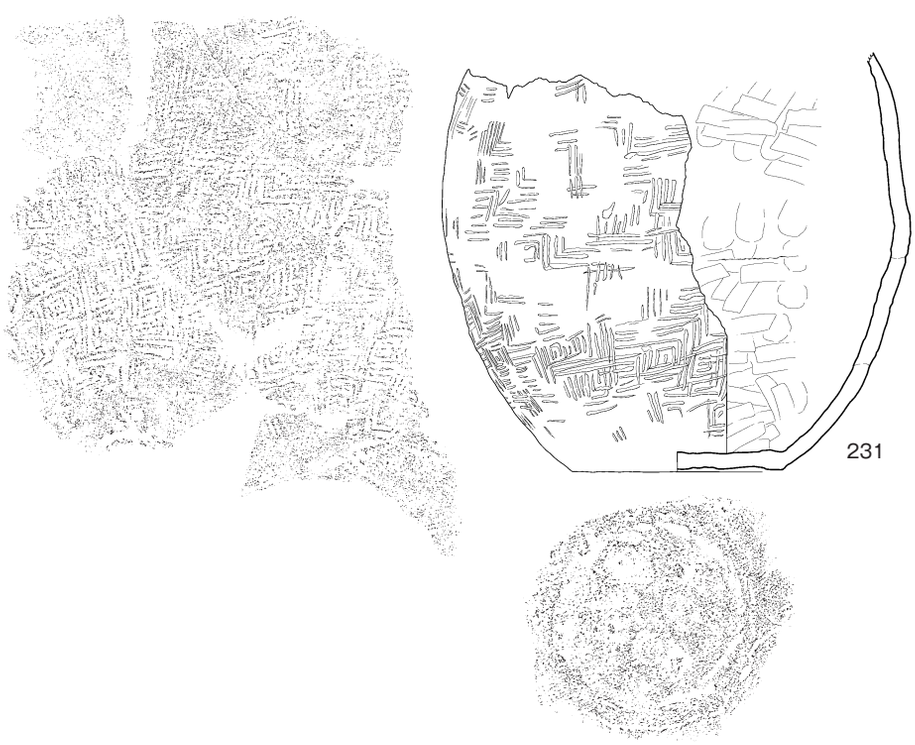




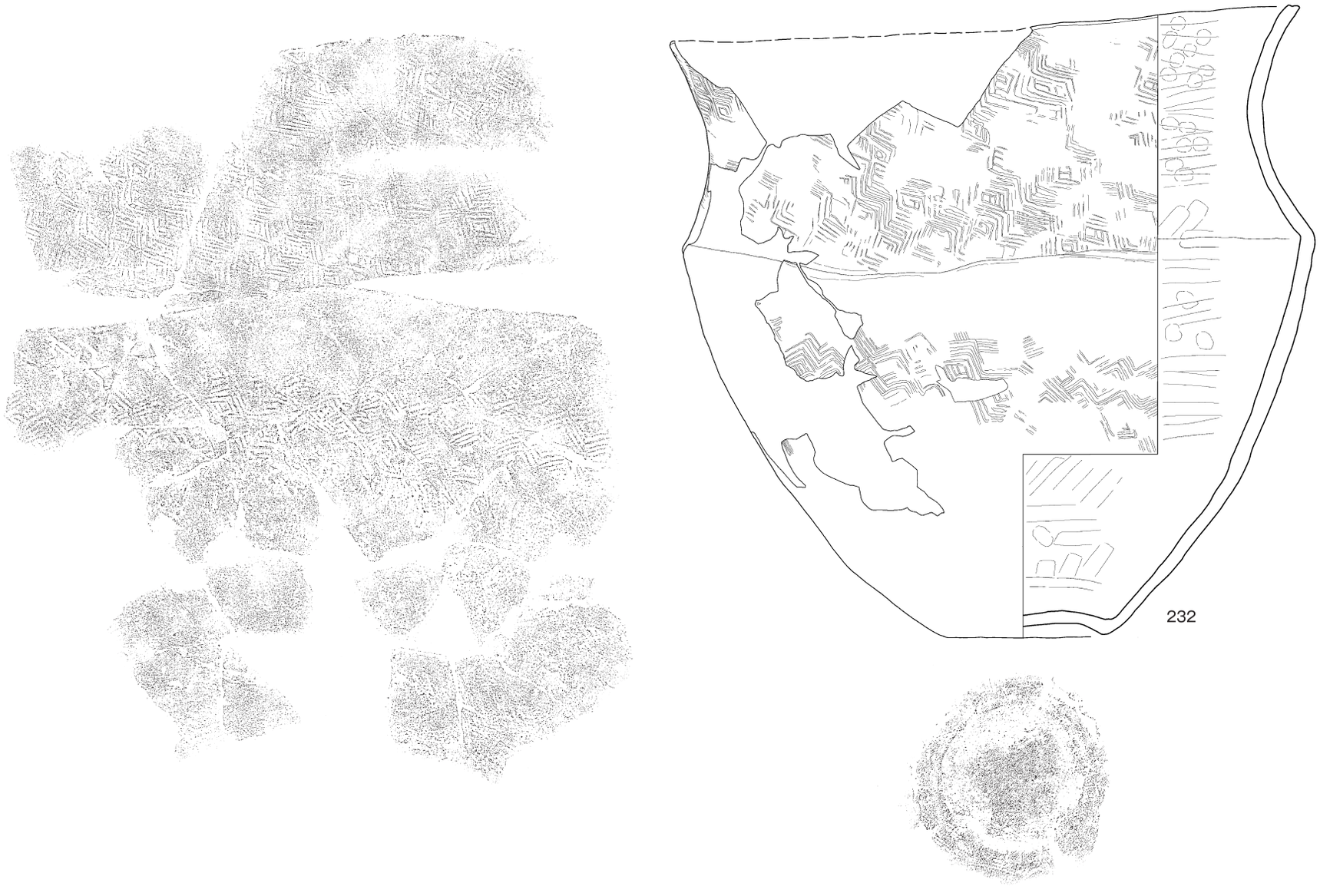
第 222 図　1 号土器埋設遺構・出土遺物



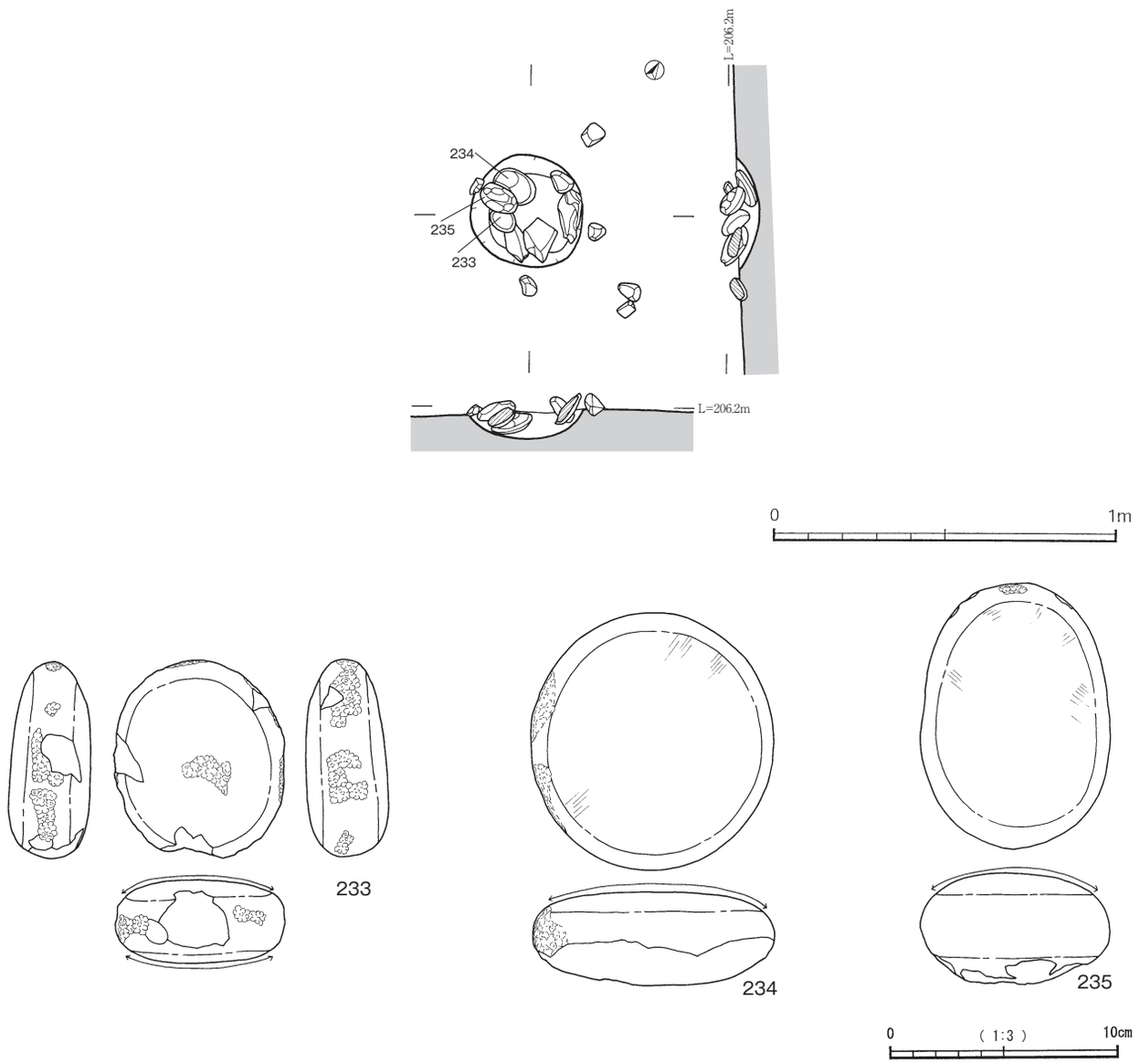




第 223 図　２号土器埋設遺構・出土遺物



第 224 図　２号土器埋設遺構出土遺物



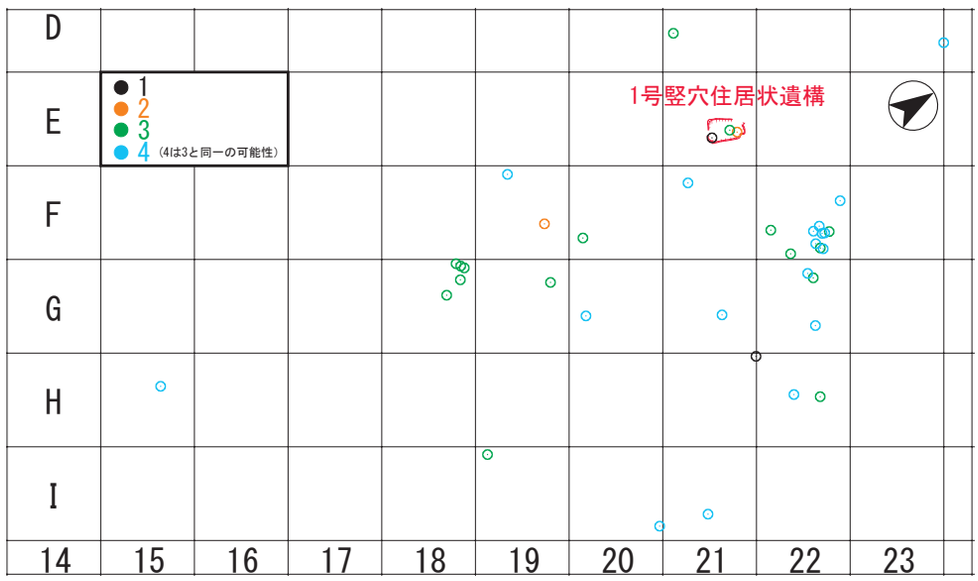
第 225 図　石器埋設遺構・出土遺物

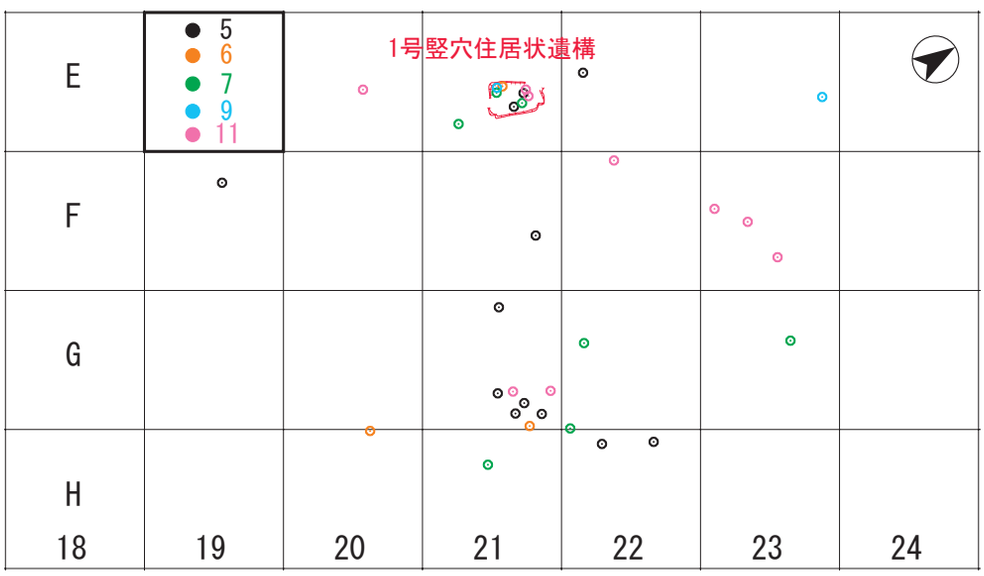
土坑

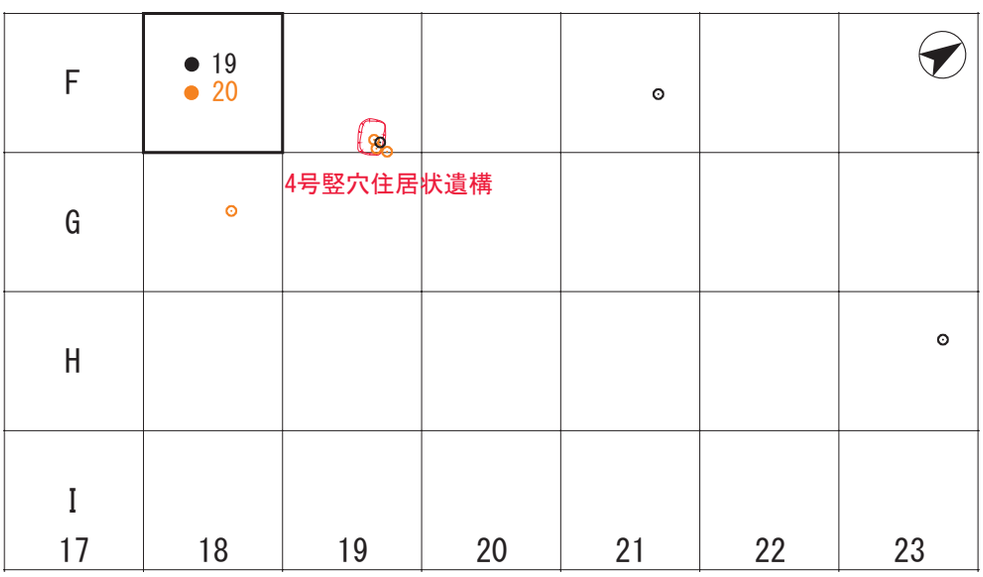
124 基検出した中で 5 基の土坑で包含層出土の土器と接合し，異なる遺構で出土した土器が接合した事例もあった。87 号土坑と 193 集石遺構出土の土器が接合し，接合しなかったが同一個体と考えられる土器が包含層から出土した。接合した土器は，Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅷ・Ⅸ類土器であった。

集石遺構

検出した 313 基のうち，48 基で包含層出土の土器と接合した。接合した土器はⅩⅣ類土器が 15 個体と多く，ⅩⅥもしくはⅩⅦ類と分類された土器が 10 個体と続く。Ⅶ層検出の集石遺構とⅥ層検出の集石遺構でもⅩⅣ類土器が接合した例が多い。また，Ⅶ層検出の集石遺構と包含層出土の土器が接合したものはⅩⅣ類土器以前が多い傾向にあり，Ⅵ層検出の集石遺構と包含層出土の土器が接合したものはⅩⅣ類土器以降が多い傾向にある。さらに，異なる集石遺構出土の土器が接合したものが 1 例あった。136 号集石遺構と 143 号集石遺構出土の土器が接合し，包含層出土の土器とも接合した。また，293 号集石遺構から出土した土器と包含層出土の土器が接合したが，その距離は 100 ｍを超えていた。



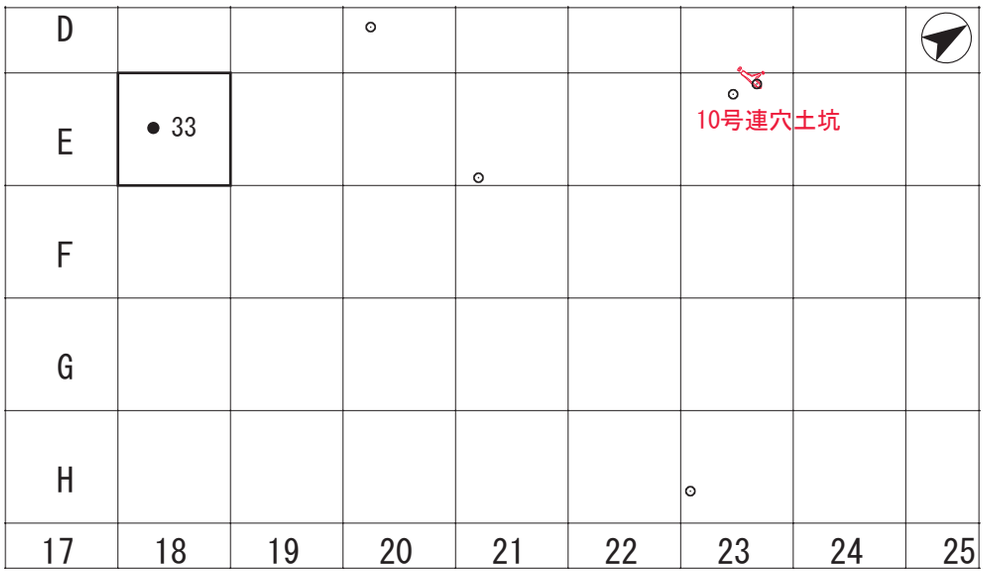


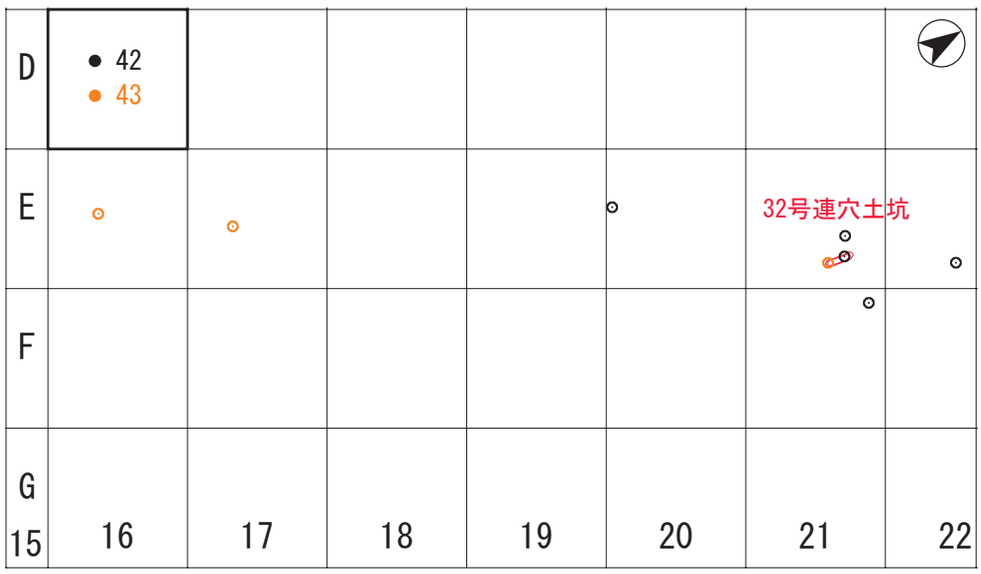


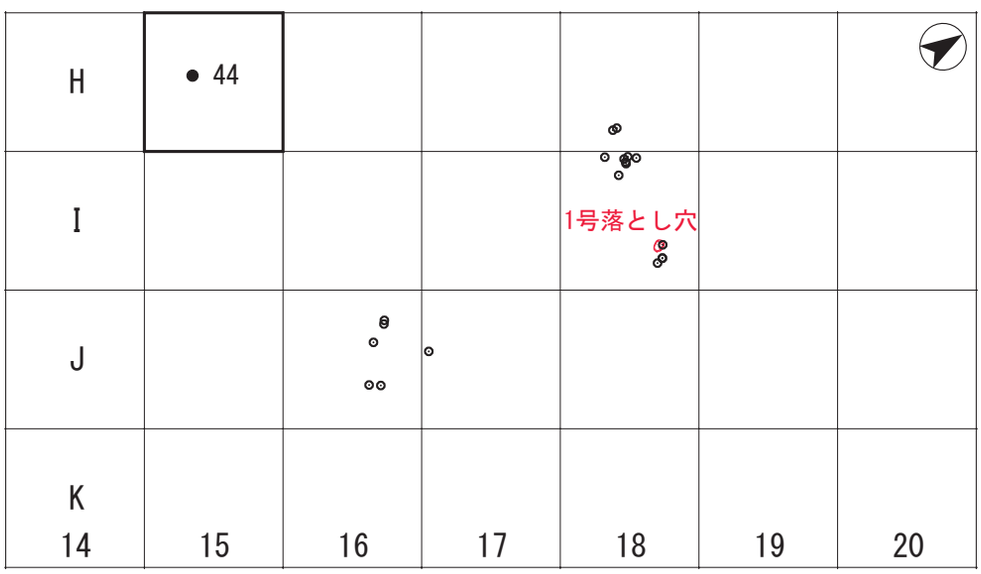
第 226 図　遺構内出土土器接合状況（１）



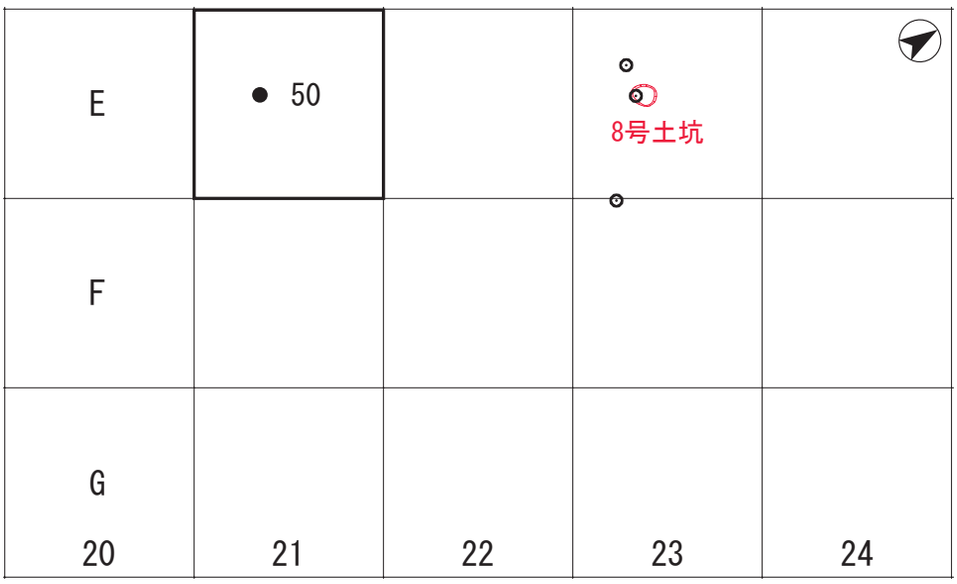
第 227 図　遺構内出土土器接合状況（2）

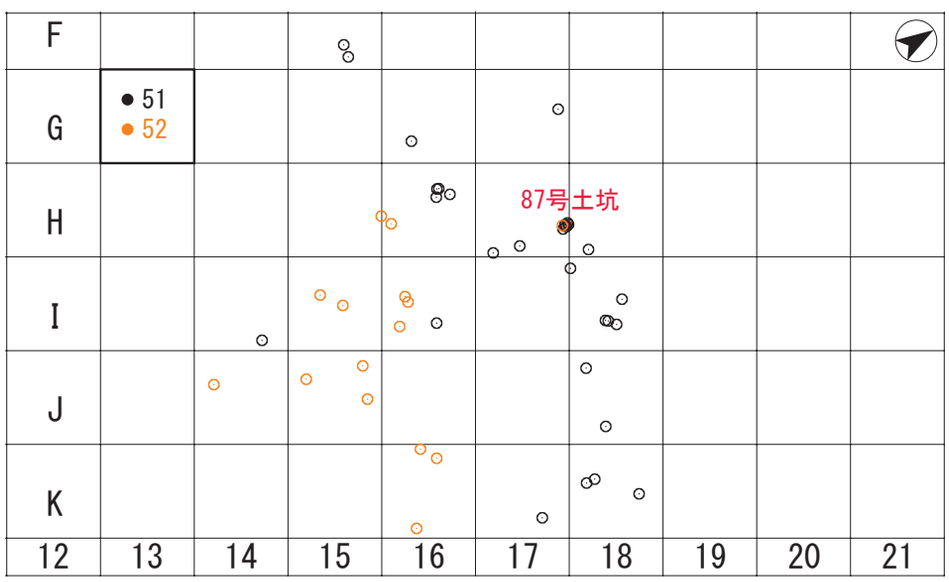


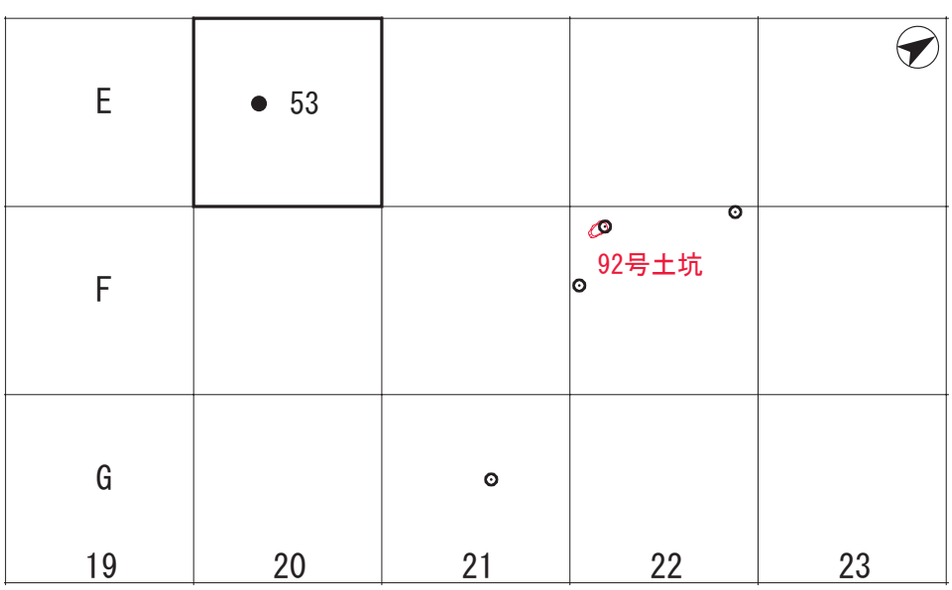




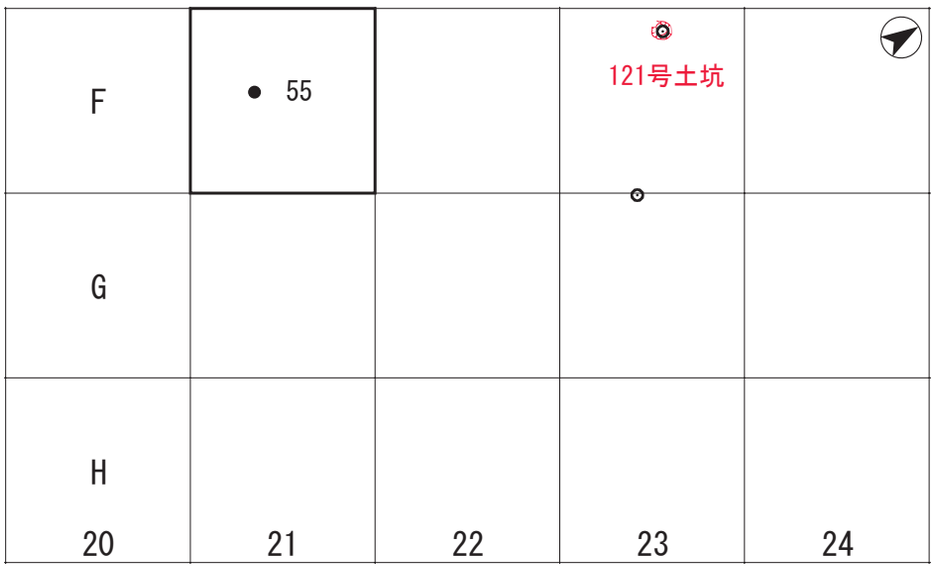
第 228 図　遺構内出土土器接合状況（３）

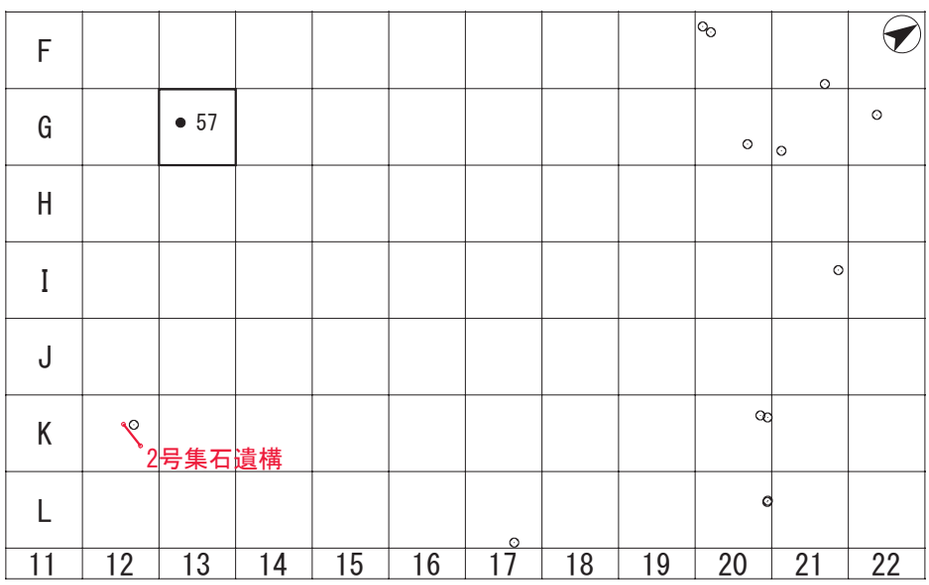


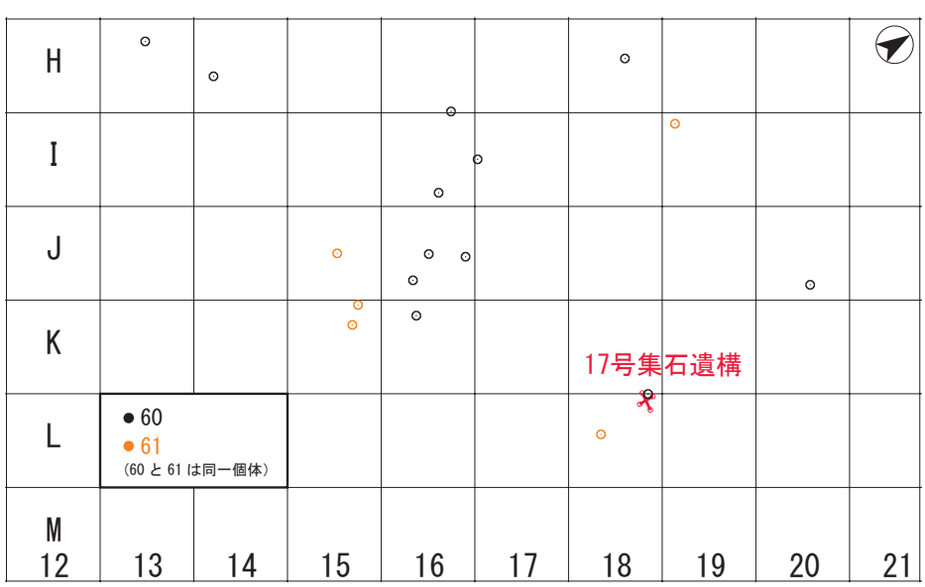




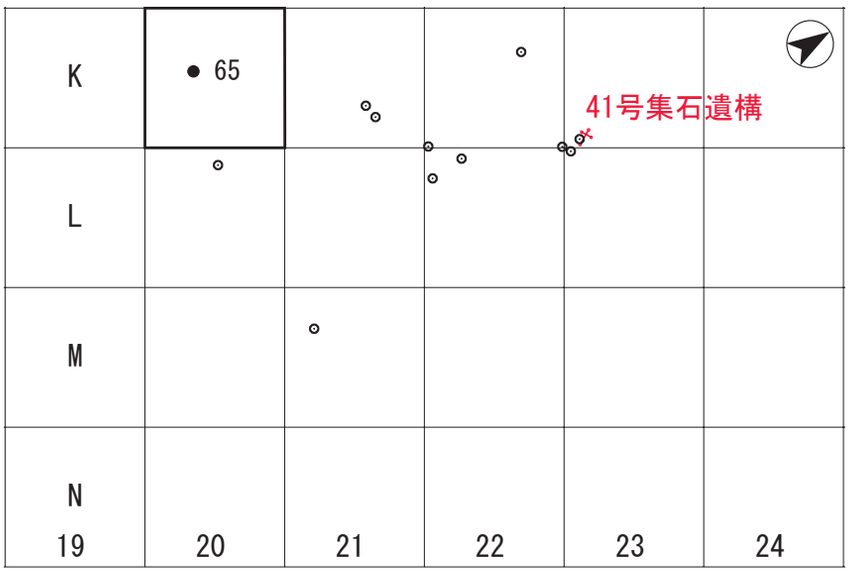
第 229 図　遺構内出土土器接合状況（４）

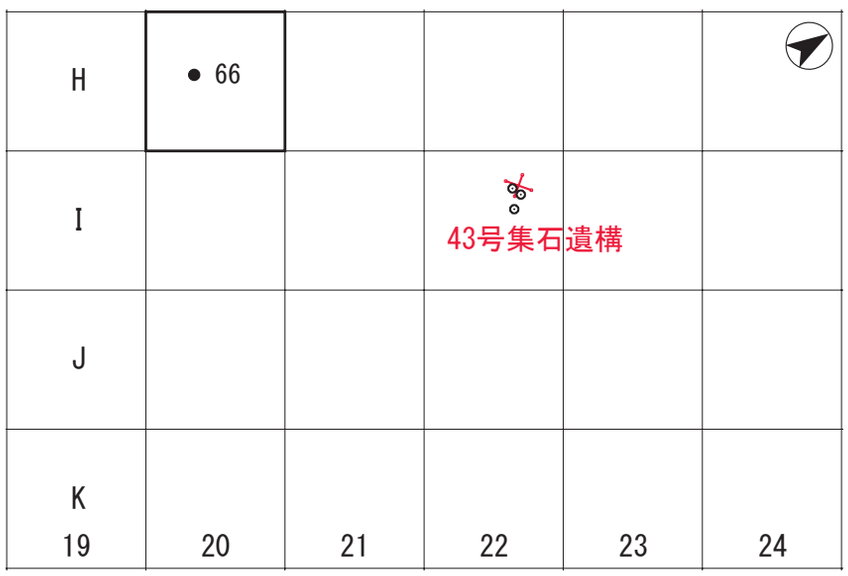


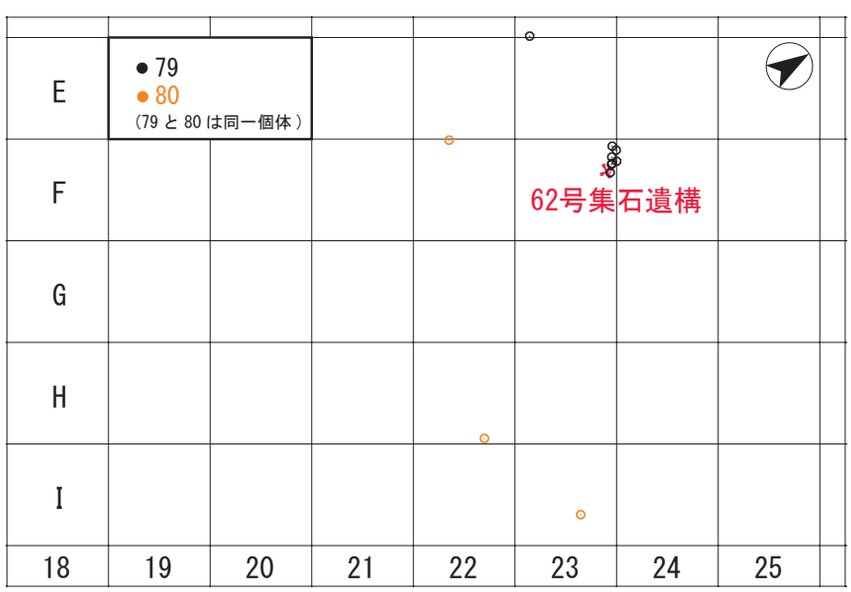




第 230 図　遺構内出土土器接合状況（５）







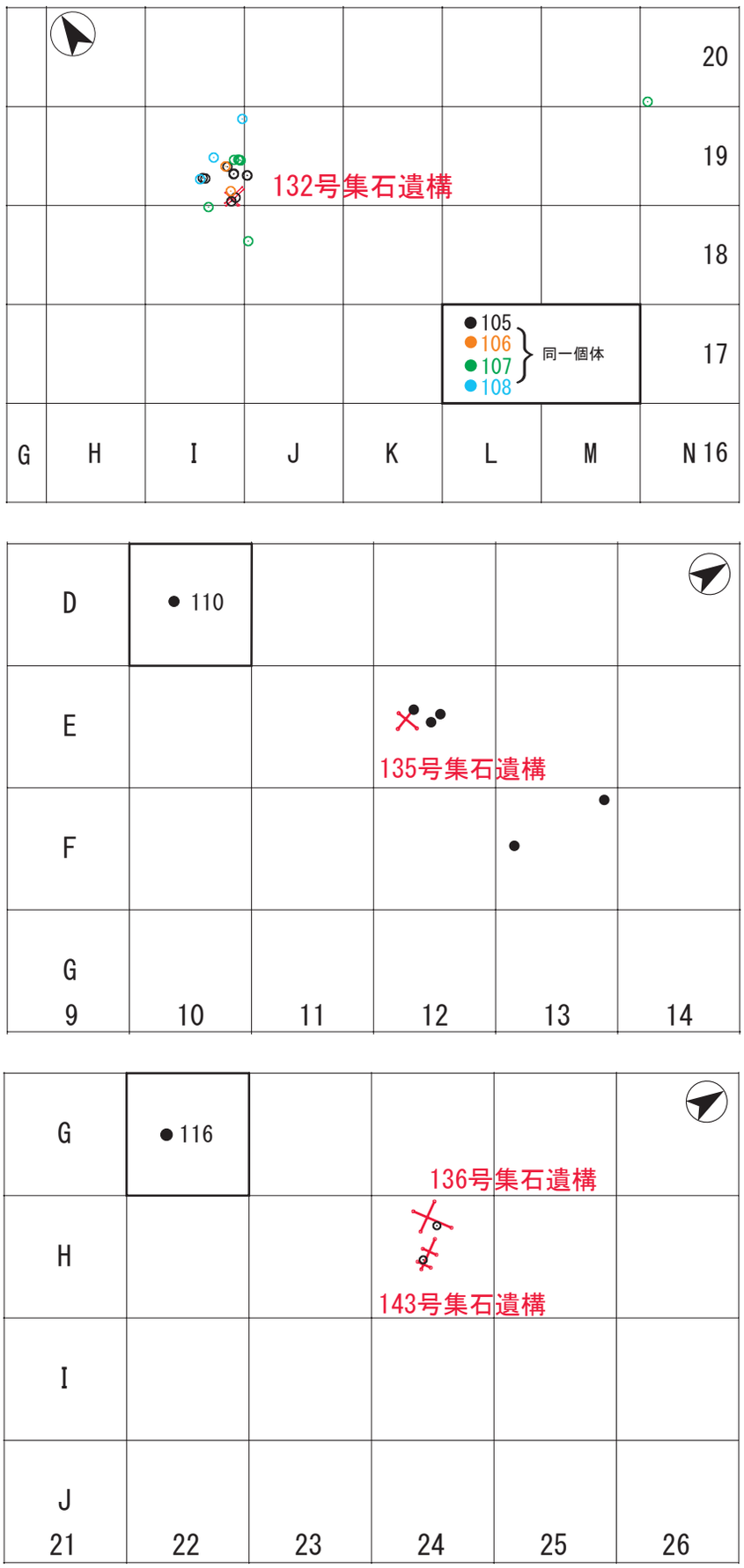
第 231 図　遺構内出土土器接合状況（6）



第 232 図　遺構内出土土器接合状況（7）



第 233 図　遺構内出土土器接合状況（8）



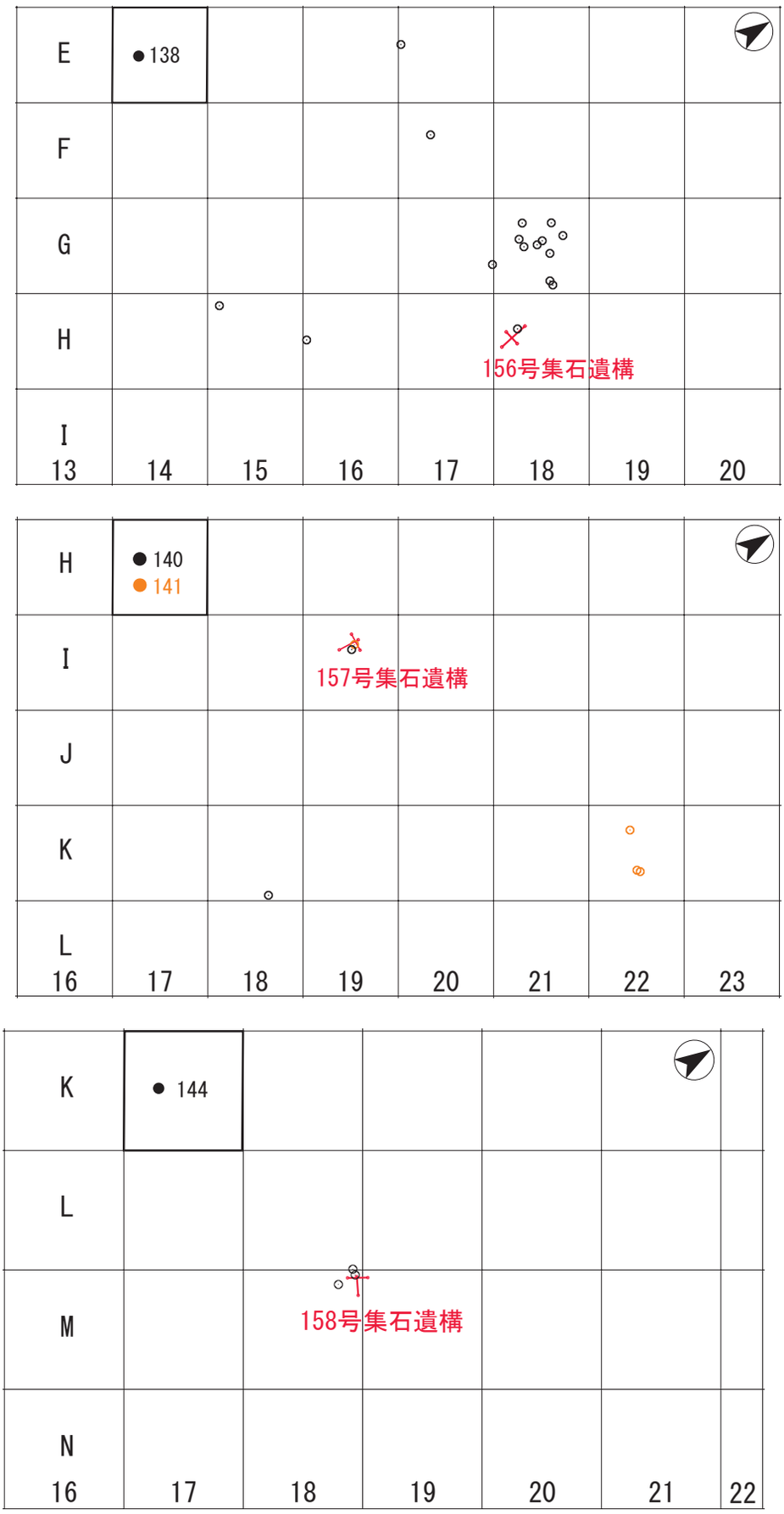
第 234 図　遺構内出土土器接合状況（９）



第 235 図　遺構内出土土器接合状況（10）



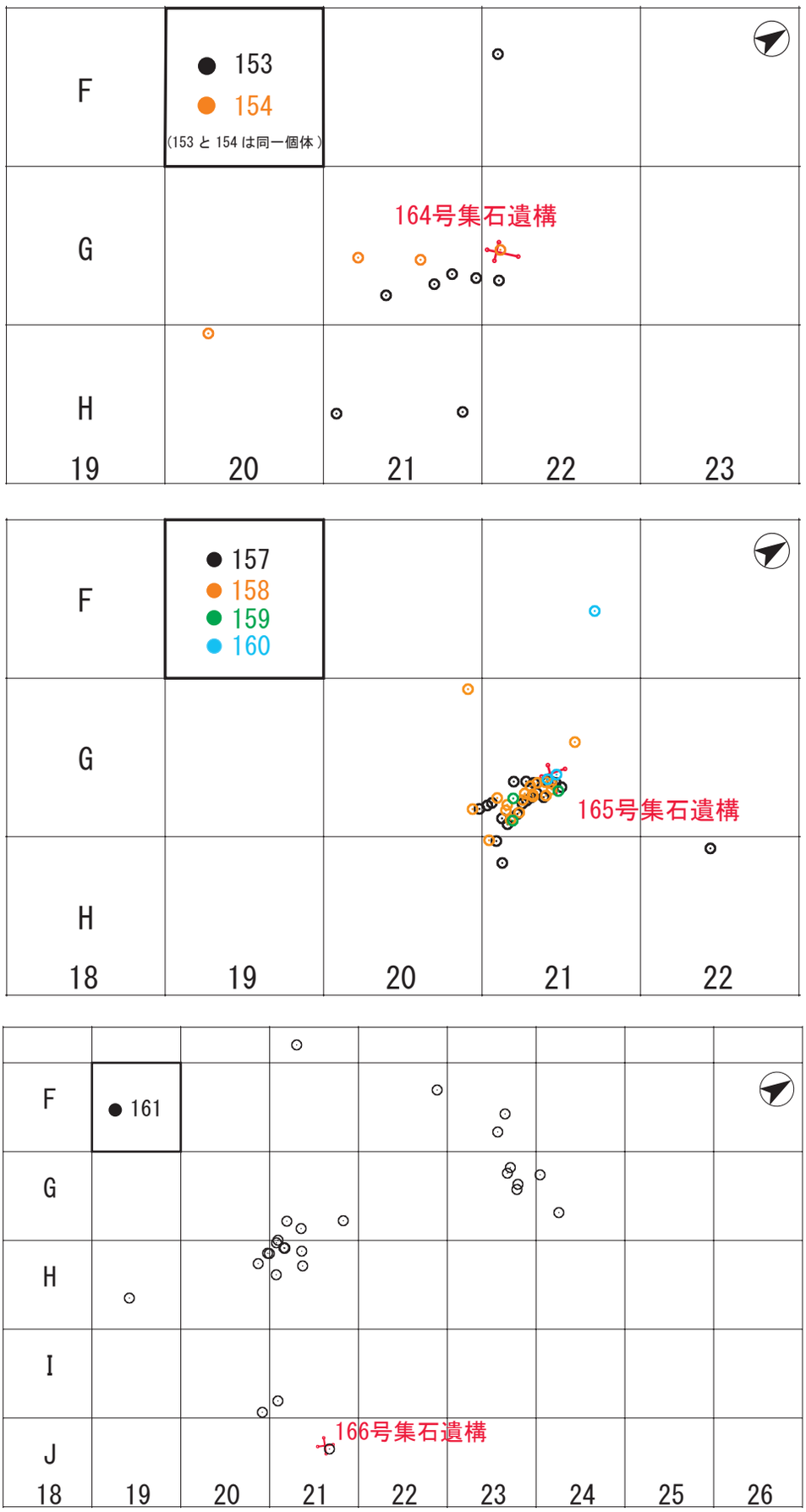
第 236 図　遺構内出土土器接合状況（11）



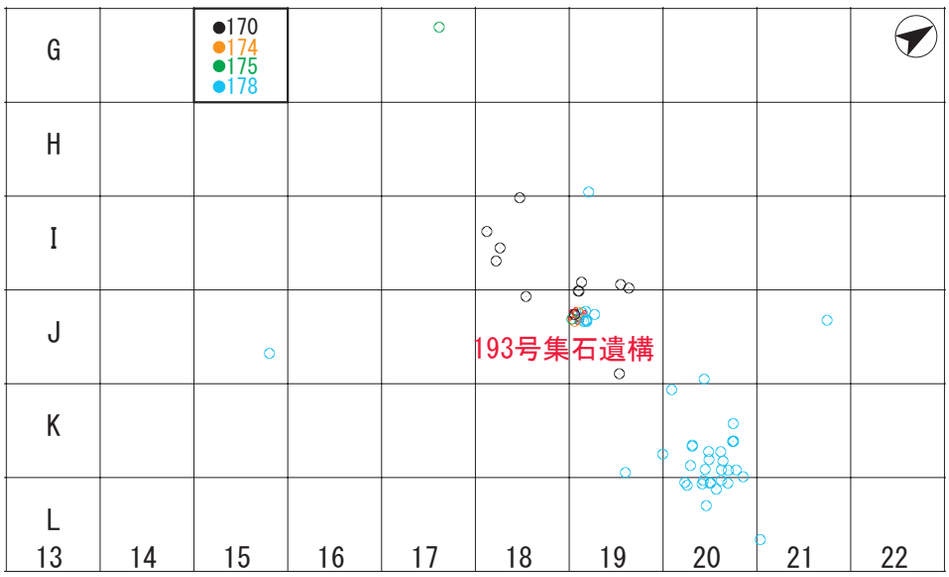
第 237 図　遺構内出土土器接合状況（12）

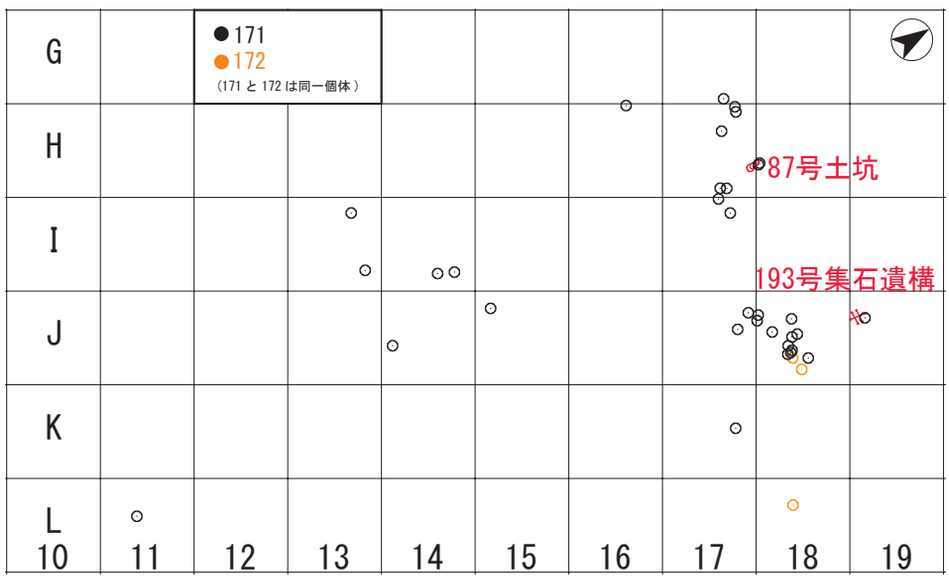


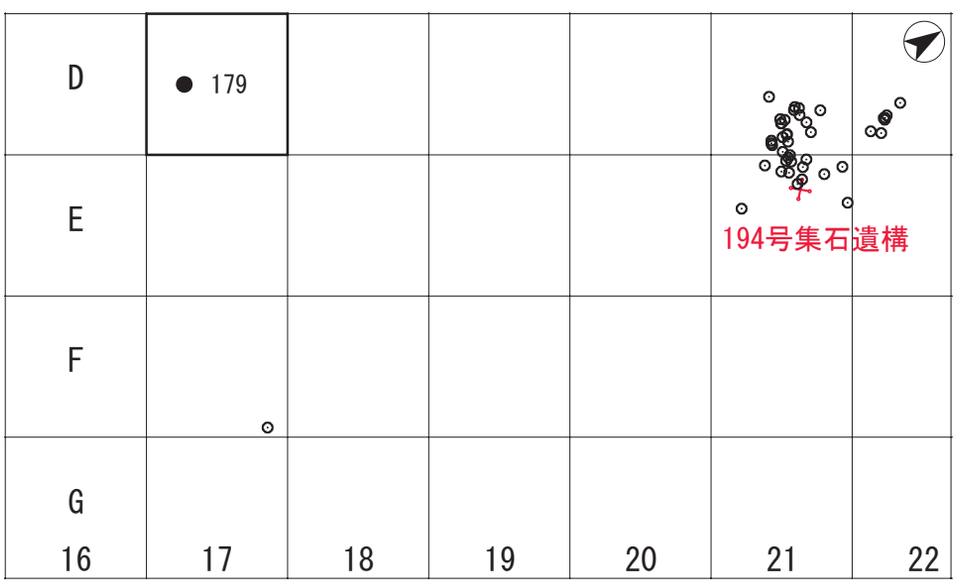
第 238 図　遺構内出土土器接合状況（13）



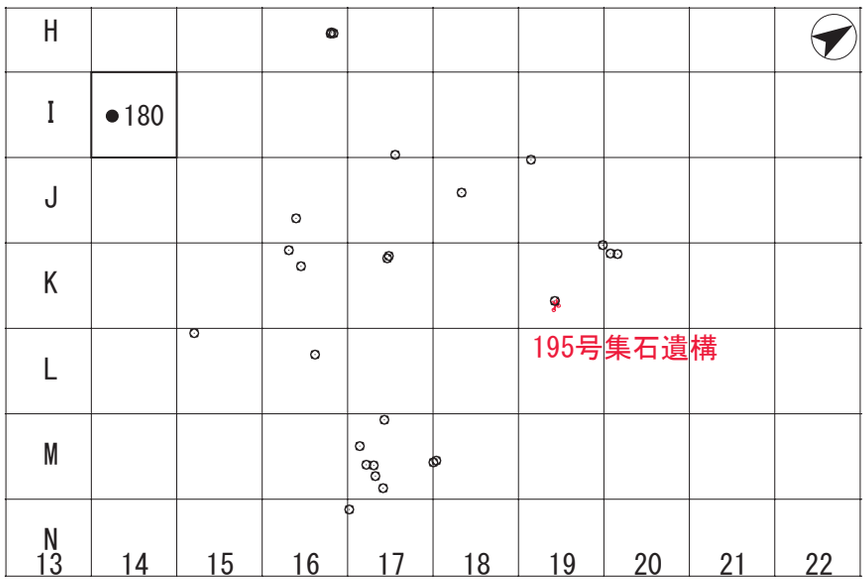
第 239 図　遺構内出土土器接合状況（14）



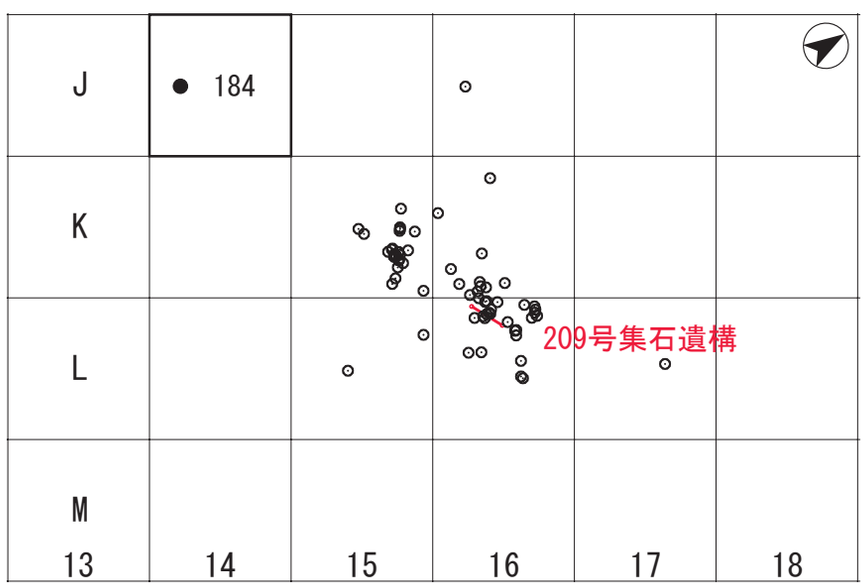




第 240 図　遺構内出土土器接合状況（15）



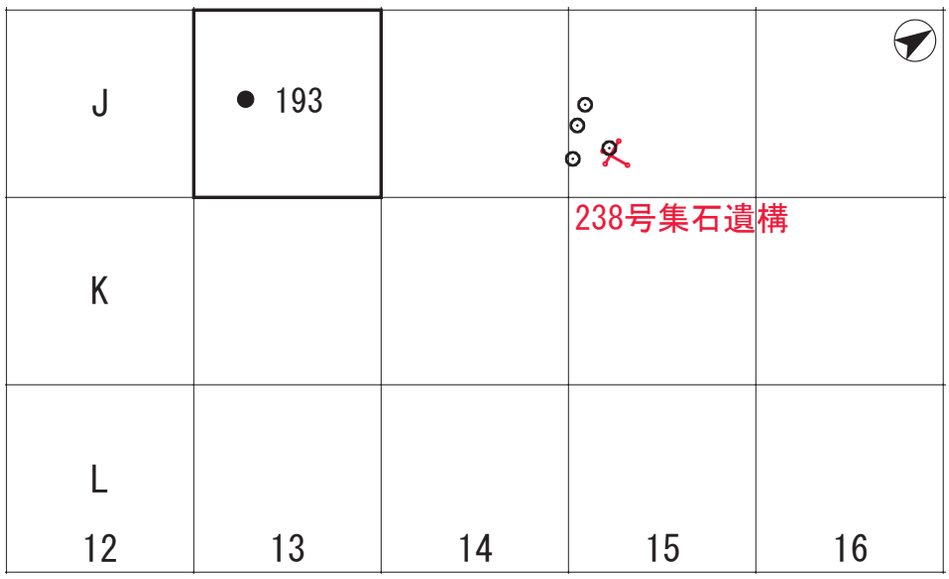


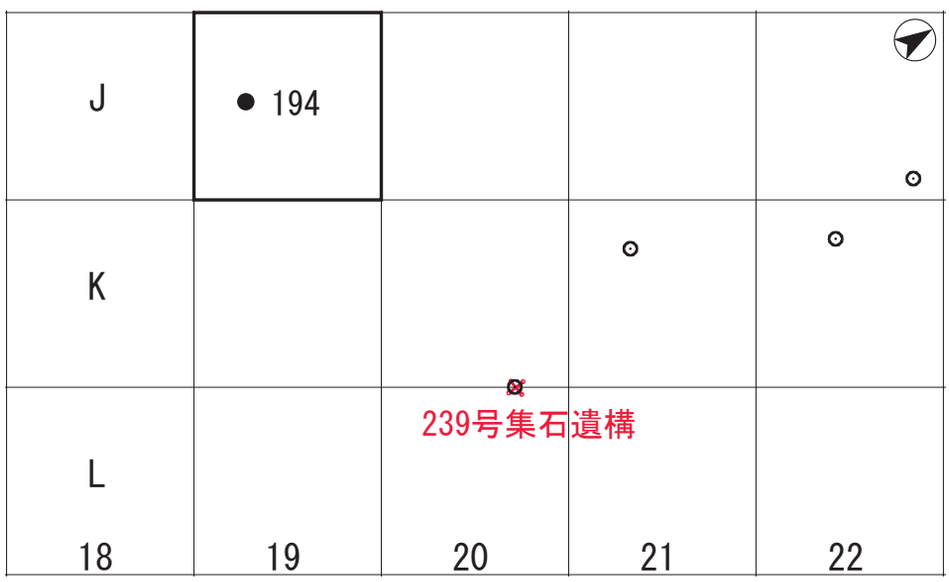


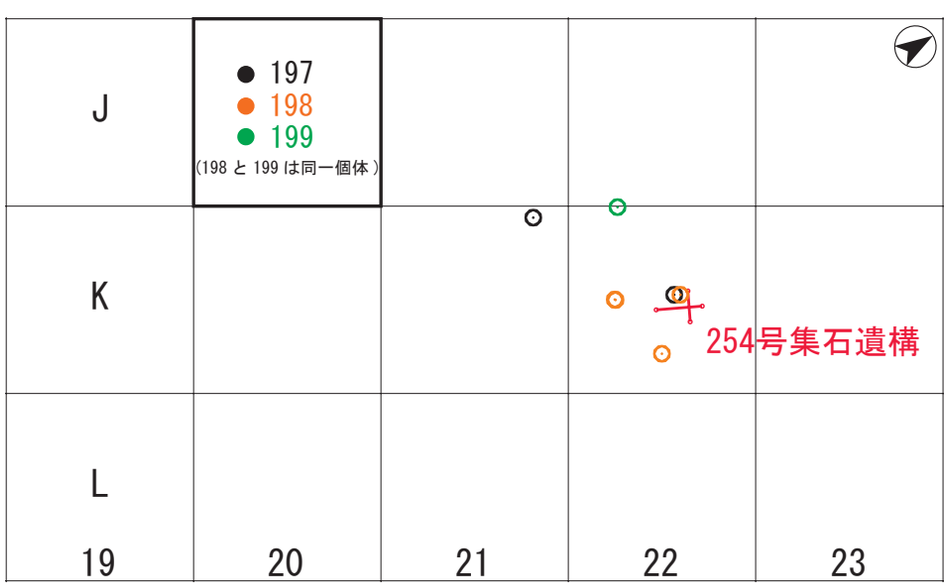
第 241 図　遺構内出土土器接合状況（16）



第 242 図　遺構内出土土器接合状況（17）



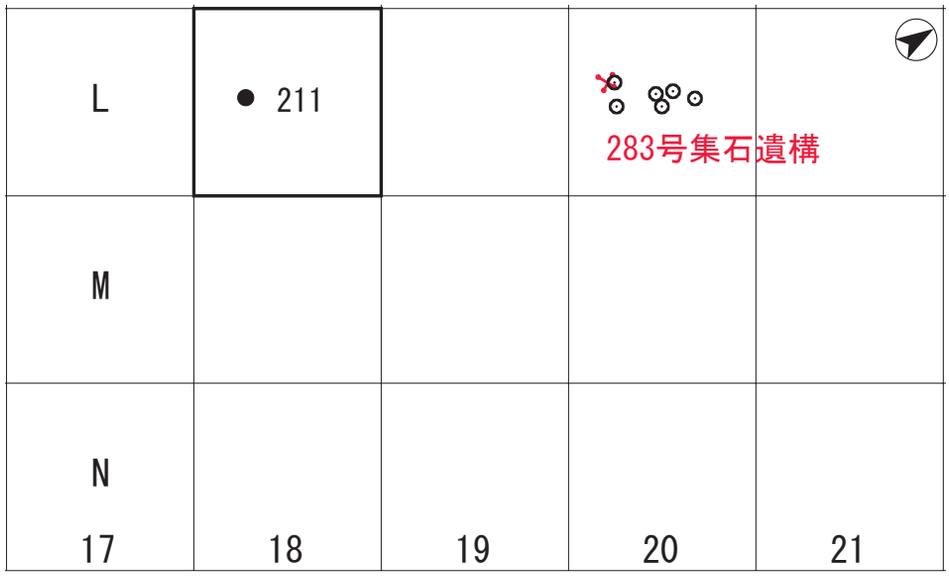




第 243 図　遺構内出土土器接合状況（18）



第 244 図　遺構内出土土器接合状況（19）





第 245 図　遺構内出土土器接合状況（20）

第３表　竪穴住居状遺構一覧表

挿図番号	掲載番号	区	検出層	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺物	備考
30	1号	E-21	Ⅶ	390	260	22	Ⅲ類土器，石鏃，磨石	1・2号連穴土坑，1号土坑
36	2号	M-20・21	Ⅷ上	231	168	11	XX類土器	
37	3号	M・N-18	Ⅶ上	264	193	26	XX類土器，石皿片，磨・敲石	
38	4号	F・G-19	Ⅶ	258	196	46	Ⅴ類土器	
39	5号	N-15	Ⅷ上	不明	不明	15	磨・敲石	
	6号	M-19	Ⅷ上	170	140	14		
	7号	N-18	Ⅷ上	194	163	14		
40	8号	E-23	Ⅶ	183	155	30	Ⅸ類土器	2号土坑
41	9号	M-17・18	Ⅷ	270	245	19		

第４表　連穴土坑一覧表　　※(　　)は推定

挿図番号	掲載番号	区	検出層	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺物	備考
30	1号	E-21	Ⅶ	218	(60)	40		1号竪穴住居状遺構，1号土坑
	2号	E-21	Ⅶ	不明	(70)	34		1号竪穴住居状遺構
43	3号	E-23	Ⅶ	不明	74	41	Ⅲ類土器，打製石鏃	2号土坑
44	4号	H-23	Ⅷ上	175	68	45	Ⅵ類土器	4・5号土坑
	5号	K-17	Ⅷ上	212	85	55	磨・敲石	
45	6号	F-22	Ⅷ	210	65	34		
	7号	F-4	Ⅷ上	135	45	17		
	8号	E・F-20	Ⅷ上	260	75	51	Ⅱ・Ⅲ類土器	
	9号	D・E-23	Ⅷ上	不明	40	40		10号連穴土坑
	10号	D・E-23	Ⅷ上	270	50	53	Ⅴ類土器	9号連穴土坑
	11号	E-22	Ⅷ上	175	45	35		
	12号	E-23	Ⅷ上	160	60	31	XX類土器	13号連穴土坑
	13号	E-23	Ⅷ上	195	50	39		12号連穴土坑
46	14号	G-16	Ⅷ上	173	57	48		
	15号	G-16	Ⅷ上	198	48	50	XX類土器	
	16号	D・E-14	Ⅶ上	158	35	58		
	17号	M-16・17	Ⅷ上	170	50	35		
47	18号	E-21	Ⅷ上	165	48	40		144号集石遺構
	19号	E-14	Ⅶ上	145	50	53	Ⅺ類土器，磨・敲石，台石，石皿	
49	20号	F-16	Ⅷ上	155	56	48	Ⅴ類土器	
50	21号	F-17	Ⅷ上	213	73	62		
	22号	G-22	Ⅷ上	143	48	48		
	23号	D-24	Ⅷ上	185	60	42		
	24号	J-18	Ⅷ上	180	95	45		
	25号	F-22	Ⅷ上	160	65	61		
	26号	G-24	Ⅷ上	158	60	28		
51	27号	G-21	Ⅷ	253	60	32		
	28号	F-23	Ⅷ	160	不明	30	XX類土器	6・7号土坑
	29号	E-23・24	Ⅷ上	255	95	60		
	30号	F-20・21	Ⅷ上	205	50	39	Ⅱ類土器	
	31号	E-22	Ⅷ	160	50	40	Ⅲ類土器	
	32号	E-21	Ⅷ	210	50	40	Ⅴ類土器	

第５表　落とし穴一覧表　　※(　　)推定

挿図番号	掲載番号	区	検出層	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺　物	備　考
53	1号	I-18	Ⅷ上	90	67	100	Ⅱ類土器	
	2号	E-23	Ⅶ	112	106	156		
	3号	F-21	Ⅶ	117	不明	176	XX類土器	
	4号	L-17	Ⅷ上	115	70	122		
	5号	J-16	Ⅷ上	116	80	89		

※備考の遺構名は，切り合い関係にある遺構を示す。

第６表　土坑一覧表（１）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	分類	区	検出層	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	遺物	備考
30	1号	Ⅰ	E-21	Ⅷ	118	68	32	ハンマーストーン	1号竪穴住居状遺構，1号連穴土坑
55	2号	Ⅱ	E・F-23	Ⅷ	195	97	57	Ⅲ・Ⅺ類土器	8号竪穴住居状遺構，3号連穴土坑，3号土坑
	3号	Ⅱ	E・F-23	Ⅷ	不明	75	47	Ⅲ類土器	2号土坑
44	4号	－	H-23	Ⅷ	不明	不明	14		4号連穴土坑
	5号	－	H-23	Ⅷ	不明	不明	16		4号連穴土坑
51	6号	Ⅰ	F-23	Ⅷ	65	(54)	14		28号連穴土坑
	7号	－	F-23	Ⅷ	不明	不明	15		28号連穴土坑
56	8号	Ⅰ	E-23	Ⅷ	134	129	20	Ⅶ類土器	
	9号	Ⅰ	I-17	Ⅷ	155	111	33		
	10号	Ⅰ	G-24	Ⅷ	100	96	18	XX類土器，チップ	
	11号	Ⅰ	E・F-9	Ⅶ	87	81	20		
	12号	Ⅰ	J-18	Ⅷ	66	61	27		
	13号	Ⅰ	G・H-16	Ⅷ	94	80	19	フレイク	
	14号	Ⅰ	F-16	Ⅷ	96	84	19		
	15号	Ⅰ	E-24	Ⅷ	94	77	17		
	16号	Ⅰ	K-8	Ⅶ	83	83	16		
	17号	Ⅰ	E-23	Ⅷ	86	78	17		
	18号	Ⅰ	J-17	Ⅷ	69	54	31		
57	19号	Ⅰ	G-6	Ⅷ	64	55	37		
	20号	Ⅰ	K・L-17	Ⅷ	74	53	30		
	21号	Ⅰ	K-17	Ⅷ	79	53	18	剥片	
	22号	Ⅰ	F-24	－	78	63	11	フレイク	
	23号	Ⅰ	J-17	Ⅷ	84	68	32		
	24号	Ⅰ	J-17	Ⅷ	82	74	17		
	25号	Ⅰ	K-18	Ⅷ	60	60	30		
	26号	Ⅰ	M-19	Ⅶ	66	56	12		
	27号	Ⅰ	F-23	Ⅷ	不明	不明	19		
	28号	Ⅰ	F-24	－	75	(50)	16		
	29号	Ⅰ	J-18	Ⅷ	51	43	9		
	30号	Ⅰ	I-4・5	Ⅷ	90	83	23		
	31号	Ⅰ	D-23	Ⅷ	77	72	12		
	32号	Ⅰ	E-24	Ⅷ	80	63	18		
	33号	Ⅰ	F・G-15	Ⅶ	86	73	9	石皿片	
	34号	Ⅰ	I-18	Ⅷ	53	35	29		
	35号	Ⅰ	K・L-17	Ⅷ	72	45	24	Ⅵ類土器	
	36号	Ⅰ	E-22	Ⅷ	74	46	14		
	37号	Ⅰ	E-20	Ⅷ	70	45	13		
	38号	Ⅰ	I-18	Ⅷ	77	54	20		
65	39号	Ⅰ	F-15	Ⅷ	62	33	18		119号土坑
137	40号	Ⅰ	M-19	－	70	57	18	ⅩⅣ類土器	
138	41号	Ⅰ	M-19	－	50	50	15		
58	42号	Ⅱ	N-19	Ⅷ	80	46	8		
	43号	Ⅱ	K・L-17	Ⅷ	53	35	23		
	44号	Ⅱ	M-19	Ⅷ	93	58	26		
	45号	Ⅱ	F-22	Ⅷ	108	65	22	Ⅺ類土器，チップ	
	46号	Ⅱ	I-4	Ⅷ	92	55	24		
	47号	Ⅱ	E-15	Ⅷ	92	55	9		
	48号	Ⅱ	E-23・24	Ⅷ	(60)	(56)	11		
	49号	Ⅱ	D-23	Ⅷ	94	70	26	XX類土器	
	50号	Ⅱ	E-9	Ⅷ	84	53	19		
	51号	Ⅱ	F-22	－	83	44	17		
	52号	Ⅱ	F-22	Ⅷ	88	45	22		

※備考の遺構名は，切り合い関係にある遺構を示す。

第７表　土坑一覧表（２）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	分類	区	検出層	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	遺物	備考
58	53 号	Ⅱ	G-13	Ⅶ	97	56	21		
	54 号	Ⅱ	F-23	－	107	70	8		
	55 号	Ⅱ	E-24	Ⅷ	109	76	22		
	56 号	Ⅱ	E-20	Ⅷ	118	60	34		
	57 号	Ⅱ	F-23	－	110	66	20		
	58 号	Ⅱ	G-23	Ⅷ上	119	61	18	Ⅶ類土器	
	59 号	Ⅱ	J-21	Ⅵ上	112	88	16		
	60 号	Ⅱ	F-23	Ⅷ	(96)	58	47		
	61 号	Ⅱ	F-18	Ⅷ	110	(82)	45		
59	62 号	Ⅱ	G-22	－	77	47	15		
	63 号	Ⅱ	H-22	Ⅷ	82	41	13		
	64 号	Ⅱ	L-８	Ⅷ	80	45	15		
	65 号	Ⅱ	F-23	－	不明	不明	9		66 号土坑
	66 号	Ⅱ	F-23	－	86	52	24		65 号土坑
	67 号	Ⅱ	F-23	Ⅷ	100	67	19		
	68 号	Ⅱ	D-16	Ⅷ	110	48	25		
	69 号	Ⅱ	E-20	Ⅷ	122	60	28		
	70 号	Ⅱ	E-24	Ⅷ	129	60	15		
	71 号	Ⅱ	F-23	－	133	74	19	XX類土器	
	72 号	Ⅱ	G-19	Ⅷ	133	57	25	早期前葉土器	
	73 号	Ⅱ	F-22・23	Ⅷ	128	51	31		
	74 号	Ⅱ	G-9	Ⅷ	113	43	21		
	75 号	Ⅱ	F-21	Ⅷ	127	60	30		
	76 号	Ⅱ	H-22・23	Ⅷ	129	55	30		
	77 号	Ⅱ	F-22	Ⅷ	136	66	23		
	78 号	Ⅱ	G-20	Ⅷ	133	62	30		
	79 号	Ⅱ	D-21	Ⅷ	150	87	16	Ⅵ類土器，早期前葉土器，チップ	
60	80 号	Ⅱ	K-21	Ⅷ	152	88	22	XX類土器，フレイク	81 号土坑
	81 号	Ⅱ	K-21	Ⅷ	不明	79	不明	チップ	80 号土坑
	82 号	Ⅱ	G-9	Ⅷ	155	50	17		
	83 号	Ⅱ	E-23	Ⅷ	不明	不明	16	フレイク	
	84 号	Ⅱ	J-5	Ⅵ	195	97	34		
	85 号	Ⅱ	E-20	Ⅷ	180	65	32	Ⅺ類土器	
	86 号	Ⅱ	E-22	Ⅷ	165	53	19		
	87 号	Ⅱ	H-17・18	Ⅷ	167	79	22	Ⅵ・Ⅸ類土器，剥片	
63	88 号	Ⅱ	E-18	Ⅷ	90	42	38		89 号土坑
	89 号	Ⅱ	E-18	Ⅷ	160	44	30		88 号土坑
	90 号	Ⅱ	I-22	Ⅷ	146	65	33		91 号土坑
	91 号	Ⅱ	I-22	Ⅷ	不明	51	31		90 号土坑
	92 号	Ⅱ	F-22	Ⅷ	127	66	21	Ⅲ類土器	
64	93 号	Ⅲ	I-22	Ⅷ	108	93	31		
	94 号	Ⅲ	D・E-25	Ⅷ	184	(150)	24	チップ	
	95 号	Ⅲ	D-16	Ⅷ上	104	72	35		
	96 号	Ⅲ	F-19	Ⅷ	191	131	15	XX類土器	
	97 号	Ⅲ	H・I-23	Ⅷ	218	99	10		
	98 号	Ⅲ	J-21	－	77	53	12		
	99 号	Ⅲ	D-15	Ⅶ	不明	不明	不明		
	100 号	Ⅲ	D-16	Ⅶ	不明	40	24		101 号土坑
	101 号	Ⅲ	D-16	Ⅶ	74	39	22		100 号土坑
	102 号	Ⅲ	M-21	－	(140)	115	30		103 号土坑
	103 号	Ⅲ	M-21	－	不明	75	33	Ⅺ類土器	102 号土坑
	104 号	Ⅲ	E-24	Ⅷ	181	66	28	早期前葉土器	

※備考の遺構名は，切り合い関係にある遺構を示す。

第８表　土坑一覧表（３）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	分類	区	検出層	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺物	備考
65	105号	Ⅳ	M-11	Ⅷ	51	35	39		
	106号	Ⅳ	F-23	Ⅷ	60	48	21	早期前葉土器	
	107号	Ⅳ	D-16	Ⅷ	59	49	24		
	108号	Ⅳ	J-17	Ⅷ	59	54	16		
	109号	Ⅳ	D-16	Ⅷ	不明	不明	不明		
	110号	Ⅳ	F-13	Ⅶ	(95)	(38)	不明		
	111号	Ⅳ	N-18	-	不明	不明	37		
	112号	Ⅳ	E-24	Ⅷ	不明	不明	不明		
	113号	Ⅳ	I・J-17	Ⅷ	99	56	20		
	114号	Ⅳ	N-17	Ⅷ	112	57	28		
	115号	Ⅳ	G-9	Ⅷ	100	57	24		
	116号	Ⅳ	I-16	Ⅷ	86	72	37		
	117号	Ⅳ	M-11	Ⅷ	140	58	38		
	118号	Ⅳ	N-18・19	-	56	50	36		
	119号	Ⅳ	F-15	Ⅷ	194	148	41		39号土坑
66	120号	Ⅳ	F-23	Ⅷ上	(123)	81	32	Ⅱ類土器	121号土坑
	121号	Ⅳ	F-23	Ⅷ上	不明	98	59	Ⅱ・Ⅲ・XⅣ類土器	120号土坑
	122号	Ⅳ	J-7・8	Ⅵ	110	不明	65		
	123号	Ⅳ	G-15	Ⅷ	83	65	89		
	124号	Ⅳ	I-13・14	Ⅶ	72	不明	44		

※備考の遺構名は，切り合い関係にある遺構を示す。

第９表　集石遺構一覧表（１）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	分類	検出区	検出層	長軸(cm)	短軸(cm)	礫数	掘込有無	遺物有無	備考
68	1	Ⅳ	E-22	Ⅷ上	272	127	213	有	無	
69	2	Ⅰa	K-12	Ⅶ	(290)	(290)	80	無	有	Ⅶ類土器，ハンマーストーン，早期中葉土器
71	3	Ⅰa	H-20	Ⅶ	320	120	39	無	有	XX類土器，石鏃
72	4	Ⅰa	H・I-5	Ⅶ	235	235	27	無	無	
73	5	Ⅰa	J-18	Ⅶ	255	165	49	無	有	X類・XVI類・XX類土器，磨・敲石
74	6	Ⅰa	I-15	Ⅶ	210	120	20	無	無	
	7	Ⅰa	E-10	Ⅶ	(190)	(160)	55	無	有	XII類土器
75	8	Ⅰa	J-14	Ⅶ	(255)	110	37	無	無	
	9	Ⅰa	F・G-4	Ⅶ	180	130	23	無	有	XI類土器
76	10	Ⅰa	E・F-12	Ⅶ	140	80	29	無	有	XI類・XX類土器，チップ，磨・敲石
	11	Ⅰa	M-7	Ⅶ	175	110	40	無	有	XX類土器
77	12	Ⅰa	F-11	Ⅶ	160	140	43	無	有	XX類土器
	13	Ⅰa	G-11	Ⅶ	(130)	(130)	44	無	無	
78	14	Ⅰa	I-12	Ⅶ	(185)	150	24	無	有	Ⅴ類土器
	15	Ⅰa	H・I-16	Ⅶ	(130)	(85)	16	無	無	
	16	Ⅰa	G-18	Ⅶ	(290)	150	35	無	有	石皿片
79	17	Ⅰa	K・L-18	Ⅶ	155	155	61	無	有	Ⅶ類土器，磨石
80	18	Ⅰa	G-17・18	Ⅶ	(140)	(130)	18	無	有	Ⅴ類土器，フレイク
	19	Ⅰa	J-19	Ⅶ	(120)	(120)	18	無	無	
	20	Ⅰa	G-3	Ⅶ	(50)	(50)	7	無	無	
	21	Ⅰa	I-17	Ⅶ	(45)	(20)	6	無	無	
81	22	Ⅰa	F-10	Ⅶ	(120)	(90)	43	無	有	Ⅴ類土器
	23	Ⅰa	E-21	Ⅶ	(50)	(50)	10	無	有	Ⅵ類・XV類土器
	24	Ⅰa	E-10・11	Ⅶ	120	85	33	無	無	

第 10 表　集石遺構一覧表（2）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	分類	検出区	検出層	長軸(cm)	短軸(cm)	礫数	掘込有無	遺物有無	備考
82	25	Ⅰa	F・G-9	Ⅶ	(120)	(95)	15	無	無	
	26	Ⅰa	E-10	Ⅶ	(90)	(90)	18	無	無	
	27	Ⅰa	H-18	Ⅶ	(55)	(55)	24	無	無	
	28	Ⅰa	I-18	Ⅶ	(80)	(80)	16	無	無	
	29	Ⅰa	L-8	Ⅶ	75	50	10	無	無	
	30	Ⅰa	F-10	Ⅶ	(100)	(90)	27	無	無	
83	31	Ⅰa	E-11	Ⅶ	(75)	(60)	28	無	無	
	32	Ⅰa	G-3	Ⅶ	90	60	12	無	無	
	33	Ⅰa	L-16	Ⅶ	70	65	7	無	無	
	34	Ⅰa	I-15	Ⅶ	(80)	(60)	9	無	無	
	35	Ⅰa	I-12	Ⅶ	(80)	70	15	無	無	
	36	Ⅰa	I-12	Ⅶ	(75)	(50)	10	無	無	
84	37	Ⅰa	J-17	Ⅶ	(80)	(80)	72	無	無	
	38	Ⅰa	I-18	Ⅶ	(60)	(60)	9	無	有	石皿片
	39	Ⅰa	G-23	Ⅶ	(65)	(35)	10	無	無	
	40	Ⅰa	J-17	Ⅶ	55	40	11	無	無	
85	41	Ⅰa	K-23	Ⅶ	(120)	(35)	14	無	有	ⅩⅣ類土器
86	42	Ⅰb	M-21	Ⅶ上	80	77	64	有	無	
87	43	Ⅱa	I-22	Ⅶ	(200)	(200)	147	有	有	アサリ形石製品，チップ，早期後葉土器
88	44	Ⅱa	L-19	Ⅶ	(100)	(100)	123	無	有	磨・敲石
	45	Ⅱa	F-13	Ⅶ	(70)	(70)	88	無	有	Ⅴ類土器
	46	Ⅱa	D-12	Ⅶ	85	60	84	有	無	
	47	Ⅱa	J-21	Ⅶ	(50)	(25)	24	有	有	ⅩⅩ類土器，磨・敲石
	48	Ⅱa	K-21	Ⅶ上	100	(60)	45	無	有	ⅩⅩ類土器
	49	Ⅱa	G-22	Ⅶ	(30)	(30)	8	無	無	
89	50	Ⅱb	E-20	Ⅶb	(185)	(160)	72	無	有	Ⅺ類・Ⅻ類土器，石皿片，磨石片，チャート
	51	Ⅱb	K-21	Ⅶ	(160)	(140)	252	無	有	磨・敲石
90	52	Ⅱb	D-19	Ⅶ	(140)	(140)	96	無	有	Ⅺ類土器，チップ，石皿片，磨・敲石
	53	Ⅱb	F-13	Ⅶ	(80)	(80)	61	無	無	
	54	Ⅱb	E-11	Ⅶ	(60)	(60)	17	無	無	
91	55	Ⅱb	D-16	Ⅶ	(130)	(80)	40	無	無	
	56	Ⅱb	M-14	Ⅶ	(125)	(90)	18	無	有	Ⅵ類土器
	57	Ⅱb	E-12・13	Ⅶ	(120)	(100)	48	無	有	石皿片
92	58	Ⅱb	L-18	Ⅶ	(150)	(90)	49	無	有	磨・敲石，チップ，石皿
	59	Ⅱb	F-23	Ⅶ	(50)	(50)	12	無	有	磨・敲石
93	60	Ⅱb	K-21	Ⅶ上	(120)	(120)	38	無	有	ⅩⅩ類土器，磨・敲石
94	61	Ⅱb	K-14	Ⅶ	(140)	(140)	21	無	有	Ⅹ類土器
	62	Ⅱb	F-23	Ⅶ	径（60）		70	無	有	Ⅺ類・ⅩⅤ類土器，石皿片，チップ
96	63	Ⅱb	M-17	Ⅶ上	(125)	(85)	58	無	有	Ⅵ類・ⅩⅩ類土器
	64	Ⅱb	G-22	Ⅶ	(100)	(100)	42	無	有	石皿片，早期後葉土器
	65	Ⅱb	K-20	Ⅶ	(100)	(100)	22	無	有	ⅩⅤ類・ⅩⅩ類土器
98	66	Ⅱb	I-17	Ⅶ	径（80）		28	無	無	
	67	Ⅱb	I-19	Ⅶ	(90)	(80)	15	無	無	
	68	Ⅱb	M・N-12	Ⅶ下	-	-	16	無	有	磨石片，早期後葉土器
	69	Ⅱb	E-24	Ⅶ	径（80）		49	無	無	

第 11 表　集石遺構一覧表（3）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	分類	検出区	検出層	長軸（cm）	短軸（cm）	礫数	掘込有無	遺物有無	備考
98	70	Ⅱb	G-23	Ⅶ	(70)	(70)	13	無	有	XⅣ類土器
	71	Ⅱb	K-20	Ⅶ	(60)	(60)	22	無	有	XⅨ類土器
99	72	Ⅱb	G-23	Ⅶ	(70)	(70)	41	無	無	
	73	Ⅱb	L-21	Ⅶ	(70)	(70)	41	無	無	
	74	Ⅱb	G-22	Ⅶ	(55)	(55)	50	無	有	XV類土器
	75	Ⅱb	D-20	Ⅶ	(80)	(80)	25	無	有	XX類土器
	76	Ⅱb	G-22	Ⅶ	(60)	(60)	26	無	無	
	77	Ⅱb	H-21	Ⅶ	(70)	(70)	16	無	無	
100	78	Ⅱb	E-11	Ⅶ	(90)	(90)	51	無	有	早期前葉土器
	79	Ⅱb	F-19	Ⅶ	径（70）		25	無	有	Ⅴ類土器
	80	Ⅱb	D-24	Ⅶ	(60)	(60)	16	無	有	XⅡ類土器
101	81	Ⅱb	M-13	Ⅶ	80	50	9	無	無	
	82	Ⅱb	H-23	Ⅶ	径（55）		10	無	無	
	83	Ⅱb	D-17	Ⅶ	(40)	(40)	16	無	無	
	84	Ⅱb	F-18	Ⅶ	(40)	(40)	9	無	無	
	85	Ⅱb	D-21	Ⅶ	(70)	(30)	10	無	無	
	86	Ⅱb	F-18	Ⅶ	(35)	(35)	7	無	無	
102	87	Ⅱb	G-22	Ⅶ	(40)	(40)	10	無	無	
	88	Ⅱb	H-16	Ⅶ	(40)	(20)	11	無	無	
	89	Ⅱb	I-18	Ⅶ	(25)	(25)	8	無	有	磨石
	90	Ⅱb	J-14	Ⅶ	(50)	45	8	無	無	
	91	Ⅱb	I-18	Ⅶ	(15)	(15)	7	無	無	
	92	Ⅱb	J-12	Ⅶ	(20)	(20)	6	有	無	
103	93	Ⅲa	J-21	Ⅶ上	径（180）		149	有	有	XX類土器，チップ
	94	Ⅲa	H-16	Ⅶ	73	53	60	無	有	IX類土器，剥片
	95	Ⅲa	J-13	Ⅶ	67	54	45	有	無	
104	96	Ⅲa	G-24	Ⅶ	52	36	12	有	有	XⅣ類土器
	97	Ⅲa	I-11・12	Ⅶ	67	45	45	有	有	磨・敲石
	98	Ⅲa	F-19	Ⅶ	径（60）		10	有	有	磨・敲石
	99	Ⅲa	J-12	Ⅶ	70	63	38	有	有	磨・敲石
106	100	Ⅲa	J-22	Ⅶ	径（90）		71	有	有	XⅣ類・XX類土器
	101	Ⅲa	E-24	Ⅶ	(50)	(30)	21	有	有	チップ
	102	Ⅲa	I-21	Ⅶ	(35)	(25)	16	有	有	磨・敲石
107	103	Ⅲa	H-20	Ⅶ	径（95）		75	有	有	磨・敲石
	104	Ⅲa	G-3	Ⅶ	50	45	65	有	無	
108	105	Ⅲa	G-23	Ⅶ下	74	62	85	有	有	XⅡ類土器
	106	Ⅲa	E-22	Ⅶ	80	68	144	有	有	磨・敲石
109	107	Ⅲa	G-22	Ⅶ	-	-	5	有	有	石皿片
110	108	Ⅲa	H-3	Ⅶ	-	-	73	有	無	
111	109	Ⅲa	J-17	Ⅶ	47	44	68	有	有	X類土器
112	110	Ⅲa	J-17	Ⅶ	80	66	30	有	有	Ⅵ類土器
	111	Ⅲa	N-20	Ⅶ	径（80）		63	有	無	
113	112	Ⅲa	I-22	Ⅶ上	(60)	49	54	有	有	XX類土器
	113	Ⅲa	F-22	Ⅶ	径（60）		93	有	有	Ⅵ類土器
	114	Ⅲa	L-21	Ⅶ	径（50）		68	有	有	XX類土器

第 12 表　集石遺構一覧表（4）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	分類	検出区	検出層	長軸(cm)	短軸(cm)	礫数	掘込有無	遺物有無	備考
113	115	Ⅲa	I-17	Ⅶ	64	44	31	有	無	
114	116	Ⅲa	I-19	Ⅶ	30	26	52	有	無	
	117	Ⅲa	K-17	Ⅶ	58	52	15	有	無	
	118	Ⅲa	J-23	Ⅶ	42	38	24	有	無	
	119	Ⅲa	J-22	Ⅶ	径（35）		21	有	無	
	120	Ⅲb	N-20	Ⅶ	径（55）		10	有	無	
	121	Ⅲb	J-17	Ⅶ	70	42	5	有	無	
115	122	Ⅲb	M・N-21	Ⅶ	-	-	40	有	有	XX類土器，磨石，123・124号集石遺構
	123	Ⅲb	M・N-21	Ⅶ	-	-	7	有	無	122号集石遺構
	124	Ⅲb	M・N-21	Ⅶ	-	-	19	有	有	磨石片，フレイク，122号集石遺構
116	125	Ⅲb	G-24	Ⅶ	80	(50)	30	有	有	XIV類土器，磨・敲石
117	126	Ⅲb	H-24	Ⅶ	径（60）		16	有	有	XIV類土器，磨・敲石
118	127	Ⅲb	G-24	Ⅶ	95	72	29	有	有	XIV類土器
	128	Ⅲb	M-16	Ⅶ	70	50	35	有	有	XX類土器
	129	Ⅲb	K・L-21	Ⅶ	52	33	19	有	無	
	130	Ⅲb	H-23	Ⅶ	径（30）		18	有	無	
119	131	Ⅳ	G-14	Ⅶ下	395	195	80	無	有	Ⅵ類・Ⅶ類・XX類土器
121	132	Ⅳ	I-19	Ⅵ～Ⅶ	(230)	150	71	有	有	XVI類土器，チップ
	133	Ⅳ	E-20	Ⅶ	270	110	52	無	有	石Ⅲ片，磨石片
123	134	Ⅳ	K-18	Ⅶ	(190)	(190)	77	無	有	XII類・XX類土器，石鏃，フレイク，チップ
124	135	Ⅳ	E-12	Ⅶ	180	160	59	無	有	Ⅴ類土器，磨・敲石
125	136	Ⅳ	H-24	Ⅶ	57	45	149	有	有	X類・XIV類土器，137号集石遺構
	137	Ⅳ	H-24	Ⅶ	径（40）		11	有	有	XV類土器，早期後葉土器，136号集石遺構
127	138	Ⅳ	F-13	Ⅶ	140	(110)	66	有	有	XX類土器，フレイク
	139	Ⅳ	M・N-10・11	Ⅶ	径（40）		63	有	有	石Ⅲ片，敲石片
128	140	Ⅳ	H-3	Ⅶ	170	115	46	有	有	XX類土器
	141	Ⅳ	K-21	Ⅶ	-	-	27	有	有	石Ⅲ，早期後葉土器
130	142	Ⅳ	H-24	Ⅶ	56	47	92	有	有	XV類土器
	143	Ⅳ	H-24	Ⅶ	80	73	30	有	有	XIV類・XX類土器
132	144	Ⅳ	E-21	Ⅶ	100	82	95	有	有	Ⅱ類土器，剥片，18号連穴土坑
134	145	I	M-18	Ⅵ	(260)	(205)	76	無	有	XVII類・XX類土器，磨石
136	146	I	M-16	Ⅵ	350	150	39	無	有	XX類土器
137	147	I	M-19	Ⅵ	(200)	(195)	66	無	有	XIV類土器，チップ
138	148	I	M-19	Ⅵ	235	185	35	不明	有	XX類土器，石Ⅲ片，フレイク
139	149	I	K-22	Ⅵ	(300)	(230)	93	無	有	XIV類土器
140	150	I	G-21・22	Ⅵ	290	(170)	68	無	有	XII類・XIV類・XV類土器，磨・敲石
141	151	I	M-17	Ⅵ	(220)	(180)	36	無	有	XX類土器，磨・敲石
	152	I	I・J-22	Ⅵ	(200)	(80)	25	無	無	
142	153	I	J-16	Ⅵ	(190)	(170)	23	無	有	XIV類もしくはXVII類土器，XX類土器，石鏃
	154	I	H-17	Ⅵ	(195)	(155)	31	無	有	Ⅶ類・XX類土器，磨・敲石，台石，フレイク
145	155	I	J-20	Ⅵ上	(150)	(70)	32	無	有	XIV類・XX類土器，チップ
	156	I	H-18	Ⅵ	(200)	(120)	33	無	有	Ⅴ類・Ⅵ類土器
146	157	I	I-19	Ⅵ	(230)	(170)	37	無	有	X類・XI類・XII類・XIV類・XVI類土器，石鏃
147	158	I	M-18・19	Ⅵ	(230)	(160)	45	無	有	XVI類もしくはXVII類土器，フレイク，チップ
148	159	I	M-16	Ⅵ	(200)	(130)	15	無	有	XVI類もしくはXVII類土器，XVII類土器，磨・敲石

第13表　集石遺構一覧表（5）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	分類	検出区	検出層	長軸(cm)	短軸(cm)	礫数	掘込有無	遺物有無	備考
148	160	I	M-17	Ⅵ	130	130	21	無	有	XVI類もしくはXVIII類・XX類土器
150	161	I	M-18	Ⅵ	(180)	(130)	25	無	有	磨・敲石
	162	I	F-22	Ⅵ	(150)	(110)	51	無	有	Ⅵ類・XIV類土器
152	163	I	J-21	Ⅵ	(160)	(140)	79	無	有	XIV類土器
153	164	I	G-22	Ⅵ	(200)	(110)	47	無	有	XIV類・XV類土器，早期後葉土器，チップ
155	165	I	G-21	Ⅵ	(120)	(120)	34	無	有	XIV類・XV類土器
	166	I	J-21	Ⅵ	(190)	(170)	108	無	有	XIV類土器，後葉，磨石片
157	167	I	F-16	Ⅵ	(170)	(140)	24	無	有	XX類土器
	168	I	J-18	Ⅵ	(150)	(100)	21	無	無	
158	169	I	M-16・17	Ⅵ	(200)	(170)	20	無	有	Ⅵ類土器，打製石斧，磨石片
159	170	I	J-17	Ⅵ	(150)	(120)	24	無	有	磨石
	171	I	J-14	Ⅵ	95	75	30	無	有	Ⅲ類もしくはⅢ類土器，磨石，ハンマーストーン，チップ
160	172	I	J-21	Ⅵ	(100)	(70)	18	無	有	磨・敲石
	173	I	G-3・4	Ⅴc	(110)	(60)	19	無	無	
161	174	I	K-18	Ⅵ	(120)	(110)	31	無	有	XX類土器
	175	I	G-22	Ⅵ	(160)	(80)	27	無	有	XX類土器，磨石片
	176	I	E-13・14	Ⅵ	(130)	(130)	33	無	有	早期前葉土器
	177	I	I-8	Ⅴc	(110)	(60)	10	無	無	
162	178	I	G-21	Ⅵ	(130)	(120)	43	無	有	XX類土器，チップ
	179	I	K-18	Ⅵ	(110)	(90)	50	無	有	XVI類もしくはXVIII類土器
	180	I	J-12	Ⅵ	(120)	(110)	42	無	無	
163	181	I	L-20	Ⅵ	(120)	(90)	31	無	有	XX類土器
	182	I	K-16	Ⅵ	(130)	(70)	30	無	有	Ⅵ類・XI類・XII類土器
	183	I	E-24	Ⅵ	(40)	(30)	12	無	無	
	184	I	E-14	Ⅵ	(30)	(45)	9	無	無	
164	185	I	G-14	Ⅵ	(130)	(90)	23	無	無	
	186	I	M・N-18	Ⅵ	(100)	(50)	15	無	無	
	187	I	J-18	Ⅵ	(120)	(90)	26	無	有	石核，フレイク
	188	I	K・L-17	Ⅵ	(80)	(80)	14	無	無	
	189	I	M-20	Ⅵ	(80)	(70)	20	無	無	
	190	I	F-23	Ⅵ	(90)	(80)	23	無	有	Ⅶ類・XI類土器
165	191	Ⅱa	K-19	Ⅵ	(110)	(110)	177	有	有	早期後葉土器，チップ
	192	Ⅱa	J-18	Ⅵ	(35)	(20)	23	無	有	磨・敲石，フレイク
166	193	Ⅱa	J-19	Ⅵ	(100)	(60)	108	無	有	Ⅱ類・Ⅲ類もしくはⅢ類土器，チップ，磨・敲石
169	194	Ⅱa	E-21	Ⅵ	(110)	(110)	64	有	有	XV類土器，磨石片
	195	Ⅱa	K-19	Ⅵ上	(70)	(60)	24	無	有	Ⅵ類土器，石皿片，磨石片
	196	Ⅱa	J-21	Ⅵ	(130)	(110)	39	無	有	XIV類・XX類土器，チップ
	197	Ⅱa	L-18	Ⅵ	50	45	26	無	有	石鏃，フレイク
171	198	Ⅱa	K-20	Ⅵ	(130)	(110)	91	無	有	XIV類土器，石鏃，チップ
	199	Ⅱa	L-19	Ⅵ	(70)	(70)	127	有	無	
	200	Ⅱa	I-22	Ⅵ	(90)	(60)	46	無	無	
	201	Ⅱa	E-21	Ⅵ	(25)	(25)	10	有	無	
172	202	Ⅱa	L-18	Ⅵ	(80)	(80)	53	無	有	XVI類土器
	203	Ⅱa	L-18	Ⅵ	(100)	(70)	56	不明	無	
	204	Ⅱa	L-19	Ⅵ	(90)	(90)	77	有	有	XIV類土器

第 14 表　集石遺構一覧表（6）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	分類	検出区	検出層	長軸(cm)	短軸(cm)	礫数	掘込有無	遺物有無	備考
172	205	Ⅱa	K-13	Ⅵ	(50)	(50)	22	無	無	
	206	Ⅱa	L-19	Ⅵ	(30)	(30)	25	無	有	磨石片
	207	Ⅱa	L-10	Ⅵ	(50)	(40)	44	無	無	
173	208	Ⅱb	L-16	Ⅵ	(50)	(50)	19	無	無	
	209	Ⅱb	L-16	Ⅵ	(80)	(80)	47	無	有	XVI類土器，チップ
176	210	Ⅱb	J-21	Ⅵ	(210)	(130)	109	無	有	XIV類・XX類土器，チップ
177	211	Ⅱb	H-18	Ⅵ	(80)	(60)	81	無	有	XX類土器
	212	Ⅱb	I-17	Ⅵ	(120)	(100)	45	無	無	
178	213	Ⅱb	K-18	Ⅵ	(240)	(170)	111	無	有	XX類土器
	214	Ⅱb	M-18	Ⅵ	(100)	(80)	33	無	有	XVI類土器
	215	Ⅱb	L-18	Ⅵ	(80)	(80)	78	無	有	XX類土器
179	216	Ⅱb	I-17	Ⅵ	(270)	(190)	72	無	無	
	217	Ⅱb	L-18	Ⅵ	径　80		130	無	有	XVI類土器
180	218	Ⅱb	K-20	Ⅵ	(200)	(150)	274	無	有	凹石，早期後葉土器
	219	Ⅱb	K-20	Ⅵ	(70)	(70)	51	無	有	早期前葉土器
	220	Ⅱb	I-21	Ⅵ下	(65)	(65)	56	無	有	XIV類土器
181	221	Ⅱb	I-22	Ⅵ	(220)	(190)	156	無	有	IX類・XX類土器
182	222	Ⅱb	G-6	Ⅴc	(210)	(120)	58	無	有	XX類土器
	223	Ⅱb	K-19	Ⅵ	(100)	(70)	38	無	無	
	224	Ⅱb	J-19	Ⅵ	(60)	(40)	23	無	無	
	225	Ⅱb	L-17・18	Ⅵ	(90)	(60)	46	無	無	
183	226	Ⅱb	G-21	Ⅵ	(170)	(170)	100	無	有	Ⅱ類・X類土器，石皿片，磨・敲石，早期前葉土器
	227	Ⅱb	I-8	Ⅴc	(100)	(100)	43	無	無	
	228	Ⅱb	F-22	Ⅵ	(140)	(100)	40	無	有	Ⅵ類・XX類土器
184	229	Ⅱb	J-19	Ⅵ	(40)	(40)	23	無	有	XVIもしくはXVII類土器
	230	Ⅱb	L-15	Ⅵ	(130)	(100)	63	無	有	凹石
	231	Ⅱb	K-13	Ⅵ	(90)	(90)	47	無	有	磨・敲石
186	232	Ⅱb	L-13	Ⅵ	(50)	(50)	46	無	無	
	233	Ⅱb	L-13	Ⅵ	(60)	(40)	20	無	無	
	234	Ⅱb	F-24	Ⅵ	(90)	(60)	18	無	有	石皿片
	235	Ⅱb	J-20	Ⅵ	(65)	(65)	28	無	無	
	236	Ⅱb	L-15	Ⅵ	(70)	(40)	16	無	無	
187	237	Ⅱb	K-18	Ⅵ	(100)	(100)	99	無	有	XVI類土器
	238	Ⅱb	J-15	Ⅵ	(20)	(20)	24	無	有	XVI類もしくはXVII類土器
	239	Ⅱb	K・L-20	Ⅵ	(60)	(60)	39	無	有	XX類土器，早期後葉土器
	240	Ⅱb	F-24	Ⅵ	(50)	(50)	37	無	有	XX類土器，磨・敲石
	241	Ⅱb	L-14	Ⅵ	95	55	20	無	有	XX類土器
189	242	Ⅱb	L-18	Ⅵ	(80)	(70)	58	無	有	チップ，剥片
	243	Ⅱb	L-19	Ⅵ	(30)	(30)	14	無	有	XVI類もしくはXVII類土器
	244	Ⅱb	K-18	Ⅵ	(70)	(50)	32	無	有	XX類土器
	245	Ⅱb	K-21	Ⅵ	(50)	(50)	34	無	有	チップ
	246	Ⅱb	K-19	Ⅵ上	(60)	(55)	20	無	無	
	247	Ⅱb	L-15	Ⅵ	(30)	(30)	22	無	無	
190	248	Ⅱb	E-20	Ⅵ	(65)	(65)	39	無	有	磨石，石皿片
	249	Ⅱb	K-20	Ⅵ	(50)	(50)	23	無	無	

第15表　集石遺構一覧表（7）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	分類	検出区	検出層	長軸(cm)	短軸(cm)	礫数	掘込有無	遺物有無	備考
190	250	Ⅱb	M-11	Ⅵ	(50)	(40)	38	無	無	
	251	Ⅱb	F-24	Ⅵ	径（60）		20	無	無	
	252	Ⅱb	F-20	Ⅵ	径（30）		8	無	有	XX類土器
	253	Ⅱb	N-17	Ⅵ	径（30）		10	無	無	
191	254	Ⅲa	K-22	Ⅵ	71	50	61	有	有	XVI類土器
192	255	Ⅲa	G-2	Ⅵ	65	55	84	無	無	
	256	Ⅲa	I-18	Ⅵ	66	54	50	有	有	早期後葉
	257	Ⅲa	H-23	Ⅵ	径（50）		36	有	有	XX類土器
193	258	Ⅲa	N-21	Ⅵ	80	65	154	有	無	
	259	Ⅲa	J-23	Ⅵ	51	44	26	有	無	
	260	Ⅲa	K-18	Ⅵ	径（40）		52	有	有	磨石，フレイク
194	261	Ⅲa	M-21	Ⅵ	75	60	92	有	有	早期後葉土器
	262	Ⅲa	N-21	Ⅵ	径（50）		57	有	有	XX類土器
	263	Ⅲa	H-3	Ⅵ	130	(120)	60	有	無	
195	264	Ⅲa	J-22	Ⅵ上	90	60	108	有	有	XX類土器，チップ
	265	Ⅲa	I-18	Ⅵ	(30)	(30)	39	有	無	
	266	Ⅲa	L-21	Ⅵ	径（50）		8	有	無	
	267	Ⅲa	K-20	Ⅵ	60	37	61	有	無	
196	268	Ⅲa	L-21	Ⅵ	115	90	177	有	有	Ⅵ類・XVI類・XX類土器
	269	Ⅲa	I-23	Ⅵ	径（110）		184	有	有	Ⅵ類土器
197	270	Ⅲa	H-24	Ⅵ	90	85	60	有	有	XI類・XIV類土器
	271	Ⅲa	K-21	Ⅵ	(140)	(140)	126	有	有	早期後葉土器
198	272	Ⅲa	G-23	Ⅵ下	130	104	121	有	有	XX類土器，石皿片
199	273	Ⅲa	K-20	Ⅵ	径（120）		77	有	有	XVI類もしくはXVII類土器，石鏃
	274	Ⅲa	K-15	Ⅵ	65	52	71	有	有	XVI類もしくはXVII類土器，石皿片
201	275	Ⅲa	J-12	Ⅵ	160	120	55	有	無	
	276	Ⅲa	K-21	Ⅵ	径（45）		65	有	有	XX類土器
	277	Ⅲa	G-22	Ⅵ下	径（65）		96	有	無	
202	278	Ⅲa	K・L-20	Ⅵ	径（70）		131	有	有	XX類土器，チップ
	279	Ⅲa	L-20	Ⅵ	62	55	81	有	有	チップ
	280	Ⅲa	F-21	Ⅵ	100	83	59	有	有	早期後葉土器，チップ
	281	Ⅲa	K-20	Ⅵ	径（60）		107	有	無	
	282	Ⅲa	K-20	Ⅵ	径（65）		68	有	有	XX類土器
203	283	Ⅲa	L-20	Ⅵ	径（70）		59	有	有	XII類土器
	284	Ⅲa	K-17・18	Ⅵ	45	35	21	有	有	早期後葉土器
	285	Ⅲa	H-24	Ⅵ	70	55	26	有	無	
	286	Ⅲa	F-24	Ⅵ	径（40）		34	有	有	XX類土器，磨・敲石
204	287	Ⅲa	L-20	Ⅵ	62	45	52	有	有	XX類土器，磨石皿
205	288	Ⅲa	L-21	Ⅵ	径（85）		106	有	有	XX類土器
	289	Ⅲa	M-21	Ⅵ	90	52	31	有	有	XVI類もしくはXVII類・XX類土器
206	290	Ⅲa	M-20	Ⅵ	径（80）		85	有	無	
	291	Ⅲa	I-21	Ⅵ	70	52	48	有	有	XIV類・XX類土器
207	292	Ⅲa	J-22	Ⅵ	径（70）		26	有	有	早期後葉土器
	293	Ⅲa	K-21	Ⅵ	径（110）		54	有	有	XIV類・XVI類もしくはXVII類土器，石鏃
209	294	Ⅲa	H-24	Ⅵ	125	-	25	有	有	XX類土器，打製石斧

第 16 表　集石遺構一覧表（8）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	分類	検出区	検出層	長軸（cm）	短軸（cm）	礫数	掘込有無	遺物有無	備考
210	295	Ⅲa	K-21	Ⅵ	70	58	23	有	有	XⅣ類土器
	296	Ⅲa	J-22	Ⅵ	70	57	21	有	無	
	297	Ⅲa	J-23	Ⅵ	59	47	107	有	有	早期後葉土器
211	298	Ⅲa	L-20	Ⅵ	85	65	85	有	有	XⅦ類・XX類土器，石Ⅲ片
	299	Ⅲa	J-18	Ⅵ	(180)	(160)	130	有	有	XⅥ類もしくはXⅧ類・XX類土器，フレイク，チップ
212	300	Ⅲa	K-19	Ⅵ上	116	50	62	有	有	磨石片，石Ⅲ片，チップ
	301	Ⅲa	J-22	Ⅵ	径（50）		62	有	無	
	302	Ⅲa	I-20	Ⅵ	70	62	31	有	無	
	303	Ⅲa	J-19	Ⅵ	50	42	31	有	有	Ⅵ類土器
213	304	Ⅲa	M-18	Ⅵ	径（70）		188	有	有	XX類土器
	305	Ⅲa	M-19	Ⅵ	径（40）		29	有	有	XX類土器，フレイク
	306	Ⅲa	J-23	Ⅵ	(100)	(80)	49	有	有	XX類土器，磨石片
	307	Ⅲa	J・K-20	Ⅵ	90	80	118	有	有	磨石片，チップ
214	308	Ⅳ	M-19	Ⅵ	250	170	47	有	有	XX類土器，フレイク，チップ
215	309	Ⅳ	I-16	Ⅵ	(360)	(250)	112	無	有	XX類土器，磨・敲石
217	310	Ⅳ	K-21・22	Ⅵ	(290)	(220)	83	有	有	XⅣ類・XV類もしくはXⅥ類・XⅦ類土器
218	311	Ⅳ	K-22	Ⅵ	(300)	(210)	89	有	有	XX類土器
219	312	Ⅳ	M・N-20	Ⅵ	(300)	(130)	89	有	有	フレイク
220	313	Ⅳ	K-14・15	Ⅵ	(50)	(50)	80	有	無	

第 17 表　遺構内出土土器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	分類	出土区	遺構名	部位	法量（cm）			調整／主文様		胎土						色調		備考
						口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	褐色粒子	角閃石	石英	雲母	長石	外面	内面	
31	1	Ⅲ	E-21	1号竪穴住居状遺構	口	12.6	－	－	刺突文，条痕文	ケズリ，ナデ	○			○	○		黄褐	褐	
	2	Ⅲ	E-21	1号竪穴住居状遺構	胴	－	－	－	条痕文，刺突文	ケズリのちナデ	○			○			明黄褐	明黄褐	
	3	Ⅲ	E-21	1号竪穴住居状遺構	口～胴	－	－	(27.9)	条痕文，刺突文	ケズリ	○		○	○			明黄褐	明赤褐	
32	4	Ⅲ	E-21	1号竪穴住居状遺構	口～底	－	9.6	(36.5)	条痕文，刺突文	ケズリ	○		○	○			赤褐	明赤褐	
33	5	Ⅲ	E-21	1号竪穴住居状遺構	胴	－	－	(26.9)	条痕文，刺突文	ケズリ，ナデ	○		○	○			橙	橙	
	6	Ⅲ	E-21	1号竪穴住居状遺構	胴	－	－	(22.1)	条痕文，刺突文	ケズリ，ナデ	○		○	○			黄褐	明赤褐	
34	7	Ⅲ	E-21	1号竪穴住居状遺構	胴	－	－	(18.3)	条痕文，刺突文	ケズリ，ナデ		○	○	○			橙	橙	
	8	Ⅲ	E-21	1号竪穴住居状遺構	胴	－	－	－	条痕文，刺突文	ケズリ，ナデ	○		○	○			明黄褐	赤褐	
	9	Ⅲ	E-21	1号竪穴住居状遺構	胴	－	－	－	条痕文，刺突文	ケズリ		○		○			明黄褐	にぶい黄褐	
	10	Ⅲ	E-21	1号竪穴住居状遺構	胴	－	－	－	条痕文，刺突文	ケズリ，ナデ	○			○			にぶい黄褐	黒褐	
	11	Ⅲ	E-21	1号竪穴住居状遺構	胴～底	－	8.8	(19.8)	条痕文，刺突文	ナデ	○			○			明黄褐	明黄褐	
37	16	XX	M・N-18	3号竪穴住居状遺構	底	－	12.2	－	条痕文	ナデ	○		○	○			明赤褐	黒褐	
38	19	Ⅴ	F・G-19	4号竪穴住居状遺構	胴	－	－	－	条痕文	ナデ	○			○			黄橙	黄橙	
	20	Ⅴ	F・G-19	4号竪穴住居状遺構	胴	－	－	－	条痕文	ナデ	○			○			橙	浅黄橙	
	21	Ⅴ	F・G-19	4号竪穴住居状遺構	胴	－	－	－	条痕文	ナデ	○		○				橙	浅黄橙	
	22	Ⅴ	F・G-19	4号竪穴住居状遺構	胴	－	－	－	刺突文，条痕文	ナデ	○						にぶい黄橙	にぶい黄橙	
43	24	Ⅲ	E-23	3号連穴土坑	口	－	－	－	刺突文，条痕文	ケズリのちナデ，面おさえ	○			○			明黄褐	明黄褐	
	25	Ⅲ	E-23	3号連穴土坑	口～胴	－	－	－	刺突文，条痕文，凹点文	ナデ，指ナデ	○	○		○			明黄褐	明黄褐	
44	27	Ⅵ	H-23	4号連穴土坑	胴	－	－	－	鋸歯文，刺突文	ナデ	○			○	○		赤褐	黄褐	
	28	Ⅵ	H-23	4号連穴土坑	胴	－	－	－	刺突文	ナデ	○			○	○		褐	にぶい黄	
	29	XX	H-23	4号連穴土坑	底	－	－	－	ケズリ	指頭押圧	○		○	○			にぶい黄橙	橙	
45	31	Ⅱ	E・F-20	8号連穴土坑	口	－	－	－	凹点文，条痕文	ナデ	○			○			にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	32	Ⅲ	E・F-20	8号連穴土坑	胴	－	－	－	条痕文，刺突文	ケズリ，ナデ	○		○	○			橙	黒	
	33	Ⅴ	E-23	10号連穴土坑	胴	－	－	－	条痕文	ナデ	○	○	○	○			橙	橙	
47	34	XI	E-14	19号連穴土坑	胴	－	－	－	押型文	ケズリのちナデ	○			○	○		にぶい黄	にぶい黄	
49	41	Ⅴ	F-16	20号連穴土坑	口～胴	20.0	－	(26.9)	刺突文，条痕文	ナデ	○		○				橙	明赤褐	

第 18 表　遺構内出土土器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	分類	出土区	遺構名	部位	法量（cm）			調整／主文様		胎土						色調		備考
						口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	褐色粒子	角閃石	石英	雲母	長石	外面	内面	
51	42	V	E-21	32 号連穴土坑	胴	－	－	－	条痕文	ナデ	○		○	○			橙	浅黄橙	
	43	V	E-21	32 号連穴土坑	胴	－	－	－	条痕文	ナデ	○	○	○	○			橙	黒褐	
53	44	Ⅱ	I-18	1 号落とし穴	口～底	10.1	7.0	19.0	凹点文，条痕文	ケズリのちナデ	○		○				赤褐	明赤褐	
55	46	Ⅲ	E・F-23	2 号土坑	口	－	－	－	条痕文，刺突文	ケズリのちナデ	○			○			浅黄	にぶい黄	
	47	Ⅺ	E・F-23	2 号土坑	口	－	－	－	撚糸文	ケズリ	○			○			にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	48	Ⅲ	F-23	3 号土坑	口～底	－	－	(38.5)	刺突文，条痕文，凹点文	ケズリ，ナデ	○	○	○	○			明黄褐	黄橙	
	49	Ⅲ	F-23	3 号土坑	底	－	－	－	刺突文，条痕文，凹点文	ケズリ，ナデ	○	○	○	○			黄橙	明黄褐	
56	50	Ⅶ	E-23	8 号土坑	口～胴	20.5	－	(10.3)	沈線文，刺突文	ケズリのちナデ		○		○	○	○	暗灰黄	にぶい黄	年代測定
61	51	Ⅵ	H-17・18	87 号土坑	口・胴～底	35.2	21.1	－	条痕文，刺突文	ミガキ，ナデ			○	○	○		にぶい橙	にぶい黄	
62	52	Ⅸ	H-17・18	87 号土坑	口～胴	25.0	－	(33.6)	条痕文	ナデ	○		○				黄橙	黄橙	
63	53	Ⅲ	F-22	92 号土坑	胴	－	－	－	条痕文，刺突文	ケズリのちナデ	○		○	○			明赤褐	灰黄褐	
66	54	Ⅲ	F-23	120 号土坑	胴	－	－	－	条痕文，刺突文	ケズリのちナデ	○		○	○			明黄褐	黒	
	55	Ⅲ	F-23	121 号土坑	胴～底	－	10.6	(11.1)	条痕文	ケズリ	○			○		○	にぶい黄	黄褐	
	56	Ⅲ	F-23	121 号土坑	口～胴	－	－	－	条痕文，刺突文	ケズリ	○		○	○			にぶい黄褐	にぶい黄褐	
70	57	Ⅶ	K-12	2 号集石遺構	胴～底	－	14.0	(24.2)	沈線文	ミガキ状ナデ	○		○	○			にぶい黄橙	浅黄	
79	60	Ⅶ	K・L-18	17 号集石遺構	胴～底	－	13.3	(19.5)	沈線文	ナデ	○		○	○			橙	黄橙	
	61	Ⅶ	K・L-18	17 号集石遺構	胴	－	－	－	沈線文	ナデ	○			○			黄橙	明黄褐	
80	62	V	G-17・18	18 号集石遺構	胴	－	－	－	条痕文	ナデ	○	○	○	○			赤褐	灰黄褐	
81	63	ⅩⅩ	F-10	22 号集石遺構	底		10.0	(2.2)	ナデ	ナデ	○	○		○	○		褐灰	黄灰	
	64	Ⅵ	E-21	23 号集石遺構	胴	－	－	－	刺突文	ナデ	○	○		○			橙	にぶい黄橙	
85	65	ⅩⅣ	K-23	41 号集石遺構	口～胴	29.4	－	(16.5)	沈線文	ナデ，指頭圧痕	○			○	○		灰黄褐	にぶい黄褐	
87	66	早期後葉	I-22	43 号集石遺構	底		12.0	(1.0)	ケズリのちナデ	ナデ	○		○	○			浅黄	淡黄	
89	68	Ⅺ	E-20	50 号集石遺構	胴	－	－	－	押型文	ケズリのちナデ	○	○			○		にぶい黄褐	にぶい黄橙	
95	76	Ⅵ	K-14	61 号集石遺構	胴	－	－	－	刺突文	ケズリのちナデ	○		○	○			橙	橙	
	77	Ⅹ	K-14	61 号集石遺構	胴	－	－	－	ナデ	ナデ，指頭押圧痕	○			○	○		にぶい黄橙	浅黄	
	78	Ⅺ	F-23	62 号集石遺構	口	－	－	－	撚糸文	ナデ	○		○	○			橙	灰黄褐	
	79	ⅩⅤ	F-23	62 号集石遺構	口～胴	24.1	－	13.0	沈線文，撚糸文	ケズリのちナデ	○	○		○	○		にぶい黄橙	黄褐	
	80	ⅩⅤ	H・I-22 他	62 号集石遺構	口～胴	－	－	－	沈線文，撚糸文	ナデ，ナデのちケズリ	○	○		○	○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	
96	81	Ⅵ	M-17	63 号集石遺構	胴	－	－	－	刺突文	ケズリ	○			○			黄灰	黄灰	
	82	ⅩⅩ	G-22	64 号集石遺構	底	－	－	－	ナデ	ナデ	○			○		○	暗灰黄	にぶい黄橙	
97	84	ⅩⅣ	K-20	65 号集石遺構	口～胴	35.6	－	(27.1)	沈線文，刺突文，貼付突帯	ナデ	○		○	○		○	橙	にぶい黄橙	
	85	ⅩⅣ	K-20	65 号集石遺構	口	25.7	－	(7.1)	沈線文，刺突文，貼付突帯	ナデ	○		○		○	○	にぶい黄褐	にぶい黄橙	補修孔有り
100	86	ⅩⅩ	E-11	78 号集石遺構	底	－	－	－	ナデ	貝殻押圧	○			○			明黄褐	明黄褐	
	87	V	F-19	79 号集石遺構	口	－	－	－	刺突文	ナデ	○	○	○				明黄褐	にぶい黄橙	
	88	ⅩⅡ	D-24	80 号集石遺構	胴	－	－	－	押型文	ナデ	○			○	○		明褐	橙	
104	89	ⅩⅣ	G-24	96 号集石遺構	口～頸	28.6	－	(10.4)	撚糸文，刺突文	ナデ，ケズリ	○		○	○			にぶい黄褐	にぶい黄褐	スス付着
108	95	ⅩⅡ	G-23	105 号集石遺構	口～胴	22.0	－	(12.4)	押型文	ナデ	○		○	○	○		明灰黄	にぶい黄	
116	99	ⅩⅣ	G-24	125 号集石遺構	口下～底	－	13.3	(23.0)	沈線文，結節縄文	ナデ	○	○	○	○			にぶい褐	にぶい褐	
	100	ⅩⅣ	I-22 他	125 号集石遺構	口～胴	－	－	－	連点文，押圧文，貼付突帯	ナデ	○	○	○	○			赤褐	明褐	
117	101	ⅩⅣ	H-24	126 号集石遺構	口	－	－	－	刺突文，沈線文，貼付突帯	ナデ	○			○	○		黄灰	黄褐	
120	102	Ⅶ	G-14	131 号集石遺構	口～胴	－	－	－	沈線文，刺突文	ケズリのちナデ	○		○	○			橙	にぶい黄橙	
	103	Ⅵ	G-14	131 号集石遺構	口～胴	20.0	－	(8.2)	刺突文	ケズリのちナデ		○	○	○		○	灰褐	橙	
	104	Ⅵ	G-14	131 号集石遺構	口～底	19.8	13.2	22.4	刺突文	ケズリのちナデ			○	○		○	橙	明黄褐	スス付着
122	105	ⅩⅥ	I-19	132 号集石遺構	口～胴	29.9	－	(16.2)	条痕文，刺突文	ナデ	○			○	○		橙	にぶい褐	
	106	ⅩⅥ	I-19	132 号集石遺構	口～胴	－	－	－	条痕文，刺突文	ナデ	○			○	○		灰黄褐	灰黄褐	
	107	ⅩⅥ	J-19 他	132 号集石遺構	口～胴	－	－	－	条痕文，刺突文	ナデ	○			○	○		褐灰	にぶい褐	
	108	ⅩⅥ	I-19	132 号集石遺構	胴	－	－	－	条痕文，刺突文	ナデ	○			○	○		にぶい褐	にぶい褐	
124	110	V	E-12	135 号集石遺構	口～胴	16.1	－	(16.4)	刺突文，条痕文	ナデ	○			○			にぶい黄橙	浅黄	
126	112	Ⅹ	H-24	136・137 号集石遺構	口	－	－	－	ナデ	ナデ	○		○	○			明黄褐	にぶい黄褐	
	113	ⅩⅣ	H-24	136・137 号集石遺構	口	－	－	－	沈線文，刺突文	ナデ	○	○	○	○			浅黄	にぶい黄	
	114	ⅩⅣ	H-24	136・137 号集石遺構	口	－	－	－	沈線文，刺突文	ケズリ状ナデ	○		○	○	○		にぶい黄橙	橙	
	115	早期後葉	H-24	136・137 号集石遺構	口	－	－	－	ナデ	ナデ	○			○			にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	116	ⅩⅣ	H-24	136・137 号集石遺構	胴	－	－	－	撚糸文・結節縄文	ケズリ	○		○	○	○		にぶい黄橙	にぶい橙	
	117	ⅩⅩ	H-24	136・137 号集石遺構	底	－	9.2	－	ナデ	ナデ	○			○	○		黄褐	黄褐	

※遺構内出土土器と接合した包含層出土土器も含む

第 19 表　遺構内出土土器観察表（3）

挿図番号	掲載番号	分類	出土区	遺構名	部位	法量（cm）			調整／主文様		胎土						色調		備考
						口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	褐色粒子	角閃石	石英	雲母	長石	外面	内面	
129	119	早期後葉	K-21	141 号集石遺構	胴～底	－	8.4	(7.1)	沈線文	ケズリのちナデ	○			○	○		にぶい黄褐	にぶい黄褐	
131	122	XV	H-24	142 号集石遺構	口～底	18.8	13.0	19.2	沈線文，撚糸文	ナデ		○	○	○			にぶい黄橙	黒褐	
135	123	XVII	M-18	145 号集石遺構	口～胴	42.3	－	(14.6)	条痕文，突帯文	ケズリのちナデ	○		○	○			橙	にぶい橙	
137	124	XIV	M-19	40 号土坑	胴	－	－	－	撚糸文，刺突文，条痕文	ケズリのちナデ	○	○	○	○			橙	橙	
139	125	XIV	K-22	149 号集石遺構	口	32.0	－	10.2	沈線文，刺突文	ナデ	○	○		○	○		明赤褐	橙	
	126	XIV	K-22	149 号集石遺構	口	－	－	(4.9)	沈線文，刺突文	ナデ		○	○	○			橙	にぶい黄橙	
140	127	XII	G-21	150 号集石遺構	胴	－	－	－	押型文	ナデ	○		○	○			明黄褐	浅黄	
	128	XIV	G-21	150 号集石遺構	口～頸	8.8	－	(4.0)	刺突文，沈線文	ナデ	○		○	○			灰黄褐	黒褐	
	129	XV	G-21	150 号集石遺構	胴	－	－	－	沈線文，刺突文，撚糸文	ナデ	○		○	○			暗灰黄	黄灰	
143	131	XVIorXVII	J-16	153 号集石遺構	胴	－	－	－	沈線文，条痕文	ケズリのちナデ	○		○	○	○		黄褐	黄灰	
	132	XVIorXVII	I-16	153 号集石遺構	胴	－	－	－	撚糸文，沈線文，条痕文	ケズリのちナデ	○		○	○	○		暗灰黄	黄褐	
144	134	VII	H-17	154 号集石遺構	口～胴	22.0	－	(19.1)	刺突文，沈線文	ミガキ状ナデ	○		○	○	○		明赤褐	明赤褐	
	135	XX	H-17	154 号集石遺構	口	－	－	－	沈線文	ケズリ	○		○				橙	明褐	
145	138	V	H-18	156 号集石遺構	胴	－	－	－	条痕文	ナデ	○		○				黄橙	明黄褐	
	139	VI	H-18	156 号集石遺構	胴	－	－	－	刺突文	ナデ	○	○		○	○	○	明黄褐	褐灰	
146	140	X	I-19	157 号集石遺構	胴	－	－	－	ナデ	ナデ，指頭押圧	○		○	○			にぶい黄	明黄褐	
	141	XVIorXVII	I-19	157 号集石遺構	頸～胴	－	－	－	刺突文，条痕文	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい橙	灰オリーブ	
147	144	XVIorXVII	M-18	158 号集石遺構	胴	－	－	－	条痕文	ナデ	○			○	○		にぶい褐	灰黄褐	
149	145	XVIorXVII	M-16・17	159 号集石遺構	胴	－	－	－	条痕文，押引文	ナデ	○	○	○	○			橙	にぶい黄褐	
	146	XVIorXVII	M-16	159 号集石遺構	胴	－	－	－	条痕文，押引文	ナデ	○	○	○	○			にぶい黄橙	暗灰黄	
	148	XVIorXVII	M-18	160 号集石遺構	胴	－	－	－	刺突文，条痕文	ナデ	○	○	○	○			橙	黄灰	
151	150	XIV	F-22	162 号集石遺構	口	36.0	－	－	羽目突帯文，刺突文，沈線文	ナデ	○	○		○			明黄褐	黄橙	
152	151	XIV	J-21	163 号集石遺構	胴	－	－	－	沈線文，刺突文	ケズリ	○			○	○		にぶい赤褐	にぶい黄褐	
	152	XIV	J-21	163 号集石遺構	胴	－	－	－	撚糸文	ケズリ	○			○			にぶい黄橙	橙	
154	153	XIV	J-21	164 号集石遺構	口～胴	24.8	－	(22.6)	刺突文，沈線文	ケズリのちナデ	○	○	○	○	○		にぶい黄褐	黒褐	
	154	XIV	M-21 他	164 号集石遺構	胴	－	－	－	刺突文，沈線文	ケズリのちナデ	○	○	○	○	○		灰黄褐	にぶい褐	
	155	早期後葉	M-22	164 号集石遺構	口	－	－	－	沈線文，刺突文	ナデ	○		○				にぶい黄褐	灰黄褐	
	156	XIV	G-22	164 号集石遺構	胴	－	－	－	刺突文，沈線文	ケズリのちナデ	○	○	○	○			にぶい橙	にぶい橙	
156	157	XV	G-21	165 号集石遺構	口～底	30.8	14.6	25.4	沈線文，撚糸文	ケズリのちナデ	○		○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい褐	
	158	XV	G-21	165 号集石遺構	口～底	30.8	14.6	25.4	沈線文，撚糸文	ケズリのちナデ	○		○	○	○	○	にぶい褐	にぶい褐	
	159	早期後葉	G-21	165 号集石遺構	口	29.6	－	(6.6)	ナデ	ケズリのちナデ	○		○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	160	XV	G-21	165 号集石遺構	底	－	8.4	－	撚糸文	ナデ	○		○	○			黄灰	淡黄	
	161	XIV	J-21	166 号集石遺構	口～胴	24.2	－	(17.6)	刺突文，沈線文，撚糸文	ケズリのちナデ		○	○		○	○	橙	黒褐	
	162	早期後葉	J-21	166 号集石遺構	胴	－	－	－	ナデ，指頭押圧痕	ナデ	○		○	○			橙	にぶい黄橙	
159	164	XVIorXVII	J-14	171 号集石遺構	胴	－	－	－	条痕文	ナデ	○			○			灰黄	淡黄	
165	168	早期後葉	K-19	191 号集石遺構	底	－	14.6	(2.5)	ナデ	ナデ	○			○		○	にぶい黄橙	橙	
166	170	II	J-19	193 号集石遺構	胴～底	－	14.8	(11.8)	条痕文	ケズリ	○	○		○			黄橙	橙	
	171	VI	J-19	193 号集石遺構	口～胴	28.5	－	(23.1)	条痕文，刺突文	ナデ	○		○	○			橙	黄橙	
167	172	VI	J-18 他	193 号集石遺構	口	32.5	－	－	沈線文，条痕文	ナデ	○		○	○			橙	橙	補修孔有り
	173	XVIorXVII	J-19	193 号集石遺構	口	－	－	(7.2)	押引文，刺突文，条痕文	ナデ	○		○	○			橙	明黄褐	
	174	XVIorXVII	J-19	193 号集石遺構	頸	－	－	－	押引文，刺突文，条痕文	ナデ	○	○	○	○			橙	橙	
	175	XVIorXVII	J-19	193 号集石遺構	胴	－	－	－	刺突文，条痕文	ナデ	○		○	○			橙	にぶい黄橙	
168	178	XV	J-19	193 号集石遺構	口～胴	39.2	－	(19.6)	刺突文，沈線文，撚糸文	ナデ	○		○	○			橙	橙	
170	179	XV	E-21	194 号集石遺構	胴～底	－	16.3	(28.9)	刺突文，沈線文，撚糸文	ケズリのちナデ	○		○	○			橙	にぶい黄橙	
	180	VI	K-19	195 号集石遺構	口～胴	22.5	－	(20.6)	刺突文	ミガキ状ナデ	○		○	○	○		にぶい黄	にぶい黄橙	
	181	XIV	J-21	196 号集石遺構	口	－	－	(2.9)	沈線文	ナデ	○			○	○		橙	橙	
174・175	184	XVI	L-16	209 号集石遺構	口～底	41.7	11.7	47.5	刺突文，条痕文，沈線文	ケズリのちナデ	○		○		○		橙	橙	
176	185	XX	J-21	210 号集石遺構	底	－	－	(3.1)	ナデ，指頭押圧痕	ナデ，指頭押圧痕	○		○	○			橙	にぶい黄橙	繊維痕
181	187	IX	I-22	221 号集石遺構	口～胴	23.4	－	(18.2)	条痕文	ナデ，指頭押圧痕	○	○	○				黄橙	黄橙	
185	188	XVI	J-19	229 号集石遺構	口	－	－	(3.4)	沈線文，撚糸文	ナデ	○	○	○				橙	にぶい褐	
	189	XVIorXVII	J-19	229 号集石遺構	胴	－	－	－	沈線文	ケズリのちナデ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	にぶい黄褐	
188	192	XVI	K-18	237 号集石遺構	口～胴	29.3	－	(20.9)	沈線文，刺突文	ナデ	○	○		○	○		橙	にぶい橙	
	193	XVIorXVII	J-15	238 号集石遺構	胴	－	－	－	条痕文	ケズリ	○	○		○			明赤褐	灰黄褐	
	194	早期後葉	L-20	239 号集石遺構	底	11.3	－	(3.5)	ナデ	ケズリのちナデ	○	○	○	○			橙	にぶい黄橙	

※遺構内出土土器と接合した包含層出土土器も含む

第 20 表　遺構内出土土器観察表（4）

挿図番号	掲載番号	分類	出土区	遺構名	部位	法量（cm）			調整／主文様		胎土						色調		備考
						口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	褐色粒子	角閃石	石英	雲母	長石	外面	内面	
188	195	XX	L-20	239 号集石遺構	底	－	－	－	ナデ	ナデ	○		○	○			にぶい黄橙	黄褐	
191	197	XIV	K-22	254 号集石遺構	胴	－	－	－	沈線文，刺突文	ナデ	○		○				にぶい黄褐	にぶい褐	
	198	XIV	K-22	254 号集石遺構	口～頸	25.7	－	(6.6)	刺突文，条痕文	ナデ	○		○	○			灰	にぶい褐	
	199	XIV	K-22	254 号集石遺構	口～頸	－	－	－	刺突文，条痕文	ナデ	○		○	○			灰	にぶい褐	
196	201	XIV	L-21	268 号集石遺構	口	－	－	－	沈線文	ナデ	○		○	○	○		橙	にぶい橙	
	202	VI	I-23	269 号集石遺構	底	－	－	－	刺突文	ナデ	○	○		○			灰黄褐	にぶい黄橙	
197	203	XIV	H-24	270 号集石遺構	頸～胴	－	－	－	結節縄文，突帯	ケズリのちナデ	○			○	○		にぶい橙	にぶい黄褐	
	204	早期後葉	K-21	271 号集石遺構	底	－	14.0	(7.5)	ナデ	ナデ			○				橙	にぶい黄橙	
199	206	XIV	K-20	273 号集石遺構	胴	－	－	－	条痕文，押引文，沈線文	ナデ	○			○	○		にぶい黄橙	黄褐	
	207	XVIorXVII	K-20	273 号集石遺構	胴～底	－	11.6	(23.5)	条痕文	ナデ		○	○	○		○	橙	灰黄褐	
	209	XVIorXVII	K-15	274 号集石遺構	胴	－	－	－	条痕文，沈線文	ナデ	○			○	○	○	橙	明赤褐	
203	211	XII	L-20	283 号集石遺構	口～胴	34.5	－	(19.8)	突帯，押型文	微隆起突帯，ナデ	○		○	○			淡黄	淡黄	
	212	早期後葉	K-17・18	284 号集石遺構	底	－	11.4	－	ナデ	ナデ	○			○			明褐	黒	
207	215	早期後葉	J-22	292 号集石遺構	底	－	14.0	－	ナデ	ナデ	○	○	○	○			橙	明黄褐	
208	216	XVIorXVII	K-21	293 号集石遺構	口	－	－	－	条痕文，押引文	ナデ	○	○		○	○		にぶい褐	褐灰	
	217	XVIorXVII	K-21	293 号集石遺構	胴	－	－	－	条痕文，刺突文，沈線文，押引文	条痕のちナデ	○	○	○	○			浅黄橙	にぶい黄橙	
	218	XVIorXVII	K-20・22	293 号集石遺構	胴	－	－	－	刺突文，条痕文	条痕のちナデ	○	○	○	○			橙	にぶい黄橙	
	219	XVIorXVII	L-21 他	293 号集石遺構	胴	－	－	－	刺突文，条痕文	ケズリのちナデ	○	○	○	○			橙	にぶい黄橙	
	220	XVII	K-21	293 号集石遺構	口～胴	22.9	－	－	条痕文，突帯	ケズリのちナデ	○	○	○	○		○	にぶい黄	黄褐	
	221	XVII	J-20・22	293 号集石遺構	口	23.2	－	7.1	条痕文，突帯	ケズリのちナデ	○	○	○	○		○	にぶい黄	黄褐	
211	224	XVII	L-20	298 号集石遺構	胴	－	－	－	突帯，刻み	ナデ	○		○	○			明黄褐	暗灰黄	
	225	XVIorXVII	J-18	299 号集石遺構	胴	－	－	－	沈線文	ナデ	○		○				明赤褐	橙	
217	228	XV orXVI	K-21・22	310 号集石遺構	口	－	－	－	刺突文，条痕文	ナデ	○		○		○		にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	229	XVIorXVII	K-21・22	310 号集石遺構	口	－	－	(7.8)	刺突文，条痕文，沈線文，押引文	ナデ	○		○	○			浅黄橙	浅黄橙	
222	230	XII	H-20	1 号土器埋設遺構	口～底	34.5	9.0	33.9	押型文	ナデ，指頭押圧	○	○	○	○	○		暗褐	にぶい黄褐	補修孔有り
223	231	XII	H-19	2 号土器埋設遺構	胴～底	－	8.4	(16.7)	押型文	ナデ，指頭押圧	○	○			○		にぶい赤褐	褐	スス痕
224	232	XII	H-19	2 号土器埋設遺構	口～底	32.0	8.2	32.8	押型文	ナデ，指頭押圧	○	○	○	○	○		橙	橙	

※遺構内出土土器と接合した包含層出土土器も含む

第 21 表　遺構内出土石器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	遺構名	法量（cm）			重量（g）	石材	備考
					長さ	幅	厚さ			
35	12	打製石鏃	E-21	1 号竪穴住居状遺構	(2.0)	(1.4)	0.3	0.51	AN2	
	13	打製石鏃	E-21	1 号竪穴住居状遺構	1.7	1.3	0.4	0.59	CH	
	14	磨・敲石	E-21	1 号竪穴住居状遺構	8.4	7.7	5.9	506	TU	
	15	磨・敲石	E-21	1 号竪穴住居状遺構	(7.9)	6.4	5.3	307	TU	
37	17	石皿	M・N-18	3 号竪穴住居状遺構	25.1	(17.4)	6.4	3300	TU	
	18	磨・敲石	M・N-18	3 号竪穴住居状遺構	(9.4)	8.2	4.8	319	TU	
39	23	磨・敲石	N-15	5 号竪穴住居状遺構	(6.6)	8.7	4.8	356	TU	
43	26	打製石鏃	E-23	3 号連穴土坑	1.8	1.7	0.4	0.99	SH2	
44	30	磨・敲石	K-17	5 号連穴土坑	11.5	6.3	4.8	434	TU	
47	35	磨・敲石	E-14	19 号連穴土坑	10.8	7.8	4.6	562	SA	
	36	磨・敲石	E-14	19 号連穴土坑	11.6	9.5	4.9	799	TU	
	37	磨・敲石	E-14	19 号連穴土坑	10.7	7.9	4.8	533	TU	
48	38	台石	E-14	19 号連穴土坑	18.4	16.2	8.8	3900	SA	
	39	石皿	E-14	19 号連穴土坑	37.4	29.2	9.9	12900	TU	
	40	石皿	E-14	19 号連穴土坑	26.6	25.8	7.1	5400	TU	
55	45	ハンマーストーン	E-21	1 号土坑	4.2	4.1	3.0	73	TU	
70	58	ハンマーストーン	K-12	2 号集石遺構	5.4	5.3	3.6	165	TU	
71	59	打製石鏃	H-20	3 号集石遺構	(2.7)	(2.0)	0.5	1.67	AN1	
87	67	アサリ形石製品	I-22	43 号集石遺構	3.7	2.5	1.3	8.61	AN1	

第 22 表　遺構内出土石器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	遺構名	法量（cm）			重量（g）	石材	備考
					長さ	幅	厚さ			
89	69	磨・敲石	K-21	51 号集石遺構	9.3	5.6	3.8	291	HF	
92	70	磨・敲石	L-18	58 号集石遺構	9.0	8.0	4.7	528	TU	
	71	磨・敲石	L-18	58 号集石遺構	11.9	(6.5)	7.0	751	TU	
	72	磨・敲石	L-18	58 号集石遺構	8.7	7.1	3.3	328	TU	
	73	磨・敲石	L-18	58 号集石遺構	(7.8)	(7.5)	5.1	305	TU	
	74	磨・敲石	F-23	59 号集石遺構	10.3	(4.0)	5.4	222	TU	
93	75	磨・敲石	K-21	60 号集石遺構	(6.4)	5.5	2.9	128	TU	
96	83	石皿	G-22	64 号集石遺構	(9.9)	(10.2)	5.6	519	TU	
105	90	磨・敲石	I-11・12	97 号集石遺構	(11.6)	(8.2)	3.9	456	SA	
	91	磨・敲石	I-11・12	97 号集石遺構	12.9	10.0	6.0	1054	TU	
	92	磨・敲石	F-19	98 号集石遺構	(11.6)	9.2	6.3	717	TU	
	93	磨・敲石	J-12	99 号集石遺構	10.3	8.9	4.9	712	TU	
	94	磨・敲石	J-12	99 号集石遺構	(6.9)	8.7	5.6	444	TU	
108	96	磨・敲石	E-22	106 号集石遺構	(5.4)	7.4	5.2	199	TU	
	97	磨・敲石	E-22	106 号集石遺構	9.4	7.5	6.5	603	SA	
109	98	石皿	G-22	107 号集石遺構	(17.0)	20.9	10.5	3900	TU	
123	109	打製石鏃	K-18	134 号集石遺構	2.5	(1.5)	0.4	0.93	SH2	
124	111	磨・敲石	E-12	135 号集石遺構	10.8	(6.4)	5.1	429	TU	
129	118	フレイク	F-13	138 号集石遺構	3.1	5.4	1.0	11.85	OB	姫島産
	120	石皿	K-21	141 号集石遺構	20.7	18.9	9.3	6100	TU	
	121	石皿	K-21	141 号集石遺構	(10.8)	(9.7)	4.6	537	TU	
140	130	磨・敲石	J-23	150 号集石遺構	7.3	7.7	4.3	304	TU	
143	133	打製石鏃	J-16	153 号集石遺構	2.5	2.0	0.9	2.89	CH2A	
144	136	磨・敲石	H-17	154 号集石遺構	9.7	8.9	6.3	875	TU	
	137	磨・敲石	H-17	154 号集石遺構	(4.8)	8.8	5.3	322	TU	
146	142	打製石鏃	I － 19	157 号集石遺構	2.5	1.6	0.4	1.22	SH2	
	143	原礫	I － 19	157 号集石遺構	4.4	5.0	3.3	84.39	OB	
149	147	磨・敲石	M-16	159 号集石遺構	(7.5)	6.6	4.8	316	TU	
151	149	磨・敲石	M-18	161 号集石遺構	12.7	(9.7)	5.6	987	GR	
158	163	打製石斧	M-16・17	169 号集石遺構	(8.3)	5.0	1.8	69.5	SH2	
159	165	磨石	J-14	171 号集石遺構	7.2	5.4	4.5	240	TU	
160	166	磨・敲石	J-21	172 号集石遺構	10.6	8.7	4.9	604	SA	
165	167	石核	J-18	187 号集石遺構	2.6	2.9	1.7	11.19	CC2B	
	169	磨・敲石	J-18	192 号集石遺構	7.4	7.0	4.8	351	TU	
167	176	打製石鏃	J-19	193 号集石遺構	(2.8)	1.8	0.4	1.54	CH2A	
	177	磨・敲石	J-19	193 号集石遺構	9.3	7.2	3.6	390	SA	
170	182	打製石鏃	L-18	197 号集石遺構	1.9	1.5	0.3	0.68	AN1	
171	183	打製石鏃	K-20	198 号集石遺構	1.6	1.4	0.4	0.62	OB	日東産
180	186	凹石	K-20	218 号集石遺構	7.1	5.9	3.6	215	TU	集石内接合
185	190	凹石	L-15	230 号集石遺構	9.1	7.4	4.3	274	TU	
	191	磨・敲石	K-13	231 号集石遺構	10.8	6.7	4.4	385	TU	
188	196	磨・敲石	F-24	240 号集石遺構	11.0	8.5	5.5	773	TU	
193	200	磨石	K-18	260 号集石遺構	11.1	9.4	4.7	791	TU	
198	205	石皿	G-23	272 号集石遺構	32.3	29.3	6.9	7300	GR	
199	208	打製石鏃	K-20	273 号集石遺構	2.7	(1.5)	0.6	1.76	OB4	腰岳産
200	210	石皿	K-15	274 号集石遺構	21.3	27.9	4.2	4000	SA	
204	213	磨・敲石	H-24	285 号集石遺構	6.2	5.5	3.1	143	SA	
	214	磨・敲石	F-24	286 号集石遺構	(9.1)	(7.5)	4.1	380	HF	
208	222	打製石鏃	K-21	293 号集石遺構	(1.7)	1.8	0.6	1.52	OB1	上牛鼻産
209	223	打製石斧	H-24	294 号集石遺構	9.3	7.3	2.2	214	HF	
216	226	磨・敲石	I-16	309 号集石遺構	13.0	9.8	6.2	1259	TU	
	227	磨・敲石	I-16	309 号集石遺構	8.0	6.0	4.3	310	TU	
225	233	磨・敲石	D-20	石器埋設遺構	8.5	7.5	3.6	310	TU	
	234	磨・敲石	D-20	石器埋設遺構	11.3	10.5	4.0	641	SA	
	235	磨石	D-20	石器埋設遺構	11.5	8.2	4.9	679	TU	

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（18）
東九州自動車道建設（鹿屋串良ＪＣＴ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

天神段遺跡 3

（縄文時代早期編　第１分冊）

発　行　年　　２０１８年３月
編集・発行　　鹿児島県教育委員会
公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-70-0574　　FAX　0995-70-0576
印　刷　所　　株式会社　トライ社
〒892-0834　鹿児島県鹿児島市南林寺町 12-6
TEL　099-226-0815　　FAX　099-225-7933



鹿児島県